

東方想幻華（一時連載 休止）

かくてる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年達は殺される。

そんな成すべくして起こされた悲惨な出来事の中、少年達は永遠の楽園。幻想郷へと降り立つ。

恋。それは人や動物、それぞれが抱く最高の悩みである。それは少年達もそう。恋に落ちるのだ。

笑って過ごすために、どんなものを犠牲にしても立ち向かう少年達、その根底の思いには、いつだって彼女がいるからだ。

そしてこれはその少年達と幻想郷の住人達が織り成す恋物語。
続き物ではないのでどれから読んでも大丈夫です！

正直、レミリア編と早苗編は駄文すぎて話が読めませんので、それ以外をオススメします。

ヒロインは1人ずつ書いていきます！

主人公もヒロイン3人ごとに変更します！

感想、評価。お願いします！

挿絵なども募集中です！

「このヒロイン書いてほしい！」というのがあれば受け付けますよー

Twitterでもメッセージでも。

一応ヒロインは第13回東方 人妖人気投票から抜擢しました。

Twitterやってます

2月15日

ヒロインに新たに博麗霊夢を追加しました。

理由はニコニコ動画の霊夢がヒロインの動画を見て、惚れました。めちやくちや惚れました。霊夢可愛い

2月28日

ヒロインに古明地 さとりを追加しました。

理由はこいしもやったんだからさとりもやろう。

という結論に至ったからです。

さとりもこいしも可愛いよね。百合最高。尊い

目次

コラボ	東方想幻華「紅の瞳」	
永遠のヒロイン」×止めてください!!		
師匠!!		
驚愕!!別世界から来た仙人!!	—	1
決着!!唐突にきた転移の鍵!!	—	11
コラボ	東方想幻華「繋がれた赤い糸」人形が繋いだ哀しみの愛く奏編」×	
しがない小説家志望が幻想入り		
俺の前に小説家が迷い込んだ?		
29		
忘れられない3日間	—	43
コラボ	東方想幻華「閉ざした心、開い	

た恋く過去を乗り越えたその先へ」×
無意識の恋

一人の半人半妖と一人の神様	—	62	
博麗大結界での戦い……	—	78	
初めて渡したチョコレート	くバ		
レンタインデー特別編」			
恋を形にしたもの	—	91	
第1プロローグ	く東方桜天翔」		
俺が幻想郷に着いた日	—	109	
誇り高き吸血鬼の恋	く王家の		
君へ」			
1話	紅魔館へ	—	118
2話	従者となった俺		

						126
						3 話
						悲劇は唐突に……
						1 話
						別世界での再会
						219
						2 話
						私の初恋
						核の暴走
						死神の札
						突然の襲撃
						壊れていく現実
						247
						240
						232
						227
						132
						4 話
						最悪な再会
						139
						5 話
						決着
						150
						6 話
						妹への嫉妬
						157
						7 話
						告白の準備
						166
						final story
						クリ
						173
						スマスイブ
						252
						7 話
						異変の黒幕と意外な過
						去
						259
						8 話
						異変解決
						265
						9 話
						お互いの恋心
						271
						をする
						妖怪の君とふたりで
						異世界転移しても幼なじみのあなたに恋
						恋人になったあの日から……
						192

5 話	4 話	337	3 話	2 話	1 話	紅の瞳	てる	じみへの恋	final story	10 話
死なないために	月光襲撃異変		スペルカードルール	月の過去	うさ耳の女性と永遠亭	永遠のヒロイン				決意
	345			329	321			284	幼な	278
							307	愛し		

435	1 4 話	425	1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	鬼	9 話	8 話	7 話	6 話	353
	月から幻想郷へ		恋が壊れる音	幻隴月睨	真実	月の都へ		月の使者VS王家吸血	開戦	お互いの本音	初めての恋	
				414	406	394	385		377	365	360	

15話	素直に……	445
final story	ヒロ	517
イン	——	457
after story	出	477
会ってくれてありがとう……	——	477
第2プロローグ	く東方天奏	489
伝く	——	489
幻想郷へ……	——	489
緋色に染まったあなたと私	く	585
有頂天な恋く	——	585
1話	先輩との出会いと天界	498
へ……	——	498
2話	「生きる刀」	510

3話	比那名居の屋敷	528
4話	亡霊	536
5話	トラウマ	547
6話	日常	555
6話	記憶喪失の人柱	565
7話	別れ	596
8話	約束された戦い	608
9話	加勢	608
10話	戦いの終止符＋番外	608
編	天界のクリスマスパーティー	608

	11話	奏への気持ち	622				
	final story	天空		5話	不知の謎、立ち向かう		693
	のバレンタインデー	631		過去			704
	after story	愛を		6話	立場逆転 「兄」から		
	誓ったホワイトデー	647		「弟」			714
	閉ざした心、開いた恋	過去		7話	芽生えたもの		727
	を乗り越えたその先へ	過去		8話	過去に立ち向かう		
	1話	無意識との出会い	738				
665				9話	賭け		748
2話	古明地の過去	676		10話	逆転勝ち		759
3話	「愛原」が残した妖刀の			11話	本当の目的		769
力				12話	流星の終わり		
4話	謎の地霊殿襲撃	685		780			

13話	本当の別れと約束	885	から姉弟、姉弟から恋人	885
792			a f t e r s t o r y	星空
14話	家族	803	の下、無意識の感情	903
15話	夜空の悲しみ		動き出した恋の秒針く茜色の銀時計く	
820			1話	紅い館、メイドとの出
16話	幻想郷へ戻りたい	926	会い	
830			2話	弾幕ごっこ
17話	久しぶりの幻想郷	948	3話	修行
841			4話	新たな戦闘スタイル
18話	ただいま	853	956	
19話	着物選び	861	5話	ティータイムのラッ
20話	祭り	870	キースケベ	966
f i n a l s t o r y			6話	突然の紅魔館崩壊
兄妹				

14話	戻された綻び	1032
13話	紅魔館へと向かう道	1024
ない思い		
12話	彼への気持ち、逃げ	1015
11話	信用の崩壊	1006
10話	裏切りの紅魔館当主	999
9話	動き始める	990
8話	努力とその成果	983
7話	狂気に染まる	975

3話	悲しい顔	1117
2話	呉服店	1109
1話	魔法使い	1101
	だ哀しみの愛	
	繋がれた赤い糸	
	世界から消える	1090
	第3プロローグ	
	の夜	1076
	after story	十六夜
	壁を	1059
	final story	寿命の
15話	紅魔館の主	1048
1040		

1168 8話 7話 6話 5話 4話

記憶の真相

—

1125

月明かり

—

1135

気づき

—

1145

舞雪の地

—

1155

飲み込まれる二人

コラボ

東方幻想華 「紅の瞳く永遠のヒロイン

く」×止めてください!! 師匠!!

驚愕!! 別世界から来た仙人!!

俺の名前は椎名^{しいな}翔^{しょう}。

ここ、永遠亭の食事係。料理全般を任されている。

え? 「物語出るの久しぶりだな」って?

ほんとそれ。天子編でも空気だったよな?

俺は愛刀、ムラサメを握り修行を行っていた。

「ふっ!」

ぶんつ!と、いい音を鳴らしながらムラサメは弧を描きながら垂直に振られる。

「いって……」

俺は修行による手の豆が潰れて色々と出血していた。

「あれ? 翔? どーしたの?」

「ん? ああ、鈴仙。おはよ」

こいつは鈴仙・優曇華院・イナバ。

玉兎なのだが訳あって今は地上の永遠亭で八意永琳の弟子をしている。
んで、俺の恋人。鈴仙とはもう8ヶ月ほどの付き合いだ。

「おはよ。何?豆でも潰れたの?」

「ご名答。手が痛くて振れねえや……」

「ちよつと見せて?」

鈴仙にそう言われ俺は手を差し出す。

すると鈴仙は救急箱を取り出し、俺の手に薬用テープを巻いてくれた。

「さんきゅ」

「うん、修行も程々に」

俺は鈴仙の言葉を聞き流しもう一度ムラサメを握ったその瞬間。

ドゴオオオオン!

「?!」

「な、何?」

近くの竹林で何かが落下した音が聞こえた。

鈴仙が俺より先に外に出て走る。

「あ、おい!鈴仙!危険だぞ!」

また月のやつか？ スペースデブリか？

と、色々と考察をしながら音がした方に走る。

しばらく走ると鈴仙が棒立ちしているのが見えた。

そして鈴仙に追いつき……

「お、おい……鈴仙……速いって……」

「………ねえ、翔……」

「な、なんだよ？」

鈴仙は静かに指を指す。

そして俺はその鈴仙の指の先を見る。

「この人………誰？」

「………さあ………」

俺はそこでうつ伏せになって寝ている人をじっと見ていた。

体中をよく見ると………血だらけ、なかなかグロイことになっている。息はしているみたいだ。

「?!おい！ 鈴仙！ 永遠亭に運ぶぞ！」

「え、ええ！ 分かった！」

俺はそこにいた気を失っている男の人の肩を持つ。

全体像を見ると……少し中華風だな……？

歳も俺と同じくらい？

数分で永遠亭に到着し、永琳の診察室まで行く。

「永琳。怪我人だ、診てやってくれ」

「分かったわ、そのベッドに寝かして。鈴仙。手伝ってちょうだい。」

「はい、師匠……」

「翔には悪いけど……感染症防止のために診察室から出ていってこないかしら？」

「ああ、分かった」

俺はカラカラと戸を開け、診察室から出る。

あいつ………なんだが不思議なやつだな………なんて言うんだろ………見たことはないんだけど………なんか過去に色々あったようだな………古傷が沢山あった……

それから数時間後。

「翔。あの子の目が覚めたわよ」

俺は部屋でムラサメの手入れをしていたところ、その時に永琳から知らせが来た。

俺は早歩きで病室へと向かい、その男と対面する。

「よう、初めましてだな。俺は椎名 翔。吸血鬼だ」

するとその男は子供らしい顔で笑い、名乗る。

「はい、俺……………私は詩堂しどう 善ぜんと申します。この度は助けて頂いてありがとうございます
ました」

と、深々と礼をする。

「いやいや、礼には及ばないよ。それにしても……………善ぜんって呼んでいいか？俺のことも
翔はって呼んでいいから……………」

すると善はそれに応えるように砕けた口調になつて

「ああ、分かつた。翔。それで……………なんだ？」

「お前まへって……………どこから来た？」

「え？幻想郷だけど？」

「え？」

こいつに見覚えはない……………

俺はこの8ヶ月で幻想郷全員と知り合うことが出来た……………しかし…善の事は一度も
見たことがない……………

「だつてそこに……………あ、鈴仙すずせんさーん！」

善は偶然通りかかった鈴仙に声をかけた。

「え？あ、はい！」

すると鈴仙は救急箱を持ったまま、こちらに來た。

「え、えっとー……名前は……詩堂善さん。ですね、よろしくお願いします」
「え?俺の事忘れたの?」

善は少し悲しそうに鈴仙に言う。

「え?どこかで会いましたっけ?」

「あの時、「竹林で待ってます」っていう手紙くれて、その後なんか戦ってたじゃないですか?……なんか吐いちゃったけど……」

「鈴仙?善と会った覚えは?」

「ないわよ?」

「……俺の知らないうちに浮気か?」

「なっ?!そんなわけないでしょバカ!!」

そう言つて、俺はグーで頬を殴られる。

「ぐはあ!!」

「私はこの人と知り合つたことも見たこともない!」

「ええー……」

善が可哀想に見えてくる。

鈴仙も見覚えが無くて俺もない。

本当にこいつは幻想郷にいたのか?

「なあ、善。お前と一番仲良かったのは？」

善はしばしの間考え、こう答えた。

「芳香かな」

すると鈴仙は思い出したかのようにこう言った。

「ああ、そう言えば芳香なら、さつき師匠に薬もらっていったけど？」

「ま、マジか?!」

善はベッドから出て、全速力で師匠のところに向かう。

永遠亭の道が分かつてる………：どうやら幻想郷にいることは嘘じゃないようだ

………

善はバンつと戸を開け、

「芳香！」

「うお！な、なんだ？」

「芳香！俺だよ！分かるだろ？」

「ん、んー？よく分からない」

すると善はかなり落ち込んだ顔で………：がつくりと肩を落とす。

その肩に俺は手を置き……

「多分、お前は別世界から来たんじゃないのか？ほら、お前の世界と違うところを探して

みろ……」

そう言つて、善はあたりを見渡す。

すると竹林の方を指さし……

「竹林つて……こんなに生い茂つてたかな？」

「ほら、もう見つかつた。これでお前は別世界から来たやつつてことだ」

「……だといいがな……」

そうして俺達は別の幻想郷から来た。詩堂 善と出会つた。

一旦落ち着き、俺は善と2人で生活のことについて話していた。

「なあ、善」

「ん？」

「お前つて結局何なんだ？」

すると善は少し戸惑いながら答える。

「えーとな、俺は一応仙人。師匠の元で修行をしてるんだ……」

「まあ服装を見たら何となくわかるかな……それに……師匠つてどんな人なんだ？」

すると善の顔は一気に絶望一色となった。

「……………前はただ師匠を見てただけなのに「師匠や芳香をそんなにエロい目で見ちゃダメよ?」みたいな事言われて俺が否定したら……………」「じゃあ去勢……………する?」つて言われたり……………ヒッ!」

「ヒッ!?!」

俺は情けない声を出し、身体をこわばらせる……………

「前に師匠の羽衣を雑巾がわりに間違つて使っちゃった時とか……………ヒイ!!」
「ヒイ!!」

俺は善に釣られてまた情けない声を出してしまふ。

「あ、あんたの所の師匠はなかなか……………サイコパス気質なのか?」

「ああ、それは俺も思ったんだ……………それで一番嫌なのは……………怪力なところ……………」
俺はそれに首を傾げる。

「?別に何もしなきゃ怪力でもいいだろ?」

「そうじゃないっ……………寝相が……………な?……………その怪力で寝てる途中に殴られたり蹴られたり……………ヒイイ!!」

「ヒイイ!!」

何度目だろうか……………俺と善は同時に身体を震わせる。

それと比例するように善の顔もだんだんと暗黒に染まっていった。

「ぜ、善。無理して話さなくてもいいぞ?」

「あ、ああ……そうするよ……」

無理しないと話せないほどか……:……:どれだけトラウマ植え付けられてるんだ
……:……:と、俺は呆れる。

善は自分の顔を両手でビンタしこちらを見る。

「じゃあ翔。これから頼むよ」

「ああ、とりあえずお前のいる幻想郷の事調べないとな……」

善の悲惨な過去を知り、こいつとは仲良くできそうだ……:……:その時に俺は思った。

決着!!唐突にきた転移の鍵!!

俺と鈴仙は面倒事と知りながらも善が元の世界に帰れるよう協力していた。

善はここ5日間、永遠亭の居候として住んでいた。

善の優しい性格のお陰で永琳や鈴仙、姫さんとは仲良くなっている。

その上、料理は俺よりも飛び抜けて上手い。

善が来てから晩御飯は二人で作っている。

「ん?なあ、翔。この味噌汁……ちよつと薄くないか?」

「マジか?塩分低すぎたかなあ……」

「だな。もう少し多くていいと思うぞ。別に年配の人がいる訳でもないし……」

俺はこれを機に善の家族のことにも触れてみようと思った。

「……善の所にはいるのか?年配の家族とか」

すると善は少し考えたあと、こう答えた。

「そうだな。師匠とか結構なおぼあ」

その瞬間、俺でもわかるくらい悪い悪寒がこの部屋に響いた。

この部屋には俺と善以外誰もいない……

「ヒツ?!」

「ヒツ?!」

二人同時に身震いする。

この感じは……なんだ……まるで拷問されてるみたいだ……

隣で善は真つ青な顔で震えている。

「大丈夫だ……この世界に師匠はいないこの世界に師匠はいないこの世界に師匠はいないこの世界に師匠はいないこの世界に師匠はいない……南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏……」

「おい……善……?」

善は同じ言葉を呪文のようなリズムで口ずさんでいた。

口ずさむ……ていうのは違うな……顔が動いてない……口だけが動いてる……目が死んでる……

「ほんとにどんな修行だったんだよ……」

俺は呆れ、善を近くの椅子で休ませた。

その翌日。

「見つからないもんだなあ……」

俺と善は今紅魔館の大図書館の方に来ている。

別世界転移、このジャンルの本をかき集め、善と同じような近況にあっている人の本を探すが、これと言ったものはなし。

「なあ、善。お前の世界とここの世界はどっちが発展してる？」

「ん？そくだな……恐らく、翔達がいる幻想郷の方が進んでるんじゃないかな？確証はないけど……」

「そしたら、時間軸の本を探してみよう。そっちの方がいい手があるかもしれない……」

と、俺達は一つの本を見つけ、一緒に読む。

「んー……めばしいものは無い……か……」

俺は頭をかいて考えるが、本当にこのような事例は初めてらしい。鈴仙やパチュリ、紫にさえ聞いても原因が分からなかった。

「はあ……師匠になんて言われるんだろ……？」

「……とりあえず……それだけは避けたいよな……どうしようか……」

「なあ、翔……この芳香が何か知ってるか」

刹那、大図書館の扉が開けられたのではなくこじ開けられた。

俺は敵襲かと思いムラサメを構えるが……

「翔ー！遊びに来たよー！」

「なんだ……フランか……」

そこにはレーヴァテインを持ったフランがいた。

元気のいい声と同時にレーヴァテインを縦に振り下ろす。

「わわ！待って待って！今は来客もいるんだ！後でな！」

「え？来客？」

フランは、戦うのを辞め善の方を見る。

「あなた……誰？」

「あ、はい、私は詩堂 善。仙人の修行をしている者です」

「そう……よろしく！善！」

善は挨拶を済ませた後、俺の方を見て一つの質問をする。

「なあ、「レジル」はいないのか？」

その質問に俺は首を傾げ、質問を質問で返してしまう。

「はあ？レジル？誰だそれ？なあフラン。ここにレジル君っていたっけ？」

するとフランも俺と同じように首を傾げる。

「れじる？何それ？なんの食べ物？」

「どうやら…お前のところのレジルさんもこの世界にはいなかったらしいな」

「みたいだな……」

じゃあ一体どうなってる？

謎は深まるばかり、俺達は頭を抱えるしかなかった。

しかし、ここで大きな進展を目の当たりにする。

「?!善…これを見ろ！」

「な、なんだ？」

俺は一つの本を見つける。

それは「時間軸のずれた幻想郷」という題名の本だ。

「……時間軸のずれた……俺と同じだな……」

善は早速本を開く

「これは……ある異変の黒幕の仕業だった………？」

本の冒頭から新事実が書かれていた。

そこから淡々と善は読む。

「………異変か………ん？」

善はそのまま読み続け、ある所に着目していた、

「その黒幕の名は……………」

「誰なんだ？」

俺が善にそう言った途端。

バタン！と大図書館の扉が開かれた。そこには

「れ、鈴仙？どうしたんだ？」

俺の恋人、鈴仙が息を切らしながら入ってきた。

すると血相を変え、鈴仙が大きな声で叫ぶ！

「翔！善さん！大異変です！こちらに来てください！」

「……………当たりのようだな……………」

善は静かにそう叫び、大図書館を後にした。

紅魔館の外に出る。

すると空に一つ暗黒の亀裂が入っていた。

するとその亀裂から大勢の何かが投下される。

俺はムラサメを抜き、落ちたところへ走る。

「行くぞ。善」

「ああ」

俺は善と共に走り、その現場へと行く。

そこには小型の妖怪、そこら辺の妖怪が人里で人間を襲っていた。

しかし、死者や血しぶきが上がっていない……人間のの方も全員無傷だ……

ただ追いかけているだけか……？

すると、隣にいた善が全速力で妖怪へと向かう。

「デメエらあ!!俺も元の世界に返せえー!」

そう叫んで、善はくるつと一回転し、踵から蹴りを1発入れる。

その蹴りは俺も身震いするほどの威力。

いや、あれは威力ではなく技術だな。

一体善の師匠さんはどんな指導してるんだ？

あの身長であの蹴りは驚きだ。

そのまま善は次々と妖怪を殴り蹴りを繰り返していた。

「俺も負けてらんねえな……」

ムラサメを抜き、妖怪の身体を横から骨盤にかけて斬る。

いい手応えだ。俺は能力を発動し、妖怪の身体を分解させる。これも決してバンバン

使えるものではない。

自分の体にも大きな影響を及ぼすことが良くある。

この前も高熱を出したことがあった。

「善!黒幕探すぞ!」

「ああ!」

「鈴仙!ここで妖怪を食い止めてくれ!」

「分かったわ!」

この場を鈴仙に任せ、俺と善は人里の奥へと行き、黒幕を探す。

「ん?」

俺らがずっと大通りを走っていると、1人の妖怪が道を塞いだ。

「誰だ?」

俺はムラサメを妖怪に向けながらそう問うた。

するとその女性は淡々と言葉を並べる。

「私は黒羽 エリン。この異変の黒幕。なんて呼ばれてるらしいわね……………」

「黒羽?聞いたことないな……………」

善は首を傾げ、俺の方を向く。

もちろん俺も知らない。首を横に振る。

すると黒羽 エリンと名乗る女性は突然、善を指差しこう話した。

「その邪仙の弟子は私がここに転移させたわ……………」

「!!」

その衝撃発言に俺と善は1歩後ずさる。

その状態から善が質問する。

「どうして転移なんかさせたんだ？」

「あの邪仙を一人にしたかったから……」

「恨みでもあるのか？」

「沢山あるわよ？なんか体内の色々な部位を気を通して刺激されたり、別に死んでもキョンシーにするからとか………色々あるわ？」

「それ俺と一緒だわ……」

と、何故か善は黒羽に共感していた。

しかし、善はすぐに気持ちを切り替え、攻撃の体勢をとる。

「俺を元の世界に返せ……」

「嫌よ」

黒羽はそれだけ言い捨て、右手を前に差し出した。

するとその右手からナイフが約100本程、善に向かってとんできていた。

「善！危ない！」

俺はナイフの軌道を読んで、数本は刀ではじくが残りは善の方へ飛んでいった。

「うおわああ!!」

善は頑張ってナイフを避けていた。

しかし、最後の一本が善の肩に刺さる。

「善?!」

俺は善に駆け寄り、手当をしようとした。

しかし、善はその場で首を振り、こう言った。

「大丈夫。俺の能力で無効化した」

「能力?」

「ああ、抵抗する程度の能力。あらゆるものに抵抗できるようになっている」

「じ、じゃあ今のは……」

「「痛み」に抵抗した……って言えばいいかな?」

(使い方間違えていたらごめんなさい……)

そんなすごい能力があったとは……

俺はそこで感嘆の声を漏らす。

「凄いな……お前何者だ?」

「仙人……の修行をしてる者」

「いやそうじゃなくて……」

「日々の拷問に耐える者」

「……………俺が悪かった…」

俺は善の言葉の攻撃に折れ、善をガン見しながら謝罪した。
するとその先に黒羽が呆れた声で話す。

「もう死んでもらっていいかしら？」

すると黒羽の背後に大きな魔法陣が展開される。

その時、善が俺に耳打ちをする。

「翔。俺が正面から突っ込む。翔は背後に回ってくれ……」

「いいのか？それじゃ作戦とも呼べねえぞ？」

「大丈夫だ。俺にも考えがある」

俺は渋々善の案に賛成し、早速行動に移す。

「行くぞ！翔！」

ムラサメを握り、俺は善が黒羽に全速力で走っているのを見て、静かに背後に回り込む。

しかし……………本当に正面から突っ込むとは……………肝の座っているやつだ……………心の
中で感心する。

「うおおおお！」

「正面で私に攻撃が届くわけないでしょう?」

すると善は右手で1発、黒羽を殴る。

しかしもちろんそれは目の前の結界によって弾かれる。

「無駄よっ!」

「それは……………どうかな?」

善がそう放った直後。

黒羽が展開していた結界が割れた。

「なっ?!」

チャンス!

今、黒羽の周りはスキだらけだったので、俺はムラサメを黒羽の背中に刺す。

グサア……………という音を立てながら黒羽は善の方に落下していく。

「がはっ……………」

少量の血を吐く黒羽。

俺は善の近くまで黒羽を運び、その瞬間に刀を黒羽から抜く。

そこで善は1歩後ろに下がら

「これで最後だ!俺を師匠の二元に帰らせてもらおうぞ!」

そう言って、善の右の鉄拳が黒羽の腹にモロ当たった。

そこからどう力を加えたのか分からないが、右ストレートだけで黒羽は遙か彼方へと飛んでいった。

「終わったか……」

俺は呆気なくどこかへ行つた黒羽を見送りながら善に近づく。

「お疲れ、善」

「おう、お前もな……」

俺はその時に善の右手が目に入る。

その指が俺や鈴仙とは違かつた。

「どうしたんだ？その指……」

そう、善の指は何やら指を後から付け加えたような感じになっている。

「ああ、これか？なかなか便利だぞ？その付けたところから気が流れて威力が上がるんだ……」

「べ、便利だな……」

俺はますます善の所の師匠に興味を持った。

1度会つてみたいな……

「しつかし……タイミング良すぎないか？黒幕の来る時間……」

「それは確かに……そういや、鈴仙の方は……」

「翔ー！善さーん！大丈夫ー？」

タイムング良く、鈴仙がこちらに走ってきた。

どうやら片付いたらしくブレザーが少し泥で汚れていた。

「これで一件落着……………だな……………」

「おう、サンキューな、翔」

善が右拳をこちらに差し出してくる。

俺はムラサメを鞘に収め、善と拳を合わせる。

少し俺よりも身長が小さく童顔だが、とても頼りになる男だ。

「さて……………黒幕は倒したが……………どうやったら帰れるんだ……………」

善が首を傾げる。

すると善の後ろに一つのスキマが出来る。

するとそこには面識のない1人の女性が出てくる。

「やっほー善♪」

「し、師匠?!」

そこに居たのは…………善の師匠だったらしい……………女性なのは何となく分かっていたが……………美しい人だな……………とゆるかでかい！色々と！ボンキュッボン！へヴン！

その瞬間に鈴仙の目が真っ赤に染まっていたことは黙っておこう……

「良かったあ……やつと帰れる……」

「見てたわよ、善の働き……」

「まさか……ずつと監視していたんですか？」

「ええ、ここに送り込んだのも私。あの黒羽 エリンというクローンを作り、ここに転移

させたのも私。全ては善。あなたの修行よ」

「ええ……」

善は疲れたように肩を落とす。

「あの小さい妖怪達、人里の人間襲わなかったでしょ？」

「まあ、そうですね……心臓に悪いですよ……」

「いい修行になったでしょ？ 別世界のお友達も出来たし……」

「はい、翔には色々と教えてもらいました」

師匠さんはふふつと笑い、俺と鈴仙に一礼する。

それに釣られ俺らも一礼してしまう。

「善。この後あつちの世界に戻ってご飯作ってちょうだい。芳香がヨダレ垂らしながら

ソファに座ってるわよ……」

「ま、マジですか?! ああ! また拭かなきゃいけないのか!」

善はそう言つて、頭を抱える……

ほんとに大変なんだな……

すると師匠さんがこちらを向き。

「私の弟子がお世話になりました」

「ああ、いえいえ、楽しかったですし……ねえ、翔?」

鈴仙が両手でブンブンと振つて否定し、俺に聞く

「はい、いい弟子さんですね」

俺がそう言うとうふつと高貴な笑いを見せ

「そうでしよう?私の言うことなら何でも聞いてくれるの……それにいつまでも私に

従順な自慢の弟子なんです♪」

「流石に何でもは……」

と、後ろで善が軽く否定するが次の師匠さんの言葉に制される。

「では、ありがとうございます」

「じゃーな、翔。短い間だったけど楽しかったぜ……」

「ありがとうございます。善さん」

「うん、鈴仙さんも頑張つてね……それと……あの時吐いちゃつてごめんね?」

「はい?」

鈴仙は言っている意味が分からない……みたいな顔をする。
もちろん俺も分からない。

善の世界の鈴仙にゲロでもぶちまけたのだろう。

「善。また来いよ……………それと……………修行……………頑張つてな……………」

「そ、そんな哀れみの目で見るとなよ……………」

「あはは……………まあ、元気でやれよな……………」

「ああ」

俺と善はもう一度拳を合わせる。

その後、善はスキマへと走る。

スキマが消える途中。善は大きく腕を降っていた。

スキマが完全に見えなくなった後、俺と鈴仙は静かな地に二人きりになった。

「なんか……………面白いやつだったな……………」

「そうね……………」

「師匠さんと仲良くな……………善」

俺は小さな声でメッセージを送る。

「さ、帰るか……………今日の晩御飯の材料買わなきゃ……………」

俺は身を翻して人里の大通りに戻ろうとする。

「あ、ちよつと待ってよー!」

その後から鈴仙がついてくる。

そのまま鈴仙は俺の右手を握り、歩いた。

俺はまた……善と会える日を少しばかり願っていた。

東方幻想華「紅の瞳く永遠のヒロインく」×止めてください!!師匠!!

e n d ……

コラボ 東方想幻華「繋がれた赤い糸く人形が繋いだ哀しみの愛く奏編」×しがな小説家志望が幻想入り俺の前に小説家が迷い込んだ？

魔法の森。

俺はここで一人暮らしをしている。幻想入りしてから家がなくて、河童に頼んだら1発でいい所を当ててくれた。

俺の名は愛原 奏。龍人という妖怪だ。

一人暮らしとは言え、俺の愛刀の咲名千里に住み着く妖怪、

片波 咲とも生活している。

今日も子鳥のさえずりを聞きながら目が覚める。

「ん、ん…」

眠い目を擦りながら外を見る。

今日は快晴。こんな日には散歩でもしたいくらいだ。

俺は顔を洗うために洗面所へ行き、顔を洗った後、朝食前に外に出る。

春の暖かな風が俺の体全てを包み込む。

「あら？起きてたのね」

俺がそのまま歩いていると一人の女性の声が出た。

「おう、アリス」

この女性はアリス・マーガトロイド。俺の唯一のご近所さんで魔法使い。実力もかなりのものでいつも訓練をさせて貰っている。

その上、俺の恋人だ。

数ヶ月前、俺の方から告白し色々あったがOKを貰った。

「おはよ」

無愛想なアリスに俺は顔を近づけて確認する。

相手にされないのは日常茶飯事なので俺は気にせず言葉を並べる。

「あれ？どーしたアリス？風邪でも引いたんじゃないやねえか？」

アリスとの顔の距離は約15センチほど。

俺はこういうのは慣れてきた。

キスもしたので別にどうってことないのだが……………

「ば、バカっ!!」

バチン！と、森全体に平手打ちの音が響いた。

俺は頬を擦りながらアリスを見る。

彼女の顔が赤くなる。

その顔はもう愛おしいくらいに。

「いつてえ……アリス……力強くなつた？」

「何言つてんのよ！ 甲斐性無し！ へタレ！ チキン！ クソザコナメクジ!!」

なあ五百歩譲つて甲斐性無しとへタレとチキンは許すよ？

クソザコナメクジは酷くねえか？

俺はその場で肩を落とす。

「今日も辛辣ですな……」

「どこがよ？」

「アリスが……」

「ふん……」

アリスはそっぽを向き、そのまま家に帰ってしまった。

俺は立ち上がり、自分の家に帰ろうとした。

その時だった。

「あれ？ あいつ……」

へえ、珍しいやつが来るもんだな……アリスの客か？

俺はそいつに近づき、挨拶をする。

「よっ、こいし。久しぶりだな……………こんな朝早くにどうした？さとりと喧嘩でもしたのか？」

「え？」

俺が肩に手をポンつと置くとこいしは驚いたような顔をする。

「ん、どうしたこいし？寝ぼけてんのか？」

「いや、あんた……………誰だ？」

「は？」

俺は言葉を失った。

いや、そもそもこいしってこんな口調じゃないはずだ…

それに……………いつものこいしとは全てが違う……………

「……………こいしじゃないな……………誰だ？」

すると次の出来事により、俺は空いた口が塞がらなかつた。

そこに居たのはオシャレな灰色の帽子にまたまた灰色のカジュアルジャケット。俺よりも身長は高いが、すらつとして少し痩せているくらい。

見たことない人物だ。

俺は警戒をしながら後ずさる。

「咲！」

俺は相棒の名を呼ぶと、家から一本の刀が出てきて俺の手に収まった。

「はいはい。呼ばれてきました♪およ？奏くん、この人は？」

「分からない………こいしに化けていた………」

「お、おい！待て！俺はそんな怪しいヤツじゃない！」

灰色の男は両手を振って否定する。

しかし、俺はそんなことにも聞く耳を持たずに

「問答無用！行くぞ！」

咲名千里を抜き、その男に斬り掛かる。

「だああ！もう！早く終わらせるぞ！」

そう言つて、男は刀身のない柄のみの刀を取り出す。

スキだらけだ！

俺は咲名千里を逆手に持ち、男の背後に回り込む。

しかし、それは「何か」によって弾かれる。

「なっ!？」

そう、男の持っていた刀身のない刀からいきなり刀身が出てきたのだ。見たこともない武器に俺は少し戸惑う。

「奏くん…こいつはまずい……………今の奏くんじゃ負けるよ！」

いつもなら強気の咲でさえ、この男の前で折れた。

ということは相当な実力の持ち主ということだ。

俺は刀を鞘に収め、頭を下げる。

よくよく見ると、本当に怪しいヤツじゃないようだ。

こいしに化けていたのだから何らかの目的があるはず……

「すまなかった。俺が早とちりしてただけみたいだ……」

するとその男は少しだけ目を見張り、自分も刀をしまう。

「お、おう、分かってくれたんならいいよ」

「俺の名前は愛原 奏。ここ、魔法の森に住んでる妖怪だ」

「俺は川霧 龍。しがない小説家志望の人間だ……」

に、人間?!

てつきり俺は妖怪の類かと思っていた。

あの実力で人間か……………もしかしたら霊夢以上かもしれない……

俺は手を差し出し

「じゃあよろしくな……………龍」

「おう、よろしく。奏」

俺は今起きている状況を龍に説明してもらった。

「はあ？英雄になるための別世界特訓？」

俺は首をかしげ、その意味を必死に理解しようとする。

「ああ、俺のいる幻想郷は近い将来、大きな厄災をもたらす異変が起きると予言されているんだ」

「厄災をもたらす異変……………」

そのまま龍は淡々と言葉を並べる。

「ああ、それで外の世界にいた俺は紫の手によって幻想入りさせられて、その大異変を救う英雄になれて……………」

「というと、つまり龍は大異変の英雄になれると確信した龍の幻想郷の紫がスキマを使って龍を無理やり幻想入りさせたの？」

俺が簡単に説明すると龍は縦に首をふる。

「そういうこと、それで英雄になるための訓練として別世界で3日間生活しろって……………」

俺はそこで一つ、疑問が浮かんできた。

「手ぶらでか？」

「もちろん手ぶらで……いや、一応俺の武器、「孤月」と弾幕ボックスだけはある……」

その時の龍の顔はかなりゲツソリとしていた。

何も食べていないんじゃないか？

「おいおい……お前んとこの紫さん中々スパルタなのな……」

俺は共感するように龍の肩に手を乗せる。

その後、俺はアリスに作ってもらった料理の作りおきを龍に振舞った。

メニューは麻婆豆腐をご飯にかけてもの。

これは奏特性の醤油が入っているため、味は保証する。

「うま……」

「だろだろー？俺の麻婆豆腐は最高なんだぜ？」

その後、俺は自分の能力や過去、ついでに咲名千里の事も話した。

「つまり咲名千里は、咲のお陰で妖力が発揮できる。つまり、咲は俺が妖力を最大限出させるためのブースターみたいなものだ……」

「なるほど……」

するとカチャつとドアが開かれた。

「お、噂をすればなんとやらだな……」

「やつほー！……龍くん。初めまして！私は片波 咲。奏くん、の相棒だよ！」

咲の自己紹介が終わり、その後ろにいたアリスも口を開く。

「えと……初めまして。私はアリス・マーガトロイド。その甲斐性無しの“一応”恋人よ」

その言葉に俺は少し苦笑いをする。

「おいおい……一応って……」

すると龍は少し目を見開きながらアリスを見る。

「ふーん……奏の恋人ね……」

龍は顎に手を置きアリスをまじまじと見る。

「な、何？」

それが気になったのか、アリスは少し後ずさりながら龍を睨みつける。

「うーん……やっぱりうちのアリスさんと少し違うな……」

「え？龍の所のアリスはもつと優しいのか？」

すると龍は首を振って

「いや、こっちのアリスさんの方が優しい」

その言葉に俺は飲んでいたお茶を吹く。

「ぶふっ……こっちのアリスの方が優しい？んな馬鹿な……こんな怒りっぽくて短気で

胸も小さ

俺がそう言葉をこぼすと俺の頬に何かで刺されたような痛みが走る。

「いってええ！何すんだよアリス?!」

俺は頬をさすりながらアリスの方を向く。

「うるさい、バカっ！む、胸は……結構あるもん！」

「はーん、どうだか……」

俺はいたずらっぽく笑う。

確かにアリスの胸はほぼ無いが、こいつは着痩せするタイプなので………こんな所で言うのもなんだが……アリスは一肌脱ぐと結構胸あった。しかし、自分は胸が小さいことをコンプレックスに感じているように……

アリスは頬を膨らませ、そっぽを向く。

はたまた俺の頬に何かをぶっ刺す。

「いってえええええ！」

「あ、でも痛めつけ方はうちのアリスさん同じだ……」

「龍まで何言ってるのよ！」

そう言って、俺達はまた頬に刺された。

「まったく………あんた達失礼よ？」

俺と龍は少し赤面するアリスの前で正座し、謝罪した。

「ごめんなさい」

「ごめんなさい」

俺は話を切り替え、龍の訓練の話に戻る。

「まず、龍。お前の能力が知りたい」

すると龍は少し戸惑ったような顔で

「うーん、じゃあ咲さん」

「うにゆ?」

唐突に咲を指名した。

「咲名千里を少し貸して頂けますか?」

「おー、いやいやよー」

咲は咲名千里を持ち上げ、龍に手渡す。

俺も最初何をするのか全くわからなかった。

「行くぞ?」

龍がそう言うのと咲名千里の隣に同じような刀が出現した。

するとそのクローンの方の刀を俺に渡して

「少しその刀振ってみ？」

「あ、ああ」

俺は立ち上がって外に出て、クローンの刀を縦に振る。

この手応えは……よく手に馴染む……

「ああ、咲名千里とそっくりだ……でも……」

俺は首を傾げてこの刀の足りないところを述べる。

「なんか……妖力がこもっていない。これじゃ使いやすだけの最高級の刀。つてだけだ」

「そう、じゃあ次。さつき奏がくれた麻婆豆腐。今からこの皿に出すぞ……」

俺はその皿をずっと見つめていた。

するとその瞬間。皿にさつきと同じような麻婆豆腐が出現した。

「さ、食べてみ？」

俺はスプーンで麻婆豆腐をすくい、口に運んだ。

するとその麻婆豆腐はアリスが振舞ってくれた麻婆豆腐に似ていた。

「これは……どういう事だ？」

「俺の能力は「記憶を再現する程度の能力」。一つ目、俺の頭の中の知識の物。つまり、奏の持っている咲名千里は知識でしか知らない……だから何かが欠ける。しかし、あの麻

婆豆腐は俺が実際に味覚を使い、体験した。だから本物に近い忠実な形ができる。こんな感じで「知識で得たもの」「実際に経験したもの」で再現力が変わってくるんだ。妖怪を再現するとその妖怪の能力の劣化版のようなものが付与されてくる」

「なんか話が難しいな……………」

俺は頭をフル回転させ、龍の能力を整理する。

「実際に経験したものと知識で得たものは記憶から掘り出してそれを再現することが出来る。それが生き物だとそいつの能力の劣化版が利用することが出来る……………つてとこか？」

「ああ、簡単に言えば霊夢。あいつは「空を飛ぶ」だよな？でも俺の場合は「空高くジャンプすること」……………ここで少しの差ができるってことだ」

「なるほどね……………」

俺より先に頷いたのはアリスだった。

「あなた面白い能力ね……………」

「ありがとうございます。アリスさん」

龍がその場でアリスに一礼し、俺の方に向き直る。

「まあ、これからよろしくな。奏」

「ああ、よろしく」

こうして俺の短い3日間の非日常生活が始まった。

忘れられない3日間

そんなこんなで龍は住むところもなく、無一文のため、俺の家に住まわすことにした。まあ、俺も料理に関してはお手上げなのだが、いつもアリスが家に来て作ってくれるのだ。

今日の晩ご飯はカレーライス。

「んめえー……」

俺はスプーンを口に入れたまま、感想を述べる。

「ほんとに……ありがとうございます。アリスさん」

「喜んでくれたのなら良かったわ」

アリスは少し顔を赤らめながら下を向く。

俺達は食事も終わり、そろそろ寝る時間になった。

「さて、龍。ここにきて何かノルマとかは無いか？」

「ああ、そう言えば……」「何かこの幻想郷で活躍しなさい」って言われてた気がする。聞き流してたけど……」

「聞き流すなよ………んで、活躍ってのはどういう事だ？」

「んー、何かに貢献するって事じゃないか？聞き流してたから知らんけど……」
「だから聞き流すなよってさっき言った……」

俺と龍は寝る場所がないので俺が床で寝て、龍が俺のベッドで寝る形となった。
なんか修学旅行を思い出して新鮮な気分になる。

「そういや、奏も元外来人なんだよな？」

「ああ……」

「なら、お前は「東方Project」を知ってるか？」

「……………？なんだそれ？」

そこで龍は確信がついたように頷く。

「奏って結構アニメとかゲーム好きか？」

「大分な」

「じゃあおかしい。そもそもその外の世界も別なのか？」

「幻想郷と外の世界はセットになってる。そう言いたいのか？」

「ああ多分な……」

俺と龍は真剣な話し合いを数時間してしまっていた。

時刻は午前1時。

龍がいるからか、眠気は今もこない。

真剣な話からついには本当の修学旅行のような話が変わっていった。

「なあ、龍？」

「なんだよ？」

「お前は好きな人とかいないのか？」

俺が少し悪戯な笑顔でニヤニヤしながら龍に聞く。

すると少し顔を赤らめ、慌てながら龍は手を振る。

「いやいやいやいやいや、別世界のやつに言っても面白くないって、それに奏には特に言い難い……」

龍のその一言で俺は、おおよその予想がついた。

確かに言い難いよな……

「なるほど……まあ、ここの世界のアリスとは違うし、俺は別に怒らねえぜ？」

「は、はあ?!なんで分かったんだよ！」

龍はそこで大慌てし、ベッドから体を乗り出す。

「い、いや、この世界じゃ俺はアリスと恋人だし、そりや言い難いだろうなって……」

「く、くそ……中々鋭いなお前……」

いや誰でもわかると思うけど。

俺は心の中で突っ込む。

「まあまあ……………でも、俺のアリスは取るなよ？」

俺は少し冷たい目で龍を見る。

それに龍は少し引き攣りながら

「だ、大丈夫だよっ！性格もまるつきり違うし……………いや、少し似てるな……………」

龍がそう言う俺は少し顔を顰めて龍に色々質問をした。

「あ、そうなのか？怒りっぽくて？」

「ああ、少し怒りっぽいかも……」

「上海人形で頬を刺してくる？」

「クソ痛いよな」

「胸も小さい？」

「ああ、小さ……………」

フワツ……………

「ヒツ?!」

俺の背中に悪寒が走る。

即座に後ろを振り向くとそこには監視用の人形が置いてあった。

以前に俺が家の中で異変の黒幕に殺されかけた時、アリスが「もう少し早く気づいていれば」と泣きながら後悔していた。それから俺の家の中で何かあってもすぐにアリス

が知れるように監視用の人形が置いてある。

もちろん、俺が変な行為をしたら、この人形は容赦なく刺してくる。

そして今も。俺が余計なことを言ったため、プスプスと頬を刺してくる。まるでミツバチのように

「いたたたた！穴開くつて！」

俺が人形から逃れようとする隣で龍が大笑いしていた。

「あはははは！面白いな、それ！」

「わ、笑うなよ！」

「悪い悪い……ヒー、お腹痛い……」

未だクツクツと笑い続ける龍を俺は少し睨む。

「やっぱり、うちのアリスさんと奏のこのアリスさんは少し違うみたいだな……」

「そうか……」

俺と龍は目を合わせて、クスクスと笑った。

少しずつ眠気が襲ってきた。

「さ、寝るか」

「ああ……俺もだんだん眠くなってきた……」

龍は大きな欠伸をし、そのままベッドに横になった。

「じゃあおやすみ……」

「おう、おやすみ」

そう言つて、俺達は眠りについた。

翌朝。

俺は目が覚めた。隣ではまだ寝息を立てて寝ている龍がいた。

一つ背伸びをし、俺は時計を見る。

「げっ?!」

現時刻は正午。

寝すぎたな………昨晚に龍との会話が盛り上がりすぎて結局真夜中に寝ることに
なつた。

それと同時に龍の目が少し開いた。

「ん、龍。おはよ」

「お、おー……おはよ……」

目を擦りながら龍はゆつくりとベッドから立ち上がり、時計を見る。

「うわ……………昼じゃんか……………」

「俺もびつくりしたよ……………」

俺は一足先に台所へ向かい、軽い軽食を作る。

サンドイッチやトーストなど……………

そしていつの間にか食卓に座っていた龍にサンドイッチを差し出す。

「ん、さんきゅ。それじゃいただきます」

龍は合掌をし、サンドイッチを手にとって口に運ぶ。

「うまつ……………」

龍の口からそんな言葉が零れた。

人に俺の作ったものが美味しいと言われるのは初めてだったので、少し顔がにやけてしまっていた。

「美味いか？ならいいんだけど……………」

俺も隣に座り、自分の朝食を食べる。

確かに美味しいが少し何か抜けているな……………食べながらも俺はこの日の朝食の反省を行っていた。

そんなこんなで二日目は人里に買い物に行くだけで日が暮れた。

阿求のいる鈴奈庵に立ち寄ったり、甘味処にいつて団子を食べたりと、人里を思い切り楽しんだ。

そして三日目。異変が起きた。

「な、なんだよあれ……………」

俺はいつも通り、外に出て散歩しようとした時だった。

その目の前に、大勢の異様な形をした妖怪達がいた。

ホラーのような顔で返り血がこびり付いている。

今すぐ目を背けたくなるような顔と鳴き声。

「咲!」

相棒の名を呼んだ。

「奏くん!言いたい事分かるよね?!

いつも余裕をかましている咲だがこの時はいつも以上に真剣で焦燥の顔を浮かべて

いた。

咲名千里を鞘から抜き、俺は妖怪達に斬り掛かる。

しかし、その妖怪の皮膚がかなり固く、咲名千里は弾き返されてしまう。

「くそ……！硬すぎるだろ……」

俺は小声で文句を言いながら、能力を発動する。

斬撃現象。何でも斬れるくらいの切れ味を無理やり出させる荒業だ。

それを施したその直後、俺の背後から刀が伸び、俺を通り越して妖怪を貫く。

「り、龍?!」

「まったく……朝起きたらこんなことになってるなんてな……驚きだぜ……」

「助かったよ、サンキューな」

俺は龍に礼を言った。

龍はその孤月の刀身を消した。

俺もそれと同時に咲名千里をさやに収める。

「龍。多分、人里には多くの異形がいるはずだ。行くぞ」

「ああ」

俺達は静かに人里へと走り、住民が無事なことを祈っていた。

しかし、その願いは虚しくも悲鳴とともに消えていった。

「嘘……………だろ……………」

さつきいた妖怪達が人々を襲い、喰らい、血飛沫が飛び散っていた。ここまで凄惨な状況を見るのは初めてだ。

断末魔の叫び、阿鼻叫喚の悲鳴。

耳を塞ぎたくなる。

「くそっ！ 咲！ 龍！ 異形達を殺すぞ！」

「ああ、分かっている！」

俺と龍は走り出し、妖怪に近づいていった。

妖力を施した咲名千里はしっかりと妖怪の体を斬り裂いた。

最高の手応えに俺は少し感動を覚える。

龍はそのまま切り続け、妖怪を次々と倒していく。

こいつらは何なんだよ……………

「奏！ ぼさつとするな！」

龍に注意され、俺は我に返る。

「悪い！」

気持ち切り替え、俺はまた新たな妖怪達に斬り掛かる。

すると隣で龍は居合の型をとった。

「居合………「旋空孤月」！」

龍が技名を言い、そのまま孤月が綺麗な線を描きながら出てくる。すると

「なっ?!」

その弧月の刀身がさっきの2倍3倍と伸びていった。

それにより縦に並んでいた妖怪達はその伸びた孤月により、貫かれて消えていった。

「凄いな……」

負けてられない……そう思った俺は妖怪達の懐に潜り込み、一つの技を魅せた。

「うおおおおー」「びやくやせんめつけん白夜殲滅剣」！」

俺の咲名千里を鞘に収めた瞬間、俺の刀に触れた妖怪達は全て斬り裂かれた。

これは咲から教えてもらった奥義の一つだ。

そのまま俺は追撃をする。

俺は魔法陣から様々な弾幕を繰り出し、もう一つの奥義を出す。

「パッサイザン・アヤミ祓碎斬・零水」！」

弾幕の嵐が妖怪を襲った。

そこから俺は最高の秘奥義とも呼べる技を叩き込む。

「これで終わりだ！」

一瞬「流星の終わり」を使おうか迷ったが、材料となるものが無かった。

俺は月の師匠から教えてもらった奥義を発動させる。

「地水火風の精霊よ。我を仇なす者共を永遠へと誘え「スプリームエレメンツ」!!」

茶、青、赤、緑の魔法陣を展開し、そこから全霊力を発揮し、全ての敵を一掃した。

こうして俺と龍が三時間ほどかけ、全ての妖怪達を殺した。

「はあ……………はあ……………」

龍も俺も完全に疲労困憊状態にあり、とても動ける状態では無かった。

「さすが……………龍……………だな……………やっぱりお前の方が強えわ……………」

「お前も負けてないぞ……………奏……………あの奥義の連鎖は真似出来ねえよ……………」

「はは……………これで龍のノルマは達成じゃねえか?ちゃんと活躍したぞ?」

「そうだな……………三日目でようやく……………って感じだな……………」

「ああ……………霊力全部使い切っちゃまった……………アリスに怒られちゃうな……………」

俺と龍は仰向けになりながら、顔を見合わせる。

お互いの顔は笑顔でなんとも清々しいものだった。

「しかし……………かなりの死傷者が出ちゃった……………」

「だな……………」

龍は苦い顔になり、悔やむ。

永遠亭のうさぎやら紅魔館の住民などが、人里の方に集まってきていた。

「俺は……………もう……………疲れたよ……………」

俺はおおきく息を吸い、その場で瞼が落ちてきた。

「ああ、長いようで短い戦いだっただな……………」

それにつられ、龍の方も眠りについた。

その日の夜。

俺はアリスのベッドで目が覚めた。

「あら、起きたのね」

そこにはトレイの上にお茶を乗せたアリスが立っていた。

そうしてから俺の体を見る。元々傷はなかったので無傷だったが、霊力の方が心配だった。

「安心しなさい。私の霊力を注いでおいた」

「お、サンキュー」

俺は軽く礼を言い、アリスが持ってきてくれたお茶を飲む。

ほっこりする味だった。これはいつ飲んでも飽きない味だ。

お茶も飲み終わり、俺は龍を探す。

「なあ、龍はどこだ？」

「ああ、今リビングにいるわよ。どうやらあつちの世界の紫と話しているわ」

「そうか……」

俺はベッドから立ち上がり、リビングを指す。

「龍。いい結果を残せたようね」

「ああ、奏のおかげだ」

俺は自分の名を呼ばれ、リビングに姿を現した。

「奏！もう体は大丈夫なのか？」

「ああ、お前こそ大丈夫なのか？人間なんだから無理すんなよ」

「あら、あなたが奏さん？」

紫に「奏さん」と呼ばれるのに少し驚きを感じる。

そうか……龍の世界に俺はいないのか……

「はい、こんばんは。紫さん」

俺はしつかりとした言葉遣いで紫に一礼する。

「どうやら、うちの龍がお世話になったみたいね？」

「いや、俺はあんたんちのじゃない……」

「ええ、俺もびつくりしました。俺より強い人間がいたとは……」

感嘆の声とともに龍を見る。

「私も驚きよ、近々、私の幻想郷に大きな厄災が来るのは聞いたかしら？」

「はー」

紫は一呼吸おいてこう話す。

「龍はその大きな厄災から幻想郷を守る「英雄」になって欲しいの。そこで奏さんに質問よ。彼は英雄として相応しい？」

紫のその質問に俺は即答することが出来た。

「ええ、龍は俺が今まで会った生き物の中でトップに入る実力を持っています。実力だけじゃない、人望も厚く、彼と共に過ごした3日間はとても有意義なものでした。3日間だけでしたが、友人になれたんじゃないかなと思います」

「奏……」

隣で龍がジーンと感動していた。

紫はその場で微笑んだ。

「そう。なら良かったわ。じゃあ私達はこれでお暇するわね」

紫は指を鳴らした。するとその隣にスキマが出現する。

すると龍は笑顔で

「じゃあな奏。この濃い3日間は絶対に話されられないな」

「はは、バカ言え、どうせ明日にはわすれてんだろ」

俺と龍は手を差し出し、握手をする。

身長割に大きめな龍の手に俺は少し憧れを持ってしまった。

「じゃあ、また会おうな……奏……このこと、小説にしているか？」

龍のその微笑みに俺はまた微笑みを重ねる。

「ああ、その小説が幻想郷まで届くことを祈ってるよ。その時はまたこっちに来いよ

……」

そう言って龍は手を離し、スキマの中に入る。

俺はいなくなるまで手を振り、龍の背中を見ていた。

「いい友達が出来たわね。奏」

アリスがその隣で俺に話しかける。

「そうだな……本当にいい奴だった……」

俺は偽の涙を流す。

「その故人みたいなノリやめなさいよ……」

「あくあ、お腹すいたなあー」

俺は腹を抑えながらわざとらしくアリスに言う。

するとアリスは微笑んでこう言った。

「仕方ないわね。じゃあ今日はグラタンにでもしましょうか」

「やった！貧乳グラタンだー！」

俺が両手をあげて喜ぶと俺の眼球の目の前まで針が来ていた。

「そう言えば……そろそろ無味の毒がうちに届くのよねえ？少し毒味してもらっても

いいかしら？奏？」

「ご、ごめんごめん……」

俺は必死に平伏する。

こんな状態になったアリスは鬼のように怖い。

と言つても、アリスをいじるのは面白いから止めないけど。

アリスはそこで溜息をつき、台所に向かう。

「静かに待ってなさい」

「は、はい……」

そうして俺は夜空を見る。

辺りは満天の星空。

俺は龍を思い出す。

本当に親友のような感じだった。

ここまで仲の良い友達を作れたのは、人生で初めてかもしれない。

そして帰る時の龍の背中では兄貴を彷彿とさせるくらい大きく、俺の憧れの的のようだった。

東方幻想幻華 「アリス・マーガトロイド特別編」×しがない小説家志望が幻想入り

e
n
d
:
:
:
:
:

コラボ 東方想幻華「閉ざした心、開いた恋く過去を乗

り越えたその先へく」×無意識の恋

一人の半人半妖と一人の神様

今日も、あいつは元気いっぱい。困るくらいに

「パパあー！またエロ本隠したー！」

「だから声が大きいんだよ夏恋!!」

愛原 夏恋。

俺とこいしの間に生まれた愛娘だ。

現在は14歳。年頃の女の子だ。一応寺子屋の最高学年である。

友達も多く、男子から告白されることも多いんだとか。

そんな夏恋は今俺のウゝス異本を漁っている。

「ふむふむ。パパにしてはいい趣味だね♪」

「娘に言われたらなんか悲しいっ！」

俺と夏恋がそんな会話をしていると、俺の妻、古明地こいしがとんでもない形相でド

アを開ける。

「げっ?!こいし?!」

「げっ?!?って何よ!奏またエロ本隠したの?!」

エプロンを来ているこいしはいっ見てても可愛い。

これを見れるのは俺と夏恋の特権なのかもな。

「か、隠したんだけど夏恋に見つかりました……………」

「だってパパいつも隠すところ同じなんだもん……………」

夏恋の呆れた声が俺の心に響く。

「うぐっ……………面目ない……………」

するとこいしはため息をついて、夏恋と俺に注意した。

「奏はそろそろエロ本を卒業すること、それと夏恋はそれに興味を持たないこと!」

「い、いや、男のロマンを踏みにじる気がっ?!」

「はっ。」

「いめんやい。」

こいしの威圧により、俺は縮こまるしかなかった。

現在は俺よりもこいしの方が権力を握っている。

しかし、こんな日常も悪くない。いや、こういう日常が俺は好きだ。何も起こらなけ

れば……………な。

俺がそう思ったその刹那、

ドゴオオオオオン……………

「うお?!」

自身かと思われるほどの揺れ、俺は即座にこいしと夏恋を抱きしめ、守る。

「きやああ!!」

夏恋の叫び声が聞こえる。

まずい……………なんだよこの揺れ……………大きすぎる……………!

数分で揺れは収まるが

「おいおい……………皿がめっちゃ割れてるぞ……………」

「あくあ、それ高かったのに……………」

こいしが隣で深いため息をつく、その隣で夏恋は少し震えていた。

「大丈夫だよ夏恋。もう収まったから……………」

「う、うん……………」

夏恋を宥め、俺は様子を見るために外に出る。

さすが地底と言ったところか、崩れる家もなくいつもの地底に戻っている。まあ、何かあったら勇儀姐さんがいるしな。

と、そんなことを思いながら、俺は地霊殿に帰ろうとする。しかし、その最中に俺の勘が働く。

「誰だ？」

咲名千里を構え、あたりを見渡す。

……………いた……………

俺はその人影に軽い弾幕を放つ。

「うおっ?!あつぶねえ?!」

そこに一人の男が出てきた。

黒髪……………パーカー……………見たことないな……………

「お前は……………誰だ？」

「あ、ああ？」

その男は訳分らない……………というような顔でこちらを見る。すると背後からこいしが姿を現す。

「奏!どうしたの?」

「こ、こいしっ?!」

「へ?だ、誰？」

その男はこいしを見た瞬間、驚きの表情を浮かべる。

そしてこいしのその返答にシヨツクの表情で落胆していた。

こいしの後ろには夏恋も付いてきていた。

それを見て男の目つきが変わった。

「おい……………奏と言ったか？」

その男はこいしから俺に目線を移し、睨みつける。

「ああ、そうだが……………」

すると男の叫び声が地底に響く。

「神成り！」

しゅびーん……………と軽快な音を立てながら男の手に1本の刀が出現する。

ん？何かと話しているのか？男が独り言を始めた。

やる気か……………

「咲！」

「ほいほーい……………また面倒事ですか……………前回も魔法の森で……………」

「メタい話すな！とにかく、やるぞ！」

「俺のこいしに何してんだアー！」

そう言つて男は俺に斬り掛かる。

膝を曲げ、男の背中に回り込む。

よし、殺とった!!

背中に傷を入れる。

「まずは一発……と……」

「いてて……」

ま、マジかよ……

かなり深く抉ったはずだ……なのに……

あんなに傷が浅いなんて……

「ちっ……」

俺は軽く舌打ちをし、男の懐に入る。

しかしそれもまた防がれる。

弱点はどこだ……!

「狙撃「スナイパー」」

男は近くの石を拾い上げ、俺に向かって投げる。

「なっ?!」

なんて肩だ。このスピード……まずいつ!よけられない!

俺は咲名千里を縦に振り下ろし、その石を斬る。

しかしその刹那、大きな爆発が起きる。

それに巻き込まれ、俺はその場で倒れた。

「!!」

覚醒するとそこはいつも見る天井。

俺の部屋だ。そこにはさっきの男とこいし、夏恋が座っていた。

すると男は俺を見るや否や

「すまん!」

「は?」

「いや……こいしに話を聞いた……」

何の話だ?

よく分からなかったが……こいしは何かを知っているようだった。

こいしは普通の声音で口を開く。

「この人……別のパラレルワールドから来た人なの……」

「ど、どうして分かるんだ？」

「お姉ちゃんが心を読んだら、私たちの知らない幻想郷の事が記憶に残ってたらしいの……」

「な、なるほど……そういう事か……いや、俺も悪かった」

お互いに謝罪をし、自己紹介をする。

「俺の名前は愛原 奏」

「俺は海藤 真。一応人間だが……妖怪の血が結構流れてる………実質半人半妖かな。んでこっちは……紬」

すると真の刀が急に光りだした。それに少し警戒した俺を見据えたのか真は微笑みながら

「大丈夫だよ、別に悪いやつじゃない」

「やあ、私は紬。神様でこの妖刀「神成り」の依代。んで、真の彼じ」

「そっかいやここに香霖堂はあるか？」

と、真が言うので

「ああ、地底を出たら右手にあるぞ」

「ご、ごめんって真！許してえー！捨てないでえー！」

なんだこいつら……まるでコントだな……

「……とまあ、こんな感じだ、よろしく頼むよ……」

「ああ」

俺と真は握手をし、これからの事を考えていた。

「どうする？ 真達は実質別世界転移しちゃったんだろ？」

「原因は……まだ分からない……紬、分かるか？」

「いや、私も……何も知らない」

「咲、お前は？」

「右に同じ」

と、何の手がかりもないこの状況から、真と紬の2人を元の幻想郷に返す方法を考えた。

「これは異変なのか？」

俺は複雑な顔をしながら二人に聞く。

「いや、違うな……多分……ここに来る前、あっちの幻想郷で地震があったんだそれが原因なのかも知れない……」

「地震……そういや、こつちでもあったぞ、結構大きいの」

そこで紬がピーンと何かを思いついたかのようにこう放った。

「じゃあ震源地に行ってみよう。何かわかるかもしれない」

「そうだな……しかし……今は真夜中だぞ？今日はここで休め」

俺が提案すると真と紬は「お言葉に甘えて」と言っただけで地霊殿に一日泊まることになった。

部屋がなかったの、俺と真は同じ部屋、咲名千里と神成りを両サイドに置く。

その日の晩御飯。

「奏えー！ちよつと手伝ってー！」

少し慌て気味のこいしの声がする。

「なんてもの作ってるんだ……」

「あ、俺も行くよ」

俺と真は台所に向かい、こいしの手伝いを任された。

俺は野菜を切り、真は鍋を見ている。

「なあ、奏」

「ん？」

すると真は少し小さめな声で

「お前とこいしって恋人なのか？」

「いや、夫婦だぞ？」

「はあ?!」

「な、なんだよ……」

真のその大きな声に俺は体を強ばらせる。

「こ、こ(こ)こ(こ)、こいしと奏が?!」

「ああ……」

すると真は少し羨ましそうな顔をして

「実は俺もあつちのこいしと恋人同士なんだ……」

「へえ……」

なんか少し申し訳ない気がするが俺は笑顔になりながらこう語る。

「大丈夫だ。真の所と俺の所のこいしは全くの別人。浮気なんて考えない方がいいな。

お互い」

「だな……」

「なあ、奏!どうやったたら結婚できた?!」

「んー、そうだな……」

そーいや結婚したのは15年前。

結構昔なのであまり覚えていない。

「まあ、とりあえず流れ?」

すると真は肩を落とし、大きなため息をつく。
な、なんか期待を裏切った感があるんだが……

晩御飯も食べ終わり、真は夏恋の相手をしていた。

「あ、君がこいしと奏の子供？」

「は、はい。そうですけど……」

「け、結構大きいんだね……」

「まあ、もう14歳ですしね……」

そ、そんなに経つのか？と言わんばかりの顔で真は夏恋を見ていた。

「いーな……俺も子供欲しい……」

すると夏恋は少しニヤニヤしながら……

「あらあー？まだ未婚なんですわえー？」

ごめん夏恋。その顔すごいムカつくよ……

と心の中で俺は思った。

「彼女はいる！」

「お、そうですか、頑張ってくださいいねえー？」

「な、奏。お前んとこの娘。かなり手ごわいな」

「おっしやる通り」

俺は真と共感した。

まさか同じ思いを出来る仲間がここに来るとは……………

俺は少し感動を覚えた。

その隣で夏恋がクスクスと笑っていた。

その日の夜。

「ね、紬ちゃん！」

「ん、何？ 咲ちゃん」

まるで子供のように咲と紬が遊んでいた。

中身はまるつきり大人なのに……体が2人とも小さいからか……とても微笑ましく見えてしまう。

「あ、奏くん今私たちのこと子供扱いしたね？後でたつぷり愛でてあげるよ」

「ごめんなさい許してください」

何で俺の周りはさとり以外にも心が読めるやつがいるんだッ！

そう悔やむ俺の傍らで真が大爆笑していた。

「じゃあ電気消すぞ……」

俺は床、真はベッド、咲と紬は刀。

それぞれ眠りにつくと思いきや、

「ねね、紬ちゃんは好きな人居ないの？」

「ふえっ?!」

と女子組2人がそんな会話をし始めた。

紬は顔を真っ赤にして答えに迷っていた。

すると真が呆れたような顔でこう呟いた。

「あのなあ………ここは修学旅行じゃねえんだぞ……俺達は眠いんだから刀の中で話してくれ………」

「むうー仕方ないな……」

すると女子ふたりは刀に中につきつと消え、部屋は静かになった。

「なあ、奏」

「ん？」

「この幻想郷は……俺のいたところと違うかな……」

「確証はないが、全くの別物だと思うぞ。まず、真の世界に俺はいない。俺の世界にも真はいない。その時点でパラレルワールドとはまた違うものなのかもな」

「なるほどな……」

「まあ、明日震源地に行けば分かるだろうよ……」

「ああ、宜しくな………相棒」

真のその言葉に俺は目を見開く。

「おいおい………会って数時間の男に「相棒」はないだろ……」

「いやいや、これから「相棒」になってもらうんだよ……」

俺はそこで小さく笑い

「都合のいい奴め……」

「そういう能力なんで……♪」

この時俺はこの海藤 真と、どこか似ているようでとても仲良くなれそうな気がし

博麗大結界での戦い……

翌朝、目が覚める。

時刻は午前7時。地底に太陽の光が注ぎ込まれる時間帯。

俺は右手でその光を隠し、外を見る。

チユンチユンと鳥のさえずりだけが俺の耳に届く。

いい朝だ。

俺は大きく深呼吸をし、ベッドを見る。

昨日、幻想郷に迷い込んだ少年。海藤 真がまだそこで寝ていた。

俺は一足先に洗面所に向かい、顔を洗い、歯を磨いてきた。

スツキリした俺はもう1度部屋に戻り、着替えの服を取りに来た。

真が目を覚ましていた。

「お、真。起きたか」

「んー、おはよ……」

目がまだ半開き状態ですごい寝癖がたっている。

こりやまた芸術の一つかもしれない……

「とりあえず洗面所で顔を洗ってこい……後寝癖も直せ」

「お、おー……………」

まだ睡眠から覚めていないのか、フラフラした足取りで真は外に出る。

俺は咲名千里を手に取り、咲を起こす。

「おーい、咲ー？朝だぞー？」

返事はない。まあ、いつもの事だが……

いつもならここで放置するが、今日の気分の良さもあつたので、少しちよつかいかけてみることにした。

「おーい、ペツタンコー。断崖絶壁の片波　咲さーん……………」

スツ……………と、華麗な音を立てながら、何か俺の背後に回る。

その刹那、俺の首に細い腕が回り、そのまま首を絞められる。

「あーら奏くうん？おはよ？」

「あがががが……………咲っ……………ごめん！俺が悪かったからそんなに強く締めるなあ……………」

ギリギリ……………と締め付けられる音が鳴る。

やばいつてこれ！喉仏がだんだんと潰れていく感触。

「えー？ちよつと私「ペツタンコ」で「断崖絶壁」だからよく聞こえないなあ？」

「わ、分かった！ 咲は身長割に結構ある！ あるから！ 巨乳サイコー！」

俺が苦し紛れにそう叫ぶと、咲は腕をぱつと離し

「そう、分かればいいのよ♪」

あかん……………どうしてこう俺の周りのやつは怒ったらこんな怖いだ……

その光景を見た真は少し苦笑いをしていた。

「お、お前らコントみたいなことするな……………ぶつちやけると馬鹿みたいだぞ……………お前ら……………」

「……………ブーメランって知ってるか、真？」

「あはははは！ 奏くんと真くんでも充分コントしてるみたいだよ！」

その隣で咲といつの間にか起きていた紬が腹を抱えて大笑いする。

全く……………朝っぱらからひどい目にあった。

朝食を食べ、俺達は今回の地震の震源地について話す。

「震源地ってどこら辺だと思う……………？」

「まず、私と奏くんがいるここはかなり揺れも大きかったから、震源地はさほど遠くないはず」

「俺らのところは……………でも、……………ダーラとの……」

真は一人で何かを考え込んでしまった。

そこから真は何かを思いついたかのように目を見開く。

「お、真？ なにか思いついたか？」

「あの爆発は………そういう事なのか………？」

爆発？

「みんな、俺は少し心当たりのある場所がある。来てくれないか？」

「おう、全然構わないが………」

俺達は地霊殿組全員で真の言う震源地らしきところへ向かう。

そこは博麗神社のすぐ下。

「………？ 何でここなんだ？」

俺は小首をかしげ、真に尋ねる。

「いや、俺の世界で1度博麗大結界が歪んだことがあったんだ」

「それでここに来たのか？」

「ああ」

なるほどな。

俺は博麗大結界のそばまで近寄る。

「?!」

俺はそこであつてはならない事を見つけてしまう。

「ど、どうした?!」

下から真の声がきこえる。

俺は喉を潰された感覚に陥る。

「博麗大結界が……」

「が？」

「……………割れてる……………」

俺のその言葉により、咲はもちろん、真や紬も目を見張っていた。

まずい……………このままじゃどこの世界と繋がるかわからない……………

そうすると幻想郷が襲われる可能性が殆どだ。

「咲…霊夢を呼んでこい！」

「わ、分かった！」

咲は今までにないくらいのスピードで博麗神社へと登る。

俺は真達と共に、紫を呼んで事情を話した。

紫はその事を少し前から知っていて、現在はその原因を調べているところらしい。

「どうにかして出来ねえかな……………」

真はその場で顎に手を置いて考える。

確かに博麗大結界にヒビが入るなんて前代未聞な出来事だ。

それにより、紫の方も珍しく焦燥の顔を浮かべていた。

「俺達は何も出来ないしな……………真、紬、咲。とりあえず帰ってさとりで伝え」

ピキイイイン……………

俺達は今一番聞きたくない音を聞いた。

この音は聞いたことがないが、なんの音かはすぐに分かる。

「博麗大結界が割れた……………」

さっきのヒビからぼっかり穴が開き、その奥には歪んだ別世界が見える。

「まずいっ！奏！真！敵が来たら受け止めてちょうだい！紫！博麗大結界を閉めに行くわよー！」

霊夢的的確な指示に俺達は言われた通りに動く。

俺と真はそれぞれ妖刀を抜き、敵が来るのを待つ。

すると

「……来たか……」

その割れから数十人の人間の形をした物が滑り込んでくる。

「狙撃「スナイパー」」

俺の隣でビュンツツという風切り音が俺の耳に届く。

真がとんでもない速さの意思を投げる。

その石は1人にあたり、爆発が周りの妖怪を巻き込む。

「スツゲエ……」

俺と咲はその場で棒立ちになっていた。

しかし真と紬はそれを見向きもせず、後から来た妖怪達に斬り掛かる。

「よし……俺達も行くぞー」

咲名千里を逆手に構え、空へと飛ぶ。

昨日の夜に研磨したばかりの刀は素晴らしい切れ味を誇っていた。

最高の手応えと共に俺は真のあとを追う。

「うおおおおおー」

真の叫びと共に次々と妖怪達から鮮血が飛び散る。

ズババババ……という軽快な音が俺の耳に入る。

「俺達も真に続くぞー」

「ええ！」

そうして俺達は妖怪の群れの中へと入る。

ああ、あれから何時間経った？

俺達が妖怪の群れに入って長い時間が経過した。

「真！まだ大丈夫か？」

「余裕だ！」

「オーケー……！ラストスパートかけるぞ！」

見た感じさつきよりも妖怪の数はかなり減った。

後は霊夢と紫が閉じるのを待つだけだ。

「……シアリングソロウ！」

俺は直径3mほどの隕石を生成し、俺を数人いる所に落下させる。

しかし魔法に耐性でもあるのか、ほぼ無傷だった。

「ちっー！」

舌打ちをし、真の方を見る。

あいつの剣術は凄いな………あんなに軽々と刀を振れるなんて……

俺はしばし真の剣術に見とれていた。

気持ちは切り替え、俺も剣術の方に集中する。

刀身に雷電を纏わせる。

「獣爪雷斬！」

その雷電が妖怪達の動きを封じ、そのまま斬っていく。

妖怪一人一人の能力はかなりのものだが、連携性が無く、スキだらけだ。

それから3時間後。

日が沈んだ。

「はあ………はあ………奏………大丈夫か？」

「ああ、………お疲れ、真」

博麗大結界が紫の手によって閉じられ、元の幻想郷に戻った。

俺と真がここで敵を受け止めていたため、人里やその他の場所に被害が行くことは無かった。

「お疲れ！奏！真！」

「頑張ったね！2人とも！」

刀女子2人が実体化しご主人様を労う。

俺達2人はもうヘトヘトだ。

「こんなに……この星は綺麗だったんだな……」

「だろ？ここは名スポットの一つだぜ？」

「おーい！奏ー！真ー！」

こいしの声だ。

その後には夏恋の姿もある

「いやー！びつくりしたよ！急に博麗大結界が開くんだもん！2人とも無事で良かった

よー！」

こいしは少し心配した顔で言う。

「ああ……終わったあー」

大きく背伸びをし、俺は寝転がっている真に手を差し伸べた。

その手を真は掴み、起き上がる。

すると俺の目の前にスキマが現れ、その中から紫が姿を見せる。

「真ちゃんと紬ちゃんの世界に帰る方法が分かったわ」

「ほ、本当か?!」

真と紬は一步前に踏み出し、紫に聞く。

「あの博麗大結界が空いたのは真達のいる世界との境界だったの、だからそれが完全に閉じるまでに私がスキマであっちの世界に送れるわ。後10分くらい」

「ま、まじか」

後10分ほどで真は別世界に帰る。

それを考えると少し物悲しい感じがした。

「まあ、仕方ないよ。真……………」

「そう……………だな……………」

真と紬は俺達の方に向き直り

「ありがとう。みんな。お前達がいなかったら俺達は今頃野垂れ死にしてたよ……………」

「……………野垂れ死にとって……………」

俺は苦笑いをし、真を見る。

「まあ、もうお別れだね、咲ちゃん」

「うん、ありがとう。紬ちゃん!また会おうね!」

咲と紬は握手をする。

やはり微笑ましい……

「ありがとうね、真、紬。あつちの世界の私とも仲良くね」

こいしの優しい言葉に真は少しぎこちない笑顔で……

「俺のところのこいしもこのくらい料理が美味かったらな……」

こいしは苦笑いをしていた。

ああ、真のところのこいしは料理が下手なのか……

「はは………まあ、じゃあな、真」

俺は優しい言葉で真に投げかける。

「ああ、またな………相棒……」

「今度は相棒って言ってもおかしくないな……」

俺と真は強く握手をし、笑顔で見つめ合う。

すると紫はスキマを大きくし、その中に真と紬は入る。

「じゃーなー！」

真と紬は笑顔で消えていった。

俺と咲はいなくなるまでずっと手を振っていた。

真は俺にとって、本当の相棒の様な存在であった。

「さ、帰ろうか、こいし、夏恋」

「うん！」

「さて、今日の晩御飯は何にしよっかなー？」

俺は愛しい家族2人と手を繋ぎながら地底に帰った。

「閉ざした心、開いた恋々過去を乗り越えたその先へ」×無意識の恋

e n d ……

初めて渡したチョコレート

バレンタインデー

特別編

恋を形にしたもの

今日は2月14日。

バレンタインデーという行事らしい。

もちろん私。博麗霊夢はそんなこと興味すら湧かなかつた。

”今までなら”ね。

現在は博麗の巫女である私にはなかつた感情が芽生える。

それが『恋』。

私の恋の矛先は、彼に向いていた。

「やっぴい……」

私は銀世界となっている幻想郷を見ながら凍える。

今年は異例の大雪だった。

今日だけ誰もここには来ないだろう。

久々にゆっくり出来る。

あ、そうだ。チョコ作りの続きしようかな？

私は立ち上がり、奥へと入る。

そこには作りかけのチョコレートがボウルに入っていた。

「よし……！」

袖をまくり、チョコを固めようとしたその時だった。

「おーい！ 霊夢ー！」

「びゃあ?！」

私は体を強ばらせた。

そうして顔がみるみるうちに赤くなっているのが分かった。

彼だ。翔だ。

椎名 翔。私と同じ妖怪退治を生業としている（なってしまった）

同業者だ。

しかし、私はそんな彼を同業者とは見ていない。

そう、あいつに恋をしている。

それはそれは初めてのものです、私も気づいたのは最近だ。

話す度に顔が火照り、口元が緩む。

「ちよ、翔?!おどかさないでよ!!」

「わ、悪い……林檎が取れたから……食うか?」

そう言つて翔は林檎を差し出す。

この寒い中よく来たな……

私はチョコをそそくさと片付け、翔の方に向かう。

「あゝ、はいはい、ありがと。切つてやるから座つてなさい……」

「お、さんきゅ」

翔は遠慮のえの字もないくらいお構い無しに床に上がる。

これも心を許してくれてる証拠かな?

と、ポジティブに考えてしまう私がいた。

私は少しニヤニヤしながら、まな板を置いて、翔から貰った林檎の皮をむき、切つていく。

翔の家の林檎は今じゃ幻想郷最高級の林檎で、なかなか高いという。

それを無料でくれるのはやはり嬉しいものだ。

「はい、出来たわよ」

「おー、やっぱり霊夢は綺麗に切るなあ……俺だったらもつと変な形になる……」

「あんたが下手くそだからでしょ……」

私は肘をついて、面倒くさそうな顔で対応する。

もちろん、こんな態度も仮面だ。

内心めっちゃ舞い上がってる。

「うぐつ……相も変わらさず辛辣ですな……」

「あんたが悪いのよ……」

と、素直になれない。

まあ、仕方ないっちゃ仕方ない……

私はお茶を出すためにもう一度立ち上がる。

すると翔は

「あ、やべえ！もうこんな時間かよ！わりい霊夢！今日鈴仙に呼びたされてるんだ！また後でな！」

「えい！ちよつと！」

翔はかなり急いで出て行ってしまった。

確か……今日は2月14日……まさか鈴仙も……

先を越された……私は肩を落とす。

これで鈴仙と翔が付き合っちゃったなら……私はどうすればいいの……？

私は目に熱いものを感じた。

嘘……………私泣いてるの……………?

こんな事で泣いちやダメよ私……………まだ鈴仙がチョコを渡すって決まったわけでもない!

頑張つて今日中に作つて、夜にでも渡さないと!

台所へ向かい、全身全霊チョコを作った。

2時間後……………

「で、できたあ……………」

私はその傑作を一個食べる。

うまつ……………

チョコは固めてボール状にしたもの、シンプルかもしれないが、これが私の全力だ。

それを可愛い袋に包装し、リボン結びで閉じる。

できた……………!

私はそれをすぐに冷蔵庫に入れる。

そして

「よし、後はこれをどうやって渡すか……………」

私は顎に手を置いて考える。

翔の事だ。あの鈍感な絶対には本命って言わないと気づかないだろう。だから……………思

い切つて告白するか？

くくくくくつ！むりむりむりむりむり！！

私がある場で頭を抱えていると

「あら？エプロンなんか着て何してるの？」

「げっ！紫……………」

そこに居たのは隙間から上半身だけを出している妖怪。

八雲紫がそこで首をかしげていた。

「げっ！つて何よ……………傷ついたらわ……………」

少ししよんぼりしたような顔をし、私のエプロンに付いていたチヨコを見て、にやつと笑った。

「あらあら♪霊夢も恋をしたんですなあ〜？ゆかりん嬉しいよ☆」

「うっさい！！ほつといて！後ゆかりんやめろ！」

「あれあれ？霊夢ちゃん顔真つ赤よ？」

紫に言われて気づいたが、私は鼻の先まで血のように赤い。

それに気づいてさらに恥ずかしくなる。

「くくくくくつ！！」

すると紫は扇子を口に当て、上品に笑う。

「まあ、相手も分かっているし、別に今更いじろうなんて思っていないわよ」
「充分いじってるわよ……」

「ふふっ、まあ、頑張つて、ゆかりん応援してるよ……!」

紫は親指をぐつと立て、応援してくる。

「うん、ありがと……」

「はっ、霊夢が素直………恋の効果は絶大ね……」

「うっさい!早くどっか行け!」

「うふふ♪」

紫はスキマに入っていった。

私は翔を探すことを決意した。

「まだ永遠亭かな……?」

私はマフラーをつけ、外に出る。

極寒の風が私の全身を刺激する。

足を浮かし、飛んで行く。

迷いの竹林に着いたが

「やばい…………道がわからない…………」

歩いて翔を探そうとしたが、わからないんじや仕方ない。

上空から永遠亭に一度寄ろう。

私はもう1度宙に浮き、永遠亭に行く。

永遠亭に行くと、鈴仙が入口に立っていた。

「あ、鈴仙ー！」

「あ、霊夢さん」

私はシユタつと着地し、鈴仙に聞く。

「ね、翔知らない？」

私がそう聞くと、鈴仙は赤面して「うぐつ」と唸る。

やっぱり鈴仙もチョコレートか…………

「あし、翔なら、今さっきここから出ていきましたよ」

「あ、手遅れだったか…………」

「……………翔に何かあるんですか？」

鈴仙が小首をかしげながら私に聞いてくる。

私は堂々と言おうとしたが、やはり恥ずかしく赤面してしまう。

「翔に……………チョコレートを……………」

そこで鈴仙は目を見開いて驚く。

「あ、え……………霊夢さんも？」

「ええ……………鈴仙でしょ？」

すると鈴仙はにやつと笑って

「ライバルですね……………まさか霊夢さんもとは……………」

「ライバルって……………翔はどこなの？」

私は苦笑いをしながら鈴仙に聞く。

「まだここを出て数分ですし、まだ竹林内じゃないですかね？」

「そう、ありがと」

私はそれだけ言い捨て、竹林の方へと走る。

「あ、霊夢さん！」

「ん？何よ？」

そこで鈴仙は少しモジモジしながら、

「し、翔の事、取らないでくださいよ……………」

「さあ、どうかしらね？」

私はもう1度踵を返し、走る。

どこにいるかな……

こんなに走ったのも久しぶりかも……

その数分後。

「!!……いた……」

そこに居たのは、紛れもない、翔の姿だった。

翔の片手には私のではない、鈴仙のチョコがあった。

可愛らしい包装に入っている。

いや、私も負けていないはず……

「翔!!」

「ん？おお、霊夢。今から博麗神社行こうと思ってたんだけど……まあいいや、どうした？」

え、博麗神社行くつもりだったの？

なら出る必要なかったじゃん……
肩を落とす。

しかし、それはすぐに緊張に塗り替えられてしまう。

やばい………！いつもお構い無しに話していたのに………！

何よ、この鼓動は………！

胸を抑えるが、一向に収まる気配はない。

「あ、えと………その………」
「？」

私は言葉に詰まる。

こんなに言い難いものなの………？

どうして………言葉が出ないのよっ！

歯を食いしばり、必死に言葉を考える。

「お、おい………霊夢………っ」

もういい！

流れで渡す！

私はガサッと音を出しながらばつとチョコレートを出す。

「えと………はい………これ………」

「……霊夢……」

「ぎ、義理よ！義理……これからも同業者としてよろしくつて意味で……」
こんなに顔真っ赤になって言っても説得力ないじゃない……
私は内心大泣きである。

しかし、そんな私を見かねたのか、翔は笑顔になり

「おーサンキューー霊夢！嬉しいよー！」

その眩しい笑顔に私はドキッと心臓が高鳴る。

「そ、そう……まあ、義理だけどね……！」

「わ、分かっている……」

そう言つて翔は私が作つたチョコを開ける。

「あれ、それは食べないの？」

「ん、ああ、鈴仙が「家に帰ってから食べ」って……」

「ふうーん……」

私は鈴仙の作つた袋を見る。

そこには一枚の紙切れが入っていた。

私はそこで察する。

や、やばい……！鈴仙はここで告白する気だ……！

「ね、ねえ、翔……?」

私のチョコを食いながら翔はこちらを見る。

もういい、このまま流れに任せよう…

「翔はさ……好きな人いないの?」

「……………いるよ……」

もう一度、ドクンと心臓が動く。

一体誰なのだろうか……………

いや、今はそんなことどうだっていい……………

勇気を出せ博麗霊夢……………

これも博麗の使命よ……………

「あの、さ……………」

私はマフラーで顔を隠す。

しかしマフラー越しでもわかるほど顔は真っ赤だろう。

いや、これもどうだっ
ていい。
遠回しは嫌だ。

「好きです……………！私の恋人にな
って下さい……………！」

い、言えた……………！

私は翔の顔を恐る恐る見る。

翔の顔は私と同じように真っ赤だ。

「れ、霊夢……………」

翔は驚いた顔をしたが、すぐに笑顔になる。
そして優しく包み込む様な声音で

「こちらこそ……………俺も霊夢が好きだ……………俺の彼女になって下さい……………」

その言葉を聞き、私は涙が勝手に出る。

涙ももう何年ぶりだろうか……………

感極まって私は翔の胸元に頭を乗せる……………

その翔の体が暖かくて……………

ずっとこのまままでいたくて……………

「嬉しい……………ありがとう……………翔……………」

「ああ……………」

鈴仙。悪いけど私の方が先だったようね……………

私がそう心の中で鈴仙に伝えると……

翔がこんなことを小声で話した……

「なあ、霊夢………お前……」

「ん？」

「砂糖と塩、間違えてないか？」

瞬間、世界が止まった。

その翔の顔から見て、私が間違えたのは確実だろう……

私はもう1度耳の先まで真っ赤に染まる。

砂糖と塩を間違えるという、完全なテンプレ展開である。

「え、ええええええええええええ!!」

私が慌てる様子に翔は笑う。

「あはははは!!いい思い出だよ!」

「ふみゆう……………」

私は撃沈したかのように肩を落とす……

は、恥ずかしいっ!

しかし、翔はそんな私でも受け入れにくれた。

「俺は完璧なようどこか抜けてる霊夢が大好きだぞ?」

「そ、そういうことを躊躇いもなしに言わない!」

「あはははは!可愛いなあ……」

「うっさい!」

私と翔は博麗神社までずっと手を握り、互いの温もりをずっと感じていた。

バレンタインデー特別編
恋を形にしたもの

く博麗霊夢特別編く

e
n
d
…
…

第1プロローグ

〜東方桜天翔〜

俺が幻想郷に着いた日

東京都八王子市。

俺、椎名翔と実の姉、椎名彩菜の二人暮らしをしている

俺は17歳でまだ高校2年生だ。

彩菜は20歳で大手企業に勤めているのでお金には困っていない。

「んんっ……ああよく寝た」

朝6時半、太陽に向かって大きく背伸びした俺は姉を起こしに隣の部屋へ向かった。

「おい姉ちゃん、起きろー、朝だぞー」

「ふえ？……あと2時間……」

どんだけ寝るんだあんたは。

そう思いながら冷凍庫の中に一週間前から入れてあった氷を彩菜の顔面に当てた。

「ひぎいいいいああああああ!!!」

とても女性とは思えない声で叫んだ。

怖い……うちの姉怖い……

「なにすんのよあんなア！」

「うっせえ！朝飯食いたきや暴れんな！」

「ぐぬぬ…我が弟ながら策士だな……」

「はいはいそーですねー、早く顔洗ってきな」

「あ、翔今日暇でしょ？ 一緒に服買いにいこーよー」

俺は特に用事が無かったので了承することにした

「いいよ」

この一言で俺の人生が変わるとはこの時は全く考えることさえ出来なかった。

デパートの中にて…

「この服可愛くない？ねえ翔聞いてる？」

「そうだね可愛いね」

「弟よ……女性とは買物にきているのにその態度は何かな？」

「姉ちゃんのこと女性として見たことねえや……」

欠伸をしながら姉に言う。

すると、残酷な笑顔で

「今日は私が晩御飯作ってあげる♪」

「ごめんなさい許してください」

そう、姉の作る料理は全てのものが混沌に包まれるほど残酷な色であり、味は……言わなくてもわかるだろう……それほど姉の料理は凶器なのだ。

「ちゃんと見てよねー。もー」

「もう姉ちゃん一人で決めれば……」

刹那、一発の銃声がデパート内に響いた。

耳が破裂するほどの大音量。

「なっ、なんだ?」

慌てて銃声の出どころを探るためデパートの1階を見下ろす。

そのときに俺は一瞬で理解してしまった。

「……テロだ……」

「え……」

「逃げるぞ姉ちゃん!」

姉の手を掴み、必死で逃げようとした。姉の顔は動揺していた。しかし、間に合

わなかった。テロの奴らに回り込まれてしまった。そのときに俺は足を撃た

れ、足に大きな穴が開く、立てないくらいの激痛が襲った。

「ぐあつ……!」

だが、姉ちゃんだけでも生かしたい。そう思った俺は自分を犠牲にした。

「姉ちゃんだけでも逃げる!」

それに対して姉ちゃんも必死に反論する。

「嫌よ!翔も一緒に逃げるの!」

「彩菜!!」

初めて姉の名前の呼んだ。

「彩菜は俺の希望だ。俺の分まで生きてもらわないと困る。

ありがとう、世界でたったひとりのお姉ちゃん」

そう言っただけ俺は彩菜を下の階へ落とした。幸いここは2階で下に池がある。

「翔!嫌よ!死なないで!翔!翔!」

だんだん姉の声が遠くなっていき俺は死を覚悟した。

「さあ、殺せよ」

そう言っただけ目をつぶった。

ああ……もう少しだけこの世界で生きてたかったな

そう思っただけ 急に死にたくないと思っってしまった。

だが、その刹那、俺の胸を撃ち抜かれた。

俺の意識は朦朧としやがて意識が無くなった。

この世界の椎名翔は死んだのだ。

目が覚めると、何も無い……いや、目玉が無数にある空間の中に俺は立たされていた。目玉が俺の方を見ているようで気味が悪い。

なんで生きてるんだ？

そんな疑問が俺の頭の中をグルグルと彷徨っている。すると、正面に突然、美人な女性が現れた。

「はじめまして、私の名前は八雲紫。妖怪よ」

「は、はあ、よろしくお願ひします……はあ？妖怪？」

そう、この女性は人間ではない、妖怪？そんな昔話みたいなことがあるのか？

しかし、今はそれどころじゃない。

「あなたは1度死んだわ、でも自分の中で「生きたい」という気持ち、生きることの未練が強すぎてね。

転生、という形であなたは生き返ったわ」

「じゃあまたあの世界に戻れるんですか?!」

大いに期待してたがその期待は砕かれた

「戻れないわ」

「え?…」

「あちらの世界でもう椎名翔という存在は死んだことになってる、戻ることは出来ないわ」

「そんな…:じゃあ俺はどの世界で生きればいいんですか?!」

「妖怪や神、人間が住まう世界、幻想郷よ」

「げん…:そう…:きよう…:」

「そしてあなたはもう人間じゃない、生きたいという気持ちが強すぎて死なない身体になっちゃったわ。

あなたは妖怪になったのよ」

「マジかよ…:…:」

姉に会えないのは寂しいがせっかく貰った二度目の命を無駄にしたくない

そう思った俺は幻想郷に行くことを決意した。

「紫さん、俺を幻想郷に連れて行ってください」

「わかったわ、あ、そうそう幻想郷には様々な「能力」

を持った者達がいるわ、それを「程度の能力」と呼んでいるわ、ちなみにあなたの能

力だけど……」

「え、俺にもあるんですか？」

「ええ……驚いたわ、あなた二つ能力あるわよ」

「マジですか?!」

やった!

でもこーゆう展開ってしよぼそうな能力な気がする……

「二つは「七つの剣を操る程度の能力」

もう一つは「あらゆるものを融合、分解できる程度の能力」

………なんかやべえなそれ……

「えー説明すると 七つの剣というのは「妖刀 ムラサメ」

「神刀 神威」「霊刀 カグツチ」「聖剣エクスカリバー」

「氷炎剣 エターナルリベリオン」「風剣ミストルティン」

「神劍 フェザーソード」この七つの劍を操ることが出来る」
名前が中二くせえ……

「もう一つは簡単ね、様々なものを融合 分解出来ること

いつかなれるでしょ 頑張ってね

それじゃ移動するわよ」

「えっ？ちよつ…早い！ ちよつと待ってくだ……」

ああああああ……」

人生で一回も体験したことのない浮遊感と共に俺は幻想郷とやらの降り立った。

こうして、俺の幻想郷での恋物語が幕を開ける。

誇り高き吸血鬼の恋

王家の君へ

1 話

紅魔館へ

「あなた、誰？」

「!？」

驚いて後ろを振り向くと金髪の女の子が立っていた、

ちよつと長めの髪の毛で後ろに生えているのは…羽？

なんか綺麗なライトを吊るしてるみたいだった。

「お兄さん、私と遊んでよ…」

俺は一瞬で理解出来た。

この子可愛い

「あ、ああ、遊んであげるよ」

「ありがとうお兄さん！私フランドールって言うの！フランドールって呼んで！よろしくね
！」

パツと明るい笑顔になりフランドールは羽をパタパタさせていた。

「俺は椎名翔 まだ幻想郷に来たばかりなんだ」

「そうなんだ！早く遊ぼう！簡単に壊れないでね！」

俺の話には耳も傾けねえなこの子……………ん？壊す？

「フラン…………あのー、壊すってどういう…………」

俺が続きを言おうとした途端、フランの周りに魔法陣が展開された。

その魔法陣から大量の弾幕が射出された。

「おいおいマジかよ…………」

「私を楽しませてねー！翔ー！」

そういつたフランは容赦なしに弾幕を俺にぶち込んできた。

「うおわあ?!」

我ながら情けない声出してしまった…………

「きゃハハハハハハ♪翔変な声出しててるー！」

やべえ超恥ずかしい！今すぐ顔を覆いたい！

そうは言っても俺の周りには弾幕が広がっているので回避しなくてはいけない

「……………使ってみるか」

俺がそういつた途端、散らばっていた弾幕が集まり、一つの大きな弾幕となってフラ

ンの方へ向かっていく。

「!?」

フランも驚いていた。だがすぐに表情を戻し何かの詠唱を始めた

「禁忌「レーヴァテイン」！」

刹那、フランの手に焰を纏った巨剣が現れ、弾幕を一刀両断にした。

「すげえ……」

「翔！何をしたの？」

「フランの弾幕を一つの弾幕に融合させたただだよ」

「……それが翔の能力？」

訝しげに聞いてきた。なんか怖い。

「そうだよ」

「すごお〜い！☆ そんな能力持つてるんだね！」

ピョンピョンとはねて目をキラキラさせながら俺を見ている。

すっげえ可愛

い　だが俺はあいにくロリコンではない。

「私、翔のこと気に入った！紅魔館に来てよ！住むところないでしょ？」

「あ、ああ、確かにないけど……いいの？」

「いいよ！むしろ来て！とゆるーか住んで！」

「まあ、寝床ないし、お願いしようかな」

「分かった！　じゃあ改めて……私はフランドール・スカーレット、紅魔館の主、レミリア・スカーレットの妹だよ☆ちなみに私の能力は「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」だよ！」

「フランって妹なのな

俺は椎名翔、姉がいるけどこの世界には来ていない。

能力は「七つの剣を操る程度の能力」「あらゆるものを融合　分解する程度の能力」だよ。よろしくね」

「うん！　よろしくね！　じゃあ紅魔館に行こうか……」

あー……翔ってさ、飛べる？」

「飛ぶ?!　俺飛べんのか?!」

「うーんと……翔の種族は？」

一瞬忘れていたが紫さんの言っていたことを思い出した。

「妖怪だったけかな？」

「じゃあ飛べるね！　練習しよっか☆」

30分程で飛べるようになった。

飛んでる途中に思ったんだが、幼女の住んでるところに泊めて貰えるってなんか俺惨

めだな……

紅魔館に着いた。

日本じゃまず見たことない、どんだけデケエんだよ……

東京ドーム10個は入るんじゃないか？ そう思うほどだった。

するとフランが

「たっだいま〜！ 帰ったよお姉様☆」

「おかえりなさいフラン、それと翔」

「はあ、ただいまです。……え？」

見知らぬ少女、フランの姉に教えてもない俺の名を呼ばれた。俺は動揺を隠せない
い

「なんて顔してるのよ。私の名前はレミリア・スカーレット フランの姉よ、あなたがここに
こに来ることは分かっていたわ。よろしくね」

そう言いながら俺の前でスカートと裾を持ち淑女にありがちな挨拶をした。

「あ、はい、よろしくお願ひします。」

フランとは打って変わって落ち着いた人だった。

「あの、レミリアさんはどんな能力何ですか？」

「レミリアでいいわよ、私は「運命を操る程度の能力」よ」

なんかレミリアのイメージにあってるな…

「咲夜」

急にレミリアがこの場にいない人物の名前を出した。

「咲夜さんいないけど……」

するといつの間にかレミリアの隣に銀髪のメイドが立っていた。

「お呼びでしょうかお嬢様」

「うおわあ?!」

またこの声出してしまった……

「ププツ、なんて声出してるのよ」

レミリアに笑われた

「そんなに驚かれると少々落ち込みます……」

咲夜さんが少し俯いて言った。

「仕方ないわよ咲夜。急に出てくるもの」

翔に晩御飯を用意してあげて」

「かしこまりました」

そう言つて咲夜さんはまた消え、どこかへ行つてしまった。

「ごめんなさいね、咲夜は「時を操る程度の能力」で時を止めてるのよ」

「ああ、なるほど。じゃああれは瞬間移動じゃないのか」

なんか今の数分でどっと疲れた。

「じゃあご飯ができる前に私の友人を紹介するわね」

そう言つてレミリアは廊下を歩き始めた。

「なあレミリア」

「なあに？」

「幻想郷に男はいるのか？」

「ほほいないに等しいわね」

「ええー…」

そんなやり取りをしていたら

「着いたわ」

ガチャッとドアを開けるとそこには軽く100万冊は超えてるだろう、本棚が無数にあつた。

「なんだこれ？」

「見ての通り図書館よ、パチエー？いないのー？」

「いるわよ」

奥の机の方から紫色の服を身にまとつた少女が出てきた。

「ほら、新しい住居人よ」

「男なのね…よろしく、私はパチュリー・ノーレッジ。
パチュリーって呼んでね」

「俺は椎名翔 よろしく」

そして紅魔館全員での食事が始まった。

紅美鈴や小悪魔など様々な人と関わった。

食事というより宴になってしまい、夜中までどんちゃん騒ぎで自分の部屋で爆睡して
しまった。

そして次の日の朝、ここから俺の物語が始まる。

2 話

従者となった俺

「翔、私と弾幕ごっこしない？」

俺が紅魔館に来て2日めのお昼ごろレミリアとバルコニーでお茶をしていた時。唐突にレミリアが俺に言ってきた。

「え？レミリア戦えるんだ」

そう言つて咲夜さんが入れてくれた紅茶を啜つた。

……………うめえ。(梅ではない)

その言葉がレミリアの反感を買つた。

「私が戦えないと思つていたのね　へえ……」

レミリアの後ろにただならぬオーラが……

やべえ怒らせちまつた……

「お、落ち着け！別にお前を貶したわけじゃない」

「言い訳無用！外に出なさい！」

レミリアつてスイッチ入ると中々終わらないタイプだな

その時俺は思った。

外に出るとレミリアが立っていた。

「ねえ翔！この勝負、何か賭けましょう！私が勝ったら……私の従者になりなさい！」
「はあ?!俺そーゆうの出来ないんだけど……」

「咲夜に教えてもらいなさい！」

何て横暴な……

「ええー……じゃ俺が勝ったら……その賭けパーにすることで」

俺は特にやって欲しいことがなかった。

（俺が紅魔館の主になりたいと言ったら殺されそうだしな……）

「わかったわ……じゃあはじめましょう！」

フラン戦同様、魔法陣を展開した。その中からフランの弾幕より数が多い弾幕が俺に向かってきた。

俺は右手に妖刀ムラサメを持ち、左手に神刀神威を持って

レミリアの弾幕を全て切り裂いた。

「凄い剣術ね……勝てるかしら?……」

「まだまだ行けるぜ、そんな弱気でいいのかよお嬢様！」

「紅符「スカーレットマイスタ」！」

「?!」

目の前に密度の高い弾幕が張られ、俺は逃げ場を失った。

だが、俺は昨日の夜、起きてすぐに自分の「あれ」を作った。

「金符「スターダストリベリオン」！」

そう、自分のスペルカードだ。

このスペルは剣に妖気を宿し、攻撃範囲を広げる技だ。

これによりスカレットマイスタの弾幕は消し飛んだ。

レミリアは次々とスペルカードを使うがスターダストリベリオンの前では無意味だった。軽々と剣で弾き返せた。

スペルの合間を狙いチャンスを見計らった。

すると、レミリアが疲れて肩を落とした。

「チャンス！」

そう叫んでレミリアに切りかかろうとするが…

「うっ…うっ」

え…ええ？

レミリアが泣いていた…

「うー…」

「ごめんな、お前の弾幕弾き返しまくっちゃって」

何言ってるんだ俺は

「引つかかった☆」

え？

レミリアがそういった途端、背後から大量の弾幕が俺に向かってきた。流石に避けきれず、全弾当たってしまった

「うおわあああああああ」

「女の涙には気をつける事ね♪」

「レミリア卑怯だぞ！もつと正々堂々と……」

「正々堂々と戦ったつもりよ？」

すごいドヤ顔で言ってきた、すごいムカつく。

「私の勝ちね、あなたは今日から私の従者よ」

「分かりましたお嬢様」

なんか凄い複雑、出会って24時間もたっていないのに

「あなたには特別にレミリアお嬢様と呼ばせてあげる♪」

「はい、レミリアお嬢様……」

俺らが何気ない会話をしている時、もう「それ」の計画ははじまっていた……

俺はレミリアの従者、言わば執事になった訳だが

何をすればいいのやら……

夕方4時半頃 レミリアが俺を尋ねてきた。

「翔、紅茶を淹れてちょうだい」

「かしこまりました、レミリアお嬢様」

よし、だんだん板についてきたんじゃないか？

まだ数時間しかやってないけど……

「お待たせいたしましたレミリアお嬢様、紅茶でございます。」

「……………すごいわね翔、あなた紅茶淹れるの上手なのね。見直したわ」

「ええ、あちらの世界で家事全般はこなしていました」

そう言つてあつちの世界のことを思い出した。

やっぱり姉ちゃんが恋しいな……

「翔——あーそぼ！」

フランがレミリアの部屋に飛び込んできた。

「かしこまりました、妹様、レミリアお嬢様のティータイムですのでお静かに♪」

「は——い！」

こんな毎日を過ごして1ヶ月

悲劇は唐突にやって来る。

3 話

悲劇は唐突に……

いつからだろう

いつの間にか彼、椎名翔を目で追うようになっていた。

翔とたくさん話してたくさん笑いたいと思っていた。

「翔く、紅茶淹れてちょうだい」

「かしこまりました、レミリアお嬢様」

私はしばらくぼーっと彼を見つめていた。

「どうかさされましたか？」

慌てて彼を見ていることに気づき、顔を真っ赤にして手で覆う。

「なっ、何でもないわ！早く紅茶淹れてちょうだい」

「はあ、分かりました」

はあ、何でこんなに鼓動が速くなるのだろう。

彼と話す、目が合うだけでものすごく緊張してしまう。

これが恋ってものなのかな？

私のこの時初めて恋というものを知った。

そんなある日、私と翔とフランでお話していた時だった。

「翔っていろんな剣出せるの〜?」

「色んなって程じゃないですよ、七本は出せます」

「へえー! 見せて見せて☆」

「かしこまりました」

そんな何気ないフランと翔の会話を聞いていたその刹那。

私は聞いたことのない大音量の音が幻想郷中に響いた。

パアアアアン……………

「な、何よ?」

全く理解できない、チルノたちのイタズラか? それとも…

私は翔の顔が目に入った。

「し、翔？…どうしたの？」

翔の顔は真つ青で冷や汗もかいていた。
まるでトラウマが蘇ったかのように…

俺はもう二度と聞きたくない音をこの幻想郷で聞いてしまった。

そう、俺を殺した
テロが幻想郷に入り込み、幻想郷支配を目論んでいたの
だ。

俺は動揺、恐怖を隠せない程パニックに陥っていた。

「マジかよ……」

だがその焦りをレミリアが消し飛ばした。

「翔！…あいつらは何なの?!」

レミリアも動揺しているみたいだった。

俺は従者ということのを忘れ、敬語で話していなかった。

「あいつらはあつちの世界の住民だ……そして俺はあいつらに殺された。かなりの数だ……10000はいる。」

また俺はあいつらにやられるのか？ そう思った。

「大丈夫よ！ 翔は強くなつた！ それに私たちがいるでしょ？」

レミリアが飛び切りの笑顔で俺を落ち着かせてくれた。

本当に優しいやつだな……

「そっだな！ 行こう！」

俺はその言葉で火がついた。俺と姉ちゃんを離れ離れにしたヤツらを痛い目に遭

わせてやる。

「霊夢たちももう気づいて行動に出ていると思う。だからこつちも動くぞ」

「あいつらが翔を殺したの？……許せない」

俺の隣でフランがゆらゆらとしたオーラをまといながら今まで見たことないくらいの殺気を放っていた。

やっぱり可愛いけど怖い

「さあ、行きましょう！」

レミリアの号令とともに咲夜や、小悪魔が集まってきた。

俺以外の全員が魔法陣を展開し、テロに向けて弾幕を放った。

弾幕は普通の人間にも効くらしく、2割が弾幕によって吹っ飛んだ。

俺は右手にエターナルリベリオン、左手に風剣ミストルティンを持ち、ものすごいスピードで切りかかった。

「……………速い……」

レミリアが感嘆の声を上げた。

「業符「インフェルノレーザー」！」

エターナルリベリオンの先端から業火のレーザーが発射され、残りの人間を焼き払った。

「嘘でしょ？800人を数秒で倒すなんて……」

次はフランが驚きの声を上げた

俺は振り返り、レミリア達に言った。

「ここにいたヤツら以外にも沢山いる！」

人里に向かうぞ！」

そうして全員で人里に向かった。

そこは酷い有様だった。

人々の断末魔の叫びが聞こえ、壁や地面は血の色で染まっていた。
全員が目を逸らした。

「こんなの…酷すぎるよ…」

フランが膝をついて泣きながら言った。

俺は今まで経験したことの無い

怒り、悲しみ、殺意を味わった。

「全員、ぶっ殺してやる…」

俺の声が人里の空気とともに消えていった。

私はその景色を眺めることしか出来なかった。

人里の血塗られた景色を。

すると私は妖怪の山の方面に一つの建物が建っていたことに気づいた。

「ねえ咲夜、あんな建物、幻想郷にあつたかしら？」

「いえ……見覚えありませんね……」

すると翔が口を開いた。

「行ってみよう。何かわかるかもしれない」

そうして私達はその建物に向かった。

意外とあっさりと内部に入れた。

そこはまだ幻想郷にはない技術で作られた近未来の建物だった。

「驚いたわね……こんな建物があるなんて」

私はそう言つて翔を見た。

翔は驚いた顔をしていた。

4話

最悪な再会

俺はその建物の紋章を見てこの上ないくらい驚いた。

「攻め込んできたのは……テロじゃなくて……軍？」

そう、日本の陸上自衛軍の紋章だった。

通りで数も多いし、戦闘にも慣れていたわけだ。

「じゃあ何で幻想郷なんかに攻めてきたんだ？」

謎は募るばかりでどんどん悩ませてくる。

「建物内のやつはほぼ倒したよ」

……どうやらフランが1人で片付けてくれたらしい

「多分、この騒動のトップもここにいます。探し出すぞ」

これほどの虐殺を行ったんだ。罰はしっかり受けてもらう。

この建物の最上階、そこに幹部らしきものが2人、その中心に長らしきものが座っていた。

部屋と言うよりホールと言った方がいくらい広かった。

だが、驚くのはそこじゃない。

「え……姉……ちゃん？」

そう、そこに座っていたのは忘れるはずもない、俺の姉 椎名彩菜がいた。

「久しぶりだね、翔、あんたのお陰で私はここまで上り詰めたよ」

「何で……どうしているんだよ姉ちゃん……！」

俺はそこに姉がいることに動揺を隠せない。

「あなたを殺したテロは全員その場で処刑したわ、それであなたがここ、幻想郷に連れていかれたことを知ってね。」

あの妖怪の賢者とやらに尋問したら中々吐いてくれなくて…

仕方ないから、博麗の巫女を殺すと言ったらすぐ吐いたのよ、あなたの居場所をね」

「そんな……俺は……俺はっ……連れていかれた訳じゃない！」

姉の今の顔を見れば分かる。

俺と一緒に過ごしてきた顔じゃない、別人だ。

「嘘……あの人が翔のお姉さんなの？……だって……あの人は……」

レミリアが目を見開いて

「幻想郷と月の両方を統一した張本人　災厄の主、エリナ・カーティス……何しに来たのよ？」

レミリアが冷や汗をかきながら彩菜もとい、災厄の主エリナに聞いた。

「あら？あつさりばれちゃったか　んーとね、翔の奪還とー、もう1度この世界で謳歌しようかなって思ったただだよ？」

エリナはニヤニヤしながらレミリアに言った。か

「何だよ……それ……そんなこと黙ってたのかよ……」

何で……何で罪のない人を殺した?!

俺は激昂した。もう目の前の奴は姉じゃない。敵だ。

「だって私が人里で「今から幻想郷を支配しまあゝす☆」って言ったら猛反発したから仕方なく……ね？」

「そんな……許さない、全部壊してやる！」

フランがエリナにレーヴァテインで切りかかろうとしたが隣の幹部ふたりが止めた。

「どいて!! 翔を傷つけたあいつは絶対に許さない！」

フランは大声で叫んだ。

「この場面でどけって言われてどく奴いないでしょ……」

幹部が言った。

「翔以外のやつは殺していいよ」

エリナは軽々と言った。 幹部ふたりがレミリアの方へ歩き出した。 すると

レミリアが

「こいつらは任せて! あなたはあいつとケリをつけてらっしゃい!」

「ああ! ありがとうレミリア!」

俺はエリナの方に体を反転させ、思いつ切り睨んだ。

「きやく怖い、あ、そうそう、あなたにも名前があるのよ。椎名翔は私が敵から身を守る

のためにつけた偽名よ。

あなたの本名はロミア・カーティス 私弟よ。

さあ、私の元へ来なさい」

エリナが両手を広げて俺を呼び込んだ。

我が姉ながら美しい容姿だった。

「断る」

俺は即答だった。

「俺はあんたを許さない。人里に友達もいたのにあんたの部下に殺されていた。」

それに……お前、俺と本当の姉弟じゃないだろ」

俺はそれを分かっていた。

なぜなら……

「そのロミア・カーティスだっけか？その名前と幻想郷の歴史を融合させてみた。ロミア・カーティスはお前がこの世界を統一していた時に一緒に過ごした、お前の兄だ」

エリナの表情が一瞬変わった。

だが、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「洞察力が強くなったわね？翔。お姉ちゃん嬉しいよ♪」

「そうか……それでもまだ俺のことを姉弟と思ってるのか……」

「じゃあこれが俺の弟としての最初で最後のわがままで。」

俺と戦おう、どちらかが死ぬまでな」

俺はなぜか全く恐れなかった。

この1ヶ月間で俺はレミリア達と仲良くなりすぎていたらしい。この世界を離れたくない。紅魔館にずっといたい。その想いが俺の心に満ち溢れていた。

俺って結構 未練がましいのかもな……

「分かったわ……じゃあ行くわよ」

俺とエリナの周りに結界が張られた。

「私とあなた以外は入ることが出来ないわ。ここで思う存分遊びましょ?」

エリナの表情が変わった。

刹那、ものすごいスピードで俺の横を「何か」が通り過ぎた。

前を見るとそこにエリナはいなかった。頬と二の腕に傷がついた。

「おいおい……嘘だろ……?」

「そう言えば自己紹介がまだだったわね?」

俺の背後でエリナが喋った。

俺は即座に後ろへ飛んだ。

「私の名前は エリナ・カーティス

かつてこの幻想郷を支配した張本人

いわね

今じゃ“災厄の主”何て呼ばれてるらし

能力は「龍を操る程度の能力」よ

翔が言った通り、私には兄がいてあなたはその兄の息子よ」

「なっ……?!」

エリナと俺は血は繋がっているとは思っていたがそんな近くにいたとは思わなかった。

「だからあなたも災厄の一族の末裔よ」

「違う!!」

喉が張り裂けるほど大声で叫んだ。

「確かに俺はあんた達の末裔かもしれないけど俺は……………」

レミリア達の家族だ!!カーティス家のことなんか知らない!」

と、ただ俺は思うことをがむしやりに叫んだ。

今、なんて言った？

翔の口から一度も聞いたことがない言葉を聞いた。

私と翔が家族？……………

嬉しい…翔がそんなに私たちを想ってくれてたんだ。……………

「よそ見しない方がいいよ……………」

幹部のひとり180cmほどの女性が刀を振り下ろした。

「おっと…………美鈴！暎夜！そっちは任せたわよ！」

もう1人の幹部を大切な部下2人に任せ

「戦闘の前に、私は シエリカ・レンブルク。

エリナ・カーティス様に忠誠を誓った者です。」

「スカーレット家長女、レミアア・スカーレットよ

それでこっちが妹の……………」

「スカーレット家次女、フランドール・スカーレットだよ」

自己紹介を終えた後……………

「では、参ります！」

シエリカが戦闘の体制に入った。

「行くわよ！フラン！」

「行きましょう！お姉様！」

スカレット姉妹2人の魔方陣が展開された。

「紅符」「スカレットシユート」！

「禁忌」「クランベリートラップ」！

私たちの弾幕がシエリカに一直線に向かった

「狼剣斬！」

シエリカは刀を横に振り、私たちの弾幕を切った。

「これは……中々手強そうね……」

見た感じ翔と並ぶくらいの剣術の持ち主だ。

「風楼！」

シエリカが刀を振り下ろした。

すると風の刃が私の肩とフランの足を深く抉った。

「くっ……」

「あっ……」

私たち2人は膝をついた、このままじゃ……やばい、そう思った途端私の腹とフランの胸元から赤い鮮血が飛び散った。

「がはっ……フ、フラン……」

「ぐあっ……お姉……様」

一瞬私は目を閉じかけた。

だがその瞬間、翔やフラン、大切な人の顔が脳裏をよぎった。

ああ……これが走

馬灯つて奴なのかな……………

……………いや、死にたくない！また翔と笑っていたい！

その思いが私の潜在能力を駆り立てた。

それはフランも同じらしい。

「フラン！まだ戦えるわね?!」

「大丈夫……………だよ。まだ戦える!!」

そんな私たちを見てシエリカは驚きの声を上げていた。

「すごい……………これが吸血鬼の力……」

「神槍「スピア・ザ・グングニル」！」

「禁忌「レーヴァテイン」！」

私の槍とフランの剣が混ざりあった。

「そんな……………こんな技……見たことない」

シエリカはただ呆然と見ていた。

「行くわよ！フラン！」

「うん！」

「合技「グングニルティン」！」

刹那、シエリカ目がけて巨大な剣槍が飛んできた。

「神波！」

シエリカはそれに対抗しようと巨大な刀を作り上げグングニルティンに切りかかった。

だが威力が桁違いだった。グングニルティンがそのまま刀ごとシエリカを貫いた。

「か、…勝った……」

私たち2人とももう満身創痍だ。

足すら動かない

「勝ったね…お姉様……」

どうやら美鈴と咲夜も勝利したらしい。

「後は頼んだわよ……翔」

私は目の前の結界で戦っている想い人の勝利をただ祈っていた。

5 話

決着

どうやらスカーレット姉妹の戦闘は終わったらしい。

「さあ、はじめようか。」

俺の人生最大の戦いが始まった。

最初、右手に霊刀カグツチ、左手に神剣フェザーソードを持ち

エリナ目がけて波動砲を放った。

だが、そんな簡単に当たってくれる訳では無いようだ。

「そんなもんなの？ お姉ちゃんとしてはもう少し強いものが欲しいな」と、波動砲を片手で受け止めた。

するともう片方の手から赤黒い雷を纏った

レーザーが出てきた。

「龍符「ドラゴンクラスター」！」

エリナの手から細いレーザーが俺の脇腹を貫いた。

「ぐっ……痛つてえ……」

「まだまだ行くわよ」 獄符「永遠の聖火」！」

無数の真つ赤な弾幕が飛んできた。

それを俺は両手の剣で全て切り落とした。

「へえー！すごいスピードだね〜」

「こんなもんじゃねえぞ、「氷炎インフェルノ・レイス」！」

俺の剣の刀身が右は赤色、左は水色に染まり、高速でエリナの全身を切り裂いた。

周りにエリナの鮮血が飛び散った。

そのまま床に倒れ込んだ。

「やつ……やつたか？」

その油断が仇となった。

俺が立っていた床から龍が生えてきて俺の背中を貫き、

続いて壁から出てきた無数の剣が俺の胸から腰までの上半身を串刺しにした。

「かはっ………な、なんだこれ……」

前を向くとエリナが俺のフェザーソードを持ち、俺の腹に刺してきた。

よく見ると姉の碧色の目から片目のみ真つ赤に染まっていた

「これがカーティス家に残る、能力よ。

私の場合は「創造」ね。

そんなことより、あなたより先にあの子達を殺すことにしたの。あなたはここで痛みを耐えながらあの吸血鬼が殺されるのを見ていなさい。」

エリナの顔は笑っていないかった。

多分、即死させるつもりだ。

「や、…やめろ……」

「キャハハ♪あなたが悪いのよ？素直に私に

付いてこればこんなことにはならなかったのに」

レミリア達は戦おうとしたが体が思うように動かず、その場でもがいていた。

エリナはカグツチを拾い、レミリアとフランのところへ歩いていった。

「い……いや……」

「やめて!!」

レミリアとフランが声を荒らげる。

「誇り高き吸血鬼が……無様ね……」

「翔。見ていなさい、大事な人が殺されていく様を」

そう言つてエリナはカグツチを振り上げた。

俺は………大事な人を失うのか？

また俺は大切な人と別れるのか？

嫌だ……俺は絶対に紅魔館の奴らを死なせたくない！

ましてや俺のせいで悲しい思いをして欲しくない！

その時、俺の頭の中で1人の声が聞こえた。

そこには何も無い、そして俺は水面の上に立っていた。

「やっ………気づいてくれた」

「お前は………誰だ？」

「君の中に眠るカーティス家の能力さ」

君はもう能力が宿っているよ」

「え？………」

慌てて、水面を見ると茶色い両目ではなく、左目のみ蒼色に光っていた。

「さあ、その能力で敵を圧倒しろ。」

自分の思いをぶつけろ」

そう言って消えた。

そうして現実に戻った。

「やめろおおおおおおお!!」

俺がそう叫ぶと夢の中と同じように左目が蒼色に光った。

すると俺に刺さっていた剣が消え

レミリア達の傷も全て消えた。

どうやら俺の能力は「全体回復」らしいが自分自身の傷は癒えないらしい。

後、回復する人物も指定できるらしく、エリナだけは傷だらけのままだ。

「なんでこんなタイミングでっ……………」

エリナは動揺していた。

「さあ、最終ラウンドだ。はじめようぜお姉ちゃん

姉弟の対決ってやつを……………」

俺の周りに七つの剣が出現した。

「くっ……災符「災厄の隕石」！」

エリナがそう言うと、直径2mの業火に燃えた隕石が100程落ちてきた。だが、それを俺は七つの剣を駆使して全てを斬った。

「これで終わりだ。」

虹符「永遠の幻想郷」

俺が静かにそう言うと七つの剣がいた一つの剣に融合して、剣先から七色のビームが発射された。

「私の負けね……」

エリナが悲しそうな微笑みで言った。

その刹那エリナの真上からビームが降り注いだ。

俺はエリナ、姉を倒したと実感するとなぜか

姉の元に駆け寄って倒れている姉、彩菜を抱えた。

「……………翔……………成長したんだね……知らないうちに逞しくなっちゃって……………」

「ああ……姉ちゃんがないから悲しかったけど……」

俺……………頑張ったよ……………」

俺の目元から大量の涙が出てきた。

その涙を彩菜が指で拭う。

「私の能力を……………継承して……」

姉がそう言うのと赤色の目が俺に移った。

「これが……………お姉ちゃんの最後の愛……………だよ」

「ありがとう……………」

さらに涙が溢れてきて……………

「ありがとう……………さようなら……………たった一人の家族……………」

彩菜がそう言うのと周りに金色の光が舞っていた。

「ありがとう……………世界でたった一人のお姉ちゃん……………」

俺がそう言うのと姉は笑顔で消えていった。

(愛しているよ)

最後に姉がそう言っている気がした。

6話

妹への嫉妬

エリナとの決着から3日後、陸上自衛軍は撤退、紫の手で日本に帰った。

軍の建物は勇儀さんがワンパンでぶち壊した。

その資源を殺されてしまった人たちの墓石として使っている。

俺は永遠亭で目が覚めた。

隣には鈴仙とレミリアが座っていた。

「俺、どれくらい寝てた？」

ふと、自分の身体を見ると 線を描いたような傷が無数にあつた。それは消えかけているから良いけど

エリナの龍が貫いた腹の傷は消えそうにないな…

「丸々3日ってところね。」

まだ無理はしないこと、あと5日はここで休んでもらいます。」

鈴仙が落ち着いた声で言った。

するとレミリアが

「はあ、あなたがこの騒動を解決したおかげで「翔は英雄だ！」って騒がれてるのよ？」

「英雄より英傑が良かったな……」

「どうでもいいわ。」

とにかく今は安静にしててね」

そう言うのとレミリアは部屋を出た。

「じゃあ私も席を外します。」

くれぐれも暴れたりしないように」

鈴仙が釘を刺し、その場を退室した。

「はあ、暇だな……」

そう言いながら 2 回目の眠りについた。

私は帰る途中に翔が言った言葉を思い出した。

「俺はレミリア達の家族だ！」か……その言葉が頭の中をグルグル回っている。

この騒動の期間 忘れていたが 私は翔が好き。

家族愛ではなく、異性として。

騒動の後片付けが終わると 翔が帰ってきた。

「ただいまー」

「あつ、おかえ…」

「おかえりなさい!!翔!」

私の言葉にかぶせるようにフランが大声を出して翔に抱きついた。

「こーら、翔はまだ傷が癒えてないのよ？」

そんな乱暴なことしちやダメよフラン」

こめかみをひくひくさせながらフランを叱った。

「そんなこと言つてく、ホントはお姉様もこうやって翔にギューツつてほしいんでしょ?」

「なっ?／＼／＼私はそんな乱暴なことしないわよ!／＼／＼」

やばい、完全に凶星だ。

「まあまあ2人とも、飯食ったら2人ともギューッってしてあげるから」

「わーい☆」

「なんで私までやられるのよ!?! // //」

「だ、ダメか?」

「ダメに決まってるでしょ! // //」

「さ、ご飯食べるわよ!」

「はーい」

翔は少しだけしよんぼりしていた。

ちよつと可愛いかも……………

ご飯を食べ終わったあと

お風呂に入ろうとしたら

「ねえ翔! お兄様って呼んでいい? ☆」

「俺弟だけどな…いいよ」

「やったー☆ ねえお兄様、一緒にお風呂入る?」

「だ、だめに決まってるんだろ?! お前も年頃の女の子なんだから、少しは警戒しろ // //」

「冗談だよ☆照れたお兄様かーわい♪」

……

： 羨ましい、羨ましすぎる。

どうしてフランは恥ずかじげもなくあんなこと言えるのだろうか
やっぱりもつと素直になるべきなのかな？

廊下にもストンと座って考えていたが

どうやらすぐに廊下で眠ってしまったらしい

「んんっん……」

朝だ。

今日は少しだけ冷えるな。

私はベットから降りて顔を洗いに行った。

顔を濡らしたあと私はある異変に気づいた。

「あれ？私昨日ベットで寝てたっけ？」

それを即座に確認しに寝癖も直さずに咲夜の元へ走った。

咲夜はもう朝食の準備のため、厨房にいた。

「ねえ咲夜？昨日私をベットへ運んでくれたのって貴方？」

すると咲夜は

「いえ？私は気づきませんでしたでしたが確か翔が「レミリアのヤツどんなところで寝てるん

だよ……」って私に言ってきましたが……」

と、言うことは……翔が私を運んでくれたの？

突如、私の顔中が熱くなるのを感じた。多分、真っ赤になっているのだろう。

「あの、お嬢さ……」

咲夜が言い終える前に私は翔の元へ走り去ってしまったていた。

「寝癖が酷かったから直そうと思ったのに……」

「あと、お嬢様 下履いてなかったよね？……まあ翔なら大丈夫かな？」

咲夜はそう言っただけで朝食の準備を始めた。

「翔!!」

「うお?!」

翔の部屋のドアをノックもせずには開け、翔の名前を呼んだ。

「あなた、昨日、私をベッドへ運んでくれた？」

「あ、ああ……」

私はその確認がしたかった。

だが重要なのはそこじゃない。

「どうやって私を運んだ?!」

「え、おぶった」

「え、お姫様抱っこじゃなくて?」

「おぶった方が運びやすかった」

「そ、そう。ありがとうね」

ちよつと期待してたけど……

まあ、おんぶも嬉しい

すると翔が

「なあレミリア」

「ん?なあに?」

「お前それ寝間着だろ?それにすごい寝癖だし、

それに……せめて何か履け パンツ丸見えだぞ?」

「え?……きやああああああ!!」

私は顔を真っ赤にして

今日一番の全速力で部屋に戻った。

朝食。

「なあレミリア悪かったって」

「何よ？ 変態」

100%私が悪いのに私がツンツンしてしまっている。

「変態って…」

俺も悪かったけど

俺っていう男が紅魔館にいるんだから少しは注意しような？」

「まあ今回は私も悪かったわね。80%あなたが悪いけど」

……どこまでも素直じゃないな私。

それから2ヶ月

翔に色々アプローチするがフランなどに邪魔されてまったく効果なし
思い切って咲夜に相談した。

「ねえ咲夜…どうすればいいと思う？」

「うーん…そうですね…」

一緒になつて考えてくれる咲夜は本当に頼もしい。

「もう思い切つて告白してはどうですか？」

もうすぐクリスマススイブですしちょうどいいですよ」

今日は12月20日、イブまであと4日か…

「そう…だね！ありがとう咲夜！」

そう言つて部屋をあとにした。

夕食を食べたあと私は部屋に籠つて告白の練習をしていた。

「私はあなたの事が好きです／＼／＼……………ちよつと固すぎるかな？」

私いくあなたの事が好きなんだよね☆……………無理無理無理無理！恥ずかし

くてできないっ／＼／＼！」

そうこうしているうちにクリスマススイブまであと1日になった。

7 話

告白の準備

俺が紅魔館に来て3ヶ月、俺には好きな人がいる。

紅魔館の主 レミリア・スカーレットだ。

だが想いは伝えていない。

12月21日、俺はレミリアと少しでも距離を縮めるために、行動に出た。

「なあレミリア 久しぶりに弾幕ごっこしないか？」

「あなた剣を使うし強いから嫌よ」

と、一刀両断された。

「じ、じゃあ剣使わないから。な？」

と、俺が言うと

レミリアが訝しげに俺を見てきて

「……………いいわよ（やったあ☆久しぶりに翔と弾幕ごっこができる！）」

そうして俺らは紅魔館の庭に出て、

「今度は泣いたりすんなよ！」

「まだ覚えてたのねあんた……………」

レミリアがそういうと

「紅符「スカーレットシユート」！」

「うおわあ?!お、おい!まだ始めてないだろ！」

「久しぶりにその声聞いたわ♪」

クスクスと笑っている。可愛い。

「じゃあ俺からも！」

いくら好きな人でも弾幕ごっこで手を抜くつもりは毛頭ない。

「撃符「ブリザードパラライザー」！」

俺がそう唱えるとレミリアは動けなくなった。

「なっ、何よこれ？」

「動きを封じるスペルだ。」

「本当は冷気も感じるんだが……まだ実験中だ。」

「はあ……分かったわ。私の負けね。」

「初めてレミリアに勝ったあゝ」

「まだ2回しかやったことないわよ？」

「嬉しいもんは嬉しいんだよ

もう疲れたから寝るわ」

そうやって俺は自分の部屋へ帰った。

俺はやっぱりレミリアあに想いを伝えたい。

好都合なことに明明後日はクリスマススイブだ。

その時に告白しよう。

そう思って俺は眠りについた。

12月22日

私はまた告白の練習をしていた。

「私、翔のこと好きなのよ、だから付き合いなさい。……………」

図々しいな……………」

わっ、私／／えっ、えっと／／し、翔のことが……………すっ、好き／／

……逆に恥ずかしいわ

告白の言葉を見つけないまま、レミリアは眠りについた。

そして翌朝、12月23日

今日は咲夜と博麗神社に行くんだったわね…

だが、朝食の時…

「申し訳ありませんお嬢様…今日外せない用事がありました…

私ではなく翔がついて行ってくれると言うので…本当に申し訳ありません…」

え？翔が来てくれるの？嬉しい！

「し、仕方ないわね。

咲夜はそっちの仕事に専念しなさい」

「はい、ありがとうございます」

そして朝8時、

「おいレミリアー

霊夢んところ行くぞー」

翔の棒読みな声が私の耳に届いた。

「分かったわ今行くー」

そうして翔が傘を持ち、私を日差しから守ってくれた。

このポジションはいつも咲夜だから少し緊張する！

とゆーかこれ相合傘みたいじゃない?!

と、変なことを思っているうちに博麗神社へ着いた。

「おーい霊夢〜」

翔が霊夢の名を呼ぶと

神社の奥から赤い巫女服を着た少女が出てきた。

霊夢だ

「何よー?」

寝起きなのか少しイライラしていた。

「明日のクリスマスマスパーティーの参加費を持ってきたわ」

「あく、はいはい、お茶淹れてあげるから上がりなさい」

そうして博麗神社の応接室で3人で会話をしていた。

と、その時、

「おおーい、英雄様ー!」

と、外の方で野太いおじさんの声があった。

「家の近くで妖怪が出たんだ。助けてくれい」

と霊夢ではなく翔にお願いしてきた。

「え、でも……」

と、言つて私の方を向いてきた。

多分私の帰りを心配してくれてるんだろう。

本当に優しい人だ。

「いいわよ、1人で帰れるわ」

と、了承した。

「なんで私じゃなくて翔なのよ……」

と、霊夢はガツクリとしていた。

「ごめんなレミリア、すぐ帰るから」

そう言つて翔は人里の方へ飛んでいった。

ぐぬぬ… もう少し翔と居たかったのに……

私がそう思っていると

霊夢が口を開いた。

「あんた、翔あいつのこと好きでしょ」

「は、はあ？／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

と、言つて抵抗したが

「素直になりなさいよ、好きなんでしょ？」

「……………うん／＼／」

「ふーん、まあ明日クリスマスパーティーだし、その時にでも告れば？」

「もとよりそのつもりよ…」

そう言ったら^{貧乏巫女}霊夢がニヤニヤしながらこつちを見てきた。

「な、何よ…」

「いや？レミリアちゃんも恋するんですなーと思つて♪」

「うるさいわね……………」

「まあ頑張りなさい♪応援するわよ」

「うん……………ありがとう」

そうして12月23日の午後を迎えた。

f i n a l s t o r y

クリスマススイブ

12月23日午後1時

咲夜は例の仕事でないため、翔が昼食を作ってくれた。

初めてだ…翔の料理は……

食べたことのない料理がたくさん出てきた。

怖かったが思い切って食べてみた。

「……………どうだ？」

「美味しい」

素直な感想だった。

「美味しい！なんて料理なの？」

「ああ、こればチャーハンと言ってな、そうか、幻想郷にチャーハンは無いか」

「お兄様お兄様☆この料理は何ていうの？」

続けてフランが質問した。

「それは唐揚げだな」

「フランでも作れるくらい簡単だよ」

「むく、お兄様今私のことバカにしたく」

「ははは、ごめんごめん」

そう言つてフランの頭を撫でた。

「えへへく☆もつと撫でて?♪」

そう言つて翔は笑顔でフランの頭を撫でていた。

私がそれを羨ましそうに見ていた。

それに気づいた翔は

「レミリアも撫でて欲しいのか?」

そう言つて私の頭も撫でた。

今は帽子をかぶつてないので翔の手の温もりが直に伝わってきた。

／／／／

「お、いつもみたいなのに抵抗しないな」

「うるさいわね……」

そうして昼食の時間が終わり、私はティータイムに入った。

フランは昼寝していて、バルコニーには私と翔のふたりきり
何度も経験した展開なのに今日だけは妙に緊張してしまう。

「ね、ねえ翔」

「ん？なんだ？」

私は翔の事について一番聞きたかったことを聞いた。

「あなたとお姉さん、彩葉って言ったわね。あなた達の関係ってどうなっているの？」
「そうだな…俺のお父さんの妹になるな。詳しく調べたんだが

俺らの一族は元々幻想郷の住民だったんだ。

その中でも俺らは吸血鬼の妖怪の王家だったんだ。

お前も知っているだろう？ エリナ・カーティスは吸血鬼の王で幻想郷と月を統一した災
厄の主だったこと。

当時はエリナと俺の父　ロミア・カーティスの2人で支配していたんだが　幻想郷
と月の協力により追い込まれた2人はついに捕まってしまったんだ

その時に瀕死だったロミアはその場で処刑され、妹のエリナとまだその時0歳だった
俺を外の世界に放ったんだ。」

「す、すごい話ね…」

私なんかよりずっと辛い過去を翔は持っていたことに驚いた。

「まだ続きがあつてな？」

エリナは昔から頭がよく、機転が効くため、仕事場と住む場所を1日で確保したんだ。そこで17年間ずっと姉と過ごしてきたんだ。

どうでもいい事で喧嘩したり、笑いあつたりして楽しく生活していたのに、全てではテロがぶち壊したんだ……

あいつらがいないければ姉ちゃんはあることをせずに済んだのに、それに人里の人達にも申し訳ないことをした……」

今にも泣きそうな顔で翔は俯いた。

私は何を思ったか即座に翔の手を握った。

「え……レミ……リア？」

私は今の話で思ったことを全てぶちまけた。

「確かにあなたが苦しい思いをしたのもわかつてる。

お姉さんや人里の人たちも気の毒だわ……

でも、あなたが幻想郷に来てくれて私は良かったと思つてる。あなたが話すのも楽しい、今じゃ翔は私達のかげがえの無い家族よ。あなたが幻想郷に来て色んな人や妖怪と関わられた。

そう思うとここに来てマイナスなことばかりじゃ無いでしょ？」

ハッ、と我に返ると私はギュツと翔の手を握っていることに気づき、顔を真っ赤にして謝罪した。

「ご、ごめんなさい／＼／＼…偉そうに語っちゃって」

「いや、ありがとう……レミリアのおかげで立ち直れるかもしれない」

そう言う翔の顔が少しだけ明るくなった。

「そ、そう、なら良かったわ」

寝るとき、私の手にはまだ翔の手の温もりが残っている。

初めて好きな手に触れることが出来た。

それが何よりも嬉しくて、1人でずっとにやにやしてしまっていた。

12月24日

今日は博麗神社でクリスマスパーティー、そして翔に告白する日だ。

「やばい／＼／＼朝から緊張する／＼／」

いや、だめだ。私は誇り高き吸血鬼、もっとお淑やかに行かねば。

そう言つて食堂に行くと、翔が私とフランが来るのを待つていた。

どうやらフランはまだ来ていないらしい

「おー、レミリア おはよ

今日はクリスマスイブだな♪」

やばい目を合わせられない！

昨日のことが脳裏によぎつた私は翔から目をそらしてしまった？

「？ どうしたんだ？」

「な、何でもないわ」

私は椅子にストンと座り

暫く黙つていた。

……………ああ！もう！気まずい！

そう思つた時だった

「おっはよー2人とも！今日はクリスマススイブだね☆」

フランが起床し 元気よく椅子に向かって言った。

「おはよーフラン」

「それじゃ食べましょうか」

そうして昼頃、今日のクリスマスパーティーは夜明けまであるということなので途中で寝ないように翔も咲夜も全員が昼寝を取っていた。

もちろん私もフランも昼寝をしていたんだが

私だけ3時に起きてしまった。

パーティーは7時から……まだまだね……

どーせ寝れないので翔の自室へ向かった。

ベッドには当然翔が寝息を立てながら寝ていた。

「ふふ、可愛い寝顔♪」

本当に可愛かった。いつも見る顔とは全くの別人、子供みたいだった。

その寝顔を見ていると私も眠くなり、翔のベッドで寝てしまった。

午後6時私は目を覚ますと同時に翔の目も覚めたらしい。

「え?」

そう、今展開的に私が翔に抱きついている形で添い寝していた。

「ちよ、ちよつとレミリアさん?／＼／＼」

「んー何ー?」

私は目をこすらせながら聞いた。

「どうしてお前がここにいるんだ？／＼／＼」
「えー？……………あつ／＼／＼」

我に返った私はすぐさま翔から離れた。

そして必死に言い訳（嘘）を探す

「ご、ごめんなさい／＼／＼あなたが少しうなされてたから心配でここに来て私も眠っちゃったの／＼／＼」

「そ、そうか／＼／＼ならいいんだけど」

「さ、早くしないとパーティー遅れるわよ！／＼／＼」

「急ぎましょ？／＼／＼」

「あ、ああ／＼／＼」

そうして私達は博麗神社へ着いた

パーティーが始まった

すると、魔理沙が音頭を取っていた。

「えー、僭越ながら私、霧雨魔理沙が乾杯の音頭を取らせていただきます。」

ドンドンパフパフくと、もう盛り上がってる鬼や霊夢たち、

いやあんたらおっさんかよ

「今年のクリスマスとついでに3ヶ月前の銃撃異変の解決を祝って

乾杯!!」

「乾杯!!!」

全員が笑顔で楽しそうに手に持っている酒の入ったコップを

空へ掲げた。

こうして博麗神社のクリスマスパーティーが始まった。

俺はと言うと……………

「あんた一人で異変の張本人を倒したんだってなく？すげえじゃくん」

と言いながらくつついてくる萃香と

「お兄様にくつつかないで！お兄様は私のものだよくだ

ヒック／／／／

萃香を払って俺にくつついてくるフランの2人の争いに巻き込まれていた。

いや酔いすぎだろ2人とも

一方、レミリアはというと

あつちの方で霊夢や魔理沙、紫さんなどに絡まれている。

どんな話してるんだろうな？

私は今、凄くめんどくさいことになってしまっている。

「お前翔のことが好きなんだってなー

魔理沙さんはその恋応援するぞー

ヒック／＼／＼

「ええ、いいと思うわよ、あの子誠実だし何よりカッコイイし、惚れるのも仕方ないわ」

「……………まさかとは思うけど、霊夢、このことばらしたわね？」

「ええー？何のことよー ヒック／／／」

うわ…酒臭……

本当に酔った時の勢いってものは嫌だわ。

そんなこんなで夜の11時50分

次は翔が霊夢たちに絡まれていた。

すると魔理沙が

「おおーい！あと20秒でクリスマスだぞ！」

「10！9！8！……」

クリスマスってこんな事しないでしょ……

「3！2！1！」

クリスマスだああああ！」

その瞬間、全員が盛り上がった。

12月25日 午前0時

私は意を決した。

「ねえ、翔。」

「ん？どうしたレミリアア？」

「今日の3時、神社の下に来てちょうだい。」

大事な話があるの／＼／＼

い、言えた……

「？おう、分かった」

「うん／＼／」

今日の3時、レミリアはその時に大事な話があると言っていた。

多分、今回の博麗神社のパーティーの参加費が全額俺負担だったことを謝ろうとしてくれるのかな？

でも、俺はその時に告白しよう。好都合だ。
そうして俺はまた宴の席に戻った。

12月15日午前3時

ついにこの時が来た。

緊張はしているけど後悔はしていない。

そうして私は深く深呼吸すると、階段から翔が降りてきた。

そして二人同時に深呼吸すると

「あのー！」

「あのー！」

見事にかぶった。

「あ、悪い…お前から言っていないぞ／＼／＼」

「あの、えっと／＼／＼その／＼／＼」

20秒間くらい黙ってしまった。
でも

もう心に決めたんだ！後悔はしたくない！

「私、翔のことが異性として、好き／／／

2ヶ月前からずっと……／／／

翔のことが大好き！」

恥ずかしくて目をつぶってしまった。

今翔がどんな顔しているのか分からない。

「！！／／／／／」

今度は10秒ほど間が空いてから

翔はようやく口を開いた。

「お、俺も、レミリアの事が好きだ！／／／／／

この世界の……いや、俺が生きてきた中で最高の想い人だ！／／／／／
だから／／／／／その……／／／／／」

翔が言葉を言い終える前に私は翔に抱きついた。

私はいつの間にか涙を流し、声を出して泣いていた。

「バカ／＼／＼／待たせ過ぎよ／＼／＼／」

「ごめんな…俺から言えばよかったな」

私は絶対にこの人と離れたくない

俺は絶対にこの人と離れたくない

私は翔に前みたいな思いをして欲しくない

俺はレミリアを前みたいな目に会わせたくない

だって……

だって……

私がこの世で一番愛しているのは……
俺がこの世で一番愛しているのは……

翔だから…
レミリアだから…

誇り高き吸血鬼の恋
　　＼王家の君へ＼

e
n
d
:
:
:

after story

君と恋人になったあの

日から……

私と翔が恋人同士になって4カ月が経った。

私は翔と話す時に緊張はしなくなってきたが、逆に甘えてしまうようになった。

今では幻想郷の中では私達は有名で、幻想郷のお似合いカップルって呼ばれている。

ドーセ文屋が私と翔が2人である所を撮って、新聞にでも書いたんだろう。

本当に迷惑だが悪い気はしない。

「ねえ翔？」

「ん？ どうした？」

私と翔は咲夜が用意したダブルベッドで一緒に寝ている。

「キス……しよ？ // //」

「ま、またか？ // //」

一時間前にしたばっかだぞ？ // //

このように私は翔にデレデレなのである。

「え〜いいじゃない☆

しよ〜よ〜」

数ヶ月前のフランみたいだな…

自分でもそう思うほどだった。

「い、一回だけだからな／＼／＼／＼／」

そう言つて翔は私に顔を近づけてきた。

「やったく☆……………ちゅ……………」

優しいキスだった。

「こ、これで我慢しろ／＼／＼／＼／」

夜寝れなくなる／＼／＼／」

「ええー？……………ま、いつか☆」

物足りなかつたがこれやると恥ずかしきで死にそうになるのでやめておいた。

キス魔のレッテル貼られたくないし。

「じゃあ、おやすみ、レミリア」

「ええ…おやすみなさい…」

そう言つて翔は目を閉じた。

だが、私には最後の日課が残っている。

「可愛い寝顔ね……………」

そう、翔の寝顔を堪能することだ。

本当に可愛い寝顔だ。いつものカツコイ顔ではなく、無邪気な子供の顔だった。もう少し見たかったが、明日は幻想郷中を回るので早めに寝ることにした。

なぜなら明日は翔と2人で幻想郷を紹介するからだ。

翔はここに来て7カ月経つがまだ紅魔館の周辺しか知らない。明日は幻想郷の天界、地霊殿、白玉楼、守矢神社などを回ろうと思っている。

もう少し堪能したかったが……

「おやすみ……翔……」

そう言って翔の頬にキスをして、眠りについた。

朝の9時。

私は目を覚ました。隣にはまだ寝息を立てて寝ている翔がいた。

私は一足先にベッドから降りて顔を洗いに行った。

そうして部屋に戻るとちょうど翔が起きた。

「おはよ♪翔！」

「んあ？……………あぁ……………おはよう……………」

まだ半開きの目を擦り、いつもより3倍面白い寝癖を立たせながら、欠伸をしていた。

「……………あなた、一旦鏡で自分の顔見てきなさい……………」

「え、お、おお……………」

そう言うのと翔は立ち上がり後ろの洗面所へ歩いていった。

その数秒後洗面所から大声で笑っている私の恋人がいた。

午前11時。

私は翔と一緒に玄関を出た。

「言っつてらっしやいませお嬢様。

翔、くれぐれもお嬢様に変なことしないように」

「わ、分かってるよ」

翔は咲夜に釘を刺され。

私と翔は天界へ向かった。

天界へ着き、建物のドアをコンコンと2回叩いた。

「はい。」

そうして出てきたのが、紺色の髪で帽子をかぶった女性が出てきた。

「久しぶりね、衣玖。二ヶ月ぶりかしら？」

あなたのところの総領娘が会いたがっていた人を連れてきたわよ」

そう言つて翔は衣玖の目を見て言った。

「は、初めまして。椎名翔と言います。よろしくお願いします。」

「初めまして、永江衣玖と申します。」

普段私はここで天人の比那名居天子様のお世話をしています。

さ、こちらの部屋でお待ちください。ただ今総領様を呼んでまいります」

すると数秒で応接室の扉が開いた。

「へえ、あなたが椎名翔ね。」

私は比那名居天子。天子と呼んでくれていいわ。よろしく

いきなりで申し訳無いけど、私と勝負しない？銃撃異変は全て剣で片付けたって聞いて

たから、1回でもあなたと勝負したかったのよ」

「と、唐突だな……」

まあいいけど……」

そうすると隣で衣玖が

「申し訳ありません、総領娘様は大変優柔不断な方でして……」

一度言ったことはやり通す性格をしているんです。

あと凄いわがままです」

「ああ、それならうちのお嬢さまも同じですよ」

「な、何ですって!?!翔!後で覚えときなさいよ!」

「うるさいわね衣玖!今はいいでしょ!」

と、わがままな主2人が怒った。

「ははは、冗談だよレミリア」

と、翔は私に笑いかけ

「くれぐれも翔さんに迷惑かけないようにしてくださいね」

「わ、分かっているわよ……」

衣玖は天子に釘を刺していた。

そうして私達は外に出た

「ルールは寸止めでいいわね？」

スペルカードや技は禁止、剣だけで勝負しましょう？」

「分かった、じゃあ……行くぜ」

翔は妖刀ムラサメを持ち、構えた。

「……………あなた…神速巫剣流ね…………」

そう、つい二か月前、月の住民が幻想郷の英雄、翔に一度月に来て欲しいとわざわざ地上に来てくれた。

翔はその好意を無下にしたくなかったのか、素直に月へついて行った。もちろん私とフランも。

そこで翔より10歳ほど年上の、とある女性が剣術を披露してくれた。

翔はその剣術に一目惚れだったらしく、1ヶ月ほど月で修行を積んできたらしい。

その流儀の名前が“神速巫剣流”といい、剣を自由自在に操り、最大の強みはスピードだ。と、翔が自慢げに私に話していたのを思い出した。

私もこの流儀の翔は見たことなかったので少しワクワクしていた。

「へえ、この流儀って月にしかなかったから誰も知らないと思ってたら…天子は知っていたのか」

「ええ、私も何度か月に行ったからね」

天子の剣の刀身は赤く光っていた。

これば魔法でもスペルカードでも無い。言わば、あの剣の仕様みたいなものだ。

「さあ、行くわよー！」

そう言うと天子は翔に斬りかかった。

天子も剣の腕は幻想郷でも、トップクラスだ。

だが……

勝負は一瞬でついた。

「嘘………でしよっ………」

天子が驚きの声を上げる。

私も衣玖も何があつたか理解出来ていなかった。

翔が目にも止まらぬ速さで天子の背後に回り込んでいたらしい。

翔が天子の首あたりにムラサメをかざしているのが見えた。

「あなた…何者？…あのスピード…どうやって…」

すると翔は

「俺はただの妖怪だよ」

「驚きました…まさか神速巫剣流がこんな脅威だったとは…」

衣玖が口を開いた。

「ねえ、この流儀、教えて！」

天子が目をキラキラさせながら翔に言う。

だが

「残念だけど…師匠に誰にも教えるなって言われたんだ。

ごめんな…」

「うー、あ、でももつと剣のことで聞きたいことがあるの！」

私の部屋へ来て！

衣玖はレミリアとお話していてちようだい！」

「え、おい……」

そう言つて天子は翔を押し、自室へ入っていった。

今日は私と一緒にデートするつもりだったのに……

すると衣玖が

「レミリアさん。あなた翔さんと恋人同士でしたよね？」

申し訳ありません、総領娘様の独断で二人の時間を潰してしまって、すぐ終わらせる
よう言つてきますので……」

そういった衣玖は、席を立ち、天子の自室へ向かつて言った。

すると衣玖と天子の会話が応接室まで届いた。

「総領娘様、今日は翔さんは大切な用事が沢山あるので、もうお開きにしてください」

「ええー、あと30分！」

「ダメです」

「じゃああと20分！」

「ダメです」

なんかコントみたいだな……

「じゃあ、あと10分だけ！」

いいでしょ？」

「………分かりました。本当にあと10分ですよ？」

「はい」

そこで会話が終わった。

そうして衣玖がまだ応接室に戻ってきた。

「申し訳ありませんレミリアさん。」

あと10分で帰ってきますので」

「分かったわ、ありがとう。衣玖。」

そうして10分後

「はあく、楽しかったわ！また来てね！翔！」

「ああ、またな！」

そう言っつて私と翔は天界を後にした。

「幻想郷にも剣がわかる奴がいるんだなあー」

「……………い」

「ん？なんか言っつたか？レミリア？」

「天子だけずるい」

そう言っつて私は人目のない森へ翔を連れ込んだ。

「ど、どうしたんだレミ……………んんっ?!」

私は翔の唇に自分の唇を押し当てた。

そうして初めて舌を入れ、ディープキスをした。

「ん／／／ちゅ……………ちゅ……………／／／」

すごい気持ちいい……

それを30秒間続けたあと、口と口が離れた。

私の舌と翔の舌の間に銀色に光る唾液の糸が引いていた。

「ぶはあーど、どうしたんだよ？レミリア？／＼／＼／＼／」

「レミイって呼んで」

私は恥ずかしくて死にそうになった。

「レ、レミイ……どうしたんだ？」

翔にレミイって呼ばれた…嬉しい。

感極まって私はまたキスをした。

「ん／＼／＼ちゅ………私はずっとこうしていたい／＼／

ねえ……いいでしょ？／＼／＼／」

「あ、ああ／＼／＼／」

その日は他のところに行かずにずっとそこでキスをしていた。

12月24日。

今日で私と翔が恋人になって1年めの記念日だ。

そうして毎年恒例、クリスマスパーティーが行われた。

そうしてまた魔理沙が乾杯の音頭をとっていた。

「えー、僭越ながら私、霧雨魔理沙が乾杯の音頭を取らせていただきます」

魔理沙……毎年セリフが同じ……

ドンドンパフパフくと盛り上がる鬼や霊夢たち。

あなた達も毎年同じ反応するのね……

「今年のクリスマスと、椎名翔とレミリア・スカーレットの交際1年目記念を祝福して

……」

「乾杯!!」

「?!」

私と翔は同時に驚いた。

「なっ、なんで知ってるのよ!」

すると魔理沙が

「え、だって文々。新聞に「クリスマスに一つのカップル誕生！あの誇り高き吸血鬼、レミア・スカーレットから英雄、椎名翔に告白！」って一面に大きく書いてたから」

私は文の方に体を向け、歩み寄った。

「文？あっちの方で小一時間お話ししましょう？」

私貴方と久しぶりにお話したいわ？」

すると文は、

「え？ちよつと待つてください？嫌です！嫌ですつてばアア！いやああああああ
……」

と言いながら裏へ連れていった。

何をしたかは……想像に任せるわ。

すると魔理沙がまた立ち上がった

「えー、気を取り直して、今年のクリスマスと椎名翔とレミア・スカーレットの交際1
年目記念を祝福して……」

「乾杯!!」

「乾杯!!!」

こうして今年のクリスマスパーティーが始まった。

宴の席に戻ると、翔が私に話しかけてきた。

「なあ、レミイ、明日の午前3時、神社の下に行こうぜ。」

「ええ、いいわよ」

「サンキュ」

そう言って翔は霊夢たちの輪に入った。

しばらくすると魔理沙が

「おおーい!もうすぐクリスマスだぞ!」

「10!9!8!」

またこのくんだりやるのね……

「3!2!1!………クリスマスだああああ!」

そう魔理沙が叫ぶと宴はより一層盛り上がった。

すると主人公と自機組が私に絡んできた。

「いいな〜男〜それに翔みたいなカツコイイ男に好かれて〜」

「いいですよ〜私も翔さんともっと話したい〜」

霊夢と早苗に言われた。

「う、うるさいわね！あなたたちがどう言おうと翔は渡さないわよ！」

思わず対抗してしまった。

「いいな〜ラブラブですなあ〜」

そう言っただけで私は1時間ほど酔った巫女2人に絡まれた。

午前3時。

翔が待っていた。

「お待たせ」

「いや、そんなに待つてないよ。さ、ここに寝っ転がろうぜ。」

そう言つて翔は芝生の上に横になった。

その隣に私も寝っ転がった。

「久しぶりだな……一年前のこの場所と時間に俺らは恋人になったんだよな……」

思い返してみれば、一年前は色々なことがあつた。

翔が一時期私の従者になつたり。

翔の姉が軍を連れて幻想郷に攻めてきたり。

そして……私が翔のことを好きになつて……

そうしてこの日に私達は恋人になつた。

「懐かしいわね……」

「だな……」

私が思い出に浸つてみると

一つの流れ星が夜空を通過した。

「キレイね……」

「ほんとにキレイだな……」

なあ、レミィ」

翔が聞いてきた。

「俺は色々とお前に感謝してる。銃撃異変の時俺が戦えたのだから、あの後立ち直れたのだから、全部お前のおかげだ」

「そ、そんなことないわよ、あれは翔が頑張ったから」

「違う。俺はレミイが心の支えになったから戦うことが出来た。今だってお前と話しているだけで俺は生きがいを感じる」

「そ、そんな大げさな／＼／」

「だから俺はこれからもお前に支えてもらいたいし、俺もお前を支えたい。恋人ではなく、夫婦として……」

「……………え？」

今、なんて言った？

私は理解できないまま、翔の言葉を待っていた。
すると翔は起き上がって真剣な顔で私を見た。

「結婚しよう」

その言葉を聞いた途端、私はとめどなく涙が溢れた。
多分、人生の中で最大の喜びだったと思う。

私は翔のこの真剣な顔を生涯忘れないだろう。

私はとびきりの笑顔ではつきりと言った。

「……………はい／＼／」

そうして見つめ合い、私達は口づけをした。
いつものキスではなく、甘い唇だけのキス。

すると草むらから宴に参加していたメンバーが飛びだし
歓声をあげた。

私と翔のところに駆け寄り

「おめでとー！」「お幸せに！」

と、みんなが笑顔で祝ってくれた。

私達2人は胴上げされた。

霊夢や魔理沙、命蓮寺や地霊殿の人達も喜んでくれた。

私は胴上げされながら翔と見つめ合い、笑った。

私はこの日を絶対に忘れない。

それから10ヶ月後、私は子供を産んだ。女の子だ。子供の顔が私に似ていたので私の方の姓を取った。

名前は、セリス・スカーレット。本当に可愛い子だ。

私は料理や洗濯など、必死に勉強し、今じや翔が台所に立つことはなくなつた。私と翔は紅魔館の近くに小さな家を建てた。

そこで家族三人で暮らしている。

「うおわあ?!」

娘が作った罠に簡単に引つかかる翔、ださい…

「キャハハハ♪パパ変な声出してる♪」

「こ、こら! 大人をからかうな! さもないと………痛い目見るぞー!」
そう言つて追いかけてつこを始めた。

「こーら、追いかけてつこやめなさい。」

翔も手が空いてるなら洗濯物干して」

「はーい」

「私も手伝う!」

「お、我が娘よ…2階まで競走だ! 覚悟しろ!」

「よかろう、わが父よ。我の力を思い知らせてやる!」

私は階段の前で走るポーズをとっている2人を新聞紙で叩いた。

「家の中で走ろうとしない! 怪我するでしょ!」

それとセリス! どこでそんな言葉覚えてきたの?」

「え、パパが言つてたの真似しただけだよ?」

「翔! あなたセリスに変な言葉教えないでよ!」

「え? 何のことですかあゝ」

「あ?」

「ごめんなさい」

こんな会話をしていると、フランがドアを開けて入ってきた。

「フランお姉ちゃん!」

セリスはそう言つてフランに抱きついた。

「セリスちゃん、こんにちは!」

フランは大人びた顔立ちになり髪の色も腰まで届くほど長くなっている、前みたいにあまり無邪気ではなくなった。

そしてセリスはフランに大変懐いている。

「姉様と翔もこんにちは!」

「ええ、こんにちは」

「こんにちは」

「咲夜がお菓子作ってくれたよ 三人で食べるって☆」

もうフランが翔のことをお兄様と言うことはなくなった。

多分、恥ずかしいんだろう。

大人になつたな…フラン…

「フランお姉ちゃんも一緒に食べよーよ♪」

「え？いいの？やったあ☆」

そう言つて食卓にフランも座つた

やつぱりフランもまだ子供だな……

私はフランとセリスのやり取りを見てそう思つた。

その夜……

セリスはベッドで寝て、私と翔は、ベランダで紅茶を飲んでいた。

「もうセリスが生まれてから3年か……」

「早いものね時が経つのは……」

でも、私が翔を愛する思いはいつになつても変わらないから大丈夫よ」

「ははは、そこは心配してないよ」

「ありがとう翔。あなたがあの時、結婚しようなんて言つてくれなかつたら今の私はいなかつたわ。」

「ああ、俺もだよ。レミイがいてくれたお陰で立ち直れたんだ。」

ありがとう」

「この世で一番愛しているよ」

もう何度も聞いた。彼の「愛しているよ」
でも、今日だけはいつもと違う感覚だった。
翔の声は、愛情に満ち溢れていた。

そして、私ももう何度も言ったあの言葉。

でも、今日だけは違った。

心の底から愛情、恋情がこみ上げてきて、その思いを私は目の前の愛しい人に伝えた。

「私もこの世で一番愛しているわ。 翔。」

そうして私達はまた、永遠の愛を誓った。

異世界転移しても幼なじみのあなたに恋をする

く妖怪の君とふたりでく

1話

別世界での再会

俺は、訳の分からないところに立っていた。

テロの奴らに殺されて、紫さんに会って色々説明されて、幻想郷に着いたわけだが

……

「……、紅葉綺麗だな……」

って、そんなこと言ってる場合じゃない！

そうやって辺りを見渡すが……

山……山……山……

「……は……だ……あ……」

1時間ほど歩くと一つの神社が見えた。

よし、ここで町までの道のりを聞こう。

そう思った俺は境内を掃除している俺と同じくらいの歳の巫女さん？に聞いてみた。

緑髪だ……なんかあいつを思い出すな……

「あの、すいません、ちよつと道を聞きたいのですが……」

「はい、何なりとお聞きくだ……」

するとその巫女さんは固まってしまった。

「え、椎名くん？」

「え？」

そう言えばこの人の顔、見覚えあるな……

緑の長髪。カエルのピン留めと蛇の髪飾り………あ。

「お前……まさか………東風谷?!」

俺は目を見開きながら東風谷早苗に聞いた。

「お前、今までどこにいたんだよ？」

あつちの世界でお前が行方不明になったからって警察も血眼で探してたんだぞ？」

「ごめんなさい、色々あつて幻想郷に来ちゃいました☆」

「来ちゃいました☆じゃねえよ!!俺らがどれだけ心配したか……」

そう、俺と東風谷は幼なじみで昔から仲が良く親友と呼べるほどだった、俺も東風谷が行方不明になった時は心が折れそうになった。

だが、俺はぶつちやけ東風谷には恋心はない。

確かにこいつは美人だが、俺は友達としてしか見ていない。

「え、そう言う椎名くんこそ、何でここにいるのよ?」

「うぐっ」

俺は言葉に詰まった。

「俺、実はあつちの世界でテロにあつてな…」

殺された。んで、転生? って言うことで妖怪としてここに来た。」

「はあ? 死んだあ?! あなたこそ何やってるのよ! じゃあ、彩菜さんは?」

驚いた顔で俺に聞いてくる。

「……………助けた」

「そ、そう、まああなたが幻想郷で生きているのなら私は別に……………」

早苗が言い終わる前に一つの巨大な弾幕が俺めがけて飛んできた。

「うおわあ?!」

すると目の前に目玉のついた帽子をかぶった少女と後ろに……………綱? みたいなのが付いている女性が立っていた。

「早苗に何をする! 不審者め!」

少女が俺に向かって言ってきた。

「ちよ、ちよつと待っててください! 諏訪子様! この人は私の友人で……………」

また早苗が言い終える前に前の2人が何かの詠唱を始めた。

「天竜 「雨の源泉」 ！」

「土着神 「宝永四年の赤蛙」 ！」

2人がそう言うと、密度の濃い弾幕が飛んできて逃げ場を塞いだ。

「やるしかないか…」

初めての弾幕ゲームだったが俺は右手に神速フェザーソードを握り、目の前の弾幕を斬り捨てた。

「……………すごい」

早苗が後ろで感嘆の声を上げた。

前の二人も驚いている。

「今度は俺から行くぜ」

左手に風剣ミストルテインを持ち、前の2人に斬りかかろうとした瞬間、

「ストップ！ストロー！ストップ！」

と、東風谷が声を荒らげた。

「諏訪子様と神奈子様も私の話を聞いてください。この人は私の友人です。ついさつき幻想入りしたばっかの人にあんな弾幕ふつーぶち込みますか?!」

と、東風谷が諏訪子様と神奈子様とやらに叱っていた。

すると諏訪子さんが

「でも、あいつ私たちの弾幕切った。

私達より強いよ……」

「そうだな、あれは私も驚いた。」

と、諏訪子さんと神奈子さんが東風谷に言った。

「確かにそうですね……椎名くん、あなたの能力ってなんなの？」

「えーと、「七つの剣を操る程度の能力」と、「あらゆるものを融合 分解する程度の能力」
だっけかな？」

すると諏訪子さんが

「あ、あんた、2つ能力があるのか?！」

「あ、ああ、そうだけど

でもまだ使い方はよく分からないな」

俺がそういつた途端、諏訪子さんと神奈子さんは頭を下げた。

「申し訳ない！まさか幻想入りしたばつかのヤツに大人げないことをした…許して欲しい」

「どうやら心の底から謝ってくれているようだ。」

「ごめんね椎名くん…」

ところで、椎名くん住むところないでしょ？お詫びと言っちゃあなんだけどうちに住む？」

と、東風谷が提案してきた。

確かにこのまま野宿は嫌だしな……………

「そうだな。よろしく頼むよ」

「よろしくね、私は八坂神奈子、この守矢神社の神、天津神だよ」

「私は洩矢諏訪子、同じくここの神社の神、土着神だよ。よろしくね」

「俺は、椎名翔。まだ幻想郷に来て1時間ほどしか経っていない。一応妖怪だ。よろしく」

「椎名くんは一応守矢神社に住むわけだけど…」

神奈子様、諏訪子様どうしましょう？神主でもやらせますか？」

と、神2人に相談していた。

とゆーか男の俺がそんな簡単に住ませてくれるのか？

ほんとに警戒しねえなこいつ…

「翔、って呼んでいい？」

翔は何が得意なの？」

と、諏訪子が聞いてきた。

「そうだな…スポーツと家事全般はできる。」

「そう！椎名くんはスポーツはいつもトップで

お姉ちゃんとお自分の晩御飯とか、洗濯とか一人でしてるんですよ！」

「早苗…何であなたが自慢するの…」

と、神奈子が溜息をつきながら東風谷に言う。

多分、私にもこんなすごい友達がいるんですよ！ってことを神様2人に知って欲しかったんだろう。

「んー、じゃあ家事全般は翔にやってもらって、早苗は巫女の仕事に集中するって言うのはどうかな？」

諏訪子が提案した。

「それいいですね！椎名くんもそれでいい？…分かった！じゃあそれで決定で」

俺は何も言っていないのに勝手に話を進められた。

相変わらず自由奔放だな…

するとまた東風谷が口を開いた。

「いい？椎名くん。これから諏訪子様と神奈子様には様をつけること、後、敬語を使つてね」

「あ、ああ、分かった。

諏訪子様、神奈子様、不束者ですがどうぞよろしくお願いします」
俺はそう言って頭を下げる。

「うん！早苗より礼儀は正しそうだ！」

諏訪様がおっしゃると

「いえ、私はただ常識に囚われていないだけですから！」
と、ドヤ顔で言った。

「何でそんなにポジティブなのよ……」

神奈様がおっしゃった。

そうして、俺は守矢神社で生活することになった。

2話

私の初恋

私は、小さい頃から親友がいた。

その人の名前は椎名 翔。

幼稚園から小学校、中学校、高校まで一緒に通っていた。

みんなからは私と椎名くんが付き合っていると思われている。

でも、付き合っていない。

幼稚園のバス停が一緒でお母さんと椎名くんの姉が意気投合して、必然的に私たちは仲良くなった。

遊ぶのも一緒、泣くのも一緒、笑うのも一緒。

何をするのにも一緒だった。

私が中学校に入り、この緑髪のせいでいじめられていた。

椎名くんとはクラスは離れ、頼る人が誰一人クラスにいなかった。

私が一人公園で泣いていると、

「おい」

椎名くんの声でした。

すると椎名くんが手を差し伸べ、椎名くんの手作りの蛇の髪飾りをくれた。

「それ付けてたらいじめられないと思う、その…似合うと思うから、あとメガネ外せ、裸眼の方がいい」

「あ、ありがとう、椎名くん」

やっぱり椎名くんは頼りになる。

その蛇の髪飾りを付け、コンタクトで次の日登校すると

「その髪飾り可愛いね!」「いいなー私も欲しい!」

「東風谷さんってメガネ外すと美人だね!」

と、女子に好評で、

やがて私はいじめられっ子から人気者へと変わった。

男子もイジメをやめ、私に告白する者もいた。だが、私は男子に興味が無かったので、全員振った。

ある日、私は椎名くんに感謝の印としてなにかあげられるものはないかと悩んでいた。

「椎名くんってパーカーしか着ないからなんかお洒落させたいな…」

そこで思いついたのが手作りの首飾り、金色の小さな蛇に彫って、それを首飾りにした、それを

「お、ありがとうな東風谷……」
と、素直に受け取ってくれた。

それから私は彼のことばかりを見ていた。
彼と話すとき心臓の鼓動が早くなり、顔が熱くなるのを感じる。

これが初めての恋、いわゆる初恋だった。

高校に入って、幸運なことに椎名くんと同じクラスになった。

高校では色んなことがあった。

私と椎名くんが付き合っている疑惑。

椎名くんがレギュラーでバスケ部が全国準優勝したこと。

文化祭で翔の好きな人は誰だ?!という題材で公の前でトークしていたこと。

8割が女子だった。まあ椎名くんイケメンだしな：

もちろん私も興味があつたが、結局椎名くんは答えずじまいで終わった。

こんな感じで高校生活を送っていたが

1年生の夏、私は現実を突きつけられた。

「この世界じゃ信仰が得られない。幻想郷に移る。」

と、神奈子様が私に言ってきた。

もちろん反対したが、機械に頼る今の時代、神様を信仰する人などほんの一握り。

仕方ないと思い、私は行方不明ということにして誰にも言わず、この世界を後にした。

あつちの世界じゃ私の行方不明は相当大きな事件になつたらしい。

そうしてこの幻想郷に来て1年、私は17歳になった。

ちょうど私の17歳の誕生日の3ヶ月後、私が境内の掃除をしていると。

「あの、ちよつと道を聞きたいんですけど」

神社にひとりの少年が来た。

「はい、何なりとお聞きください………」

嘘……？そう、そこに居たのは

身長は私より少し高め。女の子みみたいなツヤツヤの肌。真っ黒な薄手のパーカー。

茶髪で少し蒼のかかった目。思わず見惚れるほどの綺麗な顔立ち。そして首に

は……

私を作った黄金の蛇の首飾り。

「え………椎名くん？」

そうして私は別世界で彼と再開した。

3 話

核の暴走

椎名くんが守矢神社に住んでから私は思う存分巫女の仕事に集中することが出来た。

諏訪子様も神奈子様も椎名くんとは打ち解けていた。

「翔く、醤油く」

「諏訪子様の10cm前にありますよ」

「翔、この料理はなんて言うんだ？すごく美味しい……」

諏訪子様がくだらないことを言っている

神奈子様が口を挟んだ。

「ああ、これはステーキですね。」

「今度、料理してみます？」

「おお、それはいい考えだな」

と、椎名くんと神奈子様が会話していると、私と諏訪子様が猛反対した。

「神奈子の作る料理は核以上にやばいからやめて欲しいな……」

「私も………同感です………」

「なっ、バカにするな！あれから練習したんだぞ！」

神奈子様も言い返す。

「ああ〜だからあの時部屋で色んなエプロン試着してたのか♪」

「す、諏訪子／＼／＼あんた見てたのか?!」

「えへへー、ちよろつと……ね☆」

「明日起きると諏訪子の口には多分私が作った料理がたくさん入っているだろうな
……………」

と、神奈子様がただならぬオーラを放ちながら諏訪子様を睨みつけていた。

「ごめんなさい許してください」

諏訪子様もすぐに降参し、頭を下げた。

それから1ヶ月後

地霊殿のさとりさんが守矢神社に慌てて入り込んできた

「た、助けてください!」

お空が……お空が……

「どうしたんだ?」

諏訪子様が尋ねるとさとりさんは

「と、とにかく着いてきてください!」

そう言っただけで私達は4人はさとりさんに連れられ、地底へ向かう。そこはひどい有様だった。

建物という建物が全て火の海に飲み込まれている。

「これ全部……お空がやったのか？」

諏訪子様が目を見開いて言った。

「と、とにかくお空を止めるぞー！」

そう言っただけで神様ふたりは地霊殿へと飛んでいった。

地霊殿へつくと、いつものお空さんではない妖気を放っていた。

「お空!! やめて!!」

さとりさんの妹、こいしさんが泣きそうな顔で叫んでいた。

「もつと……もつと強いの……」

お空さんはもう自我を保っていなかった。

右手から次々とレーザーを放ち、どんどん建物を破壊していく。

すると……

「お空……あたいだよ! 分かる?!」

お燐さんが叫んだ。

しかしお空は耳すら傾けず、レーザーを放っていく。

するとお燐さんはさらにお空さんに近づいた。

「お、お燐さん！危険です！」

私が叫んだ。

しかしお燐さんも必死なようで

「お空！お願い！戻ってきて！お空！おく……………」

お燐さんが叫ぶのをやめた。

なぜなら、お空さんの腕から放たれた細かいレーザーがお燐さんの胸を貫いたからだ。

「お燐！」

さとりさんがお燐さんの元へ駆け寄った。

「お燐！お燐！」

さとりさんが呼びかける。

「嘘、いや……………いやああああああ!!!」

こいしさんが泣き叫ぶ。

悲痛な叫びだった。

私達は4人はただ立ち尽くしていた。

これが……………絶望……………か……………

すると翔が前に出た。

「し、椎名くん?!」

椎名くんは何も言わずお空さんに近づくと、

「邪魔だあああああ!」

お空さんが極太のレーザーを放った。

凄い威力だ。

しかしそれを椎名くんは………

「嘘でしょ……」

刀で真つ二つにしていた。

そして、椎名くんの左目が蒼色に光っていた。

すると金色のドームが展開され、お隣さんの傷が完全に癒えた。

「さあ、かかって来いよ」

椎名くんが手招きしている。

するとお空さんは小さなレーザーを連発した。

椎名くんは左手にもう一本刀を持ち、全てを斬った。

「じゃあ、次は俺からだ」

椎名くんが勢いよく飛び、お空さんのレーザー砲と、胸元にある大きな目玉を斬った。

するとお空さんは力が抜け、地面に落ちていった。

「分からない……これは初めてのケースだ」

「核の暴走なのは間違いないと思う。ただ、それは自発的にしか出来ない。お空も昨日までは普通だったろう?」

諏訪子様と神奈子様が予想を立てる。

すると椎名くんが

「さつきお空さんの目玉を斬った時、こんなものが出てきたんだ」

諏訪子様に歩み寄りそれを渡す。

何かの札だった。ただ私も見たことないし、霊夢さんでもない。

「これは?………何かの紋章?」

「私達が核を作った時、こんなのは無かった………」

この核を作ったのは諏訪子様と神奈子様である。

その札の紋章とは、蛇と蛙、そして………死神。

よく見ると蛇と蛙を死神が殺す絵だ。

「な、なんだ?………これ」

私は背筋に寒気が走った。

「蛇と、蛙?」

明らかに守矢神社のことを指している………」

椎名くんも動揺していた。

「一体……誰がこんなことを……」
謎は深まる一方だった。

4 話

死神の札

私はずっと考えていた。

あの札の紋章からして明らかに守矢神社が関わっていることは分かる。それなのにどうしてお空さんを暴走させたのか。

そして一番重要なのは……

誰がやったのか……

考えれば考えるほど頭が痛くなる。

まず、札なので巫女の類の者がやったんだろう。

だが、霊夢さんではない。もっと邪悪なものがこもっていた。

「んんん、それだけしか分かんないよう」

足をじたばたさせながら私は頭をかいた。

「まあ落ち着けよ東風谷、焦ったって仕方ないだろ？」

ほら、お前の好きなブドウだぞ」

「ありがと椎名くん……」

「で、なんか手がかりは見つかったのか？」

椎名くんが私の隣に座った。私はぶどうを食べながら、

「ぜくんぜん、私たちだけじゃもうお手上げよ」

正直、私たちにまだ害はないので放っておいてもいいが、地底があんな酷いことになつてしまったので放つてはおけない。

「そうだな……地底のヤツら……勇儀姐さんに聞いてみたらどうだ？」

「……そうね……それが一番手っ取り早いかも……」

そう言つて私達は地底へ向かった。

地底は、まだ復興作業が終わつておらず、残骸も残っている。

どうやら、お空さんとお隣さんは目を覚ましていないらしい。

「やあ、地上の巫女さんがこんな所に何の用だい？」

あ、翔もいるのか、久しぶり！」

勇儀さんが椎名くんの背中をバンバン叩いて言った。

「痛いっすよ勇儀姐さん……」

「あの、勇儀さんはこの札を見たことありますか？」

私はペラつとその札を見せる。

「いや、見たことないね……しかし、これは死神か？」

幻想郷のものじゃなさそうだね……」

「でも、この蛙と蛇、明らかに守矢神社のことを指していると思うんですね」

「うーん………」

謎は深まるばかり、この死神の意味、守矢神社の関係、そして……なぜお空さんを狙ったのか……

それから2日後お空さんが先に目を覚ました。

それを聞いた私達は真っ先に地霊殿へ向かった。

「お空さん！大丈夫ですか?！」

私はドアを開けると同時に言った。

「うにゆ?大丈夫だよ?………え?何かあったの?」

良かった……いつものバカ加減だ。

「あの、大変言いにくいんですが、あなたが核暴走しまして、お燐さんを死に際まで追いやったんです………」

お空さんは一気に顔が青ざめた。

「嘘……お憐?!お憐!!」

隣で寝ているお憐さんに泣きながら呼びかけるお空さん。

「お、落ち着いてください!お空さん!お憐さんはまだ目が覚めていないだけですよ!」
私が高だめるとお空さんは落ち着いたみたいだった。

「まだ、しばらくは外に出ない方がいいな、お空。」

椎名くんが提言した。

「翔……私を止めてくれたのは翔だよね?私……どうなつてた?」

椎名くんが一瞬私の方を見て、言ってもいいのか?という顔で視線を向けてきた。

お空さんは今落ち着いているので大した心配はないので私は頷いた。

「そうだな、まず言いたいことは……お空のいつも放つ妖気はなかった。

それで……お前の右手についてる大砲で地底が崩壊した。

お前は多分自我を保っていないかったよな……

それに……目が真っ赤だった。」

それは私も初耳だった。

「赤色?」

思わず私が聞いてしまった。

「ああ、多分その札が原因だろうな……」

この蛙と蛇と死神の札。

「くそっ……ほんとに何なんだよ……この札……」

椎名くんが悔しそうに言った。

「なんの罪もない人たちを巻き込んで友人を危険にさらして……誰なんだよ……」

壁を殴り、殺意が今で無いくらいに湧いていた事が分かった。

椎名くんも……こんな怖い顔するんだ……

「じゃあ状況を整理しよう」

まず、この札はお空の大砲、胸の目玉の内部に入っていたんだな……

んで、お空の記憶が飛んでいることから考えてお空意識もなかった。

お空の中に眠る核エネルギーが何者かに操られて直接脳に何かの妖術をおくり、お空を操った……ってとこかな……

それでこの札は確実に守矢神社との関係がある、恐らく私と神奈子がお空に核を取り入れたことを知っている関係者だ。」

諏訪子様がみんなに分かるように説明した。

「ほんとに……なんだこの事件は……」
椎名くんが絶望するような声で言う。

「まあ、なにか分かったら守矢神社まで来てくれ。

「こちらも全力で調べる」

神奈子様がさとりに言った。

「ええ、ありがとうございます」

お隣が目覚めたら1度そちらに伺います」

「ああ、いつでも待っているよ」

うちには戦力となるものがあるからね」

私は期待した。

「そ、それって私のことですか?!」

「いや翔だけだ」

諏訪子様がズバつと言い放った。

「そんなスパツと言わなくてもいいじゃないですかあ……」

「はは、まあ、ご期待に添えるように頑張りますよ」

椎名くんがそう言って地霊殿を離れた。

今日は地霊殿でお話していただけて日が暮れてしまった。

5話

突然の襲撃

地霊殿の一件から3日後、お燐さんが目を覚ましたらしい。

だいぶ落ち着き、今ではお空さんとお燐さんの仲はいつもどおりに戻ったようだ。

そうして札の謎も解けないまま、この事件は時効みたいな感じで迷宮入りになってしまった。

ある日、私が境内の掃除をしていた。ちなみに諏訪子様と神奈子様は博麗神社に行っている。

隣で椎名くんと妖夢さんが剣の修行をしていた時。

「ん、何？あの子……」

神社の入口に銀髪のかかった長い髪の毛の女の子が立っていた。目は深紅に染

まっている。10歳くらいだろうか？

「君？どうしたの？」

椎名くんが優しい声音で尋ねる

「お母さんかお父さんは？迷子かな？」

椎名くんがさらに駆け寄ると少女は椎名くんの腹に手をかざし……

「死ね」

刹那、少女の手から光に光線が出てきて、椎名くんを神社の賽銭箱の所まで吹っ飛ばした。

「がはっ」

椎名くんの口からおぞましい量の血を吐き出した。

椎名くんのお腹にはポツカリ穴があき、椎名くんはもう息をしていなかった

「嘘……椎名くん？……椎名くん!!」

私は泣きながら椎名くんを抱き上げる。

「この神社……知らない、壊す」

少女がそう言いながら次は妖夢さんに近ずいた。

「お前も吹っ飛べ」

「え？……」

妖夢さんは何も理解できないまま脇腹を蹴られた。

「ぐあっ……」

妖夢さんもやられた。

その少女は私の方に近寄る。

「いや……来ないで！」

助けて……諏訪子様……神奈子様……」

私が今ここにいない神様二人の名を呼んだが当然二人には届かない。

少女が私に手をかざした瞬間、私ではなく少女が吹っ飛んだ。

「あゝあ、初めて死んだわ……」

私の腕の中にいた椎名くんがいつの間にか私の前に立っていた。

「なっ……確かに殺したはずっ……」

少女も焦燥の顔を浮かべる。

椎名くんは左目が蒼

色に光っていた、またあの能力を使ったらしい。ただ、それだけではなく、椎名く

んの尾骶骨あたりから蛇の様なものが生えている。

「さあ、覚悟しろよ」

物凄い速さで少女に殴りかかる。

だが少女はそれを受け止め攻撃を繰り出す。

だが、体力的に椎名くんの方が上だったらしく、少女は膝をついた。

「これで終わりだ」

椎名くんはムラサメで少女に斬り掛かる、と思いきや背後にまわり、何かの紙ペラを

剥がした。

その途端に少女は眠ってしまった。

「え、椎名く……」

私呼びかけた時には椎名くんも倒れていた。

どうやら、未知の能力のせいで体力が大幅に消耗したらしい。

椎名くんが握っていた紙ペラを見ると……

「また……この札……」

お空さんにも付いていた蛇と蛙と死神の札があった。

「どうして……こんな小さい子に……」

椎名くんが目を覚ましたあと、重傷を負っていた妖夢を能力で直し、その一時間後に少女は目を覚ました。

最初はまた攻撃されるんじゃないかと思っていたが、目の色も明るい碧色、どうやら元に戻ったみたいだ。

「君、名前は何ていうの？」

「……………ティア……………それが私の名前……………」

「ティア？それがあなたの名前なの？」

「うん……………」

よく見るとただのいたいけな少女じゃないか……

誰がこんなことを……

「ティアちゃんここに来た理由わかる？」

「分からない……なにも覚えてないけどなんか貼られた時にいた人は覚えてる」

何かは貼られた……多分、札のことだろう。

「だ、誰がいたの？」

「えと、ね……の……さん……」

どうやら曖昧なようでこれ以上思い出させるとこの子になにか後遺症が残るかもしれないのでやめておいた。

「ありがとうティアちゃん、ここでゆっくりして行ってね」

しかし……ね、の、さん……か……

多分容姿を言っているのだろうがほんとによく分からない

……さん……は、お兄さんとかお姉さんのことを指しているんだろう。

ねとのは分からない。

私がそんなことを考えているうちにも敵は守矢神社に近づいていた。

6 話

壊れていく現実

ティアアちゃんが守矢神社に住んでからはや2日、もう慣れたみたいだった。

「おい！翔！醤油くれ！」

「お前の10cm前にあるよ」

「あれ……………なんかデジャヴ……………」

こんな感じで守矢神社はより一層賑やかになった。

すると誰かが外で叫んでいた。

「諏訪子さん！神奈子さん！早く来て!!!」

外にいたのは……………地霊殿の妖怪だった。

私達は急いで地霊殿へ向かった。

向かう途中には永遠亭の兎だろうか？

たくさん医療道具を持って走っていた。

私達が部屋へ入ると……………

お空さんが過呼吸で苦しんでいた。

「お空ーいやよー死なないでー」

さとりさんが悲鳴のような叫びをあげ…
となりでは永琳さんが……

「鈴仙！血液パック！」

「はい！」

「……………なんだよ……………これ……………」

「いや！お空！頑張つてよ！ねえ！」

「こいしさんも必死に呼びかける。

「お空！お空！耐えろ！」

お隣さんも叫んでいた。

「もう……だめよ……」

その言葉を聞いた瞬間、世界が止まったような気がした。

「嘘……嘘よ……永琳……永琳……永琳！続けてよ！」

さとりさんが永琳さんにしがみつく。

「い、いやあああああああああ!!!」

こいしさんは膝を落として前かがみになり泣き叫ぶ

そう、この時を持って

八咫鳥

霊鳥路 空は息を引き取った。

私も床に手を付き、大泣きした。

諏訪子様と神奈子様はただ目を見開いて呆然としていた。
椎名くんも泣いていた。

「ちくしょう………なんで救ってやれなかったんだ……

くっそおおおおおおお!!!」

椎名くんが何回も壁を殴る。

それから3時間後、さとりさんとこいしさんは落ち着いて、今はお空さんのとなりで寝ている。

私達は永琳さんの話を聞いていた。

「病名はないわ……核の事に何かあったんでしよう……また何かあったら報告するわ」と、永琳さんは言っている。

私は地霊殿の入口に一人座っていた。

「何でこんなことになっちゃったんだろ……」

独り言を呟いているとお隣さんが出てきた。

「お、お隣さん……もう大丈夫なんですか？……」

「ああ、大丈夫だよ……」

お隣さんの目はもう生きる意味を失っていたみたいだった。

「ごめんなさい……もつと地霊殿に来る頻度を増やして、異変に気づくべきだったんです……」

私はまた涙目になり、お隣さんに謝罪する。

「いいや……1番身近にいたあたいですら気づかなかったんだ……誰も悪くない……だからこそ……あたいが……親友のあたいがお空のことをもつと気にかけていればよかったです……」

お隣さんは私の胸に飛びつき、声を上げて泣いた。

さとりさんが起きて間もないころ、私はまた絶望を押し付けられた。「お空を殺したのは核です。」

そのためお空に核を取り付けたあなた達二人を許さない
地霊殿の牢で罪を償ってもらいます」

「な、何ですか?!」

私はさとりさんに向かって抗議した。

だが、神奈子様がそれを手で制し、

「分かった、大人しくついていくよ………」

「早苗、翔とティアの3人で仲良くするんだよ……」

こうして、守矢神社の神様はいなくなつた。

ティアちゃんは寝て、私と椎名くんは縁側で月をぼーつと見ていた。

「ねえ、椎名くん……」

「なんだ？」

「どうして、私の周りは不幸になるの？……」

「……………」

椎名くんは黙って私の胸に抱いていた愚痴を聞いていた。

「なんで……友達も死んで……大切な人と別れて……もういや！」

「早苗……今くらい、溜めてるものぜんぶ吐き出しちゃいな……………」

椎名くんが優しく、包み込むような声とまるで全てを守ってくれるような目で私に言った。

感極まって私は椎名くんの胸に抱きついた。

「うわああああああああ!!!」

無我夢中に泣いた。

私……やっぱりこの人が好き……大好き……でも今はその気持ちは奥底にしまわないと
いけない……

そう……私の心に言いつけるのだった……

7 話

異変の黒幕と意外な過去

「ご、ごめんなさい……………」

「大丈夫だよ……………もういいのか？」

私は数分の間、椎名くんの胸で泣いてしまっていたようだ。

「うん、ありがとう……………」

「なら良かった、よし！ティアが起きる前に夕食作るか！」

ちなみにティアちゃんは全ての事情を知っている。

話すのに心がいたんだがティアちゃんも泣きながら了承してくれた。

諏訪子神奈子様は当分戻ってこない……………こんな時こそ守矢の巫女が頑張らないと！

と、自分に活を入れ…

「椎名くん、暇だから私も手伝うー！」

こうして1週間がすぎたころ

「し、椎名さん！地底が……………」

「どうやら地底の方で大爆発が多発しているらしい。

「な、何があつたんだ……………」

地底に行くと、さとりさんが

「そんな…………お憐やめて！」

「うるさい！あたいはあんたを許さない！」

なんと、お憐さんがさとりさんに…………いや、地霊殿に攻撃していた。

こいしさんが弾幕で対抗するも、一瞬でやられた。

「な、なんて強さなの……………」

あの弾幕…………見たことない…………

「くそ、やめろ！お憐！」

椎名くんが叫ぶ、

「あたいはあんたを待ってたよ、ティアを倒したアンタにね……………」

「ど、どういう事だ?!」

「ティアはね、あたいの涙から出来た結晶なんだよ……………」

ようやく実験の成果が出たさ……………私の細胞の一部がティアに入っているんだ……………」

「そ、そうなのか?!ティア！」

ティアちゃんは黙って頷いていた。

「じ、じゃあの札は何なの?!」

私が問う。

「あの札は核によつて親友を苦しめた守矢神社への復讐さ……あれはあたいが作ったんだよ……」

「な、何でそんなことを……」

「少し昔の話をしようか……」

あたいが地霊殿に入る前、姉と二人暮らしだった……

姉の名は火焰猫蓮。彼女の力はこの幻想郷でも指折りの実力者だった。「死神」なんて呼ばれてたこともあったかな。

その時に、もうお空は地霊殿にいてね……核エネルギーを制御しきれなくて、異変になつたんだ……

でも、そんな時、蓮は地底の核の暴走を止めに行くと言つて、家を出た。それつきり姉は帰つて来なくなつた。

結局姉の死体が見つかつて、核に巻き込まれたのが原因だったらしいよ……

私は地底が大嫌いだった……大切な人を殺し、あたいを一人ぼっちにして……だからあたいは核を作つた張本人、守矢神社が許せなかつた」

お燐さんの周りにとんでもなく密度の高い弾幕が貼られた。すると、椎名くんからは今まで感じたことないくらいの妖気を放ち、尾骶骨あたりの

蛇は………

「1、2、………6匹………凄………」

「お前は親友を利用し、自分の自己満足でその親友を殺したんだ。」

椎名くんが怒りを込めて言う。

「やめろ！………これ以上言ったら殺すよ………！」

「やってみろよ………少なくとも俺はお前に負けない………」

そう言つて椎名くんの蛇はお燐さんの方へ一直線に攻撃した。

「こんなものなの？つまらないよ！翔！」

お燐さんはそれを楽々受け止め、無傷で弾いた。

「いいや、次で最後だ」

厄災「深淵の隕石」！」

お燐さんはあつという間に地面に叩きつけた。

「あたいの負けだ………」

「お燐………お前はお空に会つたら、最初に謝罪するんだぞ………」

「な、何言ってるんだよ………お空は死んじやったんだぞ?!」

「いや、俺が生き返らせる」

「……………え？」

8話

異変解決

「な、何言っているんだい翔？

お空は死んじまったってのに……」

椎名くんはほんとお空さんを生き返らせるのかな？

信じ難い話だが今はそれに縋るしかない。

「地霊殿に行くぞ……」

「う、うん……」

「言つとくが生き返る確率は30パーセント程かな……」

ただ、俺もお空に生き返ってもらいたい……全力は尽くすよ

つと、その前に……お燐、あの札貸しな……」

そう言つて札を受け取ると椎名くんは目をつぶった。

すると札が光の玉となって消え失せた。

「この世に存在するこの札を全て分解した

これで呪いは解けたと思う」

地霊殿に着くと、さとりさんといしさん、諏訪子様と神奈子様もいた。

するとさとりさんが二人の神様に

「ごめんなさい……私の早とちりで諏訪子さんと神奈子さんが犯人だと思つてしまいました……」

「まあ、いいよいいよ……核を作ったのは事実だから……」

諏訪子様が頭を下げているさとりさんに言う。

次にさとりさんはお燐さんの方を見て

「お燐、あなたはこの異変が終わったあと、きついお仕置きをしますからね……」

私はさとりさんの心の広さに驚いた。

自分のペットを間接的に殺したお燐さんをまだ地霊殿にいさせるということに……

「で、でもさとり様……あたいはお空を殺したんですよ……」

「私はあなたの過去を知らなかった……その点では私にも非があるわ……ごめんなさい……だからまた、私のペットでいてくれるかしら?……」

「は、はい!喜んで!」

「はは、ここまでされたらお空をほんとに生き返らせなきゃいけないな……」

椎名くんがさとりさんに説明する。

「お空に俺の妖力をぶち込む、お空の体がそれに耐えられなかったら負け、耐えたら生き返るだろう……」

「ま、待つてください翔さん！」

椎名くんが廊下に出ようとしたところでさとりさんが止める。

「お空が帰ってくるのは地底のみんなが願っていると思います……勇儀さんやパルスィさんも呼びます」

「ああ、分かった」

数分後、地底の人たちだけでなく、霊夢さんや魔理沙さん、紅魔館や永遠亭の人たちも寝室に集合した。

「翔……あなたをお空を生き返らせるんでしょ……」

いくらあなたに八咫鳥の血が流れているからって……」

永琳さんが椎名くんに言う。

「ち、ちよつと待つて椎名くん……あなた吸血鬼でしょ？」

どうして八咫鳥の……」

「暴走したお空の目玉を切った時、八咫鳥の血と妖力が俺の剣を通して体内に入り込んできた

多分、お空にその妖力と血を流し込めば心臓がわずかでも動くはず……その後は永琳……お前に任せるぞ……」

「ええ、無謀かもしれないけど、あなたはそれに賭けるのね……」

「ああ、じゃあ行くぞ……」

椎名くんがお空さんに近寄り、目をつぶり深呼吸をして、蛇をお空さんの腹に指した。
すると……

「かはっ」

椎名くんが血を吐いた。

な、なんて妖力なの……

椎名くんでもコントロール出来ない程の妖力なので、椎名くんの身体にも影響が出るらしい。

「くそ、耐えろ……俺」

次第に椎名くんの力が弱くなり、息を切らしていた。

「が、頑張れ！翔！」

こいしさんが応援する。

それにつれて、全員が「翔！頑張れ！」「お空も耐えろ！」

と、叫ぶ。

「はあはあ、ラストスパートだ……お空、耐えろよ……」

一匹の蛇からとんでもない妖力が流し込まれた。

多分、蛇ごとお空さんの体内に入れて、生き返らせるつもりだろう。

すると、流し終わったのか、椎名くんがムラサメを出した。
「く、ああああああ!!!」

叫びながら妖力を流していた蛇を切断した。

すると、その蛇は吸い込まれるようにお空の体内に入った。
相当な痛みなのに耐えた椎名くんが凄かったと思った。
すると、椎名くんは尻餅をつき、息を切らしていた。

「せ、成功か?」

神奈子様が椎名くんに問いかける。

「いえ……まだ分かりません……」

俺に出来ることは全てしました……後はお空次第です……」

「そ、そうか……」

その数分後、お空さんが唐突に

「ゴホッゴホッ……」

咳き込んだ。

「せ、………成功だああああ!」

地霊殿だけでなく、ここにいた全員が喜んだ。

「よ、良かった………」

椎名くんがそう言葉を零すと力が抜け、倒れ込んだ。

この後は永琳さんが永遠亭に運び、お空さんを治療した後遺症も残らず、完全に回復したそうな……

これは後から分かったことだが……

ティアちゃんの言っていた。

ね、の、さ、ん……は

ねこみみのおねえさん。だということが判明した。

こうして、椎名くんの活躍で異変も解決し、お空さんは生き返ってお隣さんもいつも通り地霊殿で暮らしている。

この異変は後に地底死神異変と呼ばれるようになった。

9話

お互いの恋心

異変が解決し、二週間ほど経った。

地底はまだ復興中だが、地霊殿の方は何とかなつたみたいで、お空さんとお燐さんは前と同じくらい……いやそれ以上に仲良くなり、互いのことを更に認め合う仲になったらしい。

守矢神社の方は何ら変わりなく、椎名くんの傷も完治し

普通の生活を送っていた。

私は午後の3時に椎名くんと2人きりで縁側でお茶をするのが日課だ。

「ところでさ椎名くん」

「なんだよ東風谷？」

私はこの地底死神異変の間忘れていたが彼のことが好きだったんだ……

私は思い切つて椎名くんに近づこうとした。

「い、東風谷って呼ぶのめんどくさいでしょ？」

早苗って呼んでいいよ……」

恥ずかしい……」

「あ、ああ、分かった。早苗」

下の名前……嬉しい……

「私も翔くんって呼ぶから」

「お、おう」

「んで、話変えるけど……」

「切り替えはええな……」

翔くんが呆れていた。

「いいの！」

それでさ、お空さんを生き返らす方法ってどうやって思いついたの？」

翔くんが驚いた顔で言ってきた。

「……………お前身に覚えはないのか？」

「え？ 私何もしていないじゃない……」

「まさか無自覚で……」

んーとな、お前がくれた首飾り、変な妖力がこもっててな

俺が生き返らせる方法を悩んでた時にその首飾りが急に喋り出して教えてくれたんだらうけど……

お前の能力って確か「奇跡を起こす」だよな？」

「う、うん、そうだけど……」

「この首飾りを作る時に自然に奇跡の魔法が振りかけられた……のかな？」

つまり、お前は幻想郷に来る前からその能力を持っていた訳だ」

「そ、そうなのね……まあ、役に立てたのなら良かったわ……」

「ああ、ほんとにあの時はこの首飾りのおかげだ、ありがとな……」

翔くんが優しい笑顔で見つめてくる。

「や、やめてよ……恥ずかしいじゃない……」

私は顔を赤くして、手で覆う。

その時に私はハツと思いつく。

「じ、じゃあ翔くんがくれたこの髪飾りも何か魔法がかけられてるの?!」

大いに期待した。

「いや、俺のはそんなことないと思うぞ」

私があつくりと俯く。

「……まあ、もらっただけで嬉しかったけどさー」

すると翔くんが口を開く。

「早苗ももう大人なんだからその髪飾り外したらどうだ？恥ずかしいだろ？」

と、翔くんがしょーもないことを聞いてきた。

「はあ……………何言ってるの？これのおかげで私はいじめから開放されたんだよ？私はいつもこの髪飾りと翔くんには感謝してるんだから……………」

私がそう言うのと、翔くんは少し顔を赤らめ目をそらした。

「そ、そうか……………ならいいんだが……………」

あれ、ちよつと可愛い……………」

不覚にも思ってしまった。

「あーれれー？最強の椎名翔くんが照れてらっしやいますよー？」

と、ちよつとからかってみた。

「お前今日の晩ご飯枝豆だけにするぞ」

最強の仕打ちだ……………」

「げ、ごめんなさい……………」

「……………地底の復興の手伝いにでも行こうかな……………」

翔くんがそんなことを言った。

「じゃあ暇だし私も行くー！」

そうして私は地底へ向かうのだった。

俺は東風谷早苗に恋をしているのだと思う。

まだ自分でもわからないが、早苗と話すと鼓動が早くなる、
幻想郷にに来てからだ。

俺は彼女の魅力にたくさん気づき、その中でも自由奔放で、面倒見もいいなど、いいところをあげればきりがなくらいある所に惹かれたのかもしれない。

一番嬉しかったのは俺があげた髪飾りをいつまでも大切に付けていてくれたこと、これは何より嬉しかった。

「な、なあ早苗」

俺は地底に向かう途中、早苗と2人で歩いていた。

「ちよつと弾幕ごっこでもしないか？」

「いいけど……殺さないですよ？」

こいつは何を疑ってるんだ。

「分かってるよ……じゃあ……始めるぞ」

……………案の定、と言っているのか分からんが俺が勝った。

「最初から分かってたよわよ……どーせ私は翔くんには勝てないのよね……」

「な、なんかごめん……」

そうして俺達は地底へ向かい、復興作業に入った。

地底死神異変 解決 宴会まであと2日を切った。

10話

決意

私は翔くんと一緒に地底の復興作業の方へ向かった。

翔くんは地底死神異変を解決した張本人なので、そこら辺の妖怪によく絡まれる。

特に女性。

「椎名く〜ん!」

「ん? おお、パルスイか……」

パルスイさんは翔くんのことがよほど気に入ったらしく、性格もガラツと変わっている。

多分翔くんに好意を抱いている。

「今日ね、地上のみたらし団子買ったんだ!

一緒に食べよ?」

私は何故かムツとしてしまった。

パルスイさんがそれに気づいたのか、ちらつと私の方を見て、にやつと笑った。

「……………ぶっ飛ばしたい……………」

私もやっぱり翔くんのことがそれほど好きってことなのかな?

………つて、何考えてるんだ私!!

「あ、あの…パルスイさん…今日は地底の復興に来たので……」

私がイライラしながらパルスイさんに言う。

「ええ〜いいじゃない、もうほとんど終わったんだし…ね♪」

そう言うと、パルスイさんは翔くんの方に向き直った

「ごめんなパルスイ……今日は復興作業に来たんだ……」

みたらし団子はまた今度食べような?……」

と、パルスイさんの頭を撫でた。

「えへへえー、椎名くんがそう言うなら仕方ないなあ〜♪」

撫でてる途中にも私の方を見てニヤニヤしていた。

ほんとにこの人性格変わったな………悪い方に……

地底の復興作業がほとんど終了し、元の賑わいを取り戻しつつあった。

ちなみにティアちゃんはお燐さんの親族ということになったので、地霊殿の一員に加わった。

そうして、守矢神社も一段落付いたころ……

「私って今の関係でいいのかな……」

私は翔くんと今の関係に疑問を持ちつつあった。

好きな人と笑いあったり、喧嘩したりするだけ……

確かに楽しいけど所詮肩書きは友人ということ。

それ以上の関係にはなれない。

「告白……してみようかな……」

もちろん私にはそんな勇氣はない。

「どうしましょうか諏訪子様？」

1人じゃ成功はしない、仲間のアドバイスってやっぱり大事だ。

翔くんが風呂に入っている合間を見て、諏訪子様にご相談した。

「ど、どうしろって言われても……別に私も神奈子も恋愛してた訳じゃないしな……」

「ああ、そうですか……」

そうだった……完全に盲点だった。

この神様2人はまともな恋愛どころか、人に恋をしたことがないんだった。「もう、一人で頑張るしかないか……」

神社の中には恋愛に関して頼れる人がいないので、自力で翔くんに想いを伝えるしかない……。

「やっぱりさりげなく好きって言ったほうがいいのか……」

それとも雰囲気を作って、緊張した中で告白した方がいいのかな……」
考えれば考える程頭が痛くなる。

「おい早苗。風呂空いたぞ〜」

後ろからその当の本人が私に声をかける。

「!!……ああ、うん、ありが……」

私はビクツと全身を強ばらしたあと、ドキドキして後ろを振り返るがその気持ちは5秒で吹き飛ぶ。

「ちよ、ちよつと翔くん!?!」

あなたなんて格好してるの!?!//////」

そう、今の翔くんの格好は上半身に何も着ていなかった。

「え、いや、風呂上がりだし……」

この人風呂上がりは普段からこんな格好なのか……

折角更衣室というものがあるのにつ……

「良いから！服着てきて！／＼／＼」

「あ、おい……押すな早苗……」

私は翔くんの背中を押して、更衣室に無理矢理入れさせる。

翔くんが更衣室に入っただけであと

「それにしても……いい体してたな……」

翔くんの体は程よいくらいに筋肉があり、女性なら見惚れるほど綺麗な筋肉だった。

腹筋なんて綺麗なシックスパックで、背中を押した時の体の柔らかさに私は心臓が高なっていた。

「あの体で抱きしめられたら安心しちゃうな……」

「って、なに考えてるの私いっ／＼／＼」

と、自分で勝手に妄想して、勝手に照れてる私。

そうして、ようやく翔くんが服を着て出てきた

「早苗。今度こそ風呂空いたぞ……？」

「う、うん、ありがと……」

私が次に更衣室に入った。

服を脱ぎ、風呂場に入って、湯船に浸かる。

私の手にはまだ翔くんの体の感触が残っていた。

その感触が後押しになったのか、私の中に一つの勇気が目覚めた。

「決めた……私明日告白する……！」

その決意を言葉にし、まだ感触の残っている手を握りしめ、天井に掲げた。

final story

幼なじみへの恋

風呂から上がり、私は一人縁側でお茶をしていた。

ちなみに翔くんは今頃晩御飯の用意をしてくれている。

神社中にいい匂いが漂っている。

しばらくすると神奈子様が縁側にやって来た。

すると

「早苗、諏訪子から聞いたよ。

翔に告白するんだよな？」

と、すつごい笑顔で聞いてきた。

「ち、ちよつと!?! 本人に聞こえたらどうするんですか?!」

と、私は慌てながら神奈子様を睨む。

「ハハハ、ごめんごめん……………」

でも、ぶつちやけ私はよした方がいいと思う」

と、すぐに真剣な顔に切り替えて私に言ってきた。

「な、何ですか……………」

「あの子の過去を聞いた。」

早苗も翔の幼少期から仲が良かったんだよな?」

「え、ええ、まあ……」

「あの子が生まれてからのことを聞いたんだ。」

もちろん翔もお姉さんに聞いた話だから少し曖昧らしいがな」

姉……ということは彩菜さんの過去でもあるのか……

「彼はもともとこの幻想郷の住民だったらしいんだ。」

そして、姉の名はエリナ・カーティス。

この名前は早苗も知っているだろう?」

私は今年一番の驚きだった。

その名前は幻想郷じゃ知らない人はいない。

なんせ幻想郷と月を統一し、一度王になった吸血鬼の王家で、幻想郷の中じゃその右に出る者はいないくらいの強者なのだから

「え、それじゃ翔くんもその吸血鬼の王の弟なんですか?……」

神奈子様は首を横に振った。

「エリナと翔は親族ではあるが実の姉弟ではない。」

正しくはエリナの兄の息子

翔の叔母にあたるな……

エリナ……災厄の主は10歳の時に既にこの世界の王だった。翔は0歳だったらしいけどな

一度、その吸血鬼と幻想郷で全面戦争が行われ、吸血鬼側が敗れた。

その時、処刑されそうになった兄はエリナと翔だけを外に世界に追放し、兄はその場で首を切られたらしい

翔はこの事実を小学生の時に知ったらしい、相当辛かったんだろうな……」

「そんな過去が……」

でも何で私が翔くんに告白しちやダメなんですか？」

今のを聞く限り、その理由が見えてこない。

「翔は、幻想郷に戻ってきたことで吸血鬼の王家の力が目覚めたんだ……あの黄色く光る目はその王家の能力だろう……」

多分、彼を怒らせると幻想郷が減じる。

幻想郷と月の連合軍でも彼1人には敵わないと思う

それほど危険な存在なんだ……

ただ、幸いにも翔はかなり温厚な性格だから今は平和だが、それほど強力な吸血鬼と

恋人になるのは……私としては気が引ける……」

と、神奈子様は私に言う。

でも、私はそれに対抗する。

「私は……別にそれでも構いません……確かに翔くんの方は幻想郷の中じゃ一番危険です」

でも、強さなんて関係ない……結局は好きなんです。

種族だとか力だとかそんなので嫌いになるほど私は落ちぶれてはいません……

吸血鬼だろうと王家だろうと私は翔くんのことが好きです」

私は笑う。

はじめて自分の正直な気持ちと言えた。

神奈子様は諦めたように溜息をつき、その後すぐに輝かしい笑顔で私を見る。

「そうか……そんなに彼が好きなんだな……」

私は止めないよ……寂しいものだな……諏訪子と私以外にも大切な人が早苗に出来ちゃうなんて……

頑張りな早苗の恋を応援するよ……私は出来ることならなんでも協力しよう……」

「あ、ありがとうございますー！」

私は神奈子様に深々と頭を下げた。

「神奈子様ー? ご飯ができましたよー」

早苗も……………つて何頭下げてんだお前……………」

悪いタイミングで翔くんが縁側に来た。

「何でもないわ♪さ、早くご飯食べようか?」

諏訪子呼んできてくれるかい?」

神奈子様が翔くんに言う。

「は、はい、わかりました…」

そう言つて翔くんは縁側を出て、屋根にいる諏訪子様の元へ飛んでいった。

「危なかつたな……………もう少して話を聞かれるとこだった♪」

と、何故か笑いながら私に言う。

「何笑つてるんですか……………」

「いやあ? 何でもないよ?」

そんな会話をしながら私と神奈子様は食卓へ向かった。

食事中……………

「ああ、そう言えば明日は宴会だね♪」

諏訪子様が私たち3人に言う。

「完全に忘れてた……会場どこでしたっけ？」

翔くんが諏訪子様に聞いた。

「確か……地霊殿……かな？」

「大丈夫ですか？何も差し入れとか無いですけど……」

私が聞くと

「大丈夫だよ♪今回の宴会の主役翔だから♪」

翔が差し入れてっことで♪」

「いや……俺聞いてないっすよ……」

「まあ、異変解決したの翔くんだしね……」

明日は覚悟しといた方がいいわよ……」

酔った霊夢さん達に振り回される……」

「まあ、私達も出し物するからね。忙しいよ♪」

諏訪子様が翔くんに言う

「え、俺何も聞いてないから内容知らないですよ？」

「大丈夫だよ、翔くんは参加しないから」

どっちかっていうと見てもらう側だからね」

「そ、そうなのか……」

じゃあ霊夢達に俺は振り回されるのが明日の役目か……」

「まあ、楽しみにしときなよ♪」

「はあ……ちなみに開始時間は？」

「午後の6時から10時までだったかな？」

「結構長いんですね……」

そんな会話をした後、私達は眠りにつく……

そして次の日の朝、宴会があるからなのか私は少し緊張していた。

「……」

私はぶつちやけ宴会で翔くんがちやほやされるのはあまりいい気分ではない。

異変を解決してからの翔くんの人気は絶大だから仕方ないのだが、パルスイさんみたいに好意を抱いている人からしたら宴会は大きなチャンスなのだ。

「嫌だな……」

私が境内の掃除をしていると……

「おはよー早苗ー」

まだ目が半開きで寝癖がついている翔くんが出てきた。

「そんな格好で外に出ないでよ……早く顔洗ってきなさい……」

「はあーい……」

寝起きの翔くんちよつと可愛いな……

今日は宴会だ……

多分、早苗にアタックするチャンスだろう。

今日は頑張らないとな……

俺は顔を洗いに洗面所に行くと、

「翔、早苗のこと好きなんだね？」

「うおわあ!？」

何も無いところに急に諏訪子様がのろーっと出てきた。

「び、びつくりした……何ですか……?」

「翔は早苗のことが好きなんだよね？」

諏訪子様が俺の心を読んだかのように聞く。

「何で知ってんすか……まだ誰にも言っていないのに……」

「え、当たり前なの？」

「え?」

「……………ええー!？」

諏訪子様の声が洗面所内に響いた。

まさかこの神様、てきとーに言ったのか?!

「し、ししし翔?!それホントなの?!」

「は、はい……ほんとですけど……」

「そ、そっか……」

まあいいや、朝ごはんお願いね……」

そう言つて諏訪子様は消えた。

「一体何だったんだ？」

そうして俺は顔を洗って台所に向かった。

午後5時半

私達守矢神社一行は地底へ向かった。

地底にはかなりの人がいた。

天界や紅魔館、永遠亭の面々や、月の住民も来ていた。

「今回の異変ってこんなに大きかったっけ？」

私が疑問を抱くと

「この異変の張本人、お燐は一度月を襲撃してな……あの札は元々は月の宝で、それを奪うために……って感じかな……」

神奈子様が私に答えを教えてください。

そうして私が地霊殿に入ると……

会場が一気に盛り上がった。

それから10分後

「えー、それでは今から地底死神異変の解決を祝って地底宴会を開会したいと思いますー
すー！」

こいしさんがマイクを持って地霊殿全体に響くように言った。

「はじめ、霊鳥路空さんに言葉をもらおうと思います」

こいしさんがお空さんにマイクも手渡す。

「え、えつとー、れ、霊鳥路空です。」

私はこの異変で一度死亡しました。でも、私は椎名翔という吸血鬼に命を救われました。私は今でも翔に感謝しています。ありがとう。

そして、この異変の張本人でもある。火焰猫燐、彼女は大罪を犯しました。

でも、お燐は昔に姉を亡くしています。

その気持ちを考えたら私は今でも胸が張り裂けそうです」

お空さんがらしくない言葉を並べる。

「私はずっとお燐のそばにいたい。」

だからみんなもお燐のことを許してください……」

「お空……」

隣でお燐さんが涙を流してる。

「もちろんだーっ!」

「私達はお燐のこと大好きだよー!」

会場にいる全員がそれを認めた。

「みんな……ありがとう!」

お燐さんもみんなに頭を下げる。

「えー、それでは……地底死神異変の解決を祝って……」

乾杯!!」

「乾杯!!!」

こうして地底死神異変の解決宴会が始まった。

私はずっと翔くんの隣をキープしていたが、案の定パルスイさんやほかの妖怪達が翔くんに寄ってくる。

するとパルスイさんが

「ねえねえ、椎名くんって好きな子いないのー?」

まだ酒は回っていないだろう……多分、素で聞いている……

「い、いや、あのな……」

そんな事でわいわいがやがやと、宴会が進み、午後9時半宴会の醍醐味、グループでの出し物が行われた。

紅魔館組や、博麗神社、地霊殿組の漫才などが出された。

ちなみに守矢神社は最後だ。

そしてとうとう私達の番だ。

まず最初は諏訪子様と神奈子様のギャグから出て……

「次は早苗の番だよー!」

緊張する……

私がステージの真ん中に立ちマイクを持った。

「え？何するの？」

「何だろ……？」

会場にいるメンバー達が好奇心で満ち溢れていた。

私はすうーつと息を吸いこんで語り始めた

「私には好きな人がいます」

私がそう言うと、

「おぉー!」

「誰誰!」

と、今日の宴会の中で一番盛り上がっていた。

「私の好きな人はいつも優しくくて

いつも私のことを見ていてくれました。

いつの間にか彼のことばかりを目で追っていました

でも、たまに悲しげな目をしています。

そんな彼を私は守りたい、そう思うようになりました

その彼の名は……………」

私は今年一番勇気を振り絞ったかもしれない……

振られたらどうしよう…嫌われないかな……?」

など、そんな気持ちの頭の中をぐるぐる回っている。

そんな時、私の髪飾りが目に入った。

そうだ、これはあの人にもらったものだ……

そう思うと、勇気が満ち溢れてきた。

私は一度深呼吸をして……

こう告げた……

「椎名 翔くんです……」

刹那、会場がどつと盛り上がった。

私が翔くんの方を見ると、顔を真っ赤にして固まっていた。

すると、諏訪子様が翔くんの元に駆け寄り、

「さっ、ステージに上がって♪」

と、翔くんの腕を引つ張った。

その周りにいたパルスイさん達は やられた……みたいな顔で私を見ていた。

しかし、私にそんなことを考えている暇は無かった。

やばい……すっごい緊張する／＼／

しばらくすると翔くんがステージにやって来た。

私は翔くんの正面にたつて……

「改めて言います。

私は翔くんのことが好きです。

外の世界にいた頃から……あなたの事が大好きでした。

あなたが吸血鬼で私は現人神です……種族は違いますがそんなの関係ない……

私はあなたの恋人になりたい……

翔くん……私と付き合ってください！」

言いたいことは言えた！

後は翔くんの返事を待つだけ……

「俺は……」

1度も恋をしたことが無かった、あつちの世界でも女性をそんなふうには見ていなかった。もちろん早苗も……

でも、幻想郷に来て、お前と一緒に住んで……

俺はお前の魅力にたくさん気づいた。自由奔放で自分勝手に……外の世界から思ってたけど早苗はほんとにどうしようもないやつだった……」

翔くんはどんと私を貶してくる……

もう、振るなら振ってくれ……

「でも、やっぱりおまえのことが放っておけなくて、いつの間にか俺も恋を覚えるようになった。そう、誰でもない早苗にな……」

「……………え？／／／／／」

翔くんが息を吸いこんで私に告げた。

「俺も早苗のことが好きだ……いや、大好きだ
俺と付き合ってください!!」

翔くんが手を差し出してきた。
もちろん私はその手を握った。

その刹那……

私の手を引き、そのまま私は翔くんの胸の中に収まった。

「ありがとう……早苗……嬉しいよ……」

私の目尻から涙が零れた。

瞬間、歓声が上がった。

「おめでとー!」

みんながそう言ってくれた。

私と翔くんが離れると、私は感極まって翔くんの唇に私の唇を重ねた。

!/?
/
/
/
/
/

翔くんは驚いていたがすぐに目をつぶり、私を抱き寄せた。
そして唇を離すと……

「俺は絶対にお前を手放したりしない……」

早苗の恋人に見合うように頑張るよ……」

翔くんがいつも以上に優しい目と柔らかい声で私を包み込んだ。

「私も翔くんと、これからを2人で歩んでいきたい……」

ずっと……ずっと一緒にいたい！」

私は泣きながらも喉から精一杯の声を出した。

「ああ、これからよろしくな……早苗」

私は気持ちを……翔くんのこと大好きなこの気持ちを……紡いだ。

「翔!!」

この日、私ははじめて翔くんのことを「翔」と呼んだ。

異世界転移しても幼なじみのあなたに恋をする
く妖怪の君とふたりでく

e
n
d
…
…
…

a f t e r s t o r y

愛してる

私が翔に告白してから三ヶ月経ったある日、異変が起きた。

その異変は……

「いつになったら夜があけるの？」

もう8時なんだけど……」

「んな事言われてもな……」

「ううーさくむい、ねえ翔もつとそっち寄っていい？」

「あ、ああ、いいぞ」

「ふふふ♪あつたかぁーい」

と私、東風谷早苗は椎名翔にデレデレなのである。

ファーストキスも済ませたからか、毎日朝、昼、夕方、晩この4回はキスをする。と
いうことが日課になっている。

今はちょうど朝の8時……なのだが、いつまで経つても外は真っ暗だ、翔が言うには
「多分永琳の仕業だろ、害はないし、ほっとけ」という。

「ねえ、翔。朝のチューは？／／／／／」

「言われなくてもわかってるよ……………ん……………」

「ん／＼／＼／＼……………ちゅ……………れろ……………じゅる……………」

と、まだ付き合って3ヶ月なのにもう舌を入れたディープキスをするようになった。

「はあ……………はあ……………早苗／＼／＼／＼」

「まーだ♪もつと……………しよっ」

この後は……………想像に任せます……………

この異変は結局永琳さんと輝夜さんの仕業だったらしく、

霊夢さんと何故か翔も異変に参加した。

どうやら地底死神異変から翔も異変解決が生業？みたいになっているらしい。

「じゃあ霊夢、永琳を頼んだぞー！」

「分かったわー！」

翔が永遠亭の廊下を歩くと…

「う、薄暗いわね……………」

「なんだよ早苗……………怖いのか？」

「お前も巫女なんだから少しは霊夢を見習えよ……………」

こんな時にまで霊夢さんの話題を出す。

少しは私のこと心配してよ……そう思った私は……

「うう〜」

と、泣き真似をした。

昔から役者なみに涙が出るのが早かったので翔のことを小さい時からずっとこれで騙して遊んでいた。

「お、おい早苗？」

おま、何泣いてんだよ……

大丈夫か？」

と、私の顔をのぞきこんだ瞬間、私は翔の首に腕を回し、キスをした。

「?!……………」

「ん……………ちゅ……」

こんな時でも翔はすぐに対応してくれる。

「ぶはあ♪いつまで経っても私が泣いた時の反応は変わらないね♪」

「卑怯だぞおまえ……………」

「えへへえ……………」

「……………何やってるのよあんた達／＼／＼」

隣の部屋から輝夜さんが出てきた。

「あなた達の声丸聞こえなのよ!？」

「ここがかっこよく待とうと思ったのに……………」

めっっちゃ気まずかったわ?!」

と、悔しそうに私達のことを怒る。

「とゆうか異変の時くらいそーゆうのやめなさいよ!」

「はあ……………ごめんなさい……………」

「はあ〜もう冷めたわ……………この異変……………永琳に術解除してもらおうように言うから……………」

「やったあ! 私が異変解決したんだ!」

と、私は喜んでいたが……………」

「まあ、いいか……………」

翔は呆れる声でそういった。

次の日、文々。新聞には「東風谷早苗と椎名翔のデュープキスで異変解決!!」と、大きな1面に書かれていたのは恥ずかしくて死にそうだった…とゆーかこの写真どこで手に入れた?!

それから9ヶ月後……………

「なあ、早苗……………」

「ん、なあに?」

私の翔の仲は変わらず、ラブラブのままだ…

「俺らって今日でちょうど9ヶ月だよな……………」

「そうね……………時が経つのは早いものね……………」

「俺もうそうやって数えるの面倒くさくなってきた…」

「何よそれ……」

翔が訳の分からないことを言う。

「だから、付き合って何ヶ月とか、めんどくさい……」

「だからもう、恋人やめようぜ……」

「……………はあ？」

「ますます言っている意味がわからない。」

「えーとだからさ……あの……」

翔が顔を赤らめ、こう紡いだ。

「俺と結婚しないか？／／／／／」

私は固まった。

「え？／＼／＼／＼／＼／＼／」

「はは、なんて顔してんだよｗｗｗｗ」

「し、翔……もう一回言ってる？」

私は聞き間違いだと思い、もう一度聞く。

「結婚しよう、早苗」

私は涙が溢れた

「はい／＼／＼／＼／」

この日、私と翔は夫婦となった。

結婚式にはあの宴会の時と同じくらいの人数を招待した。
幸せな時間だった……

ちなみに東風谷の姓だと、自分のに名前ダサイかなと思ったので椎名の方を取り、私は椎名 早苗となった。

子供を産み、今は子供2人で双子だ……

女の子で椎名 由奈、椎名 佳奈の2人。私と翔の可愛い娘だ。

別に結婚したからと言って、新しい家を作ったわけでもなく、巫女の仕事を辞めたわけでもない。

守矢神社で翔は主夫として、私は変わらず巫女として生活している。

「うわあああん!!」

「ゆ、由奈?! どうしたんだ?」

「お姉ちゃんがあたしの玩具盗ったあああ」

「こんな感じの仲のいい姉妹だ。」

「違うよ! これはもともと佳奈のだもん!」

「お、落ち着けお前ら……」

よし、ここはパパに任せろ……」

すると、翔の手からまた同じものが出てきた。

また能力使ったのか……せこい人だわ……

「これで困らないだろ?」

すると、由奈は泣きやみ、感嘆の声を上げた。

「わあく☆パパすごおーい!」

「すごいだろすごいだろ?」

と、天狗になっている。

「はあ、佳奈、由奈もう夜遅いから玩具片付けて寝なさい」

と、私が2人に言う。

「はぁーい☆」

と、二人同時に言った。

「ハハハ、お前らは仲がいいな……」

と、諏訪子様が言うのと

「うるせー幼女神！」

「んなつ?!」

2人が同時に諏訪子様を貶した。

「こ、こら！そんなこと言っちゃダメだろ?!」

「ハハハ、どこで覚えたんですかね？」

「まったく……早苗たちもちゃんとしつけしてくれよ？」

「でも、諏訪子様ほんとに幼女なんでいいんじゃないですか？」

「え？翔今何か言った？」

「いえ何でも」

「仲のいい姉妹になつて良かったじゃないか……」

さて、私ももう寝ようかな……おやすみ……」

神奈子様が欠伸をしながら言った。

「私も寝る……」

「はい、おやすみなさい……」

こうして、リビングには私と翔のふたりきりになった。

「佳奈と由奈を見ていると俺らが恋人だったころを忘れちやいそうだな……」

「そうね……ずっと2人の世話に取りかかっていたものね……」

ねえ、翔、久しぶりにキス……しよ？／／／／／

「ひ、久しぶりだから恥ずかしいな……」

ん……ちゅ……」

「ちゅ……ちゅ……んん／／／／／」

と、長いキスを試してみた。

「はあ……はあ、懐かしいな……キス」

「そうね……ねえ、もつと……したいな？」

「……もうどうなっても知らないぞ……」

そう言っただけで私達はまたキスをした。

夜12時

キスを終えて、私達はソファに2人並んで座っていた。

「ねえ、私のこと好き？」

「好きだよ……」

「えへへえ♪」

「なんか今日のお前変だな………いつも変か」

「ちよつと……」

「ハハハ、ごめんごめん……」

「もう結婚してから4年経つよね……」

「ああ、でも、俺はどれだけ年月が経とうとも早苗のことが好きだよ……」

「……………いや、愛してる……………」

私は彼の「愛してる」は聞いたことが無かった。

でも、確かに今翔の口から聞こえた。

私はそれが何よりも嬉しくて……………」

最愛の人に最愛の言葉を贈る……………」その気持ちだけを言葉に乗せて……………」こう紡いだ。

「私も……………」愛してるわ……………」翔……………」

東風谷早苗と椎名翔の恋物語はここで区切りがつき、次は夫婦としてこの物語を再スタートした。

紅の瞳

く永遠のヒロインく

1話

うさ耳の女性と永遠亭

「どっだよ……(´▽´)」

見渡す限り竹……

かぐや姫出てくるんじゃないか？

「つて、そんな事考えてる場合じゃねえ！腹減った！」

俺が1人そんなことを言っている……

「誰？……」

「!!」

うさ耳の女性が立っていた。

紫のかかった長髪に赤色の目。

すっげえ可愛い……

手で銃の形を作り、俺の方に向けてきた。

すると、突然その指先から紫色のビームが放たれた。

「うお?!」

やる気かよ……」

俺はミストルティンを持ち、全力で走りうさ耳の女性に突進した。

「無駄よ……」

そう言いながらうさ耳は連射してくる。

「遅い……」

俺はそう言つてその弾を全弾軽々と避ける。

「なっ?!」

うさ耳は驚き、その刹那俺はミストルティンをうさ耳の首元にかざした。

「………私の負けよ……」

「そうか……なあ、俺の話聞いてほしいんだが……」

俺がそう言つて詳細を話そうとする前に

「あなた外来人なのね……それに……まだここに来て1時間も経っていないでしょう……」

と、見透かしたように俺に言ってきた。

「な、何でわかるんだよ……」

「ああ、ごめんなさい……感覚で分かっちゃうのよ……」

と、クスクスと笑いながら……

やべえ超可愛い……

「と、自己紹介が遅れたわね　私は鈴仙・優曇華院・イナバよ、よろしくね」
「う、うど？」

んん？なんかよくわからん名前だな…

「鈴仙・優曇華院・イナバ。長いから鈴仙でいいわ

あなたは？」

「ああ、俺は椎名翔　一応妖怪らしいが…なんの妖怪までは分からない…」

「あなた吸血鬼ね……」

と、知らなかった事実を教えてくれた……

「え、あ、そうなのか？」

!!………づつ!!」

瞬間両足首に痛み。

俺は竹林を歩いている時、幾度となく罨にかかって、足を怪我した。(ほら、あの踏んだらガシャーン! ってなって挟まれるやつ) 誰が仕掛けたのかは知らんが……

「あ、大変! 怪我してるじゃない!

大丈夫? 歩ける? 永遠亭に行くわよ!」

「あ、ああ、ありがとう鈴仙……」

永遠亭って言うところがよくわからないが…

素直に着いていくことにした。

そうして永遠亭につき、俺は治療を受けた。

そこに居たのは医者は……

「あらうどんげ、患者さん？」

「さつき、迷いの竹林で会いました。まだ幻想郷に来て一時間も経っていない外来人です」

「そう……さ、ここに座つて？ 足に包帯まくわよ」

「あ、ありがとうございます……」

そうして俺は治療をしてもらい、その医者には色々と話した。

「私は永遠亭の医者 八意永琳よ うどんげとは師弟の関係よ よろしくね

……」

「椎名 翔です えっと、一応吸血鬼です……でも、血吸つたことはありません」

と、簡単な自己紹介を済ませ、鈴仙が俺に聞いてきた。

「ところでさ翔、あなたここに来て一時間ほどよね？」

「お、おう、そうだけど……」

「住むところつてあるの？」

あ……全然考えてなかった……

「どうしようか……今日は野宿だな……」

「師匠、永遠亭の私の隣の部屋、今は空き部屋でしたよね？私が自由に使っていていいって言っていた……」

そこに翔を住まわせていいですか？」

「え、ええ、もちろん歓迎するわ」

「と、ゆるいことでよろしくね！翔！」

と、元気よく鈴仙が俺に手を差し出してきた。

俺はそれにつられて握手するが……

「え、ここに住んでいいのか？」

「いいわよ、空き部屋があるんだし家族が増えるしね♪」

「じゃあお言葉に甘えようかな？」

「じゃあ決まりね！まずは永遠亭のことについて話しましょうか……」

と、俺は鈴仙に連れられて、診察室を出た。

男が住むというのに何も警戒しないな……

「姫様ー？開けますよー？」

と、スライド式ドアを開けると

「ちよ、ちよつと今ゾーマ戦だから静かにして！ザオリク！」

ああ、MP足りない！……………あ、死んだ……………」

へえ、この世界にもドラ○エあるんだな……………」

「あら？外来人かしら？」

「はい、今日からここに住まわせてもらいます、椎名翔です、よろしくお願いします」と、簡潔に自己紹介をし、黒髪ロングの姫様がこちらを向いて挨拶をした。

「初めまして、蓬莱山輝夜です。今はここで姫様（ニート）をやっています 前までは月に住んでいて、そこで姫様をやっていました」

「え？月？」

と、俺は驚きの声をあげた……………」

「月の姫……………蓬萊山輝夜……………あ」

「ど、どうしたの？」

鈴仙が心配そうに俺の顔をのぞき込む、

俺はその時に姉の昔話を思い出した。

「蓬萊の薬を飲んで地上に追放された姫様って……………あなたの事ですか？」

と、俺が聞くと……………

「え、ええええええええええ?!」

輝夜さんが目を見開いて驚く。

こうして俺の永遠亭での生活がスタートした。

2話

月の過去

「な、何でそのこと知ってるのよ……」

「え、ああ、俺、もともと王家吸血鬼だったらしいんですよ……」

俺は姉に聞いた話を覚えてる限り話す。

「えーと、姉の名前が……エリナ・カーティスだっけかな？」

「……………は？」

鈴仙と輝夜さんが同じ顔で同じ反応をする。

「嘘……あなた……災厄の主の弟?!」

「え、えつとー、どっちかっていうと甥っ子って感じっすね」

「じ、じゃあ、兄の手によって追放された災厄の主と、その兄の息子ってあなたの事?!」

「まあ、そんなところですよ……」

なんか……敵になった気分だな……

「……………まあ、まだ災厄の主がこの世界を統一していたらあなたは敵だったわね

あなた、翔って言ったわね。王家吸血鬼は今でも忌み嫌っている人もいるわ、簡単に

自分の種族を言わない方がいいわよ」

「は、はい、分かりました……」

そう言うのと輝夜さんは体をくるっと切り返し

「さーて、ゾーマともう1ラウンド行きますか!」

「姫様……ゲームも程々にしてくださいよ……」

「分かっているって♪」

絶対分かってねえなこれ

「……まあ、行きましよ、翔」

「あ、ああ……」

そうして俺と鈴仙は輝夜さんの部屋を出て、庭を歩いていた時だった。

「きゃあ?!」

鈴仙が落とし穴?みたいなやつに落ちた。

「?!おい!」

「きゃはははは♪また引っかけたー!」

そこに居たのは俺よりはるかに小さく、黒のショートで鈴仙と同じくうさ耳を生やしている。

「てゐ……あなたねえ〜!」

「毎回同じ罠に引っかけかかる鈴仙が悪いのよ☆」

「……………鈴仙って意外とドジだな……………」

俺が鈴仙に言った。

「うるさいわね……………」

「おや？お客さんかな？」

「ああ、紹介が遅れたな、俺は椎名翔まだここに来て1時間ほどしか経ってない、一応吸血鬼だ、よろしく」

「因幡てゐだよ。見ての通り兎さ、よろしくね」

そう言つて俺とてゐは握手した。

「……………さ、自己紹介済ませたら早く師匠の所に行くわよ……………」

俺はまた永琳さんのところへ向かった。

「さて、ここに住むには何かかしらの役割を持ってもらうわよ」

「……………翔って何か出来るの？」

鈴仙がそう俺に聞くと

「ああ、料理とかなら得意かな……………」

「じゃあ、朝、昼、晩のご飯は彼に任せようかしら

お茶とか菓子とかは鈴仙にお願ひするわ」

「分かりました。台所の場所ってどこですか？」

「鈴仙、当分彼と付き添ってあげなさい」

永琳さんが鈴仙に指示した。

「分かりました、翔、行くわよ」

「ああ」

そして100mくらい歩くと……

「すっげえ……」

凄く和風、それにめっちゃ綺麗……日本だったら名所になるかもな……

「すごいでしょ！永遠亭の自慢の一つなのよ！」

と、鈴仙が胸を張って言う。

「ああ、ここなら料理のやりがいがあるな……」

そうして俺は色々と道具を物色する。

「もうすぐで夜だから、早速夕飯の用意お願いね」

「ああ、任せろ」

そう言って鈴仙は自分の仕事に戻った。

6月18日 午後7時半

永遠亭での初めての夕食。

「……………おいしい……………」

鈴仙が驚きの声をあげた。

「……………美味しいわね……………でも、ここじゃ見ない料理だわ……………」

「それはあつちの世界でしかないんですね」

「料理名はなんて言うのかしら？」

「焼き鮭ですね」

「……………なんか悔しいわ……………」

鈴仙がこつちを睨んでくる

「はは、まあ、作り方は簡単だし、鈴仙も作れるでしょ……………」

それはそうと……………俺まだ幻想郷で男を見たことないんですけど……………」

「男はいるにはいるけど幻想郷じゃ女性の方が力を持つているわ、人里に行けば結構いるわよ」

良かった……………俺ひとりじゃない……………と、安心してると輝夜さんが

「翔つてさ、弾幕ごっこ出来る？」

「ああ、弾幕の出し方は分かりますけど……………」

「なら、決まりね！鈴仙、明日翔の稽古をしてあげなさい！」

と、輝夜さんが勝手に鈴仙に押し付けた。

「えー？私一度戦闘しましたけどボロボロに負けましたよ…」

「まあ、そりや王家吸血鬼だしね…」

「ハハハ、まあ、明日頼むよ、鈴仙」

「仕方ないわね、じゃあ10時に庭でやりましょ」

「……………え？あなた、王家吸血鬼なの？…………」

永琳さんが驚いていた。

「そうか、あの場に永琳さん居なかつたもんな。」

「はい、まあ…」

「……………そうなのね……………まあ、今頃恨んでも仕方ないか…」

「あの……………月でなにかあつたんですか？」

俺は聞いちやいけないと思いつつも、興味本位で聞いてしまった。

「私は災厄の主に大切な部下を殺されたわ……………反逆罪という濡れ衣でね…………」

「その部下の名前って分かりますか？…………」

俺は妙に興味を持っていた。

「彩菜…………」

「?!」

俺はこの日、予想だにしないことが起こりすぎて混乱しそうだった。

「彩菜……じゃあ姉ちゃんの偽名は永琳さんの部下から取ったのか？」

「……どういこと？」

永琳さんが訝しげに聞いてくる。

「俺の姉ちゃん……叔母は外の世界じゃ椎名彩菜って言う名前です、エリナが本名なのは知っていましたが……彩菜って言うのが永琳さんの部下だったとは……」

「うーん……」

永遠亭に来て、数時間で新たな謎ができた。

彩葉……この名前だけが謎を生む
あんな事がきっかけであんな戦争が起きるとは思ってもいなかった。

3話

スペルカードルール

6月18日 午後10時。

「彩葉……………か……………」

俺はお姉ちゃんの偽名の謎がずっと頭の中でさまよっている。

「まあ、今考えても仕方ないか……………」

俺は考えるのをやめ、眠りについた。

6月19日 午前7時

俺は台所で朝食の準備をしていた。

「おはよー翔……………」

と、半開きの目を擦りながら鈴仙が出てきた。

「すっげえ寝癖だな……………」

「仕方ないじゃない……………髪長いんだから」

ほんとに何も警戒しないのな……
でも、ちよつと可愛かった。

俺は呆れつつも、ホットケーキをひっくり返した。

6月19日

午前10時

俺は庭で鈴仙に弾幕ごつこの仕方を教えてもらっていた。

「まず弾幕ごつこにはルールがあるの。

幻想郷じゃスペルカードルールって言ってね。

ただ全力で弾幕を打ってそれで勝ちって言うものじゃなくて
弾幕の美しさに意味を持つ。

まあ、ある程度の強さは必要よ？

言わば実力主義の否定ね……あなたのお姉さんはスペルカードルールを無視して、
完全な実力でこの世界を支配したの。

だから災厄の主なんて呼ばれたのよ」

「なるほどな……」

鈴仙が細かく説明してくれたので何となくわかった気がした。

「じゃ、私のスペルカードを見せるわね

波符「月面波紋」！」

「すっげえ……………」

鈴仙の周りに言葉に出来ないほど美しい弾幕が張られた。

「さ、避けてみなさい！」

不敵な笑みで言う。

「避けてみなさいって……………難易度高過ぎだろ……………」

「とか、言いつつ、余裕で避けてるじゃない！悔しいわね…」

いや、結構ぎりぎりだぞ?!

心の中でそう思いつつ、目の前の弾幕に集中した。

俺は全力で前のたまを避け、鈴仙に近づいた。

すると、周りの弾幕が消え、鈴仙が口を開いた。

「なかなかやるわね……………翔自身のスペルカードも作ってみましょうか」

こうして俺は鈴仙と一緒にスペルカードを作った。

「なあ鈴仙」

「なあに？」

「命懸けの戦いでもスペルカードルールは絶対なのか？」

「いえ…私はそんな戦いをしたことないから分からないけど…多分そんな戦いになるとスペルカードルールは破棄されるわ」

「そっか…：…良し、出来たぞ！」

俺の一つのスペルカードが完成した。

「なかなか凄そうね…：名前はどうするの？」

「そうだな…：俺は吸血鬼だし、血符「反逆の返り血」なんてどうだ？」

「こ、怖いスペルカード名ね…：」

こんな感じで俺は鈴仙と、共に弾幕ごっこについて学んだ。

6月19日 午後3時。

昼食も終え、午後の稽古を済ませたあとのこと。

「んん、久しぶりにこんなに動いたわね…：」

お風呂入ったらどう？」

「ああ 鈴仙からでいいよ…：」

「そ、じゃあお先に失礼するわね…：」

鈴仙が風呂場に行った後、俺は自室に戻り、彩菜の事について考えていた。

「彩菜……………永琳さんの部下……………殺害……………追放……………蓬萊の薬……………」

関係ありそうな単語が幻想郷に来て次々と出てくる。

一度幻想郷を回って、その後月にでも行って事情を聞いてみたいな……………

そんなこんな考えていると……………

「ちよつと外の空気吸うか……………」

と、言つて俺が廊下に出ると……………

「……………え？」

俺の目の前にバスタオル一枚だけの鈴仙が立っていた。

風呂上がりだろう、髪も濡れていて水滴が滴っている。

鈴仙はおそらく自分の部屋に着替えを取りに来たんだろうな……………仕方ない……………鈴仙の部

屋は隣なんだから……………

もう少しで見える……意外と胸あるな……

じゃなくて！もう谷間見えてる！

「……きやああああああ!!」

永遠亭に顔を真つ赤にした鈴仙の叫び声がこだました。

俺はその後鈴仙に1発殴られたあと、風呂に入った。

「いって……鈴仙強く殴りすぎだろ……」

自分でも思ったが俺はまだここに来て一日しか経っていない、なのにこんなに仲良くなるとは思わなかった。

「しかし、月……ね」

俺はこの謎を解明するまで落ち着く気はなかった。

「でも……どうやって調査するもんか……」

俺は風呂を上がり、服を着て鈴仙に謝りに行った。

「はあ……別にいいわよ……あれは私にも落ち度があったし……」

「はは、でも、鈴仙けっこー胸あったぞ?」

「な、何を言っ……!」

刹那　　大質量の何かが幻想郷に落下してきたかのような音。

ズドオオオオオオオオオン

俺と鈴仙は慌てて外を見る。

「あれは……月の住民……」

俺は目を見張った。

月の住民が永遠亭に攻めてきたのだ。

しかも凄い……500人程度。

「ま、まずい……あの人数は……」

「翔！スペルカードルールのことを忘れて！」

相手を殺すつもりで行きなさい！私は師匠に報告してくる！それまで頼んだわよ！」

「あ、ああ！任せろ！」

とは言ったものの、俺の頭の中は疑問で埋め尽くされていた。

何で急に攻めてきたんだ？

こうして、後に起こる大きな戦争のトリガーとなる、
月光襲撃異変が始まった。

4話

月光襲撃異変

第一次月面戦争

それは王家吸血鬼のトップ、エリナ・カーティスを処刑するために始まった戦争だ。その時私はまだ子供だった。

人間で言う2歳くらい…

師匠に遊んでもらっていた時、

「永琳先生、例の物ができました」

「あら、ありがとう彩葉。患者さんに出しといてくださる?」

「はい」

「えーりんえーりん! この世界の王様って誰なの?」

私はまだ幼かった。

なので、そういった月の事情とかはあまり詳しくない。

「この世界はね…エリナ・カーティスという人が王様なのよ…」

「へえー! かつこいい名前!」

こうして私は月の現実を知っていくようになった。

それから数ヶ月後

「反逆罪、エリナ女王への殺人未遂として：椎名 彩菜を処刑する」

師匠の部下 椎名彩菜さんが濡れ衣を着せられ処刑された。

理由もなく、ただ殺された……

それからの師匠の目は怒りに満ち溢れていた。

「私はこの月を許さない……」

そうして師匠は私に会わなくなった。

それからまた数ヶ月後、

「輝夜姫……あなたは蓬萊の薬に手を出しましたね……

そして八意。お前がその薬を手がけたのか……」

「……………はい、間違いありません……」

「蓬萊の薬を作り上げた、そしてそれを飲んだ罪により、2人を幻想郷に追放します」

エリナとやらが高い笑い声をあげながら言った。

そこからの師匠の顔は覚えていない。

師匠がいなくなつて2ヶ月後、私が知らぬ間にエリナは外の世界に追放された。というニュースが入つた。

私も月の生活が退屈と感じ、師匠のいる幻想郷に逃げてきた。

生活も安定してきた頃。

幻想郷の住民とも仲良くなれた。

永遠亭にも新しい家族が増え、幸せな生活を送っていた。

なのに……

「どうして……月の住民が……」

そう、約500ほどの月の住民が幻想郷に入り込み襲撃していた。

「師匠！大変です！月の住民が……」

「分かつてるわ！行きましよう！」

と、竹林を抜け人里につく頃には戦闘が始まっていた。

霊夢さんや紅魔館の住民達が戦っていた。

その中にひとときわ目立つ戦闘力の青年がいた。

「し、翔……なの？」

翔の体からは蛇が生え、目は左目のみ蒼色で月の住民達を次々と倒して行つた。

「なんて強さなの……」

隣で輝夜が言う。

「これが王家吸血鬼の力……」

すると月の住民のひとりが

「お、お前は……椎名！ 王家の生き残りが……何故ここにいる！」

「さあな、でも、俺はもう王家なんかじゃない……」

ただの妖怪だ」

そう言うとその住民のことをゴミを見るかのような目で見下し、

「血符「叛逆の返り血」

翔のスペルカードだ……」

凄……ちゃんと殺せないようになって……

私は教えてもない技術を身につけていたことに驚いた。

1時間弱で異変は片付き、妖怪側が勝利した。

「あなた、名前何ていうの？」

霊夢さんや紅魔館の住民達が翔に聞いていた。

そっか翔はまだ初対面だったんだ…

「椎名翔と言います。まだ幻想郷に来てまもないですけど…永遠亭に住まわせてもらってます」

「その割にはかなり力があつたわね…それと…あなた王家って月のヤツら言ってたけど…」

「あ、いや…：僕が0歳の時まで王家吸血鬼の一員だったんですよ…」

「そう…：まあ、私たちは王家吸血鬼あなたちを恨んでなんかいないから安心して…」

「はい、ありがとうございます」

「さて、と、こいつらに詳細を吐いてもらおうかしら…」

霊夢さんがそう言ってお祓い棒を月の住民に向けた。

「誰の指示なの？それと、これを仕掛けた理由は何なの？」

と、すっごい威圧で霊夢さんが月の住民たちに聞く。

怖…：…怖すぎるよ霊夢さん…

私は心の中でそう思った。

「わ、綿月様だ……仕掛けた理由は……また……エリナ様の時代になってほしい……というところで幻想郷を支配するように指示された……」

私はその人の名前に聞き覚えがある……

「豊姫と依姫がそんなことを……」

師匠が顎に手を置き、考え始めた。

「また、王家吸血鬼と同じ時代を味わうというの？ 冗談じゃないわ!!」

霊夢さんが怒る。

「綿月姉妹がそんなことを……」

普段からそんなことをする人じゃない……綿月様は……誰よりも優しく、そして誰よりも王家吸血鬼時代を憎んでいたのに……

何で今更……

「まず、状況を整理しよう

この襲撃は間違いなく綿月姉妹の仕業なんだな？」

翔が聞く。

「あ、ああ、間違いはない……」

「その理由が王家吸血鬼時代を取り戻す……か……ふざけんよ……」

「し、椎名！お前も王家吸血鬼だろ?!なぜ喜ばない！」
住民の1人が言う。

「俺は王家吸血鬼が嫌いだ。お前らと仲間になった覚えもないし仲間になる気もない。
一緒にするな」

翔の目は怒りそのものだった。

この異変は、後に月光襲撃異変と呼ばれた。

その翌月、月の住民は月へ帰りまた平凡な日々が始まった。

「ねえ翔、胡椒！」

と、姫様が下らないダジャレを翔に言った。

「ぶっ飛ばしますよ姫様」

「ごめんなさい調子乗りすぎました」

こんな毎日が続き、今では翔も幻想郷にすっかり溶け込んでいる。

「それにしても、最近は何となく異変があまり無いわね」と、師匠が言う。

「そうですね、一番最近なので月光襲撃異変でしたもんね…」

そう、最近は何となく異変があまり無いわね。

いい事なのだが逆に胸騒ぎがする。

まあ、大丈夫か……

そうして私はまた永遠亭の楽しい日常に溶けていった。

5話

死なないために

私は師匠とお茶をしていた。

最近師匠は、月光襲撃異変の謎を紐解いている。

「この彩葉が殺されたあと、エリナがその名前を使ったのは……なぜ？」

一番の謎だった。

「こればかりは月に行ってみないとわかりませんね……」

他のことは師匠のおかげで分かりつつあった。

まず、綿月姉妹が王家吸血鬼時代を望んでいるということは、裏で月の賢者が動いている。と、師匠は言う。

確かに私たちが月にいた頃から賢者様は、エリナを信仰していた。

と、その前にエリナの政治を簡潔に話そう。

まず、エリナは5歳の時に父が他界し、兄とふたりきりの生活になったのだが、兄は

もともと王家吸血鬼が嫌いで王の座を妹のエリナに譲った。エリナは兄にも勝つほどの膨大な力を持っていた。

まだ子供だったのでどうすればいいか分からず、とりあえず支配というのが目的だったらしい。

もちろん住民は反発し、小さな争いをするのだがエリナ一人の力にも敵わず、結局エリナの政治のさせるしか無かった。

こうして、膨大な権力と力を持ち、理不尽な事を繰り返す度に世間では “ 災厄の主 ” と、呼ばれるようになった。

そして、月日が経つにつれ住民達が力を持ち始め、幻想郷と月の連合軍を作り上げ、兄、エリナの2人と、戦った。

連合軍の3分の2は帰らぬ人となり、エリナと兄も連合軍の数が多すぎて結局力負けした。

こうして兄とエリナは処刑になるのだが兄は最後の力を振り絞り、エリナと自分の息子を外の世界へ放ち、兄は処刑された。

これが幻想郷に伝わる17年前の第一次月面戦争だ。

「それじゃあ、賢者様がこの異変の発端ということですか？……敵いつこありませんよ……」

月の賢者様はエリナと同盟を結び、エリナの加護を受けて今ではエリナと肩を並べるくらいに強さだろう。

「そうね……でも、何とかなるかもしれない……」

私たちが死なないために……」

そう言つて師匠は外に出た。

「うどんげ。これから毎日、翔と修行しなさい。

彼はもつと強くなる。いいえ、今でも強いけどきつとそれ以上……賢者様をも超える力を持つわ……」

だから……あなた達でパートナーを組んで、死なないために頑張りなさい」

久しぶりに気合の入った師匠の言葉だった。

私はそれに受け答えるように

「は、はい！」

と、大きな声で返事をした。

「と、ゆうことで私と翔は今から相棒よ！」

「いや話が見えてこないんだけど」

唐突に私から翔に告げた。

まあ、そりやそくなるか……

「この異変の黒幕は月の賢者様だわ……

いくら幻想郷に人数がいても、賢者様の前では無意味。

でも、今回からは翔という心強い味方もいる

私たちだけで賢者様に対抗するのよ」

「……………マジか……………」

「……………マジよ……………」

「まあ、そういう事で今から修行するわよ」

と、私が銃を取り出し、翔に向ける。

「まずは軽く戦闘しましよ

殺傷能力のある弾幕はNG、でも、それ以外なら何使ってもOK、じゃあ始めましよ
う」

「勝手に話進めんなよ……」

とか、言いつつも翔は剣を持たず、戦闘態勢に入った。

「？剣は寸止めを使うなら問題ないわよ？」

と、私が聞くと

「ああ、俺はもう剣はムラサメ一本しか使わないことにしたんだ」

「そ、そう……じゃあ行くわよ

ルナティックレッドアイズ
幻朧月 睨！」

私は目を赤く光らせ、狂気を醸し出した。

「おぉー、綺麗な赤色だな……」

と、感嘆の声を漏らす翔。

「うるさい！早くやるわよ！」

「おおう、すまんすまん……」

エターナルブルーアイズ
幻永蛇眼！

そう、私たち2人は同じ……と言うか、同じ効果のある技を覚えた。
それが幻ルネイックレットアイズ朧月エターナルブルーアイズ睨と幻永蛇眼だ。

これは師匠から進められたもので狂気の力を底上げする能力らしい。

翔はもともと王家の能力があり、それを強化させたのが

エターナルブルーアイズ
幻永蛇眼である。

「散符「インヒンブルフルムーン真実の月」！」

私は銃を持ち、密度の高い弾幕を打つが翔はそれをサイドステップで避ける。

「業符「煉獄贖罪」！」

翔が詠唱をすると、周りに弾幕が張られた。

避けることは出来るが私の技術じゃそんなこと出来るはずが無い……！

いや、これは修行だ。頑張つて避けるしかない！

一瞬でピチュウった。

「おい、大丈夫か鈴仙？」

俺はてつきりスペルカードかボムで弾幕消すのかと思つてた。まさか避けようとす

るとは………w」

翔が笑いをこらえてるのがわかる。

「うるさいわね！よければと思っただのよ！」

「ハハハ、ごめんごめんあまりにも面白くて……」

「後で覚えときなさいよ！」

「忘れました〜」

「フギアアアアアアアア!!」

と、こんな感じの会話を毎日繰り返しているうちに

私は翔ともつと話したいと思うようになった。

次第にもつと笑いあいたい、喧嘩したいなどと思うようにもなり、翔の隣にいただけで心臓がバクバク高鳴っている。

私にはわかる……これは恋だ……

だって、翔と話すといつも顔が熱くなって、目を合わせられないくらいなんだもん

……

私は翔に恋をした。

6話

初めての恋

私は幻想郷に来て、初めて恋を知った。

永遠亭の恋愛漫画で色々恋のことを知ったがどれもバカみたいだった。

でも、実際に恋をしたら、恋愛漫画みたいになることが分かった。

顔が熱くなって、目が合わせられなくて、心臓が高鳴る。

「これじゃ恋愛漫画そのままじゃない……」

「なんか言ったか鈴仙？」

「な、なんも言ってないわよ！き、早く行きましょ！」

「何で怒られるんだよ……」

「怒ってない！」

私たちは今、薬の訪問販売に来ている。

師匠が

「パートナーなんだからもう少し親睦を深めないとね☆」

と、言って翔も同行させた。

嬉しいけど……やりすぎですよ師匠……

そう思いながら一軒一軒回った。

「じゃあこの薬ですね、どうぞ…」

「ありがとうございます！」

こんな感じでいつもの訪問販売が終了し、暇な時間ができたので団子を食べていた。

「ん〜おいひ〜☆」

「はは、鈴仙面白い顔してんな」

と、翔が言うので私は睨みつけた。

「ふっほはすはよ！（ぶっとばすわよ！）」

団子を頬張りすぎて言葉が出ない…

「日本語話してください」

「ふぎアアアアアアアアア」

「はは、じょーだんじょーだん。可愛い顔してるよ大丈夫だよ」

「!?!?!?!」

私は団子を飲み込み、固まった。

「お、おい?どうした鈴仙?」

「い、いや、なんでもない……// // // //」

「そ、そうか…」

「か、帰りましょ？／＼／＼／」

「ああ、でも、顔赤いけど大丈夫か？熱でもあるんじや…」

私は顔を覆い。

「早く行くわよ！／＼／＼／」

「ああ、はい…」

こうして、私たちは永遠亭に帰るのだが帰りの途中、私は一つ疑問が出てきた。

「ねえ翔」

「ん？なんだ？また団子食いたいのか？」

「違うわよ！」

翔って前さ、剣は一本しか使わないって言ってたわよね、どうして？」

「ああ、話せば長くなるんだが…今じやなきやダメ？」

と、こちらに聞いてくる

「ダメ」

「んーとな、俺の能力。七つの剣を操る程度の能力は俺のじゃないんだ。多分、月の都の幹部の奴の能力なんだ…」

だっておかしいだろ？能力が二つあるやつなんて…継承以外で能力が二つあるのはありえないって永琳さんが言ってたんだよ…」

「言われてみればそうね……でも何で月の都の人たちだつて分かったの？」
私は小首を傾げた。

「え、それはな…永琳さんの部下、彩菜さんの能力だったらしいんだ。それが何らかの理由で俺に継承させられた………んだと思う。」

「ま、また謎が出来たわね……」

「いや、逆だ。俺の姉が彩菜つてつきたい手がかりになりそうだ」

そんな会話をしながら永遠亭に帰った。

そうしたら私だけ師匠に呼び出された。

「………うどんげ、翔のことどう思ってるの？」

「へっ？」

「顔に出てるわよ……でも、翔が鈍感だから気づいていないけど彼のことチラチラ見すぎよ……多分姫様も気付いてるわよ」

「え?! // // //」

そんなに顔に出ってたのか?!

私は今更になつて顔を赤くする。

「まあ、別に悪い事じゃないし、むしろ私は応援するわ…頑張りなさい」

「はい……ありがとうございます／＼／」

自分ってそんなに分かりやすかったのかな…

私はため息をついて肩を落とす。

告白………してみようかな……

「………むりむりむりむりむり！／＼／＼／＼／ぜつつつたいたい無理！／＼／＼／」

私はウガーンと喚きながら自分の部屋でもがいていた。

翔が来て、私が恋をしてから3ヶ月後

10月1日

唐突に戦いの口火は切られた。

7話

お互いの本音

私は翔への告白を考えていた。

「……………私のことどう思ってるのかな……………」

翔はかなりのポーカーフェイスだが、たまに照れた顔を私に見せてくれる。

男の人に言っているのかわからないが、めちやくちや可愛い顔をしている。

私はそんな所も惚れたんだと思う。

でも、翔と出会ってまだ数ヶ月ほどまだまだ翔のいい所は見つけられない。それまで待とう……………」

「おーい、鈴仙！ちよつと手伝ってー！」

翔の声だ。

「どうしたのー？」

「ちよつと手が足りねえ！野菜切ってくれ！」

「何でそんなに大変な料理作ってるのよ……………」

と、ぶつくさ言いつつ、私は翔に頼りにされるのが何よりも嬉しかった。

その日の夜。夕飯を食べたあと…

師匠が真剣な顔で永遠亭の全員を集めた。

「今日の幻想月会議で決まったことを話すわ」

幻想月会議とは年に3回行われる。

紅魔館だったらレミリアさん。地霊殿はさとりさん、天界の天子さん。

博麗神社の霊夢さんやもちろん妖怪の賢者、紫さんも、さらには月の住民、賢者様や

綿月姉妹もが参加する、この世界の最高機関だ。

そこではこれからの幻想郷と月の関係を話し合っているらしい。

詳しいことは機密事項だが…

師匠は顔を暗くして…

「明後日、10月31日、第2次月面戦争 開戦……」

「……え？」

私は空いた口が塞がらなかった。

続けて師匠が話す。

「人里の者は妖怪の山へ避難。

紅魔館、地霊殿、博麗神社、守矢神社、永遠亭、天界、地獄、旧地獄、冥界、命蓮寺、その他最上級妖怪は……

午前6時、紅魔館前の湖にて、迎撃する……

永遠亭組の半分は永遠亭に残り、負傷者の手当。以上……」

私は言葉を失った

「そんな……なんで急に……」

「月の賢者様の独断よ……条件は……」

椎名翔を必ず戦争に参加させろ……だそうよ……」

「な、何を目論んでいるんですか……」

翔も焦燥の顔を浮かべている。

「分からないわ……賢者様は開戦すると言っただけ言って、帰ったわ……」

「何で……翔を……」

「とにかく……月面戦争は避けられません、こうなったら全力でぶつかりましょう」

「そうね……私と姫様、うどんげ、翔は最前線に出るわ」

準備を忘れないように今日は解散」

「……はい」

師匠がそう言うのと、全員が寝る準備へ入った。

「戦争……か……」

私は全く実感がわかず、そのまま眠りに入った。

10月30日 いつも通りの朝。

耳をすませると、人里の方が騒がしい。

「霊夢さん達が知らせてくれたのかな…」

多分、避難の準備をしているのだろう…

私が食卓に向かうと翔がもう朝食の準備を済ましていた。

「あら、今日はやけに早いのね…」

「ああ、なんか眠れなくてな…」

「そう……」

朝食を済ませ、私と翔は、いつもの修行をした。

「じゃ、始めるわよ…」

と、弾幕ごっこを始める。

ルネティフクレッドアイズ
「幻朧月睨！」

エターナルブルーアイズ
「幻永蛇眼！」

能力を発動した。

2人とももう簡単に最大限の力を出すことができた。

私は今日初めて翔に勝利した。

勝ったと言っても、翔の方が本来の力を出していなかった。いや、出せていなかった。

今日の修行も終わり、私と翔はお茶をしていた。

「し、翔、今日どうしたの？元気もないし、弾幕にも力がこもってなかったし…」

「あ、ああ…ちよつとな…」

翔はいつもそうだが悩み事を1人でよく抱え込む。

1人で悩んで1人で無理矢理解決する。

私はそんな翔をあまり見たくない。

「ねえ翔、もうそんな1人で考えなくていいんだよ？」

私は翔の相棒。パートナーだもの

少しは私を頼って…」

そう言うのと、翔は苦し紛れに話そうとしてくれた。

「俺はな…：月に行きたくない…：怖いんだ…：」

悲しげな目をして、翔の体が小刻みに震える。

「幻想郷と…：永遠亭と…：何よりも鈴仙と離れるのが怖いんだ…：戦争なんかしたくな

い……俺は死にたくもないし、みんなに死んで欲しくもない……！

何で……何で俺が王家吸血鬼になんかなっちゃったんだよ……！俺は……ただ単に普通の生活を送りたかった……

なのに……どうしてなんだよ……！！」

翔の目から大粒の涙が零れ、震えがさらに増す。

私はすぐさま翔を抱きしめる。

「大丈夫……大丈夫だよ……」

私は優しい声音で翔に言う。

「れ……い……せん……」

「大丈夫………今のあなたには私がついてる……何があっても私が守り抜くわ………だから………安心して……」

翔は嗚咽を漏らしながら叫ぶ。

「違うんだよ……！！俺は……俺は……お前らと別れるのが嫌なんだよ！

ずっと……死ぬまで……お前らとただ笑いながら……過ごしたいだけなんだ……お前は

……怖くないのかよ……！」

それを聞き、翔のことをさらにギュッと抱きしめた。

「私たちも怖いわ……でも、行かなきゃいけない……」

楽しいことに苦労は付き物、仕方ないことなのよ…

ただ、乗り越えられる事はできる……

これは使命よ……だからそれを果たすの…

大丈夫……きつと私たちはまたこの日常を取り戻すことが出来るわ……」

翔は私を強く抱き締め、声を出して泣いた。

数分後…

翔は泣き疲れたのか眠ってしまった。

すると外から姫様が来て

「あらあら〜可愛い寝顔ね♪溜めてたもの吐き出したから疲れちゃったのかもね。鈴

仙、膝枕してあげなさい、そうすれば彼も落ち着くわよ☆」

「ひ、膝枕……ですか／＼／＼／＼」

私はドキドキしながらも翔の頭を私の膝に乗せた。

ああああ〜私何やってるの?!／＼／＼／＼

めっちゃ大胆な行動してるじゃない?!／＼／＼／＼

「……でも、ほんとに可愛い寝顔ね……」

思わずキスしたくなるくらい……

って、何考えてるのよ私い!

1時間後、翔の目が覚めた。

「あ、ありがとう。鈴仙／＼／＼／＼／＼」

「ど、どういたしまして／＼／＼／＼／＼」

ああー！私何やってるんだろ……

「お前のおかげで立ち直れる気がしてきたよ……」

翔が優しい笑顔で私を見る。

つられて私も笑ってしまった。

「ええーお力になれてなによりだわー」

こうして、翔は戦争への決意を固めた。

その夜、次は私が眠れなかった。

目を閉じたら少し恐怖で震えてしまう。

1人じゃ怖い……

そして何を思ったのか……私は翔の部屋へ向かった。

スー……と襖を開けると、翔は妖刀ムラサメの手入れをし終わった所だった。

「ん？どうした鈴仙？」

「……………怖くて寝れない……………一緒に寝よ？」

「そ、そうか……………て、ええ！／＼／＼／＼／」

私はこの時、恥というものを忘れていた。

「1人じゃ怖い……………」

「あ、ああ、いいぞ／＼／＼／」

「ありがと……………」

そう言つて私と翔は同じ布団に入った。

「昼間はあんなこと言つといて実は鈴仙も怖かつたんだな……………」

「うるさいわね……………怖いものは怖いのよ……………とゆーかお互い様でしょ……………」

翔と私の顔の距離は約15cm程だった。

「戦争の実感つてわかないよな……………まだ俺も怖いや……………」

「ええ……………私はこの日常を失いたくない……………師匠や姫様、てゐ、そして翔とパートナーを組んでこの日々を私は大切にしたい……………」

私は切実な本音を口にした。

「そつか……………まあ、まずは明日の戦争を。パッと終わらして……………宴会でお酒をバンバン飲みますか！」

翔は輝かしい笑顔で言う。

「そんな簡単に……………」

あ、そうそう。言い忘れてたけど私ってあなたより年上なんだからね！」

「……………だからなんだよ……………」

「もう少し年上への対応をとって欲しいものだわ！」

「はは、ちよつと何言ってるか分かんない」

「ふぎアアアアアアアアアア！」

私達は戦争前日になんて話をしてるんだ……………」

数分後、翔が先に寝てしまった。

本当に可愛い寝顔をしている。

明日が戦争なんて思えないほど……………」

翔……………私は……………君のおかげで……………戦うことができる……………」

私は……………あなたに恋をしているんだから……………」

「大好きだよ……翔……」

静かにそう呟いた。

軽く翔の頬にキスをして、
私も眠りに入った。

そして、10月31日 午前5時30分
最前線組が全員紅魔館前の湖に集まった。

8話

開戦

私は湖の前でぼーっとしていた。

あの翔と……恋人みたいなことしちゃった……

ハグをして、添い寝して、キスをして……

「あぁ〜！／＼／＼／＼」

「？」

私は今更になって恥ずかしくなってきた。

「鈴仙？どうかしたのか？」

「な、なんでもない……」

すると、翔は真剣な顔に戻り、

「多分、そろそろリーダーの声がかかる」

今回の第2次月面戦争の幻想郷側のリーダーは……

「みんな……ここに集まってくれてありがとう……」

妖怪の賢者 八雲紫よ」

紫さんだった。

まあ、以前もそうだったらしいが……

「今回の月面戦争のキーは……椎名翔よ、彼を守り、そして、王家吸血鬼時代に終止符を打つの」

「最初は、最前線に紅魔館、冥界、旧地獄の全員が弾幕を全力発射。

翔は、守るといつても戦わないわけじゃないわよ。翔に一番働いてもらうわ、蛇を使つて、大半の雑魚を片付けてもらうわ。」

そこからは全力でぶつかりなさい

この戦い、もう1度幻想郷側が勝利するわよ！」

いつになく紫さんの気合の入った声。

ぶつちやけ、作戦と呼べるものでは無かったが、それは月側も同じだろう……

全員が戦闘の準備に入った。

でも、恐怖が消えることはなかった。

すると、翔が私の肩に手を置き、

「大丈夫、俺がいる……………どんな時でも相棒の俺が鈴仙を助ける。心配すんな！」

「……………翔……………そうね！行きましょ！」

「ああ！」

10月31日

午前6時。

月の住民が空から幻想郷に攻めてきた。

この時を持って

第2次月面戦争が開戦した。

最初は前線組の弾幕が相手を削る………かと思いきや、月側もそれなりに準備してきたらしく、ボムを使い大半を弾いた。

レミリアさんやフランさん、勇儀さんなどの近接戦闘組がつつこみ、殴ったり切ったり………月の前線組を倒し始めた。

「俺らも行くぞ………」

「ええー！」

ルナティックレッドアイズ

「幻朧月睨！」

エターナルブルーアイズ

「幻永蛇眼！」

私たちは同時に詠唱を始め、私は赤色、翔は青色に目が光った。

私は地上で銃を発射し、翔は向かってきたザゴ敵を一掃していた。

「え……アレが翔の本気なの？……」

すごい……

ものすごいスピードでなかつ、とんでもない衝撃波がここまで飛んでくる。

「はあはあ……大体片付けたぞ……」

わずか10分で終わった。

「し、翔……あなたどんだけ化け物なのよ……」

「そんなこと言われてもな……」

「と、とりあえず1度移動しましょう。」

私たちは雑魚を倒しきったので、休憩してから他の戦場に援護しに行くことにした。

数分後……

「……よし、行くか鈴仙」

「ええ」

と、私たちが移動しようとしたその時だった。

「危ない！鈴仙！」

翔が私の手を引き、抱き寄せた。

普段なら翔に抱きしめられて慌てるが、今はそれどころじゃなかった。

キイイイイイイン……………

1本の刀が私の目の前スレスレを通り過ぎ、そのまま地面に突き刺さった。

「い、この刀は……」

私はこの刀に見覚えがある。

この尋常じゃない妖力、突き刺さっているだけで衝撃波が伝わってくる。

この刀の持ち主は……

「あら、久しぶりね、鈴仙」

「……………依姫様……」

そこに居たのはこの戦争の黒幕、わたつきよりひめ綿月依姫様だった。

「へえ、思ったより良い刀使ってるんだな……祇園様の刀……か……」

「あら、分かるのね……王家吸血鬼様……」

「一々気に障る言い方するんだな……依姫様よ……」

「私の名前を知っていてくれるなんて嬉しいわね……」

「その役立たずの兎にでも教えてもらったのかしら？」

「?!」

私は顔を俯け、拳に力を入れた。

多分、涙目になっていたんだろうな……

すると翔が今までにないくらい怒りを込めた声で言い放つ。

「今……………なんて言った……依姫……」

「役立たずの兎……と、たしかにこの口で言ったわ」

すると、翔が目にも止まらぬ速さで依姫様の喉元にムラサメを突きつけていた。

「取り消せ……今すぐその言葉を撤回しろ！」

「断るわ……だってあの子は……無断で月から逃亡し、そして幻想郷でノコノコと生きて

いるのよ……!」

確かにその通りだ……でも……でも!

私は心の中で反論した。でも、その前に……

「月の居心地が悪かったんだろ……絶対的権力者が下つ端のヤツをそんなに貶すなんてそりや嫌になるわな……」

それに……鈴仙は幻想郷でノコノコと生きていたわけじゃない……ちゃんと医学を学び、幻想郷の人たちを助けている。

俺も助けられた1人だ。鈴仙の頑張りを見てないお前部外者があいつのことを貶す筋合いなんてない!」

翔は依姫様に向かって怒鳴った。

私は嬉しきで泣きそうになっていた。

「それはあなたもよ……月の事情も知らない部外者がよくそんなこと言えたわね……!」

「ああ、俺は部外者だ……何も知らない……俺は結構捻じ曲がった性格してるんで……敢えて首を突っ込んでやるよ……!」

その刹那

依姫様が刀を横に振った。

翔は体を反り返し、その刀をギリギリで避けた。

「……………すごい反応速度ね……………」

「……………そーゆうあんたこそ……………なんだよそのスピード……………」

私には何が起こったのか全く理解出来なかった。

「さあ、はじめましょう！」

綿月依姫と……………椎名翔の戦いを！」

こうして、歴史の1ページとなる、綿月対椎名の決戦が始まった。

9話

月の使者VS王家吸血鬼

私は祈りながら空中で行われている戦いを見守っていた。

「翔……………」

依姫様と翔の剣士同士の戦いは……………多分この世の中で一番凄まじいものだろう……………

「はあ……………はあ……………流石だな……………依姫……………」

「こつちの……………セリフ……………だ……………はあ……………はあ……………」

2人ともスペルカード無しで刀だけで戦っていたので体力の消耗が激しかった。

しかし、ここで初めて依姫様が技を使った。

「炎雷神よ……………七柱の兄弟を従え！」

多分、ここじゃ見ない技だ……………

依姫様の手から巨大な火柱が翔に向かってきた。

「くっ……………リスファイリングイマジネーション！」

翔はギリギリでその技を避ける。

「業符「厄災の隕石」！」

そのまま続けて翔がスペルカードを唱えた。

「増符「増殖の恐ろしさ」！」

名前はかなりダサイがこれはどんな技でも、その20倍まで数を増やすことの出来る大技だ。

名前は……翔のネーミングセンスね……

さすがの依姫様も焦りの顔を浮かび始めた。

「こ、これは私の技で弾き返せるかしら？」

そう言いながらも依姫様は詠唱を始める。

「金山彦命よ……私の周りの厄災を全て砂に返せ！」

すると、翔が発動させた隕石が全て砂と化した。

「おお……マジかよ……」

翔も感嘆の声を上げる。

「そして、持ち主の元へ返しなさい……」

すると、次は砂の渦の中から翔目がけて同じ数の隕石が落ちてきた。

「……………ちよつと油断しすぎたな……」

翔の口から諦めの言葉が零れた。

その直後、その隕石が翔に全部直撃した。

「嘘……………翔？……………翔!!」

「がはっ……くっそ……」

依姫様が血を吐いて倒れている翔に近寄り、刀で腹を一突きした。翔の口から大量の鮮血が溢れ出ている。

翔はびくとも動かなかった。

「翔!!」

私は走った、翔の元へ……だが……また目の前に祇園様の刀が突き刺さった。

「鈴仙、あなたは月に戻ってきなさい……幻想郷にいても意味無いわ」

私はカチンときた。

「意味がない?……あなたに何でそんなこと決められなきゃいけないの……!」

私は初めて目上の人に反抗した。

「……あなた……誰に向かって口聞いているの?」

依姫様が私を睨みつけてくる。

「綿月依姫……私は月には行かない……月の全てが嫌いだ……それに……私は月の兎じゃない!幻想郷の住民だ!」

私はめいっばい叫ぶ

「そう……じゃああなたも私と縁を切るといふのね……」

なら……殺すまでよ……!」

私に向かつて刀が一直線に向かつてきた。

いつもなら避けるが、妖力の影響で足が動かない……

依姫様も本気で殺すつもりだ……

はあ、ここまで……か……最後に師匠や姫様に会いたかったな……翔にも想いを伝えておけばよかった……

と、その刹那……

依姫様の刀が吹っ飛んだ。

すると、横から私の愛しい人の声がした。

「よく言った……鈴仙……」

「……………翔？」

翔が私の目の前に立ち、腰あたりから巨大な蛇を6匹程生やし、いつもの蒼い眼ではなく……………

紅く……………緋色に光っていた。

「な?!確かにトドメを刺したはず……………」

「はっ、アレでトドメを刺したつもりか?……………」

「俺は王家吸血鬼だぞ?たかが神の剣で刺されてもそう簡単には死なねーよ……………」

翔の傷は全て癒えていた。

これが……吸血鬼の自己再生能力なのだろう……

すると翔の緋色の目からまたさらに濃い紅へと変化していった。

ルナティックレッドアイズ
「幻朧 月睨……」

静かに翔はそう唱えた……

私と同じスペルカード………なんで……

「くっ………ならばまた殺すまでだ！」

そうして依姫様はまた刀を構え直したが、翔はそれすらも待たず、ものすごいスピードで近づいた。

「なっ?!」

「これで終わりだ。綿月依姫……」

そう言って、翔が右手を依姫様の腹部に当て………こう言った。

「光符 「月光光線」 ……」

右手からレーザーが発射され、依姫様の腹部を貫いた。

依姫様は近くの森に吹っ飛ばされた。

「……………ふう……………」

翔は落ち着いた声で言って、そのまま依姫様のいる所に行った。

一つの大木に依姫様がよりかかって血を吐いていた。

「ぐふ……………まさか……………王家吸血鬼の力がこれ程のものだったとは……………計算外だった……………しかし、生涯の最後にあなたとやれたのはよかつ……………」

依姫様の言葉に被せるように翔が言った。

「死なせねえよ、お前にはやって欲しいことがある……………」

すると、翔の周りから大きなドームが生成され、依姫様の傷が完全に癒えた。

「……………何故……………」

「お前からこの戦争の発端とやらを聞き出したい……………」

「……………私が話すだけでも?…」

「話さないのならまた俺がお前を殺す」

「……………私の負けね……………」

今回の月面戦争は賢者様があなた……………椎名翔を月に連れ去り、王家吸血鬼時代を実現させようとしたのよ……………賢者様はもともとエリナ様と同盟を組んでいて、なおかつ賢者様は大層エリナ様のことを気に入っていらつしやつた……………

そうして突然、エリナ様達　王家が全員いなくなり、賢者様はその時から幻想郷のことを恨んでいた……………

そうして、誰かから椎名が幻想郷に戻ってきたことを聞いたらしく、こうやって椎名

を連れ去るついでに……幻想郷への復讐を試みたのよ……」

「なによ……それ……」

私は月にますます失望した……

月のトップが……そんな自己満足で……この戦争を開いたというの……

「……そうか……ありがとな……依姫……」

と、翔は依姫に頭を下げた……

「いいえ……頭を下げるのはこちらの方です……」

それと鈴仙……さつきはごめんなさい……私も……少し考え方を誤っていたわ……」

「い、いえいえ！私こそあんな無礼なことを言ってしまった……」

私と依姫様はお互いに謝り、笑いあった。

「……さて、私はこの月面戦争には意義を賢者様に申し立てたい……あなた達に協力するわ……」

依姫様がこちら側についた。

「ああ……ありがとう……心強いよ……」

じゃあ……早速……月に行つて賢者をボコボコにしてくるか！」

こうして、私と翔と依姫様は、月に向かって飛んでいった。

次に幻想郷に帰るときはこの戦いは終わっているんだろ？な…
私はそんなことを思いながら幻想郷を離れた。

10話

月の都へ

10月31日

午後8時

戦争も落ち着き、月についた私たちは近くの森でご飯を食べていた。

「……………なんだこれは？」

依姫様が訝しげに翔が作ったチャーハン？とやらを見ている。

「まあまあ……………騙されたと思った食べてみな？」

「……………いただきます……」

依姫様は思い切ってチャーハンを口に入れた。

「……………っ！」

依姫様の目がキラキラ光り始めた。

「お、美味しい……………」

そう言つてチャーハンを口いっぱい頬張っていた。

……………可愛いな……………

いつも、依姫様の顔は怖かったけど……………

こんな顔もできるんだな……………

「ハハハハハハ、依姫可愛い顔してるな」

依姫様は翔にそう言われて、顔を赤くして下を向いた。

「う、うるさい、あなた達も早く食べなさい……」

「ご飯を食べ、私たちは眠りにつこうとしていた。

「あ、そういえば翔」

「ん？なんだ鈴仙？」

「私のスペルカード……使ったわよね……」

「あれはどういうこと？」

「戦いの途中……お前のスカートのポケットから落ちてきた……」

俺も体力消耗してたから幻永蛇眼が使える状況じゃなかったし……使わせてもらっ

た……」

「そ、そう……」

ちよつと嬉しかった。

私のスペルカードを使って勝ってくれたことが。

私たちはテントを用意して……

「さて、明日には月の都に行くからな……鈴仙も依姫も、しっかり寝とけよ……」

そう言って翔が3秒で爆睡した。

「はや……………」

私が呆れると…

「ふふっ、可愛い寝顔ですね……………」

翔の寝顔を見て依姫様が笑う……………」

「はは、そうですね……………」

私と依姫様は外の空気を吸いにテントから出た。

「ねえ、鈴仙……………」

「はいっ…」

「お師匠様や、あなたがいない期間、月は酷いものだったわ……………」

エリナ様がいなくなつてから、賢者様が政治を行っているのだけど……………」働かないものには罰を……………」酷いものは死刑にまで追いやるほど廃れているの……………」

私は目を見張つた。

「そ、そんなに酷かったんですか……………」

「ええ……………早く……………みんなが楽しく、平和に過ごせる月に戻ってほしい……………」

「だからお願い、この戦いで全てを……………賢者様を倒して元の月に戻して欲しい……………！」

「……………私はもう月の兎では無いのですが……………私の故郷です……………それに、依姫様や豊姫様、今でも月には大切な人がいる、放って置くわけには行きませんか……………」

私はまた依姫様に頭を下げる。

「ありがとう……………鈴仙」

私はね、正直翔を月に行かせたくはないの……………」

もちろん、賢者様がいるから危険という理由でもあるんだけど……………この子にとつて知ってはいけない事実を突きつけられると思うの……………」

「な、何ですかそれ……………」

依姫様は覚悟を決めたかのように私に教える。

「……………え……………」

私はまた、驚いた。

「そんな……………そんなことが……………」

私の静かな声は夜の冷たい風に乗って消えていった。

11月1日 午前8時。

「ん、んんーっ…よく寝たあ〜」

翔が私と依姫様の後にようやく起きた。

「あなた……けっこー起きるの遅いのね……」

「んあ？なんか言ったかー？」

「いえ、何も言っていないわ、鈴仙と私は準備出来てるから早く顔を洗うなり何なりしてきなさい……」

「はあーい」

そう言つて翔は湖の方に消えていった。

「さて、私達もテントを片付けて、行く準備しますかー！」

「……そうですね、行きましょうか」

テントも片付け、私と翔と依姫様で作戦を組んでいた。

「まず、依姫は普通に都へ帰り、賢者様に椎名翔を連れてきた、と言つて、紐で縛つた俺を連れていってくれ。」

「分かつたわ……」

「んで、鈴仙は……依姫が刀を構えて、戦闘準備に入つたら、俺の前に落ちてこい、んで、そこからは賢者様との戦いってこと……まあ、いわゆる奇襲つてやつだな……」

「まあ、ありがちかもしれないけど……それしかないわね……」

私も色々考えては見たが、確かに翔の作戦が一番最前かもしれない。

「さあ、行くぞ……」

そうして私たちは月の都へ向かった。

ちなみに私たち以外の幻想郷組はどうなったかと言うと、

月面戦争は優勢らしい、だが綿月豊姫様が今幻想郷で師匠と、対峙しているらしい。

平和に終わればいいが……

そうして、私たちは5分ほどで月の都に着いた。

「さて、翔、縛るわよ……」

そう言っつて、依姫様はよく分からない紐を出した。

そして、翔の両手首をきつく縛る。

「……………なんだこの紐は……………」

「フェムトファイバーの組紐……………らしいわ、姉様に緊急用で貰ったやつだから詳しく

くはないんだけど……

「フェムト」というのは須臾しゅゆつて意味らしくて……その須臾は生き物が認識出来ない僅か

な時のこと。」

すると、依姫様は豊姫様の口調を真似て……

「須臾というのは時間の最小単位。」

時は須臾という小さな時間を認識出来ないから連続に見える

でも、本来はその須臾が組み合わさって初めて時間というものができると………らしいわ」

「……………どういう事だ？」

翔が小首をかしげる。

「つまり、このフェムトファイバーは、目に見えないくらいの小さな紐で組まれた組紐。それは限りなく連続した物質に見える。そうすると紐の不純物が一切なくなり、切ることも破壊することも出来ないくらいの強度を誇る。

これをさらに太くしたら縄ができる、それは……………そうね、身近なもので言うと注連縄しめなわね、これは不浄な者の出入りを禁じる時に使われるものなのよ。まあ、他にも役割があるらしいんだけど…

もつとも、フェムトファイバーの組紐はあなたの刀では切れないわね…」
翔が驚く。

「……………何で切れない紐で俺を縛るんだ……………」

「少しでも信憑性を増すためよ。

それに、祇園様の刀ならこの組紐を切ることが出来るから」

「そ、そうか……………ならいいんだが…」

「さて、準備も整ったし、行きましょう」

「翔！私はこの屋根裏に隠れる、だから上手くやんなさいよ！」

そう言つて、私は翔のもとを離れ、都の本殿の屋根裏へ向かつた。

俺と依姫は本殿の真正面のドアから入つた。

「へえ……こんなに凄いとこころなのか……」

思わず見惚れるほど綺麗な建物だった。

「さあ、賢者の間よ……翔」

「ああ……」

こうして、俺らは賢者の間へと入つた。

「失礼致します!」

「お、依姫か………椎名を連れてきたか?!」

う、うわ、おっさん度ばねえな賢者様……

俺は少々引いていた。

小太りで眼鏡をかけ、ザラザラしてそうなヒゲを生やしている。いかにも中年男性つて感じた。

こう………賢者つてめっちゃ凜々しい人がやるんじゃないの？

俺の偏見だが……

「ええ、王家吸血鬼、ロミア・カーティスの息子

椎名翔を連れてまいりました」

「おお!でかしたぞ依姫!」

ああ………エリナ様………これで王家吸血鬼時代がまた始まりますう………!」

うわ……ききもい……

いや、こんな時に言っていていいのかもわからないんだけどさ………うん、ふつーのオツ

サンだわ…

40代くらいなの…

「はい、ですので、椎名翔をここで思う存分暴れさせてやりましょう……」

依姫は涼しい顔で言う。

「ああ、そうだな依姫！そなたには今までにないくらいの報酬をくれてやろうぞ！」

「………何か勘違いしているようですね賢者様……」

そう言つて、依姫は祇園様の刀を抜く。

「椎名翔をここで………この本殿で暴れさせてやりましょう… と、言つたのです」

すると、賢者様の真上から鈴仙が降りてきて、銃から10発ほど発砲した。

しかし、賢者様は何かの結界で弾く。

「ほう………何のつもりだ………?」

依姫………この私に逆らうというのか?」

「ええ、全くもつてその通りです。」

ですから、王家吸血鬼時代なんて来ない！」

俺の両手首のフェムトファイバーが解け、俺は一直線に賢者にムラサメを突き刺した

………はずだった。

スピードもタイミングも完璧だったのに、剣先が賢者を貫いていなかった。

鈴仙の銃弾もそうだ、賢者に触れてすらいない。

「……………そりや反則だろ……………」

「私に逆らうなど100年早い！王家吸血鬼よ！」

すると、結界が解放され、その衝撃で俺と鈴仙は吹っ飛ばされた。

俺は少しだけ吐血し、

「……………へえ……………あんた相当やばいな……………」

思わず反則級の、技を見せつけられ俺は弱音を吐く。

なんだよ……………その能力……………

俺はこいつの神力が姉に似ていて不愉快だった。

11話

真実

私達は賢者様と戦っている。

いや、戦っていると言っているのだろうか…

私と翔、依姫様が一齐攻撃しても、賢者様の結界にはまるで響かない。

「はあ……はあ……なんだよこいつ……」

「ほう、なかなかいい攻撃だったぞ。椎名翔くん……

褒美の一つ、真実を教えてやろう」

「はあ？何のことだよ」

賢者にはやりと笑い、

「君は……エリナ様の本当の弟なんかじゃない！」

「なっ?!」

「しかし、君は確かに王家吸血鬼だ！」

……昔の話をしよう。

ロミア・カーティス様は大変、女性好きでな……

結婚はしていたんだが……

当時、月の中でダントツで美人だった…椎名彩菜と、愛人の関係になった。

椎名彩菜とロミア・カーティス様の間に生まれたのが……椎名翔……お前だ……」

「じ、じゃあつまり……」

「お前とエリナ様は腹違いの姉弟だ……」

エリナ様はお前を外の世界で怪しませないように……

今は亡き椎名彩菜の名前でお前と過ごした」

私はその事実を知っていた。

だって、依姫様が教えてくれたもの……

「……なるほど……そういう事か……」

やっとなの心のもやもやが消えたぜ……」

翔はにやりと笑みを見せ……

「エタナナルブルーアイズ
幻永蛇眼！」

「ほう、それは……カーティス家の能力……と言うやつか……面白い！かかってこい

！…椎名翔！」

翔はムラサメを持ちこよう唱えた。

「血符「叛逆の返り血」！」

あれは……………私と一緒に作った……………殺傷結界の……………

「ふん！無駄だ！この結界がある限り……………な、なんだ……………?!」

「結界と結界を中和させて、時空の狭間に持っていた

これでスキだらけだな……………」

「や、やめろ……………」

腰を抜かす賢者様に翔が歩を進め……………

ムラサメで、賢者様の右肩から左脇腹を切り捨て、賢者様はキレイに真つ二つになった。

「……………終わった……………か……………」

賢者の死に悲しむ人は誰ひとりいなかった。

依姫様や、賢者様を慕っていた刀の賢者…剣神霊様さえも……………

「お疲れ様……………翔……………」

「ああ……………ちよつと能力酷使しすぎたかな……………」

ちよつと体がだるいわ……………」

「早く永遠亭に帰って治療しましょう……………」

その刹那だった。

「鈴仙！」

「ぎゃ?!」

翔が私のことを強く押した。

私は尻餅をつき

「ちよ?!?何すんの……………よ……………」

私は翔に怒ろうとした……………

だが……………それは出来なかった……………

なぜなら……………

「がはっ……………」

翔の口から大量の鮮血が零れていた。

「なん……………だよ……………これ……………」

翔の腹を……………1匹の大剣が貫いていた。

「ハハハハハハ！油断したな！椎名！私はエリナ様の能力を継承したんだ……………カ！
テイスの能力を引き継いでいる！」

賢者様の目は左目だけ真っ赤に染まっていた。

「さあ！ 剣神霊！ その兎を殺せ！」

「翔！」

依姫様が叫び、翔の方に走ろうとする。

翔はそれを手で制し、

「来るな……」

お前の目の前に見えない須臾の結果が張られている。来たら体が持たないぞ……」
そうして、翔と賢者様の1対1の戦いが始まった。

「すまないな鈴仙。私が相手だ。」

私は戦いたくないのだが……体の自由が効かない……賢者の野郎に操られてる……
殺すつもりで来てくれ……」

「………分かりました。全力で参ります！」

ルナ
ティツク
レッドアイズ
幻朧月睨！」

私は今まで何度も剣神霊様に稽古をつけてもらっていた。

まるでお父さんのように慕っていたこの人を正直倒せるわけがなかった。

「鈴仙、私も手伝うわ……」

依姫様が加勢してくれた。

「ありがとうございます……」

さあ行きましょう！

散符「インレジナルフルムーン真実の月！」

私が弾幕を発射すると劍神霊様は、それを軽々と斬り捨てる。

「神霊斬！」

衝撃波と共に劍神霊様の斬撃が飛んできた。

私と依姫様は辛うじてそれを横っ飛びで避ける。

「鈴仙……あなたは翔のところに行きなさい！」

「え、でも、結界があるんですよ?!」

「私が斬り裂いた。後10秒で閉じてしまう。」

早く！」

依姫様がそう叫んだ。

後10秒程で元に戻る結界に亀裂が入っていた。

「翔！」

「れ、鈴仙! どうやって入ってきた?!」

「依姫様が開けてくれた!」

「依姫のヤロー……………」

翔は呆れていた。

「ほう、中々上玉な女性を連れてきたな……………椎名よ……………」

よし、この戦いが終わったらその兎を存分に愛でてくれようぞ!」

うわっキモ……………」

賢者が私に向かって荒い息を吐く。顔を真っ赤にして唇を舌で舐めまわしている。

きもい……………キモすぎする…

まずいな……………この戦い勝てなかったら私の人生終わるわ…

「やっぱり賢者ただの変態やん……………」

まあ、過ぎたことを言っても仕方ないか……………」

行くぞ鈴仙!」

「ええ!」

「スペルカード!」

「スペルカード!」

私と翔は同時にそう唱え、

ルナティックレッドアイズ
 「幻朧月睨！」
 エターナルブルーアイズ
 「幻永蛇眼！」

私は深紅

翔は群青

私と翔は目を光らせ、賢者と、戦った。

翔と依姫様の戦闘以上の……

そして、月と幻想郷の未来がかかっているこの大きな戦いの口火が切られた。

12話

幻朧月睨

「はあ……はあ……」

私は息を切らしていた。

自分の体力の限界が見え始めている。

「虹符「永遠の幻想郷」！」

翔が弾幕を張る、それを……

「厄災「リベリオンスピリッツ」！」

衝撃波と共に翔の弾幕は全て消えた。

「や、やべえなこれは……」

「ハハハハハハ！月の力を舐めるな……幻想郷でノコノコと生きていたお前とは違うつてことをな！」

「黙れ！」

翔も激昂する。

「断る。幻想郷の力では月に敵わん！」

「聖符「グランドジェネシス」！」

「無駄だと言っているだろう！貴様がどう足掻いたって私には勝てない！」
翔は次々と、技を放つ。

「光符「月光光線」！」

両手からかなりの妖力を施した光線が発射される。

しかし……

「ふん、貴様の全力はそこまでだったようだな！」

賢者はそれを片手で握りつぶした。

「これで終わりだあ！」

「全符「ノーヴアム」！」

すると、翔の真上から大量の矢が降ってきた。

「あ、危ない！翔！避けてえ!!」

私は必死に叫ぶ、翔も避けようとするが……

「な、なんだよ……これ……」

翔の足が凍りついていた。

「ハハハハハハ！王家吸血鬼時代が始まるぞお！」

「くそ……これが賢者の力か……」

剎那

翔の全身に約100本程の矢が突き刺さり、その周りには大量の鮮血が流れていた。

そして、翔はピクリとも動かさず……………

「翔？……………翔！いやあああああああ！！！！」

私は泣き叫ぶ……………悲痛な叫びだった。

「れ……………いせ……………ん……………」

まだ翔に息はあった。

「翔！！しっかりして！死なないで！！」

私は泣きながら翔の傷口を抑える。

賢者が翔に歩み寄りその傷口を踏む。

「無様……………無様すぎるぞ……………王家吸血鬼が……………もういい、死ぬ」

一つの剣……………レイピアを生成し、それをまた翔に突き刺した。

「がはっ……………」

「ふふふ、さあ、鈴仙……………と言ったか……………私がそなたを愛でてくれようぞ……………」

そう言つて、賢者は私を魔法で縛り付けた。

「いや……………やめて！！」

「ふふふ、可愛い声を上げるな……もつともつと興奮してしまうだろ……」
私の服の中に手を入れ、撫で回している。

「鈴仙………やめろ……」

翔が苦しい声で賢者に言う。

賢者はそれに聞き耳すら立てず、私の体をさすっている。

次は私の頬に手を伸ばし、荒い息を何度も私に吹きかけた。

「おお、可愛い……可愛い……」

「いや、触らないで！翔！助けて！」

私は必死に翔に助けを求めた。

「やめろ……賢者！」

翔がうつ伏せで私に手を伸ばす。

「ああ、鬱陶しい虫が目の前にいる……邪魔だ」

すると、翔の腹にもう一本レイピアが刺さった。

今度こそ翔は気を失った。

「翔?!翔!!」

「さて、鈴仙よ、これからわたしといっしょに過ごそう……」

「いやあああああああ！」

私はただ叫んだ。

俺は何をしているんだ……………

大切な人が……………また……………

俺がいたのは何も無い、真っ白な空間。

俺はそこで悲痛な声を上げる。

「嫌だ……………また……………」

「無様……………だね……………」

そこに立っていたのは……………

「姉……………ちゃん？」

間違いない俺の姉

椎名彩菜ことエリナ・カーティスがいた。

「あなた…王家吸血鬼である私の弟でしょ？……………あのくらいのやつぶつ倒しなさいよ……………ほら、私の最後の能力をあげるわ……………これであなたの大切な人を助けなさい……………」

「あ、ああ、ありがとう……………お姉ちゃん……………」

俺の身体中に力が湧いてきていた。

「ありがとう……………お姉ちゃん……………」

「うん！」

すると、姉ちゃんはいつも俺をからかう時の顔をして

「あの鈴仙つて子のこと、好きなんでしょ？」

俺はズバツと凶星をつかれ、

「は、はあ?!何でお姉ちゃんが知ってんだよ?!／／／／」

「あはははは、17年間過ごしてきた姉に隠し事は出来ないわよ！この戦いが終わったから告白でもしなさい！」

「ちくしょー……」

そうしてエリナ・カーティスは優しい笑顔を浮かべ……

「さあ、行きなさい、翔。また王家吸血鬼の力を……本気をこの……月面戦争に終止符を打つのよ……」

頼むわよ……吸血鬼の王子様……」

こうして俺は現実に戻ってきた……

「や、めろ……!!」

俺は立ち上がり、目の前にいる賢者を睨んだ……

すると賢者は、驚きと焦燥の顔を浮かべた。

「な、なぜ……息の根を止めたはずっ!?!」

「ウオアアアアア!!」

俺は能力をくれた姉に感謝しながら……
また、立ち上がった。

「し、翔……………」

翔は死んだはずなのに……立ち上がり、賢者に向かっていった。
すると、賢者だけ吹っ飛ばされ、私はそこに尻餅をつく、

私の前に翔が来た。

「鈴仙……………遅れてごめんな……………」

私はとめどなく涙が溢れた……………

「もつと早く助けてよ……………バカ……………」

翔の目は左目は群青、右目は……………深紅

「な、なぜ、エリナ様の能力をお前も使えている?！」

「残念だったな……………お前が継承した姉の能力は……………龍を操る程度の能力……………」

カーティスの能力は継承されてなかったみたいだな……………」

「カーティスの能力を……………お前が継承したというのか……………!」

「その通りだ……………さあ、本気で行くぞ……………」

翔の下に魔法陣が展開された。

そして、尾てい骨には10匹の蛇をまとっていた。

「創造「グランドアルケミスト」!」

すると壁から大量の槍が生成され、一直線に賢者に向かっていった。

それを賢者は結界で防御し、

「無駄だ! エリナ様の能力を継承しても、私には敵わん!」

「それはどうだろうな……………ルナティックレッドアイズ幻朧月睨!」

え……………何で私のスペルカードがまた……………

まさか……………幻朧月睨も能力で会得した……………てこと？

翔の幻永蛇眼は能力を強化したものでスペルカードではない、

私はスペルカードで幻朧月睨を使っている。

翔は幻朧月睨を能力の一つにしたのだ。

すると、両目が真っ赤に染まり、狂気によって、翔の妖力が最大限まで放出された。

「これで終わりだ……………賢者……………」

血符「反逆の返り血」！

この技は狂気が増せば増すほど威力が上がる、最大まで行けば、どんなに無敵状態でも、簡単に殺せてしまう。

「や、やめろ……………やめろおおお!!」

賢者は翔の結界に包められ、そのまま握りつぶされた。

「終わった……………の……………」

依姫様の方も丁度終わっただらしい……………

戦闘を見ていた月の住民達は歓声を上げた。

多分賢者の政治から逃れたことが何よりも嬉しかったんだろう……

私は翔に駆け寄り、

「お疲れ様……翔……ありがとう……」

「ああ……終わったん……だな……」

翔そのまま仰向けで倒れ、気を失った。

この時を持ち、月の賢者は死亡し、月に平和が戻った。

こうして、第2次月面戦争は、またもや幻想郷の勝利で終わった。

13話

恋が壊れる音

私はあの後、翔をかついで月の診療所に向かった。

翔の怪我は全治1ヶ月。

私も3週間の怪我を負った。

ちなみに死亡した賢者の代わりは剣神霊が摂政として、働いている。

依姫様も、怪我を負ったには負ったが切り傷程度。

今では豊姫様と元の生活に戻って行った。

幻想郷の方も、死者は出なかった。

しかし、博麗の巫女　　霊夢さんは翔と、同じくらいの怪我を豊姫様から食らった

ということで今は永遠亭の方で治療をしているらしい…

月面戦争終戦から2週間後

翔が初めて目を覚ました日。

「ねえ、翔……………」

「ん？なんだ？」

「あなた…………どうやって、あの後、どうやってあの傷から耐えたの？」

賢者に翔が殺されたと思いきや、エリナ様の能力を得て、またこの世界に戻ってきたことに疑問を抱いていた。

「あの時、俺の頭の中にエリナが出てきてな……最後の能力をあげるって言って、俺の右目にその能力が入り込んできたんだ……したら、エリナの創造の能力を会得することが出来た……のかな……」

「そう……まあ無事でよかったわ……」

じ、じゃあ私は部屋に戻るわね……」

私が自分の病室に戻ろうとすると……

「失礼するわね……翔、鈴仙。お見舞いに来ただけど……」

果物……いる？

つと、翔、目を覚ましたのね……」

「ああ」

「ありがとうございます依姫様……」

「ええ、お姉様が採ってきた桃よ。」

月の桃は最高級品なの、幻想郷に帰る前にいい土産を食べさせてあげようってお姉様が……」

「私久しぶりに桃食べます！ひやあー美味しそ♪」

私はその桃にかぶりついた。

「ん、んめエなこれ。ありがとうな依姫」

翔が礼を言うのと依姫様は何故か顔を赤くして目をそらした。

「え、ええ、お安い御用だわ……………」

依姫様も帰り、私と翔のふたりきりになった。

「はあ、月面戦争……………終わったのね……………」

「だな……………長いようで短い2日間……………だったな……………」

私は翔に想いを伝えたい。

でも、翔がこの月面戦争の英雄になってしまい、私から離れていきそうな気がして、怖かった。

「ね、ねえ、翔……………あなたは治療が終わったら幻想郷に帰るのよね？」

「うん、そのつもりだが……………」

「帰る前にいい所があるの……………」

「剣神霊様から許可を頂いたの……………」

「まあ、まだ2、3週間はここにいてるけどな……………」

「……………暇ね……………」

「……………暇だな……………」

「あ、私はそろそろ病室に戻るわね……」

私は決めていた。

幻想郷に帰ったら彼に想いを伝える。

もう、後悔もしたくないしね……

その夜。

私は暇だったので外に出た。

月の空気は幻想郷より、綺麗だ。

それに寝つ転がって夜空を見ると、星だらけだ。

地上も見え、美しかった。

すると、病院の近くで足音が聞こえた。

物陰に隠れて見ると……

「翔だ……」

私は翔の姿を確認して自然に顔が明るくなってしまふ。そして、走って彼の元に行こうとした。

でも……

「翔……………」

「？」

私は足を止めた。

翔の近くで聞き覚えのある声が聞こえた。

「ん、ああ、依姫か……………どうした？」

依姫様だ……………

「い、いえ、私はただ外の空気を吸いに来ただけよ……………」

依姫様の顔をよく見ると、暗くてもわかるくらい……………

赤く、染まっていた……………

「え、えつとね……翔……ちよつと私の話を聞いてくれるかしら？」

「良いけど……」

「私はね、翔に、殺されかけた事があつたわよね……」

その時、私が全てを話しただけで、私のことを信用してくれた。いつもなら警戒心もないただの馬鹿だつて思うけど……」

「す、すごい言われようだな……」

依姫様はそれでも言葉を並べる。

「でも、私はそれが嬉しかった……」

その後も、私を頼ってくれて……あなたが戦っている姿はとてもかつこよかった……」

そうして私より先に依姫様がその言葉を彼に告げてしまう……

顔を真っ赤に染め……

「私は翔の事が好き……」

あなたが幻想郷に帰ってしまうのは分かってる……
でも、私はあなたの事が大好き……私の恋人になってほしい……」

依姫様が翔に想いを伝えた。

私は……胸が急に苦しくなって、泣きそうになり、一目散にその場から逃げた……

どれくらい走っただろうか……自分でもわからないくらいに走った。

いつの間には私は大粒の涙を大量に流していた。

「私の……ばかあ……」

胸が痛い……

苦しい……

翔が……どンドン私から離れていく……

私は翔の依姫様に対しての返事も聞いていないのに、勝手に悲しみに浸ってしまった。

私はこの時、自分の恋が碎けていく音を感じた。

それから私は翔との接触を避けた。

私はこれ以上翔と、依姫様の関係に首を突っ込んではいけない。

そう思つて、翔より先に劍神霊様に一言言つて、幻想郷に帰つてきてしまった。師匠達には心配されたが……

「師匠……翔には……依姫様という恋人が出来てしまいました……」

そう言つて、師匠の胸で大泣きした。

「それで先に帰つてきたのね……」

でも、後1週間後には翔が帰ってくるのよ？

本当に依姫の告白を彼はOKしたの？」

私はハッと、我に返つた。

そう言えば……翔の依姫様に対しての返事を聞いていなかった……

「でも、多分OKしているんだろうな……」

私は月面戦争が終わつたというのにいつまでも悲しさが心から離れなかつた。

1
週間後

永遠亭に翔が帰ってきた。

14話

月から幻想郷へ

俺は外の空気を吸いにベットから降りた。

鈴仙は俺と一緒に幻想郷に帰るために治るのを待っていてくれる。

「んんーっ」

俺は夜空に向かって大きく背伸びをした。

「綺麗……………だな……………月の夜空……………」

これは何時間見ても飽きないな……………

俺はそこに寝っ転がろうとした。

「翔……………」

背後から声をかけられた。

「ん。ああ、依姫か……………どうした？」

「い、いえ、私は外の空気を吸いに来ただけよ……………」

「そうか……………」

そこからは沈黙が続いた。

しかし、依姫が口を開いた。

「え、えっとね……翔……ちよつと話があるのだけど……いいかしら？」
「?………いいけど………」

依姫は少し顔を赤くし、

「私はね、翔に、殺されかけた事があつたわよね……」

その時、私が全てを話しただけで、私のことを信用してくれた。いつもなら警戒心もないただの馬鹿だつて思うけど………」

「ひ、ひどい言われようだな………」

俺は少しショックを受けた。

「でも、私はそれが嬉しかった……」

その後も、私を頼ってくれて………あなたが戦っている姿はともかっこよかった………」

すると、俺は依姫から思いもよらない言葉を聞いた。

「私は翔の事が好き………」

あなたが幻想郷に帰ってしまうのは分かってる……」

でも、私はあなたの事が大好き………私の恋人になつてほしい………」

「?!」

俺は言葉が出なかった。

まさか……依姫が俺のことをそう想っててくれたとは……

でも、俺には好きな子がいる……

いや、もちろん依姫のことが嫌いな訳じゃない……

むしろ付き合ってもいいくらいだ……

でも、俺はやっぱり鈴仙あいつが好きだ……

だから……

「……………ごめん……依姫……」

俺は……他に好きな子がいるんだ……」

「……………え……」

依姫の目から涙が零れる。

チクチクと何かが胸を刺してくる。

「でも……お前のことが嫌いな訳じゃない……むしろ感謝してるんだ……お前がいなかったら月まで行けなかったし、賢者に勝つことも出来なかった……」

だから恋人にはなれないけどさ……友人として、これからよろしく頼むよ……」

依姫は泣きながらも……

「……………そつか……………なら、仕方ない……………ね……………」

うん、じゃあこれから、友達として、よろしくね……………」

「ああ……………ありがとう……………」

「でも！私は諦めるつもりはないよ……………」

……………ちなみにその好きな子の名前って聞いていいかな？」

「ああ、いいけど……………」

思うのは簡単だけどいざ口にすると恥ずかしいな……………」

「鈴仙だ……………」

すると、依姫はフツと微笑んで、

「そつか……………じゃあ鈴仙とはライバル……………というわけか……………」

うん、ありがとう翔。私は寝るね……………」

「ああ、おやすみ……………」

そう言つて、俺と依姫は別れた。

正直、依姫に告白されたのは嬉しかったけど……………」

「やっぱ……………鈴仙が好きなんだ……………」

その2日後……

俺の元に劍神霊が来た。

「たった今、鈴仙から知らされたんだが……」

「はあ?! 鈴仙が幻想郷に帰ったあ?!」

俺は驚いた……

幻想郷の方でなにかあったのかな?

「り、理由まで聞いたか?」

「いや……でも恐らく幻想郷の方で何かあったんだと思う」

「そ、そうか……」

俺も幻想郷に帰ろうとしたが……

「今の体で行っても、荷物になるだけか……」

「多分、鈴仙だけが師匠に呼び出されたんじゃないの?」

依姫が俺に言う。

「そうなのかもなあ……」

まあ、緊急……ではなさそうだ。

「ま、俺はゆつくりするよ……」

体はほぼ完治に等しかった。

だが、医者には……

「怪我は完治しているけど能力、つまり君の生命バランスの方が崩壊しかけている。このまま幻想郷に帰ろうとしたら、途中で死んじゃうよ……」

と、釘を刺されたので安静にしている。

「あ、じゃあ翔。あなたに見せたいものがあるの……」

見せる、というより剣神霊様からの試練……と言った方がいいわね……

2日後、診療所の入口に来て。」

「お、おお分かった」

俺は依姫の言っていることに素直に従った。

そして、2日後。

「よお、依姫」

「あ、もう来たのね、それじゃ案内するから着いてきて」

俺は依姫のあとを追いつ、月の海の近くにある神殿らしきものの内部に入った。

「古臭いけど……………なんかすごい妖力を感じる……………」

「そうね……………だつてここには……………」

依姫が一旦話すのをやめた。

すると、1本の剣が台座に刺さっていることが確認できた。

「あれは……………」

「月の聖剣」ルナ・エンド「月光終剣」よ。

あれは、選ばれたものしか抜くことが出来ない、

あの剣の賢者様、剣神霊様でさえ抜けなかったものよ」

「これを俺に抜けというのか……………」

剣神霊でも抜けないという最強の剣を俺が抜けるわけないというのに……………」

「まあ、つべこべ言わずに1回触つてみたら？」

依姫がそう言うので俺はその月光終剣ルナ・エンドの柄に触れた。

すると……………」

ピキイイイイイン

剣の周りにあった見えない結界が割れる音がした。

それと同時にとんでもない衝撃が俺に襲いかかって来た。

「な、なんだ?!」

「嘘……まさか……翔! その剣を抜いてみて!」

依姫が後方で叫ぶ。

「はあ?! 無理言うなよお前!!」

衝撃に耐えながら後ろに叫ぶ。

「いいから抜いてみなさい!!」

俺はそう言われ……

「もうどうにでもなれ……」

月光終剣の柄を握り、思いっきり上方に持ち上げた。

すると……

スツ、シューイイイイン……

と、あっさり抜けた。

流れテンプレすぎね?

「あなた……だったのね……」

と、依姫に言われた。

「何のことだよ……」

「あなたが吸血鬼の王子……ってことになるわ……」

「そういや、姉ちゃんにも同じ事言われたな……」

「なんだ王子様って……」

「まあ、悪い気はしないし……」

「この剣は俺がもらっていいのか？」

「ええ、すぐにその剣の鞘を鍛冶屋に作らせるわ……」

「そう言っつて、神殿を出た。」

それから1週間後。

能力の方も完治して、全てが元通りになり、俺は幻想郷に帰ることにした。

「じゃあ、俺は帰るよ……」

俺のために綿月姉妹、賢者様の面々、月の住民までもが見送りに来てくれた。すると、依姫が前に出て。

「鈴仙に振られたら私のところに来なさい！いつでもOKだから！」

と、満面の笑みで俺に言う。

「縁起でもないこと言うな……」

俺が呆れると、背中をバシツと叩かれた。

「いっつ?!」

「頑張つてきなさい!!私はずっとあなたのことを応援してるわよ!

……………それと……………いつでも月に遊びに来てね……………」

と、依姫が少し赤面しながら言ってくれた。

「ああ、ありがとう依姫……………」

それじゃあ、みんなまたな!」

俺は手を振りながら月を後にした。

そうして俺は約1ヶ月ぶりの幻想郷に帰ってきてきて相棒である鈴仙に会うため、
月光終剣ルナ・エンドを持って、永遠亭へと足を運んだ。

15話

素直に…

翔が月から帰ってきた。

玄関の前には師匠や姫様、てゐが集まっている。

私は翔と顔を合わせるのが辛いので隠れている。

「ん？翔、この剣って……」

姫様がそう言つて翔の腰にある長剣を指さす。

私も気になつて見ると

「ああ、月光の神殿にある、月光終剣ルナ・エンドですね…」

「つてことは……あなた王家吸血鬼の王子の血が流れているのね……今更驚かないけど……」

姫様はそう言つと……

「さて、じゃあ私はゲームの続きでもしてきますか…」

そう言つて玄関には誰一人残らず自分の仕事に戻つた。

翔が靴を脱いで入ろうとした瞬間、私と目が合った。

「ん？あ、おーい鈴仙！」

翔が優しい笑顔で私を見る。

私は顔を背け、その場から立ち去る。

「お、おい、鈴仙？」

私はそのままリビングへ行き、薬を手に持ち

「薬の訪問販売に行つてきます……」

すると師匠が

「れ、鈴仙？まだ今日は休んでていいのよ？」

「いえ、もう大丈夫ですので……」

そう言つて玄関へ向かう、翔とすれ違った。

「お、おい……鈴仙……」

「……………」

私はそのまま無視して、通り過ぎた。

竹林に出ると……

「はあ……何で話せないの……？」

私は自分にうんざりしていた。

な、なんでだ？

永遠亭に帰ってから鈴仙が俺のことを避けている…

「俺、なにかしたかな……」

そう思って、永琳さんに相談した。

「んー…自分で確認したらどう？」

と、言う。

「まさか……嫌われた……？」

はあ、ようやく幻想郷に帰ってきたのに……何でこんなに憂鬱にならねばならんだ

……

俺は自分の部屋で肩を落とす……

私が訪問販売から帰ると、翔が晩御飯の用意をしていた。

私はそのままリビングを素通りし、早歩きで自分の部屋に向かった。

その後を、翔が着いてきた。

「お、おい！ 鈴仙！ どうしたんだよ？」

翔が少し食い気味に言う。

「……………別に何も無いわよ……………」

と、無愛想な声で言ってしまう。

翔が依姫様と恋人になってしまっただけでこんなに態度を変えるなんて……………自分の事をますます嫌いになる。

「な、何も無いわけないだろ！俺ともまともに話してくれないし……」
翔が私に向かって走ってくる。

「来ないで!!!」

私は叫ぶ。

翔は体を強ばらせた、

「?!……………ど、どうしたんだよ…………お前…………」

「今は……………一人にさせて…………」

私は翔の方を向かずに冷たくそう言い放つ。

「……………そうか……………ごめん…………」

翔は、少し悲しげにそう言って踵を返し台所に向かった。

私はそのまま自分の部屋に入り……

「なんで………何でこんなに胸が苦しいのよっ………」

自分の胸を握り

大粒の涙を流す……

次の日の昼。

私は翔と、今でも訓練をしている。

それは避けることが出来ないの、

仕方なく弾幕ごっこをしたりしている。

そうして訓練も終わり、縁側に座ったら……

「なあ……鈴仙……頼むからさ……なんでそんなに俺のことを避けるのか……教えてくれないか……？」

翔が真剣な眼差しで私を捉える。

今なら……言ってもいいかな……

「翔……依姫様と付き合ってるの？」

「……へ？」

翔が素っ頓狂な声を上げる。

「私聞いちゃったんだ……依姫様があなたに告白するところ……でも、私邪魔かなって思っ……翔の返事を聞く前にその場を去ったんだけど……」

「あ、あの……鈴仙……」

「……何よ……やっぱり依姫様という恋人がいるのね？」

と、睨みつける。

「俺、その告白断ったぞ？」

「……………へ？……………」

次は私が素っ頓狂な声を上げた。

「だから……………俺、別に依姫と付き合っていないけど……………」

「そ、そうなの？」

「あ、ああ」

すると、私はすぐに明るい顔に戻し、

「なあくん！私の勘違いだったってことね！」

「まさか、それであんなに怒ってたのか？」

私は顔を赤くして

「い、いや、そうじゃなくて……………ほら、恋人が出来たから勘違いされそうだなって思ってた……………」

と、慌てて弁解する。

「あ、ああ、なるほど……………」

「？てゆーか、なんで依姫様の告白断ったのよ？」

すると、次は翔が顔を赤くして…

「え、あ、えーと、月と幻想郷じゃ距離があるからさ……俺遠距離はちよつとな…」

ちよつと嘘っぽい……

でも……遠距離が嫌……ということは私にもチャンスがあるのね……

私はもう1度気を取り直して、

「さーて、もう1回弾幕ごっこするわよ！」

「あ、ああ、やろうか……」

「スペルカード！」

ルナティックレットアイズ

幻朧月睨！」

「エターナルブルーアイズ
幻永蛇眼！」

と、いつも通り2人同時に能力を発動した。

「さあ、ルナ・エンド月光終剣の力、見せてもらおうわよ！」

「俺から行くぞ！」

虹符「永遠の幻想郷」！」

私はそれをすべて避け、

レシヨナリチユーニンク
「狂符」幻視調律「！」

「お、おい！こんなスペルカード持ってたのかよ！」

翔はビビっていたが……すぐに体制を立て直し、何かの詠唱を始めた。

「月の光よ……一つの核となり、全てを滅せよ……」

バットエンド・ムーンライト
絶望の月明かり！」

すると、翔の周りにとんでもない妖力の超巨大弾幕が作り上げられ、弾幕ごと、私を吹き飛ばした。

「な、何よあれ………」

「ハハハ……あれは月光終剣ルナ・エンドの力だよ……」

「反則でしょ………」

その日の夜……

翔は寝ただろうか……？

私は明日告白するつもりでいる。

なぜなら……明日は月面戦争終戦の祭りが行われる。

師匠は……

「パートナーなんだから翔と2人で遊んできなさい☆」

と、残酷な笑顔で私に提言した。

「まあ、嬉しいからいいんだけどさ……」

告白して、物語の主人公の恋人になる。

少女マンガでは“ヒロイン”と言うらしい。

でも……正直私の告白が成功するとは思わない……

私が幻想郷中で人気のある翔のヒロインでいいのだろうか？

「いや、ヒロインになれないなんて嫌だ……やっぱり……」

ヒロインになりたい。
翔の好きな人になりたい。

私はそのまま眠りについた。

f i n a l s t o r y

ヒロイン

「祭り……………か……………」

今思うと、祭りで告白って少しベタじゃないかな？と思ってしまう。

「まあ、でも、あり……………だよね……………」

「……………はあ？祭りが延期?!」

と、隣の部屋から師匠が言う。

「ど、どうしたんですか師匠？」

「……………」

「あ、うどんげ……………河城の方から連絡が来てね……………」

機械の入荷が遅れて……………3週間後に延期になったの……………」

「え、ええ……………」

まあ、仕方ないか……………別に困らないし……………」

1週間後。

師匠が突然

「あ、そうそう、うどんげ。」

ちよつと翔と一緒に月に土産持って行つてくれない？」

「つ、月ですか……」

「月面戦争でも依姫にはお世話になったんでしよう？」

翔と行つてきなさい？」

依姫様………か……依姫様が翔のことを好きだと知っている今はあまり会いたくはない………

「翔ー？」

師匠が台所にいる翔を呼ぶ。

「はーい？」

手を拭きながら出てきた。

「明日からうどんげと月に行つて土産を渡してほしいのよ

いいかしら？」

「あ、はい、分かりました」

「そ、ありがとう」

そう言つて、翔はまた台所に戻り料理を続けた。

「さて、うどんげ、依姫がいる中でどうやってアタックするのか楽しみにしてるわ」と、Sつ気全開の笑顔で私を見据える。

性格悪いなあ……

そう言いながらも私は手土産を持ち、翔と一緒に月へ向かった。

月に着いた。

すると翔は……

「……………なんか懐かしいな……………」

翔は爽やかな笑顔を浮かべて言う。

「そうね……3週間ぶりかしら？」

すると、月の都の外れの方から聞き覚えのある声が聞こえた。

「ほら！そこ！気を抜かない！」

依姫様だ……

今は月の兎のリーダー。

訓練中だろう。

なかなかスパルタだな……

「依姫様——」

私が叫ぶと、依姫様はこちらに振り向き、一気に怖い顔から明るく、乙女の顔になった。

「翔！鈴仙！どうしたの？」

「永琳さんが月にお土産を渡せってさ」

「そう。ありがとう。私は今は手が離せないから、宮殿内の劍神霊様に渡しなさい」

「おう、そうさせてもらおうよ」

そう言つて、私と翔は宮殿内へ入った。

「失礼致します。劍神霊様はいらっしゃいますか？」

翔が王の間のドアを開け、そういった。

「おお、椎名と鈴仙ではないか、して、何用で？」

いつもと変わらない優しい顔の劍神靈様が出迎えてくれた。

「師匠……………八意永琳様から……………でございます」

そう言つて、翔は師匠から貰つた包みを渡す。

「ふむ、お師匠様から……………」

劍神靈様が包みを開けると、

「これは……………みたらし団子？」

私と翔も驚き、こう言い放つた。

「月にはみたらし団子がないと永琳さんから聞いたことあるんですが……………」

「ふむ、これは嬉しいな…是非お師匠様に礼を言つておいてくれ、お前達も、ゆつくりし

たまえ」

「はい、ありがとうございます」

私と翔は、宮殿の個室でゆつくりしていた。

すると

「翔、ちよつと外で訓練しない？」

と、依姫様が翔を呼び出し、宮殿の外に出た。

「本気で行くぞ?」

翔が月光終剣ルナ・エンドを構えた。

「ええ、いいわよ……」

依姫様は祇園様の刀を右手で持った。

スペルカードは一切使わず、剣の腕だけで勝負していた。

「いつ見ても、凄いなあ……」

私は翔と依姫様の戦いを見て、改めてそう思った。

ガキーン! キイーン!

と、金属音を月中に響かせていたためか、見物人も増え始めた。

「はあ……はあ……」

「やるわね……やっぱり……」

「……………そっちもな……」

それから10分後……

「勝ったあー……………」

どっちも息を切らしていたが馬の差で翔が勝利した。

「やっぱり翔には勝てないわね……」

拍手喝采だった。

「お疲れ様、翔」

私はそう言つて、依姫様と翔にタオルを渡した。

「ああ、ありがとう鈴仙」

「部屋に戻つてお茶でもしましょうか」

私と翔と依姫様は個室に戻り、お茶を啜っていた。

「そう言えば、翔。あなたエリナ様の能力つて使えるの？」

「ああ、使えるよ、賢者戦以外ではまだ使つてないけど……」

すると、翔の右目が深紅に染まった。

「……綺麗ね……」

私の幻朧月睨よりも濃い赤だ。

すると、依姫様は口を開いて、

「あの賢者、実は王家吸血鬼時代を望んでいたんじゃないかと、翔のカーティス家の能力が欲しかったらしいの」

「だから俺を戦争に参加させたのか……」

「そ、だからあなたを王にしたかった訳じゃない、どっちかっていうと鈴仙みたいな可愛い子を狙つてたのかもね……」

「うわあ……………」

今思い出すと寒気がとんでもない……

「まあ、結局エリナ様から貰った能力もカーティス家の物じゃなかったらしいけどね

……………」

「今思うと可哀想だな……」

翔がなんか賢者に同情するので……

「全然可哀想じゃない、殺すわよ？」

「ごめんなさい失言でした」

と、脅した。

そんな感じで2時間後、

「んじゃ、私達帰りますね……」

「うん、今日は来てくれてありがとう

また来てね……」

「ありがとう依姫、また月にお邪魔させてもらおうよ」

すると依姫様が翔の耳の近くに口を寄せ、

「あなたも、鈴仙に早く告白しなさいよ！」
「？」

翔と依姫様が私に聞こえない声で話していた。

「ば、ばか！本人いるんだぞ！」

「あの、一体何の話を……」

「よし鈴仙帰るぞ！じゃーな依姫！」

「え、あ、ちよつと！さよなら依姫様！」

そう言つて、私と翔は月を後にした。

今日は祭り当日。

「ああ／＼／＼／＼／緊張する！／＼／＼／＼／」

私は寝起きからそんなことを考えていた。

翔はもう台所で朝食を作っており、いい匂いがしていた。

「ん、おはよう鈴仙、寝癖直してこい」

「は、……………」

別に翔と会っても緊張はしなかった。

告白するのに緊張してるんだ…………

私は洗面所に行き、顔を洗い、ご飯を食べ……………といういつも通りの日常を終え…………

午後6時。

「行くかうか、鈴仙」

「う、うん……」

私と翔で人里でやっている祭りへと足を運んだ。

「あ、ねーねー！翔！あのりんご飴食べたい！」

「お、いいぞ」

と、こんな感じ……………

ほんとに恋人同士だな……………

でも、そんなことを忘れるくらい楽しかった。

私が告白するタイミングは最後の花火、見るところは決まっている。

迷いの竹林、妹紅が教えてくれた穴場スポットだ。

午後9時。

私と翔はそこへ向かった。

私はもう緊張して、話すことも忘れていた。

「……ん」

「……せん」

「おおい、鈴仙さーん。聞こえてますかー？」

私の前に翔がいた。10cm程度前に。

「わあ?!ご、ごめん!／／／／／なに？」

「いや、ここって俺と鈴仙が初めてあつた場所じゃないかなーって……」

「……………ホントだ……………懐かしいわね……」

すると、火花が打ち上がった。

「!!」

もう、告白の時間か……………

頑張れ!勇気を出せ私!

と、自分に活を入れた……………

「ほんとに……………幻想郷ってこんなにもいい所なんだな……………

守つてよかつた……………」

と、火花を見ながら翔が言う。

その姿に思わず見とれていた。

そっか…………緊張する必要なんてない……

自然体でいつも通り行けばいいんだ…………

だって…………こんなにも優しい人を…………好きになったんだから……

振られてもいい…………紡げ…………自分の気持ちを……

「ねえ、翔。」

「ん？」

「あなたが賢者から私を救ってくれた時、とても嬉しかった……

あそこまで私を大切にしてくれた人は師匠と姫様とあなただけだったわ……………」

「お、おう…………」

少し照れ気味に翔はうなずく……

「それから私は……あなたの優しさに惹かれ始めた。

幻想郷に来てすぐなのに……見ず知らずの人達を必死に助けようとするあなたに……」

こんなめんどくさい言葉なんかいらない……

あの言葉だけでいい……今の私の気持ちをすべて乗せる。

あの言葉に……

「私は……恋をしたみたい……」

「?!
///
///
///
」

翔は驚いた顔をしていた。

私はそんなことも構わず、言葉が続ける。

「私は……………あなたのが好き……………」

だから……………私の彼氏になって欲しい……………」

翔は少し顔を紅潮させながらも、優しいいつもの……そして、私が恋した……あの笑顔で……

「俺も……鈴仙の事が好きだ……大好きだ……だから……俺の彼女になって欲しい！」

私はすかさず翔に抱きついた。

そして、大粒の涙を流し、

「言えた……やっと言えた……！」

これで私は……あなたのヒロインになった……！」

「ああ、お前はずっと……俺にとっての永遠のヒロインだ……」

私達は最後の大きな花火が上がると同時に……

「……………ん……………ちゅ／＼／＼／＼／」

唇を重ね……

私は翔にファーストキスを捧げた……

「さ、翔！祭りも終わったし………帰ろっか♪」
「ああ、そうだな、晩御飯作らないと！」

「………翔………」

「ん？」

私はもう1度紡ぐ………次はもつと愛情を込めて……
これからもよろしく………という意味で……
またそしてパ恋ートナー人としても……

「大好きだよ！」

私達は永遠亭に帰るまで強く、離さないように手を繋ぎ、お互いの温もりを感じて
た。

紅の瞳　　く永遠のヒロインく

e n d
……

a f t e r s t o r y

出会ってくれてありが

とう…

付き合ってから10ヶ月。

別にそこまで恋人らしいことは………してる。

けっこーしてる……

「ねえねえ、翔♪ ハグして?♪」

「俺今から晩御飯作らないといけないんだけど……」

「いーいーから!ハグして!」

と、大変わがままな私である。

翔は仕方なく私を強く抱きしめる。

「んふふ♪むぎゅー♪」

「これでいいだろ?晩御飯作るから待っててくれ」

「んむー……」

私は頬を膨らませるが……優しい笑顔を浮かべながら翔は台所へと歩いていった。

あの日から私と翔は恋人になり、月や幻想郷の人たちにかなり祝われた。もちろん、永遠亭の人たちも盛大に祝ってくれた。

最初の方は緊張してたけど

今ではただのラブラブなバカップルだ。

して、師匠達には……

「あなた達全く進歩しないわね……」

キスはしたの？」

「まあ、一応告白したあとスグに……それからはしていません……」

「はあ……2人とも消極的すぎだよ……もっと攻めていかないと……」

と、てゐですら私を促す。

「まあ、あなた達のスピードでいいわよ」

と、唯一姫様だけがまともな返答をしてくれる。

正直私もそろそろスキンシップを増やした方がいいのではないかと思う。

ハグだけでは物足りない……そう思ってしまう自分がいる。

もう1度……キス……したいな……

それから3週間たったある日。

てゐの悪戯で私の布団が無くなった。

これは翔と一緒に寝ろってことか……

テンプレにも程がある。

「ううー寒い……」

と、一人部屋で凍えていると、スーツと襖が開けられて

「お、おい鈴仙？何やってんだ？布団は？」

と、救世主^{メシア}が来た。

私が事情を話すと、

「まあ、仕方ないし、俺の布団入りな？」

「う、うん、ありがと……」

私と翔のふたりきりの空間に一つのベッドで2人が並んで寝ている。

戦争前夜を彷彿とさせるこのポジション。

「なんか……このポジションだと、月面戦争を思い出すな……」

「そうね……私と翔がまだ恋人同士になってない時よね……ねえ、翔……」

「ん？なんだ？」

私は勇気を出して言う。

「わ、私たちってまだキス……してないわよね？」

「か、考えてみればあの日以外したことないな……」

私は質問も何もせずに……

「ん……ちゅ……」

「ん?!……」

無理やり翔の唇に私の唇を重ねた。

「はあ……はあ……れ、鈴仙……」

「まーだ♪ 全然足りない♪」

私は何故か乗り気になってしまっていた。

1時間程たった後。

「んー……じゅる……れろ……」

舌を入れ始めた。

流石に早すぎではないか……そう思ったが自分を止められなかった。

「鈴仙?! // // // //」

私は上のブレザーを脱ぎ始め、スカートも今は着ていない。

下着姿は翔に初めて見せた気がする。

翔は顔を赤くして目を逸らす。

「もう10ヶ月経ったし………ね? // // // //」

「………覚悟しろよ // // // //」

それから私は翔との抵抗が無くなった。

もちろんキスをすることもそれ以上のことも……

あつ、それ以上の事は想像におまかせするわ。

中秋の名月の日。

紅葉が幻想郷を包み込む頃。

夜、私と翔は紺珠の薬異変の宴会の帰りだった。

師匠や姫様は酔いつぶれて先に帰り、残ったのが私と翔だけだった。

「……………今年に紅葉が綺麗ね……………」

「すごいな……………幻想郷の紅葉はこんな綺麗なんだ……………なあ、鈴仙」

「んー？」

翔が私に聞く。

「単刀直入に言うけど……………」

翔が少し緊張した顔でこちらを見る。

「俺は……………やっぱり鈴仙に色々と助けてもらっていたんだ……………戦い方も……………生きる意味さえもお前がいたから見つけることが出来たんだ……………」

「な、何よ急に……………／／／／」

少し照れる。

「だから……その……これからお前に支えてもらいたい……だから……」

「俺と……結婚しよう」

翔は真剣な眼差しをわたしを見据える。

私は嬉しかった。

翔からそんな言葉を聞くななんて思いもしなかったんだもん。

そして翔は真剣な眼差しで私を見据える。

きつと私はこんな翔の顔も惚れたんだろう。

そして幻想郷に来て最大級の笑顔で……

「……………はい」

それから私はすぐに子供を産んだ。

なぜなら結婚する前にとつくに妊娠していたらしい。

実感は無かったが……

男の子と女の子両方が生まれた。

男の子は椎名 愛翔^{あいと} 女の子は椎名 美鈴^{みれい}

「お姉ちゃんお姉ちゃん！一緒に縄跳びしよ！」

「愛翔もちやんと二重跳びできるようにならないとね！」

と、かなり仲が良い。

私と翔は結婚式はしなかった。

新婚旅行か結婚式で迷い、結局新婚旅行にした。

まあ、月面ツアーに行っただけだが……

縁側で翔とお茶をしていると……

「愛翔と美鈴を見ると俺は姉ちゃんを思い出すな……」

「エリナ様の事？」

「ああ、俺も丁度あの歳ぐらいで縄跳びをエリナから教えて貰ってたわ……」

翔はお茶を啜りながら思い出していた。

その夜、愛翔と美鈴は眠りに入った。

そう言えば、今日は花火大会の日だ。

「……………俺は……………やっぱりお前と会えてよかった。」

あのままあつちの世界にいたら……………俺は変われなかったと思う」

縁側で翔とお話をしていた。

「な、何よ……………照れるじゃない／＼／＼」

「だから……………俺はいつまでも感謝してる……」

「私だって……………翔のこと好きになつて良かったって今でも思う。あなたがいてくれたから私は勇気を持って敵に立ち向かえる。それだけでも私はあなたに感謝してるのよ

……
「

翔は優しい笑顔を浮かべ……

「俺と……出会ってくれてありがとう……」

私は夜空に輝く翔の顔に見とれていた。
すると、花火大会が始まった。

去年より全然綺麗で、まるで私と翔の婚約を祝ってくれているかのような……
そうして私はあの言葉を紡ぐ。花火とともにいつか消え去る人生の中で初めて口に
した言葉……

「翔……愛してるわ……」

「俺も愛してるよ……鈴仙……」

私達は狂気に染まっているかのような紅の大きな花火の音とともに……

甘い……甘い口づけをした……
2人はこれからパート夫トナー婦として、永遠の愛をここに記した。

第2プロローグ

〈東方天奏伝〉

幻想郷へ……………

テロ……………か…

俺、まなはらかなで愛原 奏はテレビを見て驚愕する。

なぜならこの近所のデパートで起きたからだ。

「行かなくて正解だったな……………」

俺は高校テストが終了し、今日は一人でデパートで遊ぼうと思っていたが友人に隣の映画に誘われたため、デパートに行くのを断念した。

そうして映画から帰ってきて、この様だ。

俺は普通の高校2年生。

17歳だ。

一応バスケ部。

「まだ……………犯人捕まってないのか……………」

テレビでは犯人未逮捕の映像が流れている。

まだ近辺をうろうろしているらしい。

「さて、兄貴起こしてくるか……」

俺はそう言つて、二階に上がろうとする。

すると……ピンポーン……

インターホンの音が響く。

「郵便かな？」

俺は階段を降りて玄関へ向かう。

「はい」

俺は近くにある電話でドアの前に立つ郵便の人と通話する。

「あ、郵便の者です……」

「分かりました。今すぐ行きます」

そう言つて俺はドアを開けた。

俺がドアを開けると目の前に銃口が向けられる。

一瞬で判断できた。

あのテロか……

「動くな……殺すぞ……」

殺される………のかな……

俺は嘲笑して、バカにするように……

「殺してみろよ……」

何故か全然恐れなかった。

そいつは問答無用でライフルを撃つ。

俺はそれを間一髪で避ける。

男は……

「な?!」

驚き焦燥の顔を浮かべる。

「おっせえんだよ……その銃弾……」

そう言つて、玄関に立てかけてあつたあるものを手に取る。

妖刀 咲名千里。さきなせんり 愛原家に代々伝わる妖刀だが…

俺が生きている中で1度も抜いたことがなかった。

お父さんは万が一の時以外は使うなど釘を刺されている。

自分も妖刀だから危険だと理解しており、一切触ろうとはしなかった。

しかし、俺はこの時、咲名千里を鞘から抜いた。

妖刀というくらいだから変な妖力が刀から出るのかと思いきや、よく見るただの刀だ。

だが、確かに俺の腕には咲名千里を力が伝わってきた。

そうして俺はテロに斬り掛かる。

人を斬るのももちろん初めてだ。

恐れたが、何故か刀を持つことに嬉しさを感じていた。

「ほらっ、早く死ねよ……」

俺はその男を　横、縦、斜め、全方位から斬りつける。

俺の目の前にいた男の全身は10秒ほどで真っ赤に染まり、周りに飛び散らしながらその場で仰向けで目を見開いて倒れる。

生き物特有の目の輝きが失われていた。

多分……死んだ。

「俺は……人を殺したのか……」

自分の手を見る。

真っ赤……今にも狂いそうだ。

俺は……人殺しなのか……

「人を……殺した……」

テロとはいえ、こいつも人間だ……

家族、もしかしたら恋人や子供もいたかもしれない……

そんな尊い人間の1人を俺は殺した……

「う、うわああああああ!!」

頭を抱え、悶絶する。

人を殺した……

その事実だけで俺の心は蝕まれてくるのが感じれる。

その刹那

一つの銃声と共に俺の胸を何かが貫通した。
多分もう一人いたんだろう。

心臓……………撃ち抜かれたな……………

大量の鮮血を吐き出しながら、俺は倒れた。

朦朧としていく意識の中横にあつた咲名千里が粉々に碎け散って行くのが見えた。

「……………きて」

ん、誰の声だ？

「……………起きて！」

俺は耳元で大声で叫ばれた気がした。

反射で俺は慌てて起き上がる。

あたりを見渡すとそこには一人の女性が立っていた。

「あ、あなたは……………」

「私は八雲紫。幻想郷の妖怪の賢者よ。」

よ、妖怪？

俺は困惑する。

どう見たって人間じゃないか…………

「そして、あなたはあつちの世界で殺された。間違いないわね？」

「あ、ああ、それだけは覚えています」

「それで、あなたは幻想郷に転生した。」

人間ではなく、妖怪としてね…………」

「お、俺が妖怪ですか……」

「安心しなさい……あなたは上級妖怪の方だわ……」

それに人間と何ら変わりないわよ……」

幻想郷は人間だけでなく、妖怪、神、閻魔などが住む楽園よ。まあ、楽園でも戦いはあるけどね。

幻想郷は結界で隔離されてる。

あつちの世界に戻ることは出来ないわ。」

なんやかんやあつて俺は殺され、幻想郷という別世界に飛ばされたって訳か……
思い出したかのように紫さんが口を開く。

「あ、それと幻想郷には1人1人「能力」があるのよ……」

あなたの場合は「現象を操る程度の能力」ね

詳細は自分で調べなさい」

「そ、そうですか……」

なんか話が突飛すぎてついていけない自分がいる。

「まあ、実際に幻想郷に行ってもらった方がいいわね。」

あ、幻想郷では、弾幕ごっこというものがあるのも忘れないで〜」

紫さんは手をひらひらさせ、俺を奈落へ叩き落とした……

思わず吐きそうなくらいの浮遊感を感じ、俺はその“幻想郷”とやらに降り立った。

「まずは……何か建物を探さないと……」

こうして俺の幻想郷での生活が始まった。

緋色に染まったあなたと私

く有頂天な恋く

1 話

先輩との出会いと天界へ…

「……ど……ど……」

俺は森の中に立っていた。

人もいない、木しかない。

「とりあえず人のいる場所に行かなきゃな……」

そうやって俺は足を動かす。

一時間ほどすると人里らしきものが見えてきた。

「……で聞……う……」

一人の男性に声をかける。

「ごめんなさい……僕、……ここに来て間もない者なんです……ここってどういう所なんで

すか？」

「あんた……幻想入りしたばかりなのかい……でも安心だよ、ここには安全な妖怪しか入れないんだ……」

安心はしたがどうやら幻想郷には本当に妖怪がいるらしい……

とゆーか俺も妖怪らしい……

「ありがとうございます……」

そうして俺は不動産屋を探す。

とりあえず住めるところを探さなきゃ。

野宿は嫌だしな。

しかし、悪運なことに大雨が降ってきた。

走って屋根の下に入る。

「くそ、運わりいな……」

と、隣で俺と、同じか一つ上の青年がさういう。

どうやら買い物帰りのようだ。

食材が沢山袋に入っている。

「あの、この人里に不動産屋ってありますか？」

「あ、ああ、ありま……」

その青年がこちらを振り向いた。

ん？この人、見覚えあるな……

茶髪にパーカー……

「え、奏？」

俺は自分の名前を呼ばれて確信がついた。

「あ！先輩!？」

そこに居たのは紛れもない、椎名 翔先輩だ。

彼はうちのバスケット部のエースで俺と仲良くさせてもらっている。

行方不明となっていた。

テロに巻き込まれたとかどうとかで……

確かに俺も心が折れそうになったよ……

1番大切な先輩がいなくなったんだからな……

会えて良かったものの、俺は当たり前前の疑問が頭に浮かぶ。

「ど、どうして先輩がここに？」

すると、先輩は少し苦し紛れに……

「ああ、俺実は殺されてな。ほら、あのテロ事件あるだろ？」

「ああ、つい最近起きた……」

先輩の頭に？マークが浮かぶ。

「ん？あの事件起きてから2ヶ月経つぞ？」

「え？こつちではまだ1ヶ月しか経ってませんよ？」

すると先輩顎に手を置き

「……………やつぱり日本あっちと幻想郷こつちじゃ時間軸がずれてるんだな…………」

時間軸？あつち？こつち？

全く意味がわからない…………

「もうなんか訳わかんないっすね…」

このまま1人で野垂れ死ぬかと思つたが頼りになる先輩がいてくれて安心した。

「ところで奏、お前住むところあるのか？」

「いえ、今家を探しています」

「それなら任せろ、3日で完成する所がある。

それまでは俺の家に来い」

「え、先輩の家はあるんですか？」

「ああ、河童が建ててくれたんだ」

「か、河童？…………」

そうやって、先輩と俺はその家に向かった。

晩御飯を食べ、布団の用意をする。

「奏、お前んちの刀、どうしたんだ？」

先輩にそう言われて思い出す。

「あ、そういえば咲名千里無くなっちゃったんだ……」

「おそらく、持ち主が死んだら同時にその刀も消える消滅剣の一つだな……」

「じ、じゃあ咲名千里はもうないんですか？」

「いや、お前が幻想郷にいるということは咲名千里も幻想郷のどこかにはいるはずだ。

明日にでも探しに行くか……」

「そ、そんな軽く見つけられるんですか……」

「見当はついてる。多分天界にあるはずだ。

今日はもう遅い、寝ようぜ……」

そうやって、先輩は寝息を立てて爆睡した。

「相変わらず……だな……」

俺もその場で横になり、眠りについた。

翌日。

「……………い……………な……………」

微かに声が聞こえる。

「おい奏さーん、朝だぞー」

「ん、ああ、おはようございませす先輩」

先輩は台所に立って朝食の準備をしてくれている。

俺は食卓に座り

「奏、今日は天界に行くからな…」

「まずは飛ぶ練習…か…」

「と、飛ぶんですか…」

「ああ、俺は飛べるぞ？」

と軽々と言う。

「あなた人間ですか…」

「いんや？吸血鬼だけど…」

「え、ええ…」

「そういうお前も妖怪だろ？」

俺は紫さんに言われたことを思い出す。

「まだ何の妖怪かは分かりませんがね」

「よし、じゃあまずは自分が飛ぶイメージを浮かべてみる」

俺が飛ぶイメージ…

数秒すると…

「お、おい奏？なんだその羽は…」

いつの間にか俺の背中に紫色に発光する翼が生えていた。

「お、おわあ?!」

俺も驚き背中を回す。

「す、スゲエ！」

「お、おし、そしたらその翼を動かしてみろ」

俺は背中に神経を集中させた。

すると俺の足が浮き、自由に動くようになった。

「スゲエな奏……………」

よし、じゃあ天界に行くか」

そうして俺と先輩は天界とやらにたどり着いた。

さすが天界と言うべきか、幻想郷とはまた違った美しさがあり、少し冷える感じが一層気持ちよさを引き立てる。

「キレイだな……………」

「奏、行くぞ」

俺と先輩は天界の台地に足を踏み入れ、咲名千里を探す。

その途中に……………

「あら？誰かしら？」

と、上から声をかけられた。

俺の真上に居たのは……………

群青色の綺麗な長髪。

七色のスカート。

帽子には桃が乗っている。

可愛い女性だ。

「あ、はい、愛原奏と申します」

「天界に何しに来たのかしら？」

と、少し警戒されている。

「あ、ああ、俺の刀「咲名千里」って言う刀が天界にあると聞いて……………」

「……………あなた……………あの刀の持ち主なのね？」

「まあ、一応……………」

するとその青髪の女性は、鞘から一本の剣を抜く。

それは普通の剣とは違かった。

柄の先には青髪の子のスカートと同じ七色のヒラヒラが付いていて……
刀身は緋色に染まっていた。

「こんななよなよした男が咲名千里の持ち主とはね……」
と、俺を貶してくる。

「はあ………ごめんなさい………?」

疑問形になりつつも俺は謝罪した。

その刹那……

その緋色の剣が縦に振り下ろされた。

「おわ?!」

俺はそれを間一髪で避ける。

「情けないわね……」

「やる気かよ………」

と言つても俺は刀専門なので体術とかはあまり習つてない。

対人格闘術の免許皆伝の兄貴にちよつと教えてもらったくらいだ。
しかし、その青髪は問答無用で斬りつけてくる。

「遅いっ………」

俺はその動きにだんだんと慣れ、余裕で全てをかわせるようになった。

「あなた……………何者なのよ……………」

青髪が息を切らせながら俺に聞く。

「さあな…妖怪だ……………」

そう言つて、俺は自己最速のスピードで青髪の背後に回り込み、腕を絡ませ緋色の剣を奪つた。

そうしてすぐさま緋色の剣を青髪にかざす。

青髪は両手をあげ

「……………降参よ……………私が悪かつたわ……………」

「そうか……………」

「……………奏……………と、言つたわね、私は比那名居天子。天人よ」

と、手を差し出してくる。

「愛原奏だ。妖怪らしいがなんの妖怪かは知らない」

俺と天子は握手をした。

しばらくすると先輩が帰ってきて

「おおーい奏！ 咲名千里あつたぞー！」

「ありがとうございます！ 先輩！」

、そう言つて、先輩から咲名千里を受け取る。

やっぱりこの刀が1番手に馴染む。

さやを持っただけで実感できた。

「詳しい話は屋敷でしましょう」

そう言つて、天子は俺と先輩を屋敷へと招いた。

2 話 「生きる刀」

俺は天子のいる屋敷に足を踏み入れた。

どうやら咲名千里の居場所もここだったようで、天子があの後、渡してくれた。息をすると果物の香ばしい匂いが俺の鼻をくすぐる。

「さて、奏。お話をしようかしら」

そう言つて天子は俺と先輩をソファに座らせた。

天子もその正面のソファに座り

「あなたは咲名千里の持ち主なのよね？」

「あ、ああ、そうだけど……」

「あなた………咲名千里は幻想郷の刀なのよ？」

どうして幻想入りしたばっかのあなたが持つてるのよ……」

「そんなこと言われてもな……俺が生まれる前からあつたらしいし………」

「咲名千里はずつと………ここ幻想郷が出来てから同時に生まれた妖刀よ」

「な、何でそれが愛原家に……………」

まさかとは思うけど……………俺の先祖って元々幻想郷の住民なのか？

ん？ちよつと待てよ…………

「幻想郷と同時に生まれた？そんなに古い刀なのにどうして錆びないんだ…………」

「それは私にもわからない……………まだ私が生まれる前、そして幻想郷ができた時からいる刀に詳しい妖怪に聞かないと……………」

「……………」

俺はその咲名千里の謎をどうしても解き明かしたかった。

「……………衣玖」

天子がここにいない人の名前を呼ぶ。

すると背後に

「はい、総領嬢様。お呼びですか？」

白を主とした上品な服。

右腕から左腕を背中を待って伸びている羽衣みたいなものが付いている。

「奏を咲名千里があつた元の場所に案内しなさい」

「承知しました。」

さ、奏さん。こちらへ…………」

「あ、はい」

そう言つて俺は衣玖さんの後ろに着いていく。

先輩は………「俺完全に空気だから帰る」といじけてしまい、自分の家に帰った。

「紹介が遅れました。

私は永江衣玖。ここ、天界の総領娘、比那名居天子様の部下で、竜宮の使いでございます」

「あ、愛原奏です。」

と、握手を交わし咲名千里の台座がある所に着いた。

「ここが咲名千里が元いた場所でございます」

「ここは………何かの神殿？」

と言うが周りの壁にはツタが生え、所々ヒビが入っていたりと現在も使われているとは到底思えない。

随分歴史のある神殿なのかな？

「ここは継承の神殿。」

代々咲名千里を次の代に受け渡す時、ここで儀式が行われるのです。

さつきも仰つたとおり、咲名千里は私たちが生まれる前から幻想郷には無かつたので随分と廃れています。

1度、咲名千里を台座に刺してみたいかがですか？」

「そ、そうだな……」

俺は腰にかけてある咲名千里を抜き。

目の前にある古い台座へ向かった。

咲名千里の刀身が青く、光り輝いている。

間違いなく台座に咲名千里が反応している。

「スウー……………」

俺は大きく息を吸いこんで思いっきり台座に突き刺した。

すると刀からは禍々しいオーラ……………ではなく、一般人でもわかるくらいの優しく、包み込むようなピンク色のオーラが放たれていた。

すると、台座の後ろから今まで見たこともないくらい的美貌の持ち主の女神様が浮かんでいった。

「あなたが……龍人……継承者なのですね……」

「け、継承者……ですか……」

「咲名千里の持ち主。すなわち、この幻想郷の騎士となるもの……」

もうなんか話が飲み込めなくて俺はあたりをキョドキョドする。

「愛原奏。あなたに咲名千里の本当の能力を授けます」

すると女神様の手のひらから赤いキラキラが咲名千里の刀身に吸い込まれていった。

「この咲名千里は「生きる刀」なのです。つまりこの刀がこの子の依代。この刀が幻想郷になかった期間は私の体の一部となっていました」

「へえー……」

俺は台座に歩み寄り、咲名千里を抜く。

すると刀身が点滅して

なんと一人の女の子が刀身から飛び出してきた。

「こっぴんにつちはー！☆

私の名前は咲名千里！よろしくね！奏くん！」

「……………はあ？」

俺は状況を飲み込めずその場でただ咲名千里を見つめる。

紛れもない、そこに居たのは普通の女の子。
髪がピンク色。

目は深紅に染まり。

モコモコのパーカーを着ている。

おかしな点といえば………浮いている。

それと、刀身から出てきた。

刀と同名。

「とりあえず！説明は帰ってからにしようか！」

と、咲名千里ちゃんが言う。

「あ、ああ、分かった……」

俺は何が起こったのか整理する余裕ができず咲名千里のペースに飲み込まれた。
衣玖さんも状況が飲み込めずただ呆然としていた。

こうして俺の刀に新たな咲名パートナリ千里ナリが出来た。

3話

比那名居の屋敷

咲名千里ちゃんと言うパートナーができ、俺は1度天界の屋敷に戻って、天子に報告した。

「まさか………そんな剣だったとはね………」

と、天子も驚いていた。

「よろしくね☆天子ちゃん♪」

「え、ええ………よろしく………」

「ところでさ、奏くん。

君はどこに住んでるの？」

と千里が聞いてくるので

「ああ、俺はまだ幻想郷に来たばっかだな…

家がないんだ」

「そっか☆

ほーむれすってやつだね！」

なかなか辛辣だなこの子。

すると天子が

「あ、じゃあ私の部下になるんならここに住まわせてあげてもいいけど？」と、片目をつぶりながら天子が俺に言う。

今はそれに縋るしかないか……

先輩も家に入れてくれなそうだしな……

「ありがとう天子。よろしくな」

「これからは「天子」じゃなくて「総領娘様」か「天子様」って呼びなさい！それと敬語を使う！

住まわせてあげてるんだからそれくらいして頂戴！」

と、いきなり叱られた。

俺こういうの慣れてないんだけどな……

「わ、分かりました。天子様……」

「そうそう。よろしく頼むわよ、奏。」

じゃあ改めて……

私の名前は、比那名居 天子。天人よ。

そしてこの剣は非想の剣、天人にしか扱えない宝剣よ。

能力は「大地を操る程度の能力」

「気質を見極める程度の能力」よ

「俺の名前は愛原 奏。」

あつちの世界で殺されてここに幻想郷入りしました。

咲名千里は元々愛原家に置かれていたもので……

能力は……「現象を操る程度の能力」だったと思います……」

「私の名前は咲名千里！」

奏くんのパートナーであり、妖刀「咲名千里」本体の一部だよ♪

見ての通り私は人型だけど「幽霊に近いけどそうでない存在」で、この刀が私の依代であり、家みたいなものなの！

あ、ちなみに名前は 咲名 千里 だからね！」

「私は永江衣玖。」

ここ、天界で総領娘様のお世話をしています

能力は「空気を読む程度の能力」

しよぼそうに見えますが自分のにはなかなか便利な能力ですよ」

こうして俺は天界で天子様の部下としてここに住むことになった。

「奏さん。ここがあなたの自室です。

ベットや生活に必要なものは揃えてあります。

ご不便があればお申し付け下さい」

俺は衣玖さんに案内されて2階の部屋へ案内された。

「ありがとうございます。衣玖さん」

「はい。奏さんの仕事は明日からです。予定はまた後ほど…」

そう言つて、衣玖さんはこの部屋をあとにした。

俺は咲名千里を呼ぶ。

「おーい、咲名千里ー」

そうすると刀身からヒョイツと出てきた。

「千里つて呼んで！」

「お、おう、悪い……」

「んで？どうしたの？」

「いや、結局お前は何者なんだろうなって……」

「私は「幽霊に近いけどそうでない存在」だよ！

簡単に言うとも自分でも分かんないんだ☆」

「そ、そうなのかよ……じ、じゃあ、俺は一体どういった種族なんだ？」

「あなたは龍人。愛原家は元々幻想郷古参の妖怪だったの。」

「それなのにいつの間にか忽然と姿を消してね……咲名千里も持っていていかれて私の依代が無くなったのよ……そこで継承の神殿の女神様の懐にいたってこと！」

「そ、そうだったんだな……」

身内のことなのに考えれば考える程、頭がゴチャゴチャしてくる。

「せっかくだし、外で軽く運動しようか♪」

「え、やだよ……もう疲れたし……」

「ダメ！若い男が何言ってるのよ！」

そう言つて無理やり外に連れて行かれた。

「じゃ、軽くモンスターを召喚するからそれを倒してちよーだい！」

と、満面の笑みで言ってくる。

顔は可愛いのに内容が残酷だ……………

すると目の前に剣を握った骸骨が現れた。

「うお?!」

いきなり剣を振るっていた。

……………遅い!

剣先が見えるほど……………天子様より全然遅い!

俺は軽々と避け、サイドにずれながら骸骨に近づく。

残り5 m位になると骸骨は剣を捨て、腰にかけてあったホルダーから2丁のリボル

バーを取り出した。

「これ避けれたら大したもんねえー♪」

と、はるか上空で千里が呟く。

……………不味いな……………

俺はバックステップをし、距離をとろうとした。

しかし、敵が待つてくれる訳が無く、容赦なく発射してきた。

でも、これならまだテロのヤツらの方が速かった……………

俺は咲名千里を握り直し、自分に向かってくる銃弾を真っ二つにした。

千里もこれには驚いたようで……

「か、奏くん……あなた……」

俺は千里の言葉に耳を傾けず、骸骨に猛突進し胸を貫いた。すると骸骨は粉々になり、消えた。

千里が降りてきて

「お、思ったよりも凄かったわ……」

「づ、づがれだ……」

俺は戦闘が終わると急に疲れがどつと来た。

「お疲れ様、奏くん。」

今日はもうゆっくりしましょ！」

夕食の時間。

「私今日の奏の修行？見させてもらったけど

アレには圧巻だったわ…剣先が見えなかったもの…」

と、天子様が昼の骸骨戦を見ていたらしく、感嘆の声を漏らした。

「はは、まだまだですよ天子様。

あれぐらい出来ないいと愛原家は務まりません……」

と、適当な言葉を並べる。

本心ではないがちよっぴり思ってる。

「しかし、現象を操る程度の能力、って言うのはどういったものなんでしょうか？」

衣玖さんが顎に手を置き俺に聞く。

「そうですね……軽く使ってみましょうか……」

今日の午後、千里に聞いて俺はようやくこの能力の意味がわかった。

俺が右手で軽く指。パツチンすると

指先に真つ赤な炎が出てきた。

「こ、これは……」

「「発火現象」……ですね……このように現象なら何でも発生、消去することも出来る。つという能力だと俺は思いますが……」

「それはなかなか………便利ですな……」

「でも、これが難しいんですよ……」

その現象を強くイメージしてからでないかと発生しないですよね……

例えば今の発火現象は「俺の右の人差し指に小さい炎が出る。」と、強く念じないといけません。

それに炎の大きさも自由自在なので使い方を誤ると大惨事になりかねませんね……

あまり使おうとは思っていません」

「まっ、そういうものね、強い能力にはそれなりの代償がつく、当たり前よ」

と、天子様が落ち着き払った態度と声で言う。

「まあ、確かに………それに総領娘様の能力もすごいものなのに……異変の時に調子乗ってバンバン地震起こしてたら霊夢さんにボロボロにやられましたものね……」

衣玖さんが少し悪のある微笑みで天子様を馬鹿にする。

「ちよ、ちよつと衣玖?!」

それ今言わなくて言いでしょ!」

と、顔を少し赤くして激昂する。

「あら、もうてつきり奏さんに言ったのかと思いましたわ……」

クスクスと笑いながらさらに天子様を小馬鹿にする。

「むうー」

ぷくーつと頬を膨らませる天子様。

すっげえ可愛い。何これ天使？

って言うくらい可愛かった。

俺が眠りにつく前。

天子様に呼び出され

予想だにしていなかった言葉を放った。

「あなたは明日から私の執事よ。

私の身の回りのお世話をしなさい……………」

「は……………」

こうして天子様の「執事」生活が……………始まった。

4 話

亡霊

「し、執事……………ですか……………」

「そうよ、本当は衣玖がこのポジションなんだけど最近忙しくてね、代理みたいなものよ」

「当然、今は天子様の部下なので逆らうことなんて御法度だ。
「分かりました。」

「経験はないので…多少のご無礼はお許してください…」
「ええ、よろしくね、奏」

その夜。

「奏ーお菓子作ってえー」

と天子様がダラーっと机に伏せている。

「すげえな……………」

昼と夜のON/OFFが激しい。

あのカリスマ性はどこへ……………?」

「分かりました。

少々お待ちください」

俺は台所へ向かい、クツキーを焼いた。

昔から俺はかなりの甘党でお菓子作りが趣味なのだ。

「お待たせいたしました。クツキーでございます」

「ん、ありがと」

天子様はこちらを見ずに心にもない礼をいう。

しかし、その真顔はクツキーを口に運んだところで崩れる。

余程美味かったのか、目がキラキラして俺の方を見る。

「美味し……………」

「そうですか……………ありがとうございます」

と、笑ってみせる。

「ええ、これは美味しいわ！明日から毎日作ってちょうだい！」

「……………流石に毎日飽きませんか？」

「大丈夫よ！この味は絶対に飽きないから！」

「……………材料があるのならばいくらでもお作りしますよ」

そうして俺は毎日天子様にクツキーを作るようになった。

すると唐突に……………

「奏くん！少し嫌な予感がする……………」

千里がふよふよと浮いて俺に近づいてきた。

いつも余裕な表情の千里が少し動揺している。

「い、嫌な予感？…どういう事だ？」

「奏くんと同じような力を持つている奴がこの近くにいます。敵対心丸出しだ……………」

俺と同じような力？

疑問に思いつつも俺は咲名千里を持って天子様と外に飛び出した。

「な、何もいないじゃない！脅かさないでよ！」

天子様が千里に向かって言う。

「あ、あれ？おかしいな？」

千里も遊びで俺らを呼んだ訳では無いようだ。

でも……本当にそこにはいつも通りの天界の景色が広がっていた。

「はあ………今のだけでどっと疲れが来たわ………」

早く戻りましょ？」

天子様が呆れた顔で玄関に向かった。

俺はそこで少し引つかかった。

玄関のドアってあんなに青かったか？

俺はそこを凝視していた。

天子様がドアに手をかけようとした瞬間。

俺はそれがどう行ったものか理解出来た。

「危ない!!!」

「え、何よ………」

俺は天子様を後ろに引いた。

すると、さつきまで天子様がいた所にひとつのぼやけた人型のシルエットが浮かんでいて、握っていた剣を振り下ろしていた。

……あれは………亡霊？

避けることは不可能と感じたため、咲名千里でそれを止める。

「!!」

な、何て力だよ……!!

身長も力も俺とは桁違いだ。

「……………愛……………原……………取り……………戻す……………」

と、亡霊が何かを呟いている。

俺は聞き耳を立ててそれを聞こうとしたが

間髪入れずに亡霊が剣を横に振った。

俺はそれをバックステップで躲し、間合いをとる。

能力……………使ってみるか。

俺は剣先に集中して、能力を発動した。

すると咲名千里の刀身は紫色に光る。

これは心霊現象の霊を払う技だ。

あいつがもし亡霊の一種ならばこの技は効くと思う。

「奏くん! あいつは剣と盾を持ってる!」

最初は直接亡霊の体を狙うのではなくてその周りの装備をひとつずつ壊していきましよう!」

と、千里が助言をする。

「ああ、わかった！」

「私も協力するわ！奏！」

非想の剣を手を持った天子様が加勢してくれる。

「はい、行きましょう！」

「非想「非想非非想の剣」！」

天子様は亡霊の懐に入り込み鮮やかな弧を描き、切り傷が亡霊に入る……………はずだったか……………

「なっ?!」

当然、亡霊は実体化している訳では無いのもなどは透ける。

「…………ツ！天子様は下がって衣玖さんと呼んでみてくださいください！」

「……………分かったわ！」

天子様は戦闘になると融通が効く。

この亡霊は確かに攻撃が通らない。

そこで重要なのは霊を払うこの技だ。

俺も亡霊の立ち回りに注意しながらジリジリと近寄る。

「ふっー！」

咲名千里を上下左右から10連撃程叩き込む。

最初の5発は亡霊の大きな盾がそれを防ぐ。

しかし、さすが妖刀と言うべきか、盾も段々と傷がつき、終いにはバラバラに砕けた。

……………チャンス！

盾が壊れたことにより大きな隙ができた。

俺はそこを見逃さず、心霊現象の刀身で亡霊の脇腹を斬った。

「……………奏くん。普通の亡霊なら、ここで成仏するけど……………こいつ……………ここへの執

着がスゴイ……………強い怨念があるからそれ相応の霊力をこつちも使わないと……………」

「ど、どうすればいいんだよ?！」

「私が咲名千里に入って霊力を強化する！」

亡霊に連撃を叩き込んで！」

「お、おお！わかった！」

すると千里はその場で刀身に入り込んだ。

すると、さつきよりも刀身が濃い紫色に光った。

俺は亡霊を見据えて、隙を見る。

「……………だ！」

俺は一瞬の隙を見逃さなかった。

近くまで詰め寄り、上下左右、全方位から咲名千里で亡霊を切りつけた。
さつきよりも手応えがあり、まるであの時みたいに……………

そう、人を斬ったあの時と同じように……………

斬っている時の俺の顔は……………

薄汚れた……………残酷な笑みを浮かべていた。

5 話

トラウマ

俺はいつまでも亡霊を斬り続けた。

何も考えず、ただ笑みを浮かべながら……

斬ることに……生き物を殺すのに楽しさを感じてしまっていた。

「ほら……早く死ねよ……」

「奏くん！もういいよ！やめて！」

刀から出てきた千里が俺止める。

俺はそれで我に返った。

「せ、千里……」

俺は千里の方を見た。

「大丈夫……？なんかすごい怖かったけど……」

「ちよつと奏?!大丈夫なの?!」

千里と天子様が同時に俺を心配する。

「俺は……………何を……………」

正氣に戻った俺は何をしたのか全く理解出来ていなかった。

右手には能力が失われた咲名千里。

目の前には……………

赤い鮮血の水たまり……………

この光景を見た瞬間、あの時の記憶を全て呼び覚まされた。
人を殺し、その感触を楽しんでいた俺……………
吐き気がした。

ドクン……………

「!!?」

心臓が1度大きく跳ね上がった。

やばい……………吐く……………

俺は我慢ができず、吐こうとしてしまう。

しかし、嘔吐よりも先に咳き込んでしまった。

慌てて口を手で塞いだ。

手のひらを見ると……………

真っ赤だった。

これは……………血?

刹那

俺の視界がぼやけてきた。

徐々に立ちくらみもし、全身の力が抜けた。

「か、奏?!」

私は執事である奏に駆け寄った。

突如血を吐いて倒れたのだ。

「て、天子ちゃん!」

千里が今にも泣きそうな顔で私を見る。

「分かってるわ! 衣玖!」

私が呼ぶと瞬時に衣玖が隣に来た。

「はい、お呼び……………奏さん?!」

奏の顔を見て、衣玖も焦燥の顔を浮かべる。

「永琳を呼んできて!」

「は、はい!分かりました!」

数分後、永琳が天界に来て、奏の体を診た。

聴診器で奏の心臓の音を聞き、それを外した後、永琳が口を開いた。

「彼は……………重度のトラウマを抱えてるわね……………」

症状が酷すぎるわ……………恐らく、あつちの世界で心に強い大打撃を受けたんでしょね……………血を吐いて倒れたのも……………」

「そ、そう……………」

まだ奏とは数週間しか過ごしていない。

だが、彼は気さくで私はすぐに仲良くなれた。

今では親友の一人と言ってもいいくらい……………まあ、執事だけどね……………だからすごく心配だ。

「奏くん……………」

千里も心配して奏の顔を覗き込む。

「まあ、トラウマを蘇らせるようなことをしなかったらこんな状態にはならないわよ

……

命に別状は無いけど……これを繰り返すと、彼の心が壊れる

能力や本能が暴走すると手に負えなくなるわよ……」

私は背筋が凍りそうになった。

「天子ちゃん、奏は幻想郷最強の龍人の妖怪なのよ……」

心が壊れて暴走なんかすると……幻想郷が崩壊するかもしれない……」

「彼のトラウマ………なんだろう……」

「まあ、実際そのトラウマと同じ目に合わせるのは良くないわね……」

恐らく、彼はあつちの世界で人を殺している………んだと思うわ。普通の人の人が人を殺

すほど恐ろしいものは無いからね……」

そう言って永琳は帰っていった。

静寂が訪れた。

「奏くん……………」

パートナーであり、家族のような関係の千里はずっと奏のそばにいた。

華奢な指で目を瞑っている奏の頬をなぞる。

私は千里と奏がいいムードになりそうで気まじくなつたので席を外そうとした。

「私は衣玖のところに行つてくるわね…」

奏の部屋のドアを閉め、廊下を歩く。

何なの？……………これ……………

歩いている最中、私は……………少し胸に違和感を感じていた。

「大丈夫……………かな……………」

私は隣で寝ている奏を見つめていた。

正直、私は奏が初めての友達だった。

恋愛、というやつではないが私は奏が好きだ。

家族みたいなもので私は奏が必要不可欠だ。

「早く……………目を覚ましてね……………」

そうして私は奏の隣で眠りについた。

翌朝……………

「ん……………」

私が目を覚ますともう奏はベッドにいなかった。

「お、千里起きたか……………」

「か、奏?! 大丈夫なの?!」

私は奏に駆け寄り、確認する。

そういえば……………いつの間にか呼び捨てで話していた。

「ああ、昨日あったことも全部覚えてる。

少し頭が痛いかな……………」

「そ、そっか……………」

これで「安心……………」か……………」

ドアを開け、奏の部屋を見る。

「あら、奏。起きたのね」

「天子様、先日は迷惑をおかけしまして申し訳ありません……………」

「別にいいわよ、あなたが私たちのためにも戦ってくれていたことは分かっているし」

「ありがとうございます」

「さてと、奏、千里。思い出せる限りでいいから昨日の亡霊との戦いで分かったことはあるの？」

近くにあった椅子に腰をかけ、奏と千里に聞く。

「うーん、定かではありませんが……………」

あの亡霊、俺の名字を呼んでいた気がするんですよ……………」

「愛原」……………つて？」

「ええ、それにたまたま天界にたどり着いたとは考えにくいでしょう？」

多分、咲名千里か愛原の関係者つてことになると思うですよね……………」

「確かにね……………」

でも、ひとつ聞いていい？」

私はひとつ、疑問に思う事があった。

「亡霊つて血を流すかしら？」

「……………!!」

奏は訝しげにこちらを見て、深く考えた後目を大きく見開いてショックを受けたよう

な顔で……………

「じゃあ、俺が殺したあいつは……………亡霊じゃない……………?」

6 話

日常

「亡霊………じゃない?」

私は奏の一言を聞いて、驚いた。

「じ、じゃああいつは何なの?」

「分からないです、愛原の関係者、とだけしか……」

愛原の関係者?」

私はその言葉に突っかかる。

「どうして………その関係者は奏の居場所を……」

それに亡霊ではないのにどうして奏の心霊現象の技が効いたのかしら……」

「確かに………それに………亡霊に似た妖力を感じました。」

多分、怨念の1種ではないかと………」

「うーん………」

今回の亡霊事件は謎が多すぎる。

亡霊ではなく、怨念の1種。

奏を攻撃した理由。

あいつと奏の関係。

そして……何より奏が何も覚えていない。

私と奏が考察をしていると千里が口を挟んだ。

「手がかりがない以上、無駄に踏み込むのは危険よ。

切り替えていつも通りに行きましょう！」

さつきまで1番元気がなかった千里が盛り上げた。

「そうだな……」

「奏、あなたはまた私の執事として働いてもらおうよ」

「ええ、そのつもりです」

と、にこやかな笑顔を見せた。

数ヶ月後。

「天子様。紅茶をお淹れしました」

奏も執事が板についてきた。

手際が良く、迅速な行動ができるようになっていた。

「ん、ありがと」

そう言つて奏が淹れた紅茶をズズズツと啜る。

これがまた美味しいのだ。

「それで天子様。いい加減風見さんと仲直りしたらどうですか？」

「そうだよ天子ちゃん。少しやりすぎたんじゃないの？」

「う、うるさいわね！今回はあいつが悪いのよ！」

そう、今は絶賛幽香と喧嘩をしているのだ。

原因は幽香との弾幕ごっこ中、幽香の弾幕を私が剣で弾いた際、その流れ弾が花に直撃し破壊してしまった。

それに幽香がマジギレして喧嘩に至った。という訳だ。

「このぼつと出の天人が！」と、貶してきた。

流石に言い過ぎではないか？

私は絶対に幽香が悪いと思っっている。

「そんなこと言われましても……認めないといつまでも引きずったままですよ……」

「う〜！」

私は机に突っ伏して唸る。

「きつと、風見さんも言いすぎたと思ってますつて……」

だから……行きますよ？ね？」

奏が優しい声音で言う。

主の私が執事に注意された。

怒りなどが込み上がってくるのではなく、ただ情けないと思うだけだった。

「うるさい！幽香が謝ろうとしないのは目に見えてるもん！」

と、子供みたいにいつまでも拗ねてる私。

「未来の事なんか誰にもわからないでしょ？」

ホントはあっちも申し訳ないって思ってますよ」

「私もそれに賛成するわ」

「奏と千里がそこまで言うなら……」

「さすが天子様」

と、にっこり笑う。

私は奏の押しに少し弱いみたいだ。

奏に促されるだけで行動に移してしまう。

「未来の事なんか誰にもわからないでしょ？」……か……

奏のその言葉だけが頭の中をグルグルと回っている。

「さ、行きましようか」

こうして私は幽香の家に行く。

ドアを2回ノックして……

ドアがガチャッと開いた。

「……………何よ？」

と、幽香がものすごい形相……と言うかめっちゃ睨みつけてくる……怖いよ……

「……………悪かったわね……お花を破壊しちゃったりなんかして……………」

目を右下に移して謝罪する。

幽香はそんな私を見て目を見開く。

確かに……私から謝ることなんてなかったしね……………

「え、ええ、私も言いすぎたわ……………」

「でも！あんな強い弾幕を打った幽香も悪いんだからね！」

と、いつまでも認めない私。

さすがに奏も驚いたらしい。

「ちよ、天子様?!」

「言ったわね!もう一度勝負よ!天子!」

奏は自分の手で顔を覆い、呆れた顔をしている。

千里は苦笑い……………

「天子様、俺と千里は先に帰ってますんで、晩御飯までには帰ってきてくださいよー
!」

「分かってるわよ!」

「頑張ってね天子ちゃん」

こうして奏と千里は天界に帰った。

「さあ!行くわよ幽香!」

「かかってきなさい!」

二日連続の幽香との弾幕ごっこが始まった。

結果ボロ負けだったが、楽しかった。

やっぱり、親友って大切だ。

こうやって喧嘩してもすぐ仲良くできるし、遊んでいると楽しい。これは何歳になっても変わらない。

幽香と別れ、私は天界に帰った。

家に帰ると千里と奏が楽しそうに笑いながら談笑していた。

「それでさー！ 霊夢つたらひどいんだよー！」

と、千里がネタ話をしていると

「あははははー！ それはひどいなー！」

奏が大声で笑う。

奏は千里という時だけあんなに幸せな顔をする。

「あ、おかえりなさい天子様。晩御飯もう出来てますよー」

「うん、ありがとう。」

私は廊下を歩く途中考えてしまう。

奏は……執事になって面白いのかな？

千里と……二人っきりの時が一番楽しそうなんだもん……

私が……邪魔しちゃうっていいのかな……

食卓に向かうと、奏や千里、衣玖も座っていた。

「いただきます」

そう言つて全員が箸をとる。そして、料理を口に運ぶ。

「そういえば天子様。風見さんとはどうでした？」

「あの後、また大喧嘩になつたわ……………それで」

と、今日あつたことを大まかに話す。

「あはは、それはまたひどい事になりましたね……………」

奏は私のつまらない話でも本気で笑つてくれる。

「そうなのよ！それでね」

今夜の食卓はいつも通り、私と奏、衣玖と千里の4人で盛り上がる。

「あははははー！」

屋敷の食卓で4人の笑い声が響く。

この4人でいる時が1番楽しい。

まるで家族みたい……………

私はこんな日常がいつまでも続けばどれだけ幸せだろう……………
心の奥底でそんなことを望んだ。

6話

記憶喪失の人柱

2ヶ月後。

翔が天界に訪ねてきた。

「あの亡霊事件の手がかりが少しわかってきた」

「ほ、ほんとですか?!」

奏が飛び出してきた。

「まず、あの亡霊は愛原家に殺された「倉見家」の一族。

倉見家は愛原といつも対立していたらしく、仲も悪かったらしい……」

「倉見家………聞き覚えありませんね………」

「まあ、奏が知らないのも無理はない……」

愛原家の奇襲という形で倉見家を滅ぼした。そりゃ倉見のやつも愛原を恨むわな

………」

と、翔が調べて分かったことを奏に伝える。

「そうですか………ありがとうございます………」

「奏」

と、唐突に翔が奏の名前を呼ぶ。

「は、はい」

「気を付けろよ……倉見家は愛原家の倍以上の人数がいたそうだ……お前が倒したのはその中の一人……」

「?!……………ってことは……」

私はそれに気づいた

まだこの事件が終わっていないことを……

「倉見家の怨念は……まだたくさんいる……」

「そう考えるのが無難だろう……」

しかも狙っているのは愛原の血を引く者だけだ

つまり、標的は奏。お前一人ってことだな」

「お、襲ってきたらまた倒せばいいじゃない！」

私が翔に言う。

「確かにそうだけどな……」

単体ならまだしも……100体程で来られたらこっちも歯が立たねえぞ……」

「で、でも！私は奏を痛い目に遭わせたくないし、前みたいに人を殺させたくない！」

私は率直な感想を述べる。

だって私の大切な執事なのだから……

「天子様……」

そうやって私たちが討論をしていると……

ガチャつとドアが開けられ……

「……………誰？」

私達は驚いてその声の主を探す。

「……………千里？」

自室の部屋を開けて出てきた千里はいつもと全く違かった。

雰囲気も暗い。

目が輝いていない……

何かに怯えているようだった。

「ど、どうしたんだ千里？なんか元氣ないけど……………」

奏が千里に近寄ると……………

「いや！怖い！触らないで！」

私は驚いた。

千里が1番懐いていたのは奏だったはず……………

何であんなに拒絶しているの？

「お、おい、千里……………」

思い切り叫んだ後、身を屈めて小刻みに震える。

まるで奏を恐れているかのように……………

「せ、先輩。これには何か関係が……………」

「わからない……………」

「そんな……………」

なぜ……………？

唐突に千里の全てが反転したのか……………

「多分……………記憶が飛んで……………と思う」

「な、何で今頃……………」

私達はただ疑問と不安を抱くだけだった。

「なあ、千里……………」

「い…………いや……………」

千里の震える体を奏が優しく抱きしめる。

「大丈夫……………大丈夫だよ……………」

「……………」

これまでに無いくらいの奏の優しい声音……………

すると段々千里の震えが止まり落ち着いた。

一段落おいて……………

「千里。君は俺たちを覚えているか？」

「……………ううん、誰もわからない……………」

「そんな……………」

私は絶望する。

私たちが千里と楽しんだ思い出……………もう彼女の中にはない……………

「くそ……………誰だよ……………」

奏の拳が強く握られる。

「奏、天子。なにか分かったらすぐに連絡する」

「はい……………ありがとうございます……………先輩……………」

「元氣出せよ……………後輩よ……」

そう言つて翔は奏の胸に自分の拳をぶつけた。

「……………はい」

翔が帰り、今は私と奏のふたりきり。

「天子様……………千里は…大丈夫ですかね……………」

「……………そうね……………謎が解明されないままだと……………千里はずつとこのままかもしれない……………」

「でも……………大体の検討は付いています……………よね？」

と、奏に聞かれた。

もちろん、誰がやったか、どの類の種族かも分かる。

倉見家だ。

「咲名千里は代々愛原家に伝わる妖刀です。」

愛原の戦闘の土台である刀を破壊すれば自ずと上も壊れる……

狙いはそれでしょう……………」

「じゃあそろそろ、倉見のやつらが攻めてくる頃ね……………」

作戦なんか立てても……………無駄よね……………」

奏。千里がいない今、こちらの戦力は大きく削られた。

あなただけの実力で戦うのよ。もちろん私もあなたと戦う」

「でも……能力がないと……天子様の非想の剣では怨念達に攻撃すら通りませんよ？
……………」

「誰がいつ非想の剣を使うって言った？」

私は能力の駆使して戦うつもりだ……………」

「大地」を操る……………彼らは地面に触れているわけだからもちろんその類を有効なはずだ。

「……………なら……………衣玖さんと天子様、俺の3人で戦いに備えましょう……………」

「ええー！」

「ただ、倉見家はいつ来るか分かりません。

それに……………千里を守らないと……………」

「今は考えたって無駄よ。」

今は普通の日常を過ごしましょう」

「そうですね……………先に千里の回復……………」

そうやって私と奏は食卓へ向かい、夕食の準備をした。

「……………千里……………」

奏に名を呼ばれた千里は体をビクツと強ばらせ

不安そうな顔で聞く。

「な、何？」

「お前が覚えてる限りでいい……………」

記憶のことを教えてくれないか？」

「……………私がみんなのために……………刀になったのは覚えてる……………」

それとお母さんやお父さん……………その仲間達になにか言われてそうだった……………」

「刀に……………なった？」

「どういう事だろう？」

千里は元々「生きる刀」の、一人だったんじゃないのか？

刀になるってどういう事だ？

それと、千里の親御さんや、仲間になにかを言われて……………」

「もしかして……………人柱……………？」

衣玖がそう口にする。

「ひ、人柱ってなに？」

「その刀を暴走を止めるため、刀の存在を消すためなど理由は色々ですが、その刀と一心同体になることでコントロールができる。ということらしいのですが……………」

そこで一つの答えが出る。

「もしそうならば……………千里は元々刀では無かった？」

「……………そうなりますね……………」

「じゃあ、千里は人柱になって咲名千里に入った。

この線で考えた方がいいですね……………」

千里が人柱。

「あ、千里。

お前の本当の名は？」

私は奏がそう言つてハツとする。

そうだ、千里は人柱になった時の名前だ。

ならば、本名になにか手がかかりがあるかも……………」

「片波かたなみ 咲……………」

「……………え？」

私が予想していたのとは全く違う名前が出てきた。

てつきり、倉見家の子かと思つたら……………」

片波……………か……………

「片波……………倉見の臣下でしょうか？」

衣玖が顎に手を置いて答える。

「ええ、多分その可能性が高いでしょう……………」

人柱になるということは……………つまり寿命がない。

不老不死状態だ。

お母さんやお父さんは死んでしまったというのに自分だけ死ねない……………

その悲しさは私や奏じゃとてもじゃないけど背負いきれない

私はそう考えると胸が張り裂けそうになった。

「片波……………咲」

奏はずっと千里の本名を口に出し、考えていた。

7話

別れ

「人柱……………ね……………」

考えてみれば、千里が人柱になったのなら何かと辻褃が合うところがある。

理由は謎だが、愛原と倉見の戦争中、倉見は土台を消すため、臣下である片波の娘、咲を咲名千里の人柱とし、刀の主導権を倉見が握る。これが大まかな話だろう。

まあ、結局は愛原の妖力に負けたりしいが……………

そして今回、何らかの理由で千里の記憶が人柱になる前に巻き戻されている。

現在の千里の状態を見ると、よほど人を怖がっていた。

多分、人柱になるために相当なストレスを溜めたんだろう……………

「奏……………」

「……………」

返答がない。

「奏ー！」

少し大きな声で呼ぶ。

「は、はい、なんでしょうか？」

「紅茶……まだ？」

私は紅茶を淹れてと奏に頼んだが途中で奏の手が止まり、何か考えているように見えた。

「あ、申し訳ありません天子様すぐにお作り致します」

「……………」

奏の顔は少し暗かった。

やっぱり千里の記憶が飛んだのがよほどショックなのだろう。

「……………ねえ、奏」

奏が紅茶を差し出し、私はそれを啜る。

「はい……………」

「今は千里のことを考えたって何も変わらないし、記憶が戻るわけでもない……………」
「……………」でも！俺のせいで千里があんな目に……………」

それに、もしも倉見家に負けたりしたら……………」

奏の言葉に被せるように言った。

「『未来の事なんか誰にもわからない』……………」

私は以前奏に言われた事を今この場で発した。

「!!」

「これを言ったのは紛れもない……………あなたよ？」

自分が言ったことを自分は実行しないって言うのは流石に不公平じゃないかしら？」

少し怒りを交えていう。

「で、でも……………」

「ちゃんとしなさい！今あなたがやるべき事は過去のことを後悔する事じゃ無いわよ！」

「天子様……………」

「あなたならできる、私はそう信じているわ……………」

「……………はい、ありがとうございます。」

優しいですね……………天子様……………」

私は顔を少し紅潮させて言う。

「ば、ばか……………何いってんのよ……………」

茶化さないで……………」

「ははは、でもほんとに元気出ました。」

声に迫力は無かったが、奏の目は人々を圧巻させるような綺麗な目をしながら、同時に闘志に燃えていた。

その夜。

本当に唐突の出来事だった。

「て、天子様！あれを！」

奏に指さした所を見ると……………」

暗雲の塊が屋敷に向かってきている。

「不味いわね……………」

私はその暗雲が何なのか理解することが出来た。

しかも……………あんなに……………

「行きましよう……………天子様」

抜け殻状態の咲名千里を握った奏は外に飛び出した。

「てめえらのせい……………千里が嫌な思いをしたんだ！」

背中に翼を生やし、怒りに満ちた声で倉見の怨念に叫ぶ。

すると、怨念は奏の目の前で止まり、1人の黒い大男が出てきた。

「貴様が愛原奏か。」

低く、ドスの効いた声で奏に問う。

「ああ、そうだ」

刹那、ものすごい速さで奏の胸を「何か」が抉る。

当然、奏からは鮮血が飛び散る。

何なの……………あの速さは……………

「!？」

奏はその場で倒れ込んだが、意識はあるようだ。

私は奏に駆け寄る。

「奏！」

「ほう、天人もいるのか……………」

愛原奏。後日、倉見の屋敷へ来い。真実を教えてやる……………

それまでにその天人と思いい出作りをしておくんだな……………!!」

そう言つて大軍はいつの間にか消え失せた。

「く、くつそ……………もう少しだったのに……………」

ゴフツと、口から大量の血が流れる。

そうして奏はまた気を失う。

数時間後、俺が目を覚ますと

体中に包帯が巻かれている。

動くだけで激痛が走る。

「!ぐつ……………いつてえ……………」

そこで俺は太ももらへんにズシつと重みを感じた。

そこには天子様が両腕を枕にしてうつ伏せで寝ていた。

「ス……………ん……………」

俺を……………看病してくれたのか……………

俺はフツと全身の力が抜け、寝ている天子様に微笑みかけた。そして、帽子を取っている天子様の頭に手を乗せ……………」

「ありがとうございます……天子様……………」
頭を撫でる。

スゴイサラサラな髪だ……………」

寝顔も思わず見とれてしまうほど可愛い。

俺は思わず……………」というか……………」最近芽生えてきた天子様への気持ちを口にしてしまっ所だった。

数分後

「ん、んん……………」

天子様が目を覚ました。

俺は目覚めてからずっと天子様の寝顔を見てしまっていた。

「おはようございませす、天子様」

「え、ええ、おはよ……………」って、奏は大丈夫なの?!

と、慌てた顔で俺に聞く。

「あはは、大丈夫ですよ……………」当分は安静にしないとですが……………」

「ええ、そうしなさい……………」あんなに深い傷だったのだから……………」

ぎゆるるるるる………

俺の腹が鳴った。

赤面して顔を手で覆う。

すると、天子様が

「ぶっ、あはははは！もう晩御飯出来てるらしいわよ、行きましよ！」

と、大声で笑われた。

ああ、恥ずかしい！穴があつたら永遠に入っていたい！

そう思いながらベッドから降りようとした時、その胸の傷が傷んだ。

「いっつ?!」

そう言つて胸を抑える。

「だ、大丈夫?!晩御飯持つてくるわよ?」

「も、申し訳ありません………天子様………」

そう言つて天子様は部屋を出て、俺はもう一度ベッドへ戻る。

数秒後。

「奏、晩御飯持つてきたわよー」

「ありがとうございます、天子様」

そう言つてベッドの隣にある机に俺の晩御飯を置いた。

「いただきます」

挨拶をして俺が食器に手を伸ばした瞬間。

「ちよ、ちよつと待って！」

天子様がそれを制す。

「な、なんでしよう……………」

「あなたは今は怪我してるんだから……………えっと、その……………一人じゃ食べられないでしょ!？」

「え、いや、手は動かせるんでだいじょう……………」

「いいの!私が食べさせてあげるから!」

と、半ば強引に食べさせた。

「は、はい、あくん……………」

スプーンをスプーンですくい、奏の口に持っていく。

「あ、あくん……………」

躊躇いながらもしつかりと食べてくれる。

ちなみにこれをつくったのは私だ。

まあ、正しくは衣玖と私で作ったものだが……………

「……………美味しい……………です」

「そう? 良かった」

私はそれだけで少し上機嫌になった。

私の作った料理を食べさせるのは初めてだから。

そうして30分後。

「さて、奏。」

さつき来た怨念達は倉見家よね?」

「はい、間違いないと思います」

「貴方を斬ったやつは……………」

「多分、あそこの長でしょう……………」

後日、来いって言われましたし……………」

「……………行くの?」

私は正直彼を行かせたくない。

「私も行ってはダメなの?」

すると、奏は真面目なトーンで

「だめです。天子様は行くべきではない」

「……………どうして?」

「危ないからです」

私はその時、自分の力を否定されたと思い、怒りが込めあげてきた。

「何でよ!!私だって戦える!奏の……………大切な執事のためならなんだって怖くない!なのに、どうして?!」

「俺だって天子様と一緒に戦いたい……………でも、愛原と倉見の戦いに他人が首を突っ込んでいい話ではないんです……………」

申し訳ありません天子様。こればかりは……………」

冷静に考えればそうだ。

私みたいな部外者がこんな因縁の戦いに水を差してはいけない。

「……………そう……………ね……………ごめんなさい……………私が間違っていたわ……………」
「……………申し訳ありません……………」

それから2日後。

「天子様。お話があります」

と、奏が咲名千里を持って話しかけてきた。

「俺は……………千里の記憶を取り戻したい……………それに、この愛原と倉見の因縁にケリをつけたいんです……………」

なので……………倉見の屋敷へ行きます……………」

「……………でも……………あなたまだ傷が完治していないのよ?!」

私の問いかけに奏は首を横に振る。

「もう、時間がないんです。あの後倉見の長に言われました。」

「人柱の記憶の欠片は後1ヶ月で完全に消滅する。それまでに俺を倒せ……………」ですから、時間は有限なんですよ……………」

「そんな……………」

嘘……………」

「でも、あなたが死んでしまうかもしれないのよ?!」

「それでも構いません」

「2度とここにも帰ってこれないわよ?!」

「承知の上です」

私は改めて奏の覚悟に驚いた。

この愛原と倉見の戦いに終止符を打つため。

千里の記憶を戻し、前のような楽しい日常を取り戻すため……
奏の目からはそんな感情が浮かんでいた。

「では、天子様……衣玖さん……お世話になりました……」
奏は私に一礼して背中を私に見せる。

私は耐えられなくなって……その背中に近寄り……

後ろから……奏の背中に腕をまわし、体を密着させ……
抱きしめた……

「……天子……様？」

「行かないで……」

私の頬にはいつの間にか大粒の涙が流れていた。

奏は私の手を握り……

「……………ごめんなさい……………」

「いや！あなたと別れたくない……………」

「……………」

私は初めて素直な気持ちと言えた。

背中越しでも伝わるくらい……………奏の温かさが感じられた。

「やつと……………やつと心を打ち明けられた友達なのに……………」

せつかく楽しい日常を過ごせると思ったのに……………」

奏は落ち着き払った声で……………でも少し震えながら……………」

「天子様……………俺はこの戦いにピリオドを打ちたい。」

多分、もうここには帰ってこれない……………」

「……………奏……………」

「だから……………今まで本当にありがとうございました……………」

「……………ここでの思い出は絶対に忘れない……………」

「そう言って私を優しく放し、翼を生やした。」

「いつかまた、会いましょう……………」

「いや、奏！行かないで！」

私は奏に向かって手を伸ばす。

もちろん、それが届くわけでもなく……………

奏の顔は見えなかったが、声からして苦しそうだつた。

そして、翼を大きく広げ、空へと飛び立った。

「奏さん……………」

衣玖も苦しい顔をしている。

私なんかもつと悲しい顔をしているのだろう……………

「うわああああああ!!」

私はその場で号泣した。

それから30分後。

部屋に戻ると私の部屋の机に1枚の手紙が置いてあつた。

……………奏からだ。

封筒を開け、1枚の紙に書いてあることを読む。

天子様へ

申し訳ありません。俺の一族のせいで関係の無い天子様や衣玖さんを巻き込んでしまつて……

でも、俺は天界にいた時が一番楽しかったです。

千里のくだらない話で盛り上がったり……

衣玖さんのツツコミで更に笑いをとったり……

そして、何より……あなたと会話することが一番の楽しみとなっていて……元の世界では感じる事が出来なかつた楽しさをこんな所で実感できるとは思いもしませんでした。

どれもこれも……天子様のおかげです。

千里をよろしく願います。

俺は天子様が生きていてくれるだけで……自分の存在意義を見いだす事が出来る気がします。

今まで本当にありがとうございました。

俺はずっと天子様あなの事が好きでした。

P.
S.

愛原 奏

私は手紙をクシヤツと握り。

また号泣する。

「どうして……………今頃そんなこと言うのよっ……………」

もう……………2度と会えないのに……………

私は奏の顔が頭に浮かび、奏を戦いに誘ったこの世界を憎んだ。

私も……………

「もっと奏と一緒にいたかった！」

一緒に笑いあつて、喧嘩もしたかった！

なのに……………どうして……………」

私の願いの声は部屋の中で虚しく反響するだけだった。

8話

約束された戦い

俺は見渡す限り、同じ景色が続く空を眺めながら前へ進んでいた。

今更、天子様と別れたことに後悔する。

俺はずっと天子様に想いを寄せていた。

好きな人と別れるのは精神的にきつい。

俺は唇を噛み締めながら進む。

すると、目の前に見覚えのある人影が見えた。

「せ、先輩?!」

そこに立っていたのは紛れもない、翔先輩だ。

「よう、奏」

「ど、どうしてここに?」

「新たな情報が入った」

「新たな……情報……」

「お前が今から倒しに行く倉見の長。「倉見隴」は……」

「どうやら、あいつの事は倉見隴と言うらしい……」

すると、先輩の言葉が俺に絶望を押し付ける。

「……………無敵だ」

「え……………」

「そもそも、怨念は剣で斬る事は不可能だ

前に襲撃してきた倉見の怨念は元々の階級が下の方だったから剣が効いたんだ。倉見の長となると……………」

「それでも構いません……………」

先輩の言葉に被せるように言う。

俺は天子様達のために戦う。

千里の記憶を戻し、この戦いに終止符を打つ。

ただ、その可能性のために……………」

「奏は……………それでも行くのか……………?」

「ええ…もう決めたことなんで」

すると、先輩はふつと顔を緩め笑顔で俺にいう。

「そっか……………俺は止めない……………絶対に帰ってこいよ!」

「……………はい!」

そうして俺と先輩は別れた。

道中。

「なんもないいな……………」

不思議なことに、誰もいなかった。

ただ、倉見らしき靈気を感じることは出来る。

進む度にその靈気が強くなっていることがわかった。

敵がないのもそれが原因だろう。

俺は安全なところを見つけて、野宿をした。

朝起きて、誰もいない……………

少し移動すると、何も無いぽつんとした広場に瀟洒という文字が似合いそうな倉見家

の使いが立っていた。

「愛原 奏さんですね、はじめまして、私倉見の使いをやっている者です。早速ですが、こちらへ。臙様がお待ちです」

そうしてしばらく歩くと、天子様の屋敷の倍はあるお城につく。

「でっけえ……………」

俺は思わず感嘆の声を上げてしまう。

敵ながら驚いた……………」

「さ、っ、こちらへ」

俺は使いに招かれて城内に入る。

内装ももちろん豪華でカーペットも敷かれている。

どんと俺のやる気を削いでくる。

これも作戦の一つなのか……………?」

すると目の前に大きな扉が姿を見せた。

使いがそのドアをギギギつと開けると

「お待たせいたしました臙様。愛原奏を連れてまいりました」

そこにいたのは以前、俺を斬った張本人。

倉見^{くらみ}臙^{ろう}が玉座に座っていた。

「よく来たな……………愛原よ……………」

俺は咲名千里を鞘から抜いて臙に向ける。

臙の周りにいた部下達が一齐に剣を抜き俺に向ける。

「まあまあ落ち着け、まずは話をしようじゃないか」

「……………」

少し怪しい感じもしたがここは大人しく従って無駄な騒動を避けることにした。

「最初に愛原と倉見の歴史だな。」

愛原と倉見は1000年前、つまり幻想郷が創造されて間もない頃から対立していた。最初は領土の取り合いだったとか……………でも、時が経つにつれ愛原と倉見が戦うのが当たり前、ということになってしまった

それから愛原は刀で倉見に対抗した。我ら倉見家はその愛原の妖刀、咲名千里を恐れ、臣下である片波家の娘を人柱とし、咲名千里の妖力の放出を防いだ

だが、愛原の圧倒的な戦力により、倉見は敗れた。

倉見は最後の力で愛原を刀ごと外の世界に追放した。

その時、一時的に刀から離れていた片波咲はそのままそこに置き去りにされ、女神の所で生活をしていた。

まあ、大まかにはこんな感じであろう」

「一つ……………聞いていいか」

俺はこの戦いの一番の謎に迫りたかった。

「倉見が未だに俺を狙う理由はなんだ。」

それと、どうして千里の記憶を一部消したんだ？」

「ふむ、実に簡単なことだ。」

倉見はいつまで経つても愛原を憎んでいるから……………

人柱の方は刀の妖力の削減……………と言ったところか」

隴の言葉には妙に説得力があった。

「……………なるほどな」

「さて、お話はこの位で良いかな……………」

隴は玉座の隣にある槍を持って、それをこちらに向ける。

「愛原奏！私は愛原家を滅ぼすためにここに……………」

それはつまり……………どういう事か……………分かるな？」

ニヤツと笑みを見せ、槍をもう一度強く俺に向けた。

「ああ！俺もそのつもりだ……………隴……………」

俺と隴は一斉に地面を蹴り、お互いが武器を構えた。

「うおおおおおおおお！！！」

こうして愛原と倉見の因縁の戦いが始まった。

………私は何をしているのだろう………

奏がここを出てもう1日が経つ。

私は自分の部屋で抜け殻のようになっていた。

「総領嬢様。朝ごはんのお時間ですが………」

「いい。今日はいらない………」

と、衣玖でさえ追い払ってしまふ。

私は枕に顔をうずめ、涙を流した。

「奏………」

私は愛しい人の名をずっと呼び続けていた。

しばらくすると自室のドアが開き、誰かが入ってきた。

……………千里だ。

「どうして何もしないの?」

と、千里が聞いてくる。

「別に……なんでもいいでしょ……」

「奏お兄ちゃんが………私のために戦ってくれてる……」

天子お姉ちゃんは………どうして………」

千里はその場で大粒の涙を流す。

私は慌てて宥めようとするが………

「千里………」

「天子お姉ちゃんも………助けてよ!!」

奏お兄ちゃんの仲間でしょう?!」

「で、でも………奏には来るなって言われたし………

奏なら1人でも大丈夫だから………」

と、戸惑い気味に話す。

「『未来の事なんか誰にもわからない』でしょ?!」

私はその言葉でハツとする。

「だから……………天子お姉ちゃん……………奏お兄ちゃんを助けてよ……………」
「そうだ……………」

『未来の事なんか誰にもわからない』んだ……………

こんな幼い子が苦しい思いをしたのに……………私はただ、愛しい人の帰りを待つだけなんて……………

一番の卑怯者は私だ……………

私は千里を抱き寄せ、こう紡いだ。

「……………ごめんね……………千里……………私が間違っていたわ……………」

……………奏は絶対に死なせない……………だつて……………」

私は千里を放し千里の顔を見据え、ニコツと笑つて

「私の大切な……………『執事』だから！」

すると千里もつられて顔がペアつと明るくなり

「……………うん!!絶対に2人で帰ってきてね！」

私は非想の剣を握り、玄関を出た。

「総領娘様……………大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ、衣玖。あなたは安心して晩御飯を二人分。作っててちょうだい！」

「……………どうか……………お気を付けて……………」

「頑張つてね！天子お姉ちゃん！」

私はその場で浮き、奏が行ったであろう方向に全速力で向かう。

奏。今から貴方を助けに行く。

だから……………それまで死なないで……………

絶対に……………千里の記憶を戻して、またあの日の日常を取り戻す。
その思いを胸に抱きながら私は非想の剣を握った。

非想の劍は同時に強く光を放った。

9 話

加勢

「はあ………はあ………」

勝負は拮抗していた。

臚の槍の突きを刀で弾く、俺の斬りを槍で跳ね返す。

ずっとこの繰り返しだ。

「さすがに………愛原の血を引くものも………侮れないな………」

「さあな………まだこれからだ………！」

俺は咲名千里の刀身に触れ、集中した。

今から出す技は今俺が習得している中で最大の妖力を要し、最強の攻撃力とスピードを誇る。

「天候現象………」

俺がそう唱えると周りには大雨が降り注いでいた。

左手を空へ掲げ、指と指で音を鳴らす。

「ハ、ハ、これは………」

音が出た瞬間、雷鳴と共に巨大な雷が10本隴に向かって落ちてきた。怨念と言えど、雷に耐えられる生き物など存在しないはずだ。

「ああああああ!!」

その雷は隴に何本も直撃し、痺れさせた。

俺はそれに追撃を与える。

咲名千里を縦に構え、そのまま真つ直ぐに斬る。

刀身には心靈撃退の能力が込められていたので完璧な手応えがあった。

だが、俺は「あの時」の事をまた思い出してしまう。

くそっ………リコイルショックか………

目眩がするが何とか立て直し、隴の方に向き直る。

隴の方は倒れたまま動かない。

「勝った………のか」

重い足取りで警戒しながら隴に近寄る。

予想はしていたが、どうやら隴もこんな物じゃ死ぬわけがないようだ。

槍を一閃俺に向けて突く。

避けようとはしたが、近距離だったので二の腕を綺麗に刺された。

「ぐっ………」

激痛が走る。

まずい……………右腕に力が入らない……………

しかし、臃は間髪入れずに突きを繰り出してくる。

「くっそ……………」

俺は避けながら戦法を考える。

「(右足……………空いてる……………!)」

最後の1発を避け、俺はつま先に力を入れ、臃に突進した。

右足の踵、つまりアキレス腱を斬って立たせなくしようとした。

これもまた綺麗に決まり、臃は膝をついた。

俺は違和感を感じていた。

「(おかしい……………いくら何でも弱すぎる……………)」

俺の戦いが全てうまく行き過ぎていて逆に恐怖心さえ芽生えてくる。

今の臃は隙だらけだ。

俺は臃の額に咲名千里を突き刺し、臃を完全に絶命させた。

「本当に……………これで終わりなのか？」

臃をよく見ると分かるが、完全に息が止まっていて、これ以上生き返ることは100

パーセント無いだろう。

しかし俺はここで先輩のある言葉を思い出す。

「倉見臈は…………『無敵』だ…………」

俺はそれを理解した瞬間、後ろに飛ぶ。

しかし少し遅れてしまい、地面から生えたツタが俺の全身に絡まる。

「一瞬の油断が…………仇となったな…奏…………」

絶命していた臈がゆっくりと立ち上がる。

「くっそ…………やばい…………」

俺はツタを振りほどこうとするがさらに絡まってきて身動きが取れない

「さあ、これで愛原と倉見の戦いが終わる……………」

本当の勝利は…………倉見だ…………」

「……………(´)まで……………か…………」

まず一撃。

腹に突き刺さる。

「ゴッ……………」

それから2撃、3撃……………10撃と、俺の体をグサグサを刺す。

俺の周りには大量の鮮血が飛び散っている。

「(天子様…………衣玖さん…………そして、千里……………ごめんな…………勝てなかったわ

……………」

俺は心の中で謝罪する。

すると、数々の思い出という思い出が頭の中に流れ込んできた。

これが……………走馬灯……………か……………

ここでの生活……………楽しかったな……………

笑いあつて、喧嘩して……………本当の家族みたいだった。

刹那…

俺の右目を槍の先端が刺さった。

もちろん、激痛が目を通して全身に渡る。

「ああああああああああ!!!」

俺は痛みに耐えられず、叫び声を上げてしまう。

「もう少し……………痛めつけて殺してやるよ……………」

右目はもう見えていない、真っ暗だ……………

もう……………だめか……………

俺は意識が朦朧とする中……………一人の少女の声が聞こえたような気がした。

私は全速力で飛んでいた。

多分この方向であっていると思うんだけどな……………

しばらく飛び続けると一つの大きな屋敷があった。

「これが……………倉見の屋敷……………」

私はもう一度非想の剣を握り直して、堂々と正面から入った。

「おやおや、愛原さんのお連れですか？」

「……………あんたは？」

「おお、これは失礼いたしました。私は倉見に使える者でございます」

「私は比那名居天子。天人よ……………」

「おや、天人様でしたか」

驚いたような口調だが全く顔には余裕が見える。

「私がここに来た理由……………分かってるわよね？」

「ええ、無論でございます。ですが愛原さんは今戦闘中です、最初に私がお相手せねば……………」

「……………やる気？」

「はい、よろしくです…」

倉見の者はニヤツと笑みを見せ、1本の剣を取り出し、私に斬りかかってきた。

「……………早く奏の所に連れていきなさいよ！」

非想の剣を横から繰り出し、とりあえず正面の防壁を削る。

これがなかなか難しく、剣先を相手に向けるのでさえ不可能だ。

スピードでは負けないと思っただけ……………

「おおう、さすが天人様と言わべきですか……………」

とか言いながらひよいひよいと非想の剣を避ける。

「では、こつちからも……………」

使いから出てきたナイフを非想の剣でたたき落とす。

「……………そんな簡単に阻止されるのはあまりいい気分では無いですね……………」

苦笑いをして使いが私に言う。

「……………こちらも……………本気で行きましよう……………」

使いの顔が豹変した。

使いの周りに大量の包丁が出現し、私めがけて高速で飛んでくる。

「やばいわね……………天符「天道是非の剣」！」

何とかしてその包丁を消滅させる。

傷は負っていないが、体力面でこの使いに勝てる自信が無かった。

「(体力が切れる前に倒さない……………)」

「天人様！油断は禁物ですよ！」

1本の包丁が私の右頬を掠る。

触れただけでも、私の頬に深い傷がつく。

当然、痛みはあるので手で傷を塞ぐ。

「いって……………これはもう……………本気を出すしかないわね……………」

私は自分の中で一番の大技を使うことを決意した。

周りに緋色の魔法陣が展開される。

「……………、これが……………天人の力……………」

「全人類の緋想天……………」

静かにそう唱え、使いを吹っ飛ばす。

正直、ここまで手荒な真似はしたくなかったが、奏のためなので仕方ない。

私は使いを跨ぎ、大きな扉を開け、奥へ走る。
臙がいた。

奏を探すが見当たらない、壁を見渡すと、そこには想像を絶する彼の姿があった。

何ヶ所も刺されたことが伺えるほどの傷穴、右目から血が流れている、多分失明している。

そんな彼を見て、私は手で口を抑え、涙を流す。

「嘘……………よ……………奏……………奏?!」

私は奏に駆け寄り、顔を見る。

少し息をしている。

浅い呼吸だが、確かに生きている。

「良かった……………」

安堵の声を漏らすのが、背後からは当然、敵である臙がやって来た。

「また邪魔なやつが来たもんだ……………とつとと失せろ」

「断るわ、私は奏の上司。絶対に彼を助ける」

非想の剣を臙の方に向け、叫ぶ。

「……………天人というのも堕ちたものだな……………」

刹那、朧が私に突進してくる。

右にずれ、剣先を朧に掠らせる。

手応えはあつた、朧にも傷跡が付いているが、一瞬で元に戻ってしまう。

「……………」

「……………弱い……………」

「ハッ……………天人を馬鹿にされたもんだわ！愛原に負けた哀れな一族が！」

私はわざわざ朧を挑発してしまった。

自分でも失態だと思ったが、これもいい特攻薬かもしれない

冷静を保てなくなればもうけものだ。

「貴様ア……………！」

朧が槍を強く握り、私に殺意を向けた。

さっきの余裕な顔はどこにもない。

逃げ出したくなるくらい迫力があつたが私は恐れなかった。

奏のために……………この戦いを終わらせる！

「死ねえええ！」

朧がまた突進する。

私は完全に読みを間違えた。

隴はさつきよりもスピードも力も桁違いだ。

逆に怒らせる方がまずかったのだ。

「(まずい……………完全に読み外れだ……………)」

私はただ隴の突きを避けるだけだった。

しかし、それも永遠とよけられるものではなく……………

隴の槍が高速で私の太ももに突き刺さった。

その次は肩、腹、この3回で私は死ぬほどの激痛が襲った。

「ぐっ……………あぁー！」

私は倒れ、その傷口を手で押さえ、声にならない悲鳴を上げる。

「貴様だけは殺す……………天人が調子に乗るなよ……………」

「い、いや……………」

いつまでも強腰だった私がついに弱腰になり、隴に怯えてしまう。

涙目になり、誰かに助けを求める。

「死ね……………」

「助けて……………奏……………」

隴が槍を振り上げ、突き刺した。

もう逃げられない事を確信することが出来た。

私は諦め、完全に受け身になる。

「(ああ、私ここで死ぬのかな………まあ、奏の隣で死ぬのなら本望かも………)」
そう思った刹那、周りに鮮血が飛び散った。

しかし、飛び散った血は私のものではなかった。

臍の肩から1本の刀が突き刺さっていた。

薄い紫色に染まり、見とれるほど綺麗な刀身だった。

その刀を目で負い、その刀の持ち主の顔を見る。

「……………お待たせ致しました……………天子様……………」
私の愛しい人の声が横から聞こえた。

10話

戦いの終止符+番外編

天界

のクリスマスパーティ

「かな……………で……………?」

私は奏の方を見て涙を流す。

「申し訳ありません天子様……………待たせ過ぎましたね……………」

いつもの優しい声音で私を包み込む。

しかし、片目を失い、今なおも右目を閉じている。

奏の右手にある咲名千里からは紫色の光を放ち、とんでもない妖力を撒き散らしていた。

まるで千里が帰って来たかのように……………

「やつほ!天子ちゃん☆」

私の予想は的中し、そこにいたのは……………

透き通るような薄ピンク色の髪の毛。

赤色の目。

華奢な体で、身長は155センチほど。

大きめのパーカーを着て、フワフワと浮いている。
紛れもない、千里こと、片波 咲がそこに居た。

「千里……………よかった……………」

「えへへえ♪ごめんね天子ちゃん！」

いつもの雰囲気ですべて謝ってくる。

「……………よし、千里！行くぞ！」

「ええ！」

奏は咲名千里を構え、臙に向き直る。

「ふん……………小娘一人が来たところで……………何も出来んだろう……………」

「まあ……………確かに」

「いや納得すな」

「……………ギャグをしているつもりはないんだが……………」

と、奏、千里、臙の3人で会話をしている。

「……………気を取り直して……………行くぞ！臙！」

咲名千里を縦に振り下ろす、それを臙は槍を横にして防ぐ。

少し槍がミシミシいつているのが聞こえた。

「……………行けるぞ！千里！」

「分かってるわ!」

「油断は禁物だと言うところが!!」

ミシミシいつている槍から1本の細い光線が奏の脇腹すれすれを通り過ぎる。

「……………あつぶねえ……………」

「……………このままでと……………勝算はほぼ皆無よ……………」

と、千里から忠告を受ける。

「ま、マジかよ……………」

「“このまま”ならね。奏、あれを使うわよ!」

「……………あれやると俺の体がまた……………」

「つべこべ言わない!早くやるわよ!」

あれとはなんだろうか?

私は気になってしょうがない

「千符「幾千の命」!」

二人同時にそう詠唱を唱える。

と、同時に真下から巨大な木が生えてきた。

「な、何をやる気だ貴様ら?!」

朧も槍を構え、防御しようとする。

「やっぱりきついな……………」

奏の体に大量の妖力が流し込まれている。

一人の体だけではあんなのキツいに決まっているっ……………」

私は奏に駆け寄ろうとするが太ももの傷などで足がびくとも動かない。

「がんばって！奏！」

精一杯の声援を送る。

奏はそれに答えるように笑顔になり、

「天子様……………」もう少し待っていてください……………」

「奏……………貴様まさか?!」

「ああ、そのまさかだ。」

俺の体に今までに死んだ愛原全員の妖力を流し込んだ」

「くそっ！千符「幾千の命」！」

朧も同じスペルカードを唱える。

もちろん、効果は同じで朧の体にも奏に匹敵するほどの妖力が溜まった。

「さあ……………行くぞ！朧！」

「奏！よく相手の弱点を理解して！その上で攻撃するのよ！」

「ああ！」

「死ねえええー！」

同時に自分の持っている武器からビームが発射される。

朧は青を帯びた黒色。

奏は薄いピンク色。

お互いのビームが衝突し、「反響を呼ぶ。

目を開けているのが精一杯で、私は負けずに奏に声援を送る。

「奏！負けないで！」

「ぐっ……………やばいな……………」

奏の腕から大量の鮮血がドボドボと出てくる。

「奏えー！貴様ら愛原はここで死を遂げるのだア!!」

「……………これで終わりだ……………朧……………」

隣にいる千里が咲名千里の中へ入る。

その刹那。

奏側のビームの妖力が倍以上に大きくなった。

「そ、そんな……………こんなガキにも……………倉見が負けるとは……………」

そうやって朧はビームの中に包まれ、姿を消す。

「終わった……………のか……………」

「奏……………お疲れ様……………」

私は奏に労いの言葉をかける。

「ありがとうございませす天子様……………関係の無いあなたが俺のために戦ってくれて……………」

「いいえ、あなたは私の大切な執事だから……………」

ニツコリと笑うが私も奏も同じくらしいの怪我を負っている。

千里が咲名千里から出てきて、

「詳しい話は後でしましよ！衣玖さんを呼ぶわ！」

千里はその場で消える。

瞬間移動かな？

なかなか便利……………

と、思っているのも束の間、すぐに衣玖が来た。

「だ、大丈夫ですか?! 奏さんと総領娘様?!

すぐに永遠亭に行きましょう!」

私はその後奏と一緒に永遠亭に連れて行ってもらい、治療を受けた。

幸い、私の方の怪我は数ヶ月で治るようだが奏の右目は完全に失明してしまつたらしい。

2度と戻ることはないそうだ。

しかし、彼は、

「愛原と倉見の戦いに終止符を打てたのですから……この位の傷どうつてことありません……それに……こつちの方がカッコイイじゃないですか☆」

と、決めポーズを見せつけながら私に言った。

大怪我を負っているのによくそんなに呑気でいられたもんだ。

外には雪が降っている。

綺麗な空だった。

こうして愛原と倉見の約束された戦いに
愛原奏と言う龍人がピリオドを打った。

・番外編

天界のクリスマスパーティー

・

奏がバルコニーから空を見上げて言う。

「かーなり雪降ってますね…」

「そうねえ……ホワイトクリスマスなんて私人生初よ？」

今日はクリスマス。

いまの時刻は午後8時。

私は奏と一緒にバルコニーでお茶をしていた。

「クリスマスか……」

「失礼するわよー☆クリスマスケーキの出来上がりー！」

と、千里が勢いよく飛び出し、持っていたクリスマスケーキをドンッと机に置いた。

甘そうなチョコレートケーキ。

上にはクリームで「Merry Christmas」の文字が。

「……………これ、千里が作ったのか？」

奏がケーキを見ながらいう。

「ええそうよ！衣玖さんに教えてもらいながら作ったの！

衣装もあるわよ！」

「はあ？衣装？」

はて、何のことやら

千里はそのままバルコニーをあとにして数秒後にまた戻ってきた。

「はい！奏はトナカイ！」

「と、トナカイ……………」

私は吹きそうになった。

「か、奏が……………トナカイ……………ぷくくつ」

慌てて手で口を抑える。

「わ、笑わないでくださいよ……………」

ブツブツ言いながらもちやつかり着替えている奏。

着替え終わり私と千里に向き直ると

堪えきれなくなり、千里と共に爆笑してしまう。

全身真っ茶色。

普通に似合ってたて可愛かった。

「あははははははははははは！ギャップがすごいわね！」

奏は赤面しながら、席に座る。

「はい次天子ちゃん！サンタさん！」

「お、それは嬉しいわね……………へ？」

私はサンタコスに驚いた。

別に普通のサンタだ。だが、何かおかしい。

「こ、この衣装……………千里の手作り？」

「え、そうだけ……………変？」

「変って訳じゃないけど……………これスカート短すぎでしょ?!パンツ見えるわよ?!」

明らかにこれは狙ってるのでしょうか言えない。

こんなに短いスカート見たことあるだろうか？

「え……………着ないの天子ちゃん？」

と、涙目になる

「う……………」

私は千里のこういう顔が苦手だ。

「わ、分かったわよ！着ればいいんでしょ！」

一瞬で千里の顔がパアッと明るくなった。

くそつ……………女の子同士なのに可愛いって思っちゃう！

私は更衣室で着替える。

そうしてまたバルコニーに出ると

「こ、これは……………」

奏が少し赤面しながら目をそらす。

「あららくちよつと短すぎたかもね……………」

と、反省の色をまつたく見せず、千里が私に苦笑いをする。

「て、天子様！そこで一回転してみてくださいいよ！」

と、下心丸出しの奏に怒る。

「いやよ！見えたらどうすんのよ！」

と、私はスカートを押さえ奏を叱る。

「目の保養になるかなーと……………」

「正直過ぎるわ！」

奏の顔面に蹴りを入れる。

「ぶふお?!…………あつ、見えた……………」

奏がそのような言葉を言った途端。

私は体の芯から体が熱くなるのを感じた。

多分顔真つ赤だろうな……………」

「ば、バカあ！何見てんのよ変態!!」

「そ、そんなこと言われなくても……見えちゃったものは見えちゃったし……それに……天子様のパンツ縞パンとかいい趣味して」

奏が言い終える前にもう一度蹴りを入れ、ゴミを見るような目で横たわった奏に非想の剣を向ける。

「今なら許してあげるけど？」

「ごめんなさい許してください」

「まったく……」

すると衣玖がドアから入ってきた。

「お待たせ致しました。」

クリスマスパーティ始めましょうか……」

「やったあ！始めよ始めよ！最初誰がケーキ食べる？」

千里はスキップしながら席へ向かう。

「楽しみね……さ、行きましょ、奏！」

私は奏に手を差し伸べる。

奏をニコつと笑い、その手を掴む。

「はい！」

こうして今年の「ホワイトクリスマスパーティ」が始まった。

メリークリスマス！

11話

奏への気持ち

愛原と倉見の戦いから1日後。

「ねえ、千里」

「ん？なに、天子ちゃん？」

「あなた……………どうやって記憶が戻ったの？」

千里は私たちの知らないところで記憶が蘇り急にあの場に現れた。

その理由がまったたく分からない。

「んー？えつとね……………私の記憶を操作していたのは……………倉見豹つて言うやつらしいんだけど……………天子ちゃんが倒してくれたんでしょ？」

「あ、それで私が倒した時に記憶が戻ったってわけね…」

「そーゆーことー！」

「ふーん……………」

すると千里は「あつ」と、何かを思い出し、私に詰め寄る。

すつごいニヤニヤしてる…

「天子ちゃんはさー……………奏の事好きなの？」

私は赤面して

「は、はあ?! 何でそんな話になるのよ!」

「いや、記憶が戻った後、机に置いてあつた手紙を見ちやつてさ……………それで天子ちゃんはどうなのかなーって☆」

そうだった……………あの手紙まだ机に置きっぱなしだ……………

帰った時に手紙がリビングにおいてあると奏と気まづくなりそう……………

「その手紙は……………」

「天子ちゃん宛だったから天子ちゃんの自室の机の引き出しに入れといたよ……………」

よ、よかった……………

私は大きく息をつき、落ち着く。

これほど千里に感謝したことは無い……………

「それでそれで? ☆天子ちゃんは奏の事どう思ってるの?」

千里に笑顔で迫られ、私は後ずさりながら、諦めたように言う。

「好きだよ……………私も奏のこと好きだけどさ……………」

「おおー! ☆それはいいねえー、応援するよ!」

千里の顔が明るくなる。

「でも……………奏は手紙に書いたこと忘れてないかな……………」

倉見との戦いで私の事好きだったこと覚えていないとか……………」

私はネガティブ思考ばかりだった。

自分で言ったのにかなり悲しくなる。

千里は唐突に真剣な顔になり

「奏は……………そんな人じゃないよ……………ちゃんと覚えてる。」

私だって……………記憶が消えた時、その優しさのおかげで天子ちゃん達に恐れず、天界に過ごせたんだ……………その事は今でも感謝してる……………私は……………奏のことを家族の一人のように思えるんだ……………その中にはもちろん、天子ちゃんや衣玖さんもいる。だから……………奏も……………多分天子ちゃんの事まだ意識してるよ……………」

千里は私の手をそっと握り、とびきりの笑顔で言う。

「頑張れ！天子ちゃん！」

この「頑張れ」は告白しようって意味なのか……………」

でも……………私も奏が好きだ。

恋人になりたいとも思う。別に種族とかも関係ないし……………」

でも……………もしも……………もしもあの手紙の追記に書いてあることが本心ではなく、私を励ますだけの言葉だったら……………」

そう考えると心が痛くなる。

プラスに考えたいがどうしてもネガティブになってしまう。

「でも……………頑張ってみようかな……………」

今は2月10日。

世間では「ばれんたいんでー」というものが2月14日にあるらしい。

ちなみにこれは千里から聞いた話だ。

ばれんたいんでーは好きな男の子に自分の手作りチョコを上げるといいう習わしがあつちの世界ではあるらしい。

まあ、幻想郷でもあるらしいが……………

千里には「丁度いいし、衣玖さんにチョコの作り方教えてもらえば？」と、言われた。確かに……………いいチャンスなのかもしれない……………

数分後。

「天子様、永遠亭の方から紅茶を作ってくれるそうです。せっかくなので天子様もどうです？」

奏が病室を開け、私に声をかける。

「じゃあ頂こうかしら」

私はベツトから降りて松葉杖を手に持つ。

太ももの怪我が思ったよりもひどく、靱帯の方にかなりの裂傷があるらしい。いくら天人とはいえ、怪我をしたらすぐに治る訳では無い。

これはこれでかなり痛かった。

少しズキズキするが歩けないほどではない。

しばらくすると、奏が駆け寄ってきて、

「大丈夫ですか？天子様。肩をお貸ししますが……………」

そう言つて肩を組んできた。

だいぶ楽になったが今はそれどころじゃなかった。

やばい……………心臓がバクバク鳴ってる。

ただ単に奏と少し密着したただけなのに……………

何よ……………これ……………

「……………う……………大丈夫ですか？少し顔が赤いですが……………」

「な、なんでもないわよ！一々声かけないでくれる?!」

と、きつく言つてしまった。

「ごめんなさい……………」

奏はシユンと、落ち込ませてしまう。

「あ、いや……………」

必死に誤解だと弁解したかったが、他にどう言った声のかけ方があるのか分からず、そのまま何も言えなかった。

「(どうしてこんなに素直になれないの……………?)」

そう思いつつ、私は奏に体重を預けながら、永遠亭の縁側に着いた。

「永遠亭って和風なのに紅茶があるって面白いわね……………」

「そうですね……………俺も驚きました」

2人で会話していると鈴仙が襖を開け

「お待たせ致しました。奏さん、天子さん。紅茶をお持ちしました」

「ありがとうございます鈴木さん」

2人で礼を言い、紅茶の入ったコップを手に取り、静かに啜る。

「……………美味しい……………」

味は期待していなかったがこれは絶品だ。

奏の紅茶に匹敵するのではないか？

「すごいですね……………これの手順は普通の紅茶と変わらないんですか？」

「いや、少しコツがありまして……………少し砂糖を入れるんです。そうしたら少し甘味が
出て更に美味しくなるんですよ！」

「なるほど……………そんなやり方があったんですね……………ありがとうございます！」

「ごちそうさま、美味しかったわよ鈴仙」

「はい、お粗末さまでした。天子さん」

私は帰りも奏に肩を貸してもらい、病室へ帰った。

「奏の目……………やっぱりダメなのね……………」

あの後も奏のために永琳が全力を尽くして目をどうにかしようとしてくれた。だが、
目の視神経の方が完全に千切れてしまい、目を開けても意味が無いとか……………

「まあ……………男の勲章ってやつですね……………少し不便ですけど……………生活に支障は出ません
よ……………」

「そ、そう？ならいいんだけど……………」

私は心配そうに奏の無くなった右目を見る。

「はは、ほんとに大丈夫ですよ……………」

見られていたことに気づいていたのか、精一杯私を心配させないようにしてる。

やっぱり優しいな……………

人って優しくされるだけでコロツと惚れてしまうのだと千里から聞いた。私もその一人なんだろうな……………

「でも……………天子様のお陰で……………俺は臆に勝てました…。天子様が来てくれなければ俺はきつと戦意喪失で死んでいたかも知れません……………天子様には感謝してもしきれないですね……………」

私は両手を横に振り、否定する。

「そ、そんなことないわよ！あなただつてよく頑張ったわ。私なんて来て早々にやられたもの……………役になんか立ってないわよ……………」

「そんなに自分を責めないでください。天子様の今回の戦いで一番活躍したと少なくとも俺は思いますよ」

奏の声はあの時のように優しい声音で私を包む。

「そんな事言われても……………」

「まあ、それほど天子様は自分に厳しいってことですね……………」

「そんな会話をしているうちに日が暮れてしまい、奏は自分の病室に帰ってしまった。

「もつと……………話したいな……………」

自然とそう言った言葉が出てきてしまう。

そんなに………私は奏が恋しいのかな………

またあの声で私を包んでほしい………

明日で退院だ。

「(衣玖にチヨコの作り方教えてもらお………)」

私は奏にチヨコを渡す日が楽しみである反面、告白することにかなり緊張していた。

f i n a l s t o r y

天空のバレンタイン

デー

2月11日

永遠亭を退院し、私は奏がない時を見計らって衣玖にバレンタインのチョコ作りを手伝ってもらおうとした。

「衣玖ー？ いるかしらー？」

「はい、お呼びですか総領嬢様？」

「えと……………その……………」

いざ口にすると恥ずかしい。

しかし、衣玖は空気を読んでくれたようで…………

「……………材料を買ってきますので少々お待ちください」

「あ、うん…………」

そう言って衣玖は玄関へと向かった。

やっぱり……………やめどころかな…………

でも、もう衣玖買いに行っちゃったし…………

……もういい！こうなったら流れで何とかする！

吹っ切れた私は自分の頬をビンタし、気合を入れ直す。

数分後、衣玖が地上からチョコの原材料を買ってきた。

「さて、総領娘様。奏さんの心を掴むより先に胃袋を掴んじやいませうか」

「お願い、衣玖」

こうして私と衣玖のチョコ作りの特訓が始まった。

「（こ）を……（こ）こうするの？」

「そうです、そうしてこれをこうして……」

途中、千里にも手伝ってもらい、

2月14日。

この日、オールした私と衣玖の2人で最高のチョコレートを作ることが出来た。

これをボール型にし、デコレーションした可愛い袋に5個ほど入れる。

「さて、総領娘様、後はこれをどうやって奏さんに渡すのかですよ……」

「そうね……考えなきゃ……」

チョコ作りを終えた私は告白の言葉を考え始めた。

今日はバレンタイン。

でもこの世界にはバレンタインの習慣なんてないんだろうな……

俺は天子様や千里、衣玖さんから貰えないかなーと淡い期待をするが、残念ながら幻想郷にバレンタインは無いらしい。

「はぁ………楽しみが減った………」

バレンタインがないという事実に俺は肩を落とす。

天子様から………貰えないかな………

やっぱり俺は天子様が好きだ。

傲慢な態度も、たまに見せる眩しい笑顔も……サラサラの青髪も……天子様の全てが大好きだ。

でも俺には告白する勇気がなかった。

なぜなら……俺と天子様は主従関係だから……

執事が総領娘の事を好きになってはいけない。

そんな抵抗がある。

「いいのかな……………」

俺はこの想いを伝えたい、とは思っている。

でも「あんた私の執事なんだから嫌だ」なんて言われたら俺もう立ち直れる気がしない。

「まあ、頑張ってみるか……………」

別に今日じゃなくていい、幻想郷にはパレンティンが無いらしいから無理して早く告白しなくていい。

俺は、そう心に言いつけた。

2月14日。午後1時。

外には雪がゆつくりと地面に向かって落ちていつている。

すごく綺麗だ……………

私は窓に手を当てながら当分の間外に降っている雪を眺めていた。

夜は……もつと綺麗なのかな……

そんなことを思いながら、冷える手に息を吐いた。

「総領娘様、昼食のお時間です」

「え、ああ、うん」

食卓に向かうと奏と千里、衣玖の全員がもう集まっていた。

食事中。

「ねえ、奏」

「はい？」

「後で稽古しましょ？」

「け、稽古ですか？」

「ええそうよ、だって私あなたと真剣勝負したことないでしょ？」

奏の事が好きだからとかそんなの関係無く、ただ単に奏の剣の腕が見たかった。

「で、ですが……仕事……」

「これは命令よ？最優先にしてちょうだい」

我ながらかなりの我儘だなと思ってしまう。

奏もそれにすぐ対応してくれる。

笑顔を浮かべ

「ええ、分かりました」

「じゃあ3時に外に来てちょうだい！」

そう言つて私は部屋に戻る。

隴との戦いを見て確実に奏は私よりも強い。

それは一目瞭然だ。でも負けてもいい、私はほんとに奏の剣さばきを見たかった。

そして午後3時。

「奏、わかつてると思うけど、本気で来なさいよ？手抜いたら晩御飯なしだからね！」

「すごいお母さんっぽいですね……」

呆れた顔で奏が言う。

「う、うるさい！寸止めだからね！」

「分かつてますよ、では行きます」

奏は咲名千里を握り、低い体勢を取った。

私も非想の剣を持ち、奏に向ける。

「せああああ！」

掛け声とともに奏が私に突つ込む。

私は非想の剣を両手で、奏の縦から振り下ろされた咲名千里を防ぐ。

力の差もあるが長年剣の修行をした私は力を入れずに剣を振るうことも出来る。

しかし、奏の運動神経には敵わず、スピード負けしてしまふ。ぎりぎりですすもその次の連撃で追いつかなくなってしまう。

その後、奏が私の喉元を剣を突きつける。

咲名千里が太陽に反射して眩しい。

「……………あなたほんとに何者なのよ……………」

「龍人ですよ」

「そういうのを聞いているんじゃない！」

すると奏は咲名千里を鞘に収め

「さ、天子様。ティータイムですね」

私は心を落ち着けるために一つ咳払いをし

「あら、もうそんな時間かしら、じゃ早速紅茶を作ってちょうだい」

「かしこまりました」

そう言つて奏は中へ入り、台所へ向かう。

私は自室に非想の剣を置き、バルコニーに向かい奏の紅茶が来るのを待つていた。

「(告白……………いつしようかな……………)」

今チョコレートは衣玖が用意してくれた自室にある小さな冷蔵庫の中にある。

なので奏にバレる可能性はゼロだ。

「(とゆーかどういふ顔してチョコを渡せばいいの?!)」
そう考えているうちに…

「天子様ー?」

「ひゃい?!」

と、面白い声を出してしまふ。

「だ、大丈夫ですか? 天子様、ブーツとしてますけど…」

私は赤面しながら

「な、なんでもないわよ! 紅茶もらえるかしら?」

そう言うのと皿に乗せられている小さなティーカップの中に紅茶が入っていた。

いつものようにゆっくりと啜る。

うん、いつもの美味しい紅茶だ。

毎日のように飲むこの紅茶だが、今日だけは違う感じがした。

奏への想いが変わったからだろうか?

別に紅茶にはいつももの色と味だった。

だが、自分の味覚の方がいつもと違う感じがする。

「美味しいわね……」

「ありがとうございます……」

奏は私に一礼し

「では茶菓子を作ってきます」

そう言つてまた台所へ消えた。

すると、その数秒後

クツキーのいい匂いが漂っていた。

「お待ちせ致しました。クツキーでございます」

こうして午後7時。

晩御飯も食べ終わり、私は奏への告白の準備をしていた所。

「天子ちゃん！奏ー！外に来てー！」

千里の声、なんだろうか？

私と奏は同時に外に出た。

真つ暗だ辛うじて千里と衣玖の姿が見えるくらい。

「何よ？」

私と奏が頭に？マークを浮かべていると千里がニヤリと笑いだ。何かのスイッチを押した。

刹那、ピカツと光、私は目を一瞬瞑った。

目を開けると……………

「……………すごい……………」

そこには天界の木につけられたイルミネーションが輝いていた。それに程よい雪が降っていて更に雰囲気醸し出している。

「これ、千里と衣玖が作ったの？」

「すごい綺麗ですね……………」

千里はドヤ顔をし、衣玖は完全に疲れきった顔をしている。

私の耳元まで近づき

「さてさて、天子ちゃん？雰囲気作りはしたからね？」

「総領嬢様、フアイト！」

「奏、天子ちゃんから話があるそうよ！」

そう言ってヒラヒラと手を振り2人は屋敷へ帰る。

これは後である2人に感謝しなきゃな……………

しばらくイルミネーションを眺めたあと、奏が口を開いた。

「あ、あの、天子様、お話って……」

「え、ああ、うん……」

やばい！緊張が………！！

私は心臓を押さえ深呼吸をする。

赤面する顔を落ち着かせ……

大丈夫……私は奏が好きなんだ……その思いを伝えるんだ……！
「え、えつとね………私………」

「？」

「私………奏の事が………好き………です………」

最後の方小声になってしまったが多分聞こえているだろう……

だって奏の顔が驚きが変わっていたから……

「え……天子様……今なんて……」

「だ、だから！私はあなたの事が好き！何回も言わせないでよ……」

奏の顔が一瞬笑顔をなつたが……

「天子様……ありがとうございます。すごく嬉しいです……でも、ダメなんです……」

「え………？」

「普通、執事とその総領娘が恋人になつてはいけない……」

それに……僕の一族は……もう誰もここにはいないんですよ………そうしたら

……僕は天子様に迷惑しかかけられない………それに………怖いです……」

すると奏の目から少量の涙が出る。

私はそれを黙って聞いていた。

「俺は………人を殺せない………いいことかもしれませんが………それでは天子様をお守りすることなんてできない………天子様を守れなかつたら………もう………俺……」

奏が言葉を言い終える前に私は正面から奏を抱きしめた。

奏の温もりを直に感じる。

「今は……………そんなことどうだっていいじゃない……………私は奏が好き……………それだけでも……………充分幸せなのよ……………」

更に腕に力を入れる。

「天子……………様……………」

「今くらい……………主従の関係なんて忘れてもいいのよ……………」

奏から大量の涙が溢れる。

また、奏も私を強く抱き締めて

「俺も……………！天子様が……………好きです！大好きです！」

「……………うん……………」

「だから……………恋人になってください……………！」

「……………私は奏を一生守る。絶対に離さないから……………」

「……………俺も……………あなたを永遠に守り続ける……………この命が果てようとも……………俺は天子様に寄り添って生きていきます！」

静かな雪が降る中で私と奏は強く抱き締めあった。

「はい、奏」

私は手に持っていたチョコレートを奏に渡す。

「あれ、幻想郷にはバレンタインはないんじゃないや……」

「……誰よ……そんなデマ流したやつは……」

「あはは……ありがとうございます、天子様。ホワイトデーは期待しててください
！」

「倍にして返してよね！」

と、いつもみたいな何気ない会話も……

私は……君と恋人になってから……世界観が変わった……

これはやつぱり……君のおかげだよ……奏。

ありがとう……これからもよろしくね……私の彼氏さん……

そう、心の中で奏にメッセージを送った。

緋色に染まったあなたと私
く有頂天な恋く

e
n
d
:
:
:
:
:

a f t e r s t o r y

愛を誓ったホワイト

デー

3月9日。

私はまだ残っている雪を眺めていた。

丁度1ヶ月ほど前かな？

私と奏は恋人になった。

最初の方は2人とも緊張していて何も話せないでいたが最近では打ち解けて恋人になる以前と何ら変わらない生活を送っている。

それに恋人らしいこともあんまりしてない。

強いて言えば軽いハグくらい。キスなんかもつてのほかだ。

それに関係が変わった訳でもない。

「お待たせ致しました。天子様。紅茶でございます」

「ん、ありがとう」

私が紅茶を啜っていると

「そう言えば、だいぶ雪積もりましたね……………」

「そうねえ……………私も初めてよ、こんなに積もったの」

「ちよつと外に出ませんか？」

と、珍しく奏から誘ってきた。

「お、いいわね……………」

私もそれに乗り、外に出ることにした。

思ったより寒くはなかった、陽が出ているからだろうか？

「すごい綺麗ですね……………」

白いはずの雪が陽の光に当てられて銀色に輝いている。

これが俗に言う「銀世界」と言うやつか…

と、そんなことを考えていると背中に冷たいものが当たった。

「ひっ!？」

と、素っ頓狂な声を上げ背中を見る。雪だ…………

正面を見ると奏がケラケラと笑っている。

「奏……………あなたねえ！」

私も雪をつかみ丸めて奏に投げた。

しかし、奏はそれをヒョイッと避ける。

「あれれー、どうしたんですか天子様〜？」

「きいいいいいいい！」

私と奏は長い間ずっと追いかけてこしていた。

しかしその最中だった。

一面氷で覆われている池に私が足を踏み入れてしまった。

「きゃ?!」

割れる………訳ではなかったが……これがなかなか滑る。

普通に立てないくらい………

「だ、大丈夫ですか? 天子様」

「え、ええ、大丈夫よ………」

そう言つて立とうとするがなかなか立てない。

すると、奏が手を差し伸べてくれた。

「あ、ありがとう奏………」

私は奏の手を掴み起き上がろうとした。

しかし、やはり氷なのは変わらないので私はリプレイのようにまた滑る。

「きゃあ?!」

「うお?!」

私は奏の手を握っていたので当然奏もその場で倒れる。

沈黙が続いた。

なぜなら……………

「……………んっ？」

私が仰向け奏がうつ伏せになった事で私の唇と奏の唇が重なってしまった。

どこの神様のイタズラよ……………

2人ともその状況を理解できないまま、10秒間の沈黙が訪れた。

そうしてまた2人同時に状況を理解し、顔を赤くして飛び跳ねる。

「も、申し訳ありません！天子様／＼／＼

「へ？あ、イヤ、大丈夫よ！／＼／＼／＼

な、なななな何やってんのよ私いー！

ファーストキスが……………

嬉しいけどツ！嬉しいけど雰囲気とかさ……………

やっばい！

今俺何した?!

天子様と……………キス……………しちゃった……………

俺は自分の唇に触れる。

「(天子様の唇、柔らかかったな……………)」

と、率直な感想を述べる。

「あ、あの……………天子様?」

「ひゃい?!な、何?」

「ほ、ほんとに申し訳ありませんでした……………」

結果がどうであれ、天子様に強引にキスしてしまったのと同じことだ。

俺は歓喜よりも罪悪感が勝り、落ち込んでしまう。

「……………だ、大丈夫よ……………」

「で、ですが……………」

「大丈夫だって！むしろ嬉しかったし！」

「……………え？」

「…え？……………あ！」

今……………なんて言った？

俺は天子様の言った発言が頭の中で繰り返されているのがわかった。

嬉し……………かった？

天子様は赤面し

「だ、だから……………嬉しかったって……………」

右目が無いのであまり見えないが、天子様が本当に嬉しかったというのが見てて伝わってくる。

あああああああ！何言ってるの?!

私は自分の発言を責める。

嬉しかったって?!

確かに嬉しかったけど普通口に出す?!

もう一度したいけどさ!!

「あ、あの……………天子様……………」

「な、何……………?」

奏がモジモジしながら言う。

「天子様が良ければですけど……………やり直し……………しません?」

「……………え?」

「だ、だから……………ちゃんとした形でキス……………しませんか?」

まさか奏の口からそんな言葉が出るとは思わなかった。

私と奏の唇が静かに重なった。

好きな人とのキスって……………

数十秒経ち、奏から唇を離す。

「……………ダメ」

「て、天子様？」

私は奏の意見を聞かず、またキスをする。

「んっ!?!?!?!?!」

私の方が先にスイツチが入ってしまった。

ここからは……………ね。

察して頂戴。

3月14日。

バレンタインデーから1ヶ月後。

今度は男の子が女の子にバレンタインのお返しチョコを渡す日らしい。
確か………ホワイトデーは期待してろって奏言ってたわよね……

「天子様ー？ 晩御飯の材料買ってきますねー？」

奏の声が玄関から聞こえる。

「あ、はいー！」

そう言つてドアの音とともに奏は外へ出た。

今日の朝から奏を見てるがいつもと変わらない。

ホワイトデーだと言うのに緊張のきの字も無い。

「奏………忘れてるのかな………ホワイトデー………」

私は少し心配になった。

1時間後。

奏が地上から帰ってきた。

私は思い出させるために

「ね、ねえ、奏。今日って何日だっけ？」

「えーと、確か……………」

……………日にちを考えるあたり、完全に忘れてる……

私は泣きそうになる顔を手で覆い

「ああ、3月14日ですね……………」

「そ、そう……………ありがと……………」

私はそのまま自室へ行く。

そこで体育座りをし、

「なんで忘れてるのよ……………ばか……………」

と、少量の涙を流す。

午後8時。

晩御飯を食べ終え、完全に諦めた私は自室に戻ろうとする。

しかし、唐突に手を引かれる。

「あ、あの！天子様！」

「……………何？」

奏の顔は少しいつもより真剣だった。

「ちよつと外に出てください……………」

私は奏に連れられ外に出る。

3月とはいえまだまだ肌寒い。冷気が私の肌を刺激する。

「……………で、何するのよ……………」

私はホワイトデーを諦めていたので別のなにかだろうと思っていた。

しかし、奏がいきなり指を鳴らした。

「さあ、天子様。とくとご覧あれ」

刹那、ぴかっと光り、バレンタインデーの時と同じような……………いや、それ以上のイル

ミネーションが目の前に現れる。

「……………え？」

私は状況を理解できないまま、奏を見る。

「遅くなって申し訳ありません……………バレンタインデーのお返しです」

そう言って一つの白いプレゼント包装の箱を渡される。

恐る恐る開けるとそこには綺麗に型抜きされた小さなホワイトチョコレートが姿を現す。

「え…………でも…………」

「頑張つて手作りしたんですよ…………」

私はそのチョコレートを一口、パクツと食べる。

……………!!

美味しい……………ほっぺた落ちる〜!

私は飛び切りの笑顔で食べてしまう。

「喜んでくれたようで何よりです……………!」

私はチョコレートを飲み込んだ後

「でも……………奏、今日のこと忘れてたじゃない!」

「え、俺そんなこと言いましたっけ?」

「私が日にち聞いた時、今日が14日だつてこと忘れてたよね?!」

「ああ、あれ思いつきり演技ですけどね……………まさか真に受けるとは……………」

「……………へ?」

つてことは……………私騙されたの?!

そう考えたらどつと疲れが出てきた気がする。

「……………何よう……………」

「ハハハ……………まあ、無事に渡せて何より……………ですね……………」

私は気持ちを切り替え奏への感謝を伝える。

「……………ありがとう……………奏……………大好きだよ……………」

「……………ええ……………俺も大好きです……………」

こうして私達は綺麗なイルミネーションの中で抱き合う。

いつものハグとは違い、奏の温かさ全てが伝わってきた。

目を見てもわかる。右目は見えないが左目だけでも……………

そうしてまた……………私達はキスをする。

唇を離れた後、奏から思ってもいなかった一言が放たれる。

「結婚……………しましよう……………」

多分、奏と関わってから最大の驚きだった。

もちろん、私が理る理由も無く

ただ笑顔で……………奏と……………主従から夫婦へ……………

「……………はい！」

奏と結婚してから2ヶ月。

夫婦という立場にはなつたが、本当に関係が変わらなかつた。

奏は私のことをまだ天子様と呼ぶ。

執事として働いている。

ちなみに子供はまだ産んでない。

奏と話し合った結果。

「2人とも長生きできるし、今は俺と天子様の2人の時間が欲しい……………」

と、平気な顔で言われたもんでこちとら断ることは出来なかった。

「お待たせ致しました天子様。紅茶とクッキーでございます」

「あら、ありがと、奏……………あなたもどうぞ？」

私は夜のバルコニーで奏をお茶をしようとした。

「……………では、お言葉に甘えて……………」

奏は隣に座り、自分の紅茶を入れる。

「もう2ヶ月……………ですわ……………」

「夫婦になつたって感覚無いわ……………」

「あ、それ俺も思いました……………」

私達は顔を見合い、笑う。

「まあ、私達だし……………ゆつくりでいいわよね……………」

「俺は……………一生天子様について行きますよ……………」

クスクスと笑う奏。

私はそれが愛らしく思えた。

「……………奏は……………さ……………私というて楽しい？」

奏は私といていいのか……………唐突に自信が無くなってきた。

「……………今更何を言っているんですか……………楽しくなかつたらもうこんな所にいませんよ……………」

「そう……………よね……………」

「俺は天子様に恋をしました。それだけでも十分……………ですよね……………」

短い言葉なのに私はかなりの安心感があった。

ああ……………やっぱり私……………この人が好きなんだ……………

初めて自分の心と向き合うことが出来た。

「愛してますよ……………天子様……………」

「ありがとう……………奏……………」

私は奏を愛し、守り抜くと誓った。

俺は天子様を愛し、守り抜くと誓った。

二人の愛はまるで緋色に光る「非想の剣」のように綺麗だった……………

閉ざした心、開いた恋

過去を乗り越えたそ

の先へ

1話

無意識との出会い

幻想郷に着いてから3時間が経ち、咲名千里に謎の女の子が入ったり妖怪に出会ったりと非現実的なことばかり起きている。

「奏くん！元氣だして！」

千里という女の子に励まされる。

「見ず知らずの奴にそんな事言われてもな……」

俺は背骨を曲げながら歩く。

しかし、千里が背中を叩いて矯正する。

「いつ?!」

「シヤンとしなさい！男でしょ！」

「千里……………あのなあ……………」

わんやわんやと言ひ合ひをしていると一つの大きな穴を見つける。

「な、なんだ………これ？」

その穴は何かを吸い込んでいるかのようにも見える。すると千里が隣でにやつと笑いこちらを見る。

「ほら、奏くん！言いたいことわかるよね？」

残念なことに俺は一瞬でそれを察してしまった。

「やだ！やだ！俺死ぬぞ?!」

と、子供みたいに駄々をこねる。

「だーめ☆」

トン。と背中に感触があり体重が前に出る。

そして俺は大穴に落ちた。

「うおわああああああ?!」

大声をあげ、内蔵が口から出てきそうな不快感を感じる中、千里の声が聞こえた。

「奏くん！肩甲骨に意識を集中して！自分が飛ぶイメージを持つのに！」

「は、はあ?!何言ってるんだよお前!!」

「いいからやってみなさい！」

意識を集中！

俺はとにかく背中に意識を寄せていた。

「ウオオオ……………飛べえ……………」

俺と地面まで残り5 m程の所で俺の背中に何かが出た気がした。

……………翼だ。

こうして俺は危機一髪で飛ぶことが出来た。

「あつぶねえ……………」

すると後からふよふよと千里が降りてくる。

「お疲れ！奏くん」

俺は千里をキッと睨みつける。

「お前え……………！」

しかし、千里は全く動じずにこやかな笑顔で言う。

「だってこうでもしないと奏くん飛ぶ練習しないでしょ？」

確かにそうだ……………

「他にやり方あっただろ……………」

「ま、過去のことを気にしてもしょうがない！」

さてと……………」

俺はその地下一帯を見渡す。

「(ハハ)……………どハハ？」

俺は千里に問う。

しかし、千里も困った顔で…

「……………最近の幻想郷は知らないわ……………」

さっきの大穴から外に出ようとするが……………

あれ?……………どこだっけ?

そう、完全にあの大穴は閉じていたのだ。

「お、おいおい……………」

「とりあえず奏くん。少し歩いてみようか……………」

「そ、そうだな……………」

しばらく歩くと商店街らしいものが見えてくる。

綺麗な町並みだ。酒でも飲んでたらしい気分になりそうだ。酒飲まないけど。

そのままフラフラ歩いていると一つの大きな屋敷が姿を現した。

「……………ここに入って色々この事情を聞か……………」

その大きな屋敷の門に入ろうとしたその瞬間、

「……………誰?」

「?!」

俺と千里は体を強ばらせ、声の主を探す。

後ろを振り返ると

緑色の透き通った髪。

黄色と緑の服。

千里と同じくらいの華奢な体。

背中から紐のようなものが出ていてその先には閉じた目玉？のようなものがある。

とにかく可愛い。ベリーキュート！

「……………君は？」

「私は古明地こいし。あなた達は？」

「俺は愛原奏。幻想郷に来たばっかなんだ」

「私は咲名千里。刀の分身だよ」

千里の衝撃発言にも驚かずニヤニヤした笑顔で俺らに言う。

「へえー！幻想入りした人なんだ！じゃ住むとこないの？」

「あ、ああ、まあ…………」

するとこいしちゃんは更にニッコリした笑顔で

「じゃあ地霊殿に来てよ！もつと賑やかになって欲しいしー」

確かに俺も千里も住むところがなく、今夜は野宿を覚悟していた。

そこにこいしちゃんが話しかけてきてくれたのは助かった。

俺は千里に目を向け

「じゃあお言葉に甘えようかな。千里もそれでいいよな？」

「そうね。どーせこのままだと野宿だし、お願いしようかしら？」

「じゃあ決まりだね！よろしく。奏！千里！こっち着いてきてー」

そう言つてテクテクと歩いていくこいしちゃん。

歩き方も可愛いな……………

そんなことを思っているうちに地霊殿の内部に入り、階段を上がると一つの大きな扉が目の前に現れる。

「ささ、二人とも入って！」

こいしちゃんに連れられ俺と千里は中に入る。

するとそこには…………

紫色のショートヘア。

青の服と薄ピンクのスカート。

背はこいしちゃんより少し高めだが体はまだまだ子供だ。

そしてそのこいしちゃんと同じように胸に目玉があるがこいしちゃんの目とは対照的に見開いている。

「あら、お客さんかしら？」

書齋の机にあつた本から目を離し、俺らの方を見る。

「うん！客というよりここにこの2人を住まわせてほしいんだ。お姉ちゃん」

あ、こいしちゃんのお姉さんか……………

「……………部屋は空いてるけど……………どうして？」

「止まるところなくて困つてたから！」

こいしちゃんのお姉さんは少し考えて……………

「……………まあいいわよ……………私は古明地さとり。ここ地霊殿の主をしているわ……………よろしく」

そうして一連の自己紹介を終え、

「お空、お燐」

「はい、お呼びですかさとり様」

猫耳の女性と大きな黒翼を持つ女性の2人がドアから入ってきた。

「この2人を空き部屋へ」

「了解です。さ、こちらへ…」

俺は猫耳さんに連れられ廊下を歩く。

「あたいは火焰猫燐。お燐って呼んでくれていいよ。よろしくね、奏と千里。で、こっちは霊鳥路空」

「ああ、よろしくな」

そうして空き部屋へつく。

なかなか広く、住みやすそうだった。

「じゃ、千里はこっち」

「はいはい、じゃ奏くん、後でねー」

お隣に連れられ千里はヒラヒラと手を振りながら隣部屋へ行く。

「ふうー……………」

俺はベッドに寝転がり、天井を見る。

「幻想入り……………か……………」

非現実的なことが起き、混乱していたがどうやらここで生活出来るみたいだ。

と、そんなことを考えていると

「やっほー☆」

「うお!!」

こいしちゃんが目の前に来た。

俺はこいしちゃんがドアを開けたことにすら気づかなかったのか？

「こ、こいしちゃん……………いつ来たの？」

「幻想入り……………か……………」の所から!

「結構前に来てたのに俺気づかなかったよ……………」

「そりゃね！私無意識操れるから！」

こいしちゃんが胸を張って言う。

無意識ってなんだ？

「無意識……………ってどういうこと？」

「人に感じられにくくなるんだ！すごいでしょ！」

えっへん！と、鼻を鳴らす。

かあわあいいなあー

おっと……………危ない危ない……………顔がにやけちやう……………

「……………さとりは目開いてるのにこいしちゃんは閉じてるんだね……………」

そう聞くと一瞬にしてこいしちゃんの顔が暗くなる。

「まあ……………色々だね……………」

「あ、ごめん……………聞いちゃいけないかったよね……………」

こいしちゃんに謝罪する。

「いいよいいよー」

それで、その長い包丁は何？」

と、切り替えて話しかける。

「ああ、これは包丁じゃなくて

1時間後。

今は夜中の2時。

そういや、俺がここに来たの夜中なんだっけ？

こいしちゃんとの話が盛り上がりすぎて時間を忘れてしまっていた。

「あ、いけない！もうこんな時間？お姉ちゃんに怒られちゃう！」

うああ！と頭を抱えるこいしちゃん。

すると俺の方を向いて

「ごめんね奏！すっかり話し込んでしまった！おやすみなさい！」

小走りで俺の部屋を出ていく。

すると唐突に俺に三大欲求の一つの眠気が襲ってきた。

ふらふらする足取りでベッドへ向かう。

ようやくたどり着き俺は仰向けに倒れる。

「地霊殿……………ね……………」

とりあえず明日考えよう………

そう思った瞬間、俺の瞼が落ちた。

こうして俺は古明地こいしと出会った。

2 話

古明地の過去

翌朝。

俺はさどりに呼び出され、書齋にいる。

「さて、奏さん……………奏……………でいいわよね？」

「ああ」

てか、こいしちゃんにはちゃん付けしてんのにさどりは呼び捨てでいいのかな……………
そう俺が考えると

「問題ないわ、別に気にしないわよ」

「あ、ああ、それならいいが……………え？」

今普通に聞き流しそうになった……………

俺今喋ったっけな？

「私は人の心が読めるの。あなたにもあるでしょ？ 「程度の能力」。」

「……………じゃあお前は心を読むエスパーってことか……………じゃあこいしは？ その逆って
事か？」

俺はそこまで驚かなかった。

だってこの世界には刀と一心同体の奴や、人に感じられなくなる少女がいるのだから心が読める奴がいたところでそこまで驚きではない。

「……………話す少し長くなるんだけど……………いいかしら？」

「あ、ああ、頼む」

そう言うときとりが口を開く。

「元々、私達は地上に住んでいる「覚り妖怪」だったのよ…」

「覚り妖怪ってのは第三の目、つまり「覚りの目」を持つ妖怪のことか……………」

「そう、その時はまだこいしにも私と同じ能力が宿っていたの、でも私は人里などでたくさんの方の心を読み、その人たちの傷口に塩を塗ることを無意識に繰り返していたの……………」

さとの拳が強く握られる。

「それから私達覚り妖怪は人間やほかの妖怪から嫌われていつてね……………閻魔様にお願いをしてこの地底、「旧地獄」の管理を行うことになったの……………人々からは嫌われていたけど、動物からは妙に好かれちゃって……………ほら、お空やお燐も動物の妖怪だからね……………」

「そうか……………だから地霊殿には動物がたくさん……………」

「そう、それでね……………」

さとりの顔がもつと暗くなる。

「お、おい、別に無理して話さなくても……………」

俺がさとりに近づくと首を横に振り

「いいえ……………ここに住む以上、知って欲しいことだから……………」

そうやって話を進める。

「こいしは……………私の人々の心を読んで嫌われることを知っているから……………自ら
覚りの目を……………閉じたのよ……………」

「閉じた……………? どうやって……………」

「……………ナイフで……………」

「……………っ!!」

俺の背中に寒気が走った。

アレが覚りの目だとするとあの管は体に繋がっている。

だから、あれも体の一部だってことだ。

それをナイフで刺すってことは……………自分の目を一つ潰すのと一緒だ……………

「私が人の心を弄ぶようなことをしたから……………こいしが痛い目見たの……………」

さとりの目から少量の涙が流れる。

「きつと……………今でもこいしは私のことを恨み続けてる……………」

「……………それはこいしちゃんの心を読んだのか？」

「いいえ……………こいしは無意識を操っているから心が読めないのよ……………」

「……………お前を恨んでいるなら……………こいしちゃんはもうここにはいないと思うけどな……………」

「……………え？」

「来たばつかの奴が言っているいいことじゃないけど……………今でもこうやってこの地霊殿で生活している……………この幻想郷だったら住むところなんてすぐに見つかる……………でもこいしちゃんはまだここにいるんだ……………」

「……………そう、ね……………私……………何言ってるんだろ……………ごめんなさい……………奏……………今は一人にしてくれるかしら？」

「ああ……………」

こうして俺は踵を返し、ドアノブに手をかける。

そのドアを開け廊下を見渡す。

すると隣にこいしちゃんが下を向いて壁に寄りかかっていた。

「……………こいしちゃん？」

「へ？あー奏？どうしたの？」

こいしちゃんの目尻が少し赤い。

泣いていたのかな

「……………さとりの話聞いてた？」

「……………うん……………」

「こいしちゃんはさ……………さとりが嫌い？」

「そんな訳ない！大好きだよ！もちろん、お空やお燐、そして奏や千里も！」

俺は心が読めないからわからないがこいしちゃんの言っていることは本心だろう

……………

俺はそれを聞いて少し安堵の息を吐く。

「……………そっか……………ごめんね……………来たばっかの部外者がこんなに2人の過去に首

を突っ込んでやって……………」

そう言つてこいしちゃんの頭に手を乗せる。

こいしちゃんの顔を明るくなり

「ううん！奏も千里ももう私たちの家族なんだから！」

「……………ありがとう……………さて、俺はちよつと幻想郷を散歩しに行こうかな……………」

ぐーつと背伸びをして玄関に向かう。

「うん！行つてらっしゃい！」

ヒラヒラと手を振るこいしちゃん。

やっぱり可愛いな。

俺は自室に戻り護身用に咲名千里を持つ。

「おおよよ？どこに行くのかな奏くん？」

「ああ、ちよつくら散歩に……………」

「そつか！じゃあ私は刀の中で寝てるね……………」

ふああと大きなあくびをし、千里は刀の中に消える。

「さて、行くか……………」

30分後。

俺は翼を使い、地上に出て人里を歩く。

「あら、見ない顔ね」

と、背後から声をかけられる。

振り向くと

紅白の服。

赤いリボン。

黒髪ロング。

とゆーか脇。脇出てるぞ

「……………誰ですか？」

「私は博麗霊夢。博麗神社の巫女をやっているわ…」

そういや、さとりから少し聞いた気がする。

一時間前。

「この幻想郷は外の世界から「結界」によって完全に隔離されてるの。それが「博麗大結界」。

博麗の巫女。博麗霊夢さんの力によってこの幻想郷のバランスが保たれているのよ」

「ああ、あなたが博麗霊夢さんですか」

「霊夢でいいわよ……………」

「ああ、分かった……………それで、何か用か？」

「いいえ？ちよつと外来人がまた来たと文々。新聞に載つててね、あなた……………妖怪よね？」

と、見透かされたように言う。

「……………ま、まあ、一応……………どうして分かつたんだ？」

「妖力がほかの妖怪より100倍はあるわね……………なんの妖怪？」

「ああ、「龍人」だったと思う」

すると霊夢は目を見開き、

「あなた……………名前は？」

「愛原 奏だけど……………」

「……………嘘でしょ……………あの「常闇の妖怪」があなたなの……………」

ん？常闇の妖怪？またわからない単語が出てきた。

霊夢は一つ咳払いをし

「まあ、害のある妖怪じゃないから……………これからもよろしくね……………」

そう言つて握手をする。

そうして霊夢は飛んでいってしまった。

「常闇の妖怪……………つてなんだ……………」

俺は地霊殿に帰り、さとり自分に自分の種族と常闇の妖怪のことについて聞いた。

「……………あなた達龍人はもともと夜行性でね……………夜になると幻想郷最強の博麗やその他の妖怪、月の住民達が対抗しても敵わなかったのよ……………まあ、龍人は善の妖怪だから大丈夫よ……………」

「そ、そうなのか……………」

俺の先祖がまさかそんなにすごいヤツだったなんて……………

俺はそれを千里に話すと

「え？知ってたわよ？」

「なんで教えてくれなかったんだよ……………」

俺はそのまま今日を終えた。

明日、千里から色々話を聞こう……………

今度は千里に話を聞くのか……………

少し憂鬱になりながらも俺は瞼を閉じ、眠りに入った。

3話

「愛原」が残した妖刀の力

翌朝。

地霊殿に来て三日目だ。

「おい、千里、起きろー」

眠い目を擦りながら千里が目を開ける。

「んあ？何いー……」

「朝飯だだよ、早く行こうぜ……」

「はあーい……」

食堂に行くともうさとりやこいしちゃんが席に座っていた。

「おはよ！奏、千里」

「ん、おはよこいしちゃん。じゃ、いただきます」

軽く挨拶を済ませ、千里に聞く。

「なあ、千里。今日聞こうと思ったんだけど……」

「ん、何かな？」

「「常闇の妖怪」って知ってるか？」

昨日、霊夢から聞いた事を話す。

「……………「常闇の妖怪」って言うのはね……………」

あなた達「愛原」とそのライバル、「倉見」の因縁の戦いは知っているわよね？」
今度は千里が俺に聞いてきた。

「ああ、初日にお前が教えてくれた……………」

「その戦いは夜中まで続いてね、その中で眩い光を放つ最強の妖怪がいたの」

「それが……………俺のご先祖さまってことか……………」

「そういうこと、まあよっぽどのことがない限り「常闇の妖怪」は戦わなかったから世間では善の妖怪って呼ばれているわ……………」

なるほどな……………」

俺は納得しながら今までの物事を整理する。

まず、「愛原」と「倉見」は、もともとこの幻想郷ではライバル同士だった。

そして「愛原」と「倉見」の最終決戦。

「暗黒戦争」で「愛原」の血を引く者が何らかの理由で覚醒し、「倉見」の者達を次々と倒し、3000人を1人で片付けたという……………」

俺が考察をしていると、こいしちゃんが声をかけてきた。

「ねえねえ、千里。あの長い包丁のこと教えてよ！」

すると千里は呆れた顔で

「いやだからあれは包丁じゃなくて刀って言うの……………」

「かたな……………？……………なんか変だね！」

「これは真面目に言っているのか？」

「刀を包丁を言える方がよっぽど変だけど……………」

するとさとりが

「ごめんなさいね……………この子刀を見たことが無いのよ……………」

「そうなのか……………千里。こいしちゃんに刀のこと色々教えてやりな」

「……………ちゃんと伝わる気がしないから却下で」

「やった！千里！その包丁の事教えてね！詳しく！」

「え、いやだから嫌だって……………」

「拒否権なーし☆」

こいしちゃんと千里の会話はいつ聞いても面白く。

聞いているこつちが吹いてしまう。

「え、いやいや！終わる気がしないのおお……………」

こいしちゃんに腕を引つ張られ連れていかれる千里に手を振る。千里はこちらを見て「後で覚えとけ」みたいな顔をしている。

おお、怖い怖い。

俺は気にせず食事を進め、食べ終わり橋を置く。

するときとりが口を開いた。

「奏は弾幕ごっこした事ある？」

「名前は知ってるけど……………そういや幻想郷に来てまだ一回も戦闘してないな……………」

幻想郷に来たばかりの時は戦闘する覚悟もしていたが、最初に会ったのがこいしちゃんだったため穏便に事が進んだ。

「じゃあ今日は弾幕ごっこをしましょうか。私はお仕事があるから……………お空、お燐」

二人の名を呼ぶと

「はい、お呼びでしようか？」

背後から2人がドアから入ってきた。

「今日、奏の弾幕ごっこの訓練を手伝ってあげなさい」

「分かりました。奏、お空、行こう」

俺はお燐に連れられ、地霊殿の外に出る。

「奏はさ、刀以外に何が使えるの？」

「奏の「能力」見たいな！」

と、2人にせがまれたので俺は仕方なく自分の「能力」を一部を見せる。

とりあえず軽いのでいいか……………

そう思った俺は刀に集中を寄せた。

すると咲名千里の刀身が銀色に光る。

「……………これは何？」

「俺の能力は「現象を操る程度の能力」だ。こうやって色々な現象を使うことが出来るんだ。今のこれなら凍結現象の一つだな……………」

と、千里と2人で研究したことを話す。

「……………またなかなかすごい能力だね……………」

「すごいよ……………私の核とどっちが強いかな！」

「威力の違いが桁違いだ……………」

「……………さあ、じゃあ始めましょうか」

苦笑いをするお燐が弾幕ごっこの説明を始める。

「この弾幕ごっことって言うのはね。

この幻想郷での支配を無くす……………つまり完全実力主義の否定を意味する……………よけられない弾幕を張ってはダメ。その弾幕の美しさに意味があるんだ……………」

「……………つまり、その弾幕ごっこのおかげでこの世界の均衡が保たれているのか……………」

俺は顎に手を置き、お燐に言う。

「そーゆーこと。じゃ早速見せるよ。お空。お願い」

「おっけーい！任しといて！」

元氣よく挨拶したあと何かの詠唱を始める。

「行つくよー！」「サブタレイニアンサン」！

そう唱え、お空は右腕の「第三の足」から巨大な核の塊が出てきた。

「ちよっ?!お空?!なんでそんな大技?!」

お空とお燐の会話を聞いているうちに俺の体がお空の真上に出来た巨大な核に引き寄せられていた。

な、なんだこれ?!吸い込まれるっ!

俺は体を仰け反らせ、その巨大核から離れようとする。

「うおおっ……………!」

「奏!頑張つて避けてみよー!」

お空にすっごい笑顔で言われる。

あまりの大技だったためか、こいしちゃんや千里、さとりや旧地獄の住民達が野次馬に来ていた。

「なんだなんだ?」「地霊殿を襲撃しに来たのか?」と、言いたい放題だ。

「くっそ……………どうにかするしか……………」

核に効く現象の能力などはない、刀だけでどうにかするか……………

俺は引き寄せられながらも刀を構える。

意識を集中させ……………

「はあああー！」

咲名千里を縦に振る。

びびってしまい斬る瞬間目をつぶってしまった。

しかし、確かに斬る感触もあった、それに最高の手応えだ。

目を開けるとお空の核が真つ二つに割れその場で小さい爆発を繰り返していた。

周りの人を見渡すと全員が驚きの顔と声……………

「あいつ何者だ……………?」「お空ちゃんの核を一撃で……………」などなど……………

それに核を打った本人も

「す、すごいよ奏！まさか斬るとは思わなかったよ！」

お空がびよんびよんと跳ね俺を賞賛する。

するとこいしちゃんと千里が来て

「奏！あなたって本当に何者?!すごいよ！かつこよかった！」

こいしちゃんにも思いっきり褒められる。

どうしようにやけが止まんない。

「本当にすごいね奏くん……………」

するとお燐が俺の方に寄ってきて

「あなたに弾幕を教える必要無さそうだね……………」

俺はその後自室に戻り、咲名千里を見つめる。

確かに斬れたのは嬉しかった……………」

それにあの時は千里もいなかったから少し弱体化していたはずだ……………」

「これが……………」「愛原」が残した妖刀の力……………」

俺は妖しく光る咲名千里の刀身をずっと見つめていた。

4話

謎の地霊殿襲撃

私たちがいる地霊殿に新たな家族が2人が入った。

愛原 奏と咲名 千里。

最初は少し遠慮しながら話そうと思ったが、彼らが予想以上面白く、すぐに馴染むことが出来た。

「こいしちゃん、ご飯出来たよー」

ほら、こんな感じに。

「こいしちゃん」って呼ばれるのも初めてだし悪い気はしない、むしろ新鮮な気分だ。

私達古明地姉妹は昔から気味悪がられ、その上私の独断でお姉ちゃんに迷惑もかけた。

私は何かその償いをしたいと考えているのだが……………

お姉ちゃんには「そんなこと気にしなくていいわよ」って言われる。お姉ちゃんがそう言うから私も諦めていた。

奏と千里は妖怪の中で初めて私たちを怖がらなかつた人だ。

私はそれだけでも嬉しくて、つい家族にしたいとお姉ちゃんに言ってしまった。で

も、後悔はしていない。

「こいしちゃん？ご飯できたよ？」

奏が2度目の呼びかけをする。

自室のドアをゆつくりと開け、私の方を見る。

「あ、ごめんごめん！今行くね！」

「うん、大丈夫？なんか考え事してるみたいだったけど……………」

「大丈夫！気にしないで！さ、早く食べよ！」

私は奏の背中を押して食堂へ向かう。

「そっさいえさ、奏」

「ん？」

「なんで私のことだけ「こいしちゃん」って呼ぶの？お姉ちゃんは呼び捨てなのに……………」

すると奏は上を向いて考え

「性格の問題……………かな……………ほら、さとりって結構大人びた性格してるからつい子供とは思えなくて……………でもこいしちゃんは明るくて無邪気な感じだからついちゃん付けで呼んじゃうんだよね……………」

私は頬を膨らませ

「私は子供なんかじゃないもん！」

奏の体をポカポカと殴る。

「ハハハ、ごめんごめん」

私はこんな感じの何気ない会話が好きだ。

お姉ちゃんだと真面目に返されて面白くない。

でも奏や千里だとこうやってネタにしてくれるから会話がさらに盛り上がる。

別にお姉ちゃんの話が面白くないって言えば嘘になるけどさ……………

食堂に向かうとまだお姉ちゃんやお空達は来ていないようだ。

「あれ、お隣達はまだ来てないんだ……………いつも一番なのに……………」

「ああ、そういうえばあいつらは地底の奥の方で大きな音がしたから間欠泉の方に行ってるよ」

「あ、そうなんだ」

そのカンケツセンとか言うやつはよく分からないけど……………

「じゃあ後はお姉ちゃんと千里だけだね」

と、10分くらい待った。

「遅いね……………」

幾ら何でも遅すぎる。

私は少し胸騒ぎがしていたが

「ちよつと見てくるよ」

と、私を遮るかのように奏が席を立ち、お姉ちゃんの手を引いて書齋へ向かう。奏が書齋へ向かってから1分後。

帰ってくるがお姉ちゃんは来なかった。

「書齋にはいなかったよ」

「え、じゃあどこに」

刹那。地霊殿の隣で爆発音。

私と奏はその大音量に耳を塞ぐ。

「な、なんだ?!」

奏が窓を開け、外を見る。

すると地霊殿の門から100m程前にお燐やお空、お姉ちゃんがいた。

その前に一人いるようだが………?

「いいしちゃん!行こう!」

いつの間にか咲名千里を握っていた奏に手を引かれた。

どうやら千里は刀の中で眠っていたようだ。
私達は外に出てお姉ちゃん達の方に向かう。

「ヤとり!!」

奏が叫び、お姉ちゃんの隣に行く。

「な、何があつたの?」

私がお姉ちゃんに聞くと

「……………前を見なさい……………」

私と奏は同時に前を見る。

そこには……………「人のようではない何か」がいた……………

体の原型を保っておらず。所々真つ黒な粘液が体にへばりついている。

まるでゾンビみたいだ……………

顔も死んでおり、人間の心はもう無いくらい……………

「……………こいつの仕業か?」

「奏……………! 気をつけて……………こいつ…私の核を手で防いだの……………」

「はあ?!」

さっきの大爆発はお空の核なのか……………

それにしても……………お空の核を手で受け止めるなんて……………

私たちが戦闘態勢に入った瞬間、お姉ちゃんの横を「何か」が通り過ぎた。

切り替えてもう1度前を見るともうそこにはあいつはいなかった。

辺りを見渡し、あいつを探す。

探している最中、隣にいたお姉ちゃんの様子がおかしかったことに気がついた。

「お、お姉ちゃん……………う……………どうしたの……………」

「ハ、ハ……………」

顔を覗き込むと、かなり苦しそうな顔をしていた。

呼吸も荒く、吐血している。

「お姉ちゃん?!大丈夫?!」

私はお姉ちゃんの体を見る。

お腹に一つポツカリと穴が空いており、残酷な程にお姉ちゃんの臓器が少し見えてい
る。

肩を組み、お姉ちゃんを地霊殿内部へ連れていこうとする。

幸い、意識があつた。

「奏、千里!あいつをお願い!」

お空は永琳を呼んできて!お燐は私と一緒にお姉ちゃんに肩を貸して!」

「任せろ!」

「任せて！」

奏と千里の声。

お空は、返事もせず猛スピードで地上に向かう。

お燐も走ってお姉ちゃんに近寄り、持ち上げる。

「大丈夫ですか?! さとり様?!」

今にも泣きそうな顔で言う。

私はこの時悲しみなど視野に入れてなかった。

とりあえずお姉ちゃんを助ける。その一心であいつから逃げて行つた。

近くにあった空き部屋のベッドにお姉ちゃんを寝かせ、私は立ち上がる。

「お燐。お姉ちゃんをお願い。私は奏達の援護に行つてくる！」

我ながら少し落ち着いていたと思う。

どうしてこんなに冷静なんだろ………? ?

走つて外に出た。

奏達を見つめ助けようとする。

「来るな! 巻き込まれる!」

と、奏に手で制される。

すると奏の目の前にいたあいつが腕から黒い粘液を伸ばし、奏に襲いかかる。

「千里！行くぞー！」

「ええー！」

黒い粘液が次々と奏に向かっていく。

しかし奏はそれを咲名千里一本で全てを切り落とす。

「すごい……………」

私は感嘆の声を漏らし、ただそこに突っ立っているだけだった。

しばらくするとお空が永琳を連れてきた。

「…………永琳！こつち！お姉ちゃんを助けてー！」

私は徐々に冷静さを失っていった

「言われなくても……………」

それとは対照的に永琳とお空は落ち着いていた。

「こいし様、大丈夫ですか？」

「私は大丈夫……………」

「でも、すごい顔色悪いですよ……………」

お空にそう言われるが気持ち悪いとかそういうのは無かった。

「ほんとに大丈夫だから！」

「そうですか……………」

「お空はお姉ちゃんのところに行ってあげて！私はいいつを倒す！」
未だ戦闘中の2人に加勢する。

少し怪我を負っていた奏に昔お姉ちゃんから教えてもらった回復魔法を掛ける。

「……！サンキューなこいしちゃん！さて、千里！畳み掛けるぞ！」

「ええ！」

すると咲名千里の刀身が黄色に光る。

「スペルカード！ 光符「ライトニングアーク」！」

奏が閃光を撒き散らしながらアイツに特攻する。

そして一閃、咲名千里を縦に振り下ろした。

雷電を纏っていたので、あいつは痺れ、そのまま体ごと爆発した。

「……………ふう……………久しぶりの実戦だな……………」

「お疲れ、奏くん……………」

私は二人に駆け寄り、

「お疲れ様！2人とも！」

すると奏が軽く微笑み

「こいしちゃんも、あの時に回復魔法掛けてくれてありがとう……………」

面と面を向かって礼を言われるのは久しぶりだったので

少し赤面し、目をそらして

「ど、どういたしまして……………」

と奏の前で初めて照れてしまった。

私は顔を横に振り、気持ち切り替える。

「さあ！お姉ちゃんのところに行きましよう！」

3人で地霊殿の中に入り、空き部屋へ入る。

するとお姉ちゃんは眠っていた。

どうやら永琳が治療してくれたようだ。

「しばらくは安静ね…………臓器もかなり抉られていくくら妖怪とはいえこの怪我だと回

復には時間がかかるわ」

落ち着き払った声で永琳が言う。

「そう、ありがとう永琳」

軽く礼を言うと永琳は立ち上がり、私の手の上になにか乗せる。

「さどりの傷口からこんな物が出てきたわ」

それは一つの針。

裁縫で使うような…

しかしそれは普通の針ではなく、尖っている方の逆側には小さな目玉が付いていた。

「この針にはなんの効果もない、毒針でもなければ麻痺針でもない。ただの針よ……これはなんの意味があったのかしら……でも、さつきさとりが刺された時に故意的に使ったものね。あんな綺麗に傷口に刺さらないもの……」

どうしてただの針を……

私はこの目玉をマジマジと見ていた。

するとその刹那。

その目玉から眩い光が放たれた。

「……?!」

慌てて目を瞑り、光が収まるのを待つ。

数秒で収まった。

目を開けると落ちた針の横に1通の手紙が落ちていた。

「……なんだろう？これ……」

私はその手紙を取って中身を読む

「……………っ!!……………嘘……………でしょ……………」

私はその手紙を読んで背筋に今までにない寒気が走った。

5 話

不知の謎、立ち向かう過去

「何よ……………これ……………」

私はその手紙の内容を読んで体が震えだした。

古明地の者へ。

私達は貴様ら2人を永久に恨み続けている。

心を読み、私達の精神を崩した。

今更その目を潰しても無駄だ。

もう1度言う。私達は古明地姉妹を恨み、憎み続ける。

不知^{しらす}。

「な、なんだこれ……………」

隣で読んでいた奏が驚きの声をあげる。

「……不知……聞いたことないな……」

私はそのまま奏の方に歩み寄り、体重を奏に預けた。

「怖い……怖いよ……」

私が奏の側で震える。

本当にこの時は恐怖心がほぼ10割だった。

そんな私を落ち着かせてくれるように奏は背中に腕を回し、私を優しく抱きしめてくれた。

「大丈夫……俺達を守るよ……こいしちゃん……」

その優しく包み込むような声音に私は少し安心してしまう。

奏を強く抱き締めて私はすすり泣く。

それを奏はいつまでも抱きしめていた。

それから10分後。

「大丈夫……？こいしちゃん？」

「うん……大丈夫……それよりもごめん。奏の服が……」

私が奏に密着させたまま泣いていたので私の涙で奏の服が濡れてしまった。

「ああ、全然大丈夫だよ。洗えばいいしね……」

奏は私に優しく微笑んだ。

私も微笑み返し、気持ちを切り替える。

「奏、こいし、話の途中悪いけど、今はこの不知について考えましょう」

と千里が口を挟む。

永琳も帰り、この場にはお空とお燐、私と奏、千里。そして、今も尚昏睡状態のお姉ちゃん。

この中で手紙の内容を紐解いていく。

「多分……不知って言うのは………あつ」

千里が話している途中に何かを思い出した。

「な、なんか分かったのか？」

「不知………不確かではあるんだけど「不知」って言うのは地上の人里を支配しようとした偽善の妖怪のことだと思う。その時ちょうど居合わせた妖怪によって全員が情緒不安定になり、その後の攻撃によって滅びたらしいんだけど………」

千里が一つ一つわかりやすく説明する。

「……もしさっきのやつがその不知だったら辻褃が合うな」

「確かに……でもどうして今頃？攻め時ならいくらでもあつたよ……？それに……お姉ちゃんを殺すこともあの時いくらでも出来たはず……」

と、真面目に私も考えていると

お空や、お燐、奏、千里など全員が何故か私の方を見て驚いていた。

「戦闘の時も思っていたんですけど……こいし様って結構機転の効く方なんですネ」

「確かに、俺もさつきこいしちゃんの判断で助けられたし……」

「今の解説も説得力が違うしね……」

と、今までに無いくらいいべた褒めされる。

嫌な気分ではないが少し照れる。

「そ、そう？それはうれしいな……」

話が逸れたので私自らが軌道修正する。

「んで、話戻すけど……不知はどうしてお姉ちゃんを殺さなかったんだろ……」

「……今回の襲撃はさとりを殺すことが目的じゃなかったんじゃないのか？」

「そう考えるのが無難ね……」

「そもそも……こいしちゃん、不知って知ってる？」

奏が私に問う。

「不知……聞いたことはあるけど……そういうのはお姉ちゃんの方が詳しいかな

「……………」

「そっか……………まあ、とりあえず手がかりがないんじゃないや進まない。さとり様が起きるまで待とうよ」

お隣が進言する。

「そうだね……………今は落ち着こうか……………」

そう言つて全員が解散する。

私は何故かお姉ちゃんのそばを離れたくなかった。

誰もいなくなり、私と寝ているお姉ちゃんの二人になった。

「……………お姉ちゃん……………今は奏達がいるからね……………」

もちろん、返事はない。

こうして見ると、お姉ちゃんは本当に生きているのかも不安になる。

これから……………不知が私達古明地姉妹を殺しにくる。

そう考えると、ますますお姉ちゃんのそばを離れたくなかった。

「……………やっぱり……………怖いな……………」

少し涙を流す。

すると部屋のドアが静かに開いた。

ドアの方を見ると奏がパーカーを脱いだ状態で入ってきた。

奏は少し戸惑った顔で

「やっぱり……………怖い?」

「……………うん……………」

私は本音を伝える。

「……………そうだよね……………妖怪とはいえ、まだこいしちゃんやさとりは子供。まあ、俺もまだ子供だけ……………」

「……………奏は……………こういう時どうしたらいい?お姉ちゃんも倒れて……………やっぱり私ひとり立ち向かわなきやいけないの?」

少し力を入れて言葉にする。

奏はベッドに腰掛け、話し始める。

「……………過去って言うのはそういうものだよ……………時には一人で立ち向かわなきやいけない……………俺にはそんなにひどい過去があつた訳じゃないから分からないけど……………」

と、言葉続ける。

「過去は……………一人で立ち向かわなきやいけない。でも、いま現在は俺達がいる。不知と戦うのだって俺や千里。お空やお燐がいるだろ……………」

まるで私とお姉ちゃんを同時に包むような声音で言う。

「奏……………」

「それに……………その過去も……………こいしちゃんとさとの2人の問題だ……………2人でゆっくり克服していけばいい……………過去も必ずしも1人とは限らないからね……………」

奏の言葉にはいつも助けられる。

これが優しさって言うものなのかな……………

私は改めて奏の凄さに驚く。

「うん……………ありがとう奏……………少し元気出たよ……………」

「なら良かった。あ、お燐が晩御飯できたってさ！」

奏の顔が明るくなる。

「……………もう私お腹ぺこぺこだよー！」

「今日はなかなか豪華だったよー！」

「え、ほんと?! 楽しみー！」

そういう会話をしながら私達は部屋を後にする。

もう、2人はいなくなっただろうか……………

目が覚め、起きようとしたらこいしが泣きそうな顔で私を見ていたので起きづらく、そのまま狸寝入りしてしまった。

すると奏が部屋に入ってきて、こいしに優しい言葉を投げかける。こいしだけでなく、私にも……………

こいしの本音を聞けたのと、奏の言葉により、私は2人が去った後、少し涙を流してしまった。

「……………」

晩御飯も食べ終わり、私は再び奏とお話しをした。

「そうそう！それでね」

「あははははー！」

奏とはもうすっかり打ち解けた。

まだ出会って3ヶ月程度。

もう奏はお兄ちゃんみたいな存在だ。

こんなに人と会話するのが楽しいとは思わなかったくらい。

「あ、もうこんな時間。私そろそろ寝ないとな………」

時刻は11時。

寝ないとお姉ちゃんに怒られる時間だ。

「ねえねえ奏？今日はお姉ちゃんいないし、まだ話してていい？」

少しニヤニヤして悪者感を出す。

「ダメ、明日に響いたらダメでしょ」

「むうー」

こういう所だけやけに丁寧なんだから………

まあ、いつか。

「じゃあまた明日もいっぱい話そうね！」

「ああ、おやすみ」

私は手をヒラヒラをと振り、奏の部屋を出る。

そのまま廊下を歩くが頭の中は奏の事でいっぱいだった。また奏と話したい。もっと笑いあって遊んでいたい。私はこの感情がなんなのか分からなかった。

「おやすみ……………お兄ちゃん……………」

そう呟いて、私は自分の自室へ戻るのだった。

6 話

立場逆転

「兄」から「弟」

不知の襲撃から数日が経った。

未だ私達古明地姉妹に変化はないし、再び襲ってくることは無かった。

謎が謎を呼び、さらにそこに新たな事実が上書きされる。

頭が狂ってしまいそうだ。

でも、そんなことを忘れられる時間もある。

それは、食事だ。

前まではお姉ちゃん、お空、お隣の4人での食事だったが、今では奏と千里が家族に加わったのでお話するのが楽しみだ。

「それでね！以前奏がさー」

「お、おい千里?!それ言うなよ！」

「あははははー！」

こんな事ができるのも、奏と千里が来てくれたおかげだ。

別にお姉ちゃんやお空の話がつまんない訳じゃない。

むしろ面白いよ。

でも、それ以上に奏の話は面白いのだ。

奏と2人ならついつい真夜中まで話し込んでしまう。

自分でも思うがよくもまあ話題が尽きないものだ。

今日もたくさんお話をした。

「……奏はさ、家族はいないの？」

「……いるよ。お兄ちゃんが……」

「お兄ちゃんは来てないの？」

「ああ、俺だけ殺されたからな……」

「殺された……の？」

私は奏のその事実に見開く。

「あ、ああ、そう言えばお前らに行ってなかったな……」

一呼吸おいて奏が話す。

「突然俺の家に武器を持ったやつが現れてな、1人は殺したんだけど、2人目に心臓を撃ち抜かれて死んだんだ」

「じ、じゃあ、奏は今幽霊なの？」

「そんなまさか、れっきとした妖怪だよ」

「ならいいんだけど……」

しばらく沈黙が続く。

私は新たな話題を出すな

「ねえ、おにい」

慌てて口を手でふさぐ。

「ん？おにい？」

「な、何でもないから！」

両手をブンブンと振り、否定する。

危ない……………何で今自然に……………

「そ、そうか……………」

「うん……………じゃあもう寝るね！」

そこから逃げるように私は立ち上がり、部屋をあとにする。

「ああ、おやすみ」

ドアを開け、廊下に出る。

今……………お兄ちゃんって言いかけた……………

どうして？お兄ちゃんがいた訳でもないのに……………

この翌朝。異変が起きた。

私が食堂に行くとお姉ちゃんやお空達はいたが、奏がまだ来ていない。

珍しいな……………

「こいし、ちよつと奏の部屋見てきてくれる?」

「うん、分かった」

お姉ちゃんにそう言われ、私は奏の自室のドアを叩く。

「奏ー?朝ごはんの時間だよー?まだ寝てるのー?」

少し大きめの声で言うが返答はない。

「おーい!」

耐えきれずドアを開けてしまう。

着替えていたらどうしよう……………

そんなことを考えながらガチャッと開ける。

すると、寝息が聞こえるだけ

「奏……………今日はいつになく寝坊助さんだね……………」

ベッドを見ると、真ん中だけ少しポツコリしている。

可愛い寝方するんだな……………

と、ダメダメ。こんなにニヤニヤしたら笑われちゃう……………

私は頬を両手でビンタし、顔を矯正する。

「よし……………」

布団の端っこを掴み……………

「ほーら奏！いつまで寝てるつもりな……………」

布団を思いつきりかきあげた。

しかし、私はその思わぬ光景によって言葉を失う。

「……………え？」

困惑してついそのあたりをキョロキョロしてしまう。

しかし、未だ刀の中で寝ているであろう千里に声をかける。

「ち、ちよつと千里!!起きてー！」

刀身が一瞬光り、千里が出てくる。

よかった……千里はいつも通りだ。

「んあ？何よー……………」

「奏が……………」

「奏くんがどうかしたの……………？……………は？！」

千里も同じように寝ている奏を見て言葉を失う。

これは……………ほんとに奏なの……………？

そう、今の奏は……………どう見たって子供なのだ。

私と身長は同じくらい。

年下くらいかな？10歳前後の体だろう……………

そして、その例の奏？は目を擦りながら起きる。

とゆーか普通に可愛い……………

すると、小さい奏は驚いてる私たちを訝しげに見て

「おーい……………お前からどうしたー……………？」

よかった……………記憶は残ってるみたいだ……………

安心していつも通り奏に話す。

「そーいや、こいしちゃんってこんなに背高かったっけ？」

奏の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

「奏……………1回顔洗ってきたら……………?」

「?…おう」

そう言つて奏は隣の洗面所に姿を消す。

「ね、ねえ、千里。あれつて……………」

「どう見たつて……………子供化……………してるわよね……………」

その数秒後。

ドタドタと大きな足音を立てながら何かがこちらに走つてきた。

バタン! つと小さい奏が扉を開けた。

「おい?! なんだよこれ?!」

すつごい焦つた顔してる……………

ハアハア言いながら私たちに言う。

あ、可愛い……………

「こつちが聞きたいよ奏くん……………あなたこそどうしたの?」

「知るか!! 起きたらこんなに子供になつてたんだよ!!」

こんなに落ち着きのない奏を見たのは初めてだ。

こんなに小さい奏も初めてだからあまり驚かないが……………

「どうしようか……………」

私の「お兄ちゃん」的存在が急に「弟」的存在になってしまった……
「……………でも……………可愛いね……………奏……」

つい本音が口に出てしまった。

「可愛いなんて言われても嬉しくない！カッコイイって言われたい!!」
「今の君の状況を見て誰もカッコイイとは思えないよ……………奏くん……………」

「うぐっ……………」

苦笑いをして千里がドストレートなことを言い、奏はガツクリと肩を落とす。

「と、とりあえず落ち着くか……………」

奏は深呼吸をして心を落ち着かせていた。

「とりあえず朝ごはん食べましょ？」

そうして3人で食卓に向かう。

まあ、その他の反応は分かりきっていたが……………

「なあ、さとり。夜の間は何があつたのか分かるか？」

箸を進めながら奏がお姉ちゃんに聞く。

お姉ちゃんは首を横に振り

「いいえ、分からないわ。でも、確実に前の不知のやつからかけられたものね……」

「まあ、それは確定してるんだが………」

「とゆーか奏ちっさいね！私より小さいじゃん！」

「何気にシヨックだからためらいもなしに言わないでくれお空………」

左手で奏の頭をボンボンと撫でるお空………

「まあ、記憶まで子供にならなくて良かった。とりあえず、外に出て私と弾幕ゲームしてみましよう。もしかしたら戦闘力も落ちているかもしれない………」

「それは痛いな………」

奏とお姉ちゃんが外に出た。

もちろん他のみんなも……

「じゃあ軽い弾幕張るから、刀で切ってちょうだい」

「おう、分かった」

奏が咲名千里を持つ。

アンバランス過ぎて面白いが、大人時代と変わらないくらい軽やかに持つてる。

それに、構えもいつもと同じだ。

「じゃあ行くわよ」

バババン………と軽やかな音と共に、お姉ちゃんの魔法陣からピンク色の弾幕が射出される。

「ふう……」

奏は目をつぶり、意識を集中させた。

「せあああ！」

いつもより高い声で斬り掛かる。

シユパパパパ……とどンドン弾幕を斬っていく。

「……どうやら力は同じようね……」

「みたいだな……じゃあ……体だけ……？」

「そうね……一体なぜ……？」

また新たな謎がここに生まれた。

その夜。

私はいつも通り奏と話す。

「はあ……今日は災難だったよ……」

深いため息をついた。

「あはははは！驚いてる奏可愛かったなー♪」

「うるさいな……………」

廊下の壁に背中をつけ、二人並んで座っている。

「もうこれじゃどつちが年上か分かんないよ……………」

「前の奏でも私とはあまり年の差無いけどね！」

「でも、これじゃさらに……………」

「奏ちよつと立ってみて」

スクつと立ち上がり、奏と背中をびつたんこする。

「ちよつと私の方が高い！じゃあ私が今はお姉ちゃんだ！」

「俺達は姉弟じゃない！」

「いーや？これからは……………」

私は急に黙り込み、少しの間考える。

「……………ほんとに姉弟になる？」

「……………は？」

と真剣な顔で聞いてしまう。

ぶつちやけ、お姉ちゃん以外の姉弟、弟か妹が欲しかったのだ……

少し強引かもしれないが……

「なるなる!!絶対楽しいって!」

「いやだよ……」

「拒否権なし☆」

そう言っただけは手を引つ張る。

「え?いや、俺は今のままで良いのおおお……」

あれ、なんかデジャヴ……

お姉ちゃんの書斎の扉を勢いよく開け

「お姉ちゃん!!奏の体が戻るまでの間、小さい奏を私の弟にしてい!!」

「……………急に押しかけてきたと思っただら……………」

何かの仕事申中だったのか、羽ペンを持ちながら私に対応する。

「ねえ!いいでしょ?!

「……………奏はいいの?」

「……………へ?俺はちゃんのことわ……………」

「なりたい!って言ってた!」

奏の言葉に被せて、大声で言う。

「お、おい!？」

「奏がそういうのならいいわよ、じゃあ奏は私の弟でもあるのね…」

「俺は1度も了承してないぞ?!」

「そーゆーこと!じゃ、よろしくね!」

また言葉を被せると奏は呆れた顔をして

「もうどーにでもなれ……………」

私は了承を得て、奏と姉弟となった。まあ、ほぼ強制だけど……

「じゃあ!私のことは「こいしちゃん」じゃなくて「こいしお姉ちゃん」って呼んでね!」

すると奏は少し赤面し、目をそらして

「分かったよ……………こ、こいしお姉ちゃん……………」

ああく可愛い!

そう思いながら、につこりと笑った。

私の「お兄ちゃん」が一時的に「弟」となった。

7話

芽生えたもの

「うーん……………」

前で両腕を組み、下を向いて考える。

奏が子供化したのは何が原因だろうか？

不知から受けたダメージも私が回復魔法かけたから完全に癒えているはずだから

……………

「何でだろうな……………」

「何が？」

ひよこつと顔を出す奏。

いつもより声が高いので一瞬誰か分からなくなる。

「わあ?!か、奏?どうしたの……………?」

「いや、こ、こいしお姉ちゃんが何か考えてるみたいだったから……………」

可愛いやつだな……………

まだこいしお姉ちゃんって言うの躊躇ってる……………

「いや、奏が子供化したのは何でだろうって……………」

「今千里が調べてくれてるから大丈夫だよ。そのうち分かるさ」

「ならいいんだけど……………」

「失礼します。こいし様。さとり様がお呼びです」

「あ、ほんと？ありがとうございますお憐」

突然お姉ちゃんに呼び出されたので、奏を連れて書齋へと向かった。

「お姉ちゃんー？何か用なのー？」

お姉ちゃんはいつもより真剣な顔で座っていた。

「ああ、こいし。奏もちょうど良かった」

その場にいたのはお姉ちゃんと千里だった。

「奏くんの子供化の理由を話し合いたいと思って。後、不知から新しい手紙が来たの」

奏が一步前に入る。

「ま、マジかよ……………今の時期に……………」

すると千里が奏に近づき、その手紙を渡す。

古明地とその仲間達へ。

我らは1週間後の6月26日。

全軍を連れて幻想郷を襲撃する。

もちろん、目標は貴様ら「古明地姉妹」だ。

そこで真実も教えるつもりだ。

必ず来い。

不知。

「い、1週間後……………」

私は手紙を読み上げ、その場で硬直する。

「6月26日……………私が妖怪を退けた日……………」

そう、以前に千里が言った。

人里を支配しようとした妖怪をちょうど居合わせた妖怪が撃退、滅ぼしたというお

話。

そのちょうど居合わせた妖怪って言うのがお姉ちゃんなのだ。

それにより、不知の大半の精神が崩壊し、人里は支配されずに住んだのだが……………

心を読んだことにより、英雄ではなく、嫌われ者。みんなから恐れられるようになった

のだ。

「多分……………それは狙っているよね……………昔の戦いを彷彿とさせたかったのかな

……」

「ああ。俺らの精神から崩すつもりなのか？」

と全員が考察をしてみる。

すると、お姉ちゃんがいつもの顔に戻り、

「あ、そうそう、それで奏が子供化しちゃったやつだけど………一つ思い当たる節があるの………」

「ま、マジか?!」

奏が書斎の机に乗り出す。

「あくまで思い当たるだけよ、あまり期待しないでね」

「それでもいい、聞かせてくれ」

お姉ちゃんは一つ大きな息をつき、こう言った。

「妖怪の魔法は掛けた者と背丈がほぼ等しくなる。」って言うのを、パチュリーの図書館から、千里が見つけてきたわ……」

「妖怪の魔法………うーん………」

奏は顎に手を置き、考え込む。

一方私は………

ダラダラと冷や汗をかき、黙り込んでいた。

「……………っ！」

まずいつてこれ！絶対に原因私じゃん！

そう、私が怪我を負った奏に「古明地こいし」の回復魔法をかけちゃったから

……………

あ、そう言えば……………

「この回復魔法はね……………人にはよつぼどの事がない限り使っちゃダメよ。まあ、自分にかかる分にはいいけど……………」とお姉ちゃんに昔言われたことがあったことを思い出し、さらに冷や汗をかく。

それにお姉ちゃんは気づいたのか、「あつ」という顔をして、すぐにため息をついた。
「はあ……………なるほどね……………」

あれ、私の心は読めないんじゃない……………

しかし、お姉ちゃんはそれでも言葉をつづける。

「顔に出すぎよ、こいし」

「へ?!な、何のことかな〜?」

と下手な演技でとぼける。

「?……………何のことだ?……………あ」

しばらく奏が考え込み、それに理解する。

「こいしお姉ちゃんが……………原因だったんだね……………」

と、奏にも気づかれたので諦めて奏に頭を下げる。

「ご、ごめん!私は故意にやったわけじゃなくて……………ただ奏を助けたくて……………」

奏もそれは分かってくれているようで……………

「わ、分かっているよこいしお姉ちゃん。別にこいしお姉ちゃんを責めようなんて考えて

ないから……………」

私は奏の優しさに感激し、大粒の涙を流してしまふ。

「奏え〜」

「おわ?!ちよつ、こいしお姉ちゃん?!」

奏に抱きついた。

「もう、大丈夫?」

「うん、ありがと……」

やっぱり、小さくなっても奏は奏だな………

そう思った私だった。

「じゃあさとりお姉ちゃん。この魔法っていつ切れるの？」

「多分………時間だと思うのよね」

「やっぱりそうだよね………まあ、別に不便じゃないすか」

そうして私達はまた不知の話題に戻す。

「不知の戦力ってどれくらい分かるか？千里」

「うん、さとりちゃんが撃退した人数が約100人。だからそこまできつい戦いにはならないさそう……でも、1人1人の個人能力は高めだったらしい」

「まあ、人里を支配するくらいだしな……」

「んで、さとりちゃんが唯一精神崩壊出来なかったのがこの………ねえ、これなんて読むの？」

「清籟」と書いてある。

すると奏が……

「せいらい」じゃねえかな？ 確証は無いけど……」

「清籟？ なんか可愛い名前だね……」

とお姉ちゃんに言う

「だって女性だもの……」

「え?!」

そう、この「不知清籟」という人は女性の長なのだ。

私はその事実に見開く。

「まさか……女の人だとは……」

「でもやることはとても女の人とは思えない……かなり非人道的なやつだわ……」

お姉ちゃんの拳がぎゅっと握られる。

「……まだ生きているのか……?」

「あれから約50年ほど……まだ生きてはいるでしょうね……不知も妖怪だし

……」

「なるほどな……じゃあ、その清籟の首を取れば俺らの勝利ってことか……」

「そうなるわね……まあ、今日はもう夜遅いし、解散するわ。おやすみ」

「おやすみお姉ちゃん……」

そう言つて全員が書齋から出て、自分の部屋へと向かつていった。

途中まで私は奏と同じ、とゆーか隣部屋なので、一緒に帰っている……

「まあ、とりあえず原因がこいしお姉ちゃんんで良かったよ……」

「え? どうして?」

「不知のやつだったら聞き出すの大変でしょ?」

「ああ、なるほど……」

私は苦笑いをして奏と話す。

「まあ、私は奏がこのままでも別にいいんだけどね〜♪」

「俺が良くないんだよ………何で女の子と同じ身長にならなきゃいけないのさ

……」

「いやいや、充分可愛いからいいじゃない☆」

奏の両頬をつまんで引つ張る。

「いたたた! 痛いつてこいしお姉ちゃん!!」

パツと手を離すとバチンつと奏の頬が元の位置に戻る。

「俺は……可愛いじゃなくてカツコイイって言われたんだよ……」

赤くなつてる頬を擦りながら涙目で言う。

「あはははは! じゃカツコイイ大人にならないとね〜♪」

「努力するよ……………」

奏も弟が大分板についてきたのかな？

普通大人が子供の役やるのって恥ずかしいはずなのに…………

多分、私を不機嫌にさせたくないんだだろうな…………

やっぱり…………優しいな…………

私は奏が弟になり、少し距離が縮まった気がする。

もつと家族らしくなった…………

私はお兄ちゃんの奏も弟の奏もどつちも関わりやすくてつい話し込んでしまう。

それに…………お姉ちゃんや千里達と話す時より、胸が締め付けられる感覚に陥る。

なんだろうか…………私は心を閉ざしてからそこまで親しくない者に何の感情も

抱いていなかった。

奏と出会ってまだ3ヶ月程度なのに…………色々な感情…笑い合いたい、喧嘩もし

ていたい、奏ともつと関わりたいと思う自分がある。

1度も経験したことのない感情。私には分かる。

これが……………「恋」だ……………

私は初めて、自分の感情を理解出来た。

8話 過去に立ち向かう

奏のことを意識し始めてから、私は心の整理がつかなくなったり、目の前で慌てちやったりしてしまう。

「……………私……………弟相手に何してるんだろ……………」

そう、好きな人で義理とは言え奏は「弟」なのだ。

そう考えると少し自分が馬鹿らしくなる。

弟に恋するなんておかしいでしょ？

こんなことなら姉弟になろうなんて言わなきゃ良かった……………

と、今更後悔しても仕方ない、気持ちを切り替えて私は日常を過ごす。

不知からの例の手紙が来てから5日後。

ついに明日、私とお姉ちゃんの過去に決着をつけることも出来る。

「はあ……………」

「どうしたの？こいしお姉ちゃん」

今は午後の11時。

私と奏が壁に寄りかかっていつものようにお話をしている時間。

だが、今日だけは雰囲気違った。

「明日戦わなきゃいけないのかなーって思っただけだよ……」

「そうなんだよね……明日はどうとう決戦。という訳か……」

結局奏の体も戻らず、相変わらず子供のままだ。

彼曰く「子供だと体が軽いし動きやすいからいい」と言っている。

「……私たちの過去に幻想郷や奏を巻き込んだね……」

「まあ……こればかりは仕方ないね……俺ももうこいしお姉ちゃんの家族だし、今じゃ関係ないなんて思っていないよ……」

優しく、奏は話す。

それでも私は下を向き、顔を暗くする。

「……元気だそうよこいしお姉ちゃん。いくら落ち込んだって戦いは避けられない

……」

「分かってるよ……でも……前みたいにお姉ちゃんや他のみんなの苦しむ顔を見たくない……」

「どうやら私は、前にお姉ちゃんが不知の1人に大怪我を負わされた事がある意味トラウマになってしまっているらしい。」

「……………」

「この戦いがもう避けられないのは分かる……………でもそれ以上にお姉ちゃん達の存在が大切な……………」

ポロポロと何かが私のスカートを濡らす。

あれ……………どうして泣いてるんだろ……………

もういいや……………感情に任せよう……………

「何で……………私達は戦いを避けたくて地底に来たのに……………これじゃ意味がないよ……………」

「……………いいしお姉ちゃん……………」

私はそのまま本音を奏にぶつける。

「何で私は「覚り妖怪」なんか生まれちゃったの！普通の……………奏みたいな普通の妖怪に生まれたかった！地上の人たちとも……………仲良くしたかったのに……………」

しやくりあげながら泣く。

すると私の右手に微かな温もりを感じる。

フワツとした…落ち着くような温かさ……………

「こいしお姉ちゃん……………俺にはお姉ちゃん達がどれだけ苦しい思いをしたのかは分からない……………でも、これだけは言える……………」

一呼吸おいて、私の目を奏の碧色の目が捉える。

「……………過去を見るより、未来を見た方がいいと思うんだ……………」

「……………え？」

「古明地姉妹がどれだけ頑張っても……………人々の評価ってあまり変わらないと思う。じゃあ、もうそれは切り捨てるしかないんじゃないかな……………」

抱擁するように……………

「だから……………これも一つの壁だよ。これからも地霊殿のみんなと楽しく過ごすための……………ね？」

いつもそうだ。奏の言葉には何かを奮い立たせる魔法でもかけられているみたいだ。説得力もあり、反論することも出来ず、ただ奏の言葉が頭の中でリピートされる。

「……………勝とうよ、こいしお姉ちゃん……………」

「うん……………ありがとう。奏……………」

奏のこんな所に惚れたんだろうな……………

「元気になってくれたんならよかったよ……………」

奏は微笑み、廊下にある時計を見上げる。

「じゃ明日もあるし、俺はもう寝るね……」

「うん、おやすみ！」

手を振りながら奏は歩いて自室に戻る。

私は「あつ」という声を出して一つ奏にしたいことを思い出した。

「奏、奏！」

奏を呼んで、手で招く。

「ん、何ー？」

奏は私に近づいてきた。

一呼吸おいて、私は奏の顔に自分の顔を近づけ……………

奏の頬にチュツと口付けをした。

「っ?!」

私はすぐに離れ、奏の顔を見る。

私がキスしたところを手で触れ、顔を真っ赤にしてこちらを見る。

「えっ……………あ……………その……………」

どうやらかなり動揺しているようだ……………

私はそれを見て、にっと白い歯を奏に見せて、こう言った。

「姉弟の証！明日は頑張ろうね！奏！」

奏もこれには切り替えができなかったようで……………

「う、うん……………」

弱々しい返事だった。

でも逆にそれが決定打となり、私が恥ずかしくて死にそうだった。

頑張ってその感情を抑え……………

「じゃあおやすみ！」

そう言って私は走って自室へ戻る。

「ふう……………」

パタン、とドアを閉めてベットにうつ伏せで倒れる。

全身に布団の柔らかさを感じる。

私はここでようやく自分のしたことを振り返り……………

「~~~~つ！／／／／／」

パタパタと足を振り、真っ赤になる顔を手で覆う。

どうしてこんなに恥ずかしいのよ！弟にキスしただけじゃない！

と自分を落ち着かせるように心の中で言うが、なかなか落ち着かない。

数分後。

ようやく落ち着いた私は……………

「よし、明日頑張るか……………！」

自分に喝を入れた。

明日はお姉ちゃんのため、幻想郷のため、そして何より、励ましてくれた奏のために

……………戦うんだ……………

人生最大級の戦いに緊張するはずなんだけど……………どうしてだろ……………？急に戦

いが怖くなくなった……………

これも……………「家族」がいるから……………なんだろうな……………

私はそのまま眠りについた。

そしてきょう。6月26日。

とうとう不知との決戦だ。

私はドアを開け、欠伸しながら歩く。

すると、同時に奏がドアを開けた。

やはり昨日のことを少し意識してしまい、顔を背けてしまう。

「お、おはよ。こいしお姉ちゃん。今日は頑張ろうね……………」

躊躇いながらも奏が口を開いてくれた。

「うん、奏もね……………」

そう言っただけで食卓に向かった。

するともうお姉ちゃんや他のみんなは集まっていた。

「さて、全員揃ったわね。今日の配置を言うわ。席に座って」

そう言っただけで私と奏を近くの席に座らせた。

「……………どこに行くかは……………奏。分かるわよね？」

「うん、不知が来るところは「人里」の可能性が高い。元々不知はそういった集落を支配するのと、古明地姉妹を倒すことが目的だから、不知の方も古明地は人里に来るって予想してると思う」

「……………そう、だから私達も被害を抑えるために人里で戦うわ」

朝食を食べながら私はその話を聞く。

「じゃあ人里で不知を迎撃するってこと？」

「そう、だからもうそこで全力でぶつかるとこと」

「じゃあ、清籟の相手は……………こいしと奏と千里にお願いするわ」

結局狙いは古明地なのだ。

だからお姉ちゃんとは別行動でなるべく不知を分散させたい……………という考えなのだ。

それから数分後に解散し、準備に入って私たち全員で地霊殿を出発。

それから5分程で人里に着いた。

奏になるべく人里の住民には避難勧告を出し、今は博麗神社や守矢神社にいるだろう

……………

「さあ、そろそろ来るわよ……………最初にお空。お願いするわよ」

「はい、さとり様」

お空もいつになく真剣で集中した顔をしていた。

「こいしお姉ちゃん……………」

奏に呼ばれた。

「ん？」

「この戦いが終わったら……………その……………ちよつと話したいことがある……………」

「?……………分かった……………」

話とはなんだろうか？

そんなことを考えているうちに上空から何か大軍が来た。

およそ100。奏とお姉ちゃんの考えは的中したようだ。

「来るぞー！」

全員が戦闘態勢に入った。

私たち古明地の過去に終止符を打つ。

私はそう心に決め、不知との戦いに挑んだ。

9話 賭け

「はあ………はあ………」

まだ清籟は来ていないが、不知1人1人がかなりの実力を持っている。

私ひとりじゃ、倒す人数も限られてきた。

しかし、奏は次々と不知を倒していく。

目にも留まらぬ速さで剣の軌道だけが見える。

「せあああー！」

高い声で奏が叫ぶ。

「奏くん！右に16人！左に17人！どうする？」

「迷わず左だ！」

奏と千里は阿吽の呼吸というやつだ。

本当に相性のいいコンビだ。

私もそれに負けず、弾幕を打ち続ける。

「スペルカード！」「サブタレイニアンローズ」！

「スペルカード！想起」「光り輝く水底のトラウマ」！

「スペルカード！」「サブタレイニアンサン！」

「スペルカード！妖怪「火焰の車輪」！」

地霊殿組全員が声を合わせて言う。

そして全員、自分の中の最大と言っても過言ではない大技を叩き込んだ。

大半を倒した奏は私たち4人の弾幕に見とれていた。

「スゲエ……………」

私も四人で同時に弾幕を打つとは思わなかった。

それにより、不知の半分が吹っ飛んだ。

こっちがかなり有利になったが……………

少し引つかかる。

「奏！何かおかしくない？」

私が奏に近寄り、疑問を言う。

「いつまで経っても霊夢たちが来ない！不知は全員ここにいるのに……………」

「あ、言われてみれば……………まさかとは思うけど……………不知はもつといる……………なんて考えたくないな……………」

「そう考えるのが妥当ね。奏くん、こいし。移動するわよ。1人だけ妖力が並外れなやつがこっちに向かってきてる」

私はそれを一瞬で理解出来た。

「清籟か？」

「恐らくね」

「よし、こいしお姉ちゃん、千里。人里を出て、妖怪のに行くぞ」

「うん」

そう言つて私達はお姉ちゃん達と離れ、妖怪の山の広場まで飛んだ。

多分、清籟はこちらに来てくれると思うから、ここで決着が着くと考えていいだろう。

すると青い空から一つ人影が見えた。

「……………来たか……………」

「あらあら、ここには古明地の妹と、よく分からないガキだけしかいないのかしら？」

凄い大人びた声だ。

露出の激しい衣装に青髪のロングストレート。

背中にはピンク色の翼が生えている。

敵ながら美しい人物だ。

「が、ガキ……………」

奏は余程ショックだったのか、ガキ発言に対して少し落ち込んでいた。

「俺はガキじゃない。「咲名千里」の所持者。愛原 奏だ」

すると、清籟は少し驚いた顔をして……

「あら、そんな有名な人と渡り合えるなんて光栄だわ」

「……………久しぶりね……………清籟……」

フワツと刀から千里が出てきた。

「あら千里ちゃん。久しぶりね……」

「お、おい千里！お前清籟知らないんじゃないのか？」

「ごめんなさい。清籟は……………私の友人よ……」

「そ、そんな……………」

私と奏は同時に驚く。

まさか……………千里と清籟が友人関係だったとは……………

「でも安心して……………私はもうあいつは嫌いだから」

「ひどいじゃない千里ちゃん……………私はずーっとあなたの事が大好きよ？」

「何よ白々しい。私のこと見捨てたくせに今更何を言ってるのよ」

千里の態度がかなり酷くなっている。

普段、奏にも見せたことのない……………千里の目は……………殺意に満ちていた。

「私は見捨てた覚えは何のだけどね〜♪」

「……………奏くん。全力で行こう」

「おっとその前に、君、奏くん……………と言ったわね？」

「あ？だからなんだよ……………」

「少し昔の話をしてもいいかしら？」

奏は少し答えに迷った後、

「千里」

「いいわよ、情報は掴んでおきましょう」

「まず不知はね、元々……………誰の臣下だったか分かる？」

奏はそこで気づいた。

私はその奏の顔を見て、察することが出来た。

そうか……………千里の友人だったということは……………

「……………倉見……………か？」

「ビンゴ♪千里ちゃんの本名。片波と私達不知は家族のようなものなの」

「不知と片波は仲が良かったのか？」

「そう。それであなただ、愛原と倉見の戦いの最中。不知と片波は戦場に何度も呼ばれたわ……………16歳ながらも戦闘は頭3つほど抜けていた片波咲は特に……………ね」

片波咲……………というのは千里の事だろうか？

まあ、そう考えた方がいいだろう……………

「でも、倉見は愛原に苦戦し、ストレート勝ちするのは難しいと判断した倉見は愛原の伝統でもある、「刀術」を消すため、伝説の妖刀。「咲名千里」を人柱を作つて倉見がコントロールできるようにしたの……」

なるほど……………

私は奏の隣で考える。

「そこで人柱を選ぶ時にね……………咲が真つ先に手を挙げて……………」

少しずつ清籟の声に笑みが零れていた。

しかし、千里が清籟の話に被せるように

「違うー！」

「あら？何が違うのかしら？」

「私は……………無理やり人柱にされたんだ……………！やりたくてやった訳じゃない！」

「……………そうだったかしら？まあ、どっちにしろ……………」

清籟は残酷な薄汚れた笑みを浮かべ。

「“無力”で家族を守れない片波のお嬢さまだから人柱に選ばれちゃったのよ？」

「っー！」

千里の顔が苦しくなってきた。

拳をぎゅつと握り、下を向く。

私はそれに耐えられなくなって

「ちよつと！そういう言い方は無いでしょ?!」

「あら？古明地の妹さん。あなたも同じようなものよ?」

「……………」

そのままの笑みで私を見下す。

「「覚り」から逃げて、心を勝手に閉ざした”臆病者”だものね……………」

清籟の言葉は直接心に攻撃が加わったみたい……………」

私は……………臆病者なんかじゃない……………!

争いがいやだったから……………地底に行ったのに……………」

私はそこで堪忍袋の緒が切れ、弾幕を射出しようとした。

しかし、その前に隣にいた奏がいなくなり、清籟の前で刀をかざしていた。

「取り消せよ……………! テメエのつまらない偏見なんか聞きたくもねえ……………」

「あら、偏見じゃないわ、事実じゃない……………?」

「じゃあお前らも同じじゃないのか? たった1人の妖怪に全員がやられて……………俺も

初めて聞いた時、笑ったよ……………」

私は思った。

奏って本気になるのかなりのゲスになるんだな……………」

「……………もう1回言ってみなさい？」

「何度だつて言つてやる。100人いたのに情けないつて言つてんだよ」

刹那、清籟の右腕が振り上げられ、奏に向かつて殴ろうとする。

それを奏は刀でガギンという音を立てながら受け止める。

力が強かつたのか、奏は数m後ろに吹っ飛ぶ。

「あら？ガキのくせになかなか強そうね…」

「だからガキじゃない……………愛原の子孫。「愛原 奏」だ。」

「ふうん……………あ、いいこと思いついた♪」

「なんだ？」

「賭け」しましょ？」

清籟が一つ私たちに提案してきた。

「私とあと1人部下を連れてくるわ。だから

「私VS奏くん&千里ちゃん」「私の部下VSこいしちゃん」で、あなた達両方勝つたら

私達は大人しく退くわ。でも私たちが勝つたらあなた達には死んでもらうわよ……………」

「……………どつちにしろそのつもりだ」

「ふふつ……………じゃあ部下を呼ぶわね？」

パチン、と清籟が美しい音を鳴らした。

それとほぼ同時に清籟の隣に1人の女性が現れた。

「呼んだ？お姉ちゃん？」

「は？お姉ちゃん？」

千里が目を見開き、清籟に聞く。

「そ、私の部下であり、妹。「不知 時雨」」

「よろしく願います。時雨と申します」

時雨という人はこちらに向かつて一礼した。

「さて、時雨……………」

清籟が時雨に事情を話す。

「分かったわ。ではこいしさん。全力で参ります」

時雨が戦闘態勢に入った。

「どうやらダガー使いのようだ。」

「じゃあ奏！千里……………」

「な、なんだ？」

奏と私は背中合わせになり、心の底から願っていることを素直に述べた。

「死なないで……………」

「……………そつちもな、こいしお姉ちゃん」

そう言つて私と奏は離れた。

私は時雨の方に走り、魔法陣を展開する。

「行くよ！スペルカード！表象「弾幕パラノイア」！」

空中に浮き、スペルカードを時雨に叩き込んだ。

「ふっ！」

素早い剣さばきで、弾幕パラノイアを避けたり斬ったり……………

すごい実力だ。

でも、私も負けてられない！

私は続けて弾幕を時雨にぶつけた。

10話

逆転勝ち

時雨との戦闘は完全に私が押されていた。

「……………ふっ！」

ビュツと軽やかな風切り音を立てながら私にダガーが飛んでくる。

私はそれを防ごうとするが

「ぐっ！」

時雨の力は男も顔負けの腕力だ。

無意識で姿を消そうとしても的確に攻撃を当ててくる。

どう見たって私の方が下だ。

「スペルカード！抑制「スーパーエゴ」！」

「深淵「グラビティ・クロウ」！」

私の弾幕を本当に軽々と斬り、更にそのまま攻撃を与えられる。

一度、時雨のダガーが私の肩を深く抉った。

「……………ああ！」

普段、経験したことのない痛みに私は肩口を抑えながら悲鳴をあげる。

自分は治癒能力が高い訳では無いので、回復には三分くらいはかかってしまう。
まずい……………このままじゃつ……………

私はその痛みには耐えながら、後ろに飛ぶ。

一旦時雨と距離を置いてスペルカードを用意する。

「スペルカード！深層「無意識の遺伝子」！」

「もう無駄だ！あなたは勝てない！」

そう言つて時雨は弾幕を斬る。

確かに……………もう勝てはしない……………

でも……………約束したんだ……………死なないって……………

「私は諦めない……………絶対に……………」

通常弾幕を次から次へと全力で発射する。

「……………もう、興ざめです……………」

時雨は呆れたように声を出す。

その刹那、時雨の目つきが変わった。

私はその目に少し後ずさり、弾幕を弱めてしまった。

それが仇となり、時雨が猛突進してきた。

「くつ、スペルカード！表象「弾幕パラノイア」！」

「終わりだ「魔神剣」！」

私の腹を突き刺した。

当然、痛みはあつたがそれ以上に意識が朦朧としてしまつていた。

「がはっ……………」

血を吐いて下を向くと私の血が水たまりとなつて溜まつていた。

嘘……………でしょ……………

「所詮古明地はこんなものですか……………もう少し楽しめると思つたのに……………」

……………やばい……………意識が……………

私……………ここで死ぬのかな……………

なら……………もう1度お姉ちゃんやお空、お隣に会いたかつたな……………

それに……………千里にも……………

奏には……………想いを伝えておけばよかつた……………

今更、後悔した。

そして私は自覚した、もうこれは叶わないのだと、

「……………そんなの……………いやだ……………！」

逆にそれが私を強くしてくれた。

もう1度、みんなで食事がしたい！

「ああああああああ!!」

時雨のダガーを掴み、力を入れる。

「そんな！なぜ……………」

時雨は右のダガーを離してしまった。

私はダガーを抜き、手に持つ。それを横の湖に投げた。

「……から……………だよ……………時雨!」

「ふざけるな!」「ロストフォン・ドライブ!」

時雨のダガーから一つの太いレーザーが射出され、私の方に向かってくる。

かろうじて避けたが、左腕に少し当たってしまった。

痛みを堪え、ただ勝ちたいという思いだけで……………

「スペルカード……………」「サブタレイニアンローズ!」

弱々しい宣言だったが、スペルカードを発動してくれた。

しかしましたもや時雨はその弾幕を斬る。

私ひとりの力じゃダメなのか……………

そう諦めていたその瞬間。

「想起「賢者の石」！」

綺麗な弾幕が私の後ろから時雨へと向かって言った。

聞き覚えのある声……………愛しい家族の声だった……………

「……………待たせたわね……………こいし……………」

「大丈夫ですか?!こいし様！」

「お姉ちゃん……………2人とも……………よかった……………」

私は安堵の息も漏らし、家族と肩を並べて時雨を見る。

「まさかこんな所で古明地姉妹が揃うとは……………」

時雨は動じず淡々と言葉を並べる。

「あら、私たちのことご存じでしたのね、時雨さん…」

お姉ちゃんは笑顔を見せているが、その瞳の奥には強い殺意を感じた。

私は痛みを耐えながら……………

「お姉ちゃん、お空、お燐。全力で行こう」

「もとよりそのつもりよ！」

4人で戦闘態勢に入り、スペルカードを唱えていく。

「スペルカード！ 嫌われ者のフィロソフィ！」

「スペルカード！ カツパのポロロッカ！」

「スペルカード！ 贖罪「旧地獄の針山」！」

「スペルカード！ 「地獄の人工太陽」！」

4人の弾幕が時雨1人に集中攻撃する。

これは時雨もきつかったのか……………

「くっ！ 「ライトニングノヴァ」！」

斬り続けるが、その弾幕の量に勝つことが出来ず、直撃してしまう。

時雨の体は小さな爆発を繰り返し、うめき声が聞こえ、飛び散る血を眺めていた。
「ふざっけんな……………私が……………こんな子供なんか……………お姉ちゃん……………」

清籟の名を呼び悲しい目をしながら、最後体全体が爆発し、時雨は消滅した。

最後の最後……………時雨は「お姉ちゃん」と言った……………

私はその言葉に少し悲しみを覚える。

「時雨も……………苦しかったのかな……………お姉ちゃんと戦えなくて……………」

「そうね……………」

私は感傷に浸っていた……………しかしそれも限界のよう……………ふらつと体制が崩れてしまった。

今になって時雨から負った怪我が響いてきた。

「はいっ!」

「ごめんお姉ちゃん……………ちよつともう動けないや……………」

ドクドクと私の心臓の鼓動が早くなる。

「お憐! 永琳呼んできて!」

「は、はい!」

「大丈夫……死なないから……でも……「奏と千里」の戦いだけは見届けさせて……」

「ええ……分かってるわ」

私は横を向いて、奏と千里の戦いを見る。

「奏……千里……絶対勝ってね……」

痛みをこらえながら……私は祈った。

ガキーン!!

と刀の甲高い音を響かせながら、俺と清籟は戦っていた。
今のところどちらが優勢とかはない、拮抗している。

「はあ……………はあ……………」

俺の刀は清籟の魔法で弾かれる。

清籟の魔法も俺の刀で斬り裂く。

その繰り返しだ。

「ガキのくせに……………」

「だからガキじゃないって……………」

「ふふっ……………もう終わらせましょうか……………」

清籟は一度俺と距離を置き、こう唱えた。

「天地に散りし、白き光華よ……定めに従い、敵を滅せよ!」

一呼吸置いて

「フォーチューンアーク!」

光の刃の雨が俺に向かって降り注いだ。

刀で弾けないと判断したため、俺は横に逃げようとするが、思ったよりも範囲が広く、数本当たってしまう。

「ぐっ……………」

それなりの痛みだが、これくらいどうってことない……

俺と清籟の戦いは今まで幻想郷では経験したことのない、大きな戦いとなる。

1 1 話

本当の目的

私は体が一切動かず、ただ奏達の戦いを黙って見ていた。

お姉ちゃんやお空達は人里に出た不知の集団を倒しに行った。

私は近くの大木にもたれ掛かり、それを見ていた。

こんなにレベルの高い戦いを私は見たことがなかった。

光の刃で負った傷が、未だにズキズキと痛む中、清籟は俺に追撃を叩き込んできた。

「くっ………」 「アサルトダンス」！

俺も連撃で清籟を攻撃する。

二撃は清籟の肩を斬った。

しかしそれ以外は全てスカ。

「ふふっ、愛原も所詮はただの妖怪……………」

嘲笑するように俺を見下す。

もう俺との戦いに飽きたのか、ため息をついて、右手を空にかざした。

「奏くん！避けて!!」

千里が叫ぶ。

「無駄よ！」「インフィニットグラビティ！」

巨大な暗黒球の重力によって俺は吸い込まれていく。

刀を地面に刺し、これ以上動かないようにした。

数秒経つとその暗黒球も消え失せ、清籟は次の技に入ろうとしていた。

おかしい……………

俺はそこでいくつかの疑問を考えていた。

なぜ霊夢たちが来ない……………不知は人里に集中しているが……………全くもって
霊夢たちの妖力が感じられない。

今人里にいるのは……………さとりお姉ちゃんとお空達だけか……………

それに……………なぜこんな賭けをした？

清籟の狙いは古明地だったはず……なんで俺に勝負を挑んできたんだ？
考えているうちに清籟は上空から襲いかかってきた。

清籟の魔法剣と俺の咲名千里が甲高い金属音を立てながら当たる。

「すいご……………」

私は清籟と奏のぶつかりあいを見て、思わず感嘆の声を上げてしまった。

周りには、底辺妖怪なら死んでしまうほどの妖力の威力。

周りの木はどんどん妖力によって枯れていつている。

しばらくすると傷が治り、私は奏の所に走ろうとする。

「奏！」

私は前線に入ると同時に、スペルカードを唱えた。

「スペルカード！本能「イドの解放」！」

弾幕を射出した瞬間、奏の焦る声が聞こえた。

「ば、バカ!!来るな!」

すると清籟は奏から離れ、私に標的を移した。

「……………ふ、ふっ……………古明地はやはり愚かね……………」

出でよ……………原罪の特異点……………虚無と永劫を交え、弾けて潰せ……………」

人差し指を点に掲げ、さっきの技を同様に暗黒球が姿を現す。

しかし、どう見たって妖力も規模も桁違いだ。

そして、清籟はこう叫んだ。

「イベントホライズン!!」

眩しい光とともに、大爆発が起こった。

私も奏も超近距離にいたので被害は免れない。そう思った。

私はそのまま数十m吹っ飛ばされ、大木に背中を打った。

体を見ても、吐血するほどでもなく、どこか大怪我をしているわけでもなかった。

「なんで……あれほど近距離で当たったのに……」
切り替えて奏を探す。

すると丁度真正面に奏はいた。

私は駆け寄った。

「か、奏！大丈夫……？」

奏に応答はない。

奏の足元を見ると……ポタポタと、何かが落ちる水滴音が聞こえた。

「……え……かな、で……？」

私は奏の姿を見て、言葉を失う。

真っ赤に染まった上着、頭からも出血している。

そして……奏のその小さな体に真っ赤な鮮血が染まっている。見るも無惨な姿。

とはこのことを言うのだろう。

「……いし……おねえ……ちゃん……」

ヒューヒューと浅い呼吸をしながら、こちらを振り向く。

その刹那、奏はバランスを崩し、そのまま私の方に倒れ込む。

「奏！奏！……千里！どこ?!」

すると、刀から物凄い勢いで千里が飛び出してきた。

「こいしちゃん！今から奏に全力の回復魔法かけるから少し離れて！」
「う、うん！」

奏を千里に任せ、私は清籟の方に向き直る。

「あらあら、そのガキはもう力尽きたようね？」

「……………奏が……………いなくても……………私がなんとかする！」

後方に魔法陣を展開し、弾幕を撃ちまくる。

「スペルカード！」「サブタレイニアンローズ！」

一瞬にして私の弾幕は消え失せる。

こんな相手にも……………私は勝てないのか……………

「……………ついでに古明地も殺しとくか……………」

小声で清籟は何か言った。

私には聞こえなかったが無視して弾幕を打ち続ける。

「……………「サンダーブレード」……………」

そう唱え、雷電を纏った巨大な剣が私めがけて飛んでくる。

もうダメか……………

「デイスツールノヴァ！」

清籟が発動させたサンダーブレードは……………私の目の前で真っ二つに割れ、消え

失せた。

「か、奏?!」

もう回復したの!?

私は改めて千里の妖力と奏の生命力には驚いた。

奏の体には傷一つない。

服が破けているだけだ。

「下がつて……いしお姉ちゃん!」

「う、うん!」

私は奏に言われた通り、後ろに飛び乗りサポートに回るようにした。

しかし、奏が清籟と唐突に会話を始めた。

俺は千里に回復して、清籟を攻撃する前に疑問を清籟に聞いた。

「なあ、清籟」

「なにかな？」

「……………不知は今何人いる？」

清籟は小首をかしげ、こう答えた。

「まあ、200人ちよつとかな？」

「そうか……………それは分散しているのか？」

「ええ」

じゃあ霊夢たちは分散した不知を倒しているのか？

ぶつちやけ、この質問はどうだっていい。

気になるのは二つ目だ。

「どうして俺たちを狙う？ 不知の今回の戦いの標的は古明地だったはずだ。どうしてだ？」

清籟はにやつと笑い、こう答えた。

「そうねえ……………あの手紙の内容は……………はつきり言ってフェイク。本当の理由はね……………」

一呼吸おいて、俺は清籟の口から思いもよらないことを聞く。

「裏世界転移……」それが不知の目標よ」

「ここまでの戦いが裏世界なんて単語が出るとは……」

「……裏世界に行く条件は？」

「……人柱が必要なのよ……」

「……なるほどな」

俺はそこで完全に理解することが出来た。

しかし、もう一つ疑問が生まれる。

「裏世界に行く理由は？」

「幻想郷は穢れすぎた。それに、倉見という相棒がいなくなった今。幻想郷にいる理由もない。ただそれだけよ」

てことは

裏世界に行くために……千里を……人柱として利用し、ゲートを開くって事か
……

「まあ、もちろん俺も千里も負けるつもりは無い。行くぞ」

「私は絶対にあなたには屈しないわよ！清籟！」

俺と千里は同時に清籟を睨みつけ、戦闘態勢に入る。

前に飛び、俺は全力で清籟の脳天を突き刺す。

ピンク色の壁が障害物となり、咲名千里は清籟の手前で止まる。

「せああああああ!!」

発火現象を纏った炎の刀を10連撃ほど清籟に叩き込み、さらに追撃を与える。

この技はなかなか効いたのか、清籟は後ろに仰け反る。

「……………命に変えても、千里は貰うわよ!」

「断る!千里は俺達の家族だ!お前らには渡さない!」

「……………出でよ!原罪の特異点!虚無と永劫を交え、弾けて潰せ!」

さつきと同じ詠唱をする。

「イベントホライズン!」

俺もさつきのようにはなりたくない。

刀を握り直し、大きく振り上げる。

「行くぞ!鳳凰天翔駆!」

炎を纏い、イベントホライズンを斬り裂く。

「奏くん……………！」

千里が刀から呼びかける。

「……………なんだ!？」

「……………絶対に勝つて……………ね」

祈りにも似た声で千里は静かに呟いた。

1 2 話

流星の終わり

今は完全に俺のペースだ。

「はあああああー！」

俺は清籟の懐まで間合いを詰め、『獣爪雷斬』を叩き込む。

雷電を纏った剣で一気に猛攻撃を仕掛けた。

「くっ……………がはっ……………」

清籟が初めて血を吐いて膝をついた。

俺はそこを『クレイヴ』という地から生える岩の刃で清籟を空中へ浮かす。

落ちてきたところを『絶破滅衝撃』で胸元を咲名千里で突き刺し、左手に愛原の『煉

獄玉』という妖力の結晶を清籟の腹に当て、吹っ飛ばした。

「……………あ、ああー！」

清籟が数m先で声にならない悲鳴をあげる。

「さっきまでの威勢はどうしたよ……………清籟……………」

浅い呼吸をしながら、清籟は立ち上がる。

「残念ながら……………私はこんなところで負けていられないのよ……………」

清籟はさつきまでの顔とは打って変わって、完全な「殺人者」のような顔になった。すると、聞いたことのない詠唱を始めた。

「天光満つるところ、我は在り…黄泉の門開くところ、汝在り、出でよ、神の雷……………」

俺の真上に巨大な魔法陣が展開され、積乱雲以上の大きさの黒雲が集まり始める。

ビリビリと雷をまといながら……………」

「か、奏くん！全力で左に回避！」

俺は千里に言われるがまま、翼を生やして左に飛んだ。

「死ね！『インディグネイション』！」

ゴオオオオオン……………」という巨大な雷音を立てながら一本と雷が俺がさつきまでいた所に落ちる。

俺は間一髪で避けることが出来たが、衝撃波によって近くの木に直撃する。

「お、おいおい……………」マジかよ……………」

「これが……………」本来の清籟の力……………」ね……………」

さつきまでいた所は大穴が開き、未だに雷が落ちたところは雷電がビリビリと響いている。

「……………」びびってるっ！」

千里がひよこつと顔を出す。

「……ああ、ちよつとな……………」

「奏くん……………勝てそうになったら、「あの技」を使うのよ……………何を犠牲にしてもいい……………」

「……………分かつてるよ……………」

俺はちらつとこいしお姉ちゃんの方を見る。

心配そうな顔をしている。俺はその心配を少しでも解くために微笑む。

「もうちよつと待っててね……………こいしお姉ちゃん……………」

するところいしお姉ちゃんもつられて微笑み……………」

「うん……………」

もう一度俺は微笑んで清籟の方を向く。

「咲ちゃん……………私は唯一分かり合える存在だと思っていたのに……………」

「……………まだ私の本名を覚えていたのね……………」

「本名……………」

「そうよ、私の「人間の頃」の名前は片波 咲。片波家の第1令嬢よ……………」

「ダイチレイジョウ？よくわからないが……………千里の本当の名は「咲」ということが分かった。

「どちらにせよ、2人には死んでもらうわつ……………」

「行くよ！奏くん！」

刀を清籟に向け、こう放った。

「ああ！第2ラウンドだ！」

「もう……………あなた達には早急に死んでもらう！」

清籟の容姿と妖力が激変した。

真っピンクの雰囲気は妖力はさっきの倍以上……………

「……………もう、これ以上隠している力はない。正々堂々と戦え！愛原！」

「そのつもりだ！」

俺は戦闘態勢に入るが、それを上回る速さで清籟が飛び込んでくる。

「うお?!」

かろうじて避け、体制を立て直す。

「な、なんだよ……………それ……………」

力もそうだが……………速さも桁違いだ。

「ハハハハハハ！早く死になよ！」

清籟の顔は狂気じみていた。

数秒前とは想像が出来ないくらい。

そんなことを考えているうちに清籟はどんどん俺との間合いを詰めてくる。

「ほらっ、ほらっ、ほらあー！」

剣を振り回しながら俺に近寄る。

そのまま俺は力とスピードに負け

「ぐあっ……………ああー！」

脇腹、右肩、左太もも、腹に炎を纏った槍や暗黒の剣などで突き刺さった。

「(な、体が……………動かない……………)」

痛みはあるが、動かないほどではないのに……………なんだよ……………これ!!

「これで王手……………ね」
チエツクメイト

清籟は、俺から距離を置いて、例のあの技の詠唱を始める。

すると千里が隣から出てきて……………

「奏くん！動ける?！」

「む、無理だ！俺のことはいい、お前だけでも逃げる！」

「嫌に決まってる！」

「今は否定してる暇なんかないんだよ！」

俺は小さな体を揺さぶりながら千里に怒鳴る。

「奏！千里！」

「こいしお姉ちゃんが隣で叫ぶ。」

「こいしお姉ちゃん……………」

「もう無駄よ！死になさい！」

天光満つるところ、我は在り！黄泉の門開くところ、汝在り！出でよ、神の雷！」

またあの技を発動させる気だ……………」

無理だと確信した俺は遺言としてこいしお姉ちゃんに一言投げかける。

奏達を助けたいののに、なんで体が動かないの!?

私は動けない奏と千里の元に走ろうとするが……………自分も体がびくとも動かない
……………麻痺しているみたいだ……………

「こいしお姉ちゃん!」

奏に言われてはつと我に返る。

すると奏は微笑んで

「……………」

奏のその笑顔は遺言のようになんか見えなかった。

いや、遺言なのだろう。

私はそれを必死に否定する。

「いや!奏!千里!死なないでよ!」

手を伸ばすが、当然2人には届かない!

「またあの生活に戻ろうよ!ねえ!2人とも!」

目からは涙が大量に零れる。

すると、千里が私に近寄ってきて……………

「大丈夫だよ……………こいしちゃん……………奏は死なせない……………」

「……………え……………」

私は千里の言っている意味がわからなかった。

「また会おうね……………こいしちゃん……………」

そう言って千里は奏の元へと戻った。

俺は千里の言動を理解することが出来なかつた。

「私が一人で清籟の術を食い止める。そうしたら私を犠牲にして清籟に「あの技」を使いなさい……………」

俺はその提案に目を見開く。

「……………そ、そんなこと出来るわけないだろ！お前が死んじまう！」

「それしか方法が無いのよ！」

千里の大声に俺は声をつまらせる。

すると俺の右頬に千里の華奢な手が触れる。

「……………私はあなたと出会えて本当によかつた……………最期に奏くんと戦えたのはかけがえの無い思い出よ……………」

千里の目からは少量の涙が流れる。

少し後悔を残しているかのように千里の涙はポタポタと垂れる。

すると、俺にかかっていた術が消え失せ、動けるようになった。

「や、やめろ！千里！」

千里はニコツと笑って清籟を見る。

「奏くん……………さよなら……………」

「千里いいいい!!!」

「……………失せろ！『インディグネーション』！」

清籟から雷が落とされ、千里はそれを全て受け止める。

俺の目尻からも大量の涙があふれる……………

せつかく……………家族になれたのに……………たった一人の相棒だったのに

.....

俺は悲しみと清籟への憎悪を刀に込め、こう叫んだ。

「スペルカード！天翔ミイティア・フイナール「流星の終わり」

す。このスペルカードは何か物を犠牲とし、その物の妖力が高ければ高いほど威力が増す。

千里が材料なのだから威力は絶大だ。

俺の最初で最後の2人で作ったスペルカードだ。

最後に千里の顔を見た。

微笑んでいた。

「最期に千里は何かを口ずさんだ。

すると、千里は光り輝き、粒子となって消えた。

俺はその時に涙が一番溢れた。

そして、その粒子は咲名千里へと集まり、眩い光を放った。
「な、なんだこれは……………」

清籟は『インディグネーション』が防がれてから、硬直していた。
どうやら千里が術のカウンターを仕掛けてくれたのだろう。

お陰で清籟は今隙だらけだ。

金色に光る刀身を掲げ、俺は刀に宿る千里の魂に声を放った。

「ありがとう……………千里……………」

涙を拭き、俺は清籟へ飛ぶ。

「ハアアアアア！」

俺は咲名千里を振り下ろした。

その瞬間、眩い光とともに当たりは金色に包まれた。

この技は……………千里が自らの死を選んで発動した技なのだ。

13話

本当の別れと約束

咲名千里が一閃。

きれいな弧を描いて、眩い光とともに金色の爆発が起こった。

爆風も収まり、私は奏を探した。

すると、目の前に膝をついて下を向いている奏を見つけた。

「奏……」

私は奏に駆け寄ろうとした。

しかし、その瞬間奏の声が聞こえる。

「どうして……………」

奏の目からは涙が零れているのが分かる。

「俺は……………こんなの望んでなんかいなかったのに……………」

私はその言葉を聞いてハッとすする。

「そうだ……………千里が死んじゃったんだ……………」

それを理解した瞬間、私の中で一つ大切なものがなくなつた感覚に陥つた。

私も同様に膝をついて泣く。

「千里い……………嫌だよお……………」

胸に手を置いて、いなくなつた千里を思う。

「……………ちくしょう……………」

奏が地面を思いつき殴つたその刹那。

咲名千里の刀身が光つた。

そして、その中から……………

「せ、千里?!」

「……………お疲れ様……………奏くん……………」

「よかつた……………生きててくれたんだな……………」

奏が千里に安堵の声を漏らすと、千里は横に首を振つた。

「……………え?」

「私は死んだのよ……………あの時間違いなく。「流星の終わり」によつてね」

「……………嘘だろ……………」

奏の顔がまた絶望に塗り替えられる。

しかし、それは対象的に千里の顔は笑顔だった。

すると千里は私の方を向き

「こいしちゃん……………今まで本当に楽しかつた……………喧嘩したり、他愛もない会話で盛

り上がったり……………私……………地霊殿に来てよかった……………さとりちゃんや他のみんなに宜しくね……………」

「うん……………うん!!私絶対に千里のこと忘れないから!」

大きな声で叫ぶ。

声は震えていたのでそこまで響かなかった。

千里はもう一度笑い、今度は奏を見る。

「奏くん……………私は君の相棒で……………良かったのかな……………」

「何言ってるんだよ……………相棒はお前しかいないんだよ……………」

「そう……………嬉しいな……………私……………こんなに必要とされてたんだ……………」

千里の声はだんだんと小さくなり、次第には大粒の涙を流した。

「泣くな!」

奏の叫んだ。

しかし、その奏も目尻に涙が溜まっている。

「……………笑って別れよう……………」

すると千里は涙を拭いて、もう一度奏を見る。

「今まで本当にありがとう。奏くん。最期に君と戦えて本当によかった」

千里の体がさらに光を増す。

その周りには粒子が舞っている。

「ああ……………俺もだ……………また会おうな、千里……………いや、咲」

「ありがとうね……………咲ちゃん！」

私と奏は千里の本当の名でお礼を言う。

咲は驚いた顔をしてすぐに笑顔に戻った。

その笑顔の後、千里は黄金の光とともに散っていった。

「ありがとう……………咲……………」

空を向いて、奏はそう呟いた。

奏の頬には一滴の涙が流れた。

それを腕で拭いて、私の方に振り返った。

「さあ……………帰ろう……………こいしお姉ちゃん……………」

「うん……………」

この後、どうやってお姉ちゃんたちに知らせようか……………そんなことを考えていたその時だった。

「あら、敵が死んでいないというのに随分呑気だねー」

「?!」

二人同時に声が出た方を振り返る。

「……清籟……生きてたのかよ……!」

少し後ずさり、私の肩に手を置いた。

「こいしお姉ちゃん。さとりお姉ちゃん達を呼んできて……! その間は俺が食い止めるから……!」

「で、でも……………！」

「大丈夫だから！」

少し声を張り上げ、私の体を押す。

「早く！」

私は後ろを振り向き、宙へ浮いて全速力で人里に向かった。

「お願い……………死なないで……………」

「あら、仲間を逃がすなんて……………心優しいのねえ」

清籟は自分の髪を弄りながら余裕の声で話す。

さっきの雰囲気とは大違いだ。

「お前には俺一人で十分だからな……」

「千里ちゃんが死んじゃったから、裏世界に行く方法をまた探さなきゃじゃない……」

かつての親友が死んだというのに……

俺は怒りや憎悪がこみ上げてきた。

「お前はここで死ぬ。裏世界になんか行く必要は無い」

「あら、部外者が勝手に決められる物じゃないのよ？」

「ああ、言い方が悪かったな……」

俺は一呼吸おいて、清籟にこう告げる。

「裏世界に行く前に、俺がお前を殺す」

清籟の目つきが変わった。

「どうやら、スイッチが入ったらしい。」

「いいえ……私があなたを殺して必ず裏世界へ行くわ」

俺は相棒のいなくなった空っぽの咲名千里を握り、こう祈った。

「頼む、千里……俺を勝たせてくれ……」

もう一度笑って過ごせる日々のために……………家族のために……………
そして、大好きなこいしお姉ちゃんのために……………!

「行くぞー！」

俺は大声を上げて、清籟の元へと全速力で走った。

「来なさい！愛原奏！」

刀を両手で持ち、清籟の太ももを狙う。

しかし、それを魔法剣で悠々と受け止め、カウンターを食らう。

「ぐあー！」

数十m先に吹っ飛ばされ、塞がっていた傷口が次々と開き、痛みが再発する。

「無駄よ！今のあなたには私を倒す力などない！」

「……………それでも……………俺はお前を殺す……………！」

清籟は呆れたような顔をして……………

「所詮あなたは威勢だけが取り柄、興ざめだわ」

すると清籟がいつの前にか目の前まで瞬間移動していて、俺はその咄嗟の判断ができず、清籟の魔法剣が腹に突き刺さる。

「いっふっ……………」

俺の口からは今までない以上の鮮血がゴポゴポと流れ出した。

清籟の剣に付与されている魔法で俺の体はボロボロだ。

剣を抜き、清籟は少し俺との距離を置く。

距離を置かれた瞬間、俺の全身の力が抜けた。

「くそっ……………動けよ……………」

頭しか動かない、足や腕はびくともしなくなった。

私はお姉ちゃんたちを呼び、再び妖怪の山へと戻ってきた。

「奏…どっ?!」

私は広場を探し、奏を探す。

「いたー！」

お姉ちゃんが指さした方向には

「え……………奏！」

大量の血を流して倒れている奏がいた。

私は走って奏の元へ行く。

体を持ち上げて顔を見る。

「よかった……………息はある……………」

「こ、いし……………お姉ちゃん……………」

少し安定しない言葉だったが……………確かに声が聞こえた。

「か、奏！無理しないでよー！」

奏の腹に右手をかざして回復魔法をかけようとするも、私の妖力はすべて使い切つて

しまった。

「……………どうしてこんな時に使えないのよー！」

すると、私の右手を奏の手が包み込んだ。

あの時と同じ感触がする。

「大丈夫……………だよ……………もう少し待ってて……………みんな……………」

奏は自分の力で立ち上がり、咲名千里を握り直した。

「千里と……約束したんだ……！……絶対に勝つて……」

奏は妖力を失った咲名千里を清籟に向けた。

気のせいかもしれないが一瞬だけ咲名千里の刀身が光ったような気がした。

14話

家族

ガキーン!!

剣と剣の金属音が妖怪の山全体に響いた。

当たっては火花が散る。

「はぁ……………はぁ……………」

俺の体はもうこれ以上早く動くことが出来なかつた。

腹の傷もさらに広がり、それと比例するように痛みも強まる。

「くっそ……………!」「獅子戦孔」!

獅子のような衝撃波で清籟へと攻撃をする。

「無駄よ!今のあなたの技には何の力もない!」

咲が死んだ今、俺の妖力は完全にダウンした。

くそっ、俺はこんなに千里に頼っていたのかっ!

今更自分を憎む。

しかし、こんな事で弱音を吐いていたら、天国の咲に笑われる。

そう思った俺は咲名千里を鞘に収め、妖力をふんだんに使って魔法を唱える。

「リベールイグニツション!!」

大きな魔法陣が展開され、その中心からは金色の極太レーザーが発射される。

それは清籟をしつかりと捉えたようで、そのレーザーが清籟の右腕を掠める。

俺は続けて詠唱を唱える。

「レイジングミスト!!」

「っー……………調子に乗りすぎよー!」

清籟は剣を1振り、横に振る。

それだけで俺の「レイジングミスト」は完全に消失した。

俺は妖力がもう無いに等しかったため、「レイジングミスト」の後、すぐに膝をついてしまった。

「はあ……………がはっ……………」

今更になつて腹の傷が痛み、吐血する。

「無様ね……………龍人で最強である愛原が……………」

俺はそれに答えるようににやつと笑う。

「俺はもうそんな肩書きで生きるつもりは無いんでな……………」

鞘から咲名千里を再び抜いた。

もう自分の力だけでアイツを倒すしかない！

残っているスペルカードは1枚。

天翔「流星の終わり」だけだ。

使いたいが、その代償となるものが無い…………

「じゃあ…………そろそろ古明地の方も殺さないとだから…………君との戦いもお開きかな…………」

「サブタレイニアアンローズ!!」

真横を弾幕が通り過ぎ、俺の右から幼く、高い声が聞こえる。

「こ、こいしお姉ちゃん?!」

「じつと待ってるなんて出来ない!!私も戦う!」

「だ、だめだ!傷が治っていないのに……………」

こいしお姉ちゃんは声を張り上げ

「このままじゃ全員死ぬ!!」

「で、でも……………」

俺が反論の言葉を探しているうちに俺の周りにはこいしお姉ちゃん以外にもいた。

「ごめんなさい奏。妹の頼みよ……………私からもお願いするわ……………」

「私も……………もう奏はあたいの親友だからね!」

「うにゅ……………?……………あ!私もあいつ殺すぞー!」

「さとりお姉ちゃん……………お燐……………お空……………ありがとう…」

俺は家族に礼を言い、清籟へと向き直る。

「さあ、行くぞー!」

「おお!」

地霊殿組がスペルカードを唱える。

「くつ!たかだか人数が増えただけで……………小賢しい……………」

「スペルカード!想起「プリンセスウンディネ」!」

「スペルカード!恨霊「スプリーニーター」!」

「スペルカード!焰星「十凶星」!」

「スペルカード!無意識「弾幕のロールシャッハ」!」

4人同時の弾幕は今日何回か見たがいつ見ても惚れ惚れするほど綺麗だ。

しかし、清籟はそれを軽々と弾き返す。

「は、反則でしょう……………」

さとりお姉ちゃんの顔が一気に暗くなる。

しかし、すぐに切り替え、次の技へと入る。

「俺も負けてらんねえな……………」

咲名千里を前で構え、翼を広げて残りの体力全てを酷使して、刀を振るった。

私やお姉ちゃんが清籟との戦いに合流してから約30分。

「はあ……………はあ……………」

私たちの弾幕は一向に届かず、未だに傷一つつけられない。

しかし、清籟の体にも疲労が溜まっているらしく、息を切らしていた。清籟の体も奏と同じくらいの傷跡が残っている。

「はあああああ！」

奏が私の横を通り過ぎて咲名千里を右上から左下へ直線を描いて斬る。

そのまま奏は咲名千里を振り続け、清籟に傷を与え続ける。

私はそれが好機だと思い、前に出てスペルカードを唱えようとする。

「スペルカード！よくせ」

「バカ！来るな！」

詠唱の途中に奏の聲が被る。

すると奏の前にいた清籟がにやつと笑う。

「あらあ？自ら死にに來たのね…？」

一瞬で清籟は私の目の前へと移動してきた。

「これで終わりよ！」「クラスターレイド！」

私の頭上から氷の槍が降ってくる。

「こいしお姉ちゃん！」

奏が私に覆いかぶさるように氷の槍から私を守ってくれたが、奏の背中には次々とそれが刺さる。

「ぐう……………」

奏はあえぎながら私を守り続ける。

「か、奏！」

奏の鮮血が私の服にたくさんかかる。

そのまま地上へと落下した。

「奏！奏！」

私は彼の名を呼び続け、意識があるかを確認する。

浅い呼吸ではあるが、まだ意識はあるみたい。

「くそっ……………今度こそ…」

奏はフラフラする足で立ち上がり、いつもの戦闘態勢に入る。

「もういいよ奏！私たちに任せてよ！」

そういつた瞬間、私の目の前に結界が張られた。

「私と奏の2人の戦い。あなたたち古明地姉妹はここで見ていなさい」

清籟が強固の結界を張り、中に奏を入れた。

「もうあなたは死ぬ。私の勝ちね……………」

奏は激しく首を横に振り

「まだ、だ……………お前を……………殺すまで……………俺は死なない……………」

奏は1度血を吐き捨て

「大好きな“家族”のために……………」

「……………下らない……………家族ごっこごときに命をかけるなんて……………」

「俺の中では本気なんだな……………」

「……………本当につまらない妖怪だわ……………とつとと死になさい……………」

魔法剣を清籟は構え、奏を見据える。

すると、奏はこちらを振り返り……………」

「……………大好きだよ……………こいしお姉ちゃん……………」

「…………え？」

私は思いもよらない奏の言葉に硬直する。

しかし、奏はそんな私を置いて清籟へと向かった。

「せああああー！」

私は境界の外で奏と清籟の戦いを見ることしか出来なかった。

分かってるよ……………奏のあの言葉は本当の遺言だってこと……………奏すらもここで死ぬつもりなんだ……………

私は境界に手を置きこう叫んだ。

「奏！あなたまで死ぬなんて絶対に許さない！生きて勝ちなさい！」

私の言葉に奏はにやつと笑い……………

「ごめん……………」

「…………どうして！」

「あの技を使う……………俺の生命を犠牲にして……………」

「どうしてそこまでして……………」

「……………こいしお姉ちゃんのために……………」

そう言葉をこぼし再び奏は清籟と剣と剣のぶつかり会いを続けた。

「何で?! 私はただ奏と笑って過ごしたいだけなのに! 千里に続いてあなたまで死んじゃったら………」

本音が零れ、私は結界の前で涙をこぼす。

隣でお姉ちゃんやお空達も鼻をすする音が聞こえた。

「いめん………」

奏はそれだけ言い、あの技を使おうとした。

「あはははは！早く死んでよ奏え！」

清籟の狂気じみた顔と声。

もう清籟も後戻りは出来ないだろう……………

「お前もだ。清籟。共にここで死のう」

すると、清籟は手を止め

「な、何をする気？」

奏はふつと笑い……………

「天翔……流星の終わり………」
ミューティア・ファイナーレ

そう唱えた瞬間。

さっきの千里と同じ光の粒子が奏の体にまとわりついていた。

そしてそれと同時に咲名千里も黄金に光っていた。

「ま、まさか、自分の命を材料にする気?！」

「ああ、この結界の中だ………お前は逃げられない………」

「だめえ!!奏!!」

私は奏の背後で必死に叫ぶ。

「いやだ!!あなたがなくなるのは嫌だ!!」

大粒の涙を流し、こう叫ぶ。

「私はあなたが大好きだから!!離れたくないよ!!」

奏はその言葉に一瞬驚き、微笑む。

「ありがとう……………こいしお姉ちゃん……………俺も……………大好きだよ……………さよなら……………」

その言葉だけを残り、奏は飛んだ。

「はああああああああ！」

その言葉とともに咲名千里は眩い光を放ち、結界の中で大爆発を起こした。

「ああああああああ！」

清籟の断末魔のような叫びが聞こえ、完全に消滅した音さえを聞こえた。

爆発も収まり、私は解けた結界を通り越して倒れている奏を持ち上げ、膝枕する。

「奏え……………」

ポタポタと私の涙が奏の頬に落ちる。

それを奏は手で拭った。

「泣かないでよ……………こいしお姉ちゃん……………」

粒子を放ったまま、奏は笑顔になる……………

「これで……こいしお姉ちゃんは過去に立ち向かうことが出来るんじゃないかな
……人里の評価も変わると思う……」

「そんなのっ……もらっても嬉しくない!!

奏がいなかったら……意味無いよ……」

「…………ごめん…………」

奏は謝罪し、頭を持ち上げて私の頬にキスをした。

「…………かな、で……?」

「前のお返しだよ……………」

もう……奏とは会えない……なら……精一杯の見送りをしなきゃ……

私は涙を拭き、笑顔で……………

「ありがとう……………奏……………君のおかげで私は変わることが出来た……………二度と忘れな
い……………」

お姉ちゃんもお空達も笑顔で奏を見送ろうとした。

「ああ……………ありがとう……………みんな……………」

そう言って弾けるように奏は消えた。

奏が……………いなくなった……………それを理解した途端、私は声を出して号泣した。

「うあああああああ!!」

大好きな人が……………もうこの世にいない……………

いやだよ! 別れたくないよ!

その最中、私の頬に一つの粒子が触れた。

「泣かないで……………大好きな……………お姉ちゃん……………」

そう確かに口ずさんでいた。

15話

夜空の悲しみ

6月28日。

奏と千里がこの世を去ってから2日が経った。

幻想郷には再び元の形へと戻りつつあり、私たち古明地姉妹は一躍幻想郷の英雄となっていた。

人々の私たちを見る目が変わり、今では尊敬の眼差しを送る子供もいる。

しかし、その当の地霊殿組はそのテンションとは裏腹に完全にどんよりした雰囲気を作っていた。

私は自室へこもり、抜け殻のようにベッドに座っていた。

別に生きる気力を失ったわけでもなく、鬱になったわけでもない。

ただ、何もかもやる気が出ないのだ。

奏や千里がない。

それだけで私の体は動こうとしない。

「ほんとに私……………何やってるんだろ……………」

2人ともきちんとした別れ方をすることが出来た。

別に後悔もしていない。

いや……………後悔はしてるかな……………」

すると、ドアが軽快な木製音を立てながら2回響く。

「こいし様……………夕食のお時間ですが……………」

「いい……………」

「し、しかし、昨日も食べてないですし……………そろそろお体に障りますよ……………」

「大丈夫だから!!……………今はひとりにさせて……………」

お隣でさえもこうやって追い払ってしまおう。

どうやら私は精神的に大ダメージを受けたらしい。

「お姉ちゃん……………」

「何？」

「ちよつと妖怪の山に行つてくる……………」

「……………一人で大丈夫？」

「うん」

私は奏と千里の形見を探すために妖怪の山へと向かった。

どう考えたって形見なんかあるわけない。

そんなこと分かりきっているのだ……………

しかし、何故かその場へと足を運びたかった。

数分で妖怪の山に着いた。

当たりはもう真つ暗で静かな夜風だけが私の体を刺激する。

私は清籟との戦いで荒れた広場を散歩する。

ここに来たら心が安らぐ。

なんか隣に2人がいるみたいな感じで……………

そのままふらふらと歩いていると、月明かりに輝く一つの何かが遠くに見えた。

「?……………なんだろう……………」

小走りでそのものへと駆け寄り、その物体をまじまじと見つめる。

「これは……………咲名千里……………」

そう、そこには奏の愛刀で千里の体の抛り所でもあった、妖刀「咲名千里」が地面に突き刺さっていた。

確かに、あの後咲名千里がどこに行ったのかは把握していなかった。

「じゃあ……………これはほんとに……………」

紫色の柄に少し青みを帯びた刀身が半分地面から突き出ているように見える。

「形見を探してたわけじゃないけど……………」

私はそう吐き捨てて咲名千里の柄を握った。

少し力を入れただけですぐに抜けた。その理由は……………

「あ……………折れてる……………」

咲名千里は柄から約40センチほどで途切れている。

あれだけの大技を叩き込んだのだから折れるのは当たり前だろう……………

私はその刀を握ったまま地霊殿に帰ろうとした。

「ハッ……………」

名を呼ばれ、私は後ろを振り返る。

「お、お姉ちゃん……」

そこにはお姉ちゃんがぼつんと一人だけ立っていた。

「……………付いてきたの？」

「そんなわけではないですよ。心配だから今来たばかりよ」

片目をつぶり、そう言い放った。

「……………少し…地霊殿が寂しくなっちゃったわね……」

お姉ちゃんのか細い声がさらにか細くなる。

「元のメンバーに戻っただけなのに……………なんかポツカリ穴が空いちやっみたい

……………」

「そう……………だね……」

すると、お姉ちゃんは少し移動して傾斜のある芝生に座った。

そしてその隣をポンポンと叩き、

「一緒に座りましょう？」

「うん……」

私はその場所にストンと座った。

「綺麗ね……………」

「……………うん……………ほんとにキレイ……」

今の星空は何時間見ても飽きないほど優雅に広がっていた。
その中心には大きな月がある。

私はそれを見て少し悲しくなる。

「私……………いつか奏たちの事忘れちゃうのかな……………」

「え？」

私の急な問いかけにお姉ちゃんは少し戸惑う。

咲名千里を夜空へかざして

「この刀を形見として持つても部屋の角で埃かぶつて放置されるだけ……………」

「こいし……………」

「そんなの……………絶対に嫌だ……………」

歯を食いしばって握る力も強める。

すると、柄を握っている手にお姉ちゃんの左手がふわつと触れる。

「お姉……………ちゃん……………」

「……………そんなものよりもいい形見があるじゃない……………」

そう言つて、お姉ちゃんは空を指さす。

「……………」

私は理解することが出来なかつた。

「……分かる？」

「いや、全然……」

すると、お姉ちゃんはふっと微笑んで

「奏達が命を落としてまで守ったもの。奏達が負けていたら、私達はこの夜空を見ることは出来なかった」

そのまま淡々と言葉を並べる。

「この夜空も……幻想郷そのものも……奏達が命を落としてまで守った結果なのよ……」

私はそのお姉ちゃんの言葉を一言一句聞き逃さずに聞いていた。

「……そうだね……でも……やつぱり……別れたくなかったなあ……」

私は頬に涙が流れる。

「私もよ……彼らとは……上手くできそうだったのに……」

私は涙を拭き

「……うん、唯一私たちを怖がらなかつた人だもんね……」

「まあ……ちよつと驚かれたけど……」

お姉ちゃんが苦笑いする。

「あはは……まあ仕方ないよ……」

するとお姉ちゃんはにやつと笑い

「あなた……奏のこと好きだったんでしょう？」

「へ?! な、何のことかな」

私は顔を赤くしてしらを切る。

「顔に出すぎだつてば……」

クスクスと笑うお姉ちゃん。

私もそれにつられて笑う。

私は奏が死んでからのもやもやが消えた気がした。

「ねえ……お姉ちゃん……」

「なあに？」

「もう一度……奏に会うことは出来ないのかな……」

「……死んでいるのなら地獄か冥界にいるんじゃないかしら……ごめんなさい、私も

よくわからないわ」

「そっか……」

もう奏や千里には絶対に会えない。

私はその時改めてそれを実感した。

悲しいけど……これも運命つてやつなのかな……

奏……………千里……………

今まで本当にありがとう……

あなた達が命を代償にしてまで守ってくれたこの幻想郷で私は精一杯生きるよ。

絶対に不幸なんかには屈しない。

これも……………楽しいことの壁……………って考えればいいよね！

本当にありがとう……………大好きだよ……………

その心の中でメッセージを贈る。

私は両頬を自分の手でバチンと叩き、お姉ちゃんを見る。

「さー帰ろうお姉ちゃん！晩御飯冷めちゃうよー！」

そう言って、お姉ちゃんを置いて先に籠へと走る。

咲名千里は握ったままだ……………

埃かぶつてもいい……………咲名千里が何かのきつかけとなることを私は願っている。

自分だけじゃない。周りの人全員が幸せになれるような……………

これは……………私の想い人が残してくれた……………贈り物なのだから……………

すると、背後から大好きな姉の声が聞こえる。

「あ、ちよつ！待ちなさいよこいしー！」

すると、数秒でお姉ちゃんは私に追いついてきた。

私達は走りを止め、歩く。

「んもう……………急に走らないでよ……………」

「あははははー！ごめんごめん……」

こうして私たち古明地姉妹は手を繋ぎながらゆつくりと妖怪の山を降りていった。
その時の私の顔は……………笑顔だった。

16話

幻想郷へ戻りたい

ちゅんちゅんと鳥のさえずりが聞こえる。

その中で俺は目が覚めた。

「随分と長い夢を見てたな……」

目をこすりながら俺はそんなことをつぶやく。

本当に長い夢を見ていた。

なのに内容を全く思い出せない……………

「どうしちゃったんだ……俺……」

頭を軽くポンポンと叩き、ベッドから降りる。カレンダーを見て、今日の日を確

認する。

幸いに今日は日曜日。学校はない……

欠伸をしながら階段を降り、食卓へ向かう。

すると、そこにはコーヒーを飲んでいる俺と5つ離れた兄、

まなはら ひびき
愛原 響がいた。

「おはよ……兄貴……」

「ん、ああ、奏。もう朝食できてるぞ……」

両親がいない俺らはこの広い家を二人で生活している。

「ん、さんきゅ」

そう言つて、席につき合掌をして箸を手に取る。

しかし、その右手にピリツと痛みを感じる。

俺は箸を離して右の手のひらを見る。

そこには負つた覚えのない傷跡が複数……しかも結構新しい……いつ負つたんだ？

それをしばらくの間考えていると、唐突に俺の頭に何かが刺激を与えたような感触に至つた。

次は頭を抑え、痛みが引くのを待つ。

その間、身体中を見渡す。

太ももには大きな傷跡が残っている。大体手を広げたくらいの大きさの。

「……なで…………奏。聞いているのか？」

「ん？ああ、悪い、なんだ？」

「咲名千里……どこいったんだ？」

「咲……名千里……？」

あれ？その名前どっかで聞いたような……

でも思い出せない……………

「お前まだ寝ぼけてんのか？」

「そうみたい……………」

すると、兄貴ははあつとため息をついて…

「俺たち「愛原」の妖刀。昔は「幻想郷」って所で使われてたらしいけどな……………親父から使うなって言われてたやつ……………」

俺は「幻想郷」という言葉に反応した。

「幻想郷……………なんか聞き覚えのある言葉だな……………」

それを理解した途端、俺の頭の中にいくつもの記憶が流れ出した。

これは……………誰だ？

刀を持ち、女性と戦う姿。

俺か……………？

紛れもなくこの容姿は俺だった。

しかし、俺はこんなことをした覚えはない。

何故だろうか……………それなのに何か懐かしく感じる……………

朝食も済まし、やることのなくなった俺。

咲名千里……探すか……

俺はさつき兄貴が悩んでいた「咲名千里」の搜索をしようと考えた。

多分……玄関の近くにはあると思うんだけどな……

下駄箱を開けたり、クローゼットの中を調べたりと色々なところを探し回って2時間後。

「ない……………」

これだけ探しても手がかりの一つもないのだ。

俺はもうその時に諦め、自室で昼寝しようとした。

しかし俺が部屋に入ると床にあるものが刺さっていた。

「おっと……危ないな……なんだこれ？」

俺は膝を曲げ、屈む。

よくよく見ると刀の先っぽみたいだ。

20センチほどではないが綺麗な刀身だ。

なんか変な妖力的なものも感じる。

「しっかし……………折れちゃってんじゃないか……………」

俺は2本の指で嶺ところを握り引っこ抜く。

そうして刀身をもう一度見る。

すると、何かの文字が彫ってあった。

これは昔の人が残してくれたものか……………？

しかし、こんなに長い文面、よく書いたな……………

俺は感嘆しつつもその文字を読み上げる。

「……………ツ!!」

目を見開きその文字を何度も何度も読み返す。

その内容は……………

「あなたの帰りをずっと待っています。どうかまた会えますように……………私の最愛の弟。

古明地「はいし」

その刹那俺は全てを思い出した。

「はいしお姉ちゃんっ……………」

俺は涙を流す。

しかし、その瞬間に思い出す。

「待てよ……………死んだ俺がここにいてるってことは……………」

俺は刀身をもう一度見て、他に何か書いていないかを確認する。

すると案の定、その裏側にも違う形の文字で書かれていた。

「……………この街の中央街の桜の木で……………待ってる……………」

この字は……………はいしお姉ちゃんじゃない……………きつとあいつだ……………!

俺は刀身を袋に入れ、全速力で家を飛び出す。

「あ、おい!奏?!」

兄貴がなにか言っているがそんなことはそっちのけで今ある限りの全速力で走った。

50m6・3の俺が街を通り抜けるので、人の目はかなりあった。

「速いな……………あいつ」「迷惑なだけだろ……………」など、ほかの人たちは言いたい放題だ。

しかし、俺はそんなことすら耳を貸さずに、走る。

10分ほどでその桜の木がある広い公園にたどり着く。

いつもなら賑わっていること公園。

入口に入った途端、景色が変わった。

いや、桜の木の公園であることは間違いないのだが……………

空気が変わった気がする。

空も真つ黒になったが、夜にはなっていないだろう。

俺はそこで“あいつ”を必死に探す。

すると、案の定、あいつはやって来た。

「久しぶり……………奏くん……………」

そこに浮いていたのは…………俺の相棒でもあり、親友。

言わばかけがえのない大切な家族の1人。

俺よりも先に死んで…………もう二度と会えないと思っていた。

「千里……………」

俺は涙なんか流れてこなかった。

ふつと微笑み、千里を見る。

「久しぶり……………千里…」

涙が溢れたのは千里の方だった。

そのまま俺の胸へと飛び込み、大泣きする。

こうして俺と千里は再会を果たした。

数分後、ようやく落ち着いた俺達は今の状況を説明し合う。

「とりあえず、ここはどこなんだ？」

「ここは外の世界と幻想郷の境界の狭間。博麗神社が近いのかもね……………」

「じ、じゃあ幻想郷に帰れるのか?！」

俺は一瞬期待したが、千里は横に首を振って

「無理よ……………外の世界にも幻想郷にも切り離された私達はもう行き場を失っている状態よ……………」

「そ、そんな……………」

嬉しさが一気に絶望へと変わる。

しかし、千里はまともや微笑んで俺の持っていた咲名千里の半分を指さす。

「何もしなければ」ね。今は私とその咲名千里がある。方法はあるわ……」
「ほ、ホントか?!」

俺は刀身を千里に差し出し、その説明を受ける。

「私には刀を治す能力があるのは……知ってる?」

「ああ、前に折れた時に直してたしな」

「あれって折れたもの同士をくっつけているのよ……まるで磁石のように……」
「磁石のように……まさか……」

俺はその時に察した。

「そう、そのまさかだよ……折れたもう片方の咲名千里の方にこれは引っ張られる。つまり強引に幻想郷に入ることが出来る」

「で、でも、俺らは死んだから……」

すると、千里は少し目を見開いてからふふつと笑う。

「あら? 私達はまだ死んでないよ?」

「え?」

次は俺が目を見開いた。

「妖怪ってそんなにもろい体してないわよ……」

そのまま千里は淡々と説明する。

「流星の終わり」はね、人を殺す物じゃなくて……人の細胞を少しずつ転移させていく技なのよ……もつとも私が気づいたのは……私が奏達と別れた後だけ……」

片目をつぶり、俺に笑顔で説明してくる。

「そ、そうなのか……良かった……」

俺は胸に手を当て安堵の息を吐く。

亡霊じゃなく、また龍人として幻想郷に行ける。

「でも……今咲名千里がどこにあるか……なんだよね……」

千里の顔が一気に暗くなる。

「まあ、賭けだ……咲名千里がどつかの別世界じゃなくて幻想郷に落ちていることを願うよ……」

「そうだね……じゃあ行くよ！奏くん！」

俺は千里の手を握り、集中する。

すると、千里が隣で静かに唱えだした。

「愛原に仕えし妖刀よ……再び元の姿に戻りて……敵を滅せよ……」

その刹那、咲名千里の刀身が淡いピンク色の粒子を放ちながら、引つ張られていつている。

すると、目の前に次元の裂け目のようなものが強引にこじ開けられる。

「うお?!なんだこの引力……………」

俺達は引っ張られる。

「奏くん! 咲名千里は別世界にある! 賭けよう!」

「ああ! そのつもりだ! 行くぞ!」

俺と千里は同時に次元の裂け目を飛び込んだ。

こうしてもう片方の咲名千里がある世界へと降り立った。

17話

久しぶりの幻想郷

俺と千里は見覚えのある場所に着いた。

「……は……」

俺はあたりを見渡して千里に言う。

すると千里はコクつと頷いて笑顔になる。

「私達と清籟が戦った妖怪の山。つまり無事に幻想郷に着いたって訳ね」

「良かった……」

俺はひとまず幻想郷に来たことに安堵の息を吐く。

「しかし……ここからどうしたらいいもんか……地霊殿に行くか？」

「まだ行かない方がいいと思う。こいしちゃん達の悲しみが消えないうちは私達が本物だって信じてくれないんじゃないかしら……」

「……なるほどな……」

「あれ？奏さんと千里さん？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえる。

「え？早苗さん？」

空に浮いていたのは紛れもない、守矢神社の巫女、東風谷早苗さんだった。そうか……………ここは妖怪の山だ…

早苗さんがいてもおかしくない。

「あなた達……………本物ですよね？」

早苗さんが疑いの目をこちらに向けてくる。

「ああ……………そうだな……………」

俺は早苗さんの前で指を鳴らす。

すると、俺の指先に炎が出現する。

これは俺の「現象を操る程度の能力」で出した発火現象の一つだ。

「本物……………ですね……………」

すると早苗さんはふつと微笑んだ後、大きなため息をついた。

「この異変の宴会の時、地霊殿組かなりどんよりしていたんですからね……………話しくかったですよ……………」

「お、おう、ごめんなさい？」

疑問形になりつつも俺は謝罪する。

「まあ、とりあえず人里に行くよ……………」

千里が俺の手を引いて言う。

「あの、おふた方！」

大きな声で呼ばれる。

俺と千里は足を止め、再び早苗さんの方を向く。

「お昼時なのでお腹も空いているでしょう！守矢神社でご飯食べませんか？」

俺は千里の方をチラッと見る。

「いいわよ。どうせ行き場なかったし」

「じゃあお願いしようかな…早苗さん」

「はい！では守矢神社まで案内します！」

そう言つて、俺と千里は早苗さんのあとを付いていき、守矢神社に着いた。

「久しぶりに来たな……………」

俺は守矢神社全体を見てその懐かしさに驚く。

「諏訪子様！神奈子様！幻想郷の英雄お2人を連れてきました！」

早苗さんは元氣よく戸を開け大きな声で神様ふた리를呼ぶ。

「およ？本当に奏かい？」

いきなり俺の背後から声がした。

「うお?!」

「きゃっ?!」

二人同時に飛び上がる。

心臓が今もドクドクとなっている。

「す、諏訪子さん……………驚かさないでくださいよ……………」

「あはは♪その調子だどうやら本物のようだね！」

大きな口を開け、俺の肩に手を乗せる。

「疑ってたんですね……………」

「そりやそうさ♪だつて死んだものかと思つたんだもん！」

まあ確かにそうか……………俺は心の中で納得する。

「そう言えば諏訪子ちゃん。神奈子ちゃんは？」

千里が思い出したかのように諏訪子さんに聞いた。

諏訪子さんは少しの間考え、こう答えた。

「……………寝てるんじゃない？」

「なんで知らないんですか……………」

俺は呆れたように肩を落としながら言う。

「なあ、千里。お前神奈子さんに何か用があるのか？」

「ああ、別にそんな重要じゃないよ……………ただ私たちがいなくなった後、幻想郷と清籟の行方を知りたくて……………」

「それはあたしじゃダメなお……………?」

諏訪子さんが大粒の涙を流しながら千里に泣きつく。

「ああ、まあ諏訪子ちゃんでもいいけど……………神奈子ちゃんの方がいいかなって…………」

「あはは……………」

「仕方ないな……………神奈子ー!」

諏訪子さんが大きな声でもう一人の神様を呼ぶ。

「おーい!寝ぼけてんのー?」

いつまで経っても返事がない。

諏訪子さんはそれに少し腹を立てたよう

「おおーい!ババア!耳遠くなったのかー!」

さつきよりも大きな声でなおかつ凄く挑発気味に言う。

すると諏訪子さんの背後からピチュンつと小さな音を立てながら一つの弾幕が飛ん

できた。

「あ、諏訪子さん危ない…………」

「へっ?」

諏訪子さんは声を出す前に目の前で弾幕とともに大爆発した。

すると上から例の神奈子さんがふよふよと浮いていた。

「おや、久しぶり。奏……」

「ご無沙汰してます。神奈子さん」

俺は一礼する。

するとその隣で千里が俺よりも一步前に出て神奈子に言う。

「ねえ、神奈子ちゃん。私たちがいなくなった後の事教えて？」

「ああ、もちろんいいぞ、とりあえず中に入ろうか……」

神奈子さんはスーツと下に降りてきて諏訪子さんを下敷きにした。

「ぐえっ！」

「おおつと済まない諏訪子♪」 ババア「だから諏訪子が見えなかったよ♪」

笑顔で対応している。

俺はその時に一瞬で理解出来た。この人怒らせたらあかんヤツや……

そのまま神社に入り、椅子に座る。

「さて、まずは清籟の行方について話そうか」

「うん、お願い」

「お願いします」

一呼吸おいて神奈子さんは真剣な顔付きで話す。

「清籟は奏のラストスペルで完全に消滅した……それはもう細胞の一つも残らないほどに……」

「そうなんですか？俺はてつきりまだ生きているのかと……」

「いや、清籟が死んだおかげでその他の不知達は伝達機能が失われ、分散して逃げていたので倒しやすかった……」

案外……清籟が1人で力をつけていた感じだな……部下の統率力がまるで無かったみたいだ……

「うーん……後は君たちがいなくなった後の現状だね……まず幻想郷バランスについて……これは少し博麗大結界に傷がついた程度、今では修復も完了している」

「まああの戦いでそれくらいの傷ならおいしいほうですね……」

「ああ、それ以外は何も変わっていないよ……」

「そっか……」

丁度その会話が終わった時、早苗さんの声が聞こえてきた。

「ご飯できましたよー！食卓に来てくださーい！」

「じゃあ行くうか」

「はい」

食卓に向かうとそこには、日本料理という感じのものが沢山出てきた。

今は夏なのでそうめんなど美味しそうなものが沢山ある。

俺達は合掌をし、箸を手取る。

色々なものを頬張った。

「……………美味い……………」

正直な感想が言葉に出た。

「そうでしょうそうでしょう?」

早苗さんは腰に手を当て、えっへんとドヤ顔をする。

「ほんとに美味しいわね……………」

俺と千里はその美味しさに呆気に取られた。

そのまま20分ほどで食べ尽くした。

「フウ……………ご馳走様でした!」

「はい、お粗末さまでした」

すると、早苗さんが手際よく食器を片付けてくれた。

「ね、奏くん」

「ん、なんだ?」

「こいしちゃん達にもさ、さつきみたいに現象のやつ使えば信じてくれるんじゃないかな？」

「俺もそれ思ってたんだ……………」

「…………行く？」

千里は少しとまどいながらも俺を誘う。

「そうだな、行こうか」

「行先は決まったのかい？」

神奈子さんが片目をつぶりながら話しかけてくる。

「はい、色々ありますがどうぞございました」

「いやいや、私達は何もしてないよ……………」

両手をブンブンと振って否定する。

「……………またいつでも守矢神社に遊びに来てね…」

「はい、では、お邪魔しました」

そう言つて、俺は戸を引いて外に出た。

日光が俺の体を刺激する。

周りのセミの音がそれをより一層引き立たせている。

「暑いな……………」

「ほら！弱音を吐かない！！ちやつちやつと歩く！」

背中を千里がバンバンと叩く。

「……………飛んでいいか？」

「ダメ！ただでさえ体力衰えてるんだから！」

「でもお前は飛んでるじゃん……………」

千里はいつものようにふよふよと浮いている。

「私はいいの！」

「ええ……………」

そんな会話をしているうちに地底についた。

そのままテクテクと20分ほど歩いていると一つの大きな屋敷が見えた。

「なんかここに来るのも久しぶりだな……………4日ぶりくらいか？」

「そうね……………大体そのくらいかな……………」

その屋敷の全体を見渡す。

久しぶりに実家に帰ってきた感がある。

俺はこの気分は嫌いじゃない。

心が和らぐ感じがする。

そう言えば……………初めてこいしお姉ちゃんと会ったのもここだったか……………

「門の前…だったよな……………」

「何が？」

千里がひよこつと顔を出す。

「いや、何でもない……………入るの怖いけど……………頑張るか……………」

近寄ってドアノブに手をかけたその時。

「……………誰？」

後ろから……………愛しいあの人の声が聞こえる。

俺は振り向くのが正直怖かった。

本当にあの人のか……あのひとじゃなかったらどうしようか……
そんなことを思いつつも俺はゆっくりと振り返ってしまう……

「はいし……お姉ちゃん……」

俺とこいしお姉ちゃんは再び同じ場所であ会った。

18話

ただいま

私は……………夢でも見ているのかな……………

奏達がいなくなつてから……………私が夢見ていたことが今ここで起きている……………
でも……………これが夢でもいい……………現実じゃなくていい……………

「かな……………で……………」

「こいしお姉ちゃん…久しぶり……………」

「やあ!こいしちゃん!」

いや……………これは絶対に現実だ……………

今はそんなことどうだっていい……………

私は大粒の涙を出して、今年一番の嬉しさを吐き出しながら

「奏ええ!!」

奏に思いつきり飛びつく。

ああ……………この温もりは奏だ……………

私の肌が奏の体温によって温められる。

「ただいま……………こいしちゃん……………」

私は数分の間、ずっと奏に抱きついたまま泣いていた。

そして数分後、私たちは地霊殿に入り、会話をしながら進む。

「そう言えば奏。姿戻ったね」

よくよく見るとあの子供の体から大人の体へと戻って言った。

やっぱりこつちの方がかっこよくて私は好きだ。

もちろん子供の方も嫌いじゃないが、大人の方が頼りがいがある。服を着たままだと細身だが、奏は筋肉質だ。

永琳が奏の治療を一度した時、上半身を見たが惚れ惚れするほどの美しい筋肉があった。

「ああ、そう言えば全然気にしてなかったな……」

「そういうや奏くんの体、私と会った時にはもう戻ってたね？」

「そうなの？まあそつちの方が私はかっこいいと思うよ？」

すると奏はニヤニヤと笑って

「あ、やっぱりそう？いやー戻ってよかったー」

と少しずつ調子乗り始めたので

「やつぱり前言撤回。普通の奏に戻ったね……」

「ええー……」

がくんと肩を落とす奏。

やつぱり大人になっても奏は変わらないな……

「え、奏?！」

書齋の方から大きな驚きの声をあげるお姉ちゃんの姿があった。

「あ、さとり。おつす」

「おつす」じゃないわよ！今までどこに行ってたの？」

「どっかって言われてもな……」

奏は少し答えに迷う。

すると、隣から千里が真剣な顔付きでお姉ちゃんに話す。

「それを踏まえて不知の話がしたいから食卓にでも行きましょう？ちようど夜時だし

……」

「そうね……あ、奏たちの部屋はそのまま残してあるから」

「お、ありがとう」

そう言つて、奏と千里は書齋をあとにする。

ここに残ったのはお姉ちゃんと私の2人だけだ。

「……………良かったわね、こいし。想いを伝えられることが出来るわね♪」

「へっ?!ちよつ、そんな大きな声で言わないでよ!」

私は奏に聞こえてないかだけを確認し、お姉ちゃんに怒る。

「ふふつ、ごめんなさいね…」

「むう〜」

私は頬をふくらませてお姉ちゃんを睨む。

「こんな会話ができるのも奏達のおかげかな…………?」

それから30分後。お隣からご飯ができたと聞いた。

食卓へ向かうとほかの全員がもう席に座っていた。

「いただきます!」

全員で合掌をし、箸を進める。

「あ、ねえねえ!二人共!ちようど明日に夏の花火大会があるの知ってる?もう7月だし…………」

「ああ、そういえば……………異変解決も兼ねてやるから博麗神社全面協力……………なんだっ

「何か？」

「そうそう！それにみんなで行きたいなーって！」

その花火大会はいつもお姉ちゃんとお空たちで行っているのだが今回は奏達もいるのもつと盛り上げたいと思った。

「ああ、いいと思う！奏くんもいいよね！」

「ああ、俺は構わないよ」

「やったー！」

私は笑顔になって素直に喜ぶ。

「さて、話を切り替えて、さとりちゃん。話していいかな？」

「ええ、お願い」

「うん、これはさつき………というか調べたら分かったんだけど……清籟の目的は「裏世界」へ行くことだよね？」

「ああ、そんなこと言ってた」

「その裏世界って言うのは奏の元いた世界。つまり「外の世界」の事を指していたらしいの……」

「ってことは………」

「そう。あのまま負けてたら外の世界がピンチだったってこと」

私はその事実を目を見開いて驚く。

「で、でもなんで俺が外の世界に戻ったんだ……?」

「実は……こっちの世界の時間が進むと……あっちの世界は反比例するのよ……」

「どういうこと?」

私は千里のその言葉に理解が追いつかなくなりつい質問してしまった。

「幻想郷の時間が「進む」と外の世界の時間が「戻る」。つまりはタイムスリップするのよ……」

「だから……俺が殺される前に戻ったのか……」

「そーゆー事。まあどうして奏が外の世界に送られたのかは分からないけど……」

「まだまだ謎はあるってこと……か……」

「まあ終わったことを考えてもしよーがない!」

千里が切り替えて明るい声で言う。

いつの間にか食べ終わっていた私は食器を片付け、奏と千里に声をかける。

「ね! 久しぶりに弾幕ごっこしよーよ!」

「お、いいね! やろうよ奏くん!」

「ああ、いいぞ」

そう言って、私達は地霊殿の庭に出た。

「よし！行くよ！スペルカード！表象「弾幕バラノイア」！」

元気よく詠唱をし魔法陣から弾幕を射出する。

それとは対照的に奏は静かな詠唱を唱える。

「……………スペルカード！氷炎「フローズン・バーン」！」

奏の口から聞いたことのないスペルカードが唱えられる。

属性入りの弾幕が「氷」「炎」と交互に撃たれる。

私はグレイズを稼ぎながら避けていくが段々と密度がこくなっていく。

「……………聞いたことないよ……………そのスペルカード……………」

「そりや……………初めて使ったもん……………」

「むうー。スペルカード！抑制「スーパーエゴ」！」

軌道を変え、弾幕の質もどんとどんと上げていく、奏は咲名千里を鞘から抜いて私の弾幕を斬っていく。

「もう終わらせる！」

奏の詠唱が微かに聞こえてきた。

「天候を満ところ我はあり。黄泉の門開くところ汝あり……………いでよ……………神の雷……………」

この技には聞き覚えがある。

確か……清籟の……

「インディグネイション!!」

私の頭上に大きな魔法陣が展開されその中心から一本の巨大な雷が落下する。
私はそれに避けきれず、当たってしまふ。

「ああ……どうやったら奏に勝てるのかな……」

「あはは……こいしちゃんも随分力つけたんじゃない?」

「負けて言われても嬉しくない!」

「じゃあ俺に勝たないとねー?」

「分かってるよ!」

奏との会話はやはり楽しい。

ほかのものを忘れさせてくれる包み込むような声音だ。

私はこういう所にも惚れたのかな……

私は明日の花火大会を心から楽しみにしていた。

19話

着物選び

花火大会。

毎年この時期に行われるのだが、今回は以前の不知襲撃事件の解決も兼ねて博麗神社が宴会の代わりに花火大会をさらに盛り上げようとズボラな霊夢がそういつた案を出して、博麗神社全面協力の花火大会となった。

ただ単に宴会はゴミが残るから嫌だからだろうけど……

正直、奏に宴会の楽しさを伝えたかったが、仕方ない。花火大会を思いつきり楽しもう。

そして……奏に想いを伝えよう……そう決意した。

「あ、ねえねえ奏！」

「ん？どうしたのこいしちゃん？」

「今日ね、お姉ちゃんと着物を人里に借りに行くんだけど……付いてきてくれない？ほら、お隣に明日の晩御飯の材料も頼まれてるでしょ？それにお姉ちゃんと私だけじゃ手不足だから……」

「ああ、全然構わないよ……荷物持ち……ね」

私の本心は隠したまま。適当な理由を付けて奏と共にいる時間を増やそうとする。今は午前11時。

お姉ちゃんの準備が終わるのを待っているところだ。

それから数分。

「ごめん、お待たせ」

準備を終えたお姉ちゃんが書斎から出てくる。

「じゃ、行こうか」

そう言っ、私とお姉ちゃんと奏の3人、千里は今爆睡中なので咲名千里だけ持っ、きていた。

地底から地上に出るため、飛んで行かなければいけない。

私とお姉ちゃんは普通に飛べるのだが、奏の場合は翼が必要になっている。

「ねえ、奏」

「ん？」

お姉ちゃんが訝しげな顔で奏に質問をする。

「その羽って………実際は何なの？少し透けてるように見えるし……」

「俺の種族って知ってるか？」

「え、ええ、「龍人」だったわよね？」

「そう、龍人は元々龍の系列だから翼で飛ぶことしか出来ないんだよ……」
そのまま奏は淡々と説明をする。

「この翼は俺の龍人の妖力が集まったものなんだ。一つの妖力細胞が連続して重なり、翼のように風の抵抗を受け、飛ぶことが出来る。とまあ、こんな感じ」
「なるほど……全然分かんない」

私はて今の奏の話が難しすぎて途中から右から左に聞き流していた。

「……………まあ行こうか……………」

奏は一瞬こちらを向いて溜息をついた。

私ってそんなに頭悪いのかな……………？

奏がここに来てからそう思うことが多々ある。

まあどうだっかっていいが……………

それから数分で人里にたどり着く。

そこは花火大会の準備が行われていた。

屋台や櫓など、祭り感が出ている。

人もたくさんいて、しっかりと歩くことが精一杯くらい。

そうしてようやくたどり着いた着物屋さん「麗」。

人里では唯一の着物屋さんだ。

この時期はここも大繁盛だろう。

「おばちゃん！」

私は大きな声で呼んだ。

「あら、こいしちゃん、着物着るのかい？」

ここのおばちゃんとは不知襲撃事件のあとに知り合い、仲良くなった。面白く、優しい。頼りがいのあるおばちゃんだ。

今はこうやって人間ともコミュニケーションが取れるようになった。

どれもこれも奏と千里のおかげだ。

「うん！今日の花火大会の着物を選びたくて！」

「そうかいそうかい、じゃ採寸するからそこに座っておりなさい。さとりちゃんもかい？」

「え、あ、はい。よろしくお願いします」

お姉ちゃんはここのおばちゃんとは知り合いではなく、少し緊張していた。

それを察したおばちゃんは

「ただの老いばれに緊張する必要はないですよ。さとりちゃん。さ、こいしちゃんの隣に」

「は、はい……」

そう言ってお姉ちゃんは私の隣の椅子に座る。

おばちゃんは次に奏の存在に気づく。

「おや、あの人はあんたらの兄貴かい？」

「いいえ、親族です」

「ほっほっ、そうかいな、あんたらかつこいい男が近くにいて良かったのお……………」

「あ、ははは……………」

奏はその返答困ったのか、苦笑いをする。

「よおし、こいしちゃん。着物のある所に案内するよ」

「ありがとうおばちゃん。じゃあ奏。今のうちに晩御飯買ってきたら？」

私はまだ奏に着物姿を見せなくなかったので、奏を買い物に行かせ、その間に決める。そう考えていた。

「さとりちゃん。あんたも」

「あ、はい、ありがとうございませす」

お姉ちゃんはおばちゃんとの会話で少し打ち解けたようだ。

このおばちゃん本当に凄いな……………」

人見知りのお姉ちゃんですえスグに仲良くなれる。

「わあ……この着物可愛い！」

私は色々な着物を物色していた。

花柄や金魚柄など可愛い着物が沢山ある。

これは迷いそうだ……………

私は着物を奏に見せるのが楽しみで仕方がなかった。

俺はこいしちゃんときとりが着物選びをしている間、お隣から頼まれていた明日の晩御飯の食材を買いに行っていた。

俺は歩きながら一つの事を思考していた。

最近、こいしちゃんと話すとなんか心臓が飛び跳ねそうになる時がある。

どうしてだ？「弟」から「兄」になって見方が変わったからか？

こういうのを「恋」と言うらしいが、どうもそれとも違うらしい……………

もちろんこいしちゃんのこと大好きだ……………しかし、1人の女性として見るのは俺としては難がある……………

いや違うな。

俺はこいしちゃんに恋愛感情を「抱いていない」のではなく、「抱いていないふり」をしていったんだ。

そうだ……俺はこいしちゃんが家族としても妹としても……そして、1人の女性としても……好きだ。

俺は自分の胸に手を当てしばらく考える。

「どうやら……そうみたいだな……」

この時初めて自分の気持ちと向き合うことができた気がした。

「まあ……今考えても意味無いか……」

俺は気持ちを切り替え、買い物を進める。

お隣から貰ったメモ帳には買うべき食材の名前がずらりと載っていた。

いや、ずらりとは並んでいないな……

俺もびつくりしたよ……

だってメモの内容が……

買って欲しいもの

・肉

・魚（出来ればマグロらへん）

・味噌

・野菜

・玉ねぎとか……………

雑っ！雑すぎる！

色々突っ込みたいところはあがるが……二つだけ……………

マグロらへんってなんだよ！

マグロの周りには何がいるんだよ！

肉って抽象的すぎんだよ!!

豚肉とか牛肉とか鶏肉とか色々あんだろうが……………

買い物も試練ってか？やかましいわ！

と、心の中でお隣にツツコミを入れながら頼まれた食材をホイホイとかごの中に入れてる。

「後は味噌……………か……………」

俺は買い物を終え「麗」の前に立っていた。

こいしちゃんは「ここで待ってて！」と言っていたが一向にここに来ない。どんだけ迷ってるんだ……………

そう思っていると店の戸がガラガラと開いた。

「ごめんごめん！着方に手こずっちゃって！」

「え？こいしちゃんまだ着物きてないのに？」

「うん、一度地霊殿に帰るでしょ？その時に着ようかなって、奏も楽しみが一つ増えたね！」

「まあ……そうだな……さとりも借りたのか？」

「ええ、一応ね」

「そっか、楽しみだなあ……」

俺はこいしちゃんとさとりの着物に胸をときめかせていた。

それに……幻想郷の祭りはどれだけ面白いのか……気になると同時に楽しみで仕方がなかった。

俺は鼻歌交じりにテクテクと歩きながら地霊殿へと帰った。

20話

祭り

俺達は人里でお昼ご飯を食べ、そのまま地霊殿へと帰った。

「あゝ、美味かった……」

「奏、おじさんくさいよ……」

「いいのっ美味しかったから!」

「あはは、太らないようにね〜?」

「これだけじゃ太らないよ!」

そんな会話をしながら俺達は地霊殿に着いた。

「あ、奏くん！おかえりー」

「あ、千里。もう起きたのか？」

「そりや昼だしね」

「おはよ！千里！」

「ん、こいしちゃんときとりちゃんもおはよ」

「あ、こいしちゃん、さとり。着物リビングに置いとくよ」

着物の入った紙袋を私とお姉ちゃんから受け取り、奏は先に地霊殿へと入った。私はその背中をずっと見ていた。

するとお姉ちゃんがにやにやした顔で私の顔をのぞき込む。

「あらあ？やはり恋をすると人って変わるのねえ？」

「うぐっ！」

私はその場で顔を赤くし硬直する。

「ふうーん、こいしちゃん頑張つてねえー♪」

「も、もう！2人ともからかわないで！」

「あはははは！可愛いですなあさとりちゃん？」

「ええ、姉ながら誇らしいわ」

「もう……………」

そんなお姉ちゃん達の会話を聞かないように、私は自室へと戻る。

ああ、告白してみようかな……

それから五時間後。

「そろそろ着替えましょうか、こいし」

「あ、うん」

「じゃあ俺は外で待ってるよ」

そう言って奏は地霊殿の扉を開け、外に出る。

私達は更衣室へと歩を進める。

おぼちゃん教えてくれたおかげで着付けには手間はかからなかった。

ああ……こいしちゃんの着物楽しみだな……

俺は心の中でこいしちゃんの着物を心から楽しみにしていた。

「お待たせー!!」

元氣よく扉が開けられる。

俺は即座にこいしちゃんの着物を見た。

「……ッ!!」

俺はその姿に言葉を失う。

かつ、可愛い!!

なんとそこには2人も天使がいたようだ。

さとりは紫をベースにしたアサガオの着物。

こいしちゃんは黄色主体の金魚柄。

可愛すぎる！

今日このふたりと回るのか？ 恥ずかしいな……

「ど、どう？ 奏……」

こいしちゃんは少し自信なさげな声を発する。

「ああ、めちやくちや可愛いよ2人とも！」

と、正直なことを大声で言ってしまう。

「も、もう、声が大きいよ奏！」

「いいじゃんか、可愛いんだから」

俺がそう言うところいしちゃんは顔を真っ赤にして下を向く。

それを制したのはさとりだった。

「まあまあ2人とも、行きましよう？」

俺達はそう言っ、人里にもう一度向かった。

人里は思ったより賑わっていてまっすぐ歩ける状態では無かった。

「こいしちゃん、さとり。離れんなよ」

「分かつてるよ………あ！奏！射的やってよ！」

「俺あんま得意じゃないぞ………」

「いいのいいの！今日は外した時の奏の顔が見たいの！」

「それ言葉にしない」

「じゃあこいし。私と千里は別行動するから、頑張りなさいよ！」

お姉ちゃんは空気を読んで私と奏の二人つきりにしてくれた。奏はお金を払い射的用の銃を手を取った。

すると射的屋のおじさんが

「おやおや！幻想郷の英雄様がこんな所に！よっしゃ！無料にしてやる！！英雄様の銃の腕を見せてもらおう！」

「あのなあおつちゃん。俺は銃じゃなくて刀なの……」

随分元気のいいおじさんだな……

「奏、奏！あそこのあれ取って！」

「ん？ペンギンか？」

「ペンギン？」

「おう、あれは霖之助さんが外から取り寄せたやつらしくてな、いいんじやねえか英雄様

！彼女にプレゼントや！」

「か、彼女／＼／」

私はそのおじさんの言葉に顔を赤くする。

傍から見たら私達はそう見えてるのかな……………

「……………兄妹だよおっちゃん……………」

そう言つて、奏はペンギンの人形を狙う。

すると一発目で見命中。

当たつただけで周りは拍手喝采だった。

これは奏が英雄になつたからであろう。

「はい、こいしちゃん」

「ありがとう奏！……………わあ、可愛い♪」

私はペンギンをぎゅつと抱きしめる。

やった！奏から貰つたプレゼントだ！

「おお！刀だけじゃねえな！どや、もう一発サーピスしてやる！」

「こいしちゃん？次は何がいい？」

「んーと、じゃああれ！」

こんな感じで私と奏はお祭りデートの様な感じで楽しかったよ。

「ああ……少しはしやぎすぎたな……」

「だね……ちよつと足が痛いや……」

私は履き慣れていない下駄を履いていたので少し足が痛む。

歩けないほどではないが、結構痛みはある。

「大丈夫？冷やすもの持ってこようか？」

「え、いいよ！歩けるから」

「いいの！ちよつと待ってて」

そう言つて、奏は人混みの中に消える。

実は私の体はもう疲労困憊状態だ。

弾幕なんでもつてのほか、こんな時に襲われたらもう命ないくらいだ。

「お、カワイイ子いるじゃねえか！」

と、案の定その予想は的中してしまった。

私は振り返りその声の主の方を見る。

「誰かと思えば地霊殿の妹ちゃんじゃねえか？近くで見ると可愛いなあ……」
「いいじゃん！兄貴、こいつがいい！」

そこに居たのは奏より遥かに年上の中年男性とそれより少し若めの男性。
不味い………弾幕が打てない今の状況は私はもはやただの女の子だ。

「そうだな………おう、こいしちゃん………だっけか？ちよつと俺らと遊ばねえ？」
「いやだよ、連れがいるの！」

「……あの幻想郷の英雄気取りか………」

私はその言葉にカチンときた。

「奏は英雄気取りなんかじゃない！」

「お、見事につられて可愛いねえ♪いいや英雄気取りさ、たかだか妖怪に勝っただけで………」

「あなた達は何もしていないじゃない！ただ人里で怯えていただけでしょ!!」
私はムキになって大きな声で叫んでしまう。

しかし、その口を中年男性が塞ぐ。

「おつとお………それじゃこつちにおいで？」

「むぐううー！」

私は暴れるが力がなくそのまま男2人に連れ去られてしまう。

「奏………助けて！」

私は路地裏に連れていかれ、2人に拘束される。

「ほおら♪俺がいい声で鳴かせてやるよ？」

「いやーやめて！」

「おおう、可愛いなあ」

男は荒い息を立てながらだんだんと私に顔を近づけてくる。

男の手は私の着物の中に伸び、肌を触れられる。

「いやー」

瞬間、悪寒が走る。

気持ち悪い！いやだ！

こんな時に弾幕が使えればっ！

「さあ………始めようかこいしちゃん？」

男2人が自分の唇をぺろっと舐めながら再び私に近づいてくる。

「いやー奏ー助けてー！」

「あれ？こいしちゃん？」

俺はこいしちゃんの足を冷やすものを射的のおつちちゃんから貰ってきた。しかし、さつきまで俺達がいた所にはこいしちゃんはいなかった。

「どこいったんだろ？」

俺は探しに出ようとした時、足に何か当たった。

「これは……………こいしちゃんにあげたペンギン……………」

俺はそれを拾い上げ、一つの予感がした。

「まさか……………」

くそっ！俺が目を離さなければ！

ここでは飛ぶことが出来ないので、全力でダッシュする。

「待つてろよ……………こいしちゃん……………」

こいしちゃんが連れていかれたであろう所に走る。

路地裏の屋根に行くと、案の定、男2人がこいしちゃんを拘束していた。

「よし……行くか……」

そう呟いて俺は刀を抜いた。

そして路地裏に降りた。

「何やってんだ？お前ら」

私の隣で愛しい人の声が聞こえた。

「奏！」

「ごめんね、こいしちゃん……今助けるから……」

「この……ッ英雄気取りがあ!!」

こいしちゃんを突き放し、俺に拳銃を向ける。

「もう少しでこいしちゃんを……食べるのが出来たのにい!!」

半狂乱的な顔で奏にキレてる。

しかし、口からは涎がたれ、鼻息も荒い。

キモイ……こんなにキモイ人とあつたのは初めてかも

「そんな理由でこいしちゃんをさらつたのか?」

奏はそれにも動じず、怒りを込めた声で言う。

「当たり前だ! お前だけこいしちゃんを占領しやがつて! おまえさえいなければア!」

ばああん。と拳銃の音が路地裏に響く。

私は耳を塞いで奏を見る。

奏は無傷だった。まあ当たり前か。

「なっ?!」

男は驚きの声をあげる。

奏の足元には真つ二つになった弾丸が落ちていた。

まさか……弾を斬つたの?

「……テメエら見てえなクソに負けてる暇なんかねえんだよ」

こんなに口の悪い奏を見るのは初めてだ。

目つきもかなり悪くなり、声も低い。

「う、うわあああ！」

男は銃を乱射する。

しかし、奏は足を動かさず、刀を振り、全ての弾を斬っていた。

一人の若い男は逃げており、中年男性はその場で呆然としていた。

男に刀を間近まで近づけ、奏はこう言う。

「この刀をお前の血で汚したくない、とつとと失せろ下郎……」

静かに言ったのだが……迫力は桁違いだ。

そのまま男はドスドスと逃げていった。

その場で剣を一振り、鞘に収め、私の方を見る。

「ごめんね……こいしちゃん……俺がちゃんと見ていれば……」

私は奏に抱きつく。

怖かった……

私はその場で涙を流す。

数分間その場で泣き

「大丈夫？こいしちゃん」

「うん……」

「じゃあ、祭り仕切り直そうか、はい、これ」

そうやって、奏が差し出したのは……奏に取ってもらったペンギンだ。
私はそれを受け取り、ぎゅっと抱きしめる。

「じゃ、行こう。こいしちゃん」

「うん！」

今度は奏の手を握り、私達はまた人混みの中に消えた。

f i n a l s t o r y

兄妹から姉弟、姉弟か

ら恋人

祭りもそろそろ終盤に近づき、もうすぐ花火が打ち上がる頃だ。

私達は妖怪の山のあの広場で見ると決めた。

今までのことをそこで洗いざらい流すために……

広場につき、私はペンギンをぎゅっと抱きしめたままだ。

このペンギンは人形なのに暖かい、奏から貰ったと言うことが何よりの嬉しさだ。

「ね、奏」

「ん？どつたの？」

「この広場さ……誰も来ないけど……花火見えるの？」

誰ひとり来ない。穴場スポットなのだろうか？

それとも花火の見えない所だから誰も来ないのだろうか……

「うーん……千里曰く、ここは本当に綺麗に花火が見えるって言ってたけど……」

「せ、千里が言うとなんか説得力ないな……」

「それは俺も思った」

「んね……」

私達は顔を見合い、クスクスと笑う。

こんな関係を崩さず、肩書きを「兄妹」から「恋人」へと書き換えたい。
するとその瞬間。

1発の大きな赤花火が夜空に開いた。

「おお……………」

「綺麗……………」

私と奏はその花火に圧巻される。

やばい！……………緊張が……………

私はこの花火で告白すると決めていた。

しかし、いざ口にしようとするや緊張が唇を塞ごうとする。

どうして……………？キスも出来たのに……………

これが……………告白の壁なのかな……………

そのまま花火は綺麗な花を咲かせながらバンバンと散っていく。

私は顔を赤くして下を向いていると……………

「なあ、こいしちゃん……………」

奏が口を開いた。

花火の光によって一瞬だけ奏の顔が見える。

緊張していた。

「な、何？」

「俺はな……………この幻想郷に来て良かったと思ってる」

「う、うん」

「だから……その……こいしちゃんの弟になったことも……さとり達と家族になつたことも……本当に嬉しかったし、楽しかった」

奏は静かに淡々と言葉を並べる。

私の耳には花火の音と奏の小さな声しか入つてこなかった。

「もう単刀直入に言う」

「う、うん」

私はごくんと息を呑む、大体何の話かはわかるかもしれない……告白かな……

しかし、奏も私と同じで上手く言葉に出来ず、緊張しているのがよく分かる。

しかし、奏は遂にその言葉を告げようとする。

「こいしちゃん……俺は……こいしちゃんの事が……」

「……………」

「すき」

「あ！ いたいた！ おーい！ 奏くん！ こいしちゃんー！」

「……………へ？」

奏の言葉に聞き覚えのある声が被さる。

千里だ。

「せ、千里?!」

私と奏は同時に驚く。

「もう！ さとりちゃんともはぐれちゃつて……………2人をとりあえず探そうつて考えてね！
こんな所に穴場があつたんだ！」

奏は赤面して顔を俯かせている。

その顔にはかなりの悔しさと後悔が見えた。

無意識の私でも分かるくらい……………

「そ、そうなんだ……………お姉ちゃん……………どこいったんだろ？」

私はそのいたたまれない空気を壊すため、口を開く。

「そうなんだよ！多分祭り会場にいると思うんだけど……………つてお邪魔だったかな？」

千里がようやくそれに察し、少し首をかしげていう。

私は反射的に両手をブンブンと横に振ってしまふ。

「う、ううん！全然そんなことないよ！じゃあ行こうか！」

「そ、そう？じゃあ奏くん、こいしちゃん。一緒に来てもらっていい？」

「あ、うん！わかった！」

「あ、ああ……………」

こうして奏の多分告白は失敗に終わってしまった。

この後、お姉ちゃんも見つかり花火はとつくのとうに終わってしまったので地霊殿に帰った。

くそ!!

せつかくこいしちゃんに想いを伝えるチャンスだったのに!

俺が勇気を出さなかつたから!

あの場合には千里が悪い訳では無い。いつまで経つても俺が長々しい御託を並べていたからだ。

自室の部屋に戻り、俺はベッドに横たわる。

「はぁ……………」

深いため息をつき、俺はそのまま瞼を閉じる。

翌朝。

俺が朝食のために食卓へと向かう。

そこでこいしちゃんと目が合う。

「お、おはよ、こいしちゃん……………」

「う、うん……おはよう……」

こんな感じでいつもよりも会話が続かない。

昨日のが影響しているんだろうが……

「こいしちゃん……昨日の着物つてもう返したの？」

「あ、うん、おばちゃんを取りに来てくれたんだ」

「へえ……凄いな……あの人も年なのはどうやって地底に来たんだ？」

「私もわからないな……」

「……………」

「……………」

ああああああ!! 気まずい! 気まず過ぎる!

昨日ちゃんと告白しておけば!

俺は後悔をする。

そうこうしている間に全員が食卓に来た。

朝食も食べ終わり俺は自室に戻る。

そこでガチャつとドアが開く。

「ん? 千里か?」

千里は少し申し訳なさそうに入ってくる。

「ごめんね！」

部屋に入ってくるなり、唐突に頭を下げる。

「お、おいおい！なんだよ！」

「私が奏くん達と合流した後、さとりちゃんが奏くんの心を読んだらしくてね……………」
告白……………しようとしてたんでしょ？」

さとりのやつ……………こういうのは言わない方がいいだろうに……………

「あ、ああ、そうだけど……………気にすんなよ千里。あれは俺がグダグダしてて上手く告白できなかつたんだ。千里は悪くないさ……………」

「う、うん、ありがとう……………」

そう言っても千里はまだまだ反省の色が見える。

「……………その代わりと言っちゃあなんだが……………」

「う、うん！私に出来ることはなんでも言つて！」

千里は少し食い気味に聞いてくる。

俺は一步引いて千里にこう頼む。

「夜の星が綺麗に見えるところを探してくんねえかな……………渡したいものがあるんだ……………」

「わ、分かった！」

そう言っつて、千里は全速力で外に出た。

そんなに反省しなくても俺は怒ってないのに……そう心の中で呟いて、咲名千里を鞘から抜き、刀身を手入れをする。

するとその数分後、千里が帰ってきた。

「見つけたよ！」

「はや……」

ビックリするくらいの早さだ。

まだ頼んで15分くらいなのに……

「本当に見えるのか？」

「心配ない！絶対きれいに見える！」

「………分かった、案内してくれ」

そう言っつて、俺は千里について行く。

その現場に着くと本当に綺麗に見えるような所だった。

「ここにするか………ありがとう千里」

「ううん！お安い御用だよ！じゃあ告白ファイト！」

千里は右手をぐつと立てて刀の中に入る。

するとスグに寝息がたった。

千里、昨日は多分罪悪感で寝れなかったのかな……

「サンキューな……千里……」

刀を指で撫でて優しく微笑む。

すると千里の寝息が幸せそうに聞こえ始めた。

私は奏の告白モドキを受けてから少し気まづくなってしまふ。

奏がせっかく話しかけてくれたのに、私から話を遮つちやう……

その夜。私達は晩御飯を食べ終えそれぞれの部屋へと戻る時、

「ハ、ハ、ハ、こしちゃん」

少し戸惑いのある奏の声が聞こえた。

「ん、奏。どしたの？」

「昨日の花火しつかり見れなかったからさ、ちよつと夜風に当たりながら星を見ない？」
奏のその案は素敵なものだった。

現在は夏。夜風に当たるのは気持ちいいのだろう……

「わ、分かった行こう……」

私はその案に乗り、奏について行った。

ドアを開けるとまだ少し暑さは残るが、日中よりは5度ほど低い。涼しい風が私の全身を刺激する。

「着いてきて」

奏は私に手を差し出した。

その体の割に大きな手に私は少し見惚れる。

そしてその手に自分の手を乗せる。

こうして見ると手を繋いでいる恋人にも見える。

すると数分である場所につく。

「ここは……妖怪の山の……頂上？」

そう、ここは妖怪の山のとつぺんの芝生公園だった。

ここからは幻想郷が一望でき、人里の灯もほんのりと見えるかなりロマンチックな場所だ。

「はい、ここに座ろ？」

奏が一足先に芝生に座り、その隣を右手でポンポンと叩く。
そこに私はちよこんと座る。

そこからはまた沈黙。

「~~~~ツ！」

私はかなりこの空気に気まずさを覚えるが…

「こいしちゃん、上を見てみて」

「え？」

「良いから」

私は言われるがまま、夜空を見る。

そこには無数の星たちが私を照らしていた。

「綺麗……………あの花火よりも全然」

そう今日は快晴だった。

雲一つないこの夜空がいつまでも目に焼き付いていた。

「そのペンギン、まだ持っていてくれたんだね……」

私は無意識にそのペンギンを抱きながら常に行動していた。

「だって奏がくれたプレゼントだもん……」

奏はふっと微笑み何かを私に差し出す。

「はい、こいしちゃん。二個目のプレゼント」

「え？」

出てきたのは同じようなペンギン。

しかし、色が違う。私が持っていたペンギンは青と白の柄。

奏が差し出したのはピンクと白の柄。

「祭り終わったあと、片付けを手伝ってたら売れ残りだつて射的屋のおじさんがくれたんだ……」

「そ、そうなんだ……」

私は素直にそのペンギンを受け取る。

「じゃあ………はい！」

私は少し元気を取り戻し、青いペンギンを奏に差し出す。

「え？」

「これでお揃いでしょ！奏！」

私はニカッと笑ってみせる。

奏はその私の笑顔に少し驚き、そのペンギンを受け取る。

「ありがとう……こいしちゃん……」

そうして奏は今一度あの言葉を紡ぐ……

私が待っていたあの一言……

「好きだよ……こいしちゃん……いや、こいし」

「……………え？」

「俺はこいしの事が家族でもなく、姉としてでもなく、一人の女の子として好きだ。その言葉に嘘はない」

奏のいつに無い真剣な表情で私に想いをぶつける。

私はその場で涙を流し、しゃくり上げながらこう告げた。

「私も奏が好き……………ずっと待ってたよ……………奏……………」

涙をこらえながら私はまた笑ってみせる。

しかし、その後奏の体に私の体が密着した。

そして奏の腕が私の背中に回る。

「ありがとう……………こいし……………大好きだよ……………」

静かに耳元で囁いた。

私はそれが決定打となり、大粒の涙を流す。

「うん……………うん！私も大好き！」

こうして私と奏は晴れて恋人となった。

姉弟から兄妹へ……………兄妹から恋人へ……………

「じゃあ……………帰ろうか……」

「うん！こんなに遅かったらお姉ちゃんに怒られちゃうね！」

「あ、あはは……………想像したくないな……………」

「……………だね……」

私達は手をぎゅっと握り合いながら歩を進めた。
指と指を絡ませ、お互いの温度を感じながら……

地上から地底の道は夜空の星達に照らされていたからか、とても華やかに見えた。

閉ざした心、開いた恋
く過去を乗り越えたその先へく

e n d ……

a f t e r s t o r y

星空の下、無意識の感

情

「ああ……寒い……」

今俺はこいしと人里デート中なのだが……

大雪が降っている。

いつもの服に少しの防寒着を来ているだけの俺にはとてもきつい……

こいしに……「下着買ってくるからここで待ってて!」と言われた。

そう言われたら入ることは男として出来ない。

今は恋人だから良いものの、傍から見たら兄妹にしか見えない。冷たい目で見られる

のは想像ができる。

そしてここ最近何よりも気がかりなのが……

現在は5月15日。

出会いと別れの季節、4月を超え、5月の半ばまでやってきた。

が、おかしい。

この大雪はなんだ？

異変ということは確定して分かっているのだが、ついさつきレティと弾幕ごっこをしていたばかりだった。

勝ったのだが、こいしが「異変解決は霊夢に任せて私達はデートしようよっ!」

と、腕を掴まれて引つ張られた。

なあ、一つ思うんだけど……デートなのに下着屋の前で男を待たせるなんて幾ら何でもひどくねえか?

さつきから下着屋を通る人たちに冷たい目で見られるんだが……

とゆーか、こいしって下着いるの?

断崖絶壁なんだからいらなと思うんだけどな……

「……………奏……………」

「ん?」

俺は背後から声がした。それも聞きなれた声。

「あ、ああ、こいし……」

「今私のことペチャパイって思ったでしょ?!」

「な、何でわかるんだよ……」

「むきー! ほんとに思ってたの?!」

「あははは! 早く大人になりな!」

「もう大人だもん！」

「それを否定しているのが、「胸」だろ？」

「うぐうう……いいの！貧乳はステータスなの！希少価値なの！」

「どこで覚えたそんな言葉……」

（らき☆すたいいよねっ！）↑作者談……

もう恋人になって10ヶ月。

お互いの壁もなくなりこうやって気を遣わない話もかなり増えた。

「よし、じゃあ次はどこに行く？」

「うーん、あ！射的屋さんがあるよ！」

「ん？祭りでもあるのか？」

俺はこいしが指さした方向を見る。

すると大きな看板に「射的屋」と書かれた文字が……

前まであそこはただの一軒家だったはず……

少し怪しみながら俺達は射的屋に入る。

念のため、刀を鞘から抜く準備をする。

「よし………入るか………」

俺は少し緊張感を持ちながら戸をカラカラ……と開ける。

「しっつれいしまあーす!」

「なっ?!おい!こいし!」

こいしが緊張感のきの字もない感じで元気よく店内に入る。

あのバカ……

俺は少し飽きれながらこいしを追いかける。

「こいし……少しは警戒しろよ……」

「大丈夫!ここの人とは奏も知り合いだよ!」

「え?」

こいしの言っている意味が分からず、その場で硬直する。

しかしその瞬間、聞き覚えのある声が入る。

「へい!らっしやい!……ん?あんたは……英雄様?!」

「ん……?……あつ!おっちゃん?!」

そこに居たのは俺が花火大会の日に俺がペンギンを撃ち抜いた射的屋のおっちゃんだった。

あの後、「彼女とパールツクにせい!」と、ピンク色のペンギンを無料でくれたかなり

お人好しな人だ。

「おー！あの時のおじさん！」

「ん？ああ、地霊殿の英雄様の妹ちゃんだよな？」

「あ、いや、おっちゃん……………」

俺は少し言いくそうにおっちゃんに言う……

こいしも少し照れている。

「妹じゃなくて……………恋人……………」

するとおっちゃんは目を見開き

「うおい！！禁断の恋かあ？」

「違う！義理の兄妹だったんだよ！」

「あははは！そうかそうか！……………それはそうと、射的やってくかい？」

するとこいしがテンションをあげてぴよんぴよんと跳ねた。

「やろうよ奏！奏の銃の腕が上がってるといいな！」

「あのなあ……………俺の本業は刀使いなの……………銃なんかあの日以来触ってねえよ……………」

そうぶつくさ言いつつ、俺はおっちゃんにお金を渡し、銃を受け取る。

「んー、こいし。どれが欲しい？」

「うん、そくだね……………」

こいしはマジマジと景品を見渡す。

すると取りたいものが見つかったのか、笑顔になってそれを指さす。

「あれ！あれが欲しい！」

「あれは……ペンギン……またか？」

「またもやペンギン。どれだけ気に入ったんだ……」

しかし、今回ののは青でもなくピンク色でも無く、緑と黒の2匹が並んでいた。

「ああ、それな、霖之助さんがまた取り寄せたって言うから売れ残り覚悟で置いたんだ。

取ってくれねえか？」

と、おっちゃんにもお願いされ、俺はペンギンに銃を向ける。

片目をつぶり、狙いを定める。

ポントと軽い音とともにペンギンが後ろに倒れた。

「よし、一匹ゲット！」

俺はすぐに気持ちを切り替え、隣の黒のペンギンを狙う。

それもまた直撃。自分でも銃の腕に驚く。

「こりや驚いたよ……英雄様……」

「俺も驚いてるよ……」

俺は2匹のペンギンをおっちゃんから受け取る。

「はい、こいし」

「ありがとう！奏！」

「がははは！英雄様、こいしちゃん！また来いよな！」

野太い声でおつちちゃんが笑い、俺の背中をバシバシ叩く。

「痛いよ……おつちちゃん……」

「うん！またね！おじさん！」

俺とこいしはカラカラと戸を開け、射的屋を後にする。

そこで俺はあたりを見渡す。

「あれ？」

辺りは雪も消え、防寒着なんか必要なくらい暖かい空気に包まれていた。

「霊夢のやつ……解決したのか……」

俺はマフラーを外した。こいしは人里に咲く桜を見て

「わああ！久しぶりだな、桜！」

と、はしゃいでいた。

「じゃあ、そろそろ異変解決の宴会があるんかな？」

「やった！楽しみ！」

こいしがニコツと笑う。その笑顔に俺はいつまでも見蕩れていた。

この笑顔は……俺だから見せてくれるのかな……？

それから2日後の朝。

地霊殿に手紙が来た。

霊夢からだ。

「もうやるのか……宴会」

「どーしたの？奏？」

こいしが後ろからひよこっつと顔を出す。

「ん、ああ、いや、宴会が今日の夜あるらしいんだ。もちろんこいしも行くよな？」

「うん！」

この日は丁度快晴の日。

気持ちのいい風が肌を刺激するほど。

桜が舞い散る季節の宴会は楽しそうだ。

俺はこの時から少しワクワクが止まらなかった。

春雪異変。

これの発端は幽々子の西行妖が春を吸収してしまい、ずっと冬が続いていたのが原因らしい。

私はこの異変に気づいたのはだいぶ後、奏と射的屋に行ったあとくらいだった。まあ奏は知ってたらしいけど……

そして今日。宴会の日だ。

午後6時から

「こいし……宴会の時くらいペンギン置いてけよ……」

「やだ！これはもう体の一部なの！」

「んな無茶な……」

私はずっと奏から貰ったペンギンを抱きしめていた。

これには特別な魔法がかけられているみたいに暖かい。

奏は呆れた顔をしてすぐに微笑む。

「仕方ないな……じゃあ行くか……」

お姉ちゃんやお空達は先に地霊殿を出て、宴会の準備へと向かった。

残っていたのは私と奏の2人だけ。ドアの鍵を閉め、私達は地面から浮いて、地上へ

と移動する。

それから数分。博麗神社が見えた。

「あーこいし、奏ー！」

魔理沙がこちらに気づいて手を振る。

「ん？どしたの？魔理沙？」

「いやいや、今回の宴会は「春雪異変」と昔にあった「不知襲撃事件」の両方の解決を祝つ

た宴会なんだ。ほら、その後が忙しかったから宴会してないだろ？だから今回は奏とこ

いしも主役なんだ！」

そう言って、私と奏はお互い見合わせる。

別に主役が悪いわけじゃないけど……不知襲撃事件って一年くらい前だよな？今更やあってどうすんの？

と、心の中で呟いた。

そして夜。

幻想郷の妖怪や人間、神などがざっと200人くらい。

博麗神社に集まった。

そこで、霊夢が大きな声で注目を集めた。

「はーい！それでは！春雪異変と不知襲撃事件の解決を祝って——」

霊夢は一呼吸おいて酒の入ったコップを夜空に掲げる。

「かんぱーい!!」

そうして、宴会が始まった。

(宴会は特にいいこと無かったから省略)

宴会が終わったのは午後の10時。

だいぶ遅くなった。お姉ちゃん達はまたもや酔いつぶれて先に帰った。桜並木が街灯に照らされ、昼間とは全く違った色の桜が満開だった。

「綺麗だな……」

奏が感嘆の声を漏らす。

私もそれにつられて辺りの桜の木を見渡す。

「綺麗……」

この桜の木は西行妖とは違う美しさを放っていた。

すると、本当に唐突の事だった。

「なあ、こいし……こいしはさ……俺のこと好き……？」

言っている意味が分からなかった。

「?……………好きじゃなかったら今頃ここにいないよ?」

「だよな……………」

私はそのまま首をかしげたまま

「どうしたの?」

「あ、いや……………何でも……………桜の光に照らされるこいしが綺麗だなんて……………」

「ちよつ、恥ずかしいこと言わないでっ!／／／／」

私は顔を覆い、下を向く。

「あははは、ごめんごめん……………なあ、こいし」

そして、ここで紡がれた……………私と奏の新たな再スタートの口火が……………

「結婚……………しよう……………」

「へっ?」

私は素っ頓狂な声を上げてしまう。

結婚……………私と……………?

それを理解した瞬間、目元が熱くなり、涙が流れているのを感じた。

それが嘘のように感じ、奏といた時間も全てが私の夢だったらどうしよう……………

そんな不安もあったが……………私の口は本能のままに動いた。

「はい……………!」

瞬間、私の体は奏の温度に包まれた。

そして体だけでなく……唇さえも……

私はこの時にファーストキスを奏に捧げた。

恋人から夫婦へ……

それから2日後。

私たちの近況はと言うと……

「ねえ？奏？」

「ん？」

「ん……」

そうやって、私は奏に唇を差し出す。

「またか……」

「ええー♪いいじゃない！」

「仕方ないか……ん……」

「んっ……ちゅ……」

とまあこんな感じ、甘々のラブラブなのだ。

「ちゅ……じゅる……かな……で……れる……／／／／」

「んっ……こいし……れる……」

舌まで入れちやうの……

「ぷはあ……♪……私の言いたいこと……分かるよね？」

「……こいしって結構胸あるんだな……」

「むっ！元からあるもん！」

「あはは！PADなんじゃね？」

「あ！それは咲夜もバカにしてるよ！」

「お前が1番バカにしてるよ……」

気持ちを切り替え、私は服を脱ぎ始める。

もう……ね……夫婦になってから全ての壁が消えた気がした。

そのくらい彼との生活が幸せなのだ。

それから数ヶ月後。

私は子供を産むことが出来た。

正直この小さい体で子供を産めるのか心配だったが、案外上手くいくものだった。
1人の女の子が生まれた。

愛原 夏恋かれん

それからまた5年後。

正直私も奏も身長とかはあまり成長していない。

夏恋の身長はもう私とは20センチほどしか変わらない。

地霊殿の生活も変わっておらず、いつも通りの生活をしている。

「あ！パパ今エロ本隠した！」

「いつ?! 言うな夏恋！」

「ママー！パパがエロ本隠したー！」

「かあーなあーでえー！」

ズカズカと奏に歩み寄る。

「お、おい！俺も男なんだから勘弁してくれよ！」

「ならもつとバレないところに隠してよ！夏恋が読んだらどうすんの?!」

「う……………善処します……………」

私は完全にお母さんという役職に慣れた。

夏恋のお世話も身の回りのことも大体が自分で出来るようになった。

「パパあー？この世にはエロを否定する者もいるんだぞっ？」

「どこで覚えたんだよ……………夏恋……………」

5歳の夏恋がどんどん悪い方に成長していくのを見るのはあまり嬉しくない。

その夜。

私は夜中に目覚めてしまい、トイレから帰った後、奏の部屋の明かりがついていることに気づく。

ドアを開けると奏は咲名千里を手入れしている最中だった。

「何でこんな時間にしてるの?」

「ん? ああ、前の異変で刃こぼれして千里が生活しにくそうだったんで……手入れは先に済ませようと思って……」

その手入れももう終わったらしく鞆に収めた。

「ね、こいし。あそこに行かない?」

「あそこ?」

「そ、まあ付いてきて……今日はいい天気だったし……」

私は黙って奏のあとをついて行った。

外に出るともう人は全くいなかった、見渡して20人ほど。

まあ、真夜中だしね……

そして私達は見覚えのある道に出てある建物の屋根の上に行く。

「あつ、ここは……」

「そ、思い出した？」

そこはかつて私と奏が結ばれた満天の星空が一望できる屋根の上。

ここ最近行つてなかったのを忘れかけていた。

奏は先に屋根に寝つ転がった。

「ここで寝つ転がるーぜ？」

「うん……」

私はその隣に寝転び、奏の左手をぎゅつと握る。

「ねえ……奏……？」

「ん？」

「あなたはさ、ここに来て後悔は無かったの？」

「もちろんあつたさ………兄貴と離れ、元の家に戻れなくなつたんだから………」

「………」

「でも……こいしとの出会いはそんな悲しみでさえ吹き飛ばすほどだったよ………」

奏のその言葉に私は少し驚きを見せる。

「他愛もない話だったり喧嘩だったり弾幕ごっこだったり……絶対に外の世界じゃ経験することのない出来事をここで学べんだから……」

「……………そっか……」

そうして奏はあの言葉を星空の下で紡ぐ。

それはまた、恋情と愛情……………色々な感情の混ざった言葉だった。

「ありがとう……………こいし……………今も……………これからもずっと……………愛してるよ……………」

奏は上を向いたまま、言葉を放った。

その時の奏の目は美しいほどに輝いていた。

私は暫くその目に目惚れていた。

そして私の心から熱い何かの気持ちがかみ上げてきた。

無意識の私には決して芽生えるはずのない感情……………

「私も……………ずっとずっと……………君を愛し続けるよ……………奏……………」

満天の星空の下で……私達はずっと……手を握っていた……
お互いの表情は………

優しく、微笑んでいた。

動き出した恋の秒針く茜色の銀時計く

1 話 紅い館、メイドとの出会い

「うおお?!」

次々と来る弾幕を俺はただひたすらに避けていた。

「ほらー奏くん! しつかりとグレイズを稼ぎなさい! 大まかに避けすぎよ!」

「んな事言われてもなあ……」

今俺の目の前にいる少女、愛原の妖刀「咲名千里」の自称人柱「片波 咲」によって訓練をされている。

ついさつき幻想郷とかいう場所に飛ばされ、咲と出会い、今は「幻想郷で死なないための特訓」をしている。

なかなか面倒なことに巻き込まれたんだな……

そんなことを考えていると咲の魔法陣からは想像もしたくないほどおぞましい量の弾幕が張られる。

「まあ、当たるよね。弾幕初心者にこれを避けろなんて言われても無理だもん。

「いつてえ!」

俺はそのまま地上に落下し、頭を打つ。

弾幕が当たったお腹と落下によってぶつけた頭が同時に痛む。

俺はお腹と頭を両手で擦りながら痛みに耐える。

「んもう……だらしないわね……本当に愛原の子なの？」

「そうだよ……悪かったな……」

腰に手を置いた咲が呆れた顔でため息をついていた。

俺もそれと同時に深い息をつき、立ち上がる。

立ち上がるのにも少し痛みがあるが、これくらいどうってことない。部活で鍛えられてるからな。

「さて、奏くん……君、住むところは？」

「はあ？んなもんねえよ。とゆるか無一文だわ」

「ええ……」

咲は肩を落とし、俺に背中を向けてこう言った。

「人里に行つてバイトを探すわよ。無一文で困るのは君なんだから」

「はあ?!なんで俺が働かなきゃ………それしかないか……」

咲の意見に反対したいところだが、お金がなくて困るのは確かに俺だ。その案に賛成するしかなかった。

「じゃあその人里とやらに行きますか」

そう言つて俺達は自然に満ち溢れた細い道をゆつくりと歩く。

「ああ、腹減つた……………」

「な、なんでバイト受け入れてくれないのよ……」

俺達は人里で働き口を探していた。

もちろんチャンスは何度でもあつたが、全て断られた。

その理由は「妖怪はちよつと……………」というのが殆どだ。

とゆーかそれが全てらしい。

「俺のどこが妖怪なんだよ……………」

「あら？知らなかつたの？あなたは「龍人」という幻想郷古参の最強クラスの妖怪なんだよ。」

俺はその咲の言葉に絶句する。

「い、いや、俺はあつちの世界ではずっと人間だつたぞ？」

「あなた達「愛原」は元々幻想郷にいたのよ。それなのに急に私の依り代ごと外の世界に逃げちゃったんだから……………ずっと女神様のところに行ったから別に良いんだけど……………」

俺は咲の言っていることがイマイチ理解出来なかつたが

「とにかく、俺は妖怪だったってことだな？」

「まあ、そういう事、詳しいことは後々分かるわよ」

と、ここまで会話をしてきたが今は口を開くのが精一杯だ。

お腹がギルギルと別の生き物みたいに叫んでいる。

なんでもいいっ！なにか食べ物を入れてたい！

俺は近くのベンチでなるべく動かないようにして体力消費を少なくする。

「しっかし……………座ってるだけじゃお金は来ねえしな……………」

「んねえ、奏くん……………私もお腹空いちやった……………」

「俺もだから我慢しなさい……………」

ああ……………せっかく別世界に来たのに……………すぐに飢え死んじやうぞ……………サヨナラ

……………俺の人生……………

俺の目からは少量の涙が流れる。

やばい……………腹減りすぎて逆に腹が痛い……………もう無理だ……………俺死んだわ……………

傍観気味になっていたその時だった。

「あの、大丈夫ですか?」

俺は唐突に声をかけられ、立ち上がりながら声の主の方を見る。

そこに立っていたいたのは、俺と同じ銀髪。身長は俺よりほんの少しだけ低め、明らかにメイドと言わんばかりの服装を身につけ、頭にはフリルのついたカチューシャを頭の輪郭に沿ってくつついている。太ももには数本のナイフ、痛くないのかな?それよりなると言っても美しい、可愛いし美しい。

「え、あ、あの……」

俺が返答に迷っていると

「あの、家で料理食べます?」

俺はその「料理」という単語を聞いて、顔のパーツを全て入れ替えたかのように明るくなる。

「ま、マジですか?」

「本当?!」

俺と咲のその変わりように、銀髪のメイドさんも少し引き攣っていた。

「え、ええ……では、案内します……」

俺と咲は銀髪のメイドさんに連れられ、人里を外れ、少し歩いた。

森を抜け、一つの湖が姿を現す。その後ろには
「でっけえ……………」

「凄い……………」

二人同時に感嘆の声を漏らす。

そこにあつたのは紅い館。

館のイメージを破壊するかのような大きさとその建物の美しさ。日本にはまず存在しないだろう。

俺達はそれを凝視しながら銀髪のメイドさんを追いかける。

門のすぐ側まで行き

「ほーら、美鈴！何寝てんのよ」

銀髪のメイドさんの前には肘をついて寝ている赤毛の中華風の女性。メイドさんに負けず劣らずの綺麗さだ。

しかし涎を垂らして爆睡している。

それをメイドさんは赤毛の人の頬をペチペチ叩きながら怒っていた。

「……………んう？……………いつ?!さ、咲夜さん……………」

その赤毛の人は見つかったと言わんばかりの顔でメイドさんから距離をとる。

「緊急のお客様よ。自己紹介は後にしてね」

「は、はい」

そう言うのと、赤毛の人はギーとゆっくり門を開ける。

広大な庭を縦断し、大きな玄関の扉を開け、その館へと入る。室内もまた紅。

しかし残酷な紅ではなく、鮮やかな目を奪われる色。

これをまたゆっくり見てみたいが、生憎と今はそれどころじゃない。お腹が空きすぎて何も考えられなくなった。

すると食堂らしきところに着き、メイドさんは

「では、ここに座ってお待ちください」

俺と咲は言われた通りに座る。

俺はレストランとかのこう言った待ち時間は嫌いではないが、今だけは早く来て欲しいと願っていた。

しかしそう思っていたのも束の間。すぐに料理が来た。

「お待たせいたしました」

その料理はまた鯖のムニエル、クロワッサン、ミニストローネと洋風な食事が出された。

まだまだ湯気がたっている。できたてだろう。

俺と咲はそれを口に頬張る。それを見てメイドさんは驚いていた。

「そ、そんなに空いていらしたのですね……」
「ほうほんほもにほんふいといてましたよほ」

口に食べ物を入れながら俺は口を開く。

「た、食べてからで結構ですので……」

「ははい、ありがとうございますす」

俺と咲はただひたすらに出された食事を夢中で食べていた。

「いやー、ご馳走様でした。美味しかったです」

俺はいつぱいになったお腹をポンポンと叩き、満足げにメイドさんにお礼を言う。

「満足していただいたのなら良かったです」

するとメイドさんは姿勢を正し

「自己紹介が遅れました。私は十六夜 咲夜。ここ、「紅魔館」のメイド長を務めさせて

もらっています」

唐突な自己紹介に俺もすぐさま対応をする。

「あ、えっと、愛原 奏です。実はまだ幻想郷に来て数時間しか経っていません。「龍人」らしいです」

「片波 咲だよ。奏くんの持っている刀「咲名千里」の人柱。妖怪だけどなんの妖怪かは知らない!」

全員が自己紹介をすると、咲夜さんの背後に何かのシルエットが浮かんできていた。

「あら、お客様かしら?」

その悠長な口調とは対照的な小さな体。

青みのかかった銀髪。

身長はかなり小さいが、背中には漆黒の翼があるため、シルエットは大きい。

ナイトキャップを被っていて、何よりその真紅の瞳が見るものを吸い込ませるような感覚になる。

「あ、えと、咲夜さんに料理を振舞ってもらいました」

「人里で死にかけていたので、料理を出しました」

「そう……あなた……あの有名な愛原の子孫?」

少女の予期せぬ言葉に俺は言葉に詰まる。

「へ？俺がですか？とゆーかなんで名前知ってるんです？」
すると少女は俺の隣をスツと指差し

「その刀……」「咲名千里」よね？」

「そ、そうですけど……」

その少女は少し目を見開くが、すぐに落ち着いて

「紹介が遅れて申し訳ない。私はレミリア・スカーレット。紅魔館の主にして吸血鬼よ」

「あ、愛原 奏です」

「私は片波」

「咲ね」

咲に被せるようにレミリアさんは言う。

それに俺と咲は驚きを隠せない。

「な、なんで……知ってるの？」

「まあ、詳しい話は後でしましょう。そんなことより……」

レミリアさんは一呼吸置いてこう言った。

「あなた住むところ無いわよね？」

痛いところを突かれ、俺は縮こまる。

「うぐっ……はい……」

レミリアさんの頬が緩み、優しそうな笑顔でこう告げた。

「いいわ、ここに住まわしてあげる」

「ほ、ほんとですか?!」

「ほ、本当?!」

俺と咲は飛び上がるように質問する。

それにも動じず、レミリアさんは言葉を続ける。

「もちろん、条件付きでね」

「じ、条件ですか?」

レミリアさんは人差し指を真上に向け

「一つ、もっとフレンドリーになること」

「へ?」

「一つ、敬語をやめること」

俺はレミリアさんの言っている意味が最初分からなかったが…

「一つ、私のことは「レミィ」と呼ぶこと」

「そ、それってつまり……………」

俺は完全に理解した。

「私の友人であり、家族となりなさい」

まあ、悪くないことだが少々気が引ける。

「……………レミリアさんって友達いないんですか？」

その一言にレミリアさんは少し動揺する。

「そ、そんなことないわよ！ただ単にあなたとは仲良くなれそうな気がしたのよ。咲夜。奏と咲の部屋を妖精メイド達に手配させてちょうだい」

「かしこまりました…」

そう言つて咲夜さんは食堂から消える。

「とにかく詳しい話は明日つてことで、私はもう寝るから…………」

小さな欠伸をしながらレミリアさんもここから立ち去る。

いや、道わかんないんですけど…………

行先に迷つていたら、先ほどいなくなった咲夜さんがまた姿を現す。

「お待たせいたしました。奏様、咲様。お部屋へ案内いたします」

俺と咲は咲夜さんのあとを付いていき、4階のど真ん中のドアの前にたどり着く。

「此処でございませう。後はごゆっくりお過ごしください」

一礼し、咲夜さんはまたいなくなつた。

カチャツ…………と軽快な音とともにドアが開く。

壁も一面紅色。

奥には豪華なベッドがある。

その手前には書斎らしきものが並べられており、高級ホテルと言った感じの部屋だった。

「凄い所に来ちゃったね、奏くん……」

「だな……まあ、悪いところじゃないし……レミリアさんとも咲夜さんとも仲良くなれそうだ……」

俺はベッドに仰向けになり、そのまま深い息を吐く。

柔らかいベッドに俺は少し眠気に襲われた。

現時刻は午後の9時。

いい時間帯だ。

「まあ、明日に色々調べようか……おやすみ、咲……」

「うん……おやすみ……」

俺はその場で瞼を落とした。

明日から始まる紅魔館の生活に楽しみと同時に胸騒ぎがしていた気がした。

2話

弾幕(っつゝ)

ガンツ！という鈍い音とともに俺は目が覚める。

ベッドから落下し、頭を打った俺はその場で蹲る。

「いったああ……………」

数秒間そこでジツとして、その後に俺は起き上がる。

ああ、そうだ……………俺は紅魔館に来たんだ…………

改めて俺は再確認をする。

すると、コンコンとドアが叩かれる。

「どうぞで」

「失礼するわね、奏」

「ああ、レミリアさん」

俺がそう名を呼んだら、レミリアさんは俺を紅い目で睨みつけた。

そうだ……………忘れてた…………

「え、えっと、レミィ……………どうしたの？」

俺がそう言うたびにぱつと笑顔になり、こちらに来る。

「あなたをここに招いた理由と私が奏と咲を知ってる理由を話に来たわ」

「あ、ああ、そういう事か……」

ポスンとレミイはベッドに座り、落ち着いた声で言葉を並べる。その喋り方もまた何とも高貴なものだった。

「まず、あなたをここに、紅魔館に招いた理由は……」

レミイは少し小つ恥ずかしいと言わんばかりの顔で

「と、友達が欲しかったからよ……」

紅魔館のお嬢さまも可愛いな。

俺はホッコリするような笑顔でこう告げた。

「あはははは！ やっぱりか」

「な、何よう……」

少し涙目になるレミイ。

しかしすぐに顔を整え、二つ目の理由を話す。

「あなた達を知ってる理由はね……」

「ごくと俺は息を呑む。」

「私は、あなたの祖先と咲に会ったことあるからよ」

「え？」

「以前にここで愛原と倉見の戦いがあったのは知ってるわよね？その時に私達紅魔館組は愛原組と組んでいたの。その時にあなたのお父さんと出会ってね。あなたの事を色々聞いたわ。あの時にあなたの名前を聞いていた方が良かったけどね……」

「じ、じゃあ咲は……」

レミイはとても真剣な顔でこう言う。

「咲によって乗っ取られた咲名千里に私が殺されかけたのよ」

「?!」

今、なんて言った？

「私が倉見の本拠地を攻めに行った時、ひとりで動く刀を見つけね。邪魔だったから排除しようとしたら、思ったより強くて、腕、足、眼球の三つを持ってかれたわ。この時程吸血鬼で良かったと思う日はないほどね」

レミイのその言葉に俺は悪寒が走る。

あんなに愉快で優しい咲が一度レミイを殺そうとした…

「まあ、本人は自我を保っていなかったし、多分倉見の奴らに操作されていたのよ。記憶を無いみたいだしね…」

「そ、そうか………」

俺は落ち着きを取り戻し、寝ている咲の方を見る。

まあ、自我を保っていなかったということとは、咲自身はレミイを殺すつもりはなかったって訳だ。

それなら別に怖がる必要は無いだろう……………

「さて、話は以上よ。今はまだ早朝だからあまり騒がないでね」

「ああ、ありがとう。レミイ」

「お安い御用よ」

静かにドアを開け、廊下に出るレミイの背中を見ながら俺はベッドにまた横たわった。

まさか、咲とレミリアにそんな過去があったとは思わなかった。

「はあ……………本当に驚いたな」

「何が？」

「うお?!」

咲が俺の顔をのぞきこんだことにより、俺は今日2度目のベッドからの落下を経験した。

「さ、咲?!起きてたのか……………」

「ああ、ついさつきね」

まだまだ眠そうな目を見たところから本当に起きたばかりなのが伺える。

するとまたコンコンとドアが叩かれる。

「失礼致します。奏様、咲様。ご朝食の準備が整いました。どうぞ食堂へ…」

「あ、咲夜さん」

「はい？」

俺は頭をポリポリと掻きながら

「えっと、俺のこと奏様って呼ぶの齒がゆいからやめて欲しいな……………」

すると咲夜さんは可愛らしく小首をかしげる。

頭に思い切りクエスチョンマークが浮かんでいる。

「?では、愛原様?」

「い、いや、そうじゃなくて……………」奏「でいいよ…」

「それは了承できません……………」では、「奏さん」でいいですか?」

「ああ、うん。それと、もっと碎けた口調でいいよ。俺は別にレミイじゃないし」

「あ、はい、まあ、それくらいなら大丈夫です」

咲夜さんは優しく微笑み、俺のわがままに対応してくれた。

こういう所もメイドの嗜みなのかな?

俺は少し上機嫌になりながら、食堂へと向かう。

朝食らしい朝食がそこにちゃんとあり、俺はそれを平らげる。

「んまかったー…ありがとう咲夜さん」

「喜んでもらえたのなら良かったです」

その眩しい笑顔をしぼしの間見とれてしまう。

それを見透かしたかのようにレミイが口を挟んだ。

「……………うちの咲夜取らないですよ？」

「と、とらねえよ……………」

「？」

さて、朝食を食べ、俺はやることがなくなつた。

暇を持て余した俺は咲に話しかける。

「なあ、少し運動しようぜ」

「いいわよ？じゃあ庭に行きましようか」

庭につき、俺と咲は弾幕ごっこの準備をする。

「じゃあ一回ピチュツたら負けね。罰ゲームは……………そうね…今日1日言うことを聞

くってことで！」

「お前は子供か……………まあいいけど」

今日まで弾幕ごっこをしてきて俺が1勝、咲が2勝と俺が負けている。

「ここで勝たないとそろそろ差をつけられてしまう。」

俺はそれを払拭させるため、剣の腕を磨いた。

「じゃあ行くわよ！連符「神器の雨」！」

俺の頭上に星型魔法陣が展開され、その中から剣、槍などが雨のように降ってくる。

一つ一つの武器の軌道を読みながら、俺はサイドステップで避け続ける。

俺はある程度避け、少し武器の数が少ないところに移動し、刀を構える。

「炎符「獄炎の舞」！」

発火現象によって刀身が炎のように赤く、熱くなり降り続ける武器たちを斬撃と炎によって消していく。

今日はやけに体が軽い……………

俺のその剣技に咲も少し驚きの表情を浮かべる。

その隙を見て、俺は地面を思い切り蹴った。

そのまま全速力で咲の懐まで入り込む。

「?!……………やばいつ！」

「全符「現象の隕石」！」

俺は咲の周り全方位に細かい魔法陣を出現させ、地水火風の属性を纏った大きな岩石が咲を襲う。

咲はそれを避けきれず、爆発を起こしながら咲はびちゅった。

「ああ……………負けたあ……………」

「やったぜ。これで2勝2敗。同点だな咲、今日1日俺の言うこと聞いてもらおうぞ」
俺は悪戯な笑顔で咲を見下す。

「ふにゆう……………まあ、仕方ないけど……………」

咲は可愛らしく頬をふくらませ、ため息をついて立ち上がる。

その戦いを見ていたのか、レミイと咲夜さんが目を見開きながらこちらに向かってきた。

「奏……………驚いたわよ……………何なのよあの強さ……………」

「ええ、私も驚きました。奏さんの剣技……………」

2人とも目をキラキラさせている。

そんなに凄かったとは思えないけど、咲の特訓の成長が見られるな……………

「か、奏さん。誠に勝手ではありますが……………」

咲夜さんは姿勢を正してこう言った。

「私にあなたの流儀、教えて貰えませんか？」

「え？あ、ああ、全然いいよ。流儀でも何でもないけど……………」

すると咲夜さんの顔がぱあつと明るくなり、頭を下げる。

「あ、ありがとうございます！」

「良かったわね咲夜。これであの巫女を追い越せるんじゃないかしら？」

「私は霊夢とは争いませんですよ……お嬢様」

こうして、俺は咲夜さんに俺流の戦いを教えることになった。

3話

修行

その数時間後、咲夜さんは自身の仕事を終わらせて俺の元に来た。

「失礼します、奏さん」

「はい」

ドアをゆっくりと開け、咲夜さんが入ってくる。

「じゃあ早速庭に行こうか……」

「はい」

俺と咲夜さんは庭に向かった。

「咲夜さん。一度、1分だけでいいから全力で戦って」

「全力……ですか？」

「あ、スペルカードはなし、でも能力は使っていていいよ。咲夜さんは確か「時を操る」んだ

よね？」

「ええ、分かりました。では、行きます！」

咲夜さんの目つきが変わる。

「どうやら、戦いには慣れてるようだな……」

俺は咲名千里を持たずに戦う。

まあ、1分だけだしね……」

そんなことを考えていると、ヒュンヒュンと無数のナイフがこちらに飛んできた。

こうして俺は全方位ナイフに囲まれて、逃げ場を失う。

しかし、俺は咲に聞いたあの言葉を思い出す。

「弾幕ごっこは逃げられないスペルカードや弾幕を打つちやダメなの。あくまで幻想郷の決戦方法としてね」

これは弾幕ごっこではない。

しかし、咲夜さんやレミィは幻想郷の住民、逃げ場のない弾幕を張るのは本能的に不可能なのだ。

俺は真下に人3人くらい入れる大きさの穴があることを確認する。

なるほど、霊夢さんに勝てない理由がわかった。

俺はその大きな穴に入り、そのナイフ達から回避した。

「え?!」

咲夜さんの驚きの表情を見てから、俺は口を開く。

「咲夜さん、霊夢さんやその他の強い妖怪に負ける時の原因ってどんなの?」

「そ、そうですね……大体がナイフをよけられて近距離でスペルカードを発動されます」
「確かスペルカードルールで避けられない弾幕やスペルカードをつくつちやダメなんだよね？」

「はい」

「なら、”最小限”にすればいいんだ。単純に」

「最小限……ですか？」

俺が言いたいのは、弾幕の感覚をほぼ統一し、人ひとりギリギリ入れるくらいの弾幕にすればいいのだ。

そうすれば百パーセント勝てる訳では無いが、今までの妖怪達も前よりは苦戦すると思う。

「なるほど……」

「俺はまだスペルカードをあまり作ってないからよく分からないけど……まあ、これは第一段階って所かな」

咲夜さんはメモを取り出し、俺の言ったことをペンで写していた。

な、なんか先生になった気分だな……

「とりあえず、そんな感じで弾幕の感覚を意識してみよう」

「はい、分かりました」

こんなに俺の話に真剣になってくれるのは、ある意味咲夜さんが初めてかもな……俺は少しこの修行に楽しさを感じていた、わ

おつといけない……咲夜さんは真面目にやっているんだ。俺もそれ相応の対応をせねば……

「じゃあ、とりあえず30秒。8割くらいでいいからやってみよう」

さつきと似たような弾幕が俺の周り全方位にはられる。

しかし、それはさつきよりも密度が高いようにも思える。

そうして1回、俺を含めた全ての時が止まってから、ナイフが襲いかかる。

「おお……」

俺はその場で感嘆の声を上げる。

咲夜さんは物覚えがいいな……これはすぐに追い抜かれそうだ……というか実力は俺より上なんじゃないか？

俺は真上に手を伸ばす。するとそこから粒子を纏った咲名千里が俺の手に収まる。

これは最近覚えた技で……なんて言ったかな？

技名は覚えてないけど、俺の周りには見えない魔法陣が展開されており、ワープ能力のある魔法陣が一つある、それを活用し、咲名千里を部屋から引つ張り出したという事だ。

「スペルカード！ 静符「アプソリユート・シン」！」

凍結現象を纏った咲名千里を一振り。

すると周りから一定のスピードで動いていたナイフが一気に凍る。

お、このスペルカード一番有能だな……………

今後から使つていこう。

「うん、凄いや咲夜さん。まさか1日でやり遂げるとは……………」

「い、いえ、まだまだです……………」

自分には厳しいと思つていたが、こればかりには少し照れているようだ。頬が紅潮している。

「じゃあ、そろそろ時間だし戻ろうか。あ、咲夜さん、紅茶お願いしていい？」

「はい、かしこまりました……………」

俺は肩を回しながら室内に入る。

肩凝つてんな……………今日はもうゆっくりしよう……………

ドガアアアアン……………

「え？」

お、おいおい……………誰がキレたんだよ……………

「キャハハハハ!! 誰か遊んでよお!!」

だ、誰だ?!

パチュリーとはさつき話したが……あの子は見たことねえぞ?

金髪で背中にはライトを吊るしたような綺麗な羽。

顔立ちは少しレミイに似ているな……

と、そんなことを考えている暇はない!

まずい! 妖精メイドたちが……!

俺は追われている妖精メイドの前に立つ。

「炎符「獄炎の舞」!」

発火現象を操り、刀身が赤く燃える。

「あなたが遊んでくれるの?!

「え、あ、うん。遊んであげる?」

疑問形になりつつも、俺は返答する。

すると金髪は距離を取り、スペルカードを唱える。

「禁忌「クランベリートラップ」!」

その弾幕はまた美しく、魅了させるものがあつた。

しかし、怯んではいられない。

「せあ!」

ズバツという軽い音を立てながら、弾幕が切れる。

あ、分かった。この子の攻略法。

俺は小さい頃からの特技、マインドコントロールを活用しようとした。

「君、妖精メイドたちを傷つけたの？」

「そうだよ？だから何？」

「君は生き物を傷つけたんだ。もう少し落ち着いたらどうかかな？」

「傷つけた……………」

やっぱり子供は洗脳しやすい。

と言つても俺は悪い方の洗脳ではなく、この子の狂気を取り除くための強硬手段として使っている。

まあ、悪いマインドコントロールもあるにはあるが……………

「そう、傷つけないために、落ち着こ？ね？」

「う、うん……………」

「妹様?!大丈夫ですか?!」

咲夜さんが駆けつけてくる。

それに対し、金髪の子は薄く微笑み

「ごめん咲夜。ちよつと能力が暴走しちゃった……………」

「ご、ご無事なら良かったです。奏さんが止めてくれたんですか？」

「ああ……」

「ありがとう。えつと……奏って言ったよね？」

「おう、どういたしまして……えつと……」

「フラン。フランドール・スカーレット。レミリアお姉様の妹よ！フランって呼んで」

俺はその事実に驚く。

まさかアイツに妹がいたとは……

「よろしくな、フラン」

「うん！」

この紅魔館も……力も広さも全てが未知数だな……

この時俺はそれを改めて実感した。

4 話

新たな戦闘スタイル

2人の妖怪が紅魔館に来て数週間。

いつも通りの仕事、お嬢さまのお世話や、掃除洗濯料理。

全てを終え、選択籠を持った私はお嬢さまの友人であり、私の師匠でもある愛原 奏さんと話していた。

「あ、ねえ、咲夜さん」

「はい?」

「幻想郷に男はいないの?」

「いるにはいますよ……しかし、幻想郷は圧倒的に女性の方が力を持っています。奏さんのような方はレアケースですね」

「道理で男を見ないと思った……」

奏さんはその場で肩を落とす。

肩身が狭いのは分かるが、奏さんの性格なら男女関係なく接することが出来ると思うんだけどな……

私は心の中でつぶやく。

すると奏さんは自分の愛刀、咲名千里を取り出し鞘から抜く。

その少し青みのかかった鮮やかな刀身は見るものを圧倒させる素晴らしさがあった。

「ごめん咲夜さん。タオルの場所ってどこかな?」

「あ、今持っていますよ」

私は即座にタオルを取り出す。

干していた洗濯物をたたむ前に奏さんと会ったので、服やらなんやらが隣においてある。

「……その刀……………綺麗ですね…………」

「そうかな…………?」

「ええ……………綺麗というより美しい…………」

よくよく見ると刀身には桜の紋章がいくつも付いていた。

これは刀のデザインだろう。とても美しい。

「あはは、咲夜さんも刀使ってみれば?」

「刀……………ですか?」

「うん、ナイフを使うのもいいけど、近接はナイフじゃリーチ不足でしょ、すぐに取り出せてリーチのある刀や剣が必要だと俺は思うよ」

確かにそうだ。

ナイフじゃ前に霊夢や魔理沙と弾幕ごっこした時も、近接まで近寄られて私の強みを思う存分発揮できなかったのも原因であるし……一度だけ使ってみようかな……

「それに………咲夜さんがそうしてくれると、俺も教えやすいしね……」

「なるほど………では、人里の刀屋に行きましょう。今日はもう仕事はありませんし、どの刀がいいのかも教えてくれると有難いです」

「え、ああ、いいけど………いいの？ 男の俺がついて行っちゃって……」

「？ 何か問題でも？」

私は首をかしげ、奏さんの返答を待つ。

すると思ってもよらない言葉が発せられる。

「い、いや………アートのみたいに見られたら困るなって……」

赤面する奏さんの言葉により、私も顔を真っ赤に染めて両手で否定する。

「ち、違いますよ！ 別にそんな目的で奏さんと人里に行くわけじゃありません！ むしろ行きません！」

「な、なんか傷ついたけど……まあ、それならいいか……じゃあ、準備してくるから少し待っていて」

「は、はい………」

私は未だ顔を赤くしたまま、その場にストンと座る。

頭から湯気が出てきそうだ……なんかプシューって聞こえる……
そんなこと……考えたことなかったな……デート……か……

別に奏さんと2人きりになるのが嬉しい訳じゃない。かと言って嫌でもない……なんて言うんだろ……楽しい……かな……?

自分でもよくわからない感情に私は戸惑う。

「まあ、今考えたって仕方ないか……」

気持ちを切り替え、私は奏さんを待つ。

「ごめん、お待たせ。じゃあ行こうか」

「はい」

紅魔館から人里の道中は奏さんが刀について詳しく教えてくれた。

奏さんって服は洋風のパーカーなのに、使っているのは和風の刀なんだな……なんか不思議だ。

しかし、私はさっきの奏さんの言葉が暫く頭から離れず、赤面したままだった。

「?どしたの? 咲夜さん?」

「はっ、い、いえ、なんでもありません!」

「大丈夫? 熱でもあるんじゃない?」

奏さんの手が私の前髪をかきあげ、額に触れる。

「ひゃう!？」

つ、冷たい……

思わず声が漏れてしまった。

「あはは! 咲夜さん面白い声出した!」

「か、からかわないで下さい……もう大丈夫ですし……」

そんなことをしているうちに、人里の中心街に付いた。

ここは幻想郷の都心のような場所でもいつも繁盛している。

その商店街の一角にある刀屋に入る。

「失礼します」

簾を避けて中に入ると、そこには横に綺麗に並べられている100本程の刀がずらりと並んでいた。

「あらあら、咲夜ちゃんじゃない。今日はどうしたの?」

「いえ、自分の戦闘スタイルを変えるために刀にしようかなと」

「なるほどなるほど。存分に見えていってくださいいな……そちらは?」

「あ、愛原 奏と申します」

奏さんはぴしつと姿勢を正し、おばさんに一礼した。

そのおばさんは微笑んだ後、奏さんの腰に垂れ下がっている刀に目が移った。

「その刀………最上級のものだね………」

「え、ああ、まあ………咲名千里という刀でして………」

その言葉を聞いた途端、おばさんは目を見開く。

「さ、咲名千里………?」

「あの………この刀を知っているんですか………?」

「そりやもちろん………幻想郷を救った英雄の幻の刀じゃもん………まさかあなた………愛原って………」

奏さんは少し驚いた表情を見せた後、余裕そうな顔で

「ええ、その『愛原』です」

「こ、こりや失礼いたしました!」

「い、いやいや、別に普通でいいですよ!俺は何もしていませんし………」

この後、おばさんをさっきの状態に戻すのに、時間が結構かかった。

「ふう………ありがとう。落ち着いたよ………」

「な、ならいいんですけど………」

「まさか愛原様のご子孫がいるとは………まあ、普通に接していきますわ………」

「ええ、その方がこちらもやりやすいですしね………」

私は切り替えて刀を物色する。

「おばさん、この刀って持ってもいいの？」

「ええ、もちろん」

奏さんのその質問におばさんは即答する。

奏さんも刀の一本一本を丁寧に見ていく。

「ん？」

奏さんの目が止まった。

そしてその刀を持つ。

「おばさん……………これ……………」

「ああ、それは妖刀「時空真」（じくうしん）。それを振ると時空が歪むと噂されていて、いつの間にか

妖刀扱いされた刀さ。切れ味はどの刀よりも抜群で何よりも軽いのが長所だ……よ……………」

「へえ……………いい刀だな……………買っていいか？俺用に」

奏さんは慣れた手つきで刀を降る。

その振る速度にはおばさんも驚いていた。

「でも、未だに咲名千里を上回る刀は私も80年生きてきて見たことないわ……………」

「そりゃ妖刀ですしね……………」

私は苦笑いしながらおばさんに共感する。

あの刀は奏さんだからこそ扱える究極の品物。

それを誰も簡単には扱えたらこの世は殺人鬼がわんさか湧いていただろう。
そんな有りもしない想像をする。

「え？ 奏さん二刀流にするんですか？」

「そんなまさか…… 咲名千里が刃こぼれした時の緊急用さ…… まあ、二刀流も挑戦してみるけど…… 咲夜さん。君はどれがいい？」

「うーん……」

どれも同じに見えるが…… よくよく見ると、妖力の差というものが実感できる。

そんな中、私の中の直感が一つの刀を指さした。

「あ、これ………これがいいです」

「おばさん、これは？」

「お、それは千剣「レガミクトセレナ」。唯一入荷した刀ではない剣よ」

確かに曲がっていないその真つ直ぐな刀身、金色が主体の刀身の色は鮮やかな紅色。形も何かと角張ってはいるが綺麗だ。

「………おばさん、これにします… 鞘もありますか？」

「おお、お買い上げありがとうございます。気をつけてね持って帰れよ……」

私と奏さんはいい買い物できた、そう思った。

「……… 咲夜さんはどこに刀をしまうの？」

「はい?」

「俺だったら、鞆ごと腰のベルトにくっ付けてるけど…咲夜さんはスカートだしそれは無理だし…肩から抜こうとしても咲夜さんの身長割にレガミクトセレナは刀身が長いから抜けないし……」

私はそれにずっと迷っていたが私はある方法を思いつく、パチュリー様のほんの中に乗っていた人物の武器のしまい方が幻想郷でも可能なんじゃないかと思った。

私は集中して、レガミクトセレナを妖力により分解する。

すると分解された粒子が私の右腕の肌に着着する。

そう、「コンタミネーション現象」。

出す時も同じ容量で、次は肌についた粒子を融合させれば良い。

「す、凄いや咲夜さん……」

「え、えへへ……」

私はつい照れてしまい、頭を掻く。

この肌につく粒子は別に無害で何も起こらず、見た目を変わらないので便利だ。

「さて、甘味処でも寄って帰る?」

「し、しかし、お嬢さまに怒られてしまうかもしれない……」

「大丈夫!まだ時間あるから!」

「それならいいですが……」

こうして私は無事に剣を購入し、新たな戦闘スタイルに転職した。

そしてあまーいスイーツを食べて紅魔館に帰りました。

とても美味しかったです。

余談ですがあの後、案の定お嬢さまには怒られました。

しかし、理由は遅く帰ってきたことではなく、「私もスイーツ食べたかった！」とスイーツを私だけが食べたことにご立腹でした。

5 話

ティータイムのラッキースケベ

現在、奏さんとお嬢さまと妹様の3人でバルコニーでお茶をしていた。

私はもちろん紅茶を作るため、バルコニーに同席していたが一切口は開けないようにしていた。

お嬢さまからは「別に話してもいいのよ?」と言われていたが、従者の立場からしてそれはあまりにも失礼だと思っていた。

「あ、咲夜さん。紅茶のおかわりもらっていい?」

「かしこまりました」

奏さんから渡されたマグカップに新しい紅茶を注ぐ。

注いでいるあいだ、私はお嬢さま達の会話を聞いていた。

「奏はさ」

「ん?」

「家族はいなかったの?」

「……………いたよ。お兄ちゃんが……」

へえ、奏さんにもご家族がいたのね……

「でも……俺はあつちの世界では死んでることになってるから……」

「……そつか……殺されてこつちに転生したのよね……まあ、正しくは戻ってきた”……か……」

「ああ……だから……今は兄貴がどうなってるかが一番心配だな……」

「きつと寂しがつてるよ……」

妹様のその悲しそうな顔を見て、奏は優しく微笑む。

「大丈夫だよ。兄貴はもう結婚してるんだ。新しい家族がいる。別に寂しくはないだろうよ……」

「結婚してるのね……」

お嬢さまは何かと分かっていたが、妹様は小首をかしげていた。

「ケツコン? 何それ?」

奏さんはすぐく呆れた顔でお嬢さまに言う。

「なあレミイ。お前、フランにあんまり教育してないだろ……」

「う、うるさいわね……仕方ないのよ……この子も学ぼうとしないし……」

「?」

「ああ、えと……結婚っていうのは……男の人と女の人がお互いに大切にしまつて結ばれること? なんだよ」

奏さんのぎこちない説明にも妹様は

「うーん……よく分かんないな……」

「とりあえずお互いがお互いを好きになつてることよ」

「おー……なるほど……」

お嬢さまの単純すぎる説明で妹様は理解したかのように頷く。そしてすぐにこう放った。

「じゃあ私、奏とケツコンするー!」

「ぶふっ!」

奏さんは飲んでいた紅茶を吹き出す。

私もそれには少しピクツと反応する。

「ふ、フランク!あのな?これは一人の男として好きになるってことなんだ。家族同士の好きとはまた違うんだよ……」

「え?そくなの?じゃあやーめた!」

「なんか傷つくけど……まあいいや……」

奏さんは紅茶を飲み直す。

そこでお嬢さまが口を開く。

「奏は好きな人いるの?」

「ぶふっ！」

奏さんは2度目の紅茶を吹いた。

「お、おい！ スカーレット姉妹！ ちよつとはデリカシーとかプライバシーとかを覚えろ！」

「しーらない☆」

「くっそ……………」

「あれ？ 咲夜？ 顔赤いよ？」

「へ？ あ、い、いえ！ なんでもないですっ！ 大丈夫です……………」

どうやら私は無意識のうちに顔が赤くなっていた。

な、なんで……………」

私は一体何に反応したの……………」

もしかして……………いや、そんなまさか……………」

「で、結局、奏は好きな人いたのかしら？」

「話戻すのかよ……………まあ、いたにはいたけど……………」

ズキツ……………と胸が痛くなる。

ど、どうしたんだろ……………」

「まあ、今はもうどこにいるかも知らないし、今じゃ好きな気持ちを薄れたかな。とゆー

か最近の出来事の内容が濃すぎてその子の顔を覚えてないんですけど」

「あら、それは私たちのせいかしら？」

「8割な」

「忘れるほど頭に残ってなかったってことね☆」

「ダメだこいつに勝てる気がしない」

奏さんはその場で肩を落とす。

まあ、このお二方という苦労が絶えないのは仕方ない。

「では、お茶菓子をお作り致しますので、少々お待ちください」

私はティータイムの5分後にいつも茶菓子を持ってくる。

5分経ったので私は厨房の方に歩く。

その間、私の顔は赤いままだった。

しばらくして、私はクツキーをバルコニーに持っていく。

「お嬢さまー、妹様ー、奏さん。クツキーをお持ちいたし」

「あ、咲夜さん危ない！」

「へ？」

バヒュン………！

と、一つの弾幕が私の目の前に飛んできていた。

どうやら奏さんと妹様が弾幕ごっこをしていたらしい。
時を止めることは出来たが、そんなことは考える暇もなかった。

「きやあ?!」

私は上に飛んでその弾幕を避けるが、クツキーが落ちそうになる。

「咲夜さん!」

すかさず奏さんが私を受け止めようとする。

しかし、クツキーが乗ったトレイが更にバランスを崩す。

私はそのまま前かがみになる。

……………お察しの良い方はもうお気づきでは無いでしょうか

私がうつ伏せに倒れたことで、奏さんを下敷きにしてしまった。

「あ、ご、ごめんなさい……………奏さん……………」

「い、いや……………大丈夫だよ……………でも……………」

間近に奏さんの顔がある。もう少し前に行けばキスできるくらい……………つて、
私のバカ!

何を思ったのか、奏さんは『それ』に手を置き、揉む。

「な、なんだこれ?」

そのまま奏さんは『それ』を揉みしだく。

「ひゃ……………」

「ひゃ?」

「ひゃああああ!」

バツチイイイン!!

と、バルコニーに気持ちのいい音が聞こえた。

奏さんは私の平手打ちで数メートル先まで吹っ飛ぶ。

……………自分が怪力みたいで嫌だな……………

「おお、咲夜容赦ないわね」

「いつてええええ!」

我に帰った私は慌てて謝罪し、奏さんに近寄る。

奏さんの右頬だけ、私の手形が赤く残っていた。

「ご、ごめんなさい。つい……………」

「い、いやいや大丈夫……………余計なお世話だったね……………とゆうか、あの柔らかいものは

一体……………」

「……………っ!!」

私は自分の胸部を触る。

お、男の人に初めて触られた……………

奏さんもようやくそれを察したのか、顔を真っ赤にする。

「え?!マジで?!ご、ごめん!咲夜さん……」

「い、いえ、あれは事故ですので……」

「そ、そうだよね……あれは事故あれは事故あれは事故……」

「まあ、私とフランがこの目でしーっかりと見たけどね?」

お嬢さまが悪戯に笑う。

「記憶から消していただけますか……お嬢さま……」

「ご、ごめんね……2人とも……」

妹様が謝罪をする。

どうやら本当に反省してるみたいだ。

「……いいえ、大丈夫です」

「ああ、俺も多分大丈夫だ……」

私はもう一度クツキーを焼き直し、この後は普通にティータイムを過ごせました。

夜、私はベッドの上で

「奏さんと……………密着……………してたのかな……………」

奏さんの顔が間近にあったあの時、私は少しだけ嬉しさを感じていた。

な、何よ……………この痛みは……………!

親に捨てられ、お嬢さまに拾われて早十数年。

一度も経験をしたことの無い。

苦しい感情。

この時から私は徐々に奏さんの事を意識し始めていた。

でも、この時の私はそんな感情をなんて呼べばいいのか、全く分からなかった。

6話

突然の紅魔館崩壊

奏さんへのこの気持ちりが全くわからないまま、数週間が過ぎた。

結局、この気持ちは誰にも明けないまま、お嬢様にも、もちろん奏さんにも。

………いや、気持ちりが分からないなんて嘘だ。

こんなの、上辺だけの戯言にしか過ぎない。

心の奥底ではこの気持ちの正体なんて分かりきっていたんだ。

しかし、その気持ちを明かすのはとてもじゃないけどできない。私と奏さんは主従関係。

そんな関係になることはまず有り得ない。

それにわたしは今の生活に満足している。

「奏さん、今日もお願ひします」

「はいよ、じゃあ今日は全力勝負。俺が教えてきた技を使ってもよし、咲夜さんの元々のスタイルで戦ってもよし、やりやすい方でいいよ」

「………分かりました」

懐中時計を取り出す。

最近になって剣技の方も安定してきているがやはりナイフの方が落ち着くし、手に馴染む。

「幻符「殺人ドール」！」

奏さんはこの数週間、私の知らない所でずっと二刀流の練習をしていた。

最初はぎこちなく、剣技どころでは無かったが、最近になって、私のナイフをも弾くようになった。

妖刀「咲名千里」と妖刀「時空真」。

この2本は咲さんの依代で咲名千里より時空真の方が過ごしやすんだとか。

「はあー」

無数のナイフを軽々と弾いていく。

そして私のナイフはことごとく力を失ったように地面に落ちる。

「……………やはり……………あなたにたどり着くのはまだ先そうですね……………」

「それは……………どう、かなっ！」

だんだんと奏さんとナイフの距離が近くなっていく

「くっ……………真符「時空斬鉄」！」

私が投げるナイフが一瞬にして消え失せた。

このスペルカードは時空真によって出来た時空の歪みの境界を生成し、そこに送り込

むという技。

時空の歪みの境界というのは虚無の空間。

どこの時間軸でもない。

常闇の何も無い空間のこと。

奏さんのラストスペルというやつだ。

私はその時空の引力に引っ張られ、奏さんに引き寄せられていく。

「や、やばい……………」

必死に耐えるが、だんだんとその威力が増していき、結局私は奏さんの刀の目の前まで引き寄せられていた。

「勝負あり、だね」

「……………まさかレガミクトセレナを使う前に決着がついてしまうとは……………」

「でも、ラストスペル使ったのは咲夜さんが初めてだよ。まあ、咲を抜いたらだけど」
奏さんの苦笑いに私も微笑む。

「今日もありがとうございました……………それで……………その……………」

私は顔が熱くなっていく、理由はさっきのスペルによって、私は奏さんの方に引き寄せられた。

その距離は約10センチほど。

つまり、めちやくちや近距離にいるという事だ。

それに気づいたのか、首をかしげてから状況を理解した奏さんは私と負けなくらい赤面して、すぐに離れる。

「わっ、ご、ごめん咲夜さん！」

「い、いいえ、大丈夫です……」

しばらくの沈黙。

2人が顔を赤くして下を向く。

ああ！ 恥ずかしい！

ただ戦っていただけなのに！

私は心の中で頭を抱え、頭から湯気が出そうになるほどだった。
すると奏さんが口を開いた。

「あ、あの、咲夜さん！」

「ふえ?! は、はい！」

「えと……その……明日……暇……ですか？」

今も尚赤面する奏さんの質問。

明日は妖精メイドに仕事を任せて有給の日なので、暇ではある。

「暇ですけど……どうかしましたか？」

「その……俺と……2人で人里にでも……行きませんか……う？」

奏さんのその言葉に私は数秒理解が出来ず、その場で首をかしげてしまう。

しかし、ようやくそれを察し、汽車のように蒸気が出るほど真つ赤になりながら、慌て出す。

「え?! ええ?! ほ、ほんとですか?!」

「あ、うん、ほんとだけ……」

私は口元が緩み、にやけてしまう。

まさか奏さんと2人きりで人里まで遊びに行くなんて……まるでデー

………考えないようにしよう。

とりあえず今は返事だ。

しっかりと『はい』って言わないと

「分かりました。では、明日、よろしくおねが」

ボゴオオオオオオン!!

私の返事を断るかのように、紅魔館の時計が爆発して、砕け散った。

「?!」

私と奏さんは驚きと焦燥の顔を浮かべながら、落ちてくる紅魔館のレンガを避ける。

「な、なんだ!」

「わ、分かりません。奏さん、お嬢様と妹様を見てきます。奏さんはパチユリー様を！」
「分かった、咲！」

「はいよ！奏くん、行こう！」

私は落ち着いて奏さんに指示を出し、私はお嬢様と妹様の所へと走る。

奏さんは咲さん呼び出し、大図書館へと消えた。

「お嬢様……………妹様……………」

私は崩れ落ちていく紅魔館の中を疾走しながらお嬢様と妹様の無事を祈る。

探しに探し回った結果、バルコニーでお嬢様を見つけた。

一瞬安堵の息をつくが、すぐにそれは驚きと絶望に変わる。

「お、お嬢様?!」

脇腹からは鮮血が滲み、肩からは抉られたような傷があった。

そして腹にも大きく抉られたあとがあった。

そこからは今でも出血し続け、ちらりと臓器が姿を見せる。

これは流石の吸血鬼でも、再生が間に合わず、お嬢様は気を失っていた。

「お嬢様！お嬢様！」

私はお嬢様を抱き、紅魔館を出る。

そして、門の前で慌てていた美鈴にお嬢様を渡し、永遠亭に連れていくように指示し

その後、私は落ち着きを取り戻して、妹様を探す。

美鈴からも妹様の姿を見ていないとか……

「妹様——！」

大声を出して妹様と何回も呼ぶが返事は一向に返ってこない。

地下室にいることはないだろうから、恐らく近くにいるはずなんだ……

するとそこに奏さんと咲さんが姿を現す。

「パチュリーは美鈴に預けていた。小悪魔も無事だ。どっちも怪我はない」

「よかった………まだ妹様が見つからないんです！」

「フランが？分かった。俺も探す」

「お願いします」

「私も探すよ、咲夜ちゃん」

奏さんと咲さんという心強い仲間とともに、紅魔館内を探す。

しかし、3人がかりでも妹様は見つからない。

「奏さん、いましたか？」

「いない………一体どこに……」

「……フランちゃんの能力が暴走した可能性はないの？」

「多分、俺もそう思う」

「私もです。この破壊のされ方は恐らく妹様でしょう……」

「じ、じゃあもつと危険だ！人里に出ているかもしれない！早く行かないと……」

ブシュ……………

私のメイド服に鮮血がこびりつく。

奏さんの腹から赤色の炎を纏った巨剣が飛び出していた。

そして、奏さん口からもドロドロと血が流れでる。

「この剣は……………」

「ぐっ……」

「妹様?!」

「あれえ？奏、もう終わりなの？つまんないよお!!」

妹様の顔は残酷で狂気にまみれた、薄汚れた笑みをしていた。

「ひっ?!」

思わず情けない声が出てしまった。

しかし、それにより固まっていた足が動くようになった。

「やるしかない……!!」

ナイフをホルダーから取り出す。さつきよりも手が震え、標準が合わない。辛うじてスペルカードで補う。

「ミスデイレクション!!」

広範囲にナイフを巡らせる。それにより、レーヴァテインの威力が弱まる。

行けるっ！

思い切り地面を蹴って妹様の懐へと潜り込む。そして、千剣「レガミクトセレナ」を握る。レガミクトセレナはいつもよりも軽く感じ、自分の思ったところから剣が出ていた。

「幻視「ナイトソード」！」

レガミクトセレナの分身を作り上げ、ミスデイレクションと重ねる。

長い剣と細く小さいナイフが同時に妹様を襲った。

「禁忌「クランベリートラップ」！」

弾かれるのは目に見えていた。しかし、これほどで折れていたら従者失格だ。

「幻象「ルナクロック」!!」

時を止め、ナイフを大量に投げるが解除した途端に全てが塵に変わる。これもダメなのか……………!

もう一度レガミクトセレナを握り、一度時を止める。

その間だけ、妹様は動けないので一気に妹様へと近寄る。

そして、私のラストスペルを叩き込む。これが最後だ……………

「月光「ムーンソード・レイン」!!」

時を解除する。すると私の魔法陣からレガミクトセレナがさっきの3倍は出てきた、妖力消費の激しいこの技は1日に1回がいいところだ。しかし、それに応じた威力とスピードがある。この技はあの奏さんさえもよけられなかった大技だ。

流星の妹様でも厳しいと見受けられる。

「……………咲夜じゃつまらないよ?」

「え?」

キイイイイイ……………

軽やかな金属音を立てレガミクトセレナは全てレーヴァテインによって、燃え尽きた。レーヴァテインの火力はさつきよりも増しており、妹様の立っているところの床が焦げている。

「そんな……………嘘でしょ……………」

私の中の妖力は空っぽだった。これ以上時を止めることもスペルカードを唱えることも不可能だ。私はその場で膝をつく。

私の力じゃ……………無力なのは分かっている。でもっ……………どうして一人も助けられないのよ……………私は主に忠誠を誓ったんじゃないの?!……………でも、もう無理。これ以上戦えなんて自分の命を削って言うてるようなものだわ……………所詮私は人間。吸血鬼になんか勝てるわけない。

しばらく俯いていると、私の視界がぼやけ始めた。そして、地面に雫が落ちる。

こんなの……………あんまりだよ……………私は必死にお嬢様と妹様を守ってきたのに……………どうして……………報われないのよ……………どうして誰も見てくれないのよ……………！私はこんなにも頑張っているのに……………

「もういいや、お姉さまのところに行くから。じゃあね、咲夜」

ブオツとレーヴァテインが振り上げられる音がする。

ここで……………終わりか……………

キイイーン!!

レーヴァテインが私の目の前で停止する。停止の原因を私は即座に探した。すると

そこには少し青色を帯びた刀身、滑らかな曲線を描いた刀。それは見る人を魅了させるような。

そしてその持ち主、腹の傷はいつの間にか癒えていた。愛おしい声、私が待ち望んでいた声が聞こえる。

「ごめん、咲夜さん。回復に遅れた……」

「奏さん……」

「ごめんね、咲夜ちゃん！なかなか奏くんの傷が複雑でさー！」

奏さんとその相棒、咲さんのふたりが笑顔で私を見る。

「さて、フラン。正気に戻れ」

「あれ？奏死んだんじゃないのお？」

「残念ね、私が治した」

「まあた余計な妖力があるよ………さっさと倒しちやお」

妹様のレーヴァテインがもう一度生成される。奏さんは強く柄を握り、スペルの詠唱を始めた。

「水符「水神の舞」！」

渦潮を纏った刀がレーヴァテインと接触する。するとジュウウウウという音を立て、火種が妹様の目に入る。

「あああー！」

目を手で抑え、うづくまる。

「火には水を。当たり前だな」

「くっそお！」

「QED」そして誰もいなくなるか？」

フラン自体が青色弾幕に変わり、静かに奏さんへと向かう。

その途中から出現した弾幕が背後から奏さんを狙う。全方位囲まれた。

「咲。どうする？」

「とりあえず仕方ない。上に避けなさい」

「オーケーー！」

翼を生やし、奏さんは真つ直ぐ上に飛ぶ、それにより、弾幕から逃れることが出来た。

「奏くん！仕方ない、もう使って！」

「仕方ないか…」

奏さんは大きく刀を振り上げ、大声で詠唱を始めた。

「真符「時空斬鉄」！」

大きな時空の空間を作り、弾幕をすべて吸い込ませるブラックホールになった。

「?!」

妹様もこれには驚きの顔を浮かべ、そのまま奏さんの方に引き寄せられていった。

そして、一メートル前に来た瞬間刀をしまつて拳を強く握り、妹様の腹に一発入れた。それにより、少し吐血した妹様はかくんと体重を奏さんに預ける。

「よかつた……………完全狂気に染まる前に仕留められた……………」

「か、完全狂気ですか……………」

「そう。パチュリーの所で調べただけで、狂気にも段階があつて、完全狂気になるともう誰であろうと確実に殺すまで死なないんだ。今のフランはその完全狂気の手前つてところかな」

私は寒気がする。まさか……………妹様がそんな酷いことになつてたなんて……………私は急に眠気が襲い、その場で暈が落ちそうになる。

「おっと、咲夜さん大丈夫？」

「ごめんなさい……………どうやら疲れが……………」

この眠気は安堵からなのか、もしくは現実逃避なのかは自分でも分からなかつた。

「じゃあ部屋まで運ぶから寝てていいよ」

奏さんのその優しい声音に、私は無意識に暈が落ちていた。

私はこの日、自分の不甲斐なさに涙した。

8 話

努力とその成果

次に私が目を覚ましたのは部屋の天井だった。奏さんに運ばれ、私は自室のベッドで寝ていたみたいだ。目を覚ますなり、拳を上突き上げ、強く握る。

「守れなかった……」

その悔しさだけが心残りである。自分の命と妹様の命が助かり、全てが丸く収まったから結果オーライだ。しかし、私は本当に何もしていない。従者である私が、忠誠を誓い命をかけてでもお嬢様と妹様を守ると決めたのに、手も足も出なかった。その事だけが私の心を蝕み続けていた。カチャ……と静かにドアが開けられる。

「失礼するよ。咲夜さん」

「か、奏さん。すいません、寝転がったままで、すぐ起き上がります」

私は即座に立とうとしたが、太ももの辺りに激痛が走る。その患部を押さえ、私は蹲る。

「あぐっ……」

「咲夜さん。まだ傷が治っていないんだ」

怪我なんて……負っていないはずだ……妹様から攻撃は受けていないはず……いつ

の間に……………

私は白い包帯の巻かれた太ももを摩る。私はそんな怪我よりも、後悔が私の全てを覆っていた。

「……………どうしたの？ 咲夜さん？」

奏さんが心配そうに顔を覗く、私は体を強ばらせて、とりあえず「大丈夫です」と言っておく。もちろん大丈夫なわけが無い。自分の無力さを思い知らされ、誰一人守れなかったのだから……………それを見据えたのか、奏さんは私の頭の上に優しく手を乗せた。

「……………そこまで気に病む事じゃないさ」

「……………」

「確かに、今回ののはフランの暴走が原因だ。現に俺も一度死んだ。そんなもしまさきや、あの狂気化フランには勝てなかったんだ。レミリアだって大怪我を負ったんだろ？」

奏さんのその優しい投げかけに、私は体を震わせる。確かに今回の妹様は今までとは比べ物にならない桁外れの強さで、トップクラスのお嬢様と奏さんでさえ敵わなかったのだ。最終的に奏さんと咲さんの二人がかりでようやく止めることが出来たのだ。ちっほけな人間の私が、狂気化の妹様に敵うはずがない。でも、私はお嬢様に拾われた日から、お嬢様の足を引っ張りたくない一心で、必死に努力してきた。誰にも負けないくらい、家事だって弾幕ごっこだって……………今じゃ美鈴ともいい勝負が出来ると思っ

いる。でも、今日の一撃で私は全ての努力が水の泡になった気がした。

「お嬢様は……………無事なんですか？」

「ああ……………今はまだベッドで寝てる。永琳が診てくれたんだ」

「そう……………ですか……………」

私はとりあえず安堵の息をつき、肩を落とし、奏さんにある質問をする。これは奏さんだからこそ問うことが出来る質問。お嬢様だったら怒られそうだから……………私は言うのを躊躇ったが、意を決して奏さんの目をまっすぐ見据える。そして、こう告げた。

「私は、紅魔館に必要な存在ですか？」

「……………」

「今日もそうだった。私は妹様に勝てなくても、お嬢様や奏さんを守ることは出来た。従者の私が、あなた方を助けることは出来たのに……………冷静になれないまま、妹様に立ち向かってしまった」

「……………うん」

奏さんは黙って私の話を聞いてくれた。私はその優しさに負け、全てを吐き出そうとした。

『『努力してるから妹様にも勝てる』『毎日の努力が裏切るはずが無い』ずっとそう思っていました。私の努力を誰かが見てくれればそれでいい……………誰かが褒めてくれればそ

れに越したことは無かったんです……お嬢様も私が努力している事をとて褒めてくれました……その時から……何故か私は『紅魔館の中じゃ私が1番努力してる』
そうやって自惚れるようになりました」

「……なるほどね」

「でも、今日の妹様との戦いで、全ての努力が水の泡になったんです……努力してきた結果が……今日のこの有り様なんです……私の努力なんか、ちっぽけなもの。所詮人間だから吸血鬼には勝てない……そう痛感しました……結局、奏さんと咲さんに助けてもらい、私は何も出来ずに寝てしまった……こんなどうしようもない私につくづく嫌気がさしてきます」

私は布団をギュツと握り、視界が涙によってぼやけているのが分かる。声を震えており、思うような声が出ない。

「だから！誰一人守れないこの私が存在する意味が無くなるんです！」

「……咲夜さん……」

「従者らしくいられないなんて……私の存在価値を否定しているようなものです……」

「落ち着いて……咲夜さん……」

奏さんの忠告にすら耳を傾けず、逆にその言葉にイラつきを感じてしまっていた。

「もう嫌だよ!!役に立ってないなんて……紅魔館に来た意味が無いのよ!!」

そう、私は紅魔館にいる意味が無い。あの時、お嬢様に褒めてもらいたい一心でただ戦った。でも、それは本当に無意味なもので、結局自分の都合のいいように口実を作つて、奏さんの忠告をも無視したのでらう……

「もう生きたくないよ!奏え!」

瞬間、私はフワツとした感触に包まれる。その仄かな暖かさが私の全身を包み込む。

「かな……で……?」

私はいつの間にか、敬語やさん付けをしていなかった。

心の支配が、余裕を潰していったのだ。奏さんのその優しいハグと優しい言葉に私は更に涙を流した。

「君は活躍した。レミイも、俺も、そう思ってる」

「……そんなことない!さつきも言ったでしょ!!私は何もしてないのよ!ただ妹様に全力でぶつかつても!歯が立たなかつた。それに、結局助けてもらったのよ!こんなの……!……!従者失格なのよ!」

「咲夜!!」

「どんどんとネガティブ思考になる私を、奏さんの叫びによって全てを制される。」

「咲夜がいなかったら!今頃レミイも俺も死んでたんだ!俺が倒れてる間、お前が食い止めてくれなかったら今頃みんな死んでた!その小さな時間が、君の『努力の成果』だろ?!」

「奏……………」

「私は更に大粒の涙を流す……………お嬢様以外に認めてくれた人がいたんだ…それが何よりも嬉しくて、努力とか成果とかそんなのじゃなくて、私の存在自体を肯定し、褒めてくれる人が……………いたなんて

「う、ああああああああ!!」

「私が泣き続けている間、奏さんはずっと抱きしめて肩を摩ってくれていた。」

「数分後、私は泣き止んだ。」

「ありがとうございます。奏さん」

「いやいや、お安い御用だよ。咲夜さんが元気になってよかった。じゃあ、次はあなたの

主様にお話を聞きましょうか？」

「え？」

私は奏さんのその言葉に小首をかしげる。疑問符を浮かべていると、ドアがゆつくりと開き、主であるお嬢様が姿を現した。

「お、お嬢様?!いつからそこに!?!」

「最初からよ。咲夜が起きる前から……」

「も、申し訳ありません!身勝手な発言ばかり……」

「……………あなたがそこまで無茶してたなんてね……………」

お嬢様は深いため息をつき、優しく微笑んだ。

「ごめんね。咲夜……………主である私が……………従者の頑張りに気づけないなんて……………主失格ね……………」

「い、いえ……………」

「いいのよ、咲夜。今回は咲夜に助けられたの。でも、これだけは覚えといて……………私にはあなたをずっと見てる。だから、どれだけ咲夜が努力したのかも全部分かってるから。フランを命懸けで止めてくれて感謝するわ。ありがとう。」

お嬢様から初めて心のこもった『ありがとう』。私はその言葉にまた涙を流す。それを見据えたお嬢様は私の頭を胸に乗せる。

「辛かったわよね…………ごめんね。今は…主従関係なんて忘れなさい……………」
「……………はい……………」

私はまた、愛しい人の胸で泣いた。すると背後で奏さんがこう放った。

「やっぱり、部外者の俺よりも、一番親しい人から言った方が、心に響くよな……………」

「あら？部外者つてのはちよつと語弊があるわね。あなたはもう家族よ？」

「あつはは、そうだった……………ありがとなレミイ……………それと……………ごめんね咲夜さん。俺の頭じゃ、これしか咲夜さんを元気にさせる方法が見つからなかったんだ……………」

「いえ、充分ですよ。ありがとうございます…」

私は奏さんに深々と頭を下げ、笑顔で大丈夫なことを知らせる。奏さんの顔は一瞬だけ赤くなり、すぐに微笑み返した。

「そっか……………良かった」

「じゃあ、咲夜も良くなったことだし、フランのところに行きましようか」

「御意」

そう言つて、私たち3人はゆつくりと部屋を出て、歩く。この日、私は奏さんへの気持しが鮮明に焼き付けられ、感情の名が分かった。

私は、この人が好き。

これは自然なこと、私が望んで思ったものだ。

その奏さんへの感情は、最初で最後の初めての『恋』だった。

9話

動き始める

私達は今、お嬢様の自室に集合していた。妹様の狂気の理由について話し合っている。前回の狂気化との間が前代未聞の短期間だったため、紅魔組全員が少しだけ疑っていた。これは妹様の発作で起きたただの偶然なのか、それとも、誰かが何らかの理由と方法で妹様の精神をいじったのか。

「…誰かに操られたっていう可能性は無いのか？」

「ないわけではないわ。でも、フランが別の生き物に操られるほど貧弱じゃないのはあなたも分かっているはずよ。奏」

「……じゃあ一体……」

「私はやはり自発的だと思う。自発的と言っても、私の発作と同じように、心の奥底から無意識に出てくる魔の手。それがフランの狂気化だと思うの」

パチュリー様の説得力のある意見に私達は首肯する。しかし、それも少し違うような………

妹様の謎の狂気化。そして今までにない程の力。このままにしておけば、いつかは紅魔館が危機に陥る。それだけは避けたい。完全狂気に染まってしまうえば、奏さんや月人

が全力を尽くしても勝率は五分五分。そう考えると、やはり妹様が完全狂気になる前に、何らかの処置が必要だ。それは分かっているのだが、妹様の弱点はお嬢様よりも少なく、その弱点を突くのも至難の技だ。

「しかし、お嬢様。私も誰かが関わっている可能性が高いと思われます。妹様一人では完全狂気には浸ることは出来ないと思うんです。今回だって、一人で体のバランスを保っていたとは考えにくいんです」

「……フランよりも強い妖怪……この幻想郷にはゴロゴロいる。でも、フランと関わった妖怪はほぼ皆無。フランの存在を知っているのも、今はまだ霊夢や魔理沙。妖怪でも私や美鈴、小悪魔、パチュリィと文しか、知らないはずよ。文はそんなことするメリットは無いし、逆にデメリットを生む可能性がある。その時点でこの推理は少しずれてると思うわ」

「うーん……」

謎の上に謎が上書きされる。ひとつ解いても新たな問題が出る。エンドレスに続きそう。私は一人で考えを一から改め、もう一度物事を整理する。

まず、以前奏さんが来たばかりの時に妹様は狂気化した。この時はまだ浅いものだったので、疲労が溜まっていた奏さんでもすぐに処理ができた。それで、今回の狂気化約5ヶ月程の間。いつもなら3年に一度くらいの頻度であるのに、今回ばかりは少しだ

けイレギュラーが生じているみたいだ。

「少し心当たりのある奴がいる」

「……………」

奏さんがゆつくりと手を挙げる。私とお嬢様、その他の紅魔組は全員首をかしげた。

「…………昔、俺たち愛原と因縁のライバルだった『倉見』だ。俺が来てからフランの狂気化が進んだのなら、少しだけそういった考察もできた」

「…………なるほど…確率的には有り得ますね。お嬢様はどう思いますか？」

私は奏さんのその意見に首を縦に振り、お嬢様に意見を求める。しかし、お嬢様は一人で何かを考えていたようだった。

「……………」

「お嬢様？」

「え？あ、ええ。私もそう思うわ」

お嬢様は私に名指しされる前、少しだけ顔が引き締まって見えた。お嬢様も倉見と戦った身。少しくらいトラウマが蘇るってことかな……………しかし、それは申し訳ないが、後回しにしたい。

「では、倉見の仕業という方向で少しだけ調べてみますか。私達は知人を当たってみます」

「ああ、よろしく頼む」

私は実際に危害が加わらない限り、こちらは何も動けないので、とりあえず情報を集めるために、人里に降りようと考えていた。ドアを開け、身だしなみを整えてから美鈴と小悪魔を連れて紅魔館を後にした。

俺は咲夜さんが立ち去った後、もう一度レミイと一緒に話し合っていた。

「レミイはどう思う？」

「そうね……倉見の仕業というのも、少しだけ違うんじゃないかしら？」

「さつきから否定ばかりしてるけど……レミイは何かあるのか？」

「いえ、特にないわ。ただ、私の運命が違うと言い張ってるからよ」

「なるほどな……信じるしかないか……」

俺はその場で顎を触る。フランの狂気化が偶然ならば、今頃紅魔館は潰れているはず

だ。あのピュアなフランが俺たちを殺そうなんて考えるはずがない。これはさよりの能力で実証済みだ。それならば、自発的ではないことがわかる。他人に操られた可能性が一番高いと思うのだが……どうやら違うらしい……

「フランにしか分からない心の奥底の感情がある。そういう考えもできるから、必ずしも倉見の仕業とも言えない」

「私は、フランの身に何らかの異常をきたしてたと思うの」

確かに、レミイのその案も一理ある。フラン自体のストレスや病気、それによって彼女の中に眠る狂気が呼び覚まされた。そんなことだつて考えられる。

それにしても、さつきからレミイの調子が少しだけ変な気がする。気のせいだろうか？心做しか、レミイの態度や性格はいつも通りなのだが、何かがいつものレミイとは違う。そう思った。風邪でも引いたのだろうか？

そこで俺は「薄々勘づいていた」のかもしれない。あまり考えたくなかつたが仕方がないだろう。レミイの目を見て、俺はこう放つた。

「俺は倉見の方向で調べてみるよ。まだその推理も捨てきれないからね。レミイはフランに直接聞いてみて」

「分かつたわ」

そう言つて、俺は咲名千里を持ってレミイの自室のドアノブを握る際、小さい声で、な

おかつレミイに聞こえるように、自分なりに棘のある声で忠告した。

「……………お前らが直接危害を加えるつもりがないのなら、今すぐここから去れ。お前らが動かないのなら、こちらでも動く気は無い。でも、咲夜さんやフラン、美鈴や小悪魔、そして咲には絶対に手を出すな。いいな」

「……………うど、どうしたのよ？ 奏…」

「何でもないよ。レミイ。じゃあ、頼むね」

俺の忠告に、レミイは首を傾げる。まるで何を言っているのか分からないと言わんばかりに

やっぱり違う……………いや、あいつは……………レミイなのか？

「……………もうすぐでバレるところだったね。レミリアちゃん」

「……………そうね…あなたも危ないわよ。一番奏と距離が近いのだから、バレるのも時間の問題……………ね。とゆーか、あなたご主人様に愛されてるわね？『手は出すな』だってさ……………」

「……………ははっ、そうだね。私も奏くんに愛されて幸せ者だよ。でも、大丈夫。私達倉見は絶対に愛原の子孫を殺す。そう誓ったからね。そうでしょ？レミリアちゃん……………いや、我が倉見の主、倉見 朧の吸血鬼系列の末裔……………レミリア・スカーレット様」

「……………共に……………この世界の終焉を迎えさせよう。片波 咲……………」

10話

裏切りの紅魔館当主

私は今、パチュリー様と共に人里に降りていた。私一人でも良かったのだが、パチュリー様が「体を動かしたい」と頑なに言ってくるので、私が同伴し人里で聴取することになった。

私が常連の八百屋や、甘味処。鈴奈庵にも聞きに行つたが、手がかりとなるようなものはゼロだった。

「人里の者は……やはり知らないですね……妖怪に当たつてみるしかないようですね」「そうね、妖怪の山に行けば分かるんじゃないかしら？文屋もいるし」

パチュリー様は私よりも先に妖怪の山へと歩を進めた。私は追うようについて行く。妖怪の山まではさほど距離はないので、数分で着いた。とりあえず、文のいる所に行く。

「失礼するわね」

「あやや？咲夜さんにパチュリーさん。一体どうされたんですか？」

丁寧な言葉遣いの割には、陽気な声で話す文。どうやら新聞を刷つていたようだ。文の服は黒のインクで汚れていた。

「ご用でしたら、もう少しお待ちください。着替えてきますんで」

「いいえ、それでいいわ。ちよつとだけだから」

「あや、そうですか？」

後頭部をポリポリと掻きながら文は近くの応接室に私達を案内した。対面しているソファに腰掛け、私は出された茶を飲みながら文に問う。

「ねえ、最近フランに会ってる？」

「フランさんですか？いいえ、最近レミリアさんに取材してるので、フランさんは2カ月程見てないです」

「そう……ありがと……」

「あの、何かあったんですか？私で良ければ協力しますけど……」

文の気遣いに感謝しながら、私は少しだけ遠慮がちに言う。

「そうね、少しかだけ文の取材力を發揮させて貰いたいから、お願いするわ」

「分かりました！ドンとお任せ下さい！」

胸を張って鼻から息を吐く文に私は妹様の狂気化の話をした。

「それはまた……とんでもない事になりましたね……奏さんが凄いですよ………しかし……」

文は一呼吸置いて、顎を擦りながらこう放った。

「フランさん自体の問題ではないと思うのです。誰かの仕業……そう考えた方がいいで

しよう」

「……理由は？」

「勘」

「協力ありがとう文。もういいわよ」

「ご、ごめんなさい！勘は嘘です！でも、必ず誰かが関わっているのは明白です」

「それは私達も分かってるわ。咲夜も私も」

パチュリー様の言葉に文は言葉を詰まらせて、そこから何か思いついたかのように「あつ」と声を上げた。私はその大きな声に少しだけ体を強ばらせる。

「な、何……」

「実際にフランさんに会わせて下さい。レミアさんでもいいです」

「わ、分かったわ」

「咲夜さん。パチュリーさん……落ち着いて聞いてください……私は……以前に奏さんに過去と愛原と倉見の関係を話して貰いました。その中に……一つだけ気になる点がありました……」

意味深な言葉を使い、文は真剣な顔つきで話す。どうやら、ふざけている様子ではないようだ。

「倉見の血の鬼。朧の玄孫やしやじ。そのような話もありました」

「……………」

私は何を言っているのかよく分からず、首を傾げるが、パチュリー様は違った。顔面は蒼白。手を震え、冷や汗を流していた。

「……まさか……」

「……急ぎましょう！今は戦力が足りません！奏さんだけでは危険です！」

私は文に手を引かれ、意味もわからず妖怪の山が出る。

「ちよ、ちよつと文！どうしたのよ！」

「話は後です！早くしないと紅魔館が……」

瞬間、私たちの館から大きな爆発と黒煙が舞い上がる。私は目を見開き、パチュリー様を見る。

「ぱ、パチュリー様！これは……」

「……予想外だわ……急ぎましょう！」

そこでようやく察した私は少しだけ嫌な予感がしていた。

咲夜さんとパチュリーが情報を集めに人里へ降りてから2時間後。俺はまだ目覚めないフランのベッドの隣で座っていた。フランが目覚めないことには、真実は分からない。倉見が黒幕なのか、それともフランが自発的に行ったものなのか、他人の俺らには到底たどり着くことが出来ない。証拠そのものであるフランの回復が先だな。

俺は頭の中でそう思考する。すると部屋のドアがゆつくりと開けられ、そこからレミイが姿を現した。

「奏、お茶でもどう？ 咲夜が作り置きしてくれてたの」

「ああ、頂こうかな」

俺はレミイに呼ばれ、バルコニーへと移動する。そう言えば……………咲はどこにいるんだ？ 刀の中かな……………俺は神経を研ぎ澄まして、咲の妖力を探す。いた、どうやら刀の中で寝てるみたいだな……………

俺は木造の床を歩き、椅子に腰掛ける。レミイは奥からティーセットを持ってきた。そしてレミイはマグカップの中に鮮やかな色の紅茶を淹れる。

「はっ」

「ん、さんきゅ」

軽く礼を言い、俺はマグカップに口をつけ、紅茶を飲む。咲夜さんの味だ………美味し……

俺は少量飲んで、カップを机に置く。そしてレミイが口を開いた。

「ねえ、今回のフランの件。やっぱり心の問題だと思う」

「……………それはお前の運命の力か？」

「ええ、運命で過去を辿ると、フランの心の中が何やら複雑な何かに侵されているの。これは心が衰退している証拠よ」

「そうか……………倉見の可能性は無いのか？」

「無いわけでは無いけど。倉見は愛原との戦いで敗れたし、今更、臆が奏を狙ってるとは思えない」

「……………そうか……」

心の中で、俺は他の方法を必死に考える素振りを見せた。
やっぱり……………レミイ……………お前なんだな……………

「まあ、フランと倉見の関係なんて皆無だし。問題は……………」

刹那、レミイの頬に浅い傷が入る。その隣には、銀色に輝いた刃の先端があった。俺

は机に片足を乗せ、咲名千里をレミイに突きつけた。

「嘘をつくのもいい加減にしな。倉見の末裔。レミア・スカーレット」

「……………」

「今更しらばつくれるつもりか？ 朧の名を知っていながら……」

嘲笑するように、俺はレミイを見下す。それにも動じないレミイに少しだけイライラして、俺は咲名千里をレミイの頬につける。新たな傷が刀の刀身を赤く染めた。

「答えろ。お前はフランを使って何をするつもりだったんだ……………」

「……………」この主は私よ？」

「……………」会話にならないみたいだな……………」

俺は刀を振り上げ、一直線にレミイに切りかかる。それと同時にレミイが持つ赤色の槍、「グングニル」が俺の咲名千里と交差する。妖力同士のぶつかり合いのため、大きな爆発と衝撃波が紅魔館を襲う。

「あつはははは!! やっぱり愛原との戦いは別格だな！」

「……………」

俺はもう一本の刀、時空真を握る。フランと同様、レミアも姉なので狂気は少し混じっている。

「さて、いつまで私を楽しませてくれるの？ 愛原の子孫さん？」

「お前もな、倉見の吸血鬼子孫」

俺とレミリアの視線が交差する。弱点の多いレミリアだが、何故だろうか……弱点がないようにも見える。これは一種の錯覚なのか、それともレミリアの能力なのか。俺は一瞬頭の中で思考する。しかし、そんな暇もなく、レミリアのグングニルが俺の脇腹をスレスレで通り過ぎる。

「あつぶねえ……………」

「おお、よく避けたわね?」

今いるのは美鈴とフラン。咲夜さんとパチュリーは人里に行ってるし、小悪魔は買い物中だ。フランと今のレミリアを会わせるわけにはいかない。俺が止めるしかないか……………

咲名千里と時空真を握り、俺は母指球に力を入れる。

「……………咲!」

「?!」

レミリアが唐突に咲の名を呼ぶ。俺はあたりを見渡して、咲を探す。なぜなら、咲名千里から咲の妖力が消え、どこか別のところに移動したからだ。するとその途端、咲名千里の根元から刀身がポツキリ折れていた。妖刀であるはずの咲名千里がいとも容易く折られた。これを出来る人物は一人しかない

「やつほー！奏くん！」

「……咲……なんで……」

「うーん、簡単に言うとは……」

絶望する俺に咲の言葉は更に上乘せされる。

「私は愛原の敵、倉見の人柱だから」

相棒に裏切られた俺は何か大切な物が崩れていく音がした。それと同時に、怒りをもこみ上げてきた。今までの笑いは全て演技。俺と咲の信頼関係は元から偽りのものだったということ……

「……けるな……」

「んー？」

「ふざけるなあああー！」

わざとらしく耳をこちらに向けてる咲。俺は歯を食いしばって、時空真を右手に持ち替えて、咲の右手首から左肩にかけて斬った。

そこから、咲の鮮血があたりに飛び散った。そして咲はその場で倒れる。

その時、俺の頬に何か冷たいものが伝った気がした。

11話

信用の崩壊

私とパチュリー様と文は、全速力で紅魔館に向かった。未だ黒煙が上がり続ける紅魔館に私は冷や汗をダラダラと流す。お嬢様や奏さん……妹様が無事ならいいのだけど………

「咲夜！私はフランを探してくるわ！レミイと奏をお願い！」

「わ、分かりました！文！美鈴と一緒にいて！」

「あ、あやや！私も行きますよ！」

「いいわ！美鈴と見張りしていて！」

それだけ言い残し、私は勢いよく紅魔館内に入る。見た感じ、火が出ているところはあまり少ないようだ。これはパチュリー様に任せよう。とりあえず、お嬢様達はきつとバルコニーにいるだろう。

紅魔館内は狭いのでむやみに飛ぶことが出来ない。そのため、全力で走るしかなかった。バルコニーに向かう途中、何度も爆発音が聞こえ、私の不安は募るばかりだった。そしてようやく、バルコニーに着くと、折れた咲名千里と時空真を握っている奏さんがお嬢様と咲さんを睨みつけていた。

「か、奏さん！」

「……………」

無言のまま、奏さんはこちらを見る。そして何も言わずにまたお嬢様の方へと向き直った。

「あら、咲夜。帰ってきたのね……………」

「お嬢様。これは一体……………」

「簡単な話。私達がフランを暴走させた張本人。そして愛原の敵、倉見だつてことよ」

その言葉に、私は心の中で総崩れになった気がした。お嬢様側に付いている咲さんもきつと倉見側なのだろう……………」

「どうして……………」

「今まで騙し続けてごめんなさいね。咲夜。今だから言えるけど、フランの狂気化の大元は、咲の持っている妖力の欠片なの」

「……………どういう事ですか？」

「つまり、咲の能力の欠片がフランに埋め込まれたってわけ」

「……………咲さんの能力って……………」

「荒れ狂いを統べる程度の能力」

「荒れ……………狂い……………」

「咲夜ちゃん。正直邪魔者なのよ？ 奏くんも。フランちゃんの実験のためにここは退いてくれるとうれしいな？」

「断る」

奏さんの即答により、時空真の妖力が強まっていった。それに咲は嘲笑するように見下す。

「所詮、ただの愚かな龍人と人間。ちつぽけな存在が私達を止められると思ってるの？」
「ああ、所詮俺達はちつぽけな一人の生き物だ。でも、止められると思ってるから俺は今ここにいます。咲夜さん。話はあとにしよう。心苦しいかもしれないけど、レミイを殺すつもりで戦ってくれ」

「……………わ、分かりました」

完全に理解しきれていないまま、私はナイフを数本取り出す。体勢を低くして、出来るだけ相手の行動が読めるようにするが、咲さんが呆れた顔をしながらこう唱えた。

「もう邪魔。界符「瞬きの境界」」

「?!咲夜さん！大きくジャンプ！」

奏さんの慌てた声に反応し、私は大きく飛ばうとするが、逆に地面に吸い込まれていった。黒い渦が私たちを吸い込んでいく。頑張ってもがくが足が埋められているため、身動き一つ取れない。

「くそ、手遅れか……………」

「じゃーね？2人とも？大好きだよ」

心にもないことを並べる咲さんに奏さんの言葉は怒りに満ちていた。

「覚えてろよ。2人とも……………！いつか愛原の子孫が…お前達倉見を倒すつてことをな……………」

「楽しみね……………」

そうして私達は黒の渦の中に吸い込まれる。最後の最後まで、お嬢様の顔は微笑んでいた。

「……………さん。……………やさん……………咲夜さん！」

「っ！」

名を呼ばれ、私は目を覚ます。目の前には少しだけ泥で汚れている奏さんがいた。私

は起き上がって辺りを見渡すが、ここは洞窟の中だった。

「ここは……………」

「分からない。恐らく、咲のスペルカードでどこか別の場所に飛ばされたんだろう」

「幻想郷ですか？」

「多分な、あちこちに妖力が蔓延ってる。これは妖怪のいる印だ。幻想郷であることは
確実だと考えていいかもね」

「お嬢様と咲さんは……………」

「ああ、『裏切られた』」

「そんな……………」

長年お嬢様の付き添いで命を尽くしてきた私にとって、お嬢様の裏切りはどんな不幸
よりも心に重いものがのしかかる。

「とりあえず、今はフラン達が危険なんだ。ここがどこだか近隣の人に聞いてみるしか
ないみたいだね。行こう、咲夜さん」

「……………」

「咲夜さん？」

「え？あ、はい、そうですね」

「……………」

奏さんは不思議そうに私の顔を覗き込んでからこう言った。

「咲夜さん、心か痛むのも分かるけど、今はそれどころじゃない。気持ち切り替えよう」

「……分かっていきます……」

そんなことは分かりきってるんだ。でも、レミリアお嬢様を敵に回すなんてこれっぽっちも考えたこともないし、裏切られるなんて以ての外だ。ずっと信じていたお嬢様が離れていく感じがしていた。でも、それは奏さんも一緒だ。咲さんが離れていつて苦しいはずなんだ。私も頑張らないと。

私達は洞窟を出て、辺りを見渡すが山、山、山。自然しかないのだ。

「……………これは……街を探すのも一苦労だね……」

「………はい、妖怪に出くわせばいいのですが……」

と、私がそう言った途端、ドスンと地響きが辺り一帯に響き渡った。私と奏さんは洞窟を出て、音がする方向へと走った。

「な、なんの音だよ……」

「とりあえず探しましょう。妖怪かも知れませんが」

走りながらその音源を探す。さつきからこの森は妖力がずっと蔓延っており、強力な妖怪がうじゃうじゃいるのは見て取れた。しかし私達がよく見る妹様や美鈴、文などと

はまた違ったタイプの妖怪だ。

しばらく歩いているとその音がどんどん大きくなってきた。

「……咲夜さん、ストップ！」

「……」

私の前に奏さんの左手が出されて、私は急ブレーキをかけるように止まる。私は奏さんの視線と同じ方向を見る。するとそこには私たちの数十倍はあるであろう大きさの巨人がいた。妖力も桁外れだ。

「……ここは我らの聖域、それを知っての狼藉であろうか……」

「すまない、道に迷ったんだ。近くに人の街はないか？」

「……信用ならんな。とつとと去れ……」

「ちっ、咲夜さん。戦おう」

「……はい」

私はナイフを抜き、奏さんは時空真を抜いた。私は早速スペルカードを唱える。

「幻符「殺人ドール」！」

雨のようにナイフが巨人を襲う。しかしそれはまるでハエ叩きのように容易く弾かれる。ナイフでは攻撃が通らないと判断した私はレガミクトセレナを取り出し、時を止めて懐に入り込むが私の体は逆に止められていた。巨人の周りには罨がはられており、

それもよく目立つ札の罨。いつもなら気づけた罨に簡単に引つかかってしまっていた。

「そ、そんな……」

「咲夜さん！避けて！」

「え？」

罨から抜け出そうともがいていると、巨人の腕が大きく振り上げられており、明らかに私を標的としていた。ぶおんという風切り音を立てながら、一気に巨大な腕が振り下ろされた。私はここで死を覚悟した。

ああ、最後まで私……ダメダメだな……

私はレガミクトセレナを下に落とす、諦めを相手に見せるが巨人はそれに動じずそのまま振り下ろした。私は目をつぶり、顔を背けた。

しかし一向に私に痛みと衝撃は来ることがなかった。恐る恐る目を開けると、驚きの表情を見せる巨人と私のちょうど真横に奏さんが倒れていた。

「……!!?」

奏さんの周りには鮮血が飛び散り、衝突したであろう木にも水たまりのようにこびり付いていた。

「がはっ……」

「奏さん?!」

私は走って奏さんに近寄る。ひどい怪我だ、明らかに肋と肋骨が折れている、出血もひどい……………私は救急用の包帯を取り出そうとするが、奏さんが口を開いた。

「咲夜さん……………時を止めてどこか遠くに……………」

「わ、分かりました」

私は最大限妖力を使い、時を止めた、恐らく10分は止まったままだろう。奏さんの腕を自分の肩に回し、ゆっくりと歩いていく、後ろを確認しながら逃げる。巨人は時と同時に止まったみたいだ。奏さんは浅い息をしながらヨロヨロと歩く。

「し、しっかりとしてください……………奏さん……………」

これも私のせいだ。見え見えの罠に引っかかって、それは抜け出そうとせず、お嬢様に裏切られたことをいつまでも引きずって……………それで奏さんに大怪我を負わせる結果になったのだ。

「……………もう、嫌だよ……………」

お嬢様に裏切られ、最愛の人を傷つけた。私はもう戦意を失った。このまま、ここら辺で野垂れ死にたい。もういつそのこと、誰かに殺されて楽になりたい。

もう戦うなんて……………無理だよ……………

1 2 話

彼への気持ち、逃げない思い

奏さんを担いで歩いてから約10分後。私はさつきまでいた洞窟の中に入った。ここなら誰にも見つからないだろう。奏さんをひとまず寝かせて、私は救急用のポケットから包帯を取り出す。

「奏さん……………」

彼はもう虫の息だった。パーカーとTシャツを脱がせ、折れたであろう腰に包帯を巻き、出血しているところも止血する。近くの綺麗な沢から水を汲み、奏さんの元へと走っていく。

「飲めますか……………」

「あ、ああ……………ありが、とう」

辛うじて言葉を出す奏さん。とても辛そうな顔で受け答えをしていた。私の心は後悔と自分への憎しみに蝕まれていた。悔しさのあまり、下唇を強く噛んでしまい血が滲んでしまっていた。

「今日はここにいきましょう」

「あ、ああ……………」

せめて奏さんが怪我している間、私は精一杯彼のために尽くしたい。そう思っていた。短い返事をした後、奏さんはもう静かな寝息をたてながら深い眠りについていた。私は自分への戒めのため、レガミクトセレナを取り出し、頭上から腹の前へと振り下ろす。それを約500回程行つた。豆が潰れ、手に力が入らないほどだった。でもこれくらいしないと自分の気が収まらない。自分の不甲斐なさで人を傷つけた。守る側の人間が、逆に人に守られた。それを考えるだけで、自分の中からなにか熱いものがこみ上げてきたみたいになる。日も沈み、月はもう真上に上がっていた。午前1時程だろうか？私は服を脱いでタオルを取り出し全身の汗をタオルで拭く。拭き終わり、もう一度服を着た。表に戻ると、奏さんが目を覚ましていた。

「か、奏さん!？」

「え、ああ、咲夜さん」

「大丈夫ですか？体の方は……」

「ああ、大丈夫だよ」

奏さんの体にはさつきのような大きな傷はもう無かった。これも龍人の再生能力なのだろうか？

私は奏さんの前で正座をし、頭を下げた。

「さ、咲夜さん?」

「申し訳ありません。私の不注意のせいで、奏さんにこんな大怪我を負わせてしまつて……」

「い、いいよ、顔を上げて？もう治るから……」

「いいえ、こうでもしないと私の気が収まりません。どうかこのままでもいいさせて下さい」

「あ、うん……」

奏さんは黙り込むが、何故か気まずさなど微塵も感じなかった。やはり自分の心に余裕が生まれなかつたからだろう。するの奏さんは唐突に口を開いた。

「レミイに裏切られて……紅魔館からも追い出されて……そりやシヨックを受けるよね……」

「……はい。ですがそれは奏さんも同じのはずです」

「俺は違うよ………咲とは………そりや相棒のような存在だったけど………そこまで付き合いが長かつたわけじゃないんだ。咲夜さんの方がシヨックは大きいと思うよ」

「………」

強いんですね……奏さんは……

心の中で奏さんに尊敬の眼差しを送る。大切な人と別れても、いつまでも笑顔を向けられるこの人の強さが私には理解できない。私は更に顔を俯かせてしまう。

それを見かねたのか、奏さんは更に優しい声を投げかけてくる。

「だから……切り替えよう……また紅魔館に戻って」

「嫌です」

「……え？」

私は奏さんの言葉に思い切り被せた。もう自分の中にはお嬢様なんていなかった。

「私はもう紅魔館になんか戻りたくありません。ですから……」

私は少しずつ涙ぐんでいた。泣きたくなる衝動を抑え、必死に自分の本音を奏さんに告げようとする。

「一緒にどこかへ逃げませんか？」

「……」

「どこでもいいです。紅魔館の手の届かなくて……霊夢や魔理沙……文とも疎遠になってもいい……！私はあなたと共にこの先の生涯を歩んでいきたいんです……」

私は……私は……」

これを告白というのだろうか、自分の中にはそんな恥すらも忘れていた。私のことを愛してくれなかったお嬢様なんかももうどうでもいい。紅魔館に戻っても本当の愛は絶対に貰えるはずがないのだ。なら、戻る意味もないし、紅魔館での私の存在意義はもう無くなったんだ。

だから……この人と共に過ごしたいから……告げるんだ……

「私は、奏さんが好きなんです……………!」

「……………」

「だから……………あなたと恋人として……………平和に暮らしたいんです……………レミリアお嬢様の事を忘れられるくらい……………」

奏さんはずつと黙ったままだった。黙って私の話を聞いてくれていたんだ。私は手を差し出し、最後にこう放とうとした。

「だから、私と一緒に逃げ……………んう?!」

その途中の事だった。私の唇が彼の唇に塞がれ、言葉が出なくなった。その唇はまるで「黙れ」と言わんばかりに強く押し付けてきた。

「ん……………ん……………」

永遠に続くような感覚に陥る。キスという初めての行為に私は顔が蕩けてしまう。しかしそれとは裏腹に奏さんの顔は真剣に私を見つめていた。

「俺も咲夜さんのことが好きだ。いつまでも君と一緒にいたい」

「な、なら!」

「でも、俺は逃げたくない」

「っ!」

奏さんの瞳には自分の意思を貫こうとしている強い意志が伝わるほど真剣で力強い

ものだった。

「確かに俺も、咲夜さんと2人きりでどこかで暮らしたい。でも、それは紅魔館に報告してからの方がいいんじゃないかな？レミイや咲が裏切っても、フランやパチュリーが君を愛していた気持ちは本物だったと思うよ。だから…」

奏さんは一呼吸置く。そして少しだけ戸惑いを見せながらも意を決して話し始めた。

「俺は自分でこの戦いにケリをつけたいんだ。それを……大好きな君と一緒に見届けたいんだ……。それが理由じゃ……ダメかな？」

彼がこんなにも私のことを想ってくれて、それに逃げることはいくらだって出来るのに、彼は絶対に逃げない。それが私と違う。奏さんの強さなんだ。

「……いいえ、私は奏さんに一生付き添っていきます」

「はははっ、今のプロポーズみたいだね？」

「なっ?!ち、違いますよ!」

「分かってるよ……」

「で、でも、この戦いが終わったら……将来のこと……少し考えてみませんか？」

「……ああ、一緒にな……」

奏さんの顔はさつきよりも優しく、笑顔だった。私も流れていた涙を拭いて、笑顔を返す。

「じゃあ、明日に備えて寝ようか……」

「あ、あのー！」

「ん？」

私は奏さんの手を握り、顔を果実のように紅潮させる。体の隅から隅まで熱くなっているのが分かるほど緊張していた。

「さ、寒いので……一緒に寝ませんか？」

「っ!？」

これには流石の奏さんも顔を真っ赤に染め上げる。そりやそうだ。私だって初めてのことなのだから……奏さんはオドオドと辺りを見渡しながらこう答えた。

「え、あ、う、うん………いいよ……」

「あ、ありがとうございます……」

私は奏さんが使っていた布団にモゾモゾと入り込む。奏さんとの距離が約15センチ程で、お互いの息がかかるくらい。嬉しさもあるが、同時に恥ずかしさもあり、どうしていいか分からなくなる。

「明日……紅魔館に向かおう。一刻も早くフラン達を助けないとね」

「ええ………でも今は……忘れてほしい……です……」

そう、今は私だけを見ていてほしい……そんな思いから……奏さんとの壁が消えつつ

ある。

「咲夜さん……………」

「ん……………」

私は静かに唇を前に差し出す。奏さんは躊躇いもせず、私の唇に自分の唇を重ねた。さつきとは違う暖かさがあり、男の人とは思えないほど柔らかい唇。しつかりと保湿が行き届いているのも感じ取れた。今ではこんなことを考えられる余裕も出来ていた。ゆつくりと唇を離し、口を開く。

「やっぱり……………奏さんはすごいですね……………人の心が読めるみたいに…優しく声をかけられるなんて……………」

「いや……………これができるのは……………咲夜さんだからだよ」

少し恥ずかしそうに奏さんは言う。それを聞いて私はまたもや顔を赤く染める。

「は、早く寝ようか……………」

「は、はい……………」

そう言ってお互いが外側を向いて寝る。その時、私と奏さんは1時間ほど顔が真っ赤になっており、眠ることが出来なかった。

1時間後、今日という日に感謝をし、愛する人の温もりを感じながら、私は眠りにへと入っていた。

13話

紅魔館へと向かう道

「んっ、んー……………」

気持ちのいい朝だ。日差しが私の目を刺激し、ほどより目覚めを呼び覚ましてくれる。大きく背伸びをし、隣をちらつと見る。どうやら、まだ奏さんは寝ているようだ。

「ふふっ」

奏さんの寝顔を見ていると微笑みが絶えなかった。憧れの人とこんなに近い距離で過ごすことが出来るこの嬉しさに私は胸が踊っていた。奏さんの前に座り、私は指で奏さんの頬をなぞってみる。男の子なのに柔らかいその頬に私は少しだけ羨ましく思っていた。

するとその途端、奏さんの目が開いた。

「んあ……………」

「ーっ、めんなさい……………」

「んうー？何が……………」

まだ眠りから目覚めていないからか、奏さんの言葉は曖昧だった。私は顔を赤くして両手で隠す。

「い、いいえ！なんでもありません……」

「そっか……」

奏さんは立ち上がり、近くの沢まで歩いていった。今日中に絶対に紅魔館に戻って、妹様を助ける。それは昨日、奏さんが発した揺るぎない信念だ。そうだ、レミリアお嬢様以外にも、私の大切な人はいる。この短い命でどれくらいの愛が貰えるかで、私は死に際の感情も変わってくるんだ。自分で両頬をバチンと叩く。

「よし……」

「お待たせ、咲夜さん」

奏さんが姿を現した。さっきのような寝ぼけた顔ではなく、しっかりと覚悟を持った強い意志を抱いた顔をしていた。

「では、行きましょうか」

「ああ、その前にここの巨人たちとはあまり会いたくないな。飛んでいこう。きつと近くに村か何かがあるはずだ」

「はい」

奏さんが先導して空へと飛び上がる。朝だから当たり前だが、空気が澄んでいて、とても心地がよかった。まるで私たちを歓迎してくれているかのように。風もなく、とても飛びやすかった。そのまま数キロ飛んでいると

「……………咲夜さん!」

奏さんが前方に指を指す。私はその方向に目線を向け、それを探す。

「あ、村だ……………」

「一度降りよう」

「ええ」

少しだけスピードを上げ、素早くその村まで飛んでいく。村の前で着地し、遠慮がちにその村に入る。そして奏さんは見つけた村人に近寄り声をかけた。

「ごめんなさい。ちよつと話を伺ってもよろしいでしょうか?」

「ん、ああ、君、村の人じゃないね。いいよ、僕でよければいくらだって話してあげる」
メガネをした小柄な男性が優しく対応してくれ、私は心底ほつとした。家へと招かれ、私達はお茶を啜りながら紅魔館の事を話す。するとその男性から、思いもよらない一言を聞いた。

「そういえば、小鈴さんがその近くに住んでいたとか言っていたような……………」

「こ、小鈴?!」

私は勢いよく立ち上がり、その男に問う。それに少しだけ男は身じろぎをする。

「あ、ああ、本居小鈴さんだ。ここまで避難してきたとか……………」

「避難……………?……………ありがとう。話が聞けて良かったよ」

奏さんも急ぎめに小鈴を探し始めた。まさか、こんな所で知り合いがいたとは思わなかった。数分探していると、見覚えのあるシルエツトがいた。

「小鈴！」

「?はい」

「良かった、知り合いがいて……」

「か、奏さんに咲夜さん!こんな所で会うとは思いませんでした!どうかしましたか?」
「その前に、教えてくれ小鈴。避難してきたってどういう事だ?」

「簡単な話です。紅魔館組が暴走して、人間は強制的に遠くに避難させられてる。ここもまだ近場なので、近いうちにここも避難するでしょう」

「今は、妖怪達が止めてるってこと?」

「そういう事です。それでも大苦戦しています。紅魔館組にあそこまで力があるなんて誰も予想していなかったですし、あの霊夢さんも大怪我を負ってしまいました」

「あ、あの霊夢が……」

「紅魔館までどれくらいだ?!

「飛んで約二時間後です。全力で行けばそれより早く着くでしょう」

二時間……なかなか遠いと思っていたが、思ったよりも近場だったみたいだ。何故だろうか……私はここに飛ばされる前から少しだけ違和感を感じていた。咲さんの力

だったら、私達を次元の狭間に追いやることだつて出来た。それなのにこんな近場に転移させたのだろうか……………

「小鈴、どの方向だ？」

「ここから南南西、まっすぐ進めば着きます」

「ありがとう！奏さん、行きましよう」

「わかつてる！」

私と奏さんは同時に飛び立ち、全力で紅魔館へと向かつていった。すると森から少しだけ見覚えのある場所まで行くことが出来た。

「咲夜さん！あれ！」

「!!」

紅魔館の方から黒煙が上がっており、どう見たつて戦場としか思えないほど空気を殺伐としていた。妖力も尋常じゃないほど強まっており、少しでも怯んでしまった。人里を通り過ぎ、紅魔館まで一気にいった。約一時間で着いた。

「着いた……………！」

地面に足をつき、ただひたすらに走っていった。私は妹様の名を大声で叫び、探す。

「妹様——！」

「フライン——！」

もちろん応答はない。それよりも、辺りがやけに静かだ。しかし荒らされた形跡もあるし、崩れ落ちている場所もある。どれも10分も経っていないようだ。

「油断はするなよ……」

「ええ……」

時空真を握りながら、奏さんから忠告を受ける。

「！奏さん、危ない！」

「?!」

私は奏さんに抱きつき、サイドに思い切り飛ぶ。するとさつきまでいた所に一本のレーザーが通り過ぎ、先の方で爆発した。

「あれえー？奏と咲夜ー！」

「……妹様……」

私と奏さんは同時に妹様の顔を見る。目は赤く染まり、妖力も桁外れに多かつた。

これが完全狂気化というやつだ。誰かを殺すまで収まらないとんでもないもの。恐らく、霊夢もこれに負けたのだろう……

くそ、お嬢様と咲さんを探したいのにタイミングが悪い…………

いや、私が贖罪をする唯一のチャンスではないのか？妹様を倒し、救えなかった者を救う。逃げないで戦う。これは自分への試練だ。

そうだ、私はもう逃げないって決めたんだ。

「奏さん、ここは私にお任せを、お嬢様と咲さんを探してきてください。恐らく、紅魔館内にいるはずですよ」

「でも」

「私なら大丈夫です。もう逃げないって決めたから」

一瞬だけ躊躇った奏さんだが、それはすぐに男らしい笑顔に変わり、こう放った。

「任せるよ、咲夜さん！信じてるからな！」

「はいー！」

信じてる。その言葉がどれほど励みになったかは知らない。でも、私の心の底から力が湧いてくるのが分かった。ナイフを取り出し、体勢を低くする。

「咲夜が相手してくれるの？ちゃんと楽しませてねえー！」

狂乱的な妹様が絶叫気味に叫んだ。私は前とは違い、少しだけ余裕がもてた。

「はい、必ずや、あなたを楽しませて見せます。妹様」

私はナイフをぎゅっと握り、前に負けた悔しさを晴らすため、私のことを愛してくれ

る奏さんのために……私のナイフが空高くへと舞い上がっていった。

14話

戻された綻び

俺は崩れかけの紅魔館を疾走していた。フランを完全狂気まで追いやったレミイと咲を探し回っていた。フランがこの紅魔館を壊したことでまだ強力な妖力反応のことを考えると、まだ遠くには行っていないことが見受けられる。

「くそつ、どこだよー」

かれこれ数分は走り回ったが、妖力だけしか感じる事が出来ず、実態を捉える事が出来ずにいた。フランの方は咲夜さんに任せていたので、俺は一人であたりを見渡していた。しかし、紅魔館のバルコニーの方まで行くと、妖力の凄みが増していった。

「……そこか」

レミイと咲を見つけた。どうやら二人は何かを話し合っているようだ。

俺は時空真をまずレミイに突きつけながら近寄っていく。

「……………?!」

レミイの驚く顔が見える。俺の到着が早いから驚いているのだろうか？それとも

……

「な、なんで……………奏が……………ここに……………?」

「……………」

「……なるほどな……………」

レミイの言葉を聞いてから、ちらつと咲の方を見る。さつきから黙りこくっていた咲の顔は……少し苦しそうだ。俺はそこで察すると同時に嬉しみもこみ上げてきた。

「お前が”そつち側”じゃなくて嬉しいよ、咲」

「……………」

「どういう事よ！咲！」

レミイが少しだけ声を張り上げて咲に怒りの矛先を向ける。それでも咲は黙ったまま、しかし、ようやく咲はにやつと笑ってレミイにこう放った。

「ごめんなさい、私の手違いで邪魔者達を送る場所を間違えたわ。今度こそ境界の狭間に送り込むから」

「……………頼むわよ」

「させるかよ」

時空真を逆手に持ち、レミアアの腹に一閃、綺麗な鮮血が飛び散る。レミアア自身も吐血する。そのまま俺は咲を押し倒し、その場で咲を拘束する。

「不夜城レツド!!」

奥からヒステリックな声が聞こえる。赤い波動が周りの壁さえも破壊しながら俺の

方までやってくる。

「閃斬「回帰斬」」

レミリアの不夜城レッドを左下から右上の一振り跳ね返す。次はレミリアの方に不夜城レッドが襲いかかる。レミリアは紫色の巨大な槍、神槍「スピア・ザ・グングニル」を生成する。俺はそれを活用される前にレミリアの懐に入り込んで時空真の柄を鳩尾に挟むように当てるが、レミリアの手がそれを受け止めていた。

「これで終わりよ！邪魔者！」

「なっ！」

レミリアのグングニルが俺の目の前まで飛び込んできた。

「パーフェクトスクウェア！」

「禁弾「スターボウブレイク」！」

私のスペルカードは以前の戦い同様、軽々と弾き返され、逆に私が押されている。以

上げた。

「はああー！」

「くっ、ああー！」

妹様は叫び声と共に、レーヴァテインでレガミクトセレナを受け止める。私はそれ
力負けし、レガミクトセレナが遠くへと飛んでいってしまう。

「そ、そんな……」

また、私はここで負けるのか……こんな所で……いや、奏さんがきつと妹様を助けて
くれる。私は奏さんにバトンタッチするだけなんだ。だから、後悔はない。

「あっははははははは!!」

「っ……」

レーヴァテインが振りかざされ、私のちょうど真上に熱気が迸る。脳天から真つ二
つ。即死だな。私は諦めて目を閉じる。最後に……私の彼氏の顔……見たかったな
……

「……………」

「……」

私は数秒待っても痛みすら来ないので、ゆっくりと目を開ける。するとレーヴァテイ
ンは私の目の前で震えていたのだ。それはレーヴァテインが震えているのではなく、妹

様自身が震えていた。

「……どうして、トドメをささないんですか？」

「……だってー！」

妹様は顔を上げる。その顔はさっきのような狂気に染まった顔ではなく、いつもの優しい妹様の顔。目尻に涙を溜め、噎れた声が辺り一帯に響く。

「咲夜はっ！……大切な家族だから……！」

「妹様……」

「お姉様が……私のこと嫌いだって言って……でも、それでもお姉様と離れたくなくて……」

妹様の言葉は酷く苦しそうで、私の心がズキズキと傷んでいる。

「お姉様に「離れたくないなら、私の言う通りにしなさい」って言われて……いつの間にか咲夜を殺そうとしてたんだ……」

「……」

自分はもう、この頃はお嬢様に忠誠ではなく憎悪の感情を抱いていたのかもしれない。お嬢様唯一の肉親を苦しめて、自分の満足のためにこんなことをしたのだ。

私自身も少しだけ涙が出る。こんな無垢で可愛い子供にトラウマを植え付けようとしているお嬢様に怒りを覚えた。私は妹様を強く抱きしめる。

「申し訳ございません、妹様。私のせいで……あなたをひどい目に合わせてしまった……」

「うん！ 咲夜のせいじゃない……これは、私の問題なの……」

「いえ、私はあなたの家族。いつでもあなたをお守りすると決めていました。だからこそ、これからは私に守らせてください……」

「うん……ありがとう……」

すすり泣く妹様を、私は泣き止むまですつと抱きしめていた。紅魔館の方では大きな爆発音が度々耳に反響する。恐らく、お嬢様と咲さんと交戦しているのだろう。

妹様が泣き止んだ頃、妹様の手を引いて、こう放った。

「妹様。今お嬢様と奏さんが戦っています。行きましょう」

「う、うん！」

「ところで妹様」

私は走りながら妹様に問う。私はそもそもの理由を未だに把握していなかった。

「どうしてお嬢様と咲さんはこのような異変を起こしたのでしょうか……」

「私もよくわからないけど……」「紅霧異変」と同じ、幻想郷の支配が目的だと思うんだ。

「それも、別のやり方で」

「それで……倉見の血を引く妹様の完全狂気によって妖怪の殲滅を……」

「多分そうだと思う……お姉様自体、倉見隴と仲が良かったから、復讐も兼ねてるんじゃないかな……私は、その時から倉見には嫌われてたからよく分からないけど……」

「それで奏さんが来たこのタイミングでつて事ですね……」

私の中でこの異変の歯車が大体すべて組み重なって、新たな謎も出てくることは無かった。

「ありがとうございます。妹様、奏さんの元へ急ぎましょう」

「うん！」

妹様の手が私の手を強く握った。私は、今までならお嬢様との戦いなんて拒絶しきっていたが、今日だけは奏さんと妹様がいるからか、心強く、逃げようとも思わなかった。

15話

紅魔館の主

「せあぁー！」

レミアアが放ったグングニルを時空真で弾き返そうと刀の根本をグングニルに先端に当て、力を入れる。

「ツー！」

時空真は妖刀ではあるが、咲名千里とは全くの別物。使い始めて数ヶ月の俺にはとても「使いこなす」ことは出来なかった。しかし、流石は妖刀。かなりの強度を誇り、吸血鬼の妖力がふんだんに込められている槍でさえも耐えている。

「くそつ、俺が持たない……………」

「あら？口だけなんて言わせないわよ？奏？」

まだまだ余裕を持っているレミアアに対して、俺はグングニルの進行を止めることが精一杯だった。

「まだまだア……………」

時空真の方向をグングニルごと変え、進行方向を自分から遠ざける。そのままグングニルはまっすぐ進んでいき、奥の壁に突き刺さった。その威力は鳥肌が立つほど凄まじ

かった。俺はそれだけで息が切れ、腕の筋肉を酷使しすぎたため、軽く出血していた。

「はあ……………はあ…」

「あら、龍人も体力が無いわねえ……………紅魔「スカレットシユート」」

もう俺には刀を振り回す余力なんて無かったため、何とか動かせる足を利用してそれを避けていく。こんな狭い空間では飛ぶことはおろか、高くジャンプすることも不可能だ。体力がもう底を尽きそうで、俺は膝をガクンと落とす。

「もう終わり？ 紅魔館の主はこんなんでは満足しないわよ？」

「それは……………どう、かなっ！」

グンツと飛び上がり、時空真を両手で持つ。そしてそのまま重力に身を任せ、縦に振り下ろす。ない筋肉で全力で振り下ろした。

「ッ!？」

「はあ……………幻滅よ。奏、咲夜とばかり遊んでいるから、愛原本来の力を忘れたのかしら？」

グングニルをまた出現させ、俺の刀を片手で受け止めていた。出血も傷もなし、改めてレミリアの強さと体の強靭さに戦意が削がれていった。

「これで王手よ。愛原 奏」

ズブツ……………という鈍い音が反響する。そして床にはドロドロとした赤黒い液体と

霞んでくる視界。それと遅れてやってきた尋常じゃない痛み。

「あ、あつ、ああああああああ!!」

「あつはははははははははははは!!いい叫びだよ奏!!」

「か、がはつ……」

「ほらあ……もつと叫びなさいよ……」

俺は意識が朦朧とし、自分の内蔵が掻き回されているのが想像出来てしまった。吐き気をも催し、俺は吐瀉物ではなく、吐血をしていた。もう声なんて出ない。

「か、奏……くん?」

「……?……睨……どうしたのよ?早くこいつを境界の狭間に送りなさい?」

「……………ッ!」

睨は俺からは目を背ける。恐らく、俺の凄惨な姿を見ていられなくなったのだろう。

「も、もう……やめようよ……レミリア……」

「……………」

「こんなことしたって…結局は幻想郷なんか支配できない。奏くんみたいな強力な妖怪が幾千といるこの世界で、あなたが支配することなんか不可能よ……!」

「それは…やってみないと分からないでしょう?自分のものさしで人を図ってはダメよ。睨、それとも何?あなたもこの龍人に手を貸すの……?なら、容赦なんてしない

わよ?」

「や……………き……………」

俺が辛うじて出した声に咲は体をこわばらせ、もう一度顔を背ける。そして意を決したのか、涙を流しながら何かを唱え始めた。

「私はっ! いったって奏くんの味方なんだ!」

無数の光の粒子が咲の伸ばした手の先端に集合していく。そしてしばらく経った後、それは一本の棒状の物が輝きながら生成されていった。

「あなた……………」

「私は! 倉見の仲間なんかじゃない! 奏くんの仲間だ!」

「もう、あなた達には本当に呆れたわ」

グングニルを俺から抜き取り、咲に投げる。しかし、俺よりも体が身軽なため、咲はそれを軽々と避ける。そしてようやくその棒状の物が姿を現した。

「奏くん!」

次に咲は俺に駆け寄り、貫かれた腹部に手を当てる。そしてさつきと同じような粒子が俺の体の中に入った。そして見る見るうちに痛みと傷が消えていく。

「これはあくまでも応急処置よ、完治した訳じゃないから気をつけて! あと……………ごめんなさい……………私のせいで……………こんな目に……………」

「いや、いいさ。結局は俺達の仲間だったんだろ？信用してくれてたんだろ？なら、それに越した事はないよ」

「うん……ありがと……それと……これ」

「これは……咲名千里……」

「前に言わなかったっけ？咲名千里はいつでも復活させることが出来るって」

「聞いてねえよ……」

「もう、つべこべ言つてないで戦うよ！」

俺は愛刀を握りしめ、隣に相棒がいるという安心感が身に染みて伝わってくる。

「じゃあ、行くぞ！」

「幻世「ザ・ワールド」」

「禁弾「スターボウブレイク」」

「……え？」

見覚えのある二つの声と共にナイフや弾幕が背後からレミアを襲う。そして後ろを振り返ると愛しい家族がそこにいた。

「さ、咲夜さん！フランも……」

「お嬢様、私はお嬢様のやり方には納得しかねます。なので、今ここでそれを止めさせてもらいます！」

「今更幻想郷を支配したって意味無いよ！お姉様！また一緒に笑おうよ！」

「もう心に決めたの！私はどれだけあなた達に言われようとも！自分の信念は曲げるつもりは無い！」

「………咲夜さん、フラン。レミリアを殺すつもりでいつてくれ。実力が桁違いだ。でも三人いたらいける」

咲夜さんはレガミクトセレナを取り出し、フランはレーヴァテインの火力を強め、俺は咲名千里に妖力を込め直す。そしてレミリアに先端を向ける。

「静符 「アブソリユート・シン」！」

凍結現象を用いた最上級の技、もといスペルカード。振り下ろした咲名千里の軌道に沿って針のように鋭い氷がレミリアを襲う。流石にあっち側も体力が切れたのか、少しだけ避けるのが遅れていた。

「495年の波紋」

「パーフェクトスクウェア！」

2人の弾幕が時々レミリアの肩や膝に当たる。レミリアは歯を食いしばり、怒りの声

を出した。

「調子乗らないで！」「紅色の幻想郷」！」

大玉弾幕と通常弾幕が俺達の周りを囲う。それもとんでもない密度でしかも弾速も早い。当たったら大怪我じゃ済まないし、それに避けるのも精一杯だ。

「奏くん！しゃがんで！」

「お、おう！」

咲に言われた通り、わけも分からずその場でしゃがむ。すると咲夜さんが俺の前に出てきた。

「さ、咲夜さん！危険だよ！」

「……………」

咲夜さんのその横顔は戦闘中でありながらもとても美しいと感じるほどだった。俺が惚れた女性は実はとんでもない美貌の持ち主だったのかもしれない。そして咲夜さんの口から予想だにしないスペルカードの名が聞こえてきた。

「真符「時空斬鉄」！」

「なっ!？」

あの技は、俺が極めたラストスペル。いつのまにスペルカードくすねたんだ……これにはレミリアも驚きを隠せず、ブラックホールにそのまま吸い込まれていく。

「くっそお!」

「これで終わりです!月光「ムーンソードレイン」!」

妖力消費が一番激しい技、人間の咲夜さんにとってまるで諸刃の剣だ。しかし、威力は絶大。

「ああああああ!!」

レミリアはそれを全て受けてしまい、小さい爆発を繰り返し、その後大きな大爆発と共にレミリアは血を流しながらその場に倒れる。

咲夜さんもそこで膝をつく。

「お、終わった……の?」

「……咲夜さん……」

咲夜さんの肩に手を置き、労いの意味も込めて微笑む。咲夜さんは大粒の涙を流し、俺に抱きついてきた。

「お、終わったあ!」

「いのででで!咲夜さん苦しい!」

そんな俺達バカップルを微笑ましく見ていたフランと咲。見てないで助けてくれ！
するとその後ろに倒れるレミリアの体が少しだけ動いた。

「……………レミリア……………」

「……………」

俺達はレミリアに駆け寄り、咲名千里を鞘から抜く。するとレミリアは両手を広げ、
泣きながら叫ぶ。

「殺したいなら殺しなさい！あなたの宿敵、倉見の末裔よ！」

「……………」

「じゃあ、殺す」

「え、奏!?!」

フランが驚きの声と共に、俺の右腕にしがみつく。俺はそれを振り払ってもう一度レ
ミリアに向けて振り上げる。

「やめて!?!奏!?!」

フランの悲痛な叫びが聞こえるが無視をして思い切りレミリアに振り下ろした。

「……………え？」

「これで、「倉見」のレミリア・スカーレットは死んだ。これからは「紅魔館の主」のレミリア・スカーレットとして生きてもらう」

咲名千里はレミリアの額の前で停止し、俺はそんなことを言う。本心ではあるが、ここは全てをぶつけよう。

「俺は「紅魔館の主」であるお前が好きだ。倉見のレミリアは俺が殺した。それでいいな？」

「……………奏……………」

「奏さん……………私がいながら「好きだ」なんて軽々しく言わないでくださいよ。傷つきます」

「え、いや、そういう意味じゃなくて……………咲夜さんはまた別の意味で好きだよ？」

「分かってますよ」

「ふふつ……………じゃあ、お姉様……………また…あの日々に戻る？」

「……………うん……………」

レミリアのその顔は濁りがなく、これまでの行いを払拭するかのような輝かしい笑顔だった。

これは「異変」とは呼ばれることもなく、すぐさま人々の「記憶」から消去されていっ

た。

f i n a l s t o r y

寿命の壁を

紅魔館は一時期全てが分断される寸前まで追いやられたが、愛原の子孫、もとい私の恋人である奏さんが全てを止めてくれた。お嬢様との関係も悪化せず、妹様もこの事情を受け止めた。

「みんな、ごめん！」

「…咲…」

愛原家の妖刀、咲名千里を乗っ取るために人柱となつた倉見の第一令嬢、片波 咲。彼女にはまだ倉見としての信念が心底にあつたみたいでお嬢様との共謀により紅魔館が半壊という結果となつた。しかし咲さんの中でもまだ奏さんの事が忘れられず、躊躇していたようだ。自分の行いが果たしていい事なのか、それとも今までの生活を崩壊させる恐ろしいことなのか、咲さんと奏さん、そして私たち家族が支えてきたその経験が語っていたらしい。

「咲……………どうして……………こんなことを……………？」

「レミリアの指示なのよ。でも、私の中でも少しだけ奏くんを憎んでる部分があつた……………彼ではないとはいえ、私の大切な倉見の人たちは愛原によって殺されたんだ。恨

んでないといえれば嘘になる」

「なるほどな……レミリアも同じ意見か？」

「え、ええ……本当にごめんなさい」

「今更いいですよ。お嬢様。誰も死人は出ていないですし……一件落着です」

「そうだな。美鈴達も無事だし、フランの狂気化もいつの間にか克服出来たようだし、またあの生活に戻ろう」

妹様の狂気化はそもそも妹様自身が少しだけでも心に「ズレ」が生じると発症してしまふ。つまり、自分の中で「破壊したい」と思う物や人物を強く恨むことでズレが生じて狂気化が出てくるらしい。これは妹様が「破壊しない」というのを根底におけば狂気化の可能性は極めて低くなると永琳さんが言っていた。

「さて、私は夕食の準備をしてまいります。どうぞゆっくりと……」

「レミイ、一緒に話さない？」

「パチエ……うん、行きましょう」

「フラン様、門の前で遊びませんか？」

「いいの!?!行く行くー」

それぞれ個々が親友や大切な家族に連れられ、特定の場所に消えていった。私はそれを見て微笑みながら台所に向かう。すると誰かの手が私の肩を掴んだ。

「あ、咲夜さん。俺も手伝うよ」

「いいんですか？ありがとうございます」

いつもならここで断っていた私だが、今は恋人同士であるからか、喜んで頼んでしまっていた。

「……………グツグツと何かが沸騰している音が台所内に響く。

「奏さん」

「んー？」

包丁でじやがいもの皮を向きながら奏さんは返事をする。私も同じことをしていたが包丁とじやがいものを置いて

「この戦いで、私は強くなれたでしょうか？」

「ああ、君は強くなった。俺よりも成長したんじゃないかな？」

彼は即答だった。

「それに、フランが狂気から離れたのだからって咲夜さんの言葉があったから、レミリアや咲が今の状態になれたのも、メイド長である君が居たから、だと思っただ。もちろんお世辞でなんか言っていないよ？」

「そう……………ですか……………ふふっ」

自然と笑みが零れてくる。奏さんにここまで優しく褒めてもらったことはないし、別

に私の心が乱れてたわけじゃない。ただ単に褒めてくれたのはこれが初めてかもしれない。

「それに……………」

「それに？」

「な、何でもない……………」

「ええー、言ってくさいよ」

少しだけ奏さんは顔を赤らめる。少し言いにくそうだったが、意を決してこう答えた。

「レミリアと戦った後、咲夜さんの服が破れてて、一瞬水色の下着が見えた。とても素晴らしい領域だっー」

バアアアアンという音が奏さんの頬から鳴る。顔を真っ赤にした私が右手で頬を叩いた。普通、叩いただけでバアアアアンなんてならないけど、この時は妙に力が入った。「や、やめてくださいいよ！あの時は勝負下着だったんだから！」

「え？勝負下着？咲夜さんの勝負下着って水色なの？」

「え？あつ、ああああ！忘れてくださいい！」

顔を赤くして硬直する奏さんと忘れさせようと奏さんの周りをくるくる回る私、傍から見たら本当のバカップルだ。こんなひとときが幸せと思う私は変わり者なのだろう

か？

「あ、もう出来てるね」

「うう……奏さん切り替え早すぎです…」

「いや、今日はいい情報貰ったよー」

「奏さん、明日からハリネズミになってるかもしれないですね」

「しれつと怖いこと言わないで咲夜さん」

ナイフを取り出し、奏さんを脅す。それに対して慌てる奏さんは少しだけ可愛かった。

——お嬢様と咲さんの共謀事件から約2年。今ではもう二人は以前の二人に戻っており、私と奏さんの仲も未だ良好。立ち位置も変わっていないし、私はメイドとして働いている。

「奏さん、紅茶をお持ちいたしました」

今日は快晴、奏さんが座っていたところは屋上のベンチ、咲名千里と時空真の二刀の手入れをしていた。いつまでも鮮やかに光り続ける二本の刀は妖しく紫色に光っていた。

「ん、ありがとう」

「妖刀って凄いですね……」

「何が？」

「レガミクトセレナを持っているといつも思います。「刀の中にも心があるんだな」って……」

「ああ、見た目はただの金属の棒だ。でも心はある、使い方を間違えれば自分も死ぬ、一心同体の存在だ。それが具現化したのが咲ってところかな」

「なるほど……」

奏さんは立ち上がって試しに咲名千里を縦に振り下ろす。少し重みを感じさせる重い音が鳴る。しかしそれを感じさせないくらい軽々と振り回す。そしてそれを鞘に収める。

「かっこいい……」

「へへっ、そりゃどーも」

「最近異変ないですもんね。奏さんの戦う姿なんてもう数ヶ月見てないですよ」

ちなみに修行の方はもうしていない、私がレガミクトセレナを使いこなせるようになったため、奏さんの教えられる範囲がもう無くなったとか。

「それよりも、紅茶に毒入ってるよな？」

「ええ、青酸カリです」

「毒じゃねえけど危険だな……」

「龍人ですし死なないでしょう？」

「まあ美味しいけどさ……」

奏さんは紅茶を一気に飲み干した。そして「ほお……」

という白い息が奏さんの口から出てくる。そこから数秒の沈黙。

「そう言えば、今日はこのあと雪が降るらしいね」

「雪……ですか……」

「そ、白銀の……ね。まあ夜中らしいけど」

そう言われ私は空を見上げる。今は雲一つない青空。今から雪が降るとは考えにくい。まだ午後の3時だから、これから来るのだろう。

「ね、咲夜さん」

「はい？」

「今日の夜、お茶しない？」

「?ええ、分かりました」

首をかしげながらも、私は奏さんの要望に首肯した。私自身がお茶をするなんてあまりない経験だし、今日のお仕事はもう夕飯しかない。予定はガラガラだ。

「では、失礼します」

ハイヒールの音を立てながら屋上の扉を開け、室内へと入る。いつまでも経っても奏さんとの会話は緊張する。まだ心臓が高なっているのが自分でもわかる。

「恋人になってもう2年……………」

私は告白されて以降、奏さんに「好き」と言われたことがない。仲がいいのは事実だが、愛を確かめる時間は皆無に等しい。もう少しスキンシップを増やして欲しい。軽いセクハラなら奏さんは躊躇なくしてくるからもう少し過激に……………なんて思っている自分がいた。奏さんは普通に私のパンツの色を覗いて当てたことだってあるんだ。なのに、それ以上のことを彼はほしくない。

「キス……………したいなあ」

本心か言葉に表れた。そして、その後には誰かの人影がいた。

「あらあら、咲夜も成長したわね?」

「ツ!?!」

ガタツと座っていた椅子が倒れる。

「お、おとおお嬢様!？」

「あら、別に恥ずかしがらなくていいわよ。こちらら従者の成長に喜んでるのだから」
「は、はあ……」

「もう、あなた達結婚したら？2年も付き合っているでしょう」

「……………それは無理です」

それだけは断言できた。私と奏さんは結構してはいけない理由がある。それはお似合いじゃないからではない。仲が悪いわけでもない。

「私は人間です。そして彼は龍人です」

「……………」

「私はおそらく、あと数十年で命を落とすのでしよう。彼はそれでもまだ若々しい体を持つ。私よりも奏さんの心が持たないんです」

「あなたは……吸血鬼の眷属になるにはないの?」

「ええ、人間のままこの体と別れたい……………それが理由ではダメでしょうか?」

「……………いえ」

お嬢様の顔は暗くなっていく、そして振り返って「晩御飯お願いね」といつて扉の方へと歩く。

「彼は……………そんなこと絶対に気にしないわよ……………」

去り際のお嬢様の言葉、それが少しだけ心に響いた。泣きたくなる衝動を抑え、私は夕飯作りに専念した。

「……………午後9時。仕事を終え、風呂に入った後、奏さんが自室の前で待っていました。」

「そんな所にいたら冷えますよ。奏さん」

「あ、咲夜さん」

「ええ、分かっています。行きましょう」

「ん」

「……？」

奏さんが手を差し出してくる。私はそれを理解することが出来ず、その場で首をかきあげ、すぐにそれを察する。

「……………はい……………」

顔が赤くなる。私の手は奏さんの右手に収まった。やばい！緊張する！奏さんの手は小さいながらもゴツゴツして男の手と思わせるものだった。

「さ、着いたよ」

「……………わあ…」

バルコニーに降り注いでいるのは白銀に光る雪。それはとても幻想的で見るものを魅了させる何かがあった。

「お茶も作つてあるから」

「奏さんが作つたのですか？」

「ああ、毒は入つてないよ？」

そう言いながら私は椅子に座る。少し冷えるがそれ以上に雪が綺麗で寒さなど忘れていた。

「はあ……………美味しいです」

「だろ？勉強したんだぜ？」

ドヤ顔する奏さん。その顔がいつの間にかとても愛おしく感じた私は異常なのだろ
うか。照れ隠しに紅茶をのぞき込む。

「毒なんて入つてないから大丈夫だって」

「当たり前です。人間なんですから死にますよ？」

「……………ああ」

奏さんの顔が暗くなつていく。私はそれに対して首を傾げる。

「どうしたのですか？」

「咲夜さん……俺は……」

奏さんは恥ずかしそうに顔を紅潮させながら辺りを見回す。何を緊張しているのだろうか？

「君が好きだ」

「ッ！」

唐突の「好き」に私も同じように顔を赤くして自分の口を塞ぐ、それと同時に嬉しさがこみ上げてきた。

「だから……少し……少しでいい………こうさせてくれ」

塞いでいる手を握り、奏さんはグイッと私に顔を近づける。私は少し驚き、体が固くなっていく。そして、奏さんは段々と近づけていき、ついには私と唇に重なった。

「んっ………ちゅ……奏………さん」

「はあ………好きだよ………咲夜さん………」

「もつと………私を………見て………」

この言葉は私の心の底から思っていたこと。自分が生き甲斐を感じる瞬間。私の今の顔はきつとだらしない顔になっているのだろう。でもこれ以上の幸せが無いのだから仕方ない。

奏さんはもったいぶるように、唇を離す。私はそれに少しだけ物足りなそうな顔を
して

「奏さん、足りませんよ」

「へ？んぐつ」

次はお互いの唇を食するような情熱的なキス。お互いの吐息が直に当たる。そしてそのまま舌を入れ、舌同士も絡ませていく。

「んっ……じゆる……れろ……ぶはあ……はあ……」

「さ、咲夜さん……」

私と奏さんの唇の間に、雪に負けないほどの白銀色の糸が引く。奏さんの顔も私と同様、とても惚けていた。

「私も……あなたが好きです。奏さん……」

「ああ、俺は君を失いたくない」

奏さんはそう言った後、一度深呼吸をしていた。そして何かを決めたのか、私の手を握って、私の目を見て、真剣な顔でこう紡いだ。

奏さんの愛が伝わる、その瞬間。

「結婚しよう」

「…………え？」

予想の斜め上に行く答え。私の目からは嬉しさが具現化した涙が流れ始める。拭っても拭っても流れ続けている。私は思わず「はい」と言いそうになった。しかし突き放すようにこう言った。

「ダメです」

「……………なんで？」

「……………私は人間、あなたは龍人。寿命の差があります。そんなことしたら、私が死んだ時にあなたの精神が崩れる可能性だって捨てきれません。だから、このまま恋人同士として……………」

「そんなの関係ない」

少し強い声で奏さんは私の言葉に被せる。そして奏さんはそのまま話し始める。

「咲夜さんは確かに人間だ。それに寿命はあと数えられるほどだ。でも俺にはそんなの関係ない」

一呼吸置いて、彼はまた気持ちを紡いだ。

その言葉は私には初めてのもの。

「俺は君を愛してるから」

「ツ!？」

私はまた涙が溢れ出す。

「その気持ちさえあれば、俺は君との短期間、ずっと過ごしていける」

「……………浮気しませんか？」

「当たり前だ」

「……………ずっと愛してくれますか？」

「そうしないと俺は気が済まない」

「…私のそばにいてくれますか？」

「俺の心も満たしてほしい」

「……………」

嬉しい……………彼の気持ちが表れた唯一の瞬間だった。奏さんが私をどれだけ大事にしてくれているのか、愛しているか。対面していても伝わるその強い気持ちが私の心を響かせていた。

「さて、返事はどうする?」

少しイタズラな笑顔で奏さんは返事を要求した。もちろん、私の導き出される答えは一つだった。

「……………はい、喜んで」

瞬間、奏さんの温もりが私の全身を痺れさせる。数秒して抱きしめられていることに気づいた。私も負けないように、強く、離さないように抱きしめる。

「愛してますよ……………奏さん…」

「ああ、俺もだ…………」

奏さんの手に私の手が持ち上げられる。そして薬指に何かを取り付けられた感触があった。

「これは……………指輪…」

「にとりに頼んだら最高級の作ってくれたんだ」

「綺麗…………」

ダイヤモンドが月明かりに照らされて反射する。これが「結婚指輪」。人生で初めての経験。白銀に光り続ける雪が指輪の上に落ち、溶ける。

「俺は……………死ぬまで君を愛し続けるよ」

「ええ、離さないでくださいよ?」

私は死ぬまで彼を愛し続けよう。残りの数十年、お嬢様に尽くそうと思っていたこの気持ちは奏さんのためにも使おう。なぜならこれ程愛してくれた人はいないのだから。

「好きだ……………愛してる……咲夜」

「ええ、私も……………奏」

白銀色の雪は…いつの間にか消え、月明かりが私達を照らした。

動き出した恋の秒針、茜色の銀時計

e n d ……

after story

十六夜の夜

奏さんのプロポーズを受け、結婚式は紅魔館内で行った。霊夢や魔理沙、お世話になった人には招待状を送り、盛大な結婚式を送ることが出来た。

「いやまさか、あなた達が結婚なんて考えてなかったわね」

「だな、咲夜のウエディングドレス結構似合ってるぞ」

主人公二人に褒められ、私は照れながら下を向く。

「あれあれ？照れちゃったの咲夜ちゃん？」

「……………うるさいわね。早く食べに行かないとご飯無くなるわよ」

そう言うと、霊夢は目にも留まらぬ速さで食事が用意されている机に直行していった。魔理沙も「仕方ねえなあ」と言いながら霊夢の後をつけて行った。

「はは、あいつらは相変わらずだな」

「ええ、いつも通りでしたね」

後ろから奏さんが声をかける。奏さんもいつもとは大きく違うスーツ姿で立っていた。これは私が提案した服で、奏さん自身もとても喜んでくれていた。

「おめでとう、咲夜、奏」

「お、お嬢様」

慌てて姿勢を正す。しかしお嬢様は優しい声音で私も宥めた。

「いいのよ咲夜。今日くらいは崩しても」

「は、はい」

「……何だか寂しいわね。ずっと一緒にいた咲夜が別の男の方に行くなんてね」

「お、おいレミイ？俺が悪者みたいになってるぞ？」

「あら、気づかなかったのかしら？あなたはもうとつくに悪者よ？愛する家族を奪われたんだから」

「い、言い過ぎだろお前……」

「ふふつ、冗談よ」

微かに微笑むお嬢様。その目の奥には微かなお祝いの意が示されていた気がした。それを見て、私と奏さんは顔を見合わせてから笑う。

「奏くうん……………」

「さ、咲!？」

「おめでどおお……………」

咲さんは奏さんに泣きつく、何気に一番祝福してくれたのは咲さんではないかと自分は思う。以前は完全な敵だったけれど、今では私たちの立派な家族だ。

「な、泣くなよ咲……」

「うう……だつてえー」

タラタラと鼻水を流しながら次は私に抱きついてくる。

「ぎぐやぢやあん……がなでくんを幸せにじでねえー」

「な、何言っているか分からないですよ……咲さん……」

こんなに祝福してくれるのもとても嬉しい、結婚式には招待状を出した全員が来てくれて、守矢神社から地霊殿、地獄の人まで来てくれた。そんな中、奏さんは静かにこう呟く。

「いい結婚式……だな……」

「ええ……全くもってその通りです……」

私たちの薬指が白銀色に光った。これはまるで光が私たちを祝福してくれたかのよう輝かしかった。

———結婚式から約一年、長い年月が経った時、もう俺の家族は二人だけでは無く

なった。

そう、子供が生まれたのだ。人間と龍人のハーフ、紫が言うには、妖怪の類に分類されるらしく、長命だそうだ。

「ほら、月詠。早く行つてらっしゃい……」

「うう、母さん、博麗の巫女って強いのかな？」

「さあ？私と同じ世代の博麗の巫女は最強と呼ばれてたわよ？」

「それを聞いて一気に自身なくしたんだけど」

十六夜 月詠^{つくよ}。俺と咲夜の愛娘だ。現在の歳は18歳。レミイが起こした二度目の紅霧異変でおそらくもうすぐで博麗の巫女が紅魔館にやってくる。美鈴が倒されたら、次は月詠が相手することとなっている。

「月詠、頑張れよ。父さん応援してるからな」

「パパも一緒に戦つてよー！」

「残念、俺は「phantasm boss」だ。この紅魔館の最後で待つてるよ」

「そんな発音よく言つたつて……」

言葉を途中で遮り、俺は月詠の方をポンと叩く。博麗の巫女はずっと最強に近いが、月詠の実力はあのレミリアでさえ弾幕ごっこで負けるほどだ。博麗の巫女に見劣りはしないだろう。

「じゃあ、私も準備に入るわ。頑張って、月詠」

「え、あ……………うん！」

月詠は咲夜と同じナイフを取り出して、戦闘準備に入った。その時、扉が開き、博麗の巫女が姿を現した。俺と咲夜は敢えてそれを見ず、月詠が勝つことを祈っていた。

「……………月詠が勝った。いつまでも博麗の巫女が来ないので、大ホールに行く」と、仰向けで倒れていた月詠とポロポロの博麗の巫女がいた。

「つ、月詠！ すぐえぞお前！」

「え、えへへ……………」

「あなた、強いわね……………」

この日、紅霧は晴れたが、それ以上に月詠の勝利を俺達がたくさん祝ってあげた。

あれから数十年。私、十六夜 咲夜は段々と歳をとっていった。奏さんはいつまでも

全盛期の姿のまま、月詠は大分大人に近づいてきていた。

「……そしてある日、”それ”は起きた。屋上でお嬢様とティータイムを過ごしていた時、私の心臓が大きく跳ね、苦しみながら氣を失った。最後に聞いたのはお嬢様の必死な叫び声だった。

『母さんは……どうなるの……？』

『分からない……咲夜……』

二人の愛おしい声が聞こえる。私はそれに返事をするようにゆつくりと瞼を開ける。ペアと明るくなった二人の周りにはお嬢様や妹様、パチユリー様や小悪魔に美鈴、そして咲さんがそこに居た。そしてその奥には月の頭脳こと八意永琳がいた。永琳の顔は今にも泣き出しそうに歪んだ顔だった。

「あなたも薄々気づいているんじゃない？」

「……………ええ、分かっています。寿命ですよね……」

目が覚めて早々、永琳にそう言われたが、大体の検討はつく。私はもう長くない、そう実感することが出来た。体は老け、手足も自由に動かせない状態である。

「なあ、咲夜！大丈夫なのかよ!？」

奏さんが私の手を握り、強く質問する。私はそれに対してゆつくりと首を横に振った。

「ッ!!」

「奏さん、月詠、私はもう長くありません……」

「な、なんで………なんでよ!?!」

苦しそうにその声を出す月詠。それに対し、私は奏さんから手を離し、月詠の手を力強く握る。

「あなた達は妖怪です。決して、人間と私とは無くならない強固な壁で出来ています………それを無くすことは出来ない……」

「あなた、吸血鬼にはならないのかしら?」

「お嬢様………お気持ちは嬉しいですが………私はこのまま時に流されたいんです………」

私はお嬢様のその案にも反論した。これ以上、妖怪としてここにいる訳には行かない。人間のまま、愛する二人と家族に別れを告げたい。それが私の切実な願いだった。

どうして、今更こんなに苦しいんだよっ！

俺は目の前で寝ている咲夜を見て、胸が苦しくなっていく。月詠は俺の手を握り、涙目で咲夜を眺めていた。

「咲夜は……もう……」

永琳が呟いたその言葉に俺の心臓は大きく跳ね、同時に涙腺が壊れそうになる。しかし、俺は咲夜が生きている間は絶対に涙を見せないと決めたのだ。

咲夜がどれだけ老けていようとも、俺は咲夜を愛し続ける。

「お嬢様……」

「何……?」

「私を拾ってくれてありがとうございます。あなたが拾ってくれなければ、私は随分前に野垂れ死にしていました。拾ってからもたくさんの愛を注いでくれ、たくさんの人と触れ合えた。それはあなたのお陰です……」

咲夜の言葉にレミリアはポロポロと涙を流し、声にならない叫び声が部屋の中で反響する。

「私だって！咲夜に色んなことを教えてもらった！あなたが従者で本当に良かった！あ

りがとう……」

普段は礼を言わないレミリアも今回は泣きながら頭を下げる。咲夜は微笑んで、一人にメッセージを告げた。その一つ一つの言葉には重みがあり、美鈴やパチュリー、小悪魔にも優しく告げていった。

「咲さん……あなたは奏さんとずっと仲良くしてください……奏さんよりも付き合いが長い女という目線ではちよつと嫉妬しますけど……それでもあなたは私の希望です……」

「うん……うん！私もだよ……ありがとう！」

咲夜の声はだんだんと苦しそうになっていく、これはもうすぐだということを告げているのだろう。

「月詠……パパと仲良くね……いつまでも笑って……そしてずっと強い月詠でいてね……でも嫌な時や疲れた時はパパに頼っていい……この世界は……そうやって支えあって完成するもの……一人で解決するのもいいけど……甘えることも忘れないでね……ありがとう、月詠、またね……」

「母さんッ！うん、ありがとう！またね！」

「奏さん……」

「ッ！」

唐突に名を呼ばれ、俺は体を強ばらせるが、咲夜は優しく、包み込むようにこう告げていた。

「あなたは……私のたった一人の夫です……いつかはこんな感じで別れるのは知っています。しかしあなたは種族の壁を越え、私を愛してくれました……後悔もなし、あなたが何よりも好きだったから……大切な生涯でした」

「俺もだ……咲夜……」

俺の目尻からは熱い液体が溜まっていく。そして咲夜は最後、俺に質問をした。それはどの質問よりも重みがあつて、大切に忘れられない、この質問。

「こんな不甲斐ない私でも……愛してくれますか……？」

「ああ………俺はいつまでも……君を愛し続けるから……！」

咲夜の手が俺の頬に伸びる。その細くシワのついた肌は全盛期のすべすべ感は無かったが、心地よかった。それだけは何故か断言ができた。

「私は………あなた達と出会えて………本当に幸せ者でした………」

余計な言葉はいらない、未練が残るのは一番いけないこと。幸せ者である咲夜にこの世界で未練を残させてはいけない。涙を流してもいい、いくら泣いたって良い、愛の言葉は………言葉でないと伝わらない。俺はそれを知っているから………

紡げ、最後の言葉を、乗せろ、最愛の感情を………叫べ、身に秘めた想いを。

「俺は君を愛してる！ 咲夜！」

そう俺が叫んだ途端のことだった。

俺の頬に触れていた手が重力に従ってポトンと落ちる。その手にはもう生気が感じれなかった。咲夜の顔を見ると、幸せそうに……俺たちと別れをしたみたいだ。

「あ、あ……あああああ！」

咲夜に抱きつき、泣き続ける。月詠も一緒に泣き、咲夜との別れを悲しんだ。

それは雲一つない、十六夜の夜だった。

「パパあー？」

「んー？どうした月詠？」

「今日、一緒にお茶しない？」

「お、久しぶりだな……」

咲夜がいなくなり、男手一つで育ててきた月詠はもうすっかり大人になっていた。俺もまだまだ全盛期と何ら変わらない姿をしていて、同じ年にしか見えなくなっている。もちろん、「親子」だ。

バルコニに出ると、そこは満天の星空が夜空を支配していて、その中心には「満月に近い月」があつた。

「はい、紅茶……」

「ん、さんきゅ」

ずずずと紅茶を啜る。紅茶の味が咲夜そっくりで嬉しいものだ。

「美味しいな……」

「でしよでしよ？ 母さんに教えてもらったんだ」

ドヤ顔する月詠に微笑んだ後、二人同時に夜空を見上げる。

「今日は十六夜……か」

十六夜、それは十五夜の次の夜のことを指す。知名度は低いが、俺は満月よりもこちらの方が好きだ。理由は言わずもがなだろう、十六夜 咲夜がいるからだ。

「ねえパパ、母さん、またどこかで見守ってるかな……」

「ああ、きつと」

そう、今日のような十六夜は特に、咲夜が俺のそばにいる気がする。それはきつと、「十六夜」の夜だから……十六夜 咲夜が好きだから……

もしも咲夜が妖怪だったら、なんて考えない日はない程に、俺は咲夜を愛していた。

第3プロローグ 世界から消える

〈東方依憐花〉

桜の花びらが散り、緑が街を支配する5月。新二年生となった俺は朝、小さな欠伸をしながら狭い路地を歩く。

「あ、ああ……首痛い……」

寝違えた、完全に首が動かない。まずいな、今日でサッカー部のレギュラーが決まるのに……この感じじやいいプレーが出来なさそうだな……

「おはようございます。科宮先輩」

「……………え？」

背後から聞きなれた声で俺の名を呼んだ。予想だにしない声に俺は驚きを隠せず、その場でカバンが手から離れた。後ろに立っていたのは、銀髪の少年。

「か、奏!?!お前うちの学校なのか!?!」

「ええ、何とかして入ることが出来ました」

俺のいる学校は、県内でトップの進学校。バスケットとサッカーはほぼ全国レベル。俺はスカウトされた。と言った方がいいだろう。

「バスケのスポーツ科が一杯余ってましたので」

「へえ……」

意外だ。中学の時、奏とは同じ委員会に入っており、家も近かったのですぐに打ち解けた。

「そういえば、翔先輩もいるんですよ？」

「ああ、翔はもうレギュラーだぞ？」

奏と翔も仲いいんだっけか、まあ三人とも幼なじみだし、仲いいのは当たり前か。

「しかし奏が俺に敬語で話すとか……ふふっ」

「し、失礼ですね……いつも通りでいいんですか？」

「ああ」

「じゃあ依澄。サッカー部は今強いのか？」

「んー、そこまで、県大会でも8強がギリギリかな」

奏と並んで道を歩く。お互い汗をかきながらも会話に集中していた。すると突然、奏が周りを気にしながら耳打ちしてきた。

「依澄……知ってるか？ここら辺、通り魔事件が多いんだって」

「……ああ、知ってる。でもお前の家系なら大丈夫だろ？あの刀があるし」

「咲名千里は俺も使ったことはないんだよ……まあ振ったことはあるけど……それ

なら依澄もだろ？皆川流抜刀術だっけか？依澄、免許皆伝だろ？」

「ああ、あれは緊急用の居合の剣だ。使う機会はないよ。しかも師範は今……………」

「ああ、知ってる」
こんな会話をしている間にも、俺達は校門をくぐり、校舎内で靴を履き替えていた。四階が奏たち一年生、俺たち二年生は三階である。

「じゃ、またな」

「おう」

階段で別れて、二年三組に入る。まだ朝が早いからか、そこまで人はいなかった。中間の席。そこが俺の座る席だ。別に不便はない。

「ん、おはよ、依澄」

「あ、おはようございます。師匠」

「……………ここでそれはやめて」

俺の隣、皆川 舞雪^{まゆゆき}。皆川流抜刀術の師匠である。そう、彼女は「訳あって」師匠なのだ。もともとの師匠は彼女の父親、皆川 三郎が務めていたのだが、唐突に姿を消したのだ。その理由は謎に包まれたまま、警察沙汰にもなったが、結局時効。迷宮入りとなったのだ。

唯一手がかりとなる置き手紙があつたのだが、その内容は「道場の次期師範を舞雪と

する。いつかまた会えるので、この手紙は短めに」とだけ記されており、捜査には関係がなかった。それで、俺は今その師匠、もとい友人でもある舞雪と隣なのだ。舞雪自身、抜刀術は全くの初心者。刀すら触ったことのない彼女が何故師範になったのかは知らないが、監督しているのは俺だ。舞雪はただ見ているだけ。

「あ、ああ、わり、癖が抜けてなかった」

「全く……」

「な、舞雪。通り魔事件のこと、知ってるか？ここ最近多いらしくて」

「知ってるわよ。だからこんなに早めに学校来たのよ。普通の登校時間じゃ怖いからね」

「なるほど……」

「それより……さ」

一瞬、というか結構長い時間、舞雪は顔を赤くして目をそらす。わけも分からず、俺は首を傾げる。

「どうした？」

「今日……宿題……やって来た？あんた今日当てられるよ？」

「……………あ」

俺は昨日言われたことを思い出す。「明日、お前当たるから宿題しておけ、恥かく

ぞ」って言われていたのだ。

「あ、やっべ、舞雪、宿題見せてくれ」

「……仕方ないわね」

宿題を嫌々見せているのかと思いきや、舞雪の顔は少しだけ嬉しそうで、口元が緩んでいたのが見えたが、気にはとめなかった。

放課後、俺は部活が結構長引いた。レギュラー入りを決めるのは明日となって、今日のみっちりトレーニングをしたのだ。大きなあくびをかましながらか俺は夕焼けの中校門を通る。そのまま、真っ直ぐ歩こうとした時に、声がかかった。

「無視しないでよ」

「……………あ？」

振り返ってみると、そこにはもたれかかって腕を組む舞雪がいた。胸の下で腕を組んでいるので、大きなバストが持ち上げられている。

「…………どこ見てるの？」

「舞雪の胸。大きいなって……………ぶっ!」

顔面に強い痛み、俺はそのまま一メートル吹っ飛ぶ。

「全くもう……………セクハラ癖は治らないの？」

「男にとつて無理難題だな。で、どうしたんだ？」

俺がそう問うと、舞雪の顔は朝と同様、同じように赤く染まる。

「い、いや、道場まで一緒に帰ってあげようかなって……………」

「……………そ、そうか」

了承した俺は舞雪を隣に、歩き始める。帰りに人がいることが滅多になかったので、少しだけ緊張が迸る。一方の舞雪もなかなか話さない。どうしたのだろう。そうして途中にある、未だ咲き続ける桜があった。5月の今にまだ咲いている。というので、よく取材も来るのだ。

「……………っ」

「?……………舞雪?」

そこで舞雪は止まる。カバンを両手で持ち、短いスカートが風にゆらゆら揺れる。長い黒髪の間から見えた彼女の顔はリングのように赤かった。また、その顔がとても美しく見えた。

「あ、あのね……………」

唐突に話し始める舞雪。

「お、おう……………」

俺の中で一つの胸騒ぎがする。これは舞雪に対してなのか？

「私……………依澄のこと……………す……………す……………」

意を決したのか、舞雪は顔を上げ、俺をしつかりと見据えて、そして碧色の目を輝かせながら、こう言った。

「好きで……………」

ズブツ……………

生々しい音と同時に、舞雪の音が遮られる。俺の顔とワイシャツに赤い液体が付着する。俺はわけも分からず、その場で突っ立っていた。そしてその数秒後、我に返る。

「ま、舞雪!!」

腹部を刺された舞雪は俺の方に体重を預けた。舞雪の背後にいたのは、日本刀を右手に握る男性。夕日の逆光でよく顔は見えなかった。

舞雪はもう虫の息だった。

「……………」

黙ったまま、男性は刀を振り上げ、俺の肩を切り、最後に同じように腹部を刺す。吐血し、舞雪の隣に倒れる。

「くそっ……………舞雪……………」

まだ意識がある中、隣にいた舞雪の手を握り、引き寄せて抱きしめる。彼女の事が好きだったといえはそうでは無かった。でも、彼女が俺を好きでいてくれたことは本当に嬉しかった。舞雪にNOの返事が出来なかったのは嬉しいのか悲しいのか……………そんな事が頭の中で回転する。

「大好き……………だよ……………」

最後にそう言われた気がした。

それがこの世界の”最期”だった。次に目が覚めたのは真っ暗な空間、虚無。その中に一人で突っ立っていた。俺はその場で立ち尽くす。

「ま、舞雪……………」

必死に彼女を探すが、姿はない。そんな中、一人の女性の声が聞こえた。それは美しく、艶めかしい声だった。

「あなたが……依澄君ね？」

「……誰？」

「八雲 紫。妖怪よ」

「へえ」

今更、通り魔の方がショックが強すぎて、まだ現実がどうなっているのか、整理が付いておらず、なかなか頭に入ってこないが、前の女性は心を見透かしたかのように、俺が一番心配していることの答えを教えてくれた。

「安心なさい、あなたの女の子、舞雪ちゃんは確実に生きているわ」

「……よかった……」

ガクツと肩を落とす。

「でも、あなたは死んだわよ」

「まあ、分かった」

「で、あなたには私の血を流し込んだいた。妖怪ねあなた」

「え、じゃあ、長生きも？」

「出来るわ」

「魔法も」

「使えるわ」

「……………家族には」

「会えない」

「どれだけ自分が強くなろうとも、家族にはもう会えない、それに奏や翔にももう二度と会えないのだろう。」

「最後に……………挨拶くらいしときやよかった。で、俺は今からここに永住するんですか？」
「いいえ、日本の陸続きの異世界、幻想郷で生活してほしいの。あなたは後々必要になる。私の勘がそうだったの」

「……………まさか、あの通り魔も、あなたの仕事じゃないですよね？」

「私は外の世界には干渉出来ないわ」

「……………ならいい」

「紫は扇子を開き、口元を隠しながら、俺の全身を舐るように見るその仕草に俺は少しだけ心臓が高鳴る。」

「あなたは……………刀……………持ってるのよね。良かったらこれ使って」

「投げられた刀をうまいことキャッチする。鞘から抜くと、刀身は淡いピンク色。桜の絵が軽く彫ってある。何とも美しかった。」

「殺人刀「桜成」。幻想郷の「ある場所」にある。刀よ。かっぱらって来ちゃった」

「いいのかよ……まあ有難く受け取るよ」

「ええ、じゃあ、健闘を祈るわ。最強の抜刀師さん」

この数分で知らない女と出会い、そして別世界へと転移するという何ともイレギュラーな俺の生活。どうやら、第二の人生がここで始まるみたいだ。少し心は踊りながらも不安がそれ以上に募っていた。

「さて、ここは……どこだろう？」

眩しい光と共に、俺の目が細まる。空気が綺麗なところ、ここが幻想郷なのだ。

繋がれた赤い糸

く人形が繋いだ哀しみの愛く

1話

魔法使い

俺が落ちた所はまるで大自然。ビルなんかもなく、どこかの観光地かと言わんばかりの綺麗な森だった。紫さんから貰った桜成わんせいを握りしめ、警戒を怠らずに進む。

「……………」

五感是人並より敏感な俺だが、残りは抜刀術しか取り柄がない。特別頭がいいわけでもないし、そこまでイケメンでもない。翔のような人気者かって言われれば……友達は多いほうかな。男女問わず。

「……………っ！」

ヒュン……………と一つの針が鼻の先を通る。俺は驚きにより身も心も凍る。そのまま足が動かなくなってしまった。

「あら、よく避けたわね」

スタスタと針が出てきたところから歩いてくる一人の女性。金髪のセミロング。青いロングスカートに群青の双眸。その目には余裕が見えた。

「外来人なんでしょ？紫が言ってたわ。」あなたのところに外来人が来るから、試してお

いて」ってね」

た、試すってなんだ？

俺が首をかき上げている間に、金髪はいくつも小さな人形を取り出し、操っていた。

「き、器用だな……」

「そうでしょう？糸で動かしているのよ」

「へえ……」

そう言っている間にも人形が持つ針が次々にこちらへと襲いかかる。科宮流戦闘術の掟第七条。「相手が好戦的な場合はとりあえず距離を置く」。この掟は三郎師匠が教えてくれ、舞雪も何回も俺に呼びかけていたものだ。

「……あら、戦わないの？左手にある物干し竿はお飾りかしら？」

「……じゃあ、抜いていいの？」

「ええ、ただの竿で倒せるのならね」

俺はその言葉にカチンと来た。避けていた足にブレーキをかけ、柄を握る。そして

「科宮流抜刀術。「瞬時雷切」」

シュイン………という音が辺りを響かせ。静寂が訪れる。そして、俺は金髪の背後に立っていた。金髪の方も何がどうなっているのか、理解出来ないみたいだった。

そう数秒後、金髪の持っていた人形と金髪の指を結ぶ糸がすべてはち切れていて、人

形は力なく地面に落ちていく。金髪はそれをただ呆然と見ていただけだった。

「ふう……」

俺の刀はもう鞘に収まっていた。

「あ……え？」

「ほら、あんたの人形」

人形を拾い、彼女に渡す。しかし金髪はそのまま俺を見つめていた。

「そ、そんなに見つめるなよ……きやつ、恥ずかしい……」

こんなにつまらないこと言っても、金髪はピクリとも動かず、笑ってさえくれない。ここは笑って欲しかったんだが……そうしてようやく、金髪は口を開いた。

「あ、あなた……何者？」

「妖怪」

「今……刀身が見えなかった……」

「刀身って……お前これが竿じゃないこと知ってたのかよ……」

「あ、あなた……今どうやって糸を切ったの……？」

「斬った。刀で」

それだけ言うと、金髪は目を見張る。そして肩を掴んでこう言った。

「あ、あなた。行くあてはある!？」

「あ、ああ……ないけど……」

「じゃあ、家に来てっ!」

「で、でも、女の家に泊まるのはどうなんだ?」

「大丈夫! 幻想郷の男性は人里にしかないから!」

「え、じゃあ、人里行くよ」

「ここから半日!」

「ここにします」

また半日もかかる所には行きたくない。俺はお言葉に甘えて金髪の家に住まわせてもらうことになった。

「え、えと……私はアリス・マーガトロイド。人形の魔法使いよ」

「あ、俺は科宮依澄。普通の妖怪だ」

「そ、依澄ね。よろしく」

「おう、えと、アリス?」

「ええ、アリスでいいわ。付いてきて」

そう言いながら、アリスは歩き始める。歩く時にフワフワ揺れる髪からいい匂いが漂い、鼻腔をくすぐる。それを見たアリスは困り果てた表情で

「あなたって……変態じゃ無いわよね?」

「人聞きの悪いことを言うな。変態じゃない」

「そ、ごめんなさい。野暮だったわね。着いたわよ」

そこにあつたのは一つの小さな家。まるで御伽噺に出てきそうな雰囲気のある白い塗装がされた壁、俺はこの雰囲気が嫌いじゃなかった。

「とりあえず、風呂に入りなさい。体汚いわよ」

「お、おう、そうだな……」

刀を置いて、案内された風呂場に向かう。

「あ、アリス。服はどうすればいい？」

「いいわ。霖之助さんから貰った服がある。大きくて私着れないから依澄用に使っていいわよ」

「ん、さんきゅ」

霖之助さんがよく分からないけど、俺は気にせずに風呂に入る。久しぶりの風呂に俺は思わず声が増えてしまう。そのまましばらく経ち、俺は今置かれている状況を整理し始めた。

「あつちの世界で俺は舞雪と共に襲撃、俺だけ殺された。そして、目が覚めたら紫さんのところにおいて、気づけばアリスに出会った」

この数分で、俺の人生が大きく狂い、変わったことを考えると、実はとんでもないこ

とになっていくことに気づく。

「んで、今はアリスの風呂に入っていると……」

女性の家の風呂に入るのは何気に初めてかもしれない。俺の顔はみるみるうちに赤く染まっていき、ブクブクと泡を立てる。このままじゃのぼせそうだ……

早急に上がり、俺は体をタオルで拭く。アリスから受け取った服を着る。

「ん、ちよつと大きいけど……まあ大丈夫か」

扉を開け、リビングに出る。

「風呂借りたよ。サンキューな」

「ええ、依澄。聞きたいことがあるんだけど……」

「なんだ？」

アリスは神妙な面持ちで俺に問いかける。

「あの刀……あの剣術……あなた。魔法は使えるの？」

「いや、あれ一本だ。実は外の世界で抜刀術を習っててな、俺はそれの免許皆伝なんだ」

「それでも凄いわよ。妖夢でも見たことないのに……刀身が見えなかったわよ……」

「だろ？あれが俺の特技だ」

それだけ言うと、アリスはもう一度目を見張る。

「凄いわね……で、どうしてここに来たの？」

「殺された。知らない男に」

「……そう」

「友人の女の子に告白された時に襲撃されたんだ」

俺の拳がぎゅつと握られる。下唇を噛み、歯を食いしばる。

「なるほどね。だから紫に拾われてこつちに来たと。まあよくあるパターンね」

「そうなのか？」

「ここは忘れられた楽園。幻想郷。死んだ人が来てもおかしくないのよ。紫だしね」

「なる………ほど………」

理解が出来ていないが大まかには分かった。アリスは俺から視線を外し、外を見る。

「もう夜中ね。どうする？」

「ああ、俺はソファで寝るよ」

「そうね。じゃあおやすみ」

「そこは譲ってくれるところだろ」

「女の子をソファで寝かすとか恥ずかしくないの？いくら客でもそこまで接待するつもりは無いわよ。どう？恥ずかしいでしょ？」

「恥ずかしいです」

「でしよ、おやすみ」

それだけ言って、アリスはリビングを出た。個室へと歩いていき、ドアを閉めた。俺はソファにかけて合った毛布を被り、寝転がって目を閉じる。

「楽園……ねえ……」

その響きに、俺は尋常じゃない胸さわぎと、不安がますます募っていった。

心配になった俺は桜成の方に顔を向ける。すると桜成は妖しく紫色に光輝いているのが見えた。

それはまるで、桜がすべて散った時の悲しさを具現しているものにも見えた。

2 話

呉服店

朝、俺は鳥のさえずりと共に瞼が開いた。そしてその場で腕を大きく上にあげ、背伸びをする。

「ふぐっ?!」

俺の背中に尋常じゃない痛みと、骨がずれた感覚に陥った。そのまま悶絶していると、部屋から寝巻きのアリスが姿を現した。

「……………何やってるのよ?」

「せ、背中つつた……………あがぁ……………」

ピクピクと体を震わせ、痛みが引くのを待つ。数分間それが続いたが、いつの間にかに消え失せていて、俺は体を起こしていた。

「今日はどうするの?あなた、服が無いのよね」

「え、昨日の服は?」

「見ていないの?ボロボロよ?」

そう言つて、洗濯し終わったのか、真っ白なワイシャツがあつたのだが、ただ綺麗になつただけで、脇腹や腹元が裂けている。服には見えないほど穴が空いていた。

「ほんとだ、買いに行こうか、てか、どこに店があるの?」

見た感じ、ここ周辺は森だ。ここも森の中にある小さな一軒家だ。食材などはどこから入手するのだろうか。

「人里よ」

「え、半日もかけるのか?」

俺はそこで驚きの表情を浮かべたが、すぐその後、アリスが逆に驚いていた。

「まさか……あのこと本当に信じてたの?」

「あ、半日かかるのかと……」

「嘘に決まってるじゃない」

アリスは吹き出すように笑う。俺はそれを見ながら、不貞腐れる仕草をした。

「ごめんなさいね。実はここから10分よ」

「おいしい」

俺は体から力が抜け、その場でソファに座り込む。それを見たアリスは未だにクスクスと笑っていた。

「じゃあ行きましょう」

「お、おう」

疲れた表情をしながらも、俺はアリスの後をついていく。行く途中で朝食を取り、俺

はおにぎりを食べながら歩く。

「なあ、なんで外で朝飯食べるんだ？」

「食材がないからよ。今から買いに行くでしょう？」

「ああ、なるほど……」

おにぎりを最後まで食べ尽くし、俺は大きな息を吐きながら、お腹をポンポンと叩いて満腹の意を示した。それを見てアリスは

「あなた。体の割には結構食べるのね」

「まあ、お腹は空くしな」

「……そんな問題かしら？」

難しい顔をしながらも、アリスはそれに納得した。そのまま道沿いに歩いていくと、木造の家が何個もならぶ村のようなものが見えてきた。あれが人里というものだろう。

「さて、最初に服屋にでも行こうかしら」

「おう、助かる」

「お金は？」

「ない」

「じゃあ私が払わなきゃいけないのね……」

男が女に奢ってもらうなんて情けないことこの上ないが、今の状況下では全く仕方の

無いもの。俺がアリスに払わせたんじゃないことになってるだけだからね。「原田呉服店」という呉服店に入ると、そこは独特の匂いと服の種類があつた。俺はそれに釘付けになり、マジマジと見てしまう。

「決まったら教えてね。私は女物を見てくるわ」

「おう、さんきゅーな」

そう言つて、アリスは女物の服の方へと消えていった。俺はアリスから目を離し、いい服を探していく。

「どれもいいんだけどなあ……あ、これ」

白の黒のTシャツに白く薄い上着のパーカー。なんて言うのだろうか、服関係にはかなり疎い俺はこれをなんて言えいいのか分からなかつた。なかなかの薄い生地のパーカーで、明らかに冬に過ぎすものではなく、オシャレのためのものだろう。下は動きやすいように大きめのデニム。肌に密着するものではなく、大きめのもの。俺はそれに決定し、アリスを呼ぶ。

「アリス、決まつたよ」

「ん、分かつたわ」

アリスは見ていた服を戻し、レジへと向かう。購入した後、俺は試着室で服を着た。

「へえ、なかなか洒落た服ね。似合つてるには似合つてるわよ」

「なんだそれ……まあ、普通な感じだけど」

そう言つて、俺は靴を履き、呉服店を後にした。

「さて、依澄。晩御飯の材料と、あともう一つ今日は用事があるのよ?」

「? そうなのか?」

「ええ、それにも付き合つてちようだい」

「おう、先にどっち行くんだ?」

「先にもう一つの用事の方に行きましよう。ついてきて」

俺はアリスに言われるがまま、後をついて行つた。人里はいかにも和で、とてもものどかで過ごしやすそうな印象がもてた。

そして、アリスがついた先は他の家と同じような建物。「寺子屋」と大きな看板で示されている。

「寺子屋……?もしかして学校か?」

「ガツコウ?まあ、勉強を教えるところね」

「やっぱり……聞いたことあるんだよな……」

日本史で習つた気がする。確か……吉田松陰だっけか?

「で、ここで何するんだ?」

「まあ、待つてなさい。慧音——!」

すると目の前の扉がガラガラと開けられる。そこから出てきたのは白と青のロングスカート、頭には小さな教師帽子を被っていた。

「お、アリスじゃないか。んで、そちらは……?」

「あ、アリスの家で居候しています。科宮 依澄と言います」

「そうか、宜しくな依澄」

そう言つて、慧音さんとやらは右手を差し出す。俺は慌てて右手を出し、慧音さんの手に重ねる。

「さて、アリス。今日はどうしたんだ?」

「今度の人形劇、どこでやるのか聞きたくて」

「ああ、そう言えば肝心のアリスに伝えていなたな。川沿いの原田呉服店のそばだ」

原田呉服店は俺が買った呉服店の名のことだ。俺は少しだけ目を見開く。

「あら、そこね。分かったわ。ありがとう慧音」

「ああ、お安い御用だ。じゃあ人形劇。頼むよ」

そう言つて、慧音さんは寺子屋の建物内に姿を消した。それを見送つた後、アリスはくるりと身を翻した。

「さて、依澄、昼ごはんと晩ごはんの材料買うわよ」

「お、おう、あれだけでいいのかよ?」

「慧音との話？聞きたかったのそれだけだからいいわよ」

端的にアリスはそれだけ言って、八百屋で色々な食材を買ってきていた。俺は案の定、荷物持ちになっていて、重量もそれなりにあったので、少しだけ腕が張っていた。

「あら、力ないわね。依澄」

「う、うるせえなあ……力はないんだよ……」

俺は刀を持つのにそこまで力を入れていない、あの重さを軽々と振り回すには持つ”技術”が必要になってくるのだ。

なので、筋トレなどあまりしてこなかった俺にとってはこの袋はただの重りでしかなかった。

「それにしても体も細いわよ。もつと食べなさいよ」

「わ、分かってるよ……一々言われなくても……」

汗を流し、顔を顰めながらもアリスの反応にきちつと受け答えをした。

「そもそも、アリスだって細かい……」

俺はアリスの方に視線を向けた後、ある一人の女性が目に入った。

「どうしたのよ？」

「い、いや……え？」

そこに通りかかったのは艶のある黒髪の女性。誰が見ても見惚れる美しさを持って

いた。しかし、俺はそいつに見覚えを感じていた。

「ま、舞雪！」

俺はいつの間にかその女性に向かって走っていた。

3 話

悲しい顔

「舞雪！」

依澄は走ってある女性の元に駆けつけた。

「……………どなた？」

「え？」

依澄は舞雪とやらの女性から思いもよらないことを聞き、その場で硬直してしまっていた。

「ど、どなたって……………俺だよ、科宮 依澄。忘れたなんて言うなよ？」

「……………ごめんなさい。分からないです。どうして私の名を知っているのですか？」

「だ、だって……………あつちの世界で一緒に道場で修行してたじゃんか…」

舞雪さんはそんな依澄の言葉に首を傾げるばかり、私はその場で黙って見ているしかなかった。依澄の顔は絶望に染まり、全身の力が抜けているようだった。

「……………そっか……………すいません。人違いでした」

「い、いいえ。お気になさらず」

お互いぎこちない謝罪をし、お互いが違う方向を向いて歩く。私は依澄に駆け寄って

「ちよつと、大丈夫なの？」

「あ、ああ、問題ないよ。本当に人違いだ」

「そ、そう」

その割には恥ずかしさとかではなく、悲しみの表情しか見て取れなかった。私は依澄から視線を外して、舞雪さんとやらを見る。するとこちらを振り向いて、泣きそうな顔をしていた。私は気に留めないよう、依澄に視線を戻してから

「食材は買ってあるし、帰りましょう」

「お、おう……」

家に帰ると、上海人形が出迎えてくれた。

「おわっ!?!なんだよこれ？」

依澄の驚きのように私は右手で口を隠してクスクスと笑う。

「それは自律人形。上海よ」

「アリスの扱ってるものとはまた違うのか？」

「この子には意識がある。私が指で操る必要は無いの」
「ヨロシクオネガイシマス」

凄いい片言なのは仕方ない。そこは根性どうこの話ではなく、技術的にまだそこまで届いていないからだ。

「へえ……可愛いな……」

服を変えた依澄は違う雰囲気を放っていて、まだ出会ってから一日も経ってないのに新鮮に感じた。

「イズミサン。ヨロシクオネガイシマス」

「おう、よろしくな。上海」

依澄はそうすると、外に出て、名刀「桜成」を引き抜き

「これ、一本使っていいか？」

依澄が指さしたのは大きな大木。いくら斧で切っても折れないであろう程の強度を誇っていた気がする。私も数年前に邪魔だったから切ろうとしたら、逆に私の手が豆だらけになっていたので思い出して、苦笑する。

「ええ、いいわよ」

私の家は霊夢や魔理沙、他にも色々な面々が集まる事が多く、この木は呪木「ギガントウッド」って呼ばれていて、みんなからは親しまれているのと同じにとっても迷惑な方

向に伸びている。理不尽かもしれないが、実害もある。どうやら、この木には人間には効かないが強力な毒を放っていて、ここら一帯に動物がいないのだ。

「さんきゅ、遠慮なく使わせてもらおうよ」

依澄は桜成を左手に持ち替えて、納刀してある刀の柄を右手で握り、依澄は目を閉じた。その横顔は女の子のように凜々しかった。一瞬の静寂、自然の風が支配していたその時だった。

「ふっー！」

という声だけが聞こえ、依澄はもうその刀を鞘に収めていた。

「ち、ちよつと依澄？今斬ったの？」

「ああ」

絶対嘘だ。なぜなら、私は刀身が見えなかった。刀身が見えなければ、ものを斬ることなんて無理だろう。しかし、ギガントウッドに視線を移すと、目を疑う光景が見えた。

「嘘……？？」

確かに、さっきまではなかった傷がギガントウッドの木目に反して斬られていた。その綺麗な傷に私は思わず見惚れていて、感嘆のため息が出るほどだった。

「あなたの刀身……まだ一度も見ただことないわよ……」

「それが俺の強みだ」

依澄の強みとは、「抜刀術」というもの、その中でも依澄のはトップに位置しており、刀身を見せずに斬るのが得意なんだとか。

「……決めた。これで修行するよ」

「……そう」

私には分かる。これがただ強くなるために修行するのではなく、今日、人里で舞雪さんが依澄のことを覚えていないのを悔しく感じて、色々と吹っ切れた結果なのだろう。

「まあ、無理しない程度にね。あ……」

「ん？」

「いいえ、あなたの能力をまだ聞いていなかったなっ」

「能力？聞いてないぞ？」

「あれ、紫から聞いてない？」

お互いが首を傾げたその時、私と依澄の間に一つの空間亀裂が入り、そこが開いてスキマが出来た。そしてその中から私と同じ金髪の女性、八雲紫がいた。

「ごめん依澄。伝え忘れてた！」

「ベストタイミングだな、紫」

「？よく分からないけど、アリスに泊めて貰っているようね。良かったわ」

「ああ」

「で、本題なんだけど、あなたの能力について」

「この世界には程度の能力というのが存在してね。紫だったら境界を操る程度の能力みたいなものがあるのよ」

依澄は頷いて私と紫の話を聞いていて、目をキラキラさせていたので正直話しづらかった。

「で、あなたの能力なんだけど、あらゆるものを「隠す」程度の能力よ」「隠す?」

私と依澄が同時に首を傾げる。少し苦い顔をした紫は人差し指を立てて、順序よく説明していった。

「自分の体、もの。全てを隠せるわ」

「おい、そんなの女湯覗き放題じゃねえか」

依澄のその言葉に、私は無意識に右手が依澄の脳天を貫いていた。

「ぐおおお、な、何すんだよアリス……」

「風呂覗いたら閉め出すからね」

「分かっているってば、アリスのいないところで」

「それも閉め出す」

依澄の下心丸出しの発言を私は全否定する。それを見て、紫はクスクスと微笑して、

扇子を開いて口を塞ぐ。

「どうやら、こつちでもやっつけていけそうね。依澄」

「あ、ああ……」

そう言われると、依澄の顔は少し暗くなる。舞雪さんの出来事から空元気を振舞っているのだろうと、鈍感な私でも気づいていた。

「まあ、アリス。あとはよろしくね」

「ええ」

紫はそう言つて、スキマの内部に入り、完全に姿を消した後、境界が元に戻っていた。その後も暗い顔をする依澄を見て、私はある考えを持った。

「(普通、会つたことのない人物に別れ際にあんなに悲しそうな顔をするかしら?)」

上海を腕に抱きながら考える。気に留めないようにしていたが、とても気になつてしまふ。もしそれが事実なら、もしかしたら、舞雪さんはまだ依澄のことを覚えている可能性が極めて高い。

しかし、まだ確証はないので、依澄に言うのはやめておいた。

「さて、ご飯にするわよ」

「ああ、そうだな……色々疲れたあ……」

大きく背伸びをする依澄を横目で見ながら私は玄関のドアを開けて台所へと向かう。

「あ、依澄、買ったもの貸して」

「ああ、はいはい」

依澄は椅子に置いてあつたビニール袋を持って、渡してきた。妙な重みに右腕が一度下に落ちる。

「さて、今日はなんだ？」

「どうしようかしら？カレー？」

「お、カレーいいな」

「じゃあ早速作るから、部屋の掃除でもしてて」

「おう」

そう言つて依澄は自室へと消えていった、私は舞雪さんと依澄の關係をもっと知りた
いと思つた。あの悲しい顔と覚えてない理由。依澄があそこまで必死になるといふこ
とはそれほど重要な人物だつたといふこと。そして、人違いなど有り得ない。舞雪さん
はあちらで殺されたのなら幻想郷に来たのも辻褃が合う。

「ああああもう！」

絡まりそうになる頭をブンブンと横に振つて、私は料理を始めたが、気が散つてしま
い、包丁で指を切つていた。

4話

記憶の真相

部屋に戻り、俺は舞雪の記憶を失った経緯を予想していた。

おそらく、あいつがあつちの世界の舞雪であることは確定。俺はそう思える絶対的な証拠を知っている。それは舞雪が右のこめかみあたりの髪を留めている髪留めだ。あれは俺が不器用ながらも手作りで作ったクローバーのもの。同じものを同じ位置に付けるものなど舞雪一人だけだろう。

「記憶は……ここに転移した時のショックか？」

そう考えるのが無難だ。しかし、それなら一つの疑問が思い上がる。それは、舞雪が自分自身の名を知っていること。つまり、完全な記憶喪失ではないということが裏付けられる、

「なら、まだ戻る可能性も無いわけじゃないってことか」

俺は少し安堵し、部屋の中の服などを整理する。俺の自室とはいえ、ここは昔のアリスの部屋。アリスの古着が奥に眠っていた。

「ん、ここのタンス……アリスの服がいっぱいある………
パ
ラ
ダ
イ
ス
な………」
俺は言葉を失った。そこにはかけがえの無いアリスの大量の下着たちが広がっている

たからだ。俺は耳の先まで赤く染め、一つ一つの下着を手に取り、置いていく。俺がそれを見てニヤニヤしていると、コンコンとドアが叩かれた。

「依澄。ご飯できた……………わよ……………」

アリスの目線の先には俺が持っている水色のブラジャー。俺はそれを後ろに隠すがもう手遅れだった。アリスは顔を朱に染め、歯を食いしばり、キツと睨みつけ、剛拳を繰り出した。

「この変態がああああああ！」

「ああああ！」

脳天、腹、右足。素晴らしいほどの拳と蹴りに俺は骨が折れる音がした。バキバキ……………という気持ちのいい音。

「い、いつてえええ!？」

「…………大丈夫よ。あなた妖怪だもの」

「そ、それでもお前容赦ねえな……………」

「そ、それより、なんであんたが私のを持つてるのよっ」

「ち、違う……………これはこのタンスに……………」

そう言つて、俺はタンスを指さす。そう言つと、アリスはまた顔を赤くして、自分の顔を隠す。

「あ……やつちやった……まあいいわ、依澄。ご飯で出来たわよ」
「おう、じゃあ行こう……」

「ごがあああん……ごころごころ……」

雷だろうか？鼓膜が破裂するほどの爆発音が家の中で反響した。

「うるせえ……」

「なかなか近いわね。停電だけが怖いわ……」

と、その瞬間、まるでタイミングを見計らったかのように、部屋の電気が一斉に消え失せた。それにより、俺の視界は完全に暗転した。

「ありや、停電しちやった。アリス、何か明かりになるものはないか？」

「あ、人形が何とかしてくれと思う」

「早めに頼む。目がクラクラしてきた」

俺は立ち上がって手当りしだいに手を伸ばしながら歩き回る。

「あ、あつたわよ」

パチツという音が鳴り、微かな赤い光が部屋を照らした。

「っ!？」

明かりを照らしたことにより、お互いの顔が確認できるようになったのだが、今のアリスの顔は俺の鼻にくっついてもおかしくない距離にあった。

青くて宝石の様な瞳がキラキラと輝き、リンゴのように赤く染まる頬はとても美しかった。

「い、依澄……」

「お、おう……」

分かってる。今すぐ顔をどけないといけない事くらい。しかし、俺の本能がそれを止めているため、超至近距離の位置でお互いが硬直する。

首を少し動かすだけでキスが出来てしまいそうなくらいの距離。

しかし、ようやく全てを理解したアリスが先に行動に移した。右手を思い切り振り上げ、俺の左頬に標的を絞って見たことのないくらいフルスイングで綺麗に引っぱいた。

「いったあああ!?!」

正直、さっきの蹴りよりも痛かった。

顎の骨が軋み、うまく動かせなくなっている。

「あ、あつ、ご、ごめんなさい……!」

「あつが……」

俺は顎を叩いて、ずれた骨を矯正する。妖怪になったとはいえ、痛みは人間の頃と変わらない。

「だ、大丈夫だよアリス……ご飯食べようぜ」

「そうね……」

外はまだ雷が雨のように鳴っているが、幸い、お互い雷には恐怖心を抱いていないみたいだ。上海人形の明かりを頼りに食卓まで歩き、椅子に座る。

「これを見ると、電気のありがたさが身にしみるな」

「そうね。まあ、初めてじゃないし、上海がいるからね」

「確かにな」

「それよりも、舞雪さんのことは大丈夫なの？」

アリスの顔はよく分からないが、首を傾げているのだけは分かった。

「ああ、記憶が無いだけで、致命的なダメージを受けてもない」

「それなのにおかしいとは思わない？」

アリスの声音が変わる。それも少し低くチクリと刺さるような鋭いものだった。

「……何でだ？」

「依澄や舞雪さんが来たのはまだ数日よ？ 人里は捨て子を拾う物好きなんて誰一人いない。一人一人が生きるために必死なのに、拾う人なんていないでしょ？ 依澄を拾った私もレアケースなものよ」

「じゃあ……舞雪は……」

「記憶が残っている可能性があるか、妖怪に拾われたか……人里に拾う物好きがいたのか……」

アリスの顔は更に険しくなったのが分かったその時、パツと明かりが光った。電気が回復したのだろう。

「あ、ついたわね」

「そ、そうだな……」

「ご馳走様。私は風呂に入るわ」

「おう」

アリスは椅子から立ち上がり、食器を台所に片付けた後、俺の後ろにある風呂場へと向かった。俺はそんな中、桜成を握り、刀身を露わにし、峰を撫でる。

「この刀が……何かの手がかりかもしれない……なんて考えたって仕方ないか……」

これは普通の妖刀。こんなことには無関係だろう。

こんなことに頭を抱えている自分が馬鹿らしくなってきた。なんせ、舞雪本人に聞けばいいだけじゃないか……

それなのに……それを拒絶する自分がいた。

「どっし……」

理由なんて単純明快。俺を知らない舞雪なんて見たくないから。自分から舞雪を拒

絶しているのに、舞雪の記憶を蘇らせようなんて考えるなんて……なんだか矛盾している気がした。

その時、ドアが二回叩かれた。

「すいません。お手紙が届いております」

この声は誰だろうか？俺は覗き穴から容姿を確認すると、そこに居たのは文々。新聞で有名な射命丸文がそこに居た。

「どうしました？あなたは新聞の担当では？」

「いえ……皆川 舞雪さんから依澄さんにとお手紙を頼まれました」

皆川……これでもう舞雪本人だつてことに確信が付いた。

「て、手紙？」

「ええ、どうぞ」

手渡された手紙は質素な白い紙のもので、可愛らしい丸文字で書かれていた。これも、見慣れた字である。

「科宮 依澄へ」。宛先にはそう記されており、俺は息が詰まった。

「……………」

「では、私はこれで」

「はい、ありがとうございます」

それだけ言って、文さんは飛び去っていった。俺は即座に手紙の中身を見る。そこには紙の半分ほどを使って何か書かれていた。

依澄へ

突然ごめんさい。今日の人里の件は申し訳ありませんでした。

……………もう取り繕ったって無駄だよね。

ごめんね依澄。私の記憶は何一つ消えていないの。依澄の事だって、あつちの世界の事だって覚えてるよ。

でもね、私が幻想郷で拾われたのは……………

俺はここで一度手紙を読むのをやめた。本当に誰だろうか？俺は一度深呼吸をして、意を決する。バツと手紙を広げ、読む。

皆川 三郎。

「っ!？」

息が止まった。姿を消した舞雪の父親は幻想郷で生きていたのだ。そして偶然自分

の娘と出会い、拾われたということ、しかしそれが何故記憶を失う演技をするハメになったのだろうか？

それでね、私は誰かに殺されて幻想郷に来たんだということ話を話すと、早とちりになつて依澄が私を殺した事になつてね？

お父さんは依澄を強く恨んで今でも「殺してやる」つてずっと言ってるんだ。それに、なんだかおかしいの。いつものお父さんじゃない。誰かに操られてるみたいなの。

それも……悪い者に……

だから、私は依澄と関係を断たなきゃいけないの。

ごめんね。

手紙はこれで終了していた。俺は手紙を思い切り握り、歯ぎしりをする。

師匠は恐らく誰かにコントロールされているのだ。もし、もしそれが、公園で俺たちを殺した奴ならば、俺達は意図して幻想郷に来てしまったということになる。

俺は刀を持って、アリスを呼ぶ。風呂場に行き、扉を勢いよく開ける。

「アリス！やる事が出来た！行くぞ！」

「……………」

そこに居たのは、肌色のアリス。男が見てはいけない場所が俺の視界に吸い込まれていた。アリスはその場で硬直し、顔を真っ赤にして震えていた。風呂のお湯で濡れたアリスの髪は何か色っぽく感じた。とゆーか、スベスベだ。女の人の体ってこんななんだなあ。

俺はスタイルのいいアリスの太ももや鎖骨のライン……………ふくよかな二つの膨らみみえずっと見てしまう。

「……………何か言い残すことは？」

「……………アリスって案外おっぱい大きいんだな、感動したよ」

「バカあああああああ!!」

今日はアリスの蹴りから始まり、次はビンタ。そして最後はアリスの硬い拳が顔面に炸裂。それは今日だけで同じ相手に三回もボコボコにされたのだ。

夜の魔法の森はアリスの叫び声が響き渡っていた。

5 話

月明かり

「な、なあ、アリス……」

「………何よ?」

アリスの顔はとてつもなく不機嫌だった。俺が声をかけても一向にこちらを向いてくれない。

「悪かったって……俺も別にお前の裸が見たかったわけじゃ……」

「は、はだっ………ばっかじゃないの!?!」

前から気づいていたがどうやら、アリスはちよつとした下ネタにも反応するんだなと思っていた。どうやらそれは当たり前みたいだ。

「わ、悪い……」

俺はアリスから目を離し、自分の桜成を見つめる。それを見かねたアリスは自分から話題を変えた。

「で、さつき依澄が言っただのはどういう事なのよ?」

「ああ、舞雪の話だ」

さつき送られてきた手紙。その内容を俺はアリスにすべて伝えた。

「なるほど……記憶喪失ではない、と」

「ああ、それに加えて舞雪の父親が関わっているんだ。大分厄介だぞ」

そこでアリスはすっかり考え込んでいた。俺はそれを邪魔しないよう、見ていただけだったが、唐突にアリスが顔を上げて、俺に質問をした。

「ねえ、あなたと舞雪さんを殺した張本人の顔って覚えてる？」

「……いや、悪いけど何一つ覚えていない」

脳内の記憶を搾り取るように探してみるが、何も分からない。思い出そうとすると頭痛がするほどである。

「……舞雪さんは何か覚えてるかもしれないわね」

「……………ツ！それだっ！」

パチン、と指を鳴らしてアリスを見る。俺の勢いに少し仰け反っているアリス。

「舞雪の居場所が分かれば、聞き出せるかもしれない……」

「そうかもしれないけど、この手紙、本当に舞雪さんから来たのかしら？」

「た、確かに」

まあそれでも舞雪と俺の関係を知っているやつから来たイタズラなら、そいつも十分なキーマンだ。俺はこの手紙の送り主が本当に舞雪か確かめるため、手紙のありとあらゆる場所を探す。

すると裏にこんな事が書いてあった。

『私が本物である理由を今からここに書くね、昔、私たちが小さい頃に依澄が私の家に忍び込んで、私のお気に入りの下着を盗んでいたことを知っているから』

ぐしゃつと手紙を潰す。しかし後ろを見るとアリスは俺よりも先に読み終わっていったらしく、引き気味で俺を見ていた。苦しいっ！静寂が苦しいっ！

「あ、あゝ、どうやらこいつは本物みたいだなあ……」

「今から人里の自警団呼んでもいいのよ？」

「いや、ホントに出来心だったんです。許してください」

あれは仕方ない。自分の欲望には正直に行くべきという自分の間違った見解がこういった結果を招いてしまっただけなのだ。

「と、とにかく、舞雪のもとに急ぐう」

「そうね」

俺は桜成を握り、外に出ようとするものとあるものを発見する。

「あ、アリス。それどうしたんだ？」

「ああ、これ？さつき考えすぎて包丁で切っちゃって……」

「大丈夫かよ……絆創膏は張つとけよ」

血が流れているわけでは無かったが、見ているこちらが少し痛々しかった。俺は常備

している絆創膏をポケットから取り出し、アリスの手を掴む。

「あつ、ちよ……………依澄……………」

「じつとしとけ」

何故か顔を赤くするアリス。そのままそっぽを向いて黙っていた。何をそこまで顔を赤くする必要があるのだろうか？

「よし、終わったぞ」

「ん……………ありがと……………」

「ん？どうした？顔赤いけど……………風呂でのぼせたか？」

「えっ!?!いや、何でもない……………」

顔を俯かせるアリス。俺はその意図が見えず、首を傾げるだけだった。

「ね、今日は夜遅いし、明日にしましょう」

「……………ああ、そうだな」

そう言つて俺は自分の寝室に戻る。

さつきから響いている雷がさらに激しさを増した。

「うるさいなあ……………」

「ね、ねえ」

アリスが俺の左袖を掴んでいた。それによつて歩むのを阻止された俺は後ろを振り

向く。

アリスが赤面しながら下を俯いていた。

「あ？どうした？」

「いや…………その…………」

瞬間、ピシヤアツ！と大音量の雷が響いた。

「きゃあつ！」

「……………え？」

アリスがその場でしやがみこみ、耳を塞いで震えていた。

「もしかして…………」

「そうよ……………依澄のお察しの通りよっ…………」

「だって、さっきまでそんなこと無かったじゃねえかよ…………」

「我慢すれば短時間は大丈夫よ、でも…………寝るのは…………」

まさかな…………

「一緒に部屋で……………寝たい」

「…………マジで言ってる？」

コクリ、とアリスは首肯した。俺は後頭部を搔きながらため息を付いた。

「強気なアリス様は雷が怖いのですなあ」

「なっ!?う、うるさいわよ!」

「はいはい、お前はベッドで寝ろ」

「え……? 依澄は?」

「俺は床で寝るよ。女の子を床で寝さすほど俺は腐ってない」

「へ、へえ、意外と男らしいじゃない」

「そりやどーも、じゃおやすみ」

俺が電気を消そうとすると、また雷鳴が響き渡った。

「ほんとに凄いな」

「ね、ねえ…依澄、床はやつぱり硬いでしょ?」

「あ?別にいいけど……」

「だから……その…えと……」

内股で座り、モジモジするアリス。やばいすっごい可愛い。俺は理性をギリギリで保ちながら応対する。

「……………いよ……」

「ん?」

「もう!一緒に寝ていいよ!って言ってるの!難聴主人公なんて王道すぎるわよ!」

「前半めっちゃ可愛い事言ったと思ったら後半で全て台無しっすわ……」

「い、良いのほら、寝ましよ?」

俺は呆れながらベッドに入る。するとアリスの顔がもう15センチほどの距離にあつて、流石の俺も少し心臓が跳ね上がった。

「っ!」

アリスはそれに耐えられなかったのか、反対側を向いてしまった。俺もそのままリビング側を向いた。

「ねえ……舞雪さんってあなたにとってどんな人なの?」

「……なんだ? 眠れないのか?」

「気になっただけ、それでどうなのよ?」

アリスには話した方がいいのだろうか。少し迷ったが、居候させてくれているのだから話さなきゃ行けないのだと、そう思った。

「俺が使ってる抜刀術。あれは舞雪の父さんの道場で習った技だ」

「……あんなのを道場だけで習ったの?」

「いや、俺の技は道場から習った技を磨きに磨きすぎたんだ」

「それが……あの……」

「それからかな、舞雪の父さんは突然行方をくらませたんだ」

俺は自分の記憶を辿りながら、少しだけ辛い記憶を話す。

「それから、道場の師範は舞雪が代理で務めることになって、俺と舞雪は家族同然な関係にもなっていた」

「……………」

「そんなある日、俺は舞雪に告白されて」

「……………」

「俺が返事をしようとした時、背後から誰かに刺されて……………幻想郷に来たんだ」

「……………そう……………」

するとアリスは体を反転させ、こちらを向いたので、俺も自動的にアリスの方を向いた。

「ねえ依澄。質問の答えになってないわよ」

「え?」

「舞雪さんをあなたは好きだったの?」

ああ、そう言えばそんな質問だったな。つい過去話を話してしまった。

俺は目を閉じ、舞雪のことを思い出す。

「……………好きだったよ。多分、あの日俺はOKを出してたと思う」

「……………今は……………」

「……………さあな……………」

また俺は体を反転させ、リビング側を向いた。

俺はずっと昔から舞雪が好きだった。だから、あの時は本当に嬉しかった。でも、あの時殺された舞雪の顔は一生脳裏に焼き付いていて、ただ胸が苦しくなるだけ。

「……………」

だから、俺は舞雪に会わない方がいいのかもしれない。舞雪に会うとあの時の事を思い出してしまいそうだから。

「……………」

「っ!? あ、アリス!?!」

アリスは俺の背中に体を密着させ、腕を俺の体に絡みつけた。

「……………」もう少しこのまままでいさせて」

「お、おう……………」

雷が怖いのかな……………?と勝手に自己解釈して目を閉じた。

「大丈夫だよ……………依澄。あなたが苦しいのは分かる」

「アリス……………」

「なら、私もその苦しみを背負わせてよ」

「……………」

「私だって戦える。背中を任せられる」

アリスは抱きしめる力を強め、さらに体を密着させた。

「……………ごめん、ありがとうな、アリス」

「いいの、私は今、あなたの相棒だから」

俺はこの時、心臓の振動がとんでもない量だったと思う。

……………今なら分かる。俺はもう舞雪じゃなくて、アリスに想いが寄りつつあることが。

いつの間にか、雷が止み、俺とアリスのベッドには月明かりが差し込まれていた。

6話

気づき

私の目を日光が刺激した。昨日のような雷はもうどこかへ行ってしまう。別世界のように青空が広がっていた。腰を曲げて上半身を上げる。眠い目を擦りながら辺りを見る。

「おはよう、アリス」

「おはよ、依澄」

依澄はもう目が覚めており、いつもの服に着替えていた。

まだ頭が回っていないかった私は依澄に挨拶をした後、少しブーツとしてしまった。

……すると、昨日のことが鮮明に私の頭の中で繰り返された。その瞬間、ボンツと一瞬で私の顔が熱くなっていた。

「~~~~~っ!」

「お、おい、アリス?」

「ば、バカあ!」

「はあ!?!」

あまりにも唐突のことで私は思わず枕を依澄に向かって投げつけてしまった。

「な、なんだよっ?!」

「うううう……」

顔を手で塞ぎ、依澄に顔が見られないようにする。まさか、私がほかの人にあそこまで甘えることがあるとは、思いもしなかったからだ。

「……………とりあえず、今日は舞雪の居場所を探そう。そこに師匠もいるかもしれない」

「……………そうね、でも、舞雪さんの手紙には、『お父さんは何かに取り憑かれているかのよう』って言っていたわよね?」

私は前に依澄宛に届いた舞雪さんからの手紙の内容を思い出しながら話した。依澄は顎に手をやりながら。

「そういうえば……………でも、取り憑かれてるのなら、今頃問題になったりしないのか?」

「分からないわね。取り憑くと言っても様々なものがあるわ。怨霊、悪霊。時には善の霊が憑いて、虐待を続けていた父が優しくなった。なんて事例もあったわ」

「師匠が取り憑かれたのは前者だよな」

「そうね」

すると依澄は踵を返し、リビングの方に向かった。そして依澄の愛刀「桜成」を握った。

「俺はもう聞き込みに行く。アリスは準備があるだろ？後で合流しよう」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ。私も行くわ」

私がそう反論しようとする、依澄は苦笑いをしながら、少し遠慮気味に口を開いた。

「……………その寝癖でか？それに、寝巻きがズレてる。見えるぞ」

「ふえ？」

顔を逸らした依澄が指を指す方向を向く。すると、自分の胸元が見事に空いていたのだ。慌てて服で隠し、キツと依澄を睨む。

「ちよ、待てよ！今のは不可抗力だろ!」

「……………はあ、分かっているわ。じゃあ準備してから行くから、先に行つて」

「おう」

そう言つて、依澄は勢いよく部屋を飛び出し、飛んでいってしまった。

「……………」

依澄がいなくなった途端。この部屋は一気に静かで悲しい空間になってしまった気がする。数日前まではこんな事が普通だったのに、依澄が来てから全てが反転した気がする。

「まあ、悪くないけどさ……………」

ベッドから立ち上がり、布団を見る。昨日の夜、私はあの依澄の背中に抱きついたので

だ。それを考えると、脳天が爆発しそうなくらい恥ずかしかった。

「(こんな気持ち……初めて)」

いつの間にか、私は人肌が恋しくなっていたのかもしれない。ずっと彼に触れていた。彼と話したい。彼の背中で戦いたい。

そんな気持ちが次々に芽生えてくる。そもそも、依澄を拾ったのも私が「この人なら……」って心のどこかで思っていたから。

要は一目惚れだったんだ。

「私……依澄のことが……好きなの？」

分からなかった。本当に私が恋をしているのか。しかし、依澄が部屋を出てから胸がチクリと傷んだり、気づいたら依澄のことを考えていたり。これは100人中100人が「恋」と答えるのだろう。

「これが……」

生まれて初めての感情。上海人形にも魔理沙にも霊夢にも抱いたことのない。異性に対しての感情。

そう考えると、私は自分を抑えきれなくらい依澄のことが好きなんだと自覚できる。

彼と密着していたい。彼の温もりと匂いを感じていたい。

「つて、私は変態じゃないっ！」

と、自分で自制をきかせた。

「……………バカみたい。早く準備しよう」

落ち着いた私は洗面台へと向かい、顔を洗って髪を整える。そして、いつ敵が来てもおかしくないよう、多くのスペルカードを手に持ち、玄関の扉を開けた。

「……………あら、依澄ってどこに行ったのかしら？」

そう言えば、今日依澄とどこで合流するか話し合っていなかった。

「……………」からね」

大きいため息をついて、足を浮かす。少しの間家を開けてしまうので、しっかりと戸締りを確認した。

私はここから30日間帰ってこない。

「つたく、かつこよく飛び出したはいいもの。ここからどうしようか……」

人里へと着いた俺はとりあえずこちら辺で聞き込みをしようと人を選ぶ。すると、今のところ一番いい手がかりを持っていいそうな人物、射命丸文さんを見つけた。

「あ、文さん」

「およ？ 依澄さん、ご無沙汰しております」

「すいません、以前に俺に舞雪からの手紙がありましたよね？」

「あゝ、そういうえば」

上を向きながら文さんは首肯した。

「あの時、どこから来たかわかりましたか？」

「いえ、私の家に直接来たので、場所は……」

「そう……ですか」

恐らく、舞雪は俺がこうやって文さんに聞き込みをしようとするのを察知して直接渡したんだろう。

「ありがとうございます。では」

「あ、待ってください」

とぼうとした瞬間に、文さんに引き止められた。

「舞雪さんを探しているんですよね？私も協力します」

「……そう言ってもらえるとありがたいです。お願いできますか？」

「お任せ下さい！文々。新聞の情報力を舐めないでくださいね！」

袖をまくって鼻を鳴らす文さん。ちよつとだけ可愛く見えた。俺は小さく微笑んで、もう一度飛んだ。

「じゃあ行きましょう」

「はいー」

俺は文さんともう一度飛び出した。

その数十分後、俺達は霊夢さんを見つけた。

「霊夢さん！」

「あら、あなたはたしか……依澄だったっけ？」

「はい、色々お世話になってます」

霊夢さんや魔理沙さんは度々アリスの家に邪魔しているので、俺も何かと仲良くなつて入るのだが、霊夢さんとはあまり会話はしない。

「で、どうしたのよ？文と一緒になんて珍しいわね」

「実は、この子を探してるんです」

ピラッと以前の手紙を見せる。名前がわかってくれたらいいのだが、博麗の巫女だから何かと知っている可能性も高い。

「……………」

「霊夢、さん？」

霊夢さんの顔は何故か一気に青ざめていた。顔面蒼白、とはこのことを言うのだろう。

「あ、あなた、これ以上の詮索はよしなさい」

「え？どうして…………」

「皆川家は……………天民族よ」

「……………」

俺が初めて聞く単語だった。

「天民族、ですか？」

「ええ、天人の上位互換であり、博麗が力を持つまでは幻想郷のバランスを保っていた最強の種族の中の精鋭部隊。それが「皆川家」なの」

「……………どうしてそれが分かったんですか？」

俺はまだ霊夢さんには舞雪の名前しか見せていないのに、ここまで分かるのは少し疑問だった。

「だって、皆川 舞雪。彼女こそが精鋭部隊のトップだもの」

「……嘘……だろ……」

「でも、どうして依澄さんを呼ぶようなことを？」

文さんが横から質問をする。

言われてみれば、舞雪は俺に対して「来い」とは言っていないが、明らかに俺を誘引しているのではないかと今思った。

「それは私にもわからないわ。だから依澄、これ以上の詮はやめておいた方が身のためよ」

霊夢さんの注意を素直に聞きたいと思ったが、それ以上に舞雪達のが気になって仕方なかった。

「……霊夢さん、すいません。俺はやっぱり、舞雪のことが気になります。あちらで一度死んだ舞雪がこちらで何をしたいのか、確かめるために」

「……………そう、私は止めないわ。それに協力だつてする。困ったらいつでも言いなさい」「ありがとうございます！」

俺は霊夢さんに頭を下げ、体をくるりと反転させる。

博麗神社前は周りがよく見渡せる。すると鳥居の正面、数キロ先であろう山の頂上が何やら妖しい光を放っていた。

「……何だ、あれ？」

「……うおお、あそこから凄い妖力を感じましたよ」

「行きましょう、文さん」

「本気ですか？」

「ええ」

文さんの質問に即答した俺は地面から足を離し、勢いよく飛び出した。

「あやや、待ってえー！」

後から文さんが追いかけてくる。

俺は何だかあの光に吸い寄せられているような気がした。

7 話

舞雪の地

「……………風が強いな……………」

正面から入ろうとすると強風で体が跳ね返される。俺と文さんは博麗神社から見えた「光っている場所」へとたどり

着こうとするその手前で強風に跳ね返される。

「これは……………正面突破は無理では？」

「ちよつと離れててください、文さん」

「？」

疑問符を浮かべる文さんは首をかしげつつも俺から数メートル離れた。俺は左手に持っていた「桜成^{おうえい}」の柄を握った。

「……………っ！」

力を入れて抜刀し、地面と平行に振り抜いた。空を切り、一瞬の静寂をもたらした後、ガラスが割るような音がして、風が次第に消えた。

「……………やっぱり」

「な、何を？」

「幻惑の結界ですね。以前にアリスから教えてもらいました。俺達は「風が強いと勘違いをさせられた」だけです」

「ほ、ほええ……」

感嘆の声を漏らす文さん。俺はその呆けた顔を横目に光る場所へと入っていった。すると、俺の背後でバチツという嫌な音が聞こえる。

「あ、あれ？」

「どうしました？」

「通れない」

「え？」

文さんが通ろうとしてもまた別の結界が張ってあった。俺はもう一度桜成で切り裂こうとしたが、それは空を切っただけだった。

「……………」

「あ、あく、依澄さん？」

「……………はい……………」

文さんは結界越しに親指を立てて、俺を励ました。

「後は頑張れ！」

「一人かよおお！」

「……………！ ……どうやら、一人では無いですよ、依澄さん」
「え？」

「あ、霊夢！」

「ん？」

博麗神社に行く途中の道のりで霊夢と出会った。依澄を探すには博麗神社から妖力を確認するのが一番手っ取り早かった。

「依澄見なかった？」

「ああ、なんか、博麗神社から北の方にある光った場所に向かったわ。多分、博麗神社からなら見えると思う」

「……………霊夢は行かなかったの？」

「文が付いてたわ、それにこの事には人間は首を突っ込んではいけない」

いつもよりも険しい顔の霊夢。これは思った以上の大事なのかもしれない。私はつばを飲み込みながらそう思案した。

「分かった。ありがとう霊夢」

「気をつけなさいよ。死ぬ可能性も捨てられないわ」

最後の忠告を聞き、私は霊夢に背を向けながらも右手を上げた。博麗神社の鳥居の前で飛び、霊夢の言っていた場所を探す。

「あれ……かな……」

目を細めてみると、人が二人そこにいるのが分かった。私はそこを目指して飛ぶ。

目を細めると、依澄と文が何やら話し合っていた。

「あんた達！ 何してるのよ！」

「あ、アリス！」

依澄は驚いたように私に近寄ってくる。朝のこともあったので、近寄ってくる依澄にドキツとして、一瞬止まるが、今はそんなこと考えている暇はない。

「アリスさん、私この結界に入れないみたいです」

「はあ？ じゃあ、依澄だけ？」

「アリス、入ってみてくれ」

恐る恐る、その結界に入る。しかし意外にも、スッと入ることが出来て、私は小首を傾げた。

「？」

「……まあ、俺一人だけじゃなくて助かったよ」

安堵したように肩を落とす依澄。結界の外側では、文が申し訳なきように頭を下げた。

「すみません。私はここまでのようです。出来るだけ外側からサポートしますので……」

「ありがとうございます、文さん」

「文、ありがとうございます、依澄の手助けをしてくれたんでしょう？」

率直な思いだ。依澄の事情に関係の無い天狗の文が手伝ってくれたことには感謝がある。

「いいえ、依澄さんの力になりたい気持ちはありますから。それに……」

チラリ。と文が依澄に目を向ける。するとその瞬間、文の顔が赤くなりだした。

「依澄さん……に会いたかったから……」

「……………」

「……この騒動が終わったら、またどこかでお茶しましょう！ 文さん！」

途端にはあつと文の顔が明るくなる。そして、首が取れるんじゃないかと思うくらいブンブンと頭を縦に振っていた。

「はい！」

「じゃあ、行ってきます」

「……………文……………」

「はっ？」

恋敵として、これだけは言っておかなければならない。私は依澄が聞こえない程度の
小声で、結界越しに文を見すえる。

「依澄は渡さないわよ」

「……………アリスさんがライバルですか。望むところですよ！」

ニヤリとお互いに笑う。これからは良きライバルとして、彼女と付き合っていくこと
になるのだろう。

ただその言葉だけを交わし、私はくるりと反転して依澄を追いかける。

依澄に追いついた私は依澄に状況を聞く。

「それで、この結界は何なの？」

「分からない。ただ気がついたらここに吸い寄せられてた」

「は、はあ？」

依澄がそんな抽象的な事を言うとは思わなかったので返答に困る。

「舞雪はここにいます。そう感じた」

依澄の顔を伺うと、どうにも冗談を言っているようには見えなかった。真剣そのものの顔、握り拳も強く震えていた。

「……私は、あなたについて行くわよ。依澄」

「……………ああ、ありがとう。アリス」

「なっ!？」

依澄は私にそう言われたのが驚きだったのか、一瞬目を見開くがふつと微笑み、右手が私の頭の上に乗る。その途端、私は顔面が燃えるように熱くなった。

「き、気安く撫でないでよ……」

「悪い」

ニツと白い歯を見せて笑う。私は不満そうに頬をふくらませ、依澄を睨みつける。というのも、本心では飛び上がるほど嬉しかったのだが、それを表に出せないのは、まだ素直じゃない証拠だ。

「……………いたっ」

私の前を歩いてきた依澄が急に止まる。完全に油断してた私は顔面が依澄の背中にあたる。

「いったいわね……何して——」

「しっ!」

依澄が人差し指を立てた。何かを見つけたのだろう。私はすぐに黙って依澄と同様、物陰に隠れた。そして、依澄が見てる方向を覗き込む。

「……なに、あれ……」

「ありややばいよな……アリス、あれに見覚えは？」

「あるわけないでしょう……」

私と依澄の先に見えるのは巨大な「魔法陣」。しかも、私達が使う魔法陣とは比べ物にならないくらい巨大だ。直径20メートルはあるだろう。

「……あれが霊夢さんが言っていた天神族とやらの力？」

「……ちよつと待って、天神族って——」

「あら？　こんな所で話し合い？」

「つつつ??
!!?」

誰の声だ。私でもない、依澄の声でもない。私たちの背後から届いたその声音は少し幼くも、私達に恐怖を与えるには十分の妖しさがあつた。

私達は物陰か、抜け出して、声の主から距離を取る。臨戦態勢に入る私達だが、それは一瞬で緩められた。

「ま、舞雪……?」

「あははっ、依澄、久しぶりだね」

真つ赤な双眸、艶のある黒髪、幼さが残るが、シュツとした輪郭。そして、依澄にとっては聞きなれた声音。

「……………」

「黙るくらいに私との再会が嬉しいの？ あの時のごめんね？ 私もあんなに早く依澄に会えると思わなかったから別人のフリをしちゃった」

「いつから、そこにいた？」

依澄は旧友相手にも警戒を怠らなかつた。しかし、依澄が警戒するのも頷ける。なぜなら、私も依澄も結界に入ってから「気を弛めていない」のに、こうして背後をいとも容易く奪われたのだ。

「んー？ アリスちゃんの「き、気安く撫でないでよ……」からかな？」

「……」

似ていない私のモノマネをしながらニヤニヤと笑う舞雪さん。

「……………なあ、舞雪」

「ん、なあに？」

「お前は……………敵……………なのか……………」

「……………少なくとも依澄の敵じゃないよ？」

ニタリとその顔に似つかわしくない醜い笑顔を見せる。背筋がゾツとしたのは私だけでは無いはずだ。

「アリスちゃんの敵だよ？」

「……………」

瞬間、一閃が舞雪さんの首を捉えた。

「およっ。」

陽気な声を上げて、舞雪さんの首が吹っ飛ぶ。もちろん、そこからは大量の鮮血が噴

水のように吹き出していた。

「っ!!」

斬った本人の依澄はきつと辛いはずだ。一番近くにいた大切な存在の首を斬ったのだから。

コロコロと舞雪さんの頭が転がる。舞雪さんの目は瞳孔が広がり、完全に死んだのだと悟らせた。

「……………」

「依澄……………」

「…………ごめん。ごめんな……………舞雪……………」

どうして、依澄は迷いなく舞雪さんを斬ったのだろうか。

依澄は膝をついて転がる舞雪さんの頭に必死に謝っていた。

「何がごめんなのかな?」

「っ…………嘘……………」

口を開いたのは舞雪さんだった。その声の主は生首から発せられたものである。

「全く…………この程度で死ぬほどヤワじゃ無いのになあ…………私は依澄の師匠だよ?」

「……………」

すると、舞雪さんの体から一本の管が伸びる。そして、それはそのまま、舞雪さんの

首に繋がる。

「よっこいしよつと……」

「舞雪……お前……」

そして、その管は舞雪さんの生首を引っ張り、体と首を繋ぎ合わせた。

「……………依澄、お返しっ」

「はっ?」

ビチュン……。

生々しい音が私の横を通り過ぎた。幸い、私の左隣にズレたようだ。そして、その左隣には、依澄がいたはずだ。

そう考えた途端、私の服に大量の血液が飛び散った。

「いず……み……」

「あっ……………うあ……………」

依澄の手には桜成が無くなっていた。いや、そもそも「手が無くなっていた」。

依澄の腕は上腕の半分から下が吹き飛んでいたのだ。当の依澄もまだそれを理解できていなかった。

「う、あ……あああああああああ!!?」

自分の腕を抑え、痛みに悶える依澄。

た。私はその場で凍りついてしまった。この時ほど、私の無力さを恨んだことは無かつ

8話

飲み込まれる二人

「あ……………がつ……………」

「……………い、依澄ッ！」

右手を失い、依澄は意識がもうろうとし始める。恐らく、想像を絶する痛みなのだろう。

「あーあ、私の恋人なんだから、腕切られたくらいで慌てないでよね」

舞雪の言葉に反応したのは、もちろん私だ。こいつの言動全てが私を苛立たせるのに十分な材料だった。

「ふざけないでッ！ どうしてこんなことするのよ！ 何が目的で、依澄を攻撃したのよー！」

「……………目的……………ねえ……………」

可愛らしく、人差し指を唇にもって、考える仕草をする。その仕草さえも、憎い。

「……………依澄を私のモノにすること……………かな？」

「……………殺すッ」

ビーツと指から糸を引く。すると、数体の人形がまるで意志を持っているかのように

舞雪へ向かっていく。私の人形達はどんな団結した集団よりも統率が取れる。

「だから、アリスちゃんは依澄とは釣り合わないの」

呆れながら、舞雪は右手を振り上げた。そして、高々とあげた右手からパチンと指を鳴らす音が聞こえた。

その瞬間、鋭い槍のような雷が降り注ぐ。その雷は一瞬にして私の人形を丸焦げにした。

「嘘……」

「アリスちゃん、舐めないでよ。天神族である私に、お人形さんで勝てると思ったの？」

「天神族……って、あの」

「こそ、博麗の前までは幻想郷を支えてた種族。私さ、そこの精鋭部隊のトップやってたんだ」

自慢げに語る舞雪。天神族は誰しもが恐怖する種族、天人よりも貴重で何もかもが優れている。人里では「天人の上位互換」と言われている。そんな天神族のトップとなれば、どれほど恐ろしい存在かが分かる。

「と、言うわけなの。だから、アリスちゃんはとっとと消えて欲しいな」

「……嫌よ」

「……」

「依澄とパートナーを組んでいるのは私だもの。幼なじみだか何だか知らないけど、依澄は私のモノよ」

「は？」

可愛らしい顔に似合わず、鋭い目つきが私に突き刺さる。その顔はもう極悪人のそれだ。私は拳を握りしめ、スペルカードを取り出す。

「蒼符「博愛のオルレアン人形」」

大きくそう唱えると、新たな人形が弾幕を放出する。その弾幕は壁に跳ね返るように反転しながら増殖していく。

「いや、スペルカードなんて生ぬるいもの使わないでよ。遊びじゃないんだよ？」

呆れるように頭をかいていた。そして、先程と同じようにその弾幕を雷で落とす。砂埃が舞い、視界が一気に狭められる。

「ど、どこだ!？」

「ハーンハーン」

スつと背後に現れる。ゾツとする恐怖を拭いながら、舞雪と一定の距離を詰めるが、私の身体能力では、舞雪の素早さには勝てなかった。

恐怖に支配された私は目を閉じて、攻撃されるのを待つ羽目になってしまっていた。

「さあ! これではアリスちゃんもしゅーりよ……」

私に向かって飛んでくる舞雪。しかし、終ぞ私に舞雪の毒牙が届くことはなかった。恐る恐る目を開けると、舞雪は私の１メートル前で止まっていた。

「……はあ……まに、あつたあ……」

「あぐつ……いい、依澄！」

依澄の刀「桜成」の刀身が舞雪の右目を貫いていた。桜色に光る刀身から、ぽたぽたと真つ赤な血が滴る。

「アリス、大丈夫か？」

「いず、み……良かった……」

上を見上げると、私の顔を覗き込む依澄がいた。しかし、その顔が余裕には見えない。

「依澄……腕……」

「……あ、ああ、再生しない。きつと戻らないだろうな」

「そんな……」

依澄の右腕はもう消え去っていた。近くにあつた紐で腕を縛り、止血を施していたが、ぽたぽたと垂れている。

「最悪、左手があるから問題は無い……けど、アリスを守りながら戦うのは難しいかな」

「……あんたは私の実力を知らないようね」

「え？」

「舐めないでもらえる？ これでも、一応歴戦の魔法使いなのよ？」

「……そうか、そうだったな」

依澄は桜成を舞雪の目から引き抜き、もう一度向ける。

「じゃあ、頼んだぞ、アリス」

「ええ、あんたの右腕になってやるわよ」

「はいはい、お喋りは終わったかな？ 退屈すぎてつまらなかつたよ」

舞雪の目は一瞬で再生をしていた。その再生力は流石天神族と言ったところだろうか。

「じゃあ、いくぞー！」

依澄の桜成が一闪、横薙ぎに振られる。左手の刀はやはり遅い。舞雪の身体能力の前で、このスピードはただの玩具に過ぎない。

「ちよ、依澄？ 真面目にやってよー、アリスちゃん以下だよ？」

「……そうか？ 少なくとも、お前よりは速い気がするかな」

「……………戯言を……………」

そうして、振り終えた刀にもう一度力を込め、舞雪の顎をめがけて振り上げる。その刃は確かに感触を感じた。そして、それは舞雪の顔を真っ二つにした。

しかし、再生の速度はそれを上回る。もう一度攻撃を仕掛ける前に傷は完治していた。

「ちよ、依澄？ あんた抜刀術専門でしょ?! 二連撃なんか使ったら破門だよ?」

「うっせ、お前を倒すために抜刀術なんか意識してられっかよ」

「……ますます私のモノにしたくなつたよ、依澄イ!」

半狂気的な笑い声と共に、舞雪は右手に直剣を出現させ、依澄に降りかかる。依澄はそれを桜成で受け止める。刃どうしのぶつかり合いに、火花が散る。

「ぐっ……」

「ほらほら、片手でなんか勝てるわけないでしょお?」

「……………アリスッ!」

依澄が精一杯叫ぶ、私はそれに答えるように、スペルカードを唱える。これが効かなくとも、攻撃し続ければいつかは隙が生まれると信じて。

「闇符「霧の倫敦人形」!」

アリスの手から出現した人形達が、渦巻くように無数の弾幕を放ち、舞雪を囲んだ。依澄はそれを確認すると、ギャリギャリと音を立てながら、舞雪の直剣を受け流す。

そして、依澄はそのまま後ろに飛び、私の隣に着いた。

「……………なっ!」

流石のコンビネーションに、舞雪も驚きを隠せていなかった。このスペルカードは私の中では一番の破壊力を持っている。その上、魔力を多く込めたので、殺傷力も生まれてはいるはずだ。

大きな音を立てて爆破し、先程まで舞雪と依澄がいたところは大きなクレーターが生まれていった。

「……………どう?」

「いや、生きてるだろうな。油断するなよ、アリス」

「ええ……………」

モクモクと煙が立ち込めていく。私と依澄は背中合わせになつて周囲を見渡す。

「おお、警戒心はやつぱり強いねえ……………」

「つ!? どこだ!」

姿は見えないが、声だけは確かに聞こえる。その不気味さに、私も依澄も背筋が凍つていく。

「……………あなたのディフェンスが硬すぎて依澄に近づけないの。だから、少し卑怯かもしれないけど、許してね。アリスちゃん」

「アリス、いつでも動ける準備はしておけよ」

「分かつて……………」

悪びれもなく謝る舞雪の声。それに対し私達は警戒を解く事無く、辺りを見渡していた。

そして、異変に先に気づいたのは、依澄だった。

「っ！ アリス！ 避ける！」

「へっ……っ？」

瞬間、私のいた地面が暗黒に染まる。依澄の警告も虚しく、私はその暗黒から避ける事は出来なかった。そして、それはブラックホールのように私を吸い込んで行った。

「あっ、きやああああ!!?!」

「アリスッ！」

依澄が手を伸ばす、しかし、その手はもう数メートルも離れている。そのまま私は落下していった。

このまま私はこの中で消えていくのだろうか。このまま落下死か、それともなにか別の死に方をするのだろうか。このまま死に身を任せるのも悪くない。

「アリスッ！ おい！」

「え……」

諦めかけていた私の手を依澄が引いた。そして、私は依澄の胸の中に収められる。

「ちよ、なんであんたまで……っ！」

「仕方ないだろう！ お前なしじゃ戦えないんだからッ！」

依澄は私を助けるために、暗黒の中に自ら入っていつてしまったのだ。こうなれば、誰が舞雪を止めるのだろうか。

そう考えるのも虚しく、私と依澄は視界が暗転し、気絶していた。

「……………ス……………リス……………おい！」

「ん……………ん？」

「アリス！ 大丈夫か？」

私の顔を覗き込む依澄。どうやら、私は仰向けで倒れているようだ。

「……………は……………」

「分からない。舞雪のブラックホールの中なのは確かだが、出口はない。そんなことよ
り、怪我してるだろう」

「いいえ、してないわ」

「嘘つけ、スカートめくれ」

「は、はあ!?! 何言ってるのよ変態!」

「ばっ、違う! 膝を出せ膝を!」

理解した私は大人しくスカートの裾を少しあげて膝を見せる。すると、割とシヤレにならないくらいえぐれていて、肉も見えていた。未だにどくどくと血が流れている。

「よくこんな足になるまで動けたな。さすが魔法使い。とでも言った方がいいか」

「余計なお世話。すぐ治るから大丈夫よ」

そうは言っても、痛みはもちろんある。しかし、再生すれば痛みも同時に消えていくので、少しの辛抱だ。

「ダメだ。止血はしないと」

「でも、血も止まるから………って、何してるの?」

依澄はジャケットのジツパーを開けて中に着ていたシャツを破る。そして、包帯状にしたそれを私の膝に巻いてくれた。

「悪い、今はこれしか無いから。我慢してな」

「別にいいって言ってるのに………」

口では文句を言いつつも、実は依澄に手当してもらって嬉しかった自分もいる。こん

な状況なのに、呑気なものだ。

「……とりあえず、まだ休んでおいた方がいいな。お前の足が完治するまで」

「そうね………ねえ、依澄」

「ん？」

モジモジと指と指を合わせながら頬を染める。あまり自分の性格上言うことは無いが、どうしても依澄には伝えておきたかった。

「ありがとう」

そう言うと、依澄は少し目を見張った。あまりお礼を言わない私からそう言われて少し戸惑ったのだろう。

「……ああ、どういたしまして」

しかし、依澄は直ぐに表情を和らげてニツコリと笑う。その顔は私にとって素敵そのものだった。

辺りを見渡す。ブラックホールと言えど、完全な真つ黒では無いようだが、1m離れたら、もう何も見えないくらい視界が悪い。

「とりあえず、死んではいけないことは確かだ」

「そう、みたいね……」

その事が分かると、私は安堵のため息を漏らす。

「とりあえず、暗いな……アリス、なんか灯りになるもの無いか？」

「そうなのあつたら苦労しないわよ。あんたは無いの？」

「一応あるけど……」

「じゃあそれで明るくして」

「へいへい……」

依澄はため息を漏らすと、桜成を鞘から引き抜いた。紫色に光る刀身は妖しさを醸し出していた。しかしその光は思ったよりも強力で、辺りを照らすには十分だった。

「……綺麗ね。一気に明るくなったわよ」

「桜成をこんな風を使う時が来るとはなあ……」

そう言って、桜成を真下に刺す。それは意外と、すんなりと地面に突き刺さった。

「……とりあえず、刺せるくらいの壁ってことかしら」

「そうなるけど……どうする？ このままじゃ2人とも餓死して死んじまうぞ」

「食料は安心していいわよ」

「え？ そりやまたなんで」

パチン、と指を鳴らすと、人形が3匹現れる。そして、私は手から人形に魔力を込める。すると、人形達は次々と食料を出現させて、料理を始めた。

「べ、便利だなあ……その力で、レポートなんかも出来ないのか？」

「無理よ。空間転移は膨大な魔力を要するの。それも、ほぼ全損。さっきまで戦ってたから、魔力なんか料理するくらいしか残ってないわよ」

そう、私はもう魔力が切れている。いわゆるガス欠だ。

「その魔力が回復するのに、どれくらいかかる？」

「……実体験だと……一ヶ月」

「嘘だろおい……」

「お、桜成で何とか出来ないの？」

「今、俺には右手がない。左手じゃ思うように働かねえよ。それに、アリスだって非力だしどうせ無理だろ」

「そ、そう……」

これは本格的にまずいことになった。そう思うだけで、冷や汗が止まらなくなる。私は膝を曲げてそのまま足を抱え込む。

「このまま、幻想郷はどうなっちゃうのかな……」

「分からない。それに、あいつの目的も不明なままだ。師匠にも会っていないし……」

「師匠？」

「あいつの父親だ」

「そう……」

「それに、舞雪が幻想郷を破壊しない保証もない」

そう、舞雪は何故あんな所で巨大な魔法陣を展開していたのか。

「なあ、アリス、魔法陣の効果ってどんなのがあるんだ？」

「そうね、私の場合だと魔力の補給を経由するための媒体だけど……生贄を捧げて魔力増強も出来るわ」

「舞雪の目的は後者だろうか」

生贄。その言葉がどういうものか、私も依澄も理解している。

「まさか、このブラックホールが魔法陣の内部はなんてことはないよな」

「それは無いわね。魔法陣の生贄にされているなら、とつくに死んでるわ」

「そ、そうか……」

そうして、静寂が訪れる。木々の揺れも、子鳥のさえずりも、風が吹き抜ける音も、どれもこれもが存在しない。無音の世界。

「……このまま過ごすしかないのか……」

握りこぶしを作る依澄。そう、今の私達はただこのブラックホールで過ごすしかないのだ。そう考えると、とても恐ろしいモノに思えてきた。